

武芸者が幻想入り

イエネコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何処か気ままな武人が幻想郷にやってきた、彼は自身が持つ生き残る手段を用いてまあ、なんとかやっていく？ この作品の主人公は比較的癖があるのでそういうのが好きな方は一度眼を通して下さると嬉しいです。この小説とも呼べないような文は私のただの自己満足です、故に大した文も書けません。それでも宜しければ読んで頂けると幸いです。

なお、こちらは私が小説家になろうで投稿していたものを試しにこちらでも掲載してみました。になります。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

101 88 82 71 64 51 39 29 21 14 6 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

222 214 207 201 192 185 173 163 153 144 133 119 110

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

309 302 296 288 281 274 267 261 254 247 239 233 227

第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

425 419 413 407 399 388 370 359 348 340 333 325 316

第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話

518 511 503 498 489 477 470 466 460 451 445 437 430

第77話 第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話

620 614 603 594 586 577 571 562 554 547 539 533 526

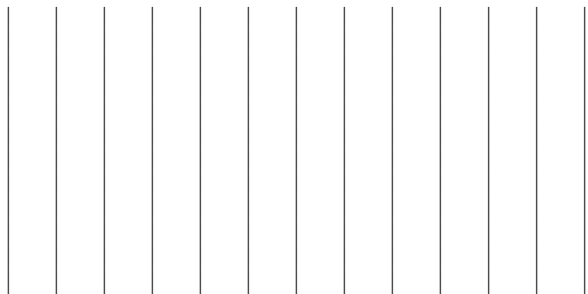
第90話 第89話 第88話 第87話 第86話 第85話 第84話 第83話 第82話 第81話 第80話 第79話 第78話

723 715 705 698 692 683 673 665 658 649 642 634 627

第103話 第102話 第101話 第100話 第99話 第98話 第97話 第96話 第95話 第94話 第93話 第92話 第91話

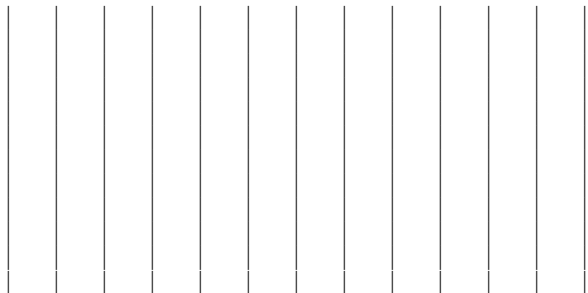
837 828 815 803 794 786 776 769 762 754 748 741 733

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



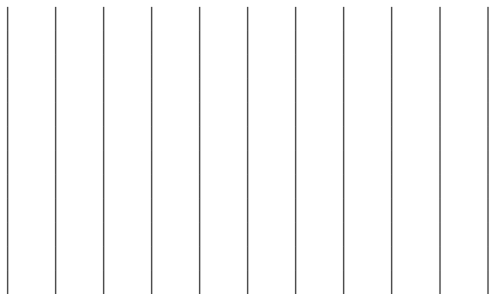
945 937 930 923 917 912 904 896 887 878 871 859 850

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



1053 1042 1033 1025 1014 1005 998 991 981 975 967 960 952

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



11561140113211241112110410981088108110691061

第1話

その森で男は目覚めた——

男は身体を起こすとまだ覚醒仕切らないのか、眠たげな半眼で辺りを見渡し呟いた。

「何処だここは？」

眠たげな目をしているが別に目が覚め切らない訳じやなかった、単にそういう眼付きなのだろう男は状況を理解していた。

——異常な事態に巻き込まれたと。

男は年の頃20才前半か、身長は175cm程度、身体は一見、線が細く見えた。顔はどちらかと言うと整ってはいるが中性的でやや前髪が長めで無造作に切った髪。印象的なのは眼で、眠たげで黒目の下方方向にも白目が見える三白眼は眼が坐ったどこか酷薄

さを匂わせ、彼の印象を陰気に見せていた。

男は目を巡らして自分の近くに幾つかの荷物が落ちているのを見つけた。

少し考える素振りを見せ男は慎重に荷に手を付け調べた、結果的に荷は彼の所有物だった。

彼が愛喫している銘柄のノンフィルターである両切りタバコのゴールデンバット、ライター、アナログの腕時計とりあえずはこれさえあればいいかと思える彼の必需品だった。

そして彼が愛用している武器が幾つか。

刀袋に包まれた長物が二つ、一つは身の丈に迫る長さだった。

一つは刃長二尺三寸程度、素朴な黒塗りの鞘と柄巻の打刀拵に入れられた変哲のない刀だった。刀工は良業物の一工、奥州政長の作。

美術的価値が大してある訳ではないが彼は試斬等で酷使しても刃零れも起こ

さず曲がりもせず何でも手応えなく斬れる切れ味と頑牢性を信頼していた。

しかしもう一つの包みの中はそれよりインパクトがあった。

それも先ほどの刀と同じく簡素で実用的な拵えに入れられた刀には違いなかった。しかしその尺が問題だ、柄も入れたら全長は5尺——150cmを軽く越す程の長大な刀だった。

時代は南北朝時代、刀工不明、無銘。かつて合戦等で用いられた野太刀、大太刀等と呼ばれる長刀。

他にもナイフ、手裏剣等の暗器の類いも幾つかあった。彼が扱える武器は他にもいくらでもあったがその中でも彼が好んだ刃物類が自分と一緒にこの森にあった。

突然目が覚めたら何故か森にいる。人によつては混乱の極みに陥るか逆に茫然自失とするかしそうな状況で彼は静かに呼吸し考えた。

何故自分はこんな場所にいる？身に覚えはなし。誰かの意思？いや、どうやって？それは考えるべきではない。この世に100%と0%はあり得ない。誰かによつてこの

状況が作られた可能性もある、愛用の武器があると言うのも余りにも意図的だ。

彼はそこまで考えて仮に思う誰かの意思なのだとしたら、何故自分に武器も与えた？
それは使わせる為、男にとっては使う必要がある事を示唆している。

——状況は極めて危険な可能性あり。

彼は包みに入れたままの刀を左腰のベルトに差す、流石に剥き出しで差す事ははばか
られたが、これなら刀袋の柄側を解いて柄を露出させればすぐ抜けるだろう。

大太刀もやはり包みに入れたまま紐で背中に背負った。

その他の荷も装備。彼は大きな木に背を預けどう行動すべきか考え初めた。

∴少し考え彼は動く事に決めた行動方針を決めようにも分からない事だらけだつ
た。このままいても武器を使うような危機に以前に森を抜けられぬまま遭難、死ぬ可能
性もある。この森の規模も分からないのだから。

太陽は幸いまだ出ていた。といつても比較的深い森だから薄暗いが、彼は太陽にアナログ時計の短針を合わせる方法で方角を割り出した。危険を承知でも動くしか彼には選択肢はなかった。

男は指を一舐めしその指をかざすと。

「……サバイバルはあまり得意でもないからな」

そう呟き東へと歩いていった。

第2話

幻想郷の森に一人の男がいた。

男は黒く地味な洋服に身を包つみ、腰に袋に包まれた打刀を一本差しにし背中にはやはり包みに入れられた長大な大太刀を背負つて、男は愛用の両切りタバコを一服していった。

ゆつくりとした呼吸で煙を吸い……煙をはく。

のんびりと低温でタバコを燃焼させ風味を楽しみながら彼は一息ついていた。

それも無理はない、ずっと警戒していれば流石に集中力が何時までも続く訳もなかった、外敵がいる可能性もあるのに喫煙するのは賢くはないがそれでも彼は一服する事にした。このまま極限状態を続ければ体力だつて底を付くのは早くなる。

常に自分を危険が現れるかも知れないと考慮しながらの移動はただぼさつ

と歩いていけばいいのとは訳が違うのだ。

外敵に対する技術に特化している男だが、先行きが分からない状態では極力余力を残すべきだ。

「……行くか」

吸い始めてから二本目のタバコが指で持てなくなる程短くなるとプツと吹き捨てて靴で踏み消し一つ息を吐くとそう呟いた。せめて暗くなる前に森を出れば御の字だが、男はそう思った。

そしてまた一定方向に歩き始めて十分程度した時だった、男は不意に足を止めた。

男は目を瞑ったまま少し集中する、森の匂いの中に僅かにノイズが走った、何か……何処か不自然な森の自然からは浮いた匂いがした。

これはおそらく人間か、男は思った。

男は進行方向に何か、あるいは誰かいれば先に気付けるように風下から風上に歩いてきた。故に直ぐに自然に混じる不自然に気付いたのだ。

男は少し足を早めかつ静かな呼吸と静かな歩法を心がけて匂いをたどった。

人間は直ぐに見つかった。その人間に気付かれないように気配を殺してその者を観察する。

人がいるという事はこの森も少なくとも人里離れた山奥という程でもないのかも知れない、男はそう考えた。

「さて、どうするべきかな……」

男は自分にしか聞こえない極小さな声で呟いた、一番簡単なのは目の前の人間に接触

し、森の出口まで案内してもらおう事だ。しかし果たしてそんな簡単に解決する状態なのだろうか？

それで終わるなら男が背負うこんな大袈裟な武器類等必要ない。実際彼の勘は今はその簡単に解決する事態でもないと告げていた。

実際あの人間も無害といい切れるだろうか？観察する限り人間は幼さも少し残した少年。何かしやがんで地面に向かっていているようだ、服は和服だった。何故こんな森で和服なのか、少なくとも少年から危険性は感じないがやはり違和感がある、男は思った。

少年を尾行してみるか、そんな事を思った時森の深みからもう一つ気配を感じた。

それは堂々と気配も殺さず足音を立てて現れたから男は直ぐに気付いた、和服の少年も遅れて気付いたようだ。

しかし果たして足音というのは正しいのだろうか？現れたのは黒い球体のように見える闇の塊そのものだったからだ。

男は気配を殺すのを忘れずにしかし眠たげな眼のままその闇を観察した。
しかし少年の方は男とは反応が違った。少年の顔は闇に気付くと恐怖に一瞬で凍り付いた。

「あなたは食べてもいい人類？」

闇からそんな声が紡がれた何処か涼しげで甘さを含んだ幼ない女の子の声。

「あ……う……あ」

少年の方は意味のある声を返せなかった。そしてそこまでだった。

闇は一息に少年に迫った少年はロクに反応も出来ずに闇に呑まれた。

「がッ……ひぁ……」

鈍い打撃音と共に少年の小さくしかし鋭い悲鳴とその直ぐ後気が抜けたような声がしそれで闇は沈黙した。観察していた男の眉が少し上がった。

ズルズルと引き摺るような音を立て闇が移動していく。濃い赤い液体が闇が移動した軌跡に残っていた、まるで筆のようだ。

そして赤い跡を残しながら闇は木々の葉が濃く日が差さず陰になっている地点までくるとその闇は唐突に消えた。

「ぶはー」

闇が消えた後に残ったのは幼い女の子だった。薄い金の髪にリボンを付けたシヨートボブ服は黒いロングのスカート等黒を基調とした洋服だった。実に可憐さを匂わせる幼い女の子だった。

しかし彼女の足元には割れた頭から脳漿と血を零し濁った眼が虚空を睨む少年の死体があった。

少女は自分の手に付いた返り血を猫のような仕草で舐めた。

「うん、ちよつと甘さが足りないけど美味しい」

味見だったのか少女はそんな声を嬉しそうに呟くと少年の割れた頭を片手で軽く持ち上げた。口を付け血と脳漿をやはり猫じみた仕草で舐めとっていく。

「ん、そろそろお肉ー」

少女は素晴らしい今度は死体の腕を掴むとおもむろにに肩の付け根から腕を引きちぎった。素手でだ、果たして人間の力でそんな事が可能なのか？

ちぎった腕から一緒に付いてきてしまった和服の袖を取り払いまだ若い少年の身体らしくハリのあるその腕にカプリと食らい付いた。

もくもくと心底美味しそうに咀嚼する少女は幸せそうに輝いていた。

「ふうん」

対してずつと観察してた暗い三白眼をした男が盛らした感想がそれだった、男は懐からタバコを取り出しかけてそれはまずいと気付き手を止める。

どうやらこの森に来てずっと張り詰めてた危機感がここに来て一周回ってどうでもよくなり初めているらしい。

「まあ、そんな必死になるのも疲れるしな」

程々にね程々、と男はやはり小さくそんな事を呟いた。

男が目を向ける先には幸せそうに少年の死体を食べる可憐極まりない幼い少女。やっぱり自分の考えた通りのヤバい状況だな、と男は思った。

男の少女を見る眼は相変わらず眠たげな半眼だったがその口元は笑みの形に歪んでいた事を男自身も気付いていなかった。

▲ページの上部へ

第3話

少女は結局少年の死体の両腕の肉を粗方食べてしまった。肉としては結構な量だ、幼い外見に似合わず大食漢らしい、もつともやることなすこと外見通りではないが。

「はー、久々にお腹いっぱいー」

「なら、食後の一服でもどうだ？」

ずっと木陰から少女の食事風景をぼんやり眺めていた男はここに来て少女に自ら声をかけた、自分のタバコを奨めながら。

「ん、貴方はだあれ？」

「俺はこの森で迷ってしまったものでね、状況が判らず困っている」

タバコはスルーされてしまったので自分でくわえて火を付けながら男は言う。しか

し目の前の少女が人知を越えた危険なモノであると理解しているだろうにあえて接触するとは男は果たして何を考えているのか？

あるいは男は大して考えてないのかも知れない、男はやはり眠たげな眼で大きく紫煙を吐いた。

「そーなのかー」

「ああ、出来れば君に協力願いたい。情報でもくれればそれでいい、例えばここは何処なのかとか」

「ここは幻想郷だよ。私は妖怪のルーミア、貴方はその格好だし外から来た人ね」

「ほう？ここは幻想郷と言う場所で君は妖怪、そして俺は外から来たど、もう少し詳しく頼めるか、まずその幻想郷というのが……」

男はあっさり目の前の妖怪ルーミアが知りうる限りの情報は得られた。まずここは外の世界からは隔離されている事、その閉鎖的な世界で人間と妖怪がバランスを保ち共存している事、そして自分のように幻想郷の外の人間が幻想郷に来てしまうケースがたまにある事等だった。

「そういう外から来た外来人と私もたまに会う事があるの。お腹が空いてる時は食べちゃうけど、今はお腹いっぱいだから貴方の事は食べないであげる」

「そうか」

ルーミアは少年を先に補食していた為に満腹で機嫌がよく男は結果的に命拾いした形になる、その事を男自身が自覚しているかどうか。

「ところで貴方の背中と腰の長いのはなに？」

「釣竿」

「そーなのかい、釣竿を持った外来人なんて初めてね、釣りするなら泉もあるよ」
男は呼吸するように嘘を付き、ルーミアも変な関心をしながらわざわざ釣スポットを
奨めていた。

「いや、釣りをしている場合でもないな、それより俺のような他の外から来た人間はど
うなるんだ？」

「妖怪に食べられたり、神社から外に帰ったり、たまにここを気に入って帰らずに住み
着いちゃう人もいるらしいよ」

「なんだ、帰る事も出来るのか」

危機管理がなっていない一般人がここに来て襲われあっさり殺されるとするのは納得
だが案外無事に帰る事も出来るらしい、そこまでヤバい事態でもなかったな男は思っ
た。

男は少し考える、神社とやらから帰れるらしい、ならば一度その神社に行つて話を聞かすべきか、もつとも男はすぐに外に帰らなければいけない都合もなかった、別にしばらく、あるいは死ぬまでここににいる事になつても男は構わなかった、どうでも良かっただけとも言える。

「じゃあその神社の場所を教えてもらえるか？」

「神社？ 帰るの？」

「いや、多分直ぐには帰らない。とりあえず責任者にでも顔合わせしておくだけだ」

外からくる人間が住み着いてしまう事もあるくらいなら案内ここも面白い場所なのかも知れない、ならばとつと帰らずこの世界を見ていくのも悪くない、快樂主義の気がある男はそう考えた。

「ふーん、なら案内してあげる。ここからあまり遠くないから私に付いてきて」

「そうか、感謝する」

人喰いの化け物と言えども案外話は通じるものだな、男は思った。

「じゃあ行くかう」

ルーミアは地面から少し浮かんでふよふよと移動を始める。男は特にそれには驚きもせずは無惨に肉を食べられた少年の死体を指して言った。

「まだ食える部分が残っているがあれはもういいのか？」

「ん？ 大丈夫、あのお肉は後で持ち帰るから、料理して食べても美味しいよ」

「そうか、確かにそのままかぶり付くばかりが食べ方じゃないからな」

男はやはり眠たげな眼でそんな事をいいながら新しいタバコを取り出した。

「じゃあ行くかうか」

ふよふよ飛んでいくルーミアとタバコを吹かす男が森を進み始めた。

第4話

幻想郷の森の中

日の光を嫌い闇を纏ったルーミアと包みに入れられた刀を腰と背中に身に付けた男の二人組がいた。

そして二人は目の前の青年と少年の間くらいの人間——のようにみえるが妖怪と対峙していた。いや、妖怪と対峙しているのは正確には男のみか。

「外来人がいるたあ今日は運がいいな、最近人間がめつきり狩れずに困ってたんだよ！」

妖怪は目の前の絶好の獲物に歓喜してそう言う。

「人間がないなら豚でも食べばいいじゃないか」

「別にそれでもいいんだけどよ、でもやつぱたまには人を喰わねえとそもそもなんの為の妖怪かわかんねえだろ」

人に仇なすから妖怪、それもそうか、と男は小さく呟いた。

「おい、助けてくれ」

男は手っ取り早く案内役のルーミアに助けを求めた、だが

「えーめんどくさい」

どうやらわざわざ助けてくれる気もないようだ。案内役こそ買ってでたが、男が死んでも生きてもどうでもいいらしい、ここで男が喰われたら案内を切り上げて帰るだけだろう。

まあ期待はしてなかったがな、男はそう小さく呟いた。どうやら案内役も得てあつさり解決しそうで警戒が薄れていたらしい、こんな簡単に外敵に見つかってしまふとは。

男は溜め息を吐いた、まあしようがないと。

「……つまりは君は腹が減つてて目の前の人間が食べたいという訳だな？」

男は自然な歩みで妖怪の前に出ながら言う。

「ああ、そうだぜ、まあじつとしてくれりやあ苦しまねえように楽にしてやるからよ」

「ならば、食べられさえすれば必ずしも俺じゃなくてもいいという事じゃないか？」

例えばルーミア、あそこにさつきからいる子供なんかはどうだ？」

「んー？」

男に話を振られ一旦纏う闇を解き男が指さす先、妖怪の後ろに当たる木陰の方をルーミアは注目した。

「あ？」

そして妖怪もルーミアの視線を追い自分の後ろを振り向く形で見た、その瞬間——
妖怪の腹部に鋭利な冷たい感触が走った。その直ぐ後灼熱感が腹から全身に広がった。

男が腰に差してた刀の包みを一息で解き柄を露出させると抜き打ちで妖怪の腹を真一文字に深々と切り付けた。妖怪が後ろへ振り向た一瞬でそれをやってのけたのだ、抜刀術の技としては基本的だが、凄まじい早さだった。

「ガツ……ぐうツ！」

人間なら致命傷だがそこは妖怪、怯んだものの攻撃されたのを極めて早く理解し反撃に移ろうと……

しかし妖怪の反応でも男にとっては遅すぎた。

妖怪が反撃に移ろうと思った時には刀の刃を相手に密着させる形で男は懐に入りこ

んでいた。刀身が上手く妖怪の身体を封じ込め男の盾の役割をし妖怪はとっさの反撃が出来なかった。

その状態で男は身体の動きを利用し妖怪の重心を崩し簡単に後ろに倒した。さらに倒し際相手の首筋付近に添えていた刀身を引きながら。

妖怪はあっさり仰向けに倒れた、首筋の動脈を裂かれ血を撒き散らしながら。

「かッ……ヒューッ」

妖怪が何か言おうとしたが一緒に裂けた気管から息が漏れるだけだった。男は体重と重力を利用した強力な踏みつけを妖怪の頭部に落とし、それにより妖怪は頭が割れ脳味噌を撒き絶命した。いかに肉体的ダメージには強い妖怪と言えどもダメージを受けすぎたのだ。

また、妖怪は肉体的ダメージに強い反面精神的はダメージに弱い。故に謂われのある武器や道具等は弱点となるが、男の用いた刀は変哲のない刀とはいえそれでもかつて刀匠に打たれてから現代に至るまで数百年の時を生きていたのだ。刀自体がある程度の

神秘となり、妖怪にとってはダメージも肉体的以上だったという事もある。

男は刀を脇構えにし、ゆっくり後ろに下がりながらも眼は頭の割れた妖怪から離さない。残心——得体の知れない化け物があるいはまだ生きてる可能性を考慮しているのかも知れない、妖怪に向ける三白眼はいつもの眠たげな眼ではなく冷静に対敵を観察するように油断ない光を放っていた。

そして、妖怪の死を確信したのだろう静かに息を吐くと妖怪の死体に近付き刀身に付いた血脂を妖怪が纏っていた服になりす付けるように落とした。

妖怪が振り向いてから僅か5秒で決着がついた。

「わあー、人間なのに妖怪を倒しちゃうなんて貴方強いんだね」

ルーミアは関心したように言った。恐らくルーミア自身流石に男はここで死ぬと思っていたのだろう、妖怪が返り討ちにされた事が意外だったようだ。なお男が言った子供等始めから何処にもいなかった。

「そうでもない、その妖怪が間抜けだったただけだ」

男は血脂を落とした刀を更に穢れを払うようにパツと血振りをし鞘へと納刀しながら言った。

実際、妖怪は確かに人間以上の能力を持つていたのだろうがしかし人間を格下として完全に見下していた。捕食する対象の獲物に対して「今からお前を殺して喰うから覚悟はいいな」という狩人が何処にいるのか、間抜けすぎる。

油断仕切った強者より警戒仕切った弱者の方が手強い、実際男にとっては簡単な殺しだった。男はタバコを取り出し火を付けた。

「ねえ、ところで・・・」

「ん?」

男は紫煙を吐き、頬に付いた返り血を手で拭いながら返す、返り血は服にも付着してしまっていた。

「それ釣竿じゃないじゃない」

「……鞆の先に糸を結べば釣竿として使えない事もない……かも知れない」

ルーミアは流石にこいつは何言ってるんだというような顔になっていた。男も苦笑いを漏らす、その眼は先ほど妖怪を見据えていた時とは違いいつもの眠たげなそれだ。

「そんな事より案内を続けてくれ」

「あ、うん、神社はもう直ぐそこだよ。無駄足にならなくてよかったね」

「無駄足と言うより無駄死にしそうだったかな」

男はそう暗く笑って言った。やれやれ早く一息つきたいものだ、男は思った。

第5話

幻想郷にあるどこか寂れた雰囲気のある神社。

その神社の縁側で一人の少女がお茶を飲んでいた。

少女は紅白の服を身に付け、それは脇が大きく空き二の腕部分に独立した袖を着けた変わったデザインの前だった。この神社の巫女だろうか？

巫女と思わしき少女は手をかざしながら太陽を見上げる、強い日差しだった。

「今日もまた暑いわね」

そういつて巫女は太陽から視線を下げる。見ると石段を上って鳥居をくぐり闇を纏ったルーミアとタバコを吹かす男が境内に入ってきた所だった。

「あれはルーミアと……外来人ね」

巫女は男をみてそう呟く。男は黒基調の上下の洋服を着て腰と背中に袋に包んだ長物を身に付けている、一目見て人里の人間ではない。さらに巫女の肩がひそめられ

た、男の服は黒いので少し判りづらいがその上着と袖は赤く染まつている。あれは血だ、巫女はすぐそう気付いた、男自身がここに来るまでに負傷したのか、あるいは他者の血か？。

また、ルーミアと一緒に行動してる外来人というのもまた異質だった、また面倒そうなのが来ちやつたわね、そう巫女は小さく呟いた。

「あれがここの巫女だよ」

「そうか」

境内に入ってきたルーミアが巫女を縁側の巫女を指して男にそういう。用があった。来たのだろうかに男の返答は何故かどうでもよさそうな響きがあった。

「じゃあ私は帰るね」

「ああ、案内ありがとう」

案内を終えて引き揚げようとするルーミアに男は礼を言う、何処か形式的な礼だつ

た。

「うん、今度会ったら一緒にご飯でも食べようね」

そう言つてルーミアは飛び去つて言つた。一緒に食事に誘うくらいだからルーミアは案外男を気に入つたのかも知れない、もつとも彼女の言うご飯とは人肉かも知れないが。

男が巫女に向き直る。その眠たげな三白眼に見据えられた瞬間、巫女は直感的に目の前の人間が何処かおかしい事に気付いた。

「こんにちは」

そんな男の第一声は平凡過ぎる挨拶だった。

「……ええ、こんにちはは、貴方は外来人ね」

巫女はやや面食らいつつも挨拶を返し確認した。

「ああ、そうらしい。一度此処を訪ねた方がいいと思ったので、訪問させて貰った」

そこで巫女は男が自分のお茶を物欲しそうに見ている事に気付いた。男は結構長く森を彷徨ったり殺されそうになったので逆に殺したりで多少消耗していたのだ。

「とりあえず詳しい事は中で、お茶くらい出すわ
「ありがとう」

男は礼をいい巫女に連れられ和室に入ってしまった。

「……で、ここの事は分かっているの？」

「大体はあの妖怪に聞いた」

巫女の問いかけにお茶を一息で飲み干しお代わりを所望しながら男は答える。

「ふうん、意外ねあのルーミアが外来人の世話をするなんて」

巫女は男に急須でお茶のお代わりを注ぎつつ言う。

「ああ、たまたま俺と会う前に食事していたようだから機嫌が良かったのだろう」

俺はお代わりのお茶に口を付けつつ言う

「……そう、遅れたけど私はこの博麗神社の巫女をやっている博麗霊夢よ」

「そうか」

「……貴方は」

「ん？」

「いや、貴方の名前」

「……ああ、俺は川上という、よろしく」

少し遅れて自分が名乗るべきタイミングだと気付いた男、川上がそう名乗った。タバコの箱を取り出し小さく左右に振って暗に吸っていいかと許可を求めながら。

「そう、川上ね、吸うのはいいけど灰皿がないわよ」

川上は問題ないと携帯灰皿を取り出しタバコに火を付けた。いきなり異界に放り込まれた外来人としては何とも緊張感がないというかやたら自然体な男だ、霊夢はそう思った。

改めて川上をしてみる。目付きの悪い三白眼といい血に濡れた上着といい見た目は危険な香りしかししない、しかし川上からは何処か投げ遣りな印象を受けるが。

そして座布団に座る川上の左隣に置かれてる長い包みとそれより遙かに長い包み、その中からは長い年月を生きた物独特の霊気が発せられてるのを巫女である霊夢は感じていた。あれは間違いなく年代物の刀だ、霊夢は思った。

長大な刀とそれより短い刀なんて何処その庭師を霊夢は思いだした。あんな刀ただの人間が扱えるのか。

「貴方のその服の血は？」

とりあえず霊夢は川上に付いている血を指摘した。

「ここに来るまでに化け物に襲われて腕を一本持つてかれた」

そういう川上は勿論両腕が健在だった。

「本当は？」

「襲われたから殺した」

川上は平然と言った。

「……そう」

外人人が妖怪に襲われたら大抵食料になってしまうことが多く、無事というのも稀なのに川上は返り討ちにしたと言う、単なる一般人とは違うようだ、霊夢は思った。

「その刀で斬ったの？」

「これは釣竿だ」

やはり平然と嘯く川上だったが霊夢に睨まれ「そうだ」と認める。

「まあいいわ、で、貴方は帰るの？ 帰るのなら結界を開くけど？」

「いや、帰らない」

「……なんとなくそう答えそうな気はしてたけど、なんか面倒だから帰りなさいよ」

「何かここには行っておいた方がいいみたいなのスポットはあるだろうか？」

「人の話を聞きなさいよ！ 観光地じゃないのよ!？」

まるで柳のようにこちらの話を受け流す川上に霊夢は思わず突っ込む。何となく人間を相手しているというより基本的に自分本位なこの幻想郷の妖怪を相手している感じに近いような気がしてきた。やはり最初におかしい人間だと感じたのは間違いじゃなかったようだと言夢は思った。

「帰らないならどうする気なのよ。言っとくけど家には置かないわよ」

「そうだな、とりあえず……」

川上は左隣に置いてあった二振りの刀の包みを取り去る。中からは打刀拵に入れられた野太刀と打刀が出てくる、刀を取り出した川上の行為に霊夢は内心身構える。川上がどう動いても対応出来るように。

しかし川上は二振りの刀を抱えるようにして壁に寄り掛かり言った。

「少し寝る」

「……は？」

思わず霊夢は間の抜けた声を出してしまうが川上はそのまま目をつぶる。

「寝るって……ちよつと」

霊夢はそう声をかけるが川上はもう答えなかつた。本当に眠り始めたらしい。

「なんなのこいつ……」

霊夢は多少困惑する、ここまで変な人間は彼女にとつても珍しかったのかも知れない。

霊夢は一つため息をついた。とりあえずしようがないしばらく寝かせておこう、そう思い自分の分のお茶のお代わりを煎れた。

第6話

幻想卿にある博麗神社

「よー、霊夢遊びに来たぜー」

そういつつ神社の客間に上がってきたのはブロンドのやや癖のある髪を持ち、白と黒のエプロンドレスに黒いとんがり帽、ご丁寧にもホウキまで持っているという典型的な魔法使いといった格好をした少女だった。

「魔理沙……また面倒な時に来たわね」

やってきた普通の魔法使い——霧雨魔理沙に対して霊夢はそう言う。

「なんだ、来ちやまずかったか。ん、こいつは誰なんだぜ？」

魔理沙は座ったまま和室の壁に背中を預け寝息を立ててる男——川上をみて疑問を漏らした。

「今日来た外来人よ。何かおかしな奴だね、ここに来たのに帰るつもりがないみたいだし、いきなり眠り始めるし」

そう疲れたように霊夢は言う。

「はぁん、変わった奴なのか？」

魔理沙は眠っている川上を観察する顔は伏せられていてよくわからないが、女と思えるくらいに体つきが細く黒基調の服を纏っている。そして寝ながらも二振りの刀を抱えている、その内の一振りは魔理沙の身の丈を越える程の尺の刀だった。

魔理沙は男の服に付いた赤茶色の物に気付く、乾いた血だった。

「確かに面白そうな奴だな、こいつ男だよな？　なんか血みたいなのが付いてるが

大丈夫なのか」

「確かに体つきは細いけど男よ。血はここにくるまでに妖怪に襲われて逆に斬った
返り血だそうよ」

「へえ、弱そうなのに、妖怪を倒したのか、面白いな」

そういうつつ魔理沙の目は川上が抱えてる刀に奪われている。蒐集癖のある魔理沙にはその刀が魅力的に見えたのだ。それに魔理沙は一部で泥棒と言われる程手癖が悪い、この刀なら売り払えばいい金になるのではないだろうか、思わずそんな事を魔理沙は思った。

まあ、いくら何でも勝手に刀を売るのは……と思いつつ、ちよつと見せてもらうだけならいいか、と魔理沙が刀に手を伸ばす。そして野太刀の拵えに手が触れた瞬間――

「うあッ!」

瞬時に覚醒した川上にその手を取られ畳に叩き付けられるように投げられた。さらに取られた手と腕を絞るように極められる。

「痛たたたた！ 痛い痛い！ 痛い！ ギブ、ギブなんだぜ！」

極められてるのは腕の間接のはずなのに自分でもどこが痛いのは良くわからない程の激痛が腕全体から肩口を襲い魔理沙は堪らずタツプする。

「……あんたたち何やってんの？」

お茶を飲みつつその光景をみて霊夢は呆れていた。

「……ん、なんだお前は」

川上は遅れて魔理沙に問いかける。どうやら完全に覚醒していた訳ではなく無意識での反射的行動だったらしい。

「わ、悪かったから離して欲しいんだぜ」

魔理沙がそういうと川上は極めていた腕を解放する。しかしその佇まいに隙は見当たらなかったが。

「今寝ている俺に何しようとしたんだ？」

「ちよつと刀を見せてもらおうと思っただけだぜ」

極められてた腕を軽く振って具合を確かめながら魔理沙はいう。凄まじい激痛だったにも関わらず解放されると意外にも腕は何ともなかった。

「そういう事は寝ている間に勝手にじゃなく俺に許可を取ってからにしてくれ」

「わかったんだぜ、しかし寝ていたのに何でいきなり反応出来るんだ？」

「いくら寝ていても他人に触れられたら気がつくだろう？」

「少なくとも私にはあんな反応無理なんだぜ……」

魔理沙はげんなりとそういう、ここまで隙のない人間も始めてだった。

「おはよう」

川上は靈夢に相変わらず寝むたげな目を向けてそう挨拶する。

「お茶貰えるだろうか？」

川上のその言葉に靈夢は湯飲みにお茶を注いで渡す。

「ありがとう」

起き抜けて川上は愛用の両切りタバコに火を付け紫煙を吐いた、そして合間にお茶に口を付ける。

「ああ、良く寝た」

大きく気持ちよさそうに伸びをしながら川上は言った。

「腹減ったな……」

そして伸びが終わると共に眩く、川上はこちらの世界に来てから食事を取っていないのだから無理は無かった、もつとも川上の場合多少の期間食事を取らなくともある程度は活動できるが。

「確かになんか変な外来人なんだぜ……」

魔理沙はマイペースな川上に呆れたように言う。

「まあいいや、私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙なんだぜ、あんたは？」

「俺は普通の武術家、川上だ、よろしく、しかし……」

ふと、川上が自己紹介の後に何か言い淀む。

「なんだぜ？」

「いや、霧雨魔理沙って名前がなんかいいな、語感というか、いい名前だ」

「ん、そう……か？へへ照れるぜ」

川上はおそらく感じたままを口に出したのだろう、しかし魔理沙は若干嬉しげだった。

「貴方武術家なの？」

自己紹介を聞いていた霊夢が突っ込む。

「ああ、まあ武術家と名乗れるような正道の者では俺はないが一応武術は修めている」

「ふうん、だから刀をもっているのか？」

魔理沙は川上の二振りの刀を見てそういう。

「俺がここに来た時何故か刀も一緒に置かれていただけだがな、まあ、確かに俺は刃物の扱いが一番得意なんだが」

川上は短くなったタバコを携帯灰皿に入れながら言う。

「妖怪を斬ったんだって？」

魔理沙は妖怪を倒した事について聞いてみた。

「向こうが俺を殺して喰うって言ってきたからな、間抜けな妖怪には退場願った」
新しいタバコに火を付けつつ川上は言う。

「間抜けな妖怪？」

「だって食べる獲物に対してお前を殺すから覚悟はいいか？　なんて忠告する奴はただの馬鹿だろう？」

「は、ハハッ！ それはそうだな！」

「相手が間抜けだったから助けられたな」

平然とそういいながら川上は紫煙を吐く。

「なんかお前は外から来た人間なのに余裕があるんだぜ？」

「まあ慌てて事態が良くなる訳じゃないんだから、だったら余裕をもっているほうが幾分ましだろう」

そういう川上の佇まいは余裕というよりどうでもよさげな雰囲気がある、霊夢はそんな事を思った。

「ところで空腹だから何か食料を貰えないだろうか？」

一応異常な事態にある状況で食事が取れずに体力を失うのはまずい、川上はそう

思ってた言った。

「ないわよ、こっちは自分の分の食料を確保するのでいっぱいよ」

余分な食料がない霊夢はそう言った。

「胃で消化出来るならネズミでもなんでもいいのだが」

「どんだけ雑食なんだぜ……」

川上の主張に魔理沙は思わず突っ込む。

こんな事ならあの妖怪に少年の死体を分けて貰えば良かったか、川上はそう後悔しつつ呟き、それを聞いた霊夢と魔理沙はとんでもない事を聞いたような気がしたがスルーする。

「そんな事より帰らないなら貴方これからどうするつもりなのよ？」

「別にどうもしないが？」

霊夢の疑問に川上は何の主体性もない答えを返す。暖簾に腕押し、そんな言葉が霊夢の頭によぎった。

「じゃあ今日の所はとりあえず家にくるか？ 食事くらいは出すんだぜ」

何となく川上の事を面白い奴だと気に入った魔理沙がそう提案する。

「じゃあ世話になる」

川上は即答した。

第7話

——幻想郷の魔法の森

「ここが私の家だぜ」

「ふうん」

洋式の家の前でどこが自慢げに言う魔理沙に川上は気のない返事を返した。

結局食事欲しさに川上は魔理沙に誘われるままついて来たのだ。

「しかし、お前飛んだ事あるのか？」

「いや、ない」

「始めてホウキに乗った奴なのに反応が薄いぜ」

川上は神社からここまで魔理沙のホウキの後ろに乗せてもらって来たのだが川上は飛行中も危なげなくホウキに座りながら特に何も言わず、高みから遠くをボンヤリ眺めていた。

「とにかく食事を作るか」

そういつつ魔理沙は家に入り川上もそれに続く。「お邪魔する」とやはり何処か形式的な言葉を言いながら。

「まあ散らかってるが気にせず寛いでくれ」

そう言う魔理沙の言葉に偽りはなく入った家内は本を始めとして様々なガラクタ等が散乱し足の踏み場すら危うい程の散らかりようだった。

「いい家だな」

川上は感情の籠もらない声でそう言う。ある種の皮肉なのかあるいは本気で言っているのかも知れない。

「だろう、まあ今食事でも作るからまっててくれ」

「ありがとう」

相変わらず寝たげな眼をして感情の籠もらない礼を言った。

キッチンに入って行った魔理沙を尻目に川上は室内のガラクタ類を漁り始めた何となく面白い物がないかと考えたのだ。

懐かしいゲーム機ファミリコンピュータを見つけた。しかしどうせ壊れてるし正常に作動してもそもそもここではテレビ、電気、足りないものがなさすぎる、ただのゴミだな川上は思った。

孫の手を見つけた、背中がかゆいときに便利だろう。

ナイフを見つけた、ストリートポイントの刃長13センチ程度のユートイリテイーナイフだ。皮のシースに収めっぱなしで埋もれていた。しかしブレードに磨き跡を軽く残したサテンフィニッシュと恐らく鋼材はステンレス鋼、ATSだろうか？エッジは鋭利に研がれており腕にブレードをあてがい軽く滑らせると産毛がパラパラと落ちた、かなりの切れ味だ。フィールドで実用として使うにはかなりいいナイフに思えた。ガラクタの中に寝かせて置くのは勿体ないのし魔理沙はシースに入れっぱなしにしていた事からも扱いを知らないようなので勝手に頂戴する事にした。いい物が手に入ったと川上は嬉しくなった。感情があまり動かない彼には珍しい事だ。

エロ漫画があった。どうやらロリータ物だ、川上はパラパラと中を見てそのまま元に戻した。

灰皿があった、川上はキツチンの魔理沙にタバコ吸っていいか許可を得てタバコに火を付けゆつくりと一服した。

一服しながら川上は部屋に一本差しの刀掛けが置いてあり打刀拵が一振り掛けられているのを見つけた。拵だけで中は木のツナギだろうか？川上は興味をもって拵を

手に取る。重量と重心からして刀身が入っているのが川上には分かった、真剣だ。

しかし、人の刀を勝手に抜く事は川上はしなかった。後で本人に許可を取ろうと川上は思った。

「出来たぜー」

一服したり部屋を漁っている間に食事が出来たようだ。

料理はキノコ鍋だった。シンプルだがキノコの旨味を生かした料理、味は文句が無かった。とりあえずこれで満腹になった。

川上は食後の一服をしつつ、魔理沙に聞いた。

「あの刀は？」

「ああ、あれは私が拾ったりして集めた物の一つなんだぜ」

「見せて貰ってもいいか？」

「別にいいぜ」

自分が持つてるくらいだから刀が好きなのだろうかと思いつながら魔理沙は答える。

許可を貰って男は刀掛けから刀を取り、作法にならって刀に一礼する。

「拝見させてもらおう」

鞘から刀身をそつと抜く、拾ったと言っていた割には刀身は大きな錆や疵、刃零れは無くさほど状態は悪くなかった。流石に細かいヒケ疵は多かったが。

袱紗はないだろうから変わりにハンカチを借りてそれを使い刀身に手が触れないように持ち、鑑賞する。……刃紋は中直刃、沸出来だ、鑄造り、切っ先はふくらかれる、反りが浅く恐らく新刀期に打たれた物か？。

「ずいぶん畏まった見方をするんだな」

魔理沙の言葉には答えず鼻を効かせる、刀身からはバニラに似た甘い香りがした、これは刀剣用の丁字油の匂いだ、ちゃんと錆止めはしてあるらしい、と、いう事は手入れ用具もあるらしい。

「目釘抜きを」

静かにそう言つて魔理沙から受け取つた目釘抜きで柄と刀身を繋ぐ目釘を抜き、柄を軽く叩き緩んだ刀身を抜き出し柄分に納められていた茎を見る。銘は切られておらず作者はわからない、無銘、名無しか、川上は何処か皮肉げな笑みを浮かべた。

茎も鑑賞した後は柄に戻し目釘を打ち柄にふたたび固定する、そこまで見ていて魔理沙は言つた。

「どうだ、私にはよくわからないんだが いい刀なのか？」

「そうだな……」

魔理沙の質問に川上はいきなり左手一本で刀を一閃させた。片手打ちにも関わらずヒュリツ、と風切り音のような鈴のような音がした。樋も掘られていないのにそんな音がするのは余程正確に刀線刃筋を立てられているのと振られるスピード故か、目を丸くする魔理沙の前に飛んでいた蛾が一匹、真つ二つになって落ちた。

「寸も長すぎず短すぎず柄も手に吸い付くようにしつくりくる、人を殺すのに適したいい刀だ」

そう暗い眼で川上は言う。鑑賞の仕方こそ作法にならつていたが彼は刀に美術的価値等求めていないようだ。川上に取つてはただの武器か、彼の口元は何処か面白がつてるような笑みが浮かべられていた。

「そ、そうなのか？ まあいい物なら良かった」

魔理沙はそういいながら川上は何処かズレてると理解した。まあ普通の奴より面白いからいいか、魔理沙は思った。

「だが、これはいい刀だな……」

川上はそう思った。何だかんだ彼は刃物を好むのだ。

「くれ」

川上は魔理沙に簡潔に要求した。

「だめだぜ」

魔理沙もさりと却下した。もつとも川上もその答えを想定していたが、なんならここを出ていく時に勝手に頂戴してしまえばいい、川上はそんな事を思った。何処か魔理沙と似通った思考だ。

「まあいい、ところで手入れ用具はあるのだろうか？　打ち粉と油を貸してくれないか」

川上はそう言った。ちなみに魔理沙は刀の手入れの仕方は知り合いの香霧堂の店主に教わり手入れ用具も貰ったものだ。

「いいけど、お前の刀は手入れが必要なのか？」

「知っているだろうが森をさ迷っていた時に一匹化け物を斬り殺した。その時刀身は血脂を拭っただけだから手入れをしないと錆が浮く」

川上は生き物を斬りつばなした刀に打ち粉を打ちたかったのだ。

「まあいいぜ」

魔理沙は引つ張り出して来た手入れ用具を川上に渡す。

「ありがとう」

川上は礼をいい妖怪を斬った打刀の方を鞘から抜き放つと拭い紙で刀身を数回拭った。そして打ち粉をポンポンと刀身に裏、表、峰へと均一に打ちネルで打った粉を

拭いさり刀身に付いた古い油や妖怪を斬ったさいの脂等を完全に拭いさる。

「……ふむ」

裏、表と刀身を改めてて拭い残しがないか確かめると錆止めの丁字油を刀身に新しく塗る。そしてネルで余分な油を軽く拭い刀身を薄い油膜で保護した状態にして終わりだ。

「その刀見せてくれ」

魔理沙が興味を持ったのかそう言ってくる。川上は特に何も言わず刀を手渡す。

「へえ」

魔理沙は特に刀剣の鑑定眼は無かった。しかし川上の刀は目立った疵もないし——もつとも魔理沙の刀同様、実用に使われてるため刀身に線のような細かいヒケ疵はあったが——綺麗な刃紋をしており、何て書いてあるか分からないが鰐元付近に梵字が

一文字切ってあった。面白い刀だな、魔理沙は思った。

「サンキュー」

ひときしり眺めると刀を川上に返しつつ魔理沙は指摘した。

「そつちの馬鹿長い刀はいいのか？」

「こつちはここに来てから抜いてもいないから大丈夫だ」

「ふーん、そうなのか、しかしそんなでかい刀使えるのか？ お前見るからに力なさそうだぜ」

細身の川上に対して魔理沙はそう言う。確かに身長こそあるが細い体の川上に長大な野太刀はアンバランスだと誰もが思う所だ。

「一応は扱える。刀は腕力じゃないからな、扱えないのならこんなお荷物背負つ

ちやいないさ」

「まあ、そりやそうだな」

川上の皮肉げな返答に魔理沙は納得する。一度コイツがその刀を抜く所が見たいものだ魔理沙は思った。

「返す、助かった」

魔理沙に手入れ用具を返しそう言う。そして新しいタバコを取出しライターで火を着ける、そのさいやや長めの前髪を火で焦がしてしまい「ああっ！」と間の抜けた声を出した。

それを見て思わずくつ、と笑ってしまいがら魔理沙はやっぱりよく分からない奴だなと面白く思っていた。

第8話

それから翌日の朝——魔理沙の家

川上は客室でゆっくりと睡眠を取っていた。この世界に来てからやっと安全に休める場所に来て彼も少なからず安心していた。ちなみに寝ている彼が着ているのは大きめでシンプルな和服、魔理沙に貸してもらったのだ。

着ていた服は血糊が付いてしまっていたので洗濯した。

「川上ー起きろー朝ご飯作ったぜ！」

そういつつ川上の寝る客間に入ってきたのは家主である魔理沙だった。

「……ん、ああ、おはよう、一服してから行く」

魔理沙の声で目が覚めた川上は普段でさえ眠たげな眼なのにさらに濁った眼を出していた。気だるげにタバコに火を付けた。

「あいよ、とつとと来いよ、味噌汁が冷める。」

そう言い魔理沙はリビングから出ていく、川上は寝起きの一服をことさらゆつくりと燃焼させニコチンを馴染ませ、身体を覚醒させた。

そして魔理沙手製の朝食、献立は焼き魚に味噌汁、ご飯と実にシンプルだった——を取り、川上が例によって食後の一服をしていると唐突に魔理沙が言った。

「今日はお出かけるぜ」

「そうか」

川上の返事はどうでも良さそうだった。

「そうか、じゃなくてお前も一緒にくるんだよ」

「何故だ？」

川上はまさか自分も着いていくとは思っていなかったのだ。

「そのほうが面白いからだ」

「成る程」

川上は変に納得した、面白いのなら仕方ない、川上はそう思った。やはり川上は魔理沙に似た所があるのかも知れない。

「出かけるって何処にだ？」

「今日は紅魔館に本でも借りにいく」

「コウマカン？ それは図書館か何かか？」

「まあ、館の中に図書館もあるな、ただ紅魔館自体は吸血鬼の姉妹が住む家だ。他にも図書館に魔女とかメイドとかもいるが」

「盛りだくさんな所なんだな、吸血鬼つてのは聞くだに危険そうな奴だが」

「まあ、確かに強い妖怪だが根は子供だからそうでもないぜ、多分お前が言っても多分死にはしないぜ」

「なら問題なさそうだな」

「ああ、じゃあ行くか」

「断る」

「はあ!?!」

この流れで川上はまさかの拒否をした。

「なんでなんだぜ!？」

「いや、面倒」

川上の断りの理由は簡潔だった。彼は快樂主義だったが気分屋でもあった。

「そんな事言わずに一緒に行こうぜ」

「だが、ただ単に本を借りるだけなら俺がくつついていく必要も感じられないのだが」

川上はそう疑問を述べた。

「いや……だって一人で行ってもつまらないじゃないか……」

魔理沙は顔を伏せ若干もじもじしながら言う。意外と寂しがり屋なのかも知れな
い。

「ふーむ」

川上は少し考える。まあ何やら色々いる場所らしいし着いていけば暇潰しくらいになるか、そう思いなおした。

「わかった、行こう」

「ホントなんだぜ!?　じゃあ一緒に行くんだぜ」

川上の返答にパツと顔を輝かせ嬉しそうに魔理沙は言う。案外人懐っこい奴なのだ、川上は思った。

とりあえず装備はと川上は考える。普段の服はまだ乾いてない、だが借りた和服はゆつたりとしていて意外と動きに支障はない、帯も刀を差すのに丁度良さそうだ。適当にナイフと手裏剣を忍ばせ、刀を差し野太刀を背負うと川上は準備を終えた。

「準備はいいぞ」

「よし、じゃあ早く行くんだぜ」

そして二人は家を出かけていった。

第9話

——幻想郷、紅魔館前。

ホウキに乗って飛んで来た魔理沙とホウキに同乗して来た川上の二人組がいた。

そして二人の前にこの館の門番である中華風の服を着た、中国美人といった風の少女が対峙していた。

「また貴女ですか、いい加減本を盗まれるのもうんざりとパチュリー様も仰つてましたよ。」

「お前、本を盗んでるのか？」

川上が疑問を呈する。その口調に感情は籠められておらず、呆れているのかはたまた感心しているのかはわからない。

「盗んでるなんて美鈴も川上も人間きが悪いな。私は借りてるだけだぜ、ただ死ぬまで返さないだけだ」

魔理沙はそんな傍若無人な発言をする。彼女は盗んでいる自覚すらないのか？

「つまり死んだら返すのか。じゃあ別に問題ないな」

そして川上はなぜか魔理沙の言葉に同調する。まさか本気で同感なのか、あるいは一種の皮肉のつもりで言っているのかやはり口調からは判断がつきにくい。

「だろう？ だからそんな目くじらを立てる程の事じゃないぜ」

「まあ、そんな事はいいから早くその図書館とやらに行かないか？」

例によつて両切りタバコに火を付けながら川上はけだるげな目付きと投げ遣りな口調で言う。彼はとりあえず一緒に来たはいいが早速面倒くさくなってきたのかも知れない。

「待ちなさい、私も門番としてみすみす賊を館に通す気はありませんよ」

そう言つて館の門番——紅美鈴は立ちほだかる。

「だ、そうだ、通してくれないみたいだし、帰つて昼飯にでもするか」

川上は紫煙を吐き、通す気のない門番にあつさり思考を切り替えた。しかし彼は一体何しに来たのか？

「いやいや、わざわざ来て入らず帰るとかないんだぜ！」

魔理沙はすかさず川上に突つ込む。

「しかし先方は入れる気がないみたいだがどうするんだ？」

「決まつてるだろ、向こうに通す気がないなら……押し通るだけだぜ！」

「ふむ、それも有りだな」

やはり我を行く魔理沙の主張に何処かどうでもよさげに川上はそんな事を言った。

「と、いう事で川上、門番を倒せ」

と、そこまで言っていていきなり魔理沙は川上に丸投げした。

「いや、何故俺が？」

当然の疑問を川上は返す。

「お前、武術家って言ってたろ？ 美鈴も中国武術とかいうの得意らしいからな、相性がいいと思って」

「その場合相性がいいと言うよりお互いが噛み合ってしまい危険なんだが」

川上は短くなったタバコを投げ捨てげんなりと言う。

「成る程……その刀と佇まいといい貴方も武人でしたか」

そこで美鈴は川上に初めて興味を向ける。食い付いて来ちやつたよ、川上はそう思
い溜め息をついた。

「自分は武人なんて名乗れるような正道の者ではない邪道の武だ。だから誇れるよ
うなものではない」

とりあえず川上はそう煙に巻く。

「成る程、察するに古流武術……邪道というからには忍術などの類でしょうか？」

「もう、とりあえず帰っていいだろうか？」

やたらと川上の武に興味を持つ美鈴に対して、早く終わらせたがり始めた川上だった。

「だから、帰らないっての。本を借りてくんだぜ」

「私としても貴方には興味がありますね」

川上の言葉に魔理沙と美鈴から同時に返答がくる。二人の言葉はつまりはこのままいても終わらないと言う事だ。

——だから川上は踏み込みながら美鈴に腰の刀で抜き打ちに斬り付けた。

「くッ！ 不意討ちとは邪道とはよく言ったものですね！ 立ち合いの技術ではなく暗殺技法って訳ですか!？」

しかし氣の流れを読む程の中国武術の達人である美鈴もさること、完全に虚を突かれたにも関わらず川上の抜刀術をバックステップで紙一重、しかし危なげなく回避した。

「そいつ！」

美鈴は回避し刀身をやり過ぎたそこから一気に踏み込み川上を制圧しようとして——断念した。右片手で抜き打たれた刀、しかし初撃を放つと抜き打ちのさい鞘に添え鯉口を切り、鞘を引く動作をしていた左手をすぐさま柄尻に持つていき二刀目を放つてくる。

——切り返しが早すぎる、美鈴はそう思った。並みの相手なら初撃の抜刀を外して刀を返す前に懐に踏み込み制圧が出来るはずだった。しかしこの男はそれを許さなかった、ともかく襲いかかる袈裟斬りを美鈴はふたたびステップワークで躲す、が——
痛み、何故？相手の攻撃は確かに躲したはず。美鈴は疑問に思い大きくバックステップして川上と距離を開けると自分の身体を改めた。

「終わりだ」

川上は追撃もせず、刀をだらりと下げた無構えでそう言った。なんて事はない、美鈴が感じていた痛み、の正体は肩口に食い込んだ一本の棒手裏剣だった。一体いつ食らった？ いや、いつ彼はこれを投げた？ 美鈴はそう思った。そして彼女には思いもよらなかっただろう。実は川上は最初抜刀する時には既に手裏剣を手の内に隠すようにして握りこんでいて、二刀目の袈裟斬り自体がフェイクで斬る振りをした動作で美鈴に手裏剣を打っていた事など。

「何を……たかだか棒手裏剣一本、急所でもない、この程度の傷を負わせたくらいで勝ったつもりですか」

確かに完全に一本は取られた、だがまだ戦闘不能の深手ではないのだ。ならばこのまま門を通すつもりもない、この時の美鈴はそう思っていた。

「たかだか手裏剣一本……か、確かにそうだがもう少し身体に異物が入る事への危機感を持ったほうがいいだろう」

「何をッ！」

美鈴はそうがなり大きく開けていた距離を僅か一步の踏み込みで縮め突きを放つ、その突きは川上の水月を打ち抜く——はずだったがヒットの瞬間川上は自ら後方に転がり——柔術等に置ける受身の後ろ返りの応用である——ダメージを逃がした。転がった川上に美鈴は踵を落す事も考えたが後ろ返りのまま座構えに移行しつつ刀で頭上をガードした川上に追撃を断念した。深追いして踵落とし等していようものなら足首から先が無くなっていただろう。

「くッ、しづといですね……こちらも棍等があれば仕留めきれぬのに」

流石に武術の達人たる美鈴でも無手では鋭利な刀という得物を持った手垂れ相手には攻めあぐねた……。集中力も段々切れ初め息も切れる。旗色が悪いなど美鈴は思う。

……いや、悪すぎやしないか？ さつきから手足まで重くなってきた。自覚すると勝手に呼吸が苦しくなり四肢が痺れてくる、これは異常だ、美鈴は思った。

そういえばさつきあの男は何と言ったか？ 確か身体に異物が入る危機感を持つべ

きだと……

「くそー！」

やっと美鈴は気付いた肩口に刺さりっぱなしだった手裏剣を抜き捨てる。しかし遅すぎた、最初からそのくらいの可能性を考慮にいれるべきだったのだ。

「やっと効いてきたか、ちゃんと打ち込んだはずなのに平然と動くから効かないかと思った。それをそこまで耐えるという事はお前も人間じゃあないのか？」

「貴様……仮にも武人が毒など使うか!？」

「言っただろう？俺は正々堂々殺し合いましたよなんて正道のもんじゃないと。単にただの手裏剣を打つより毒を塗ったものを打った方が人を殺すには効果的なのは考えるまでもない。なら効率を考え使っただけだ」

「く、そ、邪道……か、悔つてい、た」

本当にこの男の武は人を効率よく殺す事のみを突き詰めた体系化された術なのだ。自分の武術とはそもそも別物じゃないか、美鈴は思った。

そして美鈴は崩れ落ちた全身の麻痺は既に身体を支える事も出来ない程だった。人間なら既に呼吸が止まり死んでいるだろう猛毒だ。妖怪の美鈴とはいえ毒が抜けるまで暫く動けそうになかった。

川上は刀をピュンツと血振りをすると静かに鞘に納めた。美鈴が抜き捨てた棒手裏剣も回収した。

はあ、と川上は溜め息を一つ吐きタバコに火をつけた――

第10話

——幻想郷にそびえ立つ紅魔館の一室。

その部屋に妖怪の中でも最高クラスの力を持つとされる種族、吸血鬼であり、またこの紅魔館の当主である少女はいた。

珍しく日中に起きてるその吸血鬼の少女はカーテンの閉められた窓辺に立っていた。その背中に纏う空気は——異質

「美鈴がやられたか、あの男そこそこやるようだな……」

吸血鬼の少女は呟く、その声は幼い女の子の甘さを含んだ声、しかしその口調は声質からは考えられない程の重圧を醸し出している。

「ククク……しかし美鈴はこの紅魔館のメンバーの中では最弱……あいつを倒した

所でまだ私には咲夜を初めとした強力な戦力が……」

「何、悪役ごっこしているのですかお嬢様？」

何かいかにもな悪役のセリフを紡いでいる吸血鬼に対していきなり現われた銀髪が特徴的な一人のメイドがツツコむ。

「じゃあ逆にあの男を悪役にして私達が正義の味方役をやる？ それも面白そうじゃない？」

現われたメイドにまた別のごっこ遊びを提案するこの館の当主である吸血鬼——レミリア・スカーレット。先ほどまでの悪役然としていた威圧感はいなくなるとそこには何処か楽しげなレミリアがいた。

「なるほど……物語などなら本来悪役としかかなりえない我々吸血鬼側が寧ろ悪役と戦うヒーローな訳ですか。かなり斬新な設定、流石はお嬢様です」

そして何故かメイド——この屋敷におけるメイド長である十六夜咲夜はレミリアの提案に心底感心したという風だった。

「そうよ、咲夜、さあ！ あの男を貴女の正義のナイフで貫き悪を挫くのよ！」

「わかりました、あの男が館に入っていたら不法侵入の悪として処分させて頂きます」

やたらノリノリのレミリアの言葉に咲夜は大真面目に頷く。

「え？ いや殺しちや駄目よ、それじゃつまないし」

「どつちなんですか……」

コロコロと変わるレミリアの言葉に咲夜はげんなりと応じる。もともと咲夜もレミリアにはこういう所があると知っていたが。

「まあ、あれは見た所外来人だしわざわざここに殴り込みに来たって訳じゃないで

しよう。それに魔理沙も一緒みたいね、害は特にないわよ。」

「まあ、それも確かにそうですね」

確かにお嬢様のいう事も最もだ。まさかあの男がたった一人で紅魔館を攻め込みに来たとは考えにくい、咲夜はそう思った。

「単に魔理沙に拾われた外来人が一緒にくつついて来ただけよ。でもあの男中々面白そうだから後で私の所に連れてきて頂戴」

「わかりました、そのように」

「素晴らしい失礼します、と咲夜は退室した。」

そして廊下を歩きつつ咲夜は考える。

確かにあの男にはこの館への明確な敵意はないと見ていいだろう。しかし慢心し

ていて本気も出しきれなかったとはいえ——いや、むしろその慢心を的確に突き本気を出させなかったあの男の手腕を評価するべきか——美鈴を呆気なく戦闘不能に追い込む手際。

そしてあの男の斬撃、あれは完全に相手を殺しにきていた。美鈴のように武術の心得等がある近接戦闘術に優れた者でなければいくら妖怪でも真つ二つになって死んでいただろう。

——そして咲夜が何より脅威的に感じた事は、あの男の斬撃は確実に殺すつもりで放たれていたにも関わらず攻撃を行う男からは殺気だとか殺意だとかの匂いがまるでしなかった……例えるならまるで包丁で大根でも切るのと同じような気軽さで美鈴を殺しにかかっていた。

あの男は世間一般で言う「まともな人間」ではない。むしろあれは命を奪う意味も分からずに破壊の能力を行使していた妹様に近いものがあるか？咲夜はそう思った。

あの男に我々への敵意がないのも確かだろう、だがあの男が「危険な人間」か「安

「全な人間」か、どちらかと二択で考えるなら考えるまでもない。はたしてあんなのをお嬢様に引き合わせてもいいものか？

そこまで考えて咲夜は思う。まあそう難しく考える程のことでもないかと。

仮にあの男がお嬢様に刃を向けるような事があれば私が殺せばいいだけの話だ。

さて、と、思考が一段落した所で咲夜は足を館の外に向ける。男にやられた美鈴はまだ毒で麻痺して倒れているのだ。門番が館の前でぶつ倒れていては紅魔館の体裁に関わる、美鈴を回収する為に咲夜は門の前へと急いだ。

第11話

「よー、いきなり剣を抜いた時はどうなるかと思つたが流石だなあ」

幻想郷、紅魔館門前。門番を戦鬪不能に追いやつた川上に魔理沙はそう賛辞を送つた。

「上手くいったから良かったが正直ギリギリの綱渡りだつた。もう御免だな」
タバコをゆつくりと吸い紫煙を吐きながら川上はそういう。勝負はあつけなくついたものの何か一つ違えば地に伏せていたのは自分かも知れなかつた事を川上は自覚していた。

「しかし美鈴に棒手裏剣を投げたのはいつどうやつたんだあれ？」

「手の内に最初から握りこんで置いて斬りこむ振りして打つただけだ」

川上は何でもない事のように言うが手の内に剣と一緒に手裏剣を握り込みフェイントを兼ねた斬撃の動作で標的に手裏剣を打ち当てる。それを実戦レベルであっさりこなすのはあまり武器術や体術は専門ではない魔理沙にも超高等技術だというのは想像出来た。

「どうだ、何なら私と一緒に妖怪退治の仕事でもするか？ お前が前衛をやれば効率よく戦えそうだけ」

魔理沙は川上の白兵戦の実力を買っているのかそんな提案をする。

「いや、仕事をするかどうかは別として門番も倒したのだからとつと此処に来た要件をすませないか」

「おっと、そうだな、じゃあ図書館に行くぜ」

早く終わらせたがっているやる気のない川上の台詞に魔理沙は当初の目的を思い出し図書館に向かう事にした。

短くなったタバコを投げ捨てて川上は館に入る魔理沙に続く。

「なんか、随分広い印象を受けるな」

館に侵入し魔理沙と廊下を歩きながら川上は思った事を口に出す。

「ああ、ここのメイドが空間を弄って中を広くしているらしいぜ。迷わないようにな」

「ふうん」

魔理沙の返答、空間を弄っている等という色々規格外な現象を聞かされた川上はやっぱりどうでもよさそうだった。

「お前は本は読む方か？」

「あまり読まないな。まあ面白い知識が得られる本等は読んで面白いと思うが」

魔理沙の質問に川上はそう答える。

「そうか、ならお前でも楽しめる本がここにもあるかも知れないぜ」

「そうか」

なるべく川上の興味をそそろうと魔理沙はしたのかも知れないが川上はやつぱりテンションが上がり切らなかつた。

魔理沙はむう、と小さく呻き、中々気難しい奴だな、等と考えた。

——そんな二人を見つけた一人の存在がいた。

なんて事はないこの館に人員過多ではないかという程雇われているメイドである妖精の一人だ。

そのメイド妖精は魔理沙と見慣れない男を見付けて大して仕事をしない妖精としては珍しく館の者としての責務を果たそうとした。まあ、単なる気まぐれかも知れないが。

「しんにゅーしゃだー！」

メイド妖精は侵入者を追い出そうと、子供程しかない身の丈を越える大きな槍、ランスを構えて突進してきた。狙いはメイド妖精にとっては謎の男、川上か。川上はちらりと突進してくるメイド妖精を見ると魔理沙の襟首を掴む。

「ぐえっ」

そして自然な体の動きで魔理沙と自分の立ち位置をクルリと入れ替えた。つまりメイド妖精が川上へと突っ込んでくる射線上に魔理沙が立てられた事になった。ありていに言ううと魔理沙が川上にとっての盾である。

「つて！ うおわっ！」

いきなり目の前に槍を構えたメイド妖精が迫ってくる事になった魔理沙は慌てポケットからマジックアイテムのミニ八卦炉を取り出し構え中太の高熱量のレーザーを放ち、すんでの所でメイド妖精を吹っ飛ばし事なきをえた。

「殺す気かッ!？」

自分を盾に使った川上に思わず魔理沙はそういう。しかし

「いや、少なくとも俺に殺す気はない、その気があったのは俺じゃなく今のメイドだろう」

しれっと川上は何でもない事のように言う。

「ごういう奴なんだぜ……」

やっぱりぶっ飛んだ所のある川上に魔理沙はげんなりする。もつともこの幻想郷

ではこんくらいトんでる奴の方が多いくらいなのだから魔理沙も慣れてるといえば慣れていたが。

「……もういいぜ、図書館はそこだ」

「ああ」

若干疲れたように魔理沙がいい川上を伴って図書館に入っていた。

そして川上が見る事になった図書館は凄まじいまでの面積を誇るものであり等間隔に並べられた巨大な本棚にこれまた膨大な量の蔵書が納められていた。これは凄いな、流石の川上もここまで規模とは思わなかったのかそう思った。

「こつちだ、常に引き籠もってる魔女がここにはいるからな」

「さぞかし本の虫の魔女だろうな」

「間違いないやあないぜ」

そんな事をいい魔理沙と川上の二人は図書館を歩く。その先には少し開けたスペースがあり、本等の雑多な物が山積みになされたテーブルがありその前に椅子に座った一人の少女が本を読んでいた。

「あれが引き籠もりの本の虫か」

「そうだぜ」

「……なんか今失礼な事言われた気がしたんだけど」

二人のやりとりに魔女は本から目を外し二人の方をじろりと見る。その紫がかつた眼は川上と同じく半眼で正面や上を見る時三白眼がちになっていた。もつとも彼女の場合視力が悪いせいでそんなジト目がちになっているのだが。

「よー、パチュリーまた遊びにきたぜ」

「本を盗みに来た、の間違いでしょ。遊びにくるのはいいから持っていった本をたまには返してよ」

「まあ、気が向いたら返すぜ」

そういう彼女が気が向く時が果たして魔理沙が生きてる内にあるのだろうか。

そこでパチュリーは川上に目を向ける。川上もパチュリーに目を向けていたので二人の感情を現さない目が合った。そして二人は互いに互いを観察する。魔女——パチュリー・ノーレッジは川上の着ている服、目付き、身につけている刀、佇まい等を見て外来人と判断した、ただし得体の知れないとつく。川上はパチュリーの外見を観察した。深い紫の長い髪に月を模した飾りのついた帽子を被っている。服はローブのようなゆつたりとした服を身につけており体格が分かりにくい、が顔の血色や呼吸のリズムをみるとあまり健康そのものとも思えない。しかし纏う空気は一般人とはやはり違うか、川上はパチュリー観察しそう思った。

そして二人は同時に視線を切った。

「まあ、いいわ小悪魔はいる？」

パチュリーは川上については言及はせずにこの図書館の司書係を呼んだ。

「はい、お呼びですかパチュリー様」

呼ばれて現れた司書は赤い長髪にシャツに黒いベストとスカートを着て頭と背中にコウモリのような羽のついた少女だった。小悪魔だなんて名前というよりただの種族名だな、川上はそう思い誰にも気付かれないよう冷笑を浮かべた。

「お茶を三人前用意してちょうだい」

一応川上も数に入っていた。

「はい、わかりました」

小悪魔は用意の為に奥へと歩いていく。

「おつ、気が利くな、サンキュー」

「ありがとう」

二人は各々礼を言いながらパチュリーと同じく机の前の席につこうとして——川上は背負ってる野太刀が椅子にぶつかってしまい座れなかった。ぬう、と唸り何とか椅子の隙間から拵を通して座れないかと試してみるがどうも上手くないかない。

「……背中から外して立て掛ければ」

見かねてパチュリーが川上に初めて声をかける。

「そうするか」

結局川上は背中から野太刀を外してテーブルに立て掛けた。しかし比較的長身の川上が背負っているとあまり感じられないが立て掛けられると刀の長さが目立つた。

「やっぱりそれ持ち歩くの邪魔なんじゃないか？」

「俺もそんな気がするが俺が使える武器の中でこれが白兵戦では一番だからな。身につけてないし心もとないんだよ」

そう魔理沙に答えながら川上はタバコを取出し火を付ける。するとパチュリーが本から目を離さないまま指先を川上に向けた。

「水克火」

小さくパチュリーが呟くと川上がくわえていたタバコがジユツと音を立て火が消える。紙巻きの半ばまで濡れてしまいもう吸えないだろう。

「……図書館は禁煙」

パチュリーの言葉にぬう、と唸り濡れてしまったタバコを握り潰してポケットに戻した。やはり紙媒体である本を保管する図書館で煙はまずかったのか、もつともこの本はパチュリーの魔術によってそう簡単に痛まないように保護されていたが。

それにパチュリーの持病が喘息という事もありタバコはここでは良くないのだろう。川上がそれを知るよしもなかったが——いや、川上はあるいはパチュリーの持病を

わかっていたのかも知れないが、現に先程パチュリーを観察していた時に彼女の呼吸に喘息の症状の高い笛のような音……喘鳴が僅かに混ざっていたのを川上は耳ざとく聞き取っていた。

「お待ちせしました」

トレイにポットとカップを三脚乗せた小悪魔が戻ってきて、カップを置くとポットから濃さが均一になるように三脚のカップに少しずつ回し注ぎ、満たされたカップを三人の前に置いた。

「ありがとう」

「ありがとう」

「サンキュー」

三人各々礼をいい紅茶に手を付けた――

第12話

——紅魔館内部の図書館

その本棚が立ち並んだ膨大な館内で広くスペースが開けてテーブルが設置してある地点、テーブルに面して置かれてる椅子にそれぞれ腰掛ける二人組がいた。

一人は眠たげな半眼をして刀を腰に差したチビチビ紅茶を啜る男——川上、一人は川上と同じくジト目がちな半眼で本に目を通す少女——パチュリーだった。

少し前までここに魔理沙も居たのだが『本を物色してくるぜ』と言って本棚を漁りに何処かに行ってしまった。

つまり盗むもとい借りる本の物色に行った訳だが、勝手に本を持っていかれる図書館の主のパチュリーはじとりと魔理沙をにらんだがあきらめてるのか特に何も言わなかった。本気で止めようとしてるようにも見えないので案外魔理沙が本を持っていく

のはある程度許容しているのかも知れない。

そういう訳で川上とパチュリーの二人きりで取り残されたのだが両者ともあまり自分から口を開くタイプじゃなかった、そのため――

「……」

「……」

「……」

「……」

——こうなる。

初対面の二人の間には第三者からみて不気味な沈黙が流れていた。しかし本人たちはその沈黙に気まぎれな風すらなくパチュリーは涼しげに、川上は眠たげに沈黙に身

を置いていた。

川上はタバコも吸えないので口寂しさもあるのか紅茶を少しずつ頻繁に口に運ぶ。その紅茶は香り高く、すつきりした甘味の中に微かな渋みが混じり後味もいい、紅茶としては使った茶葉も煎れ方も良く上等なモノだったがぼんやりと口にする川上にはあはれは適当に煎れたティーバッグでも変わらなかつたかも知れない。

カップが空になった所、見慣れない客に心配になった司書係の小悪魔がタイミングよく様子を見に来た。川上が小さくカップを爪で弾いてアピールしカップを差し出してお代わりを要求すると慌てて小悪魔がお代わりを用意して川上に煎れた。

「ありがとう」

そう川上は礼をいい、紅茶を口に運ぶ。煎れたてでまだ熱いのか飲みにくげだった。

「いえ、また何かありましたら呼んで下さい」

そう小悪魔は柔らかない表情で川上にそういうとその場を去っていった。他に仕事もあるのだろうか。

川上は紅茶を口にするくらいしかやる事もなく暇なのかテーブルに乱雑に積まれてた本の一冊を手にとつてページに目を通す。しかし本に書かれている言語が川上には全く理解出来なかつた。その本は何語かもよくわからない文字が綴られていたためである、川上は本をパラパラと捲つて結局閉じる。

「日本語の本はないのか？」

そこで川上は初めて自分からパチユリーに声をかけた。

「……それは中にはいくらでももあるわよ。もつとも日本語のモノでも貴方に読めるかはわからないけど」

パチユリーは手にしていた本からちらりと川上に目を移しそう答える。この図書館は魔術体系に関する本が大多数なため魔術の素養がなさそうな川上が読むのは難し

いだろうとパチユリーは思った。

「ふうん」

川上はやはり気のない返事をした。どうやら図書館は彼にとって暇だったのかも知れない。

「貴方外来人よね」

「そうだ」

そんな川上を気遣ったのかは分からないがパチユリーから川上に会話を切り出した。

「いつ外の世界から来たの？」

「昨日、気付いたら森の中だったから困った」

「……昨日」

川上の返答にパチュリーは違和感を覚える。つまりこの男はまだ昨日来たばかりだという、本人にとつては今日昨日いきなり別世界に放り込まれ訳も分からない状況、のはずだ。しかし目の前の男からは余裕というべきかむしろどうでもよさげな雰囲気を感じられた。やはりこの男は普通じやなさそうだ、パチュリーはそう思った。

「なら森で魔理沙に拾われたの？」

とりあえず来たばかりの外来人が森で迷うというのは危険なパターンだ。実際迷いこんで来た外来人は状況も分からぬまま妖怪と遭遇して喰い殺されてしまうケースも多い。ならこの男は森で迷つて最中に運よく魔理沙なりに助けられたのか、あるいは自力で森を抜け安全地帯までたどり着いたのか、パチュリーはそう予想した。

「いや、森であったのはなにか黒い闇みたいなのを纏った奴だったな。姿は可愛い子供みたいな奴だったが実際化け物だった」

川上の返答でパチュリーは意外に思った。この男は妖怪と遭遇したらしい、それも

口振りから恐らく宵闇の妖怪。あれは人間にとって無害な妖怪ではない。外来人が喰いであるあれに遭遇して良く生きていたものだ。パチュリーは思った。

「良く貴方生きていたわね」

パチュリーはそう率直な感想を述べた。

「いや、それが俺と出会った時にちょうど誰だか知らないが少年を一人食べていた所だった。だから食料が間に合ってるのに俺を喰う必要が無かっただけだろう」

「……そういう事」

確かに妖怪は人を殺して喰う。だが逆に言えば人を食料と見ているだけなのだ。腹が満たされている所にわざわざ退治されるかも知れないリスクを負ってまで人を襲う者はまずいない。男は運が良かったのだと言える。人間の癖に人が喰われていた事を無感動に話す所はまっとうな人間としてはやはりどうかと思ったがとりあえずパチュリーは納得した。

「化け物と思ったが案外親切な者でこの世界の事を教えてもらい神社まで案内してもらった」

「珍しいこともあるものね」

外来人は幻想郷にたまに現れるが妖怪に助けられた外来人も珍しいものだろう。

「あの魔法使いに拾われたのはその神社でだ」

川上はそう話を一段落させて湯気を立てる紅茶を一口飲んだ。

「へえ、そうだったの」

そう相づちを打ちパチュリーも本に目を戻す。特にそれ以上突っ込んだ事を聞く気もしなかったようだ。

そうしてまた、図書館に沈黙が降りたその時……。

川上の椅子の横に唐突に銀髪のメイドが現れた――

第13話

紅魔館内部、地下図書館

メイド長の十六夜咲夜は自身の『時間を操る程度の能力』を利用し時間を止めてから川上の横に立ち時間停止を解除するという形で対外的に見ればまったくの唐突に川上の横に現れた。

「お客様」

「なんだ？」

唐突に現れ声をかけてきた咲夜に驚きも見せずに川上は応じる。しかし咲夜が現れた瞬間腰に差した刀に添えた左手が極小さな動きで鐔を親指で押し上げ刀身を鞘から僅かに抜く——鯉口を切っていたのを咲夜は見逃さなかった。

「初めまして、私はこの紅魔館でメイド長を務めています。十六夜咲夜です」

「初めまして、川上という。宜しくお願います」

まずは軽い自己紹介から挨拶に入った咲夜に川上もそう返礼する。

なおパチュリーは咲夜の突然の乱入にも興味無さげに本を読みつつ紅茶に口を付けていた。

「川上様、ですね。実はこの館の主君であるお嬢様が貴方に会いたいと」

「この主、確か……吸血鬼だとかいう？」

「はい、吸血鬼で有られるレミリア・スカーレット様です」

「何故？」

咲夜の言葉に川上はわざわざ自分に会いたいという吸血鬼の真意を問う。

「お嬢様は『面白そうだから』と仰ってました」

「そうか、それは仕方ないな、面白そうなら」

そう川上は疲れたように言う。つまり川上を呼びつけた事に大した理由は無いらしい。いや、面白そうだから、とはむしろ大した理由なのかも知れない。

「お嬢様のお部屋までご案内します。ついて来て下さい」

「わかった」

暇だからまあいいかと川上は思い、残った紅茶を飲み干しカツプをカチャリとソーサに置き立ち上がった。その際さりげなく鯉口を切っていた刀を納め、立て掛けてあった野太刀も手に取る。

そこでふと、今まで反応を見せなかったパチュリーが本から咲夜に目を向けた。

「……レミイ、暇なの？」

咲夜は微妙な苦笑いでお茶を濁した。

川上が野太刀を紐で背負い終わると咲夜は言った。

「では、行きましょう」

「ああ」

そういい、二人は連れ立って図書館を後にした。

一人取り残されたパチュリーは小悪魔を呼び紅茶のお代わりを頼んだ。

— 紅魔館廊下

図書館を出た二人は咲夜が先に歩き先導し川上がその三步やや斜め後ろを歩く。

前を歩く咲夜をぼんやりと川上は観察していた。歩みながらも体の軸がまるでブレず足の使い方も踵から着地し爪先に重心移動し踏み切るといふ歩みは彼女の靴からまるで足音がしなかった。その歩法だけみても咲夜が体術に熟練しているのが川上にはわかった。

もともと川上本人の歩みも全くの無音だったが。

「ちよつといいか?」

「はい、何ででしょうか?」

足を止め咲夜に問い掛けた川上に咲夜はそう応じる。

「3分だけ待ってくれないか? 一服だけしていききたい。もしかしたらこれが最後

の衣服になるかも知れないしな」

川上は窓を指差しそういう。単にタバコが吸いたかったのだらうが最後になるとは本気で言っているのか冗談かその気楽な口調から判断がつかない。

「わかりました。そこまで急ぐ必要もないので、どうぞ」

「ありがとう」

川上は素晴らしい廊下の窓を開けタバコを取り出し火を付ける。ゆっくりと両切りタバコを燃焼させ風味を楽しみながら窓から軽く身を乗り出すように空をぼんやりと眺めた。

その姿を見ながら咲夜は思う。先ほど図書館では時間停止で川上に接近した瞬間彼は鯉口を切ったこと、そして今はこちらに背を向け悠々とタバコを吹かしてる。

隙がないのか隙だらけなのか咲夜からしても良く分からない男だった。タバコを吹かしつつ空を見上げるけだるげな横顔からも何を思っているのかも読みとれない。

この男がお嬢様と会っていったいどうなるかもよく分からない。どうか失礼がなければいいが。

川上は携帯灰皿を取り出し、短くなったタバコをもみ消し灰皿に入れた。

「待たせた、行こうか」

「はい、こちらです」

そして二人は再び歩きだし三階の一室、ドアの前で立ち止まった。どうやらここが吸血鬼の主の部屋らしい。

「お嬢様、お客様をお連れしました」

咲夜はドアをノックし中の吸血鬼——レミリア・スカーレットにそう報告した。

「え、客！ 誰!？」

そして中から帰ってきた答えは幼い女の子の素っ頓狂な声だった。まさか彼女は自分で川上を呼び付けた事を忘れていたのか？

「……いや、先ほどお嬢様が面白そうだからお連れしろと言った方ですよ」

咲夜は若干呆れまじりにそういう。

「……ああ！　そう、もちろん覚えていたわよ。とにかく入りなさい」

レミリアはやつと思いい出したのかドア越しに威厳を取り繕いながら入室を許可した。

「どうぞぞ」

咲夜はドアの前から身を引いて川上に入室を促す。どうやら川上本人から部屋に入れということらしい。

このドアの向こうにいるのは妖怪としても特に強力な生物である吸血鬼、川上はそう聞かされていた。

しかし川上に気後れは無かった。何故なら相手は吸血鬼でも川上は人間、人間こそが地上を支配する生物の頂点だと川上は理解していたからだ。

相手がどれほどの化け物でもこちら人間として相応の威厳を見せるべきだ、そう思った川上は初登場こそが肝心だとドアを颯爽と押し入ってスマートに入室をしよう

として……

パンツ！とドアに顔面から華麗に激突した。

なんて事はない、そのドアは押し開けるのではなく手前に引いて開けるべきだったのだ。

川上は打った鼻っ柱を押さえ蹲る。それを見ている咲夜は無表情を装っているが口の端が僅かに失笑を浮かべているように見えるのは果たして気のせいか？

「……一体何やってるの？」

中々入ってこず、さらにドアになぜか衝撃が走った事からレミリアが中から疑問をもらす。

なんとか痛みから復活した川上は顔を上げる。人間の尊敬を保つだとか柄でもない事を考えた結果最初の一手でケチがついてしまいもはや彼はどうでも良くなってしまう。

「失礼する」

川上は今度こそドアを開けごく普通に入室した。

室内は広く全体が紅い色を基調とした豪華な部屋、その部屋の真ん中に吸血鬼は立っていた。

吸血鬼——レミリア・スカーレットは背は子供そのものの低身長、ピンク色の衣服に身を包み、背中からは蝙蝠のような大きな羽が生えている、髪は短めな水色かがった青にナイトキャップのような帽子をかぶっている。特徴的なのは眼で吸い込まれそうな深紅の光彩はいかにも魔的な光を放っている。

そのレミリアが冷笑を浮かべながら川上を見て言った。

「ようこそ人間。私が夜の支配者たる吸血鬼、レミリア・スカーレットよ」

「はじめまして、俺はただの人間の川上だ」

これが吸血鬼と人間の出会いだった——

第14話

——紅魔館レミリア・スカーレット自室

そこでこの館の当主である吸血鬼、レミリア・スカーレットとその従者十六夜咲夜と外来人である川上は相對していた。

レミリアは口元に面白そうな笑みを浮かべつつその深紅の瞳を走らせて川上を觀察していた。

咲夜はレミリアの後ろに控えていた。その姿勢のよい立ち姿は微動だにしない。

川上は眠たげな目を室内に走らせもつともらしく一つ頷くと踵を返してドアに向かい退室しようとした。

「……って、ちよつと待ちなさい！ 何帰ろうとしてるのよ!？」

すかさずレミリアが突つ込む。咲夜は相変わらず表情を変えないままだ。

「いや、顔合わせは済んだから帰っていいのかと思つて」

「まだ会っただけでしょ!? 会話とかしなさいよ!」

まるでやる気のない川上にレミリアはそういう。

「別にいいが……何を話すんだ?」

「そうね……例えば貴方、門番の美鈴をどうやって倒したのとか」

「手裏剣を投げたら倒せた」

「……」

会話はあっさり途切れてしまった。レミリアはとにかく他の話題も考える。

「えっと、貴方外来人よね。幻想郷に来たのはいつ?」

「昨日だ」

「来たばかりなのね。住み家とかどうするの?」

「とりあえず昨日はあの魔法使いの所で世話になった」

「そう……魔理沙にね」

とりあえずレミリアは川上が来たばかりで右も左もよく分からない状況らしい事は分かった。しかしその川上本人はまるで焦りなり不安なりを見せていないが。

レミリアは少し気に入らなかった。情弱な人間なら人間らしく弱みを見せればいいのにと、この男の取り乱す様が見てみたい、そんな事を思った。

そしてレミリアは一つ面白い事を思いついた。もつとも他の者に取っては面白いどころかろくでもない事だったが。

「貴方、お昼ご飯は？」

「まだだ」

「そう、お腹空いてるなら食べていきなさい、簡単なものなら出すわ」

なんて事はない、レミリアは川上に食事を振る舞う事を考えついたのだ。川上は少

し考え空腹だったのか答えた。

「それではご馳走になる」

「決まりね、咲夜」

そしてレミリアは咲夜に耳打ちする。その内容に咲夜は眉をひそめた。

「しかし……お嬢様、それは」

「いいのよ」

「……分かりました用意します」

そして次の瞬間には部屋の大きめのテーブルに食事の用意がされていた。例によつて咲夜が時間操作能力を利用し用意したのである。その超常現象にも川上は少なくとも驚きを表情には出さない。

用意された食事は肉をソースで煮込んだ物と澄んだスープ、そしてパンと確かにシンプルな献立だった。そしてワインも用意されている。

レミリアも共に食事を行うつもりなのか用意は二人前だった。

川上は例によって背負った刀を下ろして、自分が立っている側から近い席ではなく『回り込んで』席に付く。彼はぼんやりと目の前の暖かい食事に眼を向けた。

「は？」

レミリアは何故か自分に近い方じゃなく回り込んで席に着いた意味が分からなかったらしい。

無論川上は自分側の食事に何か盛られた可能性を一応考慮しての行動だった。しかし今のレミリアの反応でそれは無いとわかったが。

「いや、こっちの方が美味そうに見えたので」

川上はそう涼しげに囁く。結局レミリアの方は川上の行動の意味が理解出来な

かったようだがとりあえず話を進める事にして、自分も残った席に着いた。

それで咲夜がそれぞれのグラスにボトルから静かにワインを注ぐ。

「じゃあせつかくだから乾杯しましょうか」

川上は何が『せつかく』なのか良くわからなかったが何も言わずグラスを手取る。

「乾杯」

そういう互いにグラスをチンと小さく合わせそれぞれワインを口に運んだ。

：：舌に感じる酸味と後味の僅かな渋み、川上にはそれが上等なもののかは分かんなかったがあまりワインは飲みなれていなかった川上でも飲み易いものだった。

川上は肉の煮込みをナイフで切り一口、フオークで口に運ぶやや甘味とコクのあるソースで柔らかく煮込まれた肉は口の中で柔らかくほどけた。

そのままパンも一口食べてみる、香ばしさとふわりとした食感のパンは川上にとって初めて食べるほど見事なものだった。

スープも掬って口にする、味自体は余り強くないが風味が効いておりスッキリした

印象のいくらかでも飲めそうなスープだ。

総じて美味いなど川上は思った、魔理沙の所でだされた食事でも文句ないものだった事もありこの世界は食べ物が美味いようだ。

「どう、口に合うかしら？」

「ああ、口に合うというか、ここまで美味しいモノを食べたのは初めてというレベルか、見事なものだな」

レミリアの問いに川上はそう素直に賛辞を述べる。食べ物が美味しいのはいい所の条件だ。この世界はやはりいい場所なのかも知れないと川上は思った。

「そう、やはり同族の肉は口に合うようね」

レミリアの言葉に川上は疑問の眼を向ける。同族とはどういう意味か？

「ああ、この食事は私達用だから……肉は人肉よ」

……レミリアの言葉の意味はなんて事はない。食材自体が同族の人間だと言う意味だった。それに偽りはなく肉の煮込みは人間の腿肉を調理したものだ。場に一瞬緊張が走った。

「ふうん、確かに言われてみればこれまで食べた事ない感じの肉だ」

そういうながら川上は次の一口を口に運んだ。ちなみに場が緊張したのは川上がどう反応を見せるかとレミリアと咲夜が内心身構えたせいだった。

「……はあ?！」

単にこれがやりたかっただけに川上を食事に誘ったレミリアは余りの川上の反応の淡白さに盛大に肩透かしを食らった感じになった。また内心本気で身構えていた咲夜も危うくずっこけそうになった。

「いやいや、貴方もっと何か言う事とか反応があるでしょ!？」

「何がだ? とりあえず人の肉等初めて食べたが美味しいものだと思っただが」

川上が言う事はそれだけらしい。流石にレミリアもこれは普通じゃないと思っただ。妖怪は人間を食べるが人間に取って人肉食は最大のタブーであってそもそもそれ以前

に人間は大抵人肉を生理的な嫌悪感で口に出来ないモノだと知っていたからだ。

事実、これらの料理の調理役である咲夜であっても自分の普段の食事に人間を食べたりしないのだ。なのにこの男はなんでもない事のように人肉料理を美味いと言う。レミリアはこの料理が人肉だと明かせば間違はなく川上が大きな反応を見せると期待していたのに。

「そ、それに、このスープのストックは人骨から取っているのよ」

「つまり、鶏ガラならぬ人ガラと言った所か？ 違いは良くわからないがあっさりとしたスープだな」

レミリアの言葉にスープを一口啜りながら川上は言った。
その反応にレミリアはキレた。

「うわーん、咲夜！ アイツ全然驚いてくれないよー」

キレたレミリアがした事は従者である咲夜に泣き付く事だった。もはや主として

の威厳もへったくれもない。

「落ち着いて下さいお嬢様。極まれにああいう人間もないことも……ないかも知れないんです？」

そういう咲夜の言葉は疑問系になっていた。流石に咲夜からしてもこの反応はないだろうと思つたらしい。

「何がやりたいんだ君達は、食事くらい静かにしたらどうだ？」

目の前の三文芝居にやや呆れ気味にそういう川上。レミリアはやや涙目でうー、と川上を睨む。

「ほら、席に付いて静かに食べる」

川上にそう促されてレミリアはため息を一つついた。驚いてくれないモノはしようがない、気を取り直して席に戻る。

「どうして驚かないのよ？」

とりあえず涼しげに食事を進める川上にレミリアは率直に不満をぶつけた。

「驚くって何に？」

「人間は人肉を食べないんでしょ？」

まるで自分の反応の何がおかしいのか分かってない川上にレミリアが突っ込む。

「まあ、普通は食べないが、出された肉が人間だったからって驚く必要もないだろ。豚肉だろうが人肉だろうが同じ食料なのだから」

「そういうモノなの？」

レミリアは疑問を込めて咲夜を見るが、それに対して咲夜は首を横に振る。咲夜も同じ人間として普通は豚肉と人肉を同じと割り切るものではないという意味を込めて

のものだ。

「しかし、吸血鬼なのに普通に人間を調理して食べるというのも芸がないんじゃないか？」

「ならどんな食べ方すればいいのよ？」

川上の言葉にむっとした表情を向けレミリアは聞く。

「う……ん、吸血鬼っていうくらいなら……、例えば厚めに切った肉をステーキとか。焼き方はレアでソースに血を使うとか吸血鬼っぽくないんじゃないか」

川上は適当に思いついた事を話す。

「血のソースね……普段血は紅茶にブレンドしたりしてるからそれもありかも知れないわね。咲夜そーいうの出来そーう？」

「試してみなければ分かりませんがおそらく出来ると思います」

川上の考えた料理が美味しそうに思えたレミリアは咲夜にリクエストしてみる。

咲夜からすれば血を使いステーキソースを作れなど結構な無茶ぶりだったかも知れないが。

「ステーキの場合どこの肉を使うんだ？」

「この料理は腿肉で作ってあるのですが、同じ腿肉はステーキにも向いてますね」

「私は上腕のお肉が好きね。柔らかいし甘いのよ」

「上腕か、その場合はどんな料理を作るんだ？」

「なんでも向きますね、お嬢様はミートパイにするのもお好きです」

「ミートパイもいいけど、薄く切ったお刺身もお肉本来の甘さが味わえるものよ」

「その場合食べる人間の性別の違いも……」

と、何故か食事の席は三人で人肉料理について盛り上がる事で終わった。

案外川上とレミリアは馬が合ったのかも知れない――

第15話

——紅魔館、レミリア・スカーレットの私室

食事を終えたレミリアと川上は咲夜が入れた食後の紅茶で一服していた。

川上が湯気の立ち上るカップから香りを楽しみつつ一口飲んだ時レミリアはふと言った。

「貴方、ここで働きなさい」

……前置きもない唐突なスカウトだった。いや命令系の言葉はもはやスカウトですらない。

「……………」

川上は緋色の液体が満たされたカップにぼんやりと目を向けたまま特に言葉を返さない。聞いていないのだろうか？

「えっと……貴方、ここで働いてみない？」

川上の態度に不安になったのかレミリアはもう若干下手に出ていた。

「住み込み可だろうか？」

「部屋は与えるわよ。メイド妖精達も全員住み込みだし」

「なら世話になる」

それだけ聞くと川上はあっさり決めてしまった。最初のレミリアの言葉に反応しなかったのは単に条件などを考えていたためだろうか。

しかし、初対面のそれもただの人間を館にスカウトするとはレミリアは川上の門番を倒した腕を買っているのか、あるいは単に何となく川上が気に入っただけなのか？

妖怪特有の気まぐれさを考えれば後者なのかも知れない。事実半ば見栄で館に無駄に妖精をメイドとして雇っているのだから。

「仕事内容は？」

「雑用……と言うか遊撃手みたいな感じでその時手が空いてない所を手伝ってくれ

ればいいわ。咲夜も色々一人じゃ大変な事もあるし」

レミリアは実際人手が欲しかったのも事実だった。メイド妖怪は正直あまり役に立たない事も多く、同じ人間がいれば咲夜のサポート役くらいにはなるだろうと考えた。また図書館にいる友人である魔女のパチュリーも前に助手を欲しがっていたし、妹のフランの相手等色々やらせようと思えば仕事などあるのだ。

しかし実際咲夜を除いて人外しかいない紅魔館で働くなどと奇特な者は人妖合わせてもいなかったのだ、そういう意味では川上は都合が良かったと言える。

「なるほど、遊撃手ね……」

「ええ、頼むわよ」

「出来る限りでやってみる」

「咲夜」

レミリアは控えていた咲夜に呼び掛ける。

「彼を適当な部屋に案内してあげて」

「わかりました」

咲夜は頷いて川上に声を掛けた。

「貴方の部屋に案内するわ。付いてきなさい」

咲夜の言葉に川上は無言でカップから残りの紅茶を飲み干し野太刀を手にして立ち上がった。

「いいぞ、案内してくれ」

川上の言葉に咲夜は歩きだす。

「失礼する」

レミリアにそう一声掛けて川上は咲夜を追って退室した。

「頑張つてね」

その川上の背中に聞こえるか聞こえないかの小ささでそうレミリアは言った。

そして再び咲夜と川上で館の廊下を歩く事になった。

「貴方の部屋は二階でもいいかしら」

「……最低限人の住める場所であるなら何でもいい」

川上の希望を聞く咲夜に川上は例によってあまり主体性のない返事を返した。

「そう、なら二階の隅の方の部屋でいいわね。結構広いし」

咲夜の言葉に川上は無言で首肯する。しかし咲夜の川上に対する口調が先程から

変わっていた。

実際それは川上が客から同じ館で働く同僚となるという咲夜の意識変更の為に、その態度の違いだった。

しかし川上自身は咲夜の態度の違いに特に疑問を漏らさなかった。

あるいは彼は咲夜の態度が変わっている事に気付いてすらいないのかも知れない。

「それと……、先程の事は気にしないであげて」

「？」

咲夜の唐突な言葉に川上は何の事か分からなかったようだ。

「さっきの食事に人肉を出した事よ。貴方はそもそも余り気にしていないかも知れないけどお嬢様はいたずら心でやったのであって、そんなに悪気はないの。それを分かってくれて」

咲夜は先程の食事でレミリアが人肉料理を出した事をフォローしているようだ。確かにレミリアにはそこまで悪気はないのかも知れないがほんのいたずら心で人肉を騙して食べさせるなど一般人なら卒倒しかねない、結構とんでもないいたずらだ。

「いや、別に気にするも何も美味かったのだから文句はない」

……しかし川上にはそういう一般的な食人等のタブー意識は無かったようだ。これでは確かに気にするも何も無い。

「そう言ってくれるのなら別にいいわ。お嬢様は悪い方じゃないと思ってくれれば」

そう、自らの主を言う咲夜はレミリアに相当な忠誠心があると伺えた。

「そりゃ、少なくとも行き場の無い俺に住みかど職を用意してくれたのだから少なくて俺にとつては良い人だな」

人ではないらしいがと川上は小さく付け加える、その言葉を聞いて咲夜は内心安心した。

だが同時に咲夜は警戒心も忘れない、この男は得体の知れない不気味さがあると実際にやり取りしてそう思った。この川上がこの館に害を加えないかと言ったら分からないが可能性はある。

もし、この男が謀反を起こしたらその時は私が……咲夜はそう思った。

「まあ、そう気負うな」

「え？」

まるで咲夜の内面を見透かしたような川上の一言に咲夜は一瞬背筋が冷たくなる。しかし川上自身はそれだけ言ってどこ吹く風だ。

……咲夜は今の言葉は気にしない事にして、案内を続ける事にした。

「ここが貴方の部屋よ」

ある一室の前で立ち止まり咲夜は川上に向き直るとそう言った。

川上は何も言わずとりあえずドアを開け室内を改めてみた。

部屋は川上一人で使うには充分過ぎる程の広さだった。ただその広さに家具はベッドと机、本棚だけだったのでやや殺風景な印象を受けたが。

また、使われてなさそうな部屋であるにも関わらず掃除が行き届いているのはゴミ一つ落ちてなかった。

「中々いい部屋だな」

川上は素直にそう言った。

「気に入ったのなら良かったわ」

「ああ、何も文句はない。ところで部屋はいいとしてこれからどうすればいい？」

咲夜の言葉に川上はそう問う。すぐにでも仕事があるかと思ったのかも知れない。

「今日の所はこの後は好きにしていいわ、仕事は明日からやつてもらおうから。この館は少し広いから今日の内に歩いて間取りを確認しておいてくれればいいわ」

確かにこの館は下手すれば迷いそうな程空間が広い。今日の内に中の構造を確認しておくのは必要だろうと川上も思った。

「後……そうね」

咲夜がふと思い出したように言った。

「貴方はまだ会った事がないみたいだけどレミリアお嬢様の実の妹であるフラン
ドール様もこの館にいるの」

「つまり吸血鬼の妹か？」

「ええ、そうよ妹様も吸血鬼、もし妹様に会ったら挨拶しておきなさい。お嬢様と同じくらいの背丈に金髪で特徴的な形の羽だからすぐわかると思うわ」

「わかった、見かけたら挨拶しておく」

咲夜の言葉に川上はそう頷いた。

「妹様はおとなしいけど少し情緒不安定な所もあるから変に刺激しないようにしなさい」

「わかった」

「じゃあ、私はこれで。何かあったら呼んでくれればいいわ」

「ああ、ありがとう」

そう川上と言葉を交わすと咲夜はフツと川上の目の前から消えた。時間停止を使

い移動したのだろう。

川上はそれを見届けると自分に割り当てられた部屋の中を最低限チェックし、ベッドに腰かけるとタバコを取出し火を付けた。

一口吸いゆつくりと紫煙を吐き出し一息ついた。

彼が吸血鬼の館で働く事になるといいますます異常になっていく状況に何を思っているのか、その気怠げな表情からは伺いしれなかつた――

第16話

——紅魔館、川上は自分に割り当てられた部屋で一服していたが、短くなったタバコを携帯灰皿に入れるとやがて立ち上がった。

この館には魔理沙と来ていたのだ、まずはここで世話になる事になった旨を魔理沙に伝えるべきかと川上は考えた。

それが終わったなら館の間取りの確認もするべきだろう。そう考え川上は部屋のドアから廊下に出た。まずは魔理沙を置いてきた地下の図書館へと向かった。

——そして10分後未だに川上は廊下を歩いていた。

広さ故にあっさり迷ったのである。そもそも図書館はどの方向かもわからずカンで歩いていたので当然の結果だろう。

ここまで広いとせめて間取り図が欲しい所だ、川上はそう思った、後で咲夜に間取り図を求める事を内心決め、とりあえずどうするかと考えた。

と、丁度よくメイドである妖精が通りかかったので声をかける事にした。

「図書館は何処だ？」

「あの角を曲がってずっと真っ直ぐいくと階段があるから降りるとあるよー」
「ありがとう」

川上は極めて簡潔に場所を聞き出し礼を言うとメイド妖精とすれ違い言われた通りに歩きだした。

そしてメイドの言葉通り歩き階段を降りると扉があった。先ほど魔理沙と来た時に入入りした扉ではなかったが広大な図書館の出入口は一つではないのだろう。

大きな扉を開け膨大な量の本棚と蔵書に溢れた図書館に入る。なんとか再び訪れる事が出来たようだ。

が、しかし前回出入りした扉とは違うため先ほどとは当然全然違う地点であり図書館自体広大なので魔女や魔理沙がいたのは何処だったかやはり分からない。

確か開けた場所だったと川上は考え例によって適当に足を進めた。

……それから更に一時間後、川上は本棚に寄りかかりタバコをくわえつつ本を開いてた。

物の10分で案の定図書館の中で迷子になりしようがないので本棚から見つけた読める本を開きつつ休憩していたのだ。

そして彼にとってその本が琴線に触れたのか初心を忘れて読みすでに一時間だった。

ちなみに本は児童文学だった。

「あら、貴方は…?」

そこに先ほどパチュリーと川上が会った際にも顔を見せた図書館の司書係等を勤めている小悪魔が顔を見せた。川上が吸うタバコの匂いが気になり様子を見に来たのかも知れない。

「あの、魔理沙さんが困ってましたよ、いつの間にか居なくなっちゃって」

「すまん、後にしてくれ」

小悪魔は魔理沙の様子を川上に伝えるが川上は既に何しに自分が此処にいるのか忘れさった返答をした。

「え、でも……あの」

「いや……そうだった」

そこで漸く自分の用件を思い出したのか川上は本を閉じ、ついでに短くなったタバコを携帯灰皿に入れる。

「すまない、それであの魔法使いはまだいるだろうか」

「はい、パチュリー様と一緒にいます」

「そこまで案内してくれるか？ 戻って来たはいいが迷ってしまった」

「はい、そういう事でしたら」

川上の頼みを小悪魔は柔らかく微笑んで了承した。その曇りのない笑顔は人を魅了するという事で言うなればまさしく悪魔的と言えるだろう。

対する川上は人を何とも言えない気分にしそうな暗い座った眼とやる気の見られない顔で宜しく頼む、と返した。

「ではこちらです」

そして小悪魔が先導する形で二人は歩きだした。

「それでレミリアお嬢様にお会いしてどうでしたか？」

歩きながら小悪魔は川上に話し掛けた。彼がレミリアのもとに行っていたのを知っているらしい。パチュリーに聞いたのか。

「食事をご馳走になったな。後ここで働かないかと誘われたので世話になる事になった」

「え、レミリアお嬢様が貴方を！」

川上の言葉に小悪魔は驚きを見せた。レミリアが人間である川上を館の使用人に雇ったというのが余程意外だったのか。

「ああ、つまり俺は君にとって使用人の後輩と言う事になるのか、未熟者だが宜しく頼む」

川上は同じ職場の先輩という事になるだろう小悪魔にそう形式的に挨拶した。小悪魔もとりあえず驚きを収めて返事を返す。

「ええ、もし何か困った事があつたら何でも言つて下さいね。お助けしますから」

そう例によつてふんわりと微笑みながら柔らかくさういう。人間に取つてこの館で働くというのは不安もあるはずだと気を使ったのかも知れない。

しかし川上はやはり何処か気だるげな顔でありがとう、と形式的な礼を返したただけだった。小悪魔の笑顔が僅かに引きつった。

とりあえず小悪魔は気を取り直して案内を続け、先程の魔理沙とパチュリーのいるテーブルがある空間まで程なくして着いた。

「よー、やっと戻つて来たか、レミリアの所行つてたんだった？」

本を読んでいたらしい魔理沙は近いてくる二人に顔をあげ川上を認めるとその声をあげた。

「ああ、少し話してたり食事をしていたりした」

「あいつ、人間の食べられるものちゃんと出したのか？ まあいいや、私はもう帰りたいんだぜ」

「それなら一人で帰ってくれていい。俺はここで世話になる事になった」

その川上の言葉にちょうど椅子から立ち上がりかけていた魔理沙はずっこけた。

「あいてて……ここで世話になる!？」

「働かないかと誘われて、住み込み可だというからな」

「また、レミリアは思い切った事を考えるもんだぜ」

やはり人間である川上をレミリアがスカウトするとは魔理沙も意外だったのか、こ

の館も人手不足なのかね、等と呟いていた。

「俺の服を君の家に置いてきてしまったが……」

「あー、いい、いい、そういう事ならどうせここにはまたくるから服は洗濯終わった
ら今度くるとき持っていくぜ」

「そうか、この借りた和服もその時返す」

「ああ、わかったぜ。じゃあ私は帰るぜ、死なない程度に頑張れよ。またな。パチユ
リー」

「世話になった、ありがとう」

礼をいう川上に魔理沙は気にするなどひらひらと手を振り図書館を後にした。

そのまま川上は遠ざかる魔理沙に小さく「またね……」と声を出していた。パチユ
リーに向き直る。

「ここで働く事になった。宜しく頼む」

「ええ、分かったわ」

挨拶は僅か八秒で済んだ。

そのまま川上は魔理沙の座っていた椅子に腰をかけると長く息をついた――

第17話

——紅魔館、地下図書館

川上は椅子に座り一息ついた所でパチュリーに聞いた。

「この館の間取り図とかはないのか？」

「……あるわよ」

「くれないか、広すぎて困っている」

「咲夜が持つてるから咲夜に聞くといいわ」

「なら、呼んでくれるか？」

それでパチュリーはため息を付きながら本を閉じ小悪魔を呼んだ。

「お呼びですかパチュリー様」

「咲夜にこの館の間取り図貰ってきて。この男が迷ってしまうそうなの」

パチュリーの物言いは少々辛辣だったが川上は何処吹く風だ。

「分かりました。少々お待ち下さいね」

小悪魔はそう言つて図書館を出ていった咲夜を探しにいったのだろう。

川上は去つていく小悪魔の背中にぼんやりと眼を向けていた。眼こそ向けていたがあるいは彼は何も見ていなかったのかも知れないが。

「いい司書だな」

川上は本心の読めない声色でそう言った。

その言葉に本を再び開こうとしていたパチュリーは川上にジトリとした眼を向ける。

「……あげないわよ」

「それは残念」

パチュリー言葉に川上はどこかどうでもよさそうにそう返しつつテーブルの上の本を取り開いた。

そんな川上の反応にパチュリーも自分の本に目を戻した。その内容を頭に入れてつ小悪魔がいてくれた飲みかけの紅茶のカップに手を伸ばす。

しかしその手はカップも何も掴まなかった。

パチュリーは疑問に思いテーブルに目を向けると自分の紅茶のカップがいつの間にか無い。ふと何気なく向かい側を見ると川上が本を読みつつパチュリーの紅茶を飲んでいた。

一瞬パチュリーは魔法を行使して目の前の男を吹っ飛ばそうかと思つたが馬鹿馬鹿しいので止めた。何とも自分のリズムを崩さない変な男だがここまでくると逆にある意味ではパチュリーに取つても付き合ひやすかつた。案外近くにいるも不快さを感じさせない、どちらかという一人を好むパチュリーにとっては珍しい印象の人間ではあつた。

まあいいわ、そう小さく呟きながらパチュリーは本に目を戻した。

……そうして川上がパチュリーと二人で本を読み耽る事15分。

「見取り図貰って来ましたよー」

小悪魔が戻ってきた。しかしその言葉に川上は顔を上げない。

対してパチュリーはお茶をちょうだい、等と全く無関係な事を小悪魔に訴えていた。

「はい、お茶ですね。ちよつと待つて下さい、川上さーん」

「ん？」

そこまで呼び掛けられてやつと川上は顔を上げた。一度何かに集中するとそれのめり込むタイプなのだろうか、あるいはわざと呼び掛けに気付かない振りをしていたのかも知れない。はたから見ていたパチュリーは根拠もなく何故かそんな事を思った。

「咲夜さんから見取り図貰って来ましたよ」

「ああ、ありがとう」

「もう迷わないようにして下さいね」

川上の礼に小悪魔はそう冗談混じりに返す。

「大丈夫だ、多分」

それに対して川上はちつとも大丈夫じゃなさそうな返答を返した。

そしてとりあえず渡された見取り図に目を通した。階層別に間取りが書き込まれこれならある程度構造は把握出来そうだった。

「本当に広いな」

そう館の構造をみて川上はそう感想を漏らす。実際に歩いてみた感覚とこの間取り図とを合わせると館の端から端まで行くのにはたしてどれくらいかかるか。住居としてこの広さはむしろ不便ではないのか、川上はそう考えた。

「はい、更に時折咲夜さんが空間を広げたりする事もありますからいつの間にか

もつと広くなつてたりします」

「……そうか」

広くすれば管理する範囲が広がりメイドの仕事も増えるだろうに。あのメイド長は意外と馬鹿なのかも知れない、川上はそんな失礼な事を思った。

もつとも川上も館の仕事を任される以上無関係ではないのだが。

「貴方の仕事はなんなの？」

ふと川上にパチユリーが疑問を述べた。

「多分その時その時言われた事を何かやるだけだろう」

そして川上本人も自分が何をやるのか良くわかっていないようだった。もしかしたら自分の事なのにどうでもいいのかも知れない。

「いい加減ね」

「それはお嬢様に言ってくれ」

パチュリーの言葉に川上は皮肉じみた返事をした、その口調には他意は感じられなかったが。

川上はパチュリーから奪った紅茶を飲み干すと野太刀を手に立ち上がり歩き出した。その川上に小悪魔が問いかける。

「これからどうするんですか？」

「間取り図と合わせて実際に歩いてみて中の構造を確認する」

「そうですか、いつてらっしゃいませ」

そう小悪魔に送り出されて見取り図を確認しながら川上は図書館を後にした。

——レミリア・スカーレット私室

「何故あの男を雇い入れたのですか」

銀髪が特長的なメイド、十六夜咲夜はそう自らの主に問い掛けた。もつともその問いに実りのある答えが帰ってくる事は期待していなかった。

「まあ、言った通り丁度人手が欲しかった所だしね、それに……」

それに紅魔館の当主である吸血鬼、レミリア・スカーレットは答える。

「面白い運命が見えたから」

そうレミリアは言った。彼女は自身の運命を操る能力ゆえに人の歩む運命をある程度視る事も出来たのだ。

「……一体何が見えたのですか？」

咲夜はそう問う。我が主が興味をもったあの男の運命とは、一体どれほどの奇特な運命があつたのを待ち受けているのか、そう気になった。

「いいえ、何も見えなかつたわ」

しかし帰つてきた言葉は予想外なものだつた。

「何も?」

「そう、過去も未来の運命も真つ白。何も無い、まるで死人みたいだね」

「しかしあれはただの人間ですよ?」

そう咲夜は言う、あれは多少武芸に秀でていてもあくまでも正真正銘の人間のはずだ。無論死人ではなく生きた、なのに視える運命がないとはどういう事か。

「もしかしたら、そうね……」

レミリアは何となく思った事を言う。

「あの男は本人の意識的には既に死んでいるのかもね」

それはどういう事なのか。

「まさか」

「ほんと、まさかねえ。でも何にせよあの子面白そうじゃない？」

そうレミリアは心底面白そうな笑みを浮かべながら言う。

「しばらくはまた暇潰しになりそうね……」

そう退屈を何より嫌う吸血鬼は楽しそうに言った――

第18話

——紅魔館廊下

そこで川上は歩いていった。時折先ほど入手した間取り図に目を落とし現所在地を確認しながら、館の構造を頭に叩きこんでいく。

その後川上は有事の際の最適な動き方、最短で館から脱出するルート等を検討するつもりだった。

とりあえず今は歩きながらの確認段階。そして間取り図を確認しつつ歩く川上の肩には何故か一人のメイド妖精が乗っていた。

幼く小さな体躯をメイド服に包み黒髪をセミロングにした妖精は満足げに川上の肩の上を占拠していた。

……この館には相当数の妖精がメイドとして雇われているらしく館を歩く川上は何人もの妖精メイドと廊下で遭遇した。そして妖精達の反応も様々なものだった。

特にどうでもいいのか川上を一瞥すらせずれ違う者、見慣れない人間である川上に疑問を顔に浮かべるが結局何もせず去っていった者、好奇心旺盛に川上に話しかけて

くる者、川上を見て驚いた顔を見ると何故か踵を返して逃げていったもの、そして何故か間取り図を確認している川上をみてその体に登り肩の上に居座った変り者、居心地が良かったのか中々降りる気配がないが大して重みも感じず動くのにさして支障は無かったので川上は特に何も言わず確認作業を続けた。

ちなみにその後になれ違うメイドは同僚であるメイドを肩に乗せた謎の男川上を目撃するたび、何事かと驚愕していた。

そして川上は未だメイドを乗せたまま二階のフロアを探索していた。間取り図によるとこちら辺の部屋は雇われのメイド妖精達が使っている所か、川上に割り当てられた部屋もこの階層の隅の方にある。

その時になって川上の肩に乗っていたメイドはびよんと川上から降り着地した。いい加減飽きたのだろうか？。

「またねー」

そう川上に言ってその変り者のメイドはパタパタと廊下を走り去っていった。それを川上は一瞥すらしなかった。

心持ち肩が軽くなった川上は探索を続ける。そろそろ三階を見てみようか、そう思いつきながら歩を進めかけ……足を止めた。

……空気が変わった、一瞬ピリツと空気が張り詰めた。この先に何かがある、川上は持ち前の高い危機管理能力故にそれを理解した。

もつとも経験から来るただの直感みたいなものだ。何故そう思ったかと言われても明確には説明出来ない、理屈ではなかった。

今川上がいる廊下の先は突き当たりで道が左右に続いているT字路だった。この張り詰めた空気を生み出している存在はあの曲がり角の向こうだろうか？。

ならば話しは簡単だ。引き返して別の道を行けばいいだけの話だ。それでこの先に危機が有っても簡単に回避できる。

……しかし、川上は引き返す素振りすら見せず曲がり角へと向かっていった。まさか彼はどんな危機であろうとも問題はないとでも言うつもりだろうか？。

いや、彼はこの選択であるいは自分が呆気なく死ぬかも知れない事を理解していた。もつともさつきから川上を襲う危機感の正体は何だかは解らないが。

ならば何故彼はわざわざ危険に飛び込むような真似をするのか？彼が何を思うのか、その気だるげな表情からは伺いしれない。

そして川上は曲がり角まで来ると左の廊下に目を向けた。

そしてそこに居た、この空気を生み出す張本人が。

その幼い少女は川上からみて後ろ姿だった。しかしその少女が綺麗な金糸の髪を持ち、レミアアのかぶっているものと同タイプの帽子をかぶっているのは確認出来た。

そして何より、特徴的なのは背中の羽、骨格そのもののような骨状のものが左右から二本生え、その骨格に七色の輝く宝石のようなものが無数にぶら下がっているという異形そのものの羽。

それはおおよそ羽としては人間が想像も出来ないような歪なものであり——そして美しかった。

「あれ？」

川上の視線に気付いたのか彼女も振り向き川上を見る。

彼女は全体的に深紅の服装だった。半袖にミニスカートか、そして外見的には10才にも満たない幼い少女そのものの無垢で愛らしい顔をした彼女のその眼は深い紅色をしていた。

同時に身に纏う空気がただ事じゃない事も川上は理解していた。これがメイド長

の言っていたレミリアの妹、フランドール・スカレットか、川上はそう思った。

「貴方はだあれ？」

「貴女が妹様か。俺は今日からこの館に使用人として雇われた川上という。よろしく願います」

川上はそう咲夜に言われていた通り挨拶をこなす。

「新しい使用人？　でも貴方人間よね？」

「人間だ」

「ふうん、珍しいね。人間がここで働くなんて」

そう、いいながらフランは川上に興味を持ったのか歩み寄ってくる。

「てことはそんなに簡単に壊れないのかな？」

そう言った次の瞬間川上とフランの間の5メートルの距離はゼロとなり、数瞬前まで川上の顔面があった空間をフランの抜き手が貫いていた。そしてフランの手を掻い

潜りながら抜刀した川上の刀がフランの胸に食い込んでいた。

「ッッー！」

次の瞬間フランが顔を歪めた、胸に食い込んだ刀を川上は引いてフラン胸筋をバツサリと裁断したのだ。優しい斬撃であり、肋骨や胸骨を断ち切り胸腔にまで及ぶような致命的で強力な斬撃では無かったが、かなりの深手だ。

川上は刀を返して今度を首筋に斬撃を落とそうとして、フランはそれに反撃を……行えない事を悟り、爆発的な脚力で一気に10メートルも距離を開ける。目の前から獲物が居なくなつたので川上は放つた斬撃を途中で止めた。

「あははは、貴方凄いな。咲夜や魔理沙と同じだ簡単に壊れないんだねー！」

フランは何処か嬉しそうにそう言った。その両腕は力無く垂れている。左右の胸筋が断たれた事でそれに連動する両腕もロクに動かせなくなっていた。故に反撃も行えなかつたのだ。

もつとも吸血鬼の再生力なら治癒もすぐだが。現に出血はすでない。

「それは違う」

川上は、言った。

「人間は君とは違い簡単に呆気なく壊れる。それこそ俺等は運が悪ければ廊下を歩いて転んだだけでも死ぬ事だってある」

川上は、本心からそう思ってるようだった。

「でも、貴方は壊れてないじゃない」

「結果論だ。例えば君の最初の攻撃を受けていたら俺は脳味噌を撒き散らして死んでただけだ。こうして生きているのはたまたまでしかない」

「ふーん、でも、そのたまたまがいつまでも続けば貴方は壊れないって事ね！」

フランは笑ってそういう妖力を形にして弾幕を展開した。

「そんな都合のいい話はないけどな」

川上は形成される妖力弾をみて疲れたように言った。

そして、フランの展開した弾幕が川上に殺到した――

ドゴゴゴゴオオオーンツ!!

「つて、何事ですか!？」

レミリア・スカーレットの私室、そこでレミリアと共にいた十六夜咲夜は突然館を震わせた轟音に声を上げる。

「んー、これはフランかしら。あの男にじやれついたのでかもね」

が。

レミリアはそう予測する。明らかにじやれついたというレベルの音ではなかった

「あの、それでしたら多分彼は死んだのでは？」

咲夜が至極真つ当な意見をする。

「多分生きてるんじゃないかしら。あの子簡単には死ななそうだし」

何となくだけど、とレミリアは付け加える。

「それならいいのですが……廊下でミンチになっていたら清掃が大変ですので
そう咲夜もピントのずれた事を言う。」

「ま、気になるんだったら確認して来てみるといいんじゃないかしら？」

「……そうですね、一応確認して来ます」

そう言つて咲夜は姿を消した。川上の安否確認に赴いたのだろう。

「……さて、早速一騒動起こしたようね」

そうレミリアは満足げに笑っていた――

第19話

紅魔館三階——

大体三階の探索も終えた川上はそもそも間取りの確認もいいかと思いはじめた。飽きてきたとも言える。

手に持っていた間取り図に懐に納め踵を返した。

その時唐突に川上の後ろにメイド長、十六夜咲夜が現れた。川上は僅かに刀の鯉口を切り少し振り向き咲夜を感情の読めない眼で見据える。

「生きていたのね」

咲夜は川上を確認するなりそういった。

「死んでいたほうが良かったのだろうか？」

川上はそう皮肉ともつかない言葉を返す。

「いえ……先程凄い物音がしたから、妹様に殺されたのかと思って」

「……ああ、あれか」

咲夜の言葉に川上は今思いついたように呟いた。

「言われた通り挨拶したのだが死ぬかと思った。あれにはもう少し言葉というコミュニケーション法を教えたほうがいいかもな」

川上は殺されかけたとは思えぬ程なんでもよさそうに言った。

「そうね……そのコミュニケーション法は妹様に貴方が教えてくれると助かるのだけれど」

「善処する」

丸投げする咲夜に川上はやる気があるのがないのかわからない返事をした。

そして川上はそのまま歩き出した。何気ない動作でタバコを取出しながら。

「これからどうするの？」

その川上に咲夜は問う。

「特にやる事もなくなったので適当に寛がせてもらおう」

「そう、夕食の時間になったら呼ぶからそれまで適当にやってて」

「わかった」

そうお互いに会話を切り上げると咲夜は時間停止を利用し移動したのかその場から消える。それを見届ける事もなく川上もタバコに火を付けつつ歩き出した。

暇潰しにまた図書館にでも行こうかと考えながら。

それより少しさかのぼり紅魔館二階廊下――

川上に弾幕を展開したフランドール・スカーレットは面白がつてるような笑みを浮かべつつその場にいた。

半ば本気で川上を壊すつもりで放った弾幕、しかしそこには弾幕により床の抜けた廊下しか残っていなかった。

無論川上が跡形もなく消し飛んだ訳ではない。彼は自らに放たれた妖力弾を全て掻い潜り、そしてその弾幕によつて抜けた廊下から粉塵に紛れてとつと下の階に離脱して難を逃れていた。

「やっぱり壊れなかった」

フランドールは心底楽しそうにそう呟いた。

「それに私に傷を付けた人間は本当に久しぶりね」

フランドールは川上の刀で切り裂かれた自分の胸元を見る。もう斬られた胸の肉は傷痕一つなく再生していたが薄い生地 of 服は切り裂かれたままだった。切れ目からフランドールの雪のように白い肌をした薄い胸が見える。

「今度会つたらまた一緒遊ぼうかな」

フランドールは直感的に思った。川上は自分にとって面白い人間だと。また遊べる事を楽しみにしていた。

とりあえず斬れてしまった服を着替える為にフランドールは部屋に戻る事にした。その足取りは軽かった。

なお、この時破壊された廊下の床の修繕の為咲夜を初めとしたメイド達の仕事が増える事になるのだがそれはまた別の話だ。

紅魔館地下図書館——

間取りの確認も終えやる事がなくなつた川上はここに舞い戻ってきた。

そしてその肩にはまた先程のメイド妖精が乗っていた。川上の肩はそのメイドにとって体の良い休憩用ベンチ代わりなのか？例によって川上は勝手に自分の肩を占領するメイド妖精に何も突っ込まない。

いい加減館の構造も把握した川上は迷わずパチュリーのいるテーブルまで歩いてたどり着いた。

「また来たのね」

「ああ」

本を読んでいたパチュリーは視線だけで川上を確認するとそう言った。それに川上もぞんざいな返答を返す。

パチュリーは何故か肩に乗っているメイドに関してスルーしたようだ。

川上は自分の肩に乗るメイド妖精を脇に手を入れ下ろし席に座らせた。そして自分も背の野太刀を外し隣の席に着く。

「お茶」

「………何？」

「お茶をくれ」

やや図々しく紅茶を所望する川上にパチュリーは特に何も言わず小悪魔を呼ぶ。呼ばれるとすぐに小悪魔はその場に現れた。

「あれ？川上さん、館の探索の方はもういいのですか？」

小悪魔は戻ってきていた川上にそう言う。

「大体の構造は把握した。だからとりあえずもうやる事がない、お茶をくれるか？」

「そうですか、お疲れさまです。お茶今お煎れしますね」

柔らかい笑顔で素晴らしい小悪魔はお茶の準備に取り掛かった。なんとも人を癒すような雰囲気だった。仮にも「悪魔」と名が付いているのにどうなのだろう、川上はぼんやりとそんな事を思った。

そしてお茶の準備の為に一旦立ち去る小悪魔の背中によつて気だるげな眼を向ける川上のその眼を。パチュリーは目ざとく見咎めた。

「……貴方、その眼何を見ているの？」

「何つて、まあ色々見てるな」

パチュリーの要領の得ない問いに川上も無難な答えを返す。

「もしかして貴方の眼、魔眼の類？」

パチュリーには川上の眼が見えざるものを見ているように感じられたのかも知れない、魔女としての感だろうか？

「魔眼とは？」

「簡単に言えば眼を合わせた相手に簡単な術をかけたりのよ。ただ、貴方の

場合何が人と違うものを見ているような感じがしたからそれとはまた違うけど」

「ふうん、まあ眼を合わせただけで相手をどうこう出来るなんて眼は少なくとも俺にはないな」

川上はやはり感情の読めない声色でパチュリーの問いに言葉を返す。

「でも、貴方の眼は人と違うものを視ているんじゃない？」

「さあね、そもそも自分が見ているものが本当に他人が見ているものと同じものなのか違うものなのか、なんて誰にもわからないだろうからな」

川上はそう煙に撒くような事を言った。

「まあ、それもそうなのかもね」

パチュリーはそれ以上の言及は諦め本に眼を落とした。

「お待たせしました」

戻ってきた小悪魔がポットから暖めておいたカップに紅茶を静かにそそぎ川上と何故かいるメイド妖精にも律儀に配った。

「ありがとう」

「ありがとう」

そう川上とメイドを同時に礼をいいメイドは紅茶に口をつけ川上はテーブルの上の本を適当に手に取る。煎れたての紅茶は川上には熱すぎる為冷めるのを待つつもりだった。

「また何かありましたらお呼び下さい」

小悪魔はそう言い残してまた去っていった。川上は手に取った本に眼を通すがそ

の本はまた奇妙な言語で書かれ読めたものじゃなかった。
しかし、川上は読めない本に眼を通してながらパチユリーに問う。

「今何時くらいだ？」

「16時過ぎね」

「そうか……早いな」

川上はぼんやりとそういう。

「夕食の時間は？」

「19時前後よ」

「ふうん」

まだ時間があるな、川上はそう思いながら紅茶に手を伸ばした。一口に含むがまだ紅茶は熱く口の中を焼きそうになり川上は顔にしかめた――

第20話

——紅魔館地下図書館

あれから川上はずっと紅茶を片手に本に目を通していた。共にいるパチュリーも特に川上と言葉を交わす事もなく自分の世界に没頭している。すなわち本に夢中なようだ。

なお、川上の肩に乗ってここに来たメイド妖精は椅子に座ったまま寝ていた。

「お茶のおかわりは如何ですか？」

自分の仕事が一段落付いたのか様子を見にやってきた小悪魔が川上とパチュリーのカップが既に空になっているのをみてそう言った。

「貰うよ」

「ちょうだい」

パチュリーと川上は共にそう答えた。それに応じて小悪魔はポットに紅茶の用意をして川上とパチュリーのカップに静かに注ぐ。

「どうぞ、熱いので気を付けて下さいね」

「ありがとう」

「ありがとう」

やはりパチュリーと川上は同時に礼を言いゆつくりとカップに口を付けたが川上は熱さに顔をしかめた、彼は猫舌なのかも知れない。

「何を読んでらしたんですか？」

一冊の本を読み耽る様子の川上を見て、小悪魔は柔らかく微笑みながら川上に話題を振る。川上はちらりと小悪魔に無感情な瞳を向けると自分が読んでいた本を彼女に見せた。

その本は小悪魔から見ても解読不能の言語で綴られていた。魔法に精通するパチュリーなら読めるものなのかも知れないが少なくとも専門的な知識のない小悪魔には何語かもすらわからなかった。

「川上さんはこれが読めるんですか？」

小悪魔はそう驚いて聞いた。彼にはこの不可解な言語を解読する技能があつたのかと。

「そんな訳がないだろう、こんな文字さっぱり訳がわからない」

……そういう訳ではなかったようだ。しかし読めないと言うのなら何故彼はその本を読んでいるのか？

「読めないんですか？ でも読んでいらしたように見えましたけど」

「まあ、読めないからって読んではいけない決まりはないし、まあ気分的なモノだな」

小悪魔の当然の疑問にそう何でもない事のように答える川上。つまり彼は読めもない本を読むポーズをとると言う無意味な行為を長々とやっていた事になる。

…：一体彼は何がしたいのか。

「そ、そうですか」

やや引きつり気味の笑顔でそういう小悪魔、小さくパチュリーが「変な男」と呟くのが聞こえたが川上は反応せず再び読めもしない本を読むポーズをする作業に戻った。

小悪魔は訳のわからない行為をする川上に苦笑いを浮かべつつ川上の隣の席で寝ているメイド妖精の頬にかかる髪をそつと梳いた。そして時計を見て時刻を確認する。

「そろそろ夕食の時間ですからもう少ししたら食堂の方に行きましょう」

「そうね」

「分かった」

小悪魔の言葉にパチュリーと川上は本に目を通しながら答える。少し冷めて飲みやすくなった紅茶を川上は口にした。

——そしてそれから20分後。

川上、小悪魔、パチュリーの三人組は廊下を歩いていた。食事の時間なので食堂に向かう所であった。

ちなみにこの館では大体皆して食事を取るらしい、家族みたいなものなのだろうか。川上は思った。もつともメイド妖精は数が多過ぎる事もあり各々適当に食事を取っているのだが。

ちなみに川上の肩に乗っていた妖精メイドはまた寝ていたので図書館に置いてきていた。

そして無駄に広い廊下をしばらく歩き食堂に三人で入ると給仕の咲夜以外の者は既に席に着いていた。美鈴も毒はもう抜けたのかちゃんといた。

入ってきたパチュリー達三人に対して皆の目が向けられる。いや、やはりその視線は川上に向けられた物が主であった。

レミアは川上にやはりどこか面白がってるような目を向け。

フランは自分に一太刀浴びせた川上に爛々と輝かせた目を向け。

美鈴は門での一戦で雪辱を舐めさせられた事が尾を引いているのかやや鋭い目を

川上に向けていた。

しかし川上は自らに向けられるそれらの視線を涼しげに受け流して例によって刀を立て掛けつつ食堂の席に着いた。ちなみにフランの向かい側の席であった。何故あえてそこに座ったのか、恐らくは理由なく適当に選んだだけだろうが。

フランは向かいにいる川上に真つ直ぐに輝く瞳を向ける。その視線は真つ直ぐでありながら同時に好奇心や殺意や欲望や欲情、親愛、嫉妬、執着、様々な感情を万華鏡のごとく入り交じったように感じさせる淀んだ視線だった。

小悪魔とパチュリーも各々席に着いた所でレミアアが口を開く。

「改めてここで紹介しておくわ。今日からこの館で使用人として雇った川上よ。少し変わった人間だけど皆適当に仲良くしてあげなさい」

「使用人として働く事となった川上だ。出来る事は大してないが出来る限りでやっていくので皆、適当に宜しく頼む」

レミアアからの紹介を受けて川上も何処かぞんざいな挨拶をする。それに小悪魔が宜しく願いますと返しフランもどこか楽しげによろしく等と言っている。

なおパチュリーは持ってきていた本に目を通していた川上の挨拶等聞いていなく

美鈴は川上の挨拶を聞いているのかいないのか瞑想しているかの如く静かに目を閉じていた。

「食事の用意が整いました」

唐突に現れた咲夜がそう言った時には言葉通り皆の席の前には既に料理の皿が並んでいた。例によつて時間停止の応用だろう。

そして咲夜も席につく。聞いていたように使用人と言えどもご飯は一緒に食べるようだ。もつとも川上自身も一応使用人であり既に席に着いていたが。

「じゃあ、とりあえず挨拶はこれでいいとしてご飯にしましょうか、頂きます」

「頂きます」

吸血鬼や妖怪の癖にやたら行儀よく皆で頂きますしての食事は始まった。

第21話

——紅魔館食堂

川上も含めた紅魔館メンバーは夕食を取っていた。

「今回は人肉ではないんだな」

ふと川上はそう言う。

「まあそんないつもいつも人肉ばかり食べてる訳じゃないわよ、飽きるしね」
そうレミリアはワインを一口含みつつ川上に返す。

「でもこの肉はなんだ？ 人ではないが牛とかでもないな」

「それは子羊よ」

川上の疑問に咲夜が答える。

「ふーん、これが子羊ね、結構旨いのだな」

「私は人間のお肉好きだよ！ 美味しいもん！」

「確かにアレは旨いものだったな。俺も味で言ったらどちらかといえはこの子羊よりか人間の方が好みかな」

「だよねー人間は血も美味しいけどお肉も美味しいよねー」

「どうやら人肉派のフランの言葉に川上も同調する。」

「というか貴方人間の癖に人を食べるのね」

「少しずつ食事を食べ進めながらパチュリーがそう突っ込む。小悪魔も人が食べると聞きやや驚いた様子だ。」

「いやお嬢様が昼食に出してくれた時に初めて食べたんだが」
皆の視線が主のレミリアに向けられレミリアは若干気まずげに目を反らす。

「まあ、ちよつとした歓迎よ」

レミリアはそう言ったがただの嫌がらせめいたいたずらだと皆解釈していた。

「人を食べる人間って久しぶりに見るわね。傍若無人な靈夢達も何故か人間だけは口にしようとしなしいし」

パチュリーはそういうが、彼女の言う久しぶりは果たして何十年ぶりくらいなのか？

「そうですね。咲夜さんも普段も食べませんし、人間は人を何故か食べたくないみたいです。凄く美味しいのに不思議ですね」

そして会話に加わった美鈴は自身が生粋の妖怪の為食料として人間を食べるのは生きる上で当たり前の事だ。それゆえ彼女は人間が人間を食べるといふ事への嫌悪感を理解出来ないのだ。

「そうだな、あれだけ美味しいのだから食わず嫌いはもつたいたないと俺も思う」
だがその嫌悪感を理解出来ないのは何も妖怪だけとは限らないらしい、川上はそう言つてのけた。

「本当に美味しいのにねえ。確かに鳥や牛のお肉も美味しいけどやっぱり人間が一番美味しいと思うのよ。咲夜もその味はわからないかしら」

「いえ……確かに味は美味しいのかも知れませんが共食いになつてしましますので。お嬢様も同族のお肉は食べたくはないのでは」

「そう言われてみればそうかも知れないわねえ」

レミリアは咲夜にそう言われてなるほどそういうものかも知れないと思った。人間等の知性ある生き物は共食いを避ける為嫌悪感を覚えるのかも知れないと。

なら、嫌悪感のけの字も見せないこの男は何なのかとレミリアは川上を見る。川上はレミリアの視線に気付いているのかいないのかぼんやりとスプーンに口を付けている。そして向かいのフランが川上の皿に残った肉の最後の一切れを物欲しそうに見ているのに気付いてフォークで刺してフランに食べさせていた。なんとも自由な振る舞いの川上を見て要は何処か壊れているのだろう、そうレミリアは解釈した。

「フフ、まあまともじゃ面白いしね」

「? 何、レミィ」

「いいえ、何でもないわ」

独り言に聞き返すパチュリィにそう返しながらレミリアはグラスの血のワインを一口飲んだ、今日は何だかいつもより美味しい気がした。

メインデッシュも一切れフランにあげながらも綺麗に食べスープも飲み干し誰よりも早く食事を終えた川上は席を立った。

「デザートがあるわよ。出しましょうか？」

咲夜はそう川上を呼び止めた。彼女自身も食事中だが場合によっては給仕も務める。少々行儀が悪いが仕方ない。それに彼女の能力なら見かけ上は体裁を保てるから問題はないと言えばない。

「……デザートはなんだ？」

少し考えて川上はそう聞いた。

「バニラアイスよ」

「では遠慮しておく。俺の分は妹様でも食べてくれていい」

「え、食べていいの？」

「ああ、構わない」

「やった、ありがとう！」

フランは甘い物が好きなのか川上の言葉に嬉しそうにしていた。

「では失礼させてもらう。ごちそうさま」

川上はそう言い残して食堂を一人出ていった。

「何と言うか緊張感のない方ですね」

気負った様子もなく奔放な振る舞いの川上に咲夜はそう感想を漏らす。

「でもあのくらいじゃなきゃここではやっていけないわよ。丁度いい人材じゃない」

「確かにそうかも知れませんね。何だかあの人には変わった安心感みたいなのを感じます」

レミリアの言葉にそれまで静かに食事をしていた小悪魔が川上の印象を述べた。

「……それでもあれはただの人間には変わりないわよ。あまり無茶はさせない事ね」

パチュリーがそう一言忠告する。

「……どうですかね」

それに対し川上と直接対峙した美鈴が含みを持った言葉を漏らす。

「美鈴？」

「あの男、かなり出来ますよ。人間とは思えないレベルでした」

対峙した美鈴は川上の力量をある程度測れたらしいが、美鈴にとって少なくとも今まで相手取ったどの人間とも比べものにならない脅威だった。

「私も川上は弱くないと思うよ」

少しじゃれついたフランも川上が並ではないと理解していた。

「ふーん、ただの武術使いの人間も結構やるものね」

レミリアは感心したような面白がってるようなニュアンスでそう言った。
「わかってて此処に誘ったのでしょう？」

「フフ、私だってなんでもわかる訳じゃないわよ」

パチュリーにそう言いながらレミリアは血のワインを飲み干した。

「咲夜」

「なんですかお嬢様？」

「アイス」

——紅魔館庭園

川上は食堂を出てそのまままで出てきた。ちなみにデザートを遠慮したのは彼が甘いものが苦手な上冷たいものが嫌いだったからだ。

川上は懐からゴールデンバットを取り出すと火を点けた。ゆつくりと吸い込みふう、と紫煙を吐く。

ゆつくりと風味を楽しみながら空に浮かぶ月を彼は見上げた。空には青白に光を放つ月が綺麗に三日月を描いている。

それを見上げる川上の無感動な瞳からは何を思っているかは読み取れなかった。

第22話

——紅魔館川上私室

川上はノックの音で意識を浮上させた。

「朝よ、起きなさい」

ドアの向こうから咲夜の声、どうやら起こしにきたらしい。

「今、起きた」

「そう、ならそろそろ朝食だから食堂までいらつしやい」

そういう残しドアの向こうから気配が消えた。移動したのだろう。

川上はベッドから身を起こすと濁った目でベッドサイドからタバコを取り一本くわえて火を点けた。

ゆつくりとニコチンを馴染ませながら側に置いておいた刀を手に取りおもむろに抜き放つ。

青白い光を放つ透き通った刃をしばらく眺め川上は刃を鞘に納めた。今の行為に

はなんの意味があつたのか朝の装備の点検なのかあるいはただの鑑賞なのか。

川上が紅魔館に来てから1日が立っていた。昨日は自由に休めと言われていたの
で川上は夕食後割と早く眠ってしまったのだが、今日からは仕事を割り振られる事になつてゐる。

言つてみればこれが川上にとつて勤務1日目なのだが本人は寝起きに気だるげな
目をしてタバコを吹かすばかりで特に緊張感等は見せない。どうやら彼はそういう感
情とはあまり縁がないらしい。

しばらくして短くなったタバコをもみ消すと彼は打刀一振りのみ腰に差した。野
太刀は部屋に置いたまま部屋を出て食堂に向かった。

そして昨日と同じように食堂に入るとパチュリーと小悪魔、美鈴のみが既に席に着
いていた。

「おはよう」

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

軽く挨拶を交わながら川上は席に着く。彼は館の主とその妹の不在に疑問を述べ
る事はしなかつた。どうでもよかつたのかも知れない。

ちなみにレミリアとフランの二人は日が昇る頃に眠りについたので朝食には不在だった。

川上が席に着くとすぐに咲夜の給仕により料理がテーブルに並ぶ。吸血鬼姉妹が朝食の席に出ないのは咲夜も了解の事らしい。

食事は卵に大豆らしき煮豆、ベーコンにソーセージ等、イングリッシュブレックファストとでもいうべきものだろうか。朝から豪勢ではある。

「頂きます」

川上を含め各々そう言いつつ朝食に口をつける。やはり味も悪くない、この館の食事は充実しているようだ。川上はそう思った。

味わうのもそこそこに川上はやはり誰よりも早く自分の食事を平らげると、今日はさっさと席を立たずふと考えるような素振りをみせた。

「メイド長」

唐突に川上は声をかけた。

「何かしら」

食事の手を休めて涼しげに咲夜は聞き返す。

「コーヒー」

川上は脈絡なくコーヒーを所望した。

「……砂糖とミルクは？」

「いらない」

そう川上が答えた瞬間には川上の前にコーヒーカップが湯気を上げていた。

「どうぞで」

「ありがとう」

川上はそう礼を言いながらカップに口を付け熱そうにしながら少しづつ飲む。彼は単に食後にコーヒーが欲しくなっただけらしい。

そして川上のつい昨日来たばかりの外来人とは思えぬ奔放な振る舞いにもはやなんとも思わなくなってきた紅魔館のメンバーだった。

「それと貴方は今日から仕事だけど」

咲夜は川上に話を切り出した。

「貴方はその時手を必要としてる所で働いてもらうけどとりあえず今日の所は私を手伝ってもらうわ。食事が終わったら玄関前ホールで待っていなさい」

「わかった」

川上は咲夜の言葉を受け残ったコーヒーを飲み干して席を立った。

「お先に失礼させてもらうございそうさま」

そういつて川上は食堂から出ていった。

「彼に何をさせるの？」

「適当に館の雑務等を」

パチュリーの疑問に咲夜も漠然とした答えを返す。

「勿論パチュリー様が手を必要としているなら彼を向かわせますが？」

「いえ、今日の所は特に用事もないわね。小悪魔で間に合っているわ。まあ必要が

あつたらその時は貸して貰うわ」

「御随意に」

食事を終えた咲夜は何となく普段は飲まないコーヒーを自分でいれ飲んでみた。

「珍しいわね」

「ええ、たまにはと思ひまして」

独特の香りと苦味のある液体を飲みながらやはり自分も主であるレミリアやパ

チュリーと同じように紅茶の方が好ましいと思つた。

——紅魔館玄関前ホール

川上は壁に寄りかかったまま喫煙していた。細く長い紫煙を吐く。

咲夜に言われた通りにホールで待機の体制に入つて10分程になる。彼は半分程

吸った紙巻きを携帯灰皿に入れるとそのタイミングを狙ったように咲夜が唐突に川上の少し前に出現した。しかし狙ったとしたらタバコを消す所を見計らって出現した咲夜か、それとも咲夜が出現するのを見越してタバコを消した川上か果たしてどちらだったのだろうか。

「貴方には使っていない部屋の掃除を頼むわ」

いきなり現れいきなり核心から入った。

「わかった部屋の掃除だな」

「館の西側の部屋、やれるだけやって頂戴。道具はここを出てすぐの倉庫にあるから、昼になったらまた呼ぶわ。質問は？」

「ない。初めていいか？」

「構わないわ。それではお願いするわね」

軍隊のような簡潔なやりとりだけして咲夜は去って行った。

川上も早速言われた仕事を初める為動き……ださずに懐からゴールデンバットを取出し火を点けた。

とりあえず仕事前に一服つける事にしたらしい川上は少ない窓をあけて外の空気に当たりながら紫煙を吐いた。

第23話

——川上は考えていた。

紅魔館、西側の一室。仕事としての上司に当たる咲夜の指示通りに部屋の掃除に当たる為に此処にいた。

なお彼は使用人用のものと思われる服装に着替えていた。黒の礼服のようなものだ。咲夜が忘れていたように戻ってきて川上に渡したものだ。刀はベルトに差しているが野太刀は背負っていない。館内では必要なものと判断したのか。

それまでは良かったがしかし彼はそこで行き詰まったのだ。

——掃除ってどうやればいいのかと。

川上は武芸を嗜んでいたがどうも家事炊事の類はからつきらしい、と言うかろくにやった事がなかったのだ。

ただ、要は汚れを落とし何となく部屋を綺麗にするという概要だけはわかっていて。倉庫から掃除道具一式と思われるものは持ってきていたし、バケツに水も汲んできた。

なら取り敢えずやってみるか、それとも詳しい掃除の仕方を誰かに指南してもらおう

べきか。

川上は部屋を出てみた。ちょうど廊下を通りかかった川上の腹当たりしか背丈のない幼い容貌のメイドらしき妖精に声をかけた。

「少しいいか？」

「どうしたのー？」

その妖精は物怖じしない性格なのか見慣れぬ男の川上にも平然と対応した。あるいは新しく働く使用人として耳に入っていたのか。

「掃除ってどうやるんだ？」

川上は端から聞けば間の抜けた質問をした。

「頑張って綺麗にすればいいんだよ」

しかし質問に対する答えもまた間の抜けたものだった。

「具体的には」

「拭いたり磨いたりだよ」

「わかった、ありがとう」

「おそうじ頑張ってー」

妖精の応援を背に川上は部屋に戻った。

「……」

川上は先程のメイド妖精とのやり取りに何を思ったのか、どうも眠たげな目からは伺いしれないが、彼は掃除用具に手を付けた。

取り敢えず咲夜に言われた通りに出来る限りで部屋の掃除を手探りでもやってみる事にしたのだ。

そして川上は適当に床を掃いてみたり、家具を拭いてみたり、窓を磨いてみたりした。殆どなんとなくこうすればいいんじゃないかといういい加減な勘に則った仕事ぶりだった。

だがそれでも成果は目に見えて表れる。手を加えるごとに掃除前よりも部屋が綺麗になるのがわかった。

ふむ、と川上は思う。

掃除等殆どやった事のない作業だがこうして確かに自分の手で部屋が美しくなるのは悪い気分ではなかった。それは刃を研ぎブレードを磨き、目に見えて切れ味が鋭くなりブレードが輝いていく刃物の手入れをしている時とも通じる所のある気分か。

そして不慣れながらもなるべく入念に掃除を終えると川上は部屋を改める。

素人の仕事だから清掃のプロ等とは比べられないだろうが、まあ悪くはないだろうか川上は思った。

この一部屋を終えるのに所要時間はどのくらいかかったろうか、集中していた為よくわからなかった。

だがまだ昼までに時間はある、この部屋はこれくらいでいいだろう。そう思い川上は次の部屋に取り掛かる事にした。

廊下に出た川上はまたメイド妖精と遭遇した。幼い体躯にセミロングの黒髪、無邪気を感じさせる大きな瞳。

それは昨日館内の確認をする川上の肩に何故か乗っていた妖精だった。偶然にもここで会うとは川上とは縁があるのか。

しかし川上はその妖精に一瞥もせずすれ違おうとした。単に覚えていないのかも知れなかった。

だがその川上の気を引こうと服の裾をメイド妖精は引つ張った。

流石に川上も足を止めてその妖精に向き直った。身長差の為自然と川上が妖精を

見下ろす形になる、何の感情のない眼。

対してその無機質な眼を真つ直ぐに見上げるメイド妖精の眼は無邪気な好奇心と喜びに光っていた。何が嬉しいのか、余程川上が気に入ったのか、特に川上がこの妖精に何かをした訳ではないのだが。

あるいは大した理由はないのかも知れない。

「きのうと違う格好」

口を開こうとはしない川上に妖精はそう話しかけた。

「仕事用だ」

「なんのお仕事？」

「今は部屋の掃除だ」

「私とおんなじ、あなたもメイド？」

「違う、そもそも男はメイドになれない、ただの雑用だ」

好奇心旺盛にズレた問いかけをする妖精に川上も言葉少なに答える。

「俺はまだ仕事があるからじゃあな」

川上は早々に会話を切り上げ仕事に戻ろうとした、与えられた役目はキッチンと果たす質なのだろうか。

その川上にメイド妖精は飛び付くように登った。あつという間に昨日の如く肩の上に納まる。大した運動能力だった。

川上はそのまま隣の部屋に入った。

「……降りてくれ」

そこで初めて川上はそう言った。

「んーん」

妖精はご満悦の笑顔で答えともつかない答えを返す。

「自分の仕事はいいのか？」

「だいじょうぶ、ちゃんとやってるから」

ちゃんとやってないのは誰が見ても明らかだった。

「とにかく降りてくれないか、このまま掃除をするのはキツイ」

川上は持つていた掃除用具を下ろしながら言った。

「んうー」

妖精は何やら不満げな声を上げながらも取り敢えず降りてくれた。それで特に何も言わずに川上は部屋の掃除に取り掛かろうとした。

妖精は自分の仕事に戻ろうとはせず、川上を見ていた。川上はその妖精に何も言わない、メイドがちゃんと働いていようがいまいが彼にはどうでもよかつたのだろう。

少なくとも今の川上の仕事はメイド妖精達の監督等ではない。

川上は自分に与えられた仕事、二部屋目の掃除に取り掛かった。

しかし部屋の床を拭き掃除する川上を妖精は何をするでも見ている。見ている面白いいものでもないだろうに。

「何もする事がないなら手伝ってくれないか」

川上はそう提案した。ただ無駄に凝視されるのは彼にとっても若干居心地が悪かった。このままでいるようならナイフでも投げつけて追い払おうと思い初めていた。

しかし妖精はにぼつと笑って手伝いを了承した。だったら初めからそうしてくれと思いつつも川上はメイド妖精と二人がかりで掃除をすすめる事となった。

第24話

— 紅魔館西側客間

川上はあれから一部屋一部屋なるべく丁寧に掃除を続けていた。

「でね、頑張つて一人で綺麗にしたんだけどそしたらメイド長が褒めてくれたんだよ」

「そうか」

そして例のメイド妖精も川上の手伝いの名目で共にいた。しかし彼女自身はどちらかと言うと川上との話に夢中で掃除ははかどっていない。

メイド妖精は川上に自分の体験した色々な事を話した。気が付いたら自分は存在して日々を過ごしていた事、ある日攻撃的な人間に捕まつて一度殺されてしまった事、しばらくの間人間が怖くて怯えていたらまたまた会つた咲夜が手を差し伸べてくれた事、それをきっかけに館でメイドをするようになった事、仲のいいメイド妖精の事、たまに小悪魔等館の者が一緒に遊んでくれる事。

彼女は掃除をする川上に様々な事を楽しそうに話した。

そして川上は掃除に集中しながら、ああとか、なるほどか、それは大変だなとか、ぞんざいな相づちを打つ事に徹していた。完全に聞き流している姿勢だったろう。

しかし妖精の方もそんな川上の様子には構わず申し訳程度に掃除をしながら話をしていく。

二人は互いが互いを全く鑑みていなかった、しかし川上は邪魔にはなっていないならどうでもよく妖精は楽しかった。互いに問題はないのだからある意味二人の相性は良かったのかも知れない。

川上は掃除の手を止めた。この部屋はもう出来る事は粗方やってしまっただろう。立ち上がり部屋を改める。悪くない仕上がりが、川上はそう思った。

「おわり?」

川上の様子にメイド妖精も手を止め聞いてくる。川上は肯首した。

「じゃあ次の部屋?」

「いや、小休止にしよう」

「しよーきゅーし?」

「一休みだ」

川上は掃除を初めてから集中的にこれまで続けていた。大した集中力だったが一

服する事にした。

川上は窓を開けて懐からタバコの箱を取出し一本くわえた。

「それなに？」

メイド妖精は川上のくわえたタバコを見て眼を輝かせて聞いてきた。幼い外見通り好奇心旺盛なのは間違いない。

川上は妖精に目を向けた。妖精が紙巻きタバコを知らないのが意外だったのか。

或いは昔に外と隔離されたと言うこの世界は紙巻きは一般的ではないのかも知らない、川上はそう考えた。

「タバコの種類だ」

「タバコ？」

そもそもタバコを知らないらしい。

「酒と同じ嗜好品だ」

くわえてみる、とその一本を妖精に差し出す。

「食べるの？」

「食べたら毒だ。唇に浅くくわえろ」

川上の愛呑のゴールデンバットは吸い口にフィルターが付いているのではなく、両切りの為吸い口まで葉が詰まっている。その為少しくわえ方にコツがいり深くくわえ

ると葉が口の中に入ってしまふ羽目になる。

妖精は言われた通りにくわえる。

「なるべくゆつくりと吸いこめ」

川上は妖精のくわえた紙巻きにガスライターの火を遠火で近付け着火した。

妖精は言われた通り吸い口からゆつくり吸い込んでいたためすぐに火は付き、煙が肺まで至ったのかとたんに妖精はむせた。

「ゲホッゴホッ！　うー、何これ？」

驚いてタバコを落とし苦い顔でそういう妖精を見て川上はくくつ、と小さく笑った。

流星に初心者に両切りを肺喫煙させるのはきつかったか、そう思いながら妖精が落とした火のついたままのシガレットを拾って自分で一口吸い、ゆつくり煙を吐く。

「まあ、こういうものだよ」

「そんなの吸わないほうがいいよ」
くくつ、と口の端で川上は笑う。

「そう言うな、これも味が分かれば風味を楽しめるんだ」

珍しく笑みを浮かべている川上だったが妖精はむくれて川上の顔を見上げていた。構わずゆつくりとタバコを吸いつつ川上は腕時計を確認する。

時刻は正午を少し過ぎたあたりだった。かなり掃除に夢中になっていたらしい。「そろそろ昼食か」

昼になったら呼びにくる、そう咲夜は言っていたが。

「お昼はんの時間？　じゃあ私食べて来ていい？」

メイド妖精達の食事は別なのだが、この時間用意は出来ているという事らしい。「別に俺に許可を求める必要はない。食べてくればいい」

「じゃあ私食べてくる。また後でねー」

そういう元気な足取りでメイド妖精は退室していった。

そして川上はタバコを深く吸い込みながら考える。

咲夜の言葉通りならそろそろ呼びにくるはずであろう。ならば切りがいいからこのまま待つか、それとも呼びにくるまで次の部屋の掃除に手を掛けるべきか。

短くなったタバコを携帯灰皿に押し込み、取り敢えずもう一服だけして待つかと思

いゴールデンバットの箱から一本取出しそこで川上は舌打ちした。

その一本が最後だった。もちろんタバコはこの世界に来たときの手持ちのこれしかない。このまさか幻想郷でゴールデンバットが手に入るとは思えなかった。せめて代用の紙巻きタバコくらい売ってあればいいのだが、川上は空になったタバコのソフトパックをぐしやりと握り潰した。

そして最後の一本に火をつけた時ふいに隣に気配を感じ、川上はそちらに目を向けた。

それは異常な光景だった。

居空に裂け目が走っていた。そしてその裂け目から女が上半身のみ覗かせ川上を見ている。

女の顔立ちは整っているがまだ少女と言ってもいいだろう。紫のドレスに身を包み、金髪の艶やかな長髪を小さなリボンでいくつかの房にまとめている。そしてリボンのあしらわれた帽子を被っていた。

女は口元に微笑みを湛え底知れぬ深い色の瞳で川上に見ていた。

川上はその得体の知れない女に不吉な美しさを感じた。

「おんにちは」

「おんにちは」

女の挨拶に川上もおうむ返しに挨拶を返した。

「タバコが御入り用なようね」

女はいきなり言った。

「えーつと」

女は自らが身を乗り出している空間の裂け目に手を突っ込み何やらごそごそしている。

「これでいいかしら」

女が裂け目から取り出した何かをポトポトと大量に落としました。

それはゴールデンバットのカートンだった。全部で10カートン、1カートンにゴールデンバット10パック入りだから計100パックである。

川上は何も言わずに片眉を上げた。そしてタバコを一口吸う。

「いいみたいね、それじゃあご機嫌よう」

その川上の様子に満足したのか女はそう言い残し、空間の裂け目の中に身を隠した。そして裂け目も閉じていく。

女は消えた。

残ったのは大量のゴールデンバットだけだった。

その直後今度は咲夜が現れた川上を呼びに来たのだろう。

「何かあったの？」

「いや、別に」

川上はそう答えて、タバコをもみ消した。

第25話

川上は昼食を終えた後、一旦自分の私室に戻ってきていた。

謎の女からの施しであるタバコの山を置きに来たのだ。

ベッドサイドの引き出しにゴールデンバットのカートンを納める。その内の一カートンの包みを破つて2パックを取り出すと一つを上着のポケットに納めもう一つは封を開け指でパックを軽く叩き詰まったシガレットを一つ取り出すとくわえて火を点けた。

ふう、と川上は長い煙を吐き出す。この食後の一服が終わったら午後からの仕事に取りかからねばならない。

川上は灰皿を引き寄せ伸びた灰を落とす。

シガレットに口をつけゆつくりと煙を吸い込む。川上の眼は相変わらず気だるげで眠たげなものだった。

短くなったタバコを灰皿でもみ消すと川上は立ち上がった。暎夜からは午後からも引き続き掃除を頼まれていた。四時までやったら後は自由にしていとお達しだった。

時計を見る。時刻は午後一時二分。もう一仕事するか、そう思いながら川上は私室を後にした。

——紅魔館西側客間

川上は昼に中断した所から掃除を再開した。切り良く終えていた部屋から次の一室の掃除に移り黙々と作業をする。

ある時部屋の外の廊下を移動する気配を感じ川上は顔を上げた。

それ自体はおかしくはない、この館にはメイド妖精も咲夜もレミリアも住民は沢山いるのだから廊下を誰かが歩くのは自然だ。

だが川上はすでにこの館の住民は大方把握していたし、その者達の体格、履いてる靴、歩き方の癖等覚えていた。

しかし廊下を歩いているのは館の者ではない、川上はそう判断した。メイド妖精のような小さく軽い体躯の足音でもない、咲夜の体の軸がまるでブレず足音が殆どしない歩みでもない、この気配は……。

侵入者かあるいは客か、川上は自分のいる部屋の扉の前を気配が通り過ぎたのを見計らって無音で扉を開け気配の主を確認した。

果たしてそれは客だった。いや、館の人間なら鼠とでも言うかも知れないが、川上

が昨日まで世話になった普通の魔法使いがそこにいた。

そういうえばまた来ると言っていた事を川上は思いだした。川上は廊下へと出る。

「ん？」

気配に気付き魔理沙も振り向いた。

「よお川上、元気そうだな。上手くやってるか」

「なんとかな」

気さくに声をかけてくる魔理沙に川上は答える。

「ま、お前みたいな奴はどこでもしごとくやっていきそうな気はするぜ。まあ元気
そうでよかったぜ」

「昨日の今日でどうこうなりはしないだろう」

端的に答える川上に魔理沙はくくつと笑う。

「相変わらず無愛想な奴だな。今日はこれを返しに来たんだぜ」

そう言いながら魔理沙は小脇に抱えてた服を川上に手渡す。川上が幻想郷に訪れた時に纏っていた黒服だ。

「ああ、ありがとう」

受け取りながら川上は魔理沙に服を借りていた事を思い出す。あれは部屋にある
が返すなら洗濯してからが礼儀か、川上はそう思った。

「それと俺が借りた服だが……」

「あああれか、いい、いいあんなものどうせ私には着れないし持ってもしょうがないものだったんだ。お前にやるよ」

川上の言葉を遮って魔理沙は言った。どうやら彼女には必要のないものだったらしい。

「なら有り難く貰っておく」

寝間着にはちょうどいいだろう、川上はそう思った。

「しかし、何だな」

魔理沙は使用人服の川上を上から下へと見た。

「こうして見ると中々様になってるじゃないか、似合ってるぜ」

「そうか」

社交辞令なのか。いや彼女の性格から考えれば社交辞令ではなく多分に本心なのだろうお褒めの言葉にも川上の返答は素っ気なかった。

そんな川上の態度に何が可笑しいのかまた魔理沙はくつくくと笑って言った。

「ま、格好は様になってるけど使用人ならその無愛想さは何とかした方がいいとおもうぜ」

「そうか」

魔理沙の忠告に川上はまるで分かっていない答えを返す。こりやだめだな、魔理沙は思った。

「んじやあ私は図書館で本を借りてくるからまたな」

「ああ」

そう言つて地下図書館の方へと向かつていく魔理沙を最後まで見届けず川上は部屋に戻つた。

懐からタバコを取り出し火を点けるとくわえタバコのまま掃除の続きへと戻つた。

第26話

川上は魔理沙に返された自分の服を私室に置いてきた後仕事に戻った。

ただ黙々と部屋の埃と汚れを落とす事に専念する孤独な作業だった。しかし孤独は彼の性にあつていたのかも知れない川上の集中力は中々のものだった。

そしてまた一部屋を終えて川上はやり残しがないか改めている。問題はないだろう。そう判断し時計をみると時刻は午後三時二分前。四時になったら仕事は終わりだ。後約一時間、もう一部屋を丁寧掃除すれば丁度そのくらいだろう。

そう思い最後の一部屋に取り掛かる為廊下に出てそこでぼったりと出くわした。

細く瑞々しい金髪に帽子を被り赤い衣服を纏う、その背には歪さと美しさの同居した異形の羽。

フランドールだった。夜明け前に就寝した彼女は少し前に起床し咲夜が用意した食事を済ませた所だった。

そして彼女は今日は何して遊ぶかと考えながら歩いていたところだ。

そこに来て川上である。今、フランドールの妖しい紅い光を湛えた虹彩は川上を爛々とした眼差しで見上げていた。その眼が語るのは好奇心か、期待か、あるいは猫が

小動物を見据えるそれに近かったかも知れない。

川上は自分からは動かない、フランに話しかける事もフラン等居ないように歩き去る事もしない、彼が今何を思ふのかは普段と変わりない酷薄な三白眼からはわからない。

「ねえ」

フランが口を開いた。

「遊ぼう」

「し」

仕事中だ、川上が言おうとしたのはそんな言葉だろうか。

4メートルの距離を瞬きの間に潰したフランが爪を振るい川上は側転受け身でそれを回避した。

が、次の瞬きの瞬間に両者は再び交錯していた。受け身を取った姿勢の川上に左の抜き手を放つフランに体を開き突きを回避しつつ躊躇なく自ら前に出てフランの側面に入り身し危機回避する川上。一つ間違えればフランの手は川上の胸を背中まで貫通していただろう。それくらい凄まじい突きだった。

そうしてすれ違う形になった両者。すぐにフランは振り向きざま抜き手を放った左で川上の首を刈りにいった。

今度は川上は回避しなかった。フランの爪に刈られた川上の首が飛ぶ……ことは無かった。

フランは理解出来ないと言った風に見開き気味の眼で自分が振った左腕の先を見ていた。

川上の首を跳ねるはずだった左手、その上腕から先が無かった。鋭利な断面の切断された動脈から激しく鮮血がしぶき床を濡らす。

フランは眼を床に向けた。そこには自分のものと思われる白い腕が落ちていた。続けて川上に視線を移す。川上は何時抜いたのか抜き身の刀を右手に無造作に下げている。

追撃するでもなく川上は無構えのまま考えの読めない三白眼でフランを見ていた。

彼はフランの抜き手を回避すると同時に抜き打ちで突き放たれた腕を落としていたのだ。斬られた本人も気付かぬ神速。

フランはここに来てやっと川上に斬られた事を理解した。痛みは無かった。いかに不死身に近い再生力を持つ吸血鬼とて傷を負えば相応に痛い。しかし腕を失う深手にも関わらず痛みを感じないのは斬り口があまりに鋭利故にか。

「あまり床を汚すな。掃除をするのは俺達だ」

「うん、ごめんなさい」

フランは腕を飛ばされ毒気を抜かれたのか素直にそう答える。床を濡らしていた出血は弱まり既に止まっていた。そして別に川上の仕事は廊下の掃除でもない。

フランは床に落ちていた腕の先を拾い元の位置に据え付ける。二秒で繋がり指も動くようになる。鋭利に斬られた故にかえって治癒速度も早かった。

「便利な体だな」

「うん、ほつといても腕は生えてくるけどくつつけたほうが早いの」

川上の感想にフランは答える。それには若干得意げな響きがあつたかも知れない。

「遊ぶのはいいがなるべくならもう少し穏やかな遊びにしてくれ。しょっちゅうだと疲れる」

なら川上はたまになら殺しにかかられるのもいいと言うのか。

「うん、あなたやっぱり中々壊れない。いいわ、他の遊びもしよう」

川上はフランのお眼鏡になつたのかも知れない。

「じゃあ何して遊んでくれるの?」

「いや、俺はまだ仕事がある」

「えー、そんなのいいじゃない。遊ぼうよ」

「じゃあ今晚付き合つてやる。それでいいか」

「う、ん、わかった。約束だよ」

「ああ、覚えておく」

川上はそういつつタバコの箱を取り出した。

「それはなに？」

「紙巻きタバコ」

「こいつも知らないのかと思いつつ川上は答えた。

「コウモリの絵……なんてタバコ？」

フランはゴールデンバットのパッケージ、抹茶色の箱に2羽のコウモリが描かれたデザインをみてそう聞く。

「ゴールデンバットだ」

「やつぱりコウモリ。貴方お姉様とおそろいね」

フランは何が面白いのかクスクスと笑う

「吸うか」

「いらない、タバコは体に悪いんだよ」

一本勧める川上にフランはそう断る。しかし不死身の吸血鬼がタバコの害を気にするとはなんの冗談か。

「じゃあ私行くね。約束忘れないでね」

そういつて歩み去るフランに川上はタバコに火を点けつつ片手を上げて答える。

くわえタバコのまま手に持った刀を改めてみる。少し血糊が巻いている。川上は掃除に使うなるべく綺麗な布で丁寧にも身を拭いていった。

拭いしつつ先程の数を思い起こす。突きに対して入り身しながらの抜刀。脱力具合もタイミングもあれは良かった。感覚を忘れぬ内後でイメージトレーニングと一人稽古を行おう、川上はそんな事を考えていた。

納刀し長く煙を吐きながら思う。また手入れが必要になったと。

咲夜あたりにも刀剣の手入れ用具の手配を頼んでみようかとも川上は考えた。

どうも必要になると思った。

川上は短くなったタバコを携帯灰皿に入れると次の部屋に入った。

この部屋で最後だ、川上は仕事納めとなる最後の掃除を始めた。

第27話

川上は一人紅魔館の庭園にいた。

この季節は緑が茂り良く手入れのされた花壇では色とりどりの美しい花が咲き乱れていた。

空気も澄んでおりほのかに花の香りを感じられる。悪魔の館と言われる場所にあるとは思えない程その庭園は明るく、美しかった。

庭園の端の方のスペースは土が耕され野菜と思われるものが植わっていた。トマトが色鮮やかに実っているのが見てとれる。菜園も兼ねているらしい。

その庭園の美しさ、川上はそれを愛でもなくただ一定の行動を反復していた。

無造作に立っているだけの脱力した自然の構えから身体を開きつつ深めに踏み込み抜刀する。正眼の構えに移り滑るように後退する残心の後眼をつむり、静かに息を吐きながら納刀する。

眼をゆっくりと開き再び自然の構えに戻るとまた入り身しつつの抜刀、残心、それを繰り返していた。

四時になり仕事は終わった川上は今日フランとの立ち合いで自分が使った動きを

忘れぬよう反復し身体に覚えさせていた。

もつとも川上はその動きはもうコツを掴んでいた。故にフランに対して使えたのである。身体が覚えていない技等咄嗟に使える訳もない。あくまでも鍛練は欠かさぬ為の一人稽古だった。

そして川上は納刀すると深く息を吐き反復を止める。

今度は再び自然の構えになりそこから左腰を惹き付け鞘走りを利用し逆袈裟に走る神速の抜刀を見せる。切り上げた刀をすかさず返し一步踏み込みつつ真つ向切り下ろしを放つ。鋭くコンパクトな斬撃はヒュリツと風を切り裂く音をたてた。

そこから正眼に戻り残心、血振りをして流れるような動作で納刀。

再び自然の構えから今度は右に踏み込み向き直ると同時に鞘走りからの横一文字の抜刀。そして刀を頭上に斜めに寝かせつつ掲げ45度前に踏み込む受け流しの型を見せるとそのまま手首の返しだけで相手が居れば首筋のある場所に切り返す、そして残心。

川上の抜刀の型は一つ一つが丁寧で洗練されたものだった。動作自体は地味だが何処か美しい。

「見事な武技です」

そんな川上の一人稽古を陰から傍観していた者が声をかけた。

紅魔館門番、紅美鈴だった。彼女は同じ武術家として川上の稽古内容に興味があったのだ。中国の剣術、刀術と日本の古流剣術はやはり理合が全然違う事を川上の動きから美鈴は理解出来た。

川上は稽古に集中していたが美鈴の気配にはとつくに気付いていたのだろう。納刀し、ゆっくりと美鈴に向き直った。武芸者の集中は一つの事に入れ込むあまり周りが見えなくなるようなものでは無く、目の前の相手に相對しつつも自分の周囲に何人がいて誰が眼を向けているか把握する広い視野を持った。『開けた』集中の仕方をするのだ。

「君程の者にそう言つて貰えるなら光榮だ」

川上はそう答えた。彼も先日美鈴との立ち合いで彼女の力量を理解しているのだろう。実際美鈴の中国武術は達人の域と言つていいだろう。

「貴方にまんまとしてやられた方からすると皮肉にも聞こえますね」

美鈴は苦笑いして言つた。先日は毒等使われて遺恨もあつたが今は言い訳するつもりもない。あれは自分の完敗だったのだ、美鈴はそう思つた。

「そんなつもりもない。少なくとも君と本気で殺し合うのは俺は避けたい」

リスクが高過ぎる、川上はそう呟いた。川上は中国武術には造詣が深くはない。あ

まり良く知らぬが技術の上、達人クラスの錬度、やり合うのは馬鹿らしい、川上はそう思った。

「それは私も同感ですよ。あのような虚を付く技をいくつも出されたら堪りませんからね」

あんな暗殺者じみた邪な技をいくつも体得する相手等、まともにやり合えない、そう思った。

「だがまあ、君程の手錬が稽古相手になってくれれば俺としても非常に助かるのだが。良ければ暇があつたら頼めないか？」

「もちろん構いませんが……。稽古の形式は？」

美鈴も正直武人としての血が川上との手合わせを望んでいた。川上にしてもそれは素晴らしい稽古になるだろうと思つた。未知の技術である中国武術を知る絶好の機会、両者の利害は一致していた。

「そうだな……。そちらで言う所の散打みたいな形でどうだろう」

散打とは中国武術に置ける試合形式に近いスパarringの事だ。

「問題ありません。でもいいのですか？ 剣は無しで」

散打はもちろん無手でのスパーリングだ。武器は使わない。明らかに剣士の川上が立つ土俵ではないのではないかと美鈴は考えた。

「問題ない。中国ではどうか知らないが日本剣術、武器術のベースは体術、柔術だ。無手での身体の使い方さえ理解すればどんな武器でも使えるようになるのさ」

つまり川上は徒手空拳でもある程度出来ると言う事らしい。

「なるほど、それは私としても楽しめそうですね」

一体どんな体術を用いてくるのか、美鈴は興味を持った。

「まあ今日の稽古は終わりだ。明日以降暇があつたら稽古に付き合ってくれ」

「ええ、私は門かここに居ますからいつでもお相手しますよ。楽しみにしています」

美鈴は笑ってそう言った。実際やはり他流と交われる機会があるのは武人として美鈴は嬉しかった。幻想郷は閉じた世界故にあまりそのような機会はないのだ。

「この庭園の手入れは君が？」

川上は唐突に話題を変えた。先ほど美鈴が門かここに居ると言ったのが気になったのだ。仕事でここにいとすれば庭園の手入れをしているのではと考えた。

「はい、お花の世話もお仕事ですからね」

美鈴は笑ってそう答えた。川上に相対した最初の頃より幾分柔らかい笑みだ。

それに、と美鈴は続けた。

「土いじりやお花のお世話は私自身好きですから」

美鈴は自分が育てた花達を見てそう言った。

そうか、と川上は呟いた。

「美しい庭だ」

川上はそう言った、何の他意も無い彼の本心だったろう。

「そういつて頂けると嬉しいですね」

美鈴は少し照れ臭げに笑って言った。それなりに長い時を生きている妖怪であるはずの彼女だがその時は少女のような愛らしきがあつた。

ふ、と珍しく川上も表情を崩した。彼にも多少の情緒はあるのか。

「では俺はそろそろ戻る。稽古相手を受けてくれて感謝する」

「はい、ご苦労様でした」

「じゃあな」

川上は素晴らしい庭園から館の中に戻った。彼は懐からタバコを取出し火を点けた。大きく紫煙を吐く川上は既にいつもの無表情だった。

第28話

川上は膨大な本棚の列の中を歩いていった。

紅魔館地下図書館。今日の分の仕事が終わり軽い一人稽古もこなした川上は暇潰しにはちょうどいいこの場所に訪れていた。

膨大な面積を誇る図書館内を一人目的も持たずふらふらと歩き時折目に付いた本棚から本を抜きページを捲るもあまり興味をそそられなかったのか本棚に戻す。

川上はそんな事を繰り返していた。

ふと川上は歩みを止める。

川上が歩いてきた通路に面した本棚、それに納められた本の背表紙が一つ淡く光って見えたような気がした。

改めてその本の背表紙を観察しても変哲のない古びた本の一冊にしか見えない。光って見えたのは錯覚か。

いや、川上は自分の感覚は信じていた。その本は確かに光ったのである。川上は少し考える素振りを見せた後、好奇心に負けたのかその一冊の本へと手を伸ばした。

——同じく地下図書館。

パチュリーはテーブルについて何時ものように魔術書を広げながら新しい術式の理論を独自に構築し羊皮紙に式を書き連ねていた。

魔術の考察、術式の組み立て、実践、検証、ただそれを繰り返す魔術師としての高みを目指す。それはパチュリーという一人の魔女の在り方だったろう。

そして、パチュリーは顔を上げた。大分集中していたようだ。同じ姿勢で研究を続けて気付けば少し背中に痛みを感じる。一休みしよう、そう思った。パチュリーは寿命のない魔女である。人間のように残り時間を気にして生き急ぐような生き方をする必要もない。

「小悪魔」

パチュリーは自分の使い魔でもあるこの図書館の司書の小悪魔を呼んだ。

「はい、お呼びでしょうか」

小悪魔は主の呼び掛けにすぐに応じて現れた。

「お茶を煎れて貰えるかしら」

「ご苦勞様です。すぐに用意いたしますね」

小悪魔はいつもの柔らかい微笑みを湛えて応じた。自分の役割に心から満足しているかのような笑み。

小悪魔は慣れた手際でティーセットを用意しカップに香り立つ紅茶を注いだ。

「どうぞ、熱いので気を付けて下さいね」

「ええ、ありがとう」

パチュリーはカップを両手に持つとふうふうと息を吹き掛け冷まし少しづつ飲んだ。その仕草は幼い少女のような可愛らしきがあつた。

「川上さん今日からお仕事だそうですね」

小悪魔は川上の事を話題に出した。彼女なりに心配しているのかも知れない。

「そうらしいわね。咲夜に預けてるから何してるかは知らないけど」

対してパチュリーは割とどうでも良さそうな雰囲気だ。

「人間さんがここで働くのは珍しいですから困ってはいないのですが」

「それは大丈夫よ。あの手の人間は大抵の事を顔色変えずにこなすタイプだわ」

「そうでしょうか。確かに大抵の事ならどうかしちやいそうな印象はありますけど」

「ええ、そういうものよ。人間だつて中々馬鹿に出来ないものよ」

そう言ったパチュリーだったがふと険しい顔で一方に顔を向けた。しばらくして

僅かに物音が伝わってくる。図書館内で異常な魔力の流れがあった事をパチュリーは理解した。

「一体何でしょう?」

同じく魔力の流れを感じたらしい小悪魔が声を上げる。

「侵入者用のトラップとして張っていた術式が発動したようね」

「侵入者ですか?でも……」

この場合トラップにかかった者の第一候補は何時も図書館の本を勝手に漁る魔理沙である。

しかし魔理沙はパチュリーの目の前、向かい側で本を開いたままテーブルに突っ伏して気持ち良さそうに寝ていた。彼女は昼過ぎに訪れてからまだ図書館にいた。

トラップにかかったのは魔理沙ではない。なら誰なのか。

「まさか……」

「あの男かしら」

小悪魔とパチュリーの脳裏に同時に浮かんだのはいつも気だるげな眼をした川上だった。

うっかりトラップにかかってしまうのは、まだこの館の勝手が分かっていない彼しか考えられない。

「ま、まずいですよ」

「多分大丈夫でしょう。彼魔理沙よりしぶとそうだし」

思わず顔色を失う小悪魔にパチュリーは対して心配もしていないようだ。

しかしトラップはそう甘いものではない。発動したらいくつもの魔道書「グリモワール」が術式に則って魔力弾で対象を攻撃する。ただの人間なら、死ぬレベルの危険なトラップだ。

「心配なら見てきてあげなさい。危なそうなら助けてあげるといいわ」

パチュリーは自分では動かないつもりのようなのだ。その必要もないと思っているのかも知れない。

「いい、行つてきます」

その言葉を受けて文字通り小悪魔は飛んでいった。

パチュリーは一人紅茶を口に運んだ。

小悪魔はトラップが発動した一角に急いで飛んでいく。流石に昨日まで話していた人間が魔力弾でぐちゃぐちゃの肉塊になっている所等みたくなかった。

川上は悪い人間ではない。せつかく一緒に館で働くもの同士仲良くなりたいたい先輩として彼が困っていたら助けてあげたいと思っていたのだ。おおよそ悪魔とは思え

ぬ思考だか彼女の本心だった。

もう魔力の流れは感じられない。これは目標が沈黙したという事かあるいは……。小悪魔はトラップが発動した通路に飛び込み、そして見た。

川上は平然と立ち左手に中型のシースナイフを掲げ、右手で本を開いてそれに眼を通していた。

周りの床に魔道書が散らばっていた。ナイフで切り裂かれたのかページを撒き散らし表紙にも切り傷が走りそれにより術式が破られていた。床には魔力弾によるものかいくつもの焦げ目が出ている。

しかし川上にはその服にも焦げ目一つついていなかった。彼は右手の本を閉じる。こんな大層な罠に守られてるなら余程価値のある本かと思つたが中身は解読不能の言語で綴られており川上には価値がわからなかった。あるいはただのトラップのスイッチでしかなく価値等ないのかも知れない。

川上は本を本棚に戻しナイフを懐の皮シースに戻しながら言った。

「どうかしたか」

その言葉は小悪魔に対するものだった。

「ゴ、ゴ」無事でしたか」

「大丈夫だ、それよりすまない。これらの本いくつか駄目にしてしまった」

川上は床の切られた本を指し、そう言った。

「よ、良かったです」

小悪魔は心の底から安堵した。川上に怪我はなさそうだった。

「ごめんなさい、伝え忘れてました。この図書館には侵入者対策の罠が幾つかあるんです」

「以後気を付ける」

川上の答えはそれだけだった。

「ごめんなさい」

小悪魔は申し訳なさそうに重ねて謝る。川上の態度が怒っている為だと思つたのかも知れない。何より自分の管理すれ図書館で危険に合わせてしまったのが負い目であった。一歩間違えたら命にも関わっていたのだ。

「問題ない」

川上の答えはそれだけだった。彼は心の底から何とも思つてないようだった。

川上は歩き出した。パチュリーがいつもいる方に。

「先ほど今日の分の仕事が終わった」

それは小悪魔に対する言葉だったか。

「ご苦勞様です。お仕事はどうでしたか？」

「まあ、なんとかなりそうだ。ただ少し気疲れした」

「良ければ紅茶を一杯煎れてもらえないか？」

川上は相変わらず感情の読めない声でそういった。

やや沈み込み気味だった小悪魔の表情も解れて柔らかい微笑みが戻ってきた。

「はい、疲れが取れるような美味しい紅茶を煎れて差し上げます」

川上は小悪魔の言葉に答えは返さず、歩きながらタバコを取出し火を点けた。

第29話

一人の男がある邸宅の庭にいた。

男がこの邸宅に住んでいる訳ではない。男は有体にいえば不法侵入だったろう。

正門の前にいた警備員は二人。既に骸となつて転がっていた。

ナイフにより一人は喉を真一文字に切り裂かれ左胸をえぐられていた。一人は首の後ろ、頸椎を穿たれて即死していた。二人とも襲撃者の気配に気付く前に殺されていた。あるいは自分が死んだ事も理解出来ずに死んだかも知れない。

闇に溶ける濃い赤茶色の衣服に身を包んだ男は、巡回していたもう一人の警備員に、忍びよると鋭利なナイフで首を抉った。悲鳴もなく血飛沫を上げながら警備員は崩れ落ちる。

男は邸宅内に侵入した。セキュリティに引つ掛かかったのか詰めていた最後の警備員が走ってきて拳銃を向ける。男は警備員が警告もなく発砲しそれを自分が身体をずらすだけで回避するのを「視た」。

果たしてあらかじめ男が視た通り警備員は発砲、男はあらかじめそうすればいいのが分かっていたかのように身体をずらすだけで銃弾を回避する。

警備員が次弾を発砲すると同時に男がそれを掻い潜るように異常な早さで踏み込んだ。

右手に拳銃を握り男に向けて直接照準していた警備員のその手に男の手が絡み付くと警備員はあっさり腕の間接を極められ前かがみになる。男はその警備員の首の後ろにナイフを落としてから警備員を投げた。床に叩きつけたれた時にはすでに頸椎を断たれ死んでいた警備員の半開きの眼は、虚ろに男をにらんでいるようだった。

しかし男は警備員には最早意識を向けておらず床に落ちていた警備員の銃だけ拾って先に進む。

邸宅の二階の奥の一番広い寝室。男はその前までくると無造作に警備員から鹵獲してきた拳銃を扉に向けて4発立て続けに発砲した。

いや正確には扉の向こう側に向けていた。

男は撃った後すぐに躊躇なく寝室に踏みいった。

寝室にいたのは一人は邸宅の主と思われる中年の男。しかし彼はもう血を流し前のめりに倒れていた。もう死んでいるか瀕死か、その倒れた主の前にはハンティングライフルが落ちていた。

おそらく彼は侵入者が寝室に踏み込んだ瞬間射殺しようとして待ち構えていた所を、扉の向こうからの男の銃撃を浴びたらしい。フルメタルジャケット弾は扉等紙切れのよ

うに貫通し主を貫いていた。

男は踏み入った瞬間に撃たれるのをあらかじめ視ていたのかも知れない。

主が倒れているよりさらに奥の壁際に女がまだ小学生低学年くらいかと思われる若い少女を必死に抱き締めて震えていた。

女と少女は親子である女は邸宅の主の妻だった。

男は血を流し倒れている主の頸椎にナイフを突き立てゴリツと抉り入念に止めを差した。それを見て女がヒイツと引きつるような悲鳴をあげた。少女は凍りついて震える事すら出来なかった。

「ま、待つて下さい。私はどうしても構いません、望むなら何でもいたします。ただどうかこの娘だけは助けグボツ」

必死に最愛の娘だけは庇おうとする女の言葉を聞く義理もないというように男はナイフを振るい女の首は深々と裂けていた。

女は首筋から大量の血をしぶきながらも血走った必死の眼で男を見据え血の溢れ出る口をぱくぱくさせ何かを訴えようとしていたがやがて前のめりに崩れ落ちた。血液に溺れるように女はしばらく手足をばたつかせていたがやがて動かなくなつた。

女の死体を見据える男の三白眼は何の感情も写さない静かなものだった。

残ったのは若い少女一人だけだった。

少女はもう感情が一定のゲージを振り切ってしまったのか、現実を拒絶したのか焦点の定かでない眼で虚空を見据えていた。股間からは失禁しておりカーペットを濡らしている。

だが男が腹に突き込んだナイフは少女を無理やり現実に戻した。
少女に刺したナイフを大きく抉って抜く。

「あ、あぎやあああああああ！ 死んじゃう、死んじゃうよ」

自らの身体の中に異物を叩きこまれた少女は正気に帰ったとたんに激痛、恐怖、絶望、憎しみ、それらに一気に飲まれ堪らず叫びだした。それにより腹圧が上がり少女の破けた腹から内臓が飛び出しカーペットに広がる。まだ幼い少女の腸は色鮮やかで滑り綺麗なものだった。

内臓の生臭さ、少女の尿の独特の刺激臭、血の鉄臭さ、それらを吸い込み男は自分の胸に何かの感情が掠める事を期待したが、自分が何を思っているのは男自身良くわからなかったのかも知れない。

「やだ、お腹破れちゃったよ。死んじゃうよお、死ぬのいやだあ、助けて、助けてマア！ 死にたくない」

彼女が助けを求める母親はすでに死んでいたが。

男はナイフを横に寝かせ少女の薄い左胸に深々と突き込みさらに抉った。少女の心臓は完全に破壊されただろう。

「あ、ママ、ま、まあ」

それで少女は最後にうわごとのように眩きながらその眼から光が消えていった。ようやく少女の悪夢は人生と共に終わりを告げた。

男は最早死体には眼もくれず立ち上がり、ナイフにこびり付いた油脂を拭いた。そのまま死体の残る部屋から歩き去りつつ懐からタバコを取出し一仕事終えた後の一服を点けた。

そのタバコの銘柄は……

川上は静かに眼を覚ました。

紅魔館地下図書館。彼は小悪魔に煎れてもらったお茶に一服し、一息いれている間にうたた寝してしまつたらしい。

川上は何か夢をみていた気がした。何か追憶めいた夢、しかしどうでもいいのですぐ忘れた。

「よう、眼が覚めたみたいだな」

川上がここに来た時にはちようどうたた寝してた本人である魔理沙がそう声をか

けた。

「ああ、おはよう」

川上はぼんやりとした眼でそう挨拶した。

「咲夜はそんなにきつい仕事をさせたの？」

向かい側で本を読んでいたパチュリーがそう聞いた。川上が疲れてるのかと彼女の心配だったのかも知れない。

「いや、問題ない。体力にはまだ余裕がある」

川上は平然とそう答えた。意識がはつきりしてきたのは彼の三白眼がしつかりとした色を映す。見るものを何処か陰鬱にする眼。

「お疲れでなければ良かったですが無理はしないで下さいね。今お茶を入れますから」

小悪魔は川上にそう声をかけて紅茶の用意を始めた。目覚めの一杯にはちょうどいいだろう。

「ま、ほどほどにがんばれよ。私はそろそろ帰るぜ」

魔理沙はそう言いつつ席を立った。

「ああ、服の件ありがとう」

「あんくらい気にすんな。また何か困った事があれば力になるぜ」

川上の礼に魔理沙はやたら頼りがいのある言葉を返す。

「んじやあな」

「ああ、さようなら」

「またね」

「また来て下さいね」

三人は魔理沙に口々に別れを告げた。川上は小悪魔の煎れてくれた紅茶に口をつ
け、やはり彼には熱すぎてすぐには飲めなかった。

第30話

——紅魔館客間

自分に与えられた私室に戻ってきた川上は魔理沙に貰い受けた白い着流しに身を包みその髪は濡れていた。

仕事も終わり、紅魔館の顔触れととりとめもない会話をしつつ夕食を終え、浴場に入浴して戻ってきた所だった。

川上に与えられた客間の棚にはいくつもの高級そうな蒸留酒のビンが並べられていた。外観に違わず豪華な館だなと川上は思った。

川上は棚に歩みよりしばらく吟味するような様子を見せたがやがて一本のウイスキーのボトルとグラスを手に取った。

ベットに腰掛け、愛刀を傍らに置くと小さなテーブルの上でボトルの封を切った。

ボトルからグラスにトクトクと少しづつ注ぎグラスの四分の一程度を満たすとボトルを置いた。

グラスを手に取りすぐには口に運ばず琥珀色の液体を手のなかでゆっくり揺らし

複雑な香りを楽しむ。

そして川上は水で割る事も氷も使わず、ストレートのウイスキーをグラスの縁を舐めるように少し飲んだ。

香りと仄かな甘味が口中に広がり熱い液体が喉を通り胃に落ちていく感触。ゆつくりと少量をもう一口含む。

やがて胃の熱さとともに酒精が回り初め身体がにわかになくなっていくのを川上は自覚した。

灰皿を引き寄せると懐からゴールデンバットを取出し口にくわえ遠火で着火する。両切りのシガレットをゆつくりと吹かし、グラスの琥珀色の液体を揺らす。

また舐めるようにウイスキーを味わいながら川上は自嘲した。自分には似合わぬ優雅さだと思った。

川上は深く吸い込んだ煙を吐く。濃い紫煙は行き場を探すように空中を漂いやがて空気に溶けて消えた。

ウイスキーを傾けながら吹かすタバコは普段とは違う味わいがあり、旨味もますますうだった。川上は酒自体を楽しむのではなく、むしろタバコの肴に酒を呑んでいるのかも知れない。

グラスに残り少なくなったウイスキーを流しこむようにして飲み干し、川上は少し

むせた。そういえばつまみもなく呑んでいた。

川上は刀を左手に取り立ち上がると部屋を出た。

頭の間取り図に乗っ取り厨房へと歩く。道中見覚えのあるセミロングの黒髪のメイド妖精が川上に遊んでとせがんだが川上はそれを断わり、寂しげな表情の妖精を尻目に歩き去る。

厨房にはどうやら夕食の片付けかあるいは翌日の仕込みをしていたらしい咲夜がいた。手伝いか数人のメイド妖精も見える。

「メイド長」

川上は厨房の入り口から咲夜に声をかけた。

「どうしたのかしら」

咲夜は手を布巾で拭きつつ川上に向き直った。

「何かナッツの類はあるか」

「ナッツ？ 何故いるの？」

咲夜は疑問を呈する。

「酒のつまみが欲しいんだ」

「ああ」

納得がいったのか咲夜は頷き厨房の奥へと入り、ほどなくして数種類のナッツが乗せられた皿を持ち戻ってきた。

「こんなものでいいかしら」

「充分だ。ありがとう」

「深酒はしないようにしなさい」

「わかった」

川上はそう言つて皿を受け取り邪魔したな、と言つて厨房を後にした。

咲夜は朝食の仕込みに戻った。

カリッと胡桃を齧り咀嚼、それからボトルからグラスに新しく注ぎ、舐めるように呑んだ。

カリカリと胡桃を齧る、甘味と僅かな渋味、美味くもないし不味くもない木の實なんてこんなものだろう。ウイスキーには合うが、一口呑みながら川上は思った。

また懐からタバコを取り出し火をつけ、ウイスキーと合わせて煙を楽しんでいた。

しばらく川上はタバコが短くなつては次のタバコに火をつけるチェーンスモークを続け、合間にナッツを齧りながらグラスを口に運んだ。

川上がグラスを五杯空けた時にはゴールデンバットは一箱空になっていた。部屋は紫煙に満ちて白く霞みがかつている状態になる程だった。

川上がゆつくりとした仕草でグラスを傾けたときふとその多少酔っても宿す色の変わらない三白眼が動き扉を見据えたが、すぐに視線は戻った。グラスを置き新しいゴールデンバットの封を切った時部屋の扉が開いた。

「わあ、何この部屋。火事なの」

ノックすらしい来訪者は紫煙で曇った部屋の有様にそんな言葉を漏らしていた。

川上は返答もせずに箱からタバコを一本取り出すと火を点けた。

「なんだ、タバコの煙だったの」

金糸の髪に深紅の瞳、異形の翼をもつフランドルはそう言った。

「吸いすぎだよ。人間は脆いんだからそんなんじやすぐ死んじやうよ」

何がおかしいのかクスクス笑いながら鈴のような澄んだ声でそんな忠告なのかよくわからない事を言う。吸血鬼流のジョークだったのかも知れない。

ある程度酒が回っている川上はフランの言葉を尻目に紫煙を吐き、相変わらず感情の読めない眼をフランに向けた。

「やっぱり貴方のその眼」

フランはやはりクスクスと笑って言った。

「嫌な眼」

その言葉を聞いても川上の眼付きは変わらず感情の揺らぎすら感じられなかった。

「そんな眼をした人間は初めて」

川上はグラスからウイスキーを一口呑んだ。

「何か用か」

そこで初めて川上は口を開いた。

「忘れちゃったの」

フランは川上に歩みよる。

「約束」

そして川上の隣にぼすつ、と座った。

「遊びに来たの」

フランの言葉を聞き川上はグラスを揺らしながら呟く。

「ああ」

川上はタバコをもみ消した。

「約束だったな」

そう、確かに日中川上は夜に遊んでやると約束していた。

「そう約束、だから今夜は——」
フランは言った。

「楽しい夜になりそうね」

川上は言った。

「…眠い」

第31話

——結局あの後。

もう寝たいと訴える川上だったがフランがそれを許すはずもなかった。

しょうがなくじゃあ何して遊ぶのだと問う川上だったが、フラン自身も他人とする遊びは弾幕ごっこ以外はすぐには思いつかぬ様子だった。

それで仕方なく川上が動き咲夜の元に再び出向くとフランと付き合って欲しい旨を告げると咲夜も暇ではなかったが、どうせ自分の仕事は自分の能力で時間を作っていないくからでもこなす事は出来ると思ひ了承した。

それから川上は眠気を押しつけてフランと咲夜と共に咲夜から借りたトランプにて七並べや神経衰弱、大富豪といった比較的単純なルールのテーブルゲームに夜遅くまで付き合った。川上は実に作業の如くゲームをしていたがフランはこういう遊びは新鮮なようで中々楽しんでいったようだった。

対称的な川上とフランに自身もゲームに付き合いつつ咲夜は含み笑いを漏らしていたが。

深夜まで付き合わされた挙げ句にフランが川上のベットで丸くなってやがて寝息

を立て始めた所でお開きとなった。

昨夜はフランをそのままにして部屋を去っていつてしまったので、川上はまだウイスキーの残るボトルを棚に戻し、寝る前の一服だけつけた。ベットはフランに占領されてしまったので自分はソファで寝る……等という考えにいたるはずもなく川上は丸まったフランの隣に横になった。無駄に広いベットは二人で一緒に寝ても余裕がある。川上は眼を閉じると直ぐに意識は眠りに落ちた。

翌朝、川上はゆっくりと目覚めた。

寝不足の為か普段から暗い色をしている眼がさらにどんよりと濁っている。

ともかく眼を覚ます為タバコに火を点けた。ニコチンを摂取しつつ時刻を確認する。

もう朝食の時間だった。

隣をみるとフランは丸まったまま熟睡していた。その寝顔はあどけなく可愛らしいものだ。

あるいは人によっては天使のような寝顔等というような愛らしさだったかも知れない。しかし実際はフランは吸血鬼という悪魔だったが。

「妹様」

川上が声をかけた。

「妹様、朝食だ。いらないのか」

肩に手をやり起こそうと声をかける。しかしフランの幸せそうな寝顔は崩れず起きる気配はなかった。

ふう、と川上は紫煙まじりの息を吐く。

まあ、吸血鬼に朝早く起きろなんてほうがおかしいのだろう。川上はそう思い寝かせておく事にした。

川上はフランの頬にかかる髪をそつと梳くと丸まったまま寝ている身体にタオルケットをかけた。

静かに立ち上がり着流しを脱いで使用人服に着替える。ついでナイフ等の暗器の類の装備を整え愛刀をベルトに差し用意は出来た。ちなみに野太刀は目覚めたフランが勝手に触らないようにクローゼットに納めておいた。

川上は部屋を後にし、洗面所で顔を洗った後食堂に向かう。

今日の朝食の席は美鈴、小悪魔、咲夜、川上のメンツだった。例によつて吸血鬼姉妹は朝は姿を見せない。というか妹のほうは川上の自室でぐつすりと眠っていた。

また今日はパチュリーも欠席だった。魔女であるパチュリーは実は食事を取る必要がないので食事はただの嗜好品に過ぎなかった。故に食事の席には気分によつて出

たり出なかつたりする。

川上は相変わらず豪華な朝食を平らげ咲夜に煎れてもらった珈琲で一服していたがふいに口を開く。

「メイド長」

「何かしら」

「今日の仕事は何をすればいい」

川上は本日やるべき事の確認をした。

「そうね……」

「昨日と引き続き掃除か？」

「いえ、今日は図書館の方を手伝いなさい」

「小悪魔、一人では大変でしょう」

「え、はい。大変という程ではないですが川上さんが手伝って下さったら助かります」

「決まりね。川上、今日は貴方は図書館の仕事を手伝いをお願いするわ」
こうして川上の今日の仕事は決まった。

「了解した」

川上はそれだけ言って珈琲の残りを飲み干して席を立った。

「ごちそうさま。先に図書館の方に向かつてる」

川上はそれだけ言つて食堂を後にした。

「今日は川上さんとお仕事ですね」

「そうですね、良くわからない所はあるけど要領は悪くないから上手く使つてちようだい」

笑つていう小悪魔に咲夜はそう返す。

「私の仕事も交替要員として手伝つて欲しいですよー」

「貴方はその前に自分の仕事をちゃんとしなさい」

美鈴の言葉を咲夜はあっさり切つて捨てた。

川上は地下図書館への道をくわえタバコで歩いていた。

廊下を歩む川上だったがふと血の匂いを鼻に感じた。割と濃い匂い、だが川上の歩くペースは変わらなかつた。

廊下の角を曲がつた時どうやら匂いの元と思えるものがあつた。通路の半ばに倒れ伏せたメイド服に身を包んだ一人の妖精、既に息は無いのかぴくりとも動かず血溜りの中で伏せていた。

だが川上は死体を一瞥しただけで歩みを止めなかった。彼の靴が血溜りを踏みぴちやりと音を立てる。

そのまま廊下の次の角に差し掛かった瞬間、角から影が異常な早さで飛び出し川上に迫ったが川上は少し身かわしただけで避ける。飛び出した勢いそのまま影は床に倒れ伏せてしばらく痙攣していたがやがて動かなくなった。血が床に広がる。

人影は黒衣に身を包んだ三十台後半くらいの精悍な男だった。首には十字架を下げている。その右手には短剣を握っていたが、彼の首は前から3分の2程が深々と斬られ即死している。

川上は地下図書館への歩みを止めぬままいつものまにか抜いていた刀を拭い納刀した。

第32話

川上は地下図書館を歩いていった。当初から比べてもう慣れたものでその歩みに迷いはない。

朝食を欠席していたパチュリーはいつもの場所でテーブルについて本を開いていた。無造作に歩みより川上は向かい側に座る。

「朝食はいらなかったのか」

朝食の場になかった事を川上は疑問に思ったようだ。見たところ特別体調不良等にも見えない。川上は魔女が食事が必要としない事を知らない。

「……ああ、いらなのよそもそも」

「いらなとは」

「私は捨食の法に達しているから生きるのに食事は必要ないのよ」

「ああ、つまり食べていたのはただの気分的なものか」

川上は大体理解したようだ。

「そうね、私には全ての食事がただの嗜好品」

「便利な体だな。サバイバルで一番の問題の食料を考えなくて済む」

川上は彼なりに魔法使いの力に感心していたようだ。

「その割りには体は弱そうだが」

「それは生まれつきよ。ほうっておいて頂戴」

川上の指摘にパチュリーはそっけなく返す。

「まあ、身体は大事にした方がいい」

そう若干どうでもよさそうに気遣いの言葉をいいながら椅子に深く座り直し息を吐く。

「流石に人間に身体の心配をされる程落ちぶれていないわ。そもそも貴方は朝から何しに来たの？」

「仕事」

「……なんとなくそんな気はしてたけど、やっぱりね」

「メイド長の指示だ」

「咲夜も余計な気を回すわね。あるいは厄介払いかしら」

パチュリーはさらりと酷い事を言うが川上は涼しげな表情を崩さない。

「で、何をしたらいい？」

「私からは何も無いわ。小悪魔の手伝いでもして頂戴」

咲夜もそのつもりでしょうし、とパチュリーは呟く。

「了解した」

返答しながら、川上は本を開いた。小悪魔が朝食の席から戻るのを待つようだった。

メイド妖精の一人からの報告を受け咲夜は急いでその場に向かった。

現場は血の海だった。死体は二つ、自分の部下のメイド妖精と黒衣の人間の男。

人間が死んでいるとの報告を受けとうとう川上が果てたのかとも一瞬思ったが死んでいるのは違う人間、30台で十字架を下げ短剣で武装した男。

自分の主であるレミリアを狙った刺客だと一目で判断出来た咲夜の背中に一筋の冷たい汗が落ちる。

しかし何故その刺客が廊下で果てている。メイド妖精も死んでいるがまさか曲がりなりにも吸血鬼を狙う程の者が妖精と相打ちになったなんて事はないだろう。

なお妖精は厳密には不死なのでこうして死んでもいずれ復活する。そのため咲夜は部下の死は大して気に止めていない。

いずれにせよ危険だ。この男単独とは限らない。むしろ本命の別同隊がいるのが襲撃のセオリーだ。すぐに主の安全の確認と報告をしなければ。

咲夜はそう思うやいなや時間停止でレミリアの私室まで移動した。対外的に見た移動時間は零秒だった。

そして時間停止を解く。レミリアはまだすやすやと眠っているようだった。主の無事ににわかに安堵する。もっともあの程度の人間に脅かされる主ではないのも咲夜は理解していた。ただの老婆心か。

「お嬢様、失礼します」

「んー、さくやー？ 何ー」

咲夜の呼び掛けにレミリアはもそもそと起きだした。寝起きの為か普段以上に印象が幼い。

「今、館内にて侵入者の死体が発見されました。みた所お嬢様を狙ったハンターです」

「んー、ハンター？ 久々ねえ」

くあ、と欠伸を噛み殺し答えるレミリアに危機感はない。

「はい、ただ侵入者を誰が殺したのかもわかりませんし、まだ仲間が館に潜んでいる可能性も」

「咲夜がやったんじゃないの？」

「いえ、丁度皆が朝食の席に集まっていた所だったので、メイド妖精も一人その男に殺されています。これは私の失態です」

「朝食の席を一番に立ったのは誰？」

「それは、あ」

咲夜は失念していたというように声を出した。

「そのハンター、殺したの川上でしようね」

レミリアはあっさりと確信に迫る。

「す、すぐに本人に確認して来ます。後別同隊にそなえて館内の警備を強化しますのでお嬢様も努々お気を付け下さい」

やや抜けた所もある咲夜は川上に思っていたらなかった。少し考えればわかる事があの男の首の鋭利な傷は刀傷だ。あんな傷を作りだせるのは刃物を使う自分か川上だけである。

「はいはい、頑張つてね。お昼過ぎにまた起こして」

二度寝する気であった。気を付けるように言ったのにちつともわかっていないようだった。

「失礼します」

咲夜もやるべき事で立て込んでしまった為かそれ以上は注意せずにその場から消えた。

レミリアはもそもそと布団に潜るとほどなく寢息を立て初めた。

「じやあ川上さん、その本を一緒に運んで頂けますか」

「わかった」

川上は小悪魔の本の整理の手伝いを始めていた。

パチュリーがついている机から読み終わっている本の束を持ち上げ所定の場所まで運ぶ。

「ふう、ありがとうございます。本を納めるのは私がやりますので」

「ああ、わかった」

小悪魔は本を本棚の所定の位置に納めていく。その手際は淀みがない。流石はこの図書館の司書か。

「しかし凄い量の本だな」

「はい、パチュリー様の読書量は凄いですからね。必要な本を探す為にも私がいる訳ですから」

「ふむ、まさに本の虫だな。少し運動させたほうがいいんじゃないか」

川上の言葉に小悪魔は苦笑いする。

「私もずっと図書館に引きこもっているのはお体にも良くないと言った事はあるんですが、中々お外には出てくれなくて」

「ふうん」

まあ、別にそれで死ぬような身体ではないようだしそれならそれでいいのかもな、川上は思った。

そんな風にとりとめのない会話をしつつ作業している時、例によって唐突に咲夜が現れた。緊急事態に先程まではやや余裕を失っていたが、今は落ち着きを取り戻していた。

「川上」

「なんだ」

川上は平然と応じる。

「貴方朝食の後、十字架を下げた男を殺さなかった？」

「殺したが」

川上はあっさりとそれを言った。

やっぱりか、咲夜は小さな溜め息を吐いた。

第33話

——紅魔館地下図書館

ふう、と一つ息を吐き咲夜は気を取り直した。

しかしこの男は何をやっているのか、朝食の後道中人を殺し、平然と仕事を初めている。

咲夜は匂いで薄々わかっていたが今回確信した。川上は人殺しだと。

そもそも平然と人すら食らう川上がまっとうな人間ではないのは一目瞭然だ。大根を斬るように人を斬り殺す人種だとわかっていた。しかし幻想郷の外の世界は今泰平の時代であると咲夜は知っていた。

故に殺人等御法度であるし人を殺した事のある人間等特殊な例外以外殆ど居ないはずだった。

しかしただ武芸に秀でてるというレベルではなく明らかに人を殺やめ慣れきっている川上は一体外の世界で何をやっていたのか。

いや、今考えるべきはそれではない。それより目の前の問題だ、咲夜は思った。ま

ず事情を聞かねば。

「殺した時の事を詳しく聞かせて頂戴」

「構わないが。そんな大事なのか」

「当たり前でしょう。お嬢様を狙った侵入者よ」

川上は自分が斬った相手の事すら無頓着だった。どうでも良かったのだろう。

「朝食を終えた後食堂を出て。真つ直ぐ此処に向かった」

取り敢えず川上はその時の説明を始める。

「道中廊下でメイドが死んでいた。そしてその廊下の先の角で例の男が襲いかかってきたから斬った」

「……その後は」

「特にない。この図書館に入って魔女と少し話したりだな。そして今丁度仕事を始めた所だ」

事情は単純なものだった。単純すぎる程に。不審者に襲いかかられ相手を殺した事等ちよつと歩いていたら通行人に道を聞かれたから教えたくらいにしか思っていないのかこの男は、咲夜は思った。

「あのね、そういう異常事態があったらまず私か他の誰でもいいからちゃんと報告しなさい」

「そういうものなのか。以後気を付ける」

果たして本当にわかつているのか、咲夜は思った。

「とにかくあれはお嬢様を狙った刺客なの。もしかしたらあの男の仲間も侵入するかも知れないから警備を強化するわ」

「なら俺も今日は警備に転職と?」

「……いえ、貴方は取り敢えずこのままこの手伝いを続けていなさい。もし侵入者がまだいてあがくようなら追いつめて仕留める時に動員するかも知れないから、それだけは心に止めなさい」

理想を言えばと咲夜は続ける。

「貴方があの男をすぐに殺さず、仲間の有無等を尋問する事が出来たらそれが一番だったのだけど」

「そうか、次があつたらそうする事にする」

川上は抑制のない声で言う、今それを言っても仕方ないのは咲夜も解っていた、取り敢えず刺客を仕留められただけ御の字だ。

「後、刺客が此処を襲撃する可能性だつて無いわけではないわ。貴方は何かあつた時、此処でパチュリー様と小悪魔を守りなさい」

「了解した」

川上の仕事内容がただのお手伝いから護衛も兼任する事になったようだ。

「では、私は館の警備の強化の方に行くから此処は頼むわ」

館内のメイド妖精達に侵入者への警戒を呼び掛けると共に、咲夜自身時間停止を利用して隠れられそうな所をチェックし見つけしだいに殺すつもりだった。

「解った。後メイド長」

「何」

「気を付けろ」

川上には珍しい相手を気遣うような言動だった。

「ええ、貴方もね」

「それと、お嬢様を狙った刺客を排除してくれた事、感謝するわ」

それだけ言つて咲夜はその場から消えた。

「感謝するか……」

感謝される言われ等川上には無かった。殺されそうだったから殺した。それだけだった。

「なにか大変な事になりましたね」

側に控えていた小悪魔は言う。

「そんなに一大事だったのか」

「いえ、それほどでもありませんがお嬢様を狙うハンターが侵入したのは久々ですから」

「ハンター?」

「吸血鬼を狙うハンターと呼ばれる人達がいるんですよ、昔はよくお嬢様も狙われていたらしいです」

「お嬢様も人気ものだな」

川上の皮肉ともジョークともつかない言葉に小悪魔は困ったように微笑む。

「でもお嬢様もこのくらいならなんて事はないですよ。お強いですから」

それに、と小悪魔は続ける。

「川上さんも守ってくれるなら何かあっても私も安心出来ますしね」

暖かい微笑みで小悪魔は告げた。

「確かに君は切った張ったの荒事は不得手そうだな」

川上の言う通り小悪魔は元々の種族はサキユバスだった。人を食らうでもなく魅了により男の精を糧としていたこの悪魔はあまり戦闘向けではない。

だが、と川上は続ける。

「非常時にあまり人を、特に俺を当てにしない方がいい。誰かを守るとかはそもそも

もやった事もない。自分の身は自分で守れ」

川上はそして言った。

「自分の身も守れない奴は」

「死ねばいい」

その時の川上の言葉は氷のようだった。

小悪魔は一瞬背筋に冷たいものを感じた。

「わかりました。すみません」

小悪魔は思わず俯き加減に謝る。

「ただ」

川上は続けた。

「仕事である以上本当に何かあった時は出来る限り守るが期待はしないでくれ」

川上は相変わらず抑制のない口調でそう告げた。

小悪魔は笑った。

「はい、ありがとうございます」

守ってくれると信じているとか、そういう言葉を返すべきじゃないのが理解出来るくらいに小悪魔は聡かった。

先程の氷のような冷たさが川上の本質の一面だと理解したのだ。

そしておそらくはそればかりではない事も。
小悪魔はゆっくりと川上を理解していこうと思った。何となく小悪魔は思ったの
だ。

人とは違った形かも知れないけどそれでも彼は優しいのだと。

第34話

咲夜はメイド妖精の実働部隊に侵入者への警戒を呼び掛ける。

それと共に自らが時間停止を利用して館内の潜伏出来そうな所を見て回った。

結果咲夜自身は侵入者は発見出来なかった。恐らくはハンターは川上の殺した一人だけだったのか、あるいは他の人員は断念し館から既に撤退したのかも知れない。

後は念の為メイド妖精達が警戒を続けておけば取り敢えず大丈夫そうだと判断した所で咲夜は気付く、そういえば主であるレミリアの無事は確認したが同じく吸血鬼であるフランドールの安否を失念していた。

思い立ったがすぐに時間停止でフランドールの部屋まで移動し確認する咲夜だがフランドールはそこには居ない。一瞬焦る咲夜だったが、そういえばと思います。

フランドールは昨夜川上の部屋で遊びながら寝付いてしまつてそのまま彼に預けていたのだと。

直ぐに川上の部屋に移動するとフランドールはベッドの上でタオルケットにくるまり静かに寝ていた。

「妹様」

ほっとして咲夜はフランドールの頬を起こさないようにそつと撫でた、咲夜の顔には安堵と愛情からくる柔らかい笑みが浮かんでいた。

「安心しておやすみなさいませ」

咲夜は静かにそう告げると川上の部屋を後にした。

川上は気になった。

小悪魔の手伝いで本を運んでは、小悪魔が整理するというスタイルで仕事を続けていた。

小悪魔は手際よく所定の位置に本棚に本を戻していく。

その小悪魔の背中。

背中から生える黒いコウモリのような翼が気になった。

見た目はコウモリのそれだ、レミアの背のそれとも類似していた、しかし当然コウモリの翼等より遥かに大きい。

移動する時等時折ばたばたとゆっくり羽ばたいているようにも見える。

気になった。

故に川上は手持ちぶさたな事も相まって本棚に向き直って作業をする小悪魔の翼に手を伸ばした。

「ひゃんっ！」

不意討ちに翼に触れられた小悪魔は頓狂な声をあげ本を思わず取り落としてしまった。

川上は翼の膜の貼ったようになっていいる部分に指を滑らせる。

「あ、ん、だめ……ですよ」

小悪魔は翼に触れられるのがもどかしいのか顔を赤くして声を出す。その様が酷く淫媚に聞こえるのは彼女の元の種族がサキユバス故か。

しかし川上は表情を変えず手で翼を少し撫でて手を離れた。翼はちゃんと血が通っているのか暖かく、ごく細かい毛が表面を覆っているのかベルベットのような独特の手触りがした。思わずいつまでも触っていたくなるような手触り。

「もう、いきなりどうしたんです？」

もどかしさから解放されたのか小悪魔は川上に問いただす。

「すまない、何となく気になったもので」

川上は平然と返す。

「もう、急に触ったら驚くじゃないですか。触りたかったらそう言って下さいよ」
「わかった。しかし意外と気持ちいい手触りだった」

川上は正直に感想を述べると小悪魔は恥ずかしかったのか少女のように顔を赤く

してうつむいてしまった。

そんな小悪魔を尻目に川上は全然関係ない事を思っていた、眠い、と。

彼は昨夜フランに付き合わされたせいで寝不足だったのだ。

「仕事を続けよう」

「そうですね」

川上がそういうと小悪魔は笑顔でごまかしつつ落とした本を拾って整理を再開した。

「何をやっているのよあの二人は」パチュリーの目の届く場所でそんな事していた二人にパチュリーが思わずそう呟いた。

それからしばらく作業を続けていた二人だったが小悪魔が顔をあげて言った。

「とりあえず一段落ですかね」

「そうだな」

川上は頷いた。

「そろそろお昼ご飯の時間ですから食堂に行きましようか」

「ああ」

二人はパチュリーの所まで戻ってきた。小悪魔がパチュリーを昼食にさそったが

特に食べたくなかったのかパチクリーは断った。そして結局二人で食堂に向かう事となった。

「でも川上さんは細身なのに力があるんですね」

食堂への道を歩みながら小悪魔は川上にそう話しかける。

「たまに言われる。筋肉の質の問題らしいな」

一件細くても黒人のそのようにバネに富んだ肉質というのは存在する。

「それにお嬢様を狙うようなハンターを倒してしまうなんてお強いんですね」

小悪魔は感心したように言う。

「ついだったから斬ったようなものだ、そんな大した事じゃない」

川上は本心からそう思っていて、襲われたから躲しがてらついでに斬った、勝手に

体が動いたとも言うが。

「その刀いつも差してますし、剣術が得意なんですか？」

「剣術もそうだが古武術の類いは一通り嗜む」

「古武術って昔に作られた武術なんですか？」

「日本が合戦の最中等に築いてきた戦闘術だな。昔の人間の知恵は凄いものだと思いでよく思った。現代でも及びも付かないような効率のいい操身術を考案したの

が昔の人間だと考えるとな」

少し饒舌な川上だったがそんな感じで雑談しつつ、食堂に入り昼食の席に着いた。まだ吸血鬼姉妹は寝ているのか不在だ。

もう食事の準備は出来ていて、咲夜も席に着いている。

「メイド長」

「何かしら」

珍しく川上から呼び掛けた。

「例の侵入者は」

「ああ」

咲夜は頷いた。

「もう大丈夫でしょうね、館に侵入者はもう居ないわ、貴方も安心していいわよ」

「そうか」

自分から聞いておきながら川上は素っ気なく会話を切った。

「良かったです」

安堵を顔に滲ませつつ小悪魔も席につく。

「お嬢様も妹様も無事だったしね」

「今回は早い段階で川上が敵を斬ってくれて助かったわ」

咲夜がそういうと川上は顔も向けずひらりと手を振る。大した事じゃない、そういう意味か。

「じゃあ頂きましょうか」

「頂きます」

皆でそう挨拶して昼食は始まった。

第35話

ゆらゆら——

ゆらゆらと——

どこか紫がかって見える濃密な白い煙が立ち昇っていく。それは暫く虚空をただよっていたがやがて行き場を見失ったかのように空気に溶けて消えた。

男は指の間にはさんだ両切りタバコを口元に持っていきゆっくり5秒かけて吸いこむとまた長い紫煙を吐き出した。タバコをゆっくり燻らせる20代前半程度と思われる男はやや長めの前髪をした黒髪、その顔立ちを整っていたが何より特徴的なのは眼だった。日本人としては変哲もないブラウンの虹彩の眼は正面や上を向く時黒目の左右だけでなく下にも白眼が見える三白眼と言われる眼だった。一般に悪相とか目つきが悪いなど言われるそれだ。

そしてその三白眼は殆ど感情を表す事もない。その眼が男の酷薄な本性を物語っていた。服装は仕事用に支給された黒の礼服、そのズボンのベルトに一振りの刀を差していた。打刀拵に納められた何百年も前に日本古来の製法で打たれ現代までその姿も機能も保った古い凶器……人殺しの道具——刀。

花の咲き乱れる館の中庭で男——川上は一服していた。例によつて一番に食卓を立つた川上はそのまゝ図書館には戻らずに中庭で小休止していた。咲き乱れる花に眼を向ける川上の顔には何の感情も浮かんでなかつた。

短くなつたタバコを携帯灰皿に入れながら川上は花壇の元にかがむ。

咲き誇る花たちだがそれは無秩序な咲き方ではなく理路整然とした見る者のことまで視野に入れた秩序ある咲き方だつた。手入れしている者の腕のよさと思ひ入れだろうか、ふと川上は考へる、この手入れをしているあの中華風の服に身を包んだ少女のこと、あの女の名前はなんといつたか……

すぐにどうでもよくなり川上は立ち上がる、数匹の鮮やかな羽をもつ蝶が戯れている、どこかの木に止まつた小鳥が澄んだ声で鳴いた、美しい庭だつた。

悪魔のすむ館というには似つかわしくなくらい美しい。そう不自然なほど。

川上の眼は冷めていた、美しい庭もただそこにあるモノとしか視ていない。瞬間風が小さくヒュリツと鳴つた、そして川上は踵を返した、何時の間にか抜いていた刀を納めつつ歩く。

館の中に戻る川上の後ろで庭で戯れていた蝶が数匹無残にばらばらになりながら地に墜ちた。

「今日もおそうじ〜?」

地下図書館に戻る最中黒髪セミロングのメイド妖精にそう興味津々に話かけられた川上はまた捕まったか、と思っていたかもしれない。実際のところ彼の表情はまるで変わらないのでよく分からないのだが。

「今日は図書館の手伝いだ」

川上の返答も相変わらず言葉少なだった。

「へ〜そうなの? 私は今日はやることがないの」

館に雇われているメイドにやることがないとはどういう事なのか? 単なる人員過多じゃないか等突っ込みどころは多かったが川上は突っ込み役ではなかったらしい。

「そうか、よかったな。俺はまだ仕事があるからじゃあな」

そういう図書館へと向かおうとする川上の服の裾をすかさず引く妖精。

それで足を止め例によって無言で妖精を見下ろす川上。その人によっては背筋が凍りそうなほど無感情な眼に見据えられても妖精の眼は爛々としていた。どうやら物怖じというものを知らないらしい。

「手伝う」

「何」

「貴方といっしょに仕事する」

その提案にもやはり無表情だった川上だったが。

「……好きにしろ」

別にどうでもいいと思っただのかそう答えると歩を進めた。メイド妖精もすぐ追いつかり川上の服の裾を掴んでついていく、が川上はその妖精の手を振り払う。

「服の裾が伸びる」

そう注意して歩き出すがまた妖精の手は川上の服を掴んだ。

川上は息をひとつ吐く。なんとなく身体的接触を好む奴だと川上も思っていたが、面倒なので裾を掴む妖精の手を取り握った。小さく柔らかく熱い手だった。川上は首だけで振り返って妖精を見ると妖精は嬉しそうに笑って川上の手を握り返してきた。

傍から見たら兄妹だろうか？ いや、そんなモンじゃない目付きの悪い黒服の男と幼いメイド服の少女だ。もつと怪しいなにかに見られるだろう。

だが川上はそんな事にはかまわず妖精の手を引いて図書館に向かった。

川上は妖精の手引いたまま図書館に入る。そのまま奥へと進んで行くと気配を察したのか書庫の間から小悪魔が顔を出した。川上とメイド妖精のコンビに少し驚きを見せるが今だ繋がれたままの両者の手を見て微笑んで言った。

「仲がよろしいんですね」

「そういう訳でもない」

微笑ましいいモノを見たかのように思わず言った小悪魔の言葉にやはり感情をこめず川上は返す。しかし当の妖精は何が嬉しいのか川上の手を握りニコニコしていた。

「中々戻ってこないから少し心配しましたよ。また迷ってるんじゃないかって」
小悪魔が冗談まじりにそう言う。

「すまない。少し一服していた」

「そのメイドさんは？」

「お手伝いにきた」

「……との事だ。適当に使ってやってくれ」

「そうなの、ありがとう。じゃあ一緒によろしくね」

「うん、よろしくー」

そう小悪魔と妖精は挨拶を交わした。

「では仕事の続きに取り掛かるか」

「そうですね。じゃあがんばりましょう」

そうして三人は図書の整理に取り掛かった。川上が本を運び小悪魔がその本の整理、妖精がそのサポートという形だ。

三人で時折取りとめのない話をしつつも作業は進む。

「メイドさんはお名前なんていうの」

小悪魔が妖精に名を尋ねる。

「名前？ないよー」

「えっ、名前が無いの？」

「うん、生まれてから誰もつけたりしなかったし自分でもつけなかったから」

妖精はあっけらかんとそういう。

小悪魔は、んーと少し思案し笑った。

「なら、いまから貴女の名前つけてあげられるね」

その言葉に妖精は眼を丸くした。

「でも別に名前なんてなくても困らないよ？」

「ダメよ、名前はその人を表す大事なものなんだから」

「そうなの？」

「どうやら名前に頓着がないらしい妖精に小悪魔が諭すように言う。

「川上さんもそう思いますよね？」

「・・・そうかもな」

妖精同様名前などどうでもいいと考える性質でなおかつ小悪魔自身に『お前も名無

しじゃないのか？』と疑問を感じた川上はぞんざいに同意しておいた。

「じゃあどんな素敵な名前にしましょうか」

小悪魔がそういった時妖精が上目遣いに川上を見ながら服の裾を引いた。例によつて無言で眼で何だと問う川上。

「あなたがつけて」

「何？」

「あなたがつけた名前がほしい」

それは川上に名前をつけて欲しいというささやかなおねだりだった。

「あらあら川上さん、これは責任重大ですねえ」

小悪魔が面白そうに笑つて言う。

「名前か……Aでいいんじゃないか？」

「……私A？」

「かくわくかくみくさくん」

小悪魔が笑顔に怒気を滲ませつつ迫る。

「大事なことなんですからもっとちゃんとしてあげて下さいね」

「ううむ」

小悪魔にそういわれ川上は首を捻る。面倒だから適当にそれっぽい名を上げこの場を収めようとする。なにか適当なのは……。

「アニス」

「あにす？ わたしアニス？」

パチュリーと同じく香辛料、ハーブの名から響きがいいのをとったものだった。

「ああ悪くないな。お前はアニスだ」

「アニス、うん私今日からアニス」

妖精——アニスは響きを確かめるように名をつぶやくと嬉しそうに笑った。

「アニスちゃんですか。うん、素敵な名前ですね」

小悪魔も微笑んでそういった。

「じゃあ名も決まったから仕事を続けよう」

そしてやはり川上には情緒もへったくれもなかった。

第36話

——昼過ぎ

昨夜川上を遊びにつき合わせ、そのまま眠ってしまったフランドールは川上のベッドで目を覚ました。眠そうに目をこすり猫のように伸びをししばしベッドの上でまどろむ。

目覚めて見上げた場所がいつもの冷たい地下室の天井ではなかった事にほんの僅かに混乱するが、しばらくして思い出す。ここはあの妙な人間の部屋で自分は昨夜そのまま眠ってしまった事を理解した。

フランはぎゅつとベッドに顔を寄せる。……ベッドは匂いがした。今まで嗅いだことの無いような匂い、川上本人の体臭にタバコのヤニが混じった独特な川上の匂い。

フランはスンとその匂いを吸い込む。……不快な匂いではなかった。

変わった人間。フランはそう川上に対してそう思った。フランが今まで相手してきた人間、魔理沙、霊夢、咲夜、そのどれとも違う人間だった魔理沙達三人も常人とは違うが川上はまた違った。

雰囲気が違う、匂いが違う、体が違う、動きが違う、態度が違う、……眼が違う。同じ人間でも他人である以上違いがあるのは当たり前だ。しかしフランは純粹に川上という一人の人間に興味を持った。

なぜなら初めてだったのだ……。フランと相対した相手は必ずその眼に含みがある事をフランは嫌でも感じ取っていた。それはフランが吸血鬼という最凶クラスの化け物：くわえて生来も『破壊』能力の危険性を知っていれば当たり前前の事だった。対峙するのに緊張を強いられるのは。フランは実の姉が自分を見るときの眼にもその含みが僅かに見え隠れしているのに気付いている。隠しても隠し切れないのだ畏怖というのは。

だから初めてだった……。自分をただそこにあるモノのようにしか見ていない。路傍の石、そういう風に自分をみる川上の眼が。

そんな川上にフランは興味を持ったのだ。いったいアレがどんな存在なのかを知りたい。クンともう一回小さくフランはベットに残る川上の匂いを嗅ぐ。

「たばこの匂い……。お父さんがいたらこんな匂いなのかなあ……」

「川上はお父さんって感じじゃないか。じゃあお兄様？ ふふ、お兄様か」

フランはベットから降りるとふと空腹を覚えたので咲夜に食事をねだりに行く事にした。その後は川上……お兄様のところにも行こうと考えクスクスと笑いながら

部屋を出た。

川上は図書館の壁に寄りかかりタバコに火を着けた。ふうと煙を吐く、その川上の腹部に黒髪セミロングのメイド妖精……川上によって名付けられたアニスが寄りかかってきた。

ちつ、とうつとうしかつたのか川上は口内で小さく舌打ちしたが、とくになにも言わずタバコを口に運ぶ。アニスは川上のフリーになっているほうの腕に抱えるように抱きついて笑った。

川上は何も言わずにタバコは銜えたまま右手をアニスの顔に近づけると——ピシツとアニスの額を指で弾いた。

痛かったのかアニスは川上の腕を放し自分の額を押さえる。おでこをさすりながら涙目で川上を恨めしげに見上げる。川上はタバコを唾えたまま悠然と壁に寄りかかってアニスを見下ろしている。タバコを唾えた口の端はどこか面白がってるかのようになんていた。

そこでアニスが反撃にでた。ほぼ棒立ちになっている川上の水月に向ってストレートパンチを放った。以外と鋭いアニスの突きだったが川上が右手で払うような仕

草をただけで力のベクトルを変えられパンチは外れそのまま勢いあまってバランスを崩してしまう。実戦ならそこで投げ技で地面に叩きつけ当身で止めを刺す場面だが変わりに川上はアニスの額を再度弾いた。かなり痛かったのかアニスは額を押さえてうずくまってしまふ。川上はくつくつと笑いながら一連の間の器用に吸って短くなつたタバコを携帯灰皿に入れた。

ダメージから復活するとアニスは悔しいのか川上にすがりつくようにして両手で川上の胸をほかほかと叩いてきた。

川上はそのアニスの頭を捕らえると前髪を搔き分け弾かれて少し赤くなつた額を撫でた。それでアニスは眼を細めておとなしくなる。そのまま頭も繊細な手つきで撫でてやると柔かい笑みを浮かべて気持ちよさそうに川上に身を委ねてきた。単純。川上はそんなことを思ったかもしれない。

「あのく仲が宜しいのは結構ですけど、整理の続きしましょうよ」

そこでその寸劇を見ていたのか小悪魔が苦笑いを浮かべて遠慮がちに言ってきた。

「そうだな、続けよう」

川上は何事もなかったかのように身を正した。撫でられるのを中断されアニスはやや不満げだった。

「今日のところはもう少して終わりにしましょう」

「そうか、なら早いところ終わらせてしまおう」

そうして川上と子悪魔、アニスの三人は最後の本の束を処理したところで今日の分の仕事を終えた。

「ご苦労様でした。手伝ってくれてありがとうございます。アニスちゃんもありがとうね」

「ああ、お疲れ様」

「おつかれさまでした」

「お二人ともお疲れでしょうから、お茶でもいかがですか。美味しいのを煎れますので」

「ああ、貰うよ」

「のむ」

「では先にパチュリー様のところで待っていて下さい。すぐ準備いたしますので」
「わかった」

それで川上は踵を返しパチュリーのいる方へと歩みを進めた。その後をアニスがついていく。しかし川上はまっすぐは向わず書庫の間で本棚に寄りかかりタバコを取り出すと火をつけた。

ゆつくりと煙を楽しむ川上の腕に例によって抱きつこうとしたアニスがまた川上

に額を弾かれた。

第37話

静かな所だった——。

白い壁に木目の天井板張りの床。

壁には刀掛けがいくつも並び、多くの木刀や袋竹刀、そして模擬刀が掛けられていた。少し高い位置には槍掛けもあり白檜の棒、同じく木で形を模した薙刀、槍なども掛けられていた。

壁の真ん中には一つの掛け軸が掛けられていた。どこか厳かで神聖さを感じられる場所。そこは武を心ざす者が己が技を、肉体を、精神を高めるために鍛錬する場、道場だった。

かつての武芸者達、その者達が扱ったといわれる戦闘技法。古の武術、兵法、……殺しの技、それを現代までつたえる道場だった。ルールが徹底されすでにスポーツ競技化されてしまった剣道や柔道等の現代武道を教える道場とは違い、平和な今の日本では異端な道場といえた。

そんな板張りの床の道場の真ん中に一人の少年が座していた。

稽古着に袴姿の細身の少年、年のころは15才前後だろう。少年は体術的に見ても

完全な姿勢の正座で座しており瞑目したまま微動だにしなかった。それは瞑想などの一種の精神的鍛錬だったのかもしれない。座する少年の右手側には黒い漆塗りと柄巻きに収められた常寸の刀が置かれていたそれは偽刀ではなく真剣だった。と――

風が少年の首があつた場所後ろからを一瞬で凧ぐ。しかし少年はそれより一瞬早く刀を掴みつつ斜め前に転がりさらに後ろに向き直りつつ跳んで距離をとる。そして目の前の人物を見つめる。

「……やはりそう上手くは終わらせられぬか」

どこか諦念混じりにつぶやいた人物は少年と同じ稽古着に袴の総髪の男性だった。最早老境に差し掛かっている外見だがその物腰が、そして手に構え今しがた少年の首を刎ねんと閃いた身の丈にせまる長さの野太刀が只の老人でない事を物語っていた。

「こんな時でもお前のその目は変わらぬのだな」

老人の言葉どうり少年の眼は特に感情らしきものを映してなかった。ただその無機質な三白眼で老人を見据えたまま左手に納めたままの刀を下げて自然な構えで立っているだけだった。しかし少年も口を開く。

「先生」

それは自分の師への言葉。

「何故です？　今は泰平の時代、この法治国家で僕を殺せばどうなるかわかってい

るでしょう」

「無論だ。俺は罪人だろう」

「だがお前も知っているはずだ。たとえ罪人として死罪になろうと斬るべき時に斬れぬ者は士道不覚悟のいわれだ」と

「……」

それでも少年は無感情と姿勢を崩さない。

「お前には教えられた。凡才と天禀を持つものの違いを、俺は数十年の鍛錬の末ここまで来た。しかしお前はもうその歳で、武の一つの極地と言える『眼』の域に達してしまった」

「では僕は晴れて免許皆伝と？」

「ああ俺もそうしたかった。だがな」

「おまえは人を斬る」

その言葉を聞いたとき少年の眉がヒクリと動いた。

「わかるのだ。お前は必ずその手を血に染める。なぜならお前は武術を人殺しの手段としかみていない」

「お前は武術の鍛錬をおこなっているようでその実、人を殺すための鍛錬しかして
いない！」

「武術は確かに殺法だ。しかしそれはむやみな死を生み出すようなものではない。いやそうあつてはならない」

「武は生きる人の為のものではなくてはならぬのだ」

「お前が生きる人に害するのなら」先生

言いかけていた老人の言葉をさえぎり少年は抑制なく言った。

「殺法は殺法、殺しはただの殺しですよ」

それを聞いて少年の師であるこの道場の主はもはや言葉もなくその長大な野太刀を八双に構えた。

少年は師の野太刀に比べるとまるで小刀のように感じる刀を鞘から抜きつつ言葉を紡いだ。

「先生」

「僕は先生の教える武術は紛れも無い本物だと認めていました。でも今語ったような貴方の考えかた、ひいては……」

「俺は貴方の事が大嫌いでした」

もう言葉は無かった。

師は野太刀を肩に担ぐような八双の構え、そして少年は半身になって刀を握る手を引いた腰付近にやり、刀身を床すれすれに下げる脇構えになったまま、すり足でお互い

に間合いを計る。

師は思っていた。

最初の奇襲の一刀が外れた時点ですで絶望的だと。

普通に考えて常寸の刀と長大な野太刀ではリーチの差から考えてもどちらが有利かなど考えるまでもない。無論扱いこなせる事が前提だが。

しかし師には自分が勝利し生きて立っているビジョンが思い浮かばなかった。もう目の前の少年は自分がどうこうできるレベルではないのだ。自分では遠い武の境地に容易く立った怪物だ。

しかしその怪物を結果的に育ててしまったのは師でもある。ゆえに初めから自分の命など計算に入れないことにした。

相打ち覚悟で怪物を討つ！

すでに互いの間合いは師の野太刀は一刀足で届き、少年の刀は間合いにはほど遠い距離。完全に師にアドバンテージのある距離。次の瞬間――

師が踏み込みつつ野太刀を繰り出し一瞬遅れて少年も神速で動いた――

瞬きの際に両者は交錯しそれで勝負は決まった――

フランはお腹も一杯になり鼻歌など歌いながら上機嫌に歩いていった。

川上の居場所も咲夜にすでに聞いていた、それでフランは地下図書館に向つていった。もつと川上と遊ぶために。

「パチュリー」

「あら妹様。図書館に来るなんて珍しいわね」

フランは地下図書館まで来るとパチュリーに声をかけた。

「どうしたの？ またご本でも読んであげましょうか？」

パチュリーは珍しく柔かい声でさういう。

「うん、今はいいよ。それよりお兄様しらない？」

「お兄様？ 川上のこと？」

あれはお兄様なんてタマかしら、などとすこしぶつぶつ言ったあとフランに告げた。

「そのソファで寝てるわよ」

「ありゃ」

パチュリーの指すほうを見ると確かに置かれてる二人掛けソファに川上は刀を

抱えるように横になり寝ていた。理由は言うまでもなく昨夜フランにつき合わされたための寝不足である。

「ん〜」

眠ってるのならどうしようかと考えながら静かに川上の元に近づいて。

「やー」

とりあえず川上の腹にごく軽い手刀を落としました。

第38話

「わお」

フランドールは感嘆した。眠っている川上を起こすために彼の腹に落とした手刀、最近手加減も覚えてきたフランのそれは当たっても精々悶絶する程度の軽いモノだが、しかしそんなもの睡眠中に食らったらたまったものではないだろう。

しかしその手刀は掴み止められていた。寝入っていたはずの川上に手によって。フランの手を掴み横になったままソファアアの上の川上はタダでさえ陰鬱な眼なのに寝起きでさらにどんよりと曇った眼でフランをみた。

「起きてたの？」

「……今起きた。君のおかげでな」

フランの問いかけにけだるげに答えフランの手の離れた。

「戦闘を専門とする人間は油断がない。睡眠中すら敵に反応する……なんてどこかの本で読んでいただけ本当なのね」

それを見ていたパチュリーが感心しているのかいないのかわからない抑制のない声でそう感想を述べる。

「当たり前だ、殺しは競技でも遊びでもない。本気で命を狙ってくる敵なら必ず相手が無防備なタイミングで確実に狙うだろう。入浴中、食事中、睡眠中は無防備の最たるものだ。故に武術家などは危険を察知してから構えるんじゃない。普段道理自然にくつろいでいる状態がすでに構えだ」

眠気が覚めてきたのだろう。そう武の理念を語りながらソファから横になつていた状態から座りなおし、刀を床に立てた。

「……なるほどそれが貴方のつかう古流の兵法だったかしら？　の理合なのね」

「少なくとも俺は師にそう教わつた……」

答えながら思い出す。目覚める前にみていた夢。自身の師との決別を——。川上は無意識に右手で服の上から古傷をなぞつていた。左の肩口から胸の中央へと走る刀傷の痕。彼の師が執念でつけた傷だった。川上が生きていて唯一付けられた傷だ。

「ふうん確かに人間はすぐ壊れちゃうから気をつけないと大変かもね」

そんな川上の膝の間にポスツと座りながらフランは言った。身長差的に川上の膝の間にフランが座ると川上がフランを包みこむような塩梅になった。

「君とて寝てる間に心臓に白木の杭でも打たれればまずいんじゃないか？」

突然のフランの身体的接触には何の反応もせず、川上はそんな事を問いかけた。

「うーん、たしかにそれは痛そうね」

そういうつつフランは川上の胸元に顔をよせタバコ混じりの川上の体臭を嗅いだ。ベッドとは違った濃密な匂いがした。

「ん……お兄様の匂いがする」

「なあ、妹様は匂いフェチかなんかなのか？」

川上の匂いを嗅ぎつつ呟くフランを見た川上はパチュリーにそう問うた。

「さ、さあ？　そういう訳じゃないと思うけど吸血鬼は嗅覚も鋭いから貴方の事を匂いで覚えてるんじゃないかしら？」

人間に猫のように擦り寄るフランが珍しく驚きつつもパチュリーは答えた。

「あら、川上さん妹様とも仲がよろしいんですね」

そこに丁度通りかかった小悪魔がフランが川上の膝にいることに少し驚きつつも、微笑んでそういう。

「メイド妖精の事といい貴方もしかして子供に好かれ易いの？」

「ひどいパチュリー！　私こどもじゃないもん！」

パチュリーの言葉に頬を膨らませつつ反論するフランは誰がみても子供らしい愛らしさにあふれていた。やれやれと思いつつながら川上はフランの髪を繊細な手で梳いた。フランが触れている部分からはその幼い身体故の高い体温と熟した果物のような甘い香りが感じられた。それは幼い外見でも吸血鬼の魔性を宿している事を象徴する魅惑

の香り。

「べつに子供に好かれやすいなんて自覚したことはないがな」

「そんなことよりお兄様！」

「なんだ」

川上の言葉を無視し、いきなり声をあげるフラン。それに相変わらず無感情に応じる川上。彼はフランからの自らの呼び方が『お兄様』になつていることにすら疑問を挟まなかった。例によつて呼称などどうでもいいと思つているのだろう。もしかしたら彼は人から『クズ』という呼称で呼ばれても気にしないかも知れない。

「遊ぼう」

「断る」

フランの要求を川上はにべもなく却下した。

「こつちが仕事を終えて休んでいたところを叩き起こしてくれてさらに遊んでくれるとは中々いい神経してるな」

そう不平を言う川上の言葉は持ち前の抑制のなく感情が読みにくい声色ゆえになかなか皮肉じみていた。彼自身皮肉のつもりで言ったのだろうか。

「いいじゃない遊ぼうよ」

「俺はもう少し寝たいんだ……」

仮眠はとつたとは言え川上はまだ昨夜の睡眠不足が尾を引いているのかも知れない。

「いいじゃないですか川上さん。少しだけでも妹様と遊んであげて下さい。それでお疲れになられましたらまたお茶を煎れて差し上げますから」

「それに咲夜に聞いたけど妹様の相手も貴方の業務の内なのよね」

そこで思わぬ小悪魔とパチユリーの横槍が入る。それでフランも川上の膝から降りて川上に向き直り訴える。

「ね、遊ぼ……」

それで川上は顔を伏せ、ちつと舌打ちしたが観念した。

「わかったよ付き合ってやる」

「やった!」

それを聞いてパツと花が咲くようにフランは笑顔になった。この笑顔を見て誰か思おう。この少女が吸血鬼という魔で破壊という運命に囚われた最悪の悪魔である……。

「それで遊ぶってなにをするんだ?」

「鬼ごっこ!」

「吸血『鬼』と鬼ごっこか……。中々洒落が効いてるな」

さながらリアル鬼ごっこと言った所か、川上は思いながら何が面白いのか口の端を歪めた。

「それは捕まったら喰い殺されるのか？」

「そんな事しないよ、だつて約束だもんね」

——穏やかな遊びなら付き合つてくれるつて。

そんな事も言つたか。そう川上はソファアから立ち上がった。そのままパチュリーの元まで歩みより左手に持った刀を手渡した。

「これは何よ」

「預かつていてくれ」

いきなり刀を渡され戸惑い聞くパチュリーに一言そう答える。ただ逃げるといふ機動力重視なら刀は重荷となると判断した。実際やつてみた者ならわかるが腰に長物を差して動くというのはそう容易い事じゃない。

「……剣は侍の命というらしいけどそれを私に預けていいの？」

「任せた」

それだけ言つて川上はフランに向き直る。

「100数えろ。その間に俺は逃げるから数えおわつたら捕まえてみせろ」

「わかつた！ じゃあ数えるよ。いくち、に〜い」

フランが数え始めると川上は早々とその場を去った。それをよそ目にパチュリーは川上の刀を手に少し慌てていた。

「少し重いわねこの剣。小悪魔、これどうしよう」

「どっかに立て掛けておきますか？」

「でも彼の大事な物でしょうし……」

「ではテーブルの上に置き見ていれば安心なのでは？」

「そ、そうね、そうしましょうか」

二人がそんな事を言っているうちにフランも数え終わり川上を追いに出た。

「お兄様の匂いは覚えたからすぐ捕まえちゃうんだから！」

そんなこといいつつ走っていくフランの背中を見つつパチュリーは呟いた。

「小悪魔、貴方言ったわよね。川上には変わった安心感があるって」

「え？ はい、言いました」

「たしかにあの男には変わった魅力があるのかも知れないわね」

だつて——とパチュリーは続ける。

「あんなに妹様——フランが楽しそうなのは久しぶりにみるもの」

パチュリーは珍しく微笑んでそう言った。

第39話

紅魔館の廊下を疾走する男がいた。

別に逃走中の侵入者といった者ではない彼は館に雇われたれっきとした使用人、川上だった。

なぜ彼が走っているかなど言うまでもない彼が悪魔の妹とのリアル鬼ごっこ中だからだ。しかし吸血鬼の身体能力は天狗に匹敵するスピードを誇る。いくら鍛えようとも情弱な人間と文字通り化け物の吸血鬼で鬼ごっこなど成立するのか？

川上はフランが百数え、追跡してくる前に掃除用具入れの小さな倉庫へとたどり着き扉を開け放った。そして前から眼をつけてたモノを取り出す。それはなんの変哲も無いただの木製のモップだった。しかし川上はそれを手に小さく笑って呟く、上々だと。

川上はモップのヘッド部分を踏みつけ力任せに持ち手からヘッドを外す。それでモップは持ち手部分のみ。つまりただの棒になった。握りやすさを考慮した太さと絶妙な長さ、棒術の得物としては文句がない。いや4尺より長いくらいの尺から言えば棒と言うより杖か？

川上はそれを握り少し手の中で扱くとヒュツと一振りした。振りながら手の内で棒を滑らせるため間合いの伸びる独特の打突だ。そのため彼の棒術と対峙した者は間合いを見誤り、たいがい気付いた時には天を仰いでるか悪ければ釈迦の下まで飛ばされる事となる。

とりあえずの対抗手段を得た川上はまた走る！

そしてある一室に飛び込むとすぐ扉を閉める。もうフランは追跡を開始したはずだろう。川上はそう考えた。

「ガツ……ゲホ……ゴホ……。あ……なた……ゴホ。いきなりげほなに……」

そして川上が飛び込んだ部屋の主、レミアアはティータイム中だったためいきなりの川上の闖入に驚いて盛大にお茶に咽っていた。

「いきなり失礼した。だが静かに」

そう川上は口のそばで人差し指を立て、静かにとジェスチャーした。

「なんなのよもくさくや〜」

「はい、ただいま」

盛大に茶を噴出してしまったレミアアが咲夜を呼ぶとほとんどタイムラグなく咲夜が現われる。

「で、貴方はこんな所で何をしているのかしら？」

そう懐から取り出したダガーをちらつかせながら咲夜は詰問する。

「すまない、ココがお嬢様の部屋とは知らなかった。寛いでいた所を邪魔したのは謝ろう」

そう川上は隙のない動きで扉側の壁に張り付き外の気配を窺うようにしながら謝罪する。彼は一度この部屋に来たことがあるが場所自体は忘れていたらしい。ならレミリアの部屋に飛び込んだのは単なる偶然なのか？

「ゲホ、そもそも貴方は何しているのよ」

まだ少し咽ながら紅茶で濡らしてしまった服を咲夜に拭いてもらいつつレミリアは川上に聞く。

「鬼ゴット」

「誰と？」

「君の妹とだよ」

ああ、フランと……等とレミリアが呟いているのを尻目に壁に張り付いている川上の雰囲気が変わった。さながら空気に溶かすように気配を殺す。と、ノックもなしにいきなり部屋の扉がバン！と開かれた。

「やっぱりココから匂いがする。お姉さま！ ココにお兄様こなかった!」

フランは部屋の中央に歩みを進めながらレミリアに詰問する。それと同時に扉側

の壁に張り付いていた川上はフランの死角を縫って開け放たれたままの扉から気配無く退室した。まるで暗殺者さながらだと、はたから見えていた咲夜は感心した。

「来たわよ。……たつた今出て行つたけどね」

「あれ？ 入れ違いになつちやつたの？ おかしいな、ここが一番お兄様の匂いが強いのに」

言いつつ隠れてるんじゃないかと思つたのかクローゼットを開けるフラン。それを尻目にいつの間にあの男がフランのお兄様になつたのかと邪推してしまうレミリア。

「ほら、そんなところにはいないわよ。早く追わないと逃げられてしまうわよ」

「むく、絶対捕まえてやるんだから」

そういつてフランも部屋から飛び出していった。

「全く慌しいわね」

レミリアはそう呟き深く椅子に座りなおすと咲夜の煎れなおした紅茶に口をつける。

「でも妹様も楽しそうですし良かったのでは」

「そうね……フランさえ幸せでいてくれるなら私はそれで……」

咲夜の言葉に遠い眼をして誰に聞かせるでもないように呟くレミリア。

「お嬢様……」

咲夜はそれ以上かけられる言葉が見つからなかった。約500年もの間手段を選ばず、それこそ自らが憎まれる事も辞さずに『破壊』という絶望的な運命を背負ったたった一人の愛する家族を守る為に全力を尽くしてきた小さな少女の背中がそこにはあった。

——守る。

だから咲夜は昔誓った決意を新たにす。

——そう守る。

この小さな背中で全てを背負おうとする吸血鬼を。

咲夜は命尽きるまでこの身を刃として愛しい主を守り抜くのだ——

「あのーどうかなされたんですか？」

今川上は曲がり角の壁に例によつて張り付き気配をうかがっていた。相手はこちらの匂いを追跡してくる。故にただ隠れながら逃げるだけではあつさり捕まりゲームオーバー。そのため川上も少しは対策を考えているのだが、棒を手に持ち壁に張り付く怪しい風体の川上に流石にメイド妖精に見咎められた。蒼い髪を腰まで伸ばしアニスとは違い妖精としては長身で丁寧語のメイドだった。

「気にしないでくれ。こう見えて仕事なんだ」

妹様のお守りというな、と川上は口内で呟く。しかしそんな川上を長身のメイドは

ジト目で見据え言う。

「あの、こう言つてはなんですけど凄く怪しいですよ」

そう川上への言及を止めようとしめないメイドに川上はちつと舌打ちした。

「すまないがいま君に構っている暇はない。少し黙れ」

そう言うが否や次の瞬間メイドの後ろに回りこんでいた。右手に持った棒が首に食い込み簡単にメイドの動きを捕縛していた。そのまま左手、中指と親指で人体急所、首の経絡を強めに押さえる。1秒、2秒、3秒でメイドの体が完全に脱力したので川上は拘束を解く。完全に意識が飛ばされたメイドはその場に崩れ落ちたが川上はもうすでに壁の角際に戻っていた。来る！川上は身構えた。

フランはレミリアの部屋から出た後廊下を飛ぶように走っていた。川上のタバコ交じりの匂いを辿つて、確かに川上は比較的近くにここを通つたのがわかった。匂いはだんだん強くなる。近い！そう思つて角を曲がつた時――。

「え――」

フランの天地は逆転していた。

川上は自分が潜む角にフランが飛び込んできた時ほんの一瞬で彼女の腕を取り棒

を反対側の腰に引つ掛けた。それだけでフランは自分自身が突つ込む勢いのまま宙に投げ出された。その時点でもう川上は走りだし逃走に移っていた。本来なら投げたら必ず当身等で追撃し、殺すか無力化するのが柔術である。しかしこれは鬼ごっこだ。殺し合いや立合いじゃない。単に隙を作るすべとして棒術を使った。しかし真つ当な鬼ごっこに武器術を持ち出すのもどうかと思えるが、人間と吸血鬼の身体能力差を考えたら多少のアドバンテージがなければ勝負にならないだろう。

一方フランは受身といった術を知りえない——と言うより人間程度が必要とする技等吸血鬼には必要としない——為思い切り首から床に落ちた。

「あいたたた……今のがお兄様を使うぶじゆつ？　つて奴」

事実フランはほぼノーダメージで立ちあがってきた、今の受身を取らず首から落ちたのがフランではなく人間なら頸椎骨折で即死か良くて全身不随だろう。

「気がついたら宙に投げ出されてるなんてなんか魔法みたいな感じ。美鈴が使うのと全然違うのね」

「やっぱりお兄様は面白いわ。もつと遊ぼう、もつと！」

そういうフランは川上の逃げた方へと走りだす。水切りの石のように弾けるような疾走だった。角を曲がると逃走する川上の背中を補足した。と同時に爆発的な脚力であつという間に川上にせまるとそのまま川上を捕らえる事はせず彼を追い越し川上

の進行方向に立ちふさがった。

しかし川上も疾走を緩めたりしなかった。彼は疾走の勢いそのままに猫の如く足のバネで壁に跳躍すると、さらにその壁を走るようにさらに跳躍し、天井を足場に蹴りフランの後ろにしなやかに着地した。まさに猫そのものの超人的な体裁きだった。

「わお、お兄様器用なんだね。猫さんみたい」

「さすがに壁走りは道場でも俺を含めた僅かな高弟しかできなかつた動きだから。しかし人を猫呼ばわりするのはいいが君も充分猫っぽい所があるぞ」

「じゃあ私たち猫さん仲間だね」

「まあどうでもいいけどな……」

川上は無感情にそういうと棒を正眼に構える。さすがにこの状況で背中を向けて逃走に移るほど彼は愚かではない。

「じゃあお兄様を捕まえて私のモノにしちゃうけど覚悟はいい？」

別に捕まってもお前のものじゃないけどなと川上は心中呟く。その瞬間川上を捕縛しようとして伸びてきたフランの左手を棒で絡めとりながら川上はフランの懐に入り身する。川上がフランの肩を取った瞬間フランはまた先ほどと同じく投げられると思ひ、対抗しようとした瞬間に先ほどの投げとは正反対のベクトルの投げで前のめりに床に思い切り叩きつけられた。

フランが復帰する前に川上はより遠くに逃げようと、近くにあった窓を棒で砕くとそこから中庭に飛び出した。二階からの跳躍だったが川上は猫のように衝撃を膝で吸収し柔かく着地した。

「あつずるい！」

顔をあげたフランは窓から飛び出す川上に声を出す。まだ日中、外は吸血鬼の天敵の日が降り注いでいる。そんな所に逃げるのは反則だと抗議しようと思つたが身を乗り出すと中庭に下りた川上はすぐ館内に戻っていく。1階だ、1階で今度こそ捕まえる。そう考へてフランは階段へと走つた。

「必ずつかまえるんだから♪」

なおこの鬼ごつこの結果は川上が一時間粘つたが最後は体力切れでフランに抱きつかれて捕縛され勝負がついた。

第40話

紅魔館大浴場――

さすがに外見も立派な館だけあり浴場も温泉旅館もかくやと言う規模だった。大きな浴槽にやや温めの湯が張られ、タイル貼りの浴室内は洗い場が並んでいる。なお流水は吸血鬼の弱点だが入浴程度は出来るらしい。

その洗い場で髪を流している男が一人。この館に男は一人しかないその人物はもちろん川上だった。

彼は図書館の手伝いにさらにフランとの鬼ごっこも重なりそれなりに体力を消耗していたため、汗と疲労を流すには入浴はうってつけだった。日が落ち夕食も終わり彼は汗を流しに来ていた。

だが問題としては川上が来るまで館は女所帯だったということだろう。もちろん男湯の区別や時間帯など決まっていない。ゆえに……。

「失礼するわよ」

「ああ」

館の住人との混浴に高確率でなってしまうのだった。パチュリーは病的まで白い

肌と痩せ気味な割りには豊満な乳房も隠そうともせず全裸で川上に構わず浴室に入ってきた。しかし対する川上の反応も実に淡泊なものだった。もとよりこの館にまともな者はいないのだから混浴程度誰も気にしないのかもしれない。

パチュリーが洗い場で髪と体を洗い始めたところで川上は髪を流し終えゆっくり浴槽に浸かった。そして疲労を全て吐き出そうとするかのようにゆっくり深くため息を吐いた。そのまま湯の中で足に触れる。足は張っていた。やはり『鬼ごっこ』で酷使しすぎたと川上は思った。なにせ全瞬発力を使わなくてはいけない壁走りまで使ったのだ当然の結果と言えた。

しかしその日の疲労を明日に持ち越してしまうのはまずい。川上は湯の中で入念に足を指圧し始めた。筋肉のツボを刺激しゆっくりと疲労の溜まった足をほぐしていく。

「何してるの?」

体を流し終わったらしいパチュリーが川上と同じように湯に浸かりながら川上に聞いた。

「足の指圧だ。今日は足に負担をかけ過ぎてしまったからな。まあこういった体のメンテナンスも鍛錬の一環でね」

「ふーん武術家も大変ね」

「武術家なんて果たして俺なんか名乗っていいのかはわからんがね。だが君は少しは運動したほうがいい。魔女だか知らんが体が弱るぞ」

「余計なお世話よ。自分の体の管理くらい出来るわ。これでも貴方などより長く生きてるのよ」

「それは失礼」

二人の会話はそこで一旦途切れた。川上は黙々と足のマッサージを続けている。パチユリーもゆつくり湯の温かさを感じていた。彼女の白い肌は湯の温度で桜色を帯初めていた。パチユリーはぼんやりと川上の体を観察した。湯に浸かった部分はよく見えないが彼は細身に見えるがその実無駄の無い筋肉のつき方をしているのがわかった。そして左の肩口から胸に走る古傷。

「……その傷は？」

「……ああ、昔ある武術家と真剣で立会った時にな。まあ不覚傷というやつだ」

「貴方はかなりの手練だと思っていたけどそれでも傷は負った事はあるのね」

「傷は負ったのはその時だけだが自分でも俺が傷を負わされたなんて信じられなかったな」

傷などただ一人相手の立会いで自分が負うはずがないと摂理のように思っていた、しかし川上の刃が師を貫くと同時に師の執念を象徴するように野太刀は川上の肩口に

食い込んでいた。その時確かに川上の摂理はたった一人の人間の意志で破られたのだ。

「大した自信ね。相手は相当強かったのかしら？」

「ああ、確かに強かった」

川上は師の考えは否定していたがその実力は本物だと認めていた。だからこそ惜しかった。故に自らの刃で全てを清算したのだ。

しかしパチュリーにも疑問はあった。川上は割りと謎だらけだから当たり前といえども当たり前だが。

「貴方外の世界では何をしていたの？」

パチュリーの質問に川上はその暗い三白眼を向ける。何を考えているのかわからない底の知れない眼。

「……自分なりに武というものを突き詰めるため試行錯誤しながら精進していた」

「そう……、なら質問を変えるわ」

「貴方……今までに何人の人を殺したの？」

パチュリーのその質問にも川上の眼は何も映さなかった。

「さあ数えたことない……。そんなもん数えたところで意味は無いからな」

「別に俺は殺したスコアを気にする『殺人鬼』じゃないからな」

そう川上は皮肉げに笑って冗談だかわからない事を口にする。

「そう……ならいいわ」

パチュリーはそうバイオレットの眼を伏せ言った。

「さて」

裸の付き合いというには剣呑な会話を切り上げるように川上は浴槽から立ち上がった。

「俺は先にあがらせてもらう。またな」

「ええ……またね」

そう言つてパチュリーを残し川上は浴室から出て行つた。

残されたパチュリーは両手でお湯を掬つてぱちやりと顔にかけた。そのまま顔を手で覆つたまま呟く。

「何よあれ」

「ほんとに人間?」

パチュリーの呟きは浴室に虚しく消えた。しかし彼女は顔をあげ一つ息をつくと言つた。

「まあいいか」

結局細かいことは大して気にしない紅魔館の住人であった。

その部屋は明かりも点けられていなかった窓からは淡い月明かりが差込み室内を淡く照らしていた。そのほの暗い洋間のベッドの上に白い着流しに身を包んだ人影が一人腰掛けていた。

まだ髪濡れた風呂上りの川上は月明かりの満ちる室内で手に持ったグラスを揺らした。カランとグラスは音を立て、遅れてパキッと氷の割れる音が小さく響いた。灰皿に置かれた火の点いたシガレットがうつすら煙を立ち上らせている。今日は氷を貰ってロツクで蒸留酒を楽しんでいた。

灰皿からシガレットを取り一口吸うとそのままもみ消してしまい、グラスから一口酒を口に含む。川上自身の暗い三白眼と合わさって彼は酷く退廃的な雰囲気漂わせていた。

ゴールデンバットの箱から新しく一本啜えた時川上は小さくまたか、と呟いた。そして丁度火を点けた時、例によってノツクもなしに扉が急に開かれた。

「あ、いたいた」

嬉しそう無邪気に笑ってにそう言ったのはセミロングの黒髪に幼い体軀をメイド服に包んだ――

「今度はお前か」

川上によって名を授けられたアニスだった――。

「何か用か？」

「うん、用はないけどメイド長に部屋を教えて貰ったからきたの」

「……」

川上は何も言わず自分が呑んでたグラスをテーブルの反対側に滑らせた。

「呑むか？」

「お酒？」

川上は肯首するだけだった。

「うん。のむくありがとう」

そういうとアニスは川上の寄こしたグラスを取りコクコクと呑んだ。外見上は幼女にしか見えないアニスが度数の高い蒸留酒を呑む姿は川上にとつてもシユールだがアルコールの耐性は外見どうりではないらしい平然と呑んでいる。

「うまいか？」

「うん、ちよつと辛口だけどおいしいよ」

そういつつアニスはグラスをもったまま川上の隣りに座った。川上は啞えタバコで新しいグラスに酒を注ぐ。

「ところでなんでこんな暗い部屋で呑んでるの？」

「ここのうのは雰囲気味わうものさ」

「ふーん、そういうものなの？」

「ああ」

そしてその夜はなぜか川上とアニスでサシで呑むことになった――

第41話

今眠りのなかにいる川上。その彼の意識は浅い闇の中にいた。

これは彼の睡眠の一種のボーダーである、もしこの闇の中に沈む睡眠中の彼に敵意を持つ者や攻撃が加えられれば即座に川上は気付く。彼を包む闇が『教えてくれる』のだ。

川上を包む闇が引いていき逆に光へと変わっていく、彼の意識は浮上し目覚めようとしていた。

——ふと違和感。

(こんな暖かい目覚めは……何時以来だ?)

目覚め際の彼の意識が自分自身よく意味の分からない蒙昧な疑問を発したと同時に川上は目覚めた。

うつすらと開かれる彼の特徴的な暗くしかし研ぎ澄まされた刃物のような眼、眼に映るのは朝日が満ちた自室そして天井にいくつか浮かんだ空間の歪み、歪みのほうはやはり空間を弄るという咲夜の行為で多少は無理が来ているのだろう。まあ僅かなもの

だしどうせ川上にしか視えないモノだろうからたいして問題ないだろう。

ベットのの上から身を起こそうとして右手側が引つ張られるような感覚。みるとアニスが川上の腕を抱いてスヤスヤと眠っていた。そういえば昨日は二人で呑んでいたが酔いが回ったアニスが此処で眠ってしまったのだったと川上は昨夜の記憶を辿る。

同じベットに眠ったのは川上の判断だったが（というより自分は別の場所で寝るといふ発想がない）まさか右腕を抱え込まれ、つまり封じられてのんびり寝てるとは、川上は思わず自嘲した。

（暖かいと感じたのはこいつか）

そう自分の腕にしがみ付くアニスの腕を取りながら川上は思った。アニスの外見どおりの子供特有の高い体温のためそう感じたのだろう。

それだけだ。

アニスは静かな寝顔で眠っている。川上は眠るアニスの幼い身体を『視た』。

眼に映る愛らしい少女の寝姿、その眼に映る像に頭の中で被るように植物の姿がアニスに重なって視えた。可憐で素朴な矢車草の蒼い花。

妖精とは自然の具現でありていに言えば自然そのものだと言ったと川上は聞いた。ならば川上の視た矢車草こそが妖精としてのアニスの本質だったかもしれない。

「……」

どうでもいい事か、そう思い川上は両切りシガレットを取り出し吸い口をテーブルでコンコンと軽く叩くと火を点けて煙を吸い込むとふー、と紫煙を吐いた。

再びタバコを口元に運ぼうとしたところで部屋の扉がノックされた。

「川上、もう朝食の時間よ」

咲夜の声だった。朝食の時間が近いので川上を起こしにきたのだった。しかし川上は喫煙中の為か咲夜のノックに答えない。

「入るわよ」

そう一声かけて咲夜は室内に入る。

「なによ、起きていたのなら返事くら……い……」

そういうながら咲夜は見てしまう、ベットに腰掛け着流し姿で悠然とタバコを燻らせる川上にその彼のベットでスヤスヤ眠る幼いアニスの姿を。

「あの、ねえ、川上。別に個人の趣味にどうこう言うつもりもないけど、そんな幼い娘を手籠めにするのはどうかと思うわ」

「お前は何を言っているんだ？」

なにかを勘違いしている咲夜の妄言にやっぱり無感情に突っ込む川上。

「それにその娘は私の部下だし大事にしてくれないと」

「安心しろ別になにもしちゃいない」

「……本当に?」

「昨夜一緒に呑んでな、しかし酔いつぶれてそのままここで眠ってしまった」

若干疲れたような投げやりな口調で説明する川上。短くなったタバコをもみ消す。

「……それならいいわ。それよりそろそろ朝食だから準備が終わったら食堂まで来なさい」

咲夜はそれだけいって勘違いが恥ずかしかつたのか若干赤面しつつさっさと退室してしまった。川上は一応起こすべきかと考えアニスに手を伸ばす。

「起きろ朝だ」

「んゝあさゝ?」

川上の声に反応し身を起こすアニス。しかしその表情は苦い。

「んゝ頭がいたいよう」

昨日は結構なペースで量も呑んでいたからこうなるのも当然か川上はそう思いながら、水差しからグラスに水を注いでアニスに差出す。

「飲め」

「うん、ありがとー」

そういって水を一息に飲むアニス。

「気分はどうだ」

「うくん、頭が重いし身体がだるいし、喉が渇くし気持ちが変わるいよう」

典型的な二日酔いの症状だった。川上は無言で水差しから水を注いでやった。アニスはゆっくりコクコク飲む。

「つらいならもう少し寝ている。それで楽になる」

二日酔いに対する一番の治療法は水分補給とにより睡眠、それがわかっているゆえそう川上は言った。

「でもおしごとが……」

アニスもメイドとしての矜持はあるようだ。自分の役割を全うしなければと自分の体調を圧して声をあげる。

「この館のメイドの数が明らかに過多なことから見てなんの問題もない。むしろ少しくらい減ったほうが館的にはいいくらいだろう。そんなに気になるなら俺からメイド長に休ませるよう伝えておこう」

「でも……」

「寝ている」

川上の感情の籠らないしかしつよい言の葉に結局従いもそもそタオルケットにくるまるアニス。

「自分の許容量を越える酒は呑まない事だな」

「ごめんなさい、でも……楽しくて」

「なにがだ」

三白眼を向け川上は問う。

「あなたと一緒にいるのが楽しくて……それで呑みすぎちゃったの」

すこし赤面してアニスはそういう。確かに場の雰囲気やノリで呑み過ぎるというのは良くあることかと川上は思った。

「寝るのなら自分の部屋に帰るか？」

「ううん、ここで寝ていい？」

そう上目使いにタオルケットから出したすこし赤い顔で聞く。

「好きにしろ」

そう答え刀を手に取り立ち上がりクローゼットへと向う川上の背中に安心してアニスは眼を瞑る。川上は着ていた着流しを脱ぐとクローゼットに納められた使用人用の礼服に着替える、最後にベルトに刀を差して身支度は終わりだ。

「じゃあな」

「うん、お仕事頑張つてね」

そうアニスと最後に言葉を交わして川上は食堂に向った。

「あらおはよう川上」

食堂の上座には朝から珍しくレミリアが鎮座していた。その川上はレミリアを持ち前の冷たい眼で一瞥して――

「おはよう」

簡潔に朝の挨拶を返して席に座った。そんな川上に何が可笑しいのかくつと含み笑いを漏らす。そんなレミリアの反応にも彼はどうでもよさげな表情は変わらない。

「メイド長」

「なにかしら」

「メイドが一人病欠だ」

「あらそう」

川上の律儀な報告はあっさり終わった。

その日の朝食はレミリアもいる為かスープにパン、人肉のスペアリブと朝から重めのものであったが川上は美味しくいただき、咲夜に淹れてもらったコーヒーで食後の一服をしていた。

「メイド長」

そんな時川上は切り出した。

「一つ頼みがあるのだが――」

第42話

随分唐突かつ珍しく畏まった川上の言葉に食堂内の者の意識が川上に集中した。

「頼み？ まさかもっといいコーヒーが飲みたいなんて訳じゃないでしょうね？」

「違う、と、言うか味なんてどうでもいい」

咲夜の言葉をあつさり切つて捨てる川上。しかし味などどうでもいいと考えるのはある意味彼らしいが淹れるほうにとっては全く甲斐のない事だ。

「この館に刀剣用の手入れ用具はあるか？」

「手入れ用具？ 貴方のいう刀剣は日本刀よね、なら生憎無いわね。ナイフの手入れ用具ならそろっているけど、この館に貴方のモノ以外に刀は無いから」

川上の質問に咲夜が答える。そうか、と呟いて川上は考える。ナイフ用の磨き粉や錆止め油でも代用できなくはないか？ いやしかし……。

「手入れ用具を手に入れたい。売っている所などを紹介してくれないか？」

「それは……」

「いいじゃない咲夜、彼に『あの店』を紹介してあげたらどうかしら？」

いいかけた咲夜の言葉を遮りレミリアはそう進言した。

「たしかにあそこならあるでしょうが」

「どんな店なんだ？」

「この幻想郷で有一幻想郷の『外』のものも扱っている店よ。店主が少々変わり者だけれどね」

川上の疑問にどこか面白いな笑みを浮かべつつそうレミリアは説明する。

「その店の場所を教えてください」

「魔法の森の入口付近……咲夜案内してあげなさい」

場所さえわかれば一人でも行きそうなあぶなかつしい川上にレミリアがそう従者に命令する。

「わかりましたわ」

レミリアの命令は絶対である。——どちらにせよ咲夜も川上を放っておけなかつただろうが。

「川上、今から出るから準備を整え次第玄関前ホールで待機」

「了解、ご馳走様」

例によつて軍隊のような簡潔なやり取りを終えたと川上は食堂から出て行った。

「まあ、貴方もたまの外出を楽しみなさい」

席を立ちつつ笑みをたたえ咲夜にそんな事を言うレミリア。

「お嬢様は？」

「寝るわ、早寝早起きが健康の秘訣よ。ご馳走様」
そう手をひらひら振りながらレミリアも退室した。

「あの男とか、なにもなければいいけど」

ぼそりと咲夜が愚痴るように言った。

こうして今日の川上の方針は香霧堂行きに決まった。

川上は気配を殺して自室に入った。そして無音でベットに近づくと、アニスはとうとう再び眠りに落ちたようだ。寝息は穏やかだ。それだけ確認すると背を向けクローゼットへと向かい中から一振りの刀を取り出す。彼のメインウェポンのなかでももつとも長いリーチを誇る全長5尺を軽く越える長大な野太刀を。それを背に背負うとアニスを起こさないように退室した。

川上は咲夜の指示通りに玄関まえホールでタバコを燻らせながら待機していた。ふー、と彼が吐いた紫煙がホールの空気に溶ける。

「準備はいいようね」

その言葉に川上はその鋭く暗い眼を声の方に向ける。そこには朝食の片付けと自身の外出の用意を終わらせた咲夜が立っていた。

「ああ」

「久しぶりに見るわね、それ」

川上が背負う野太刀に眼をやりながら咲夜が言った。

「外出するなら……念のためな」

川上は抑制のない声でそうとだけ答えた。

「それより準備が出来たなら早く用事をすませてしまおう」

「ええ、行くわよ着いてきて」

「案内頼む」

そう言葉を交わしつつ二人は館を出る。

「あれ？咲夜さんに川上さん、今日はお二人でお出かけですか？」

丁度門番に立っていた美鈴が門から出てきた二人に声をかける。

「ええ、ちよつとこの男がワガママ言つてね。香霧堂まで行く所よ」

やや辛辣な咲夜の言葉にも川上は他人事のようにタバコを燻らせるだけだ。

「あはは、それじゃあ咲夜さんは今日は川上さんとデートですね」

美鈴がそういうな否や咲夜が一瞬で投擲したダブルエッジのダガーが美鈴の額を

貫いた。しばらく美鈴は発言したときの笑顔のまま直立していたが、ゆっくりと前のめに崩れ落ちた。流れでた血と脳樫が地面に広がる。

「まったく、そういう心臓に悪い冗談は止めて頂戴」

投擲終了のポーズのまま少し顔を赤くした咲夜がもう聞いているのかもわからない美鈴にそういう。

「そいつは死んだのか？」

一部始終を無表情に見ていた川上は短くなつたタバコを投げ捨てながらそう質問した。

「まさか、美鈴は妖怪の中でも特に丈夫なのよ、すぐに眼を覚ますわ」

「そうか」

どう考えても脳をやられて即死扱の傷なのにそれでも死なないとは凄まじいなと川上は思った。

そして同時にならどう殺すかとも考察していた。

「ほら、さっさといくわよ」

咲夜は川上を促して歩きだす川上は飛べないからそれにあわせて咲夜も徒歩で案内しなければならぬ、急がねば日が暮れてしまうと咲夜は思った。

「美鈴、私がない間館は任せたわよ」

「ふ、ふあい、さくやさん」

去り際の咲夜の言葉に美鈴はまだ動けないながらも返事をした。その驚異的な回復力に感心する代わりに川上はタバコを啣え火を点けた。

そうして二人は魔法の森の入口の店を目的地に道を歩いていた。案内ということであ夜が先行し川上がその少し左後ろを歩くという形だった。

その進行の形が——咲夜には気分が悪かった。

川上は咲夜の左後ろを歩いている、川上からすれば咲夜は自分のやや右斜め前にいることになる——腰の刀を抜刀で一閃させれば咲夜を確実に切り伏せることの出来る位置だ。咲夜は自分が常にその『死の間合』に捕らえられてるのを感覚的に理解していた。

故に不愉快だった。常に発砲出来る銃口を向けられながら誰がいい気分ではいられるものか。デートか、美鈴の言葉を思い出し思わず皮肉な笑みが漏れる、この男は自分が下手な動きでもしようものなら即座に切り伏せるだろう、とんだデートだ。

——いや。

それどころではないかもしれない。

——この男が自分を常に死の間合に置いてるのは『ただなんとなく斬りたくなつた』時にでも斬れる為では……。

思わず間合いに入っている左半身に寒気が走った。いくら自分の時間停止でもあの神速の抜き打ちの前には単純に能力行使が間に合わない。しかしその考えはあまりにも荒唐無稽、得体の知れない男ではあるがいくらなんでも無意味な殺人は行うような人間ではないだろう、咲夜はそう思った。

しかし不愉快なものとは不愉快だ。咲夜は歩きながらさりげなく立ち位置を変えたり、歩くペースを急に早くしたり逆にゆっくりにしたりし川上が置いている死の間合から外れようとした。しかし川上は難なく咲夜の動きに合わせて咲夜の間合いから逃がさない。

そんな感じで咲夜がやきもきしているとふと川上から声がかかる。

「そんなにその位置が気になるなら手でも繋いで横に並んでいくか？」

川上のその言葉はあくまで抑制のない無感情なものだった。

「なっ！」

その言葉に咲夜は顔を赤くしてバツと振り向く、そこには口元を歪めどこか面白そうにしている川上の姿があった。

「なっなにを言っているの貴方!?! 殺されたいの?」

赤面してそう喚く咲夜の姿に川上はくっくくと含み笑いを漏らす。

「冗談だそんなにムキになるな」

その言葉にはいつも感情の乏しい彼には珍しく愉悦を含んでいた。そして川上は立ち位置を咲夜の左後ろから右後ろに変更した、抜刀の場合自身の左側には太刀を送りにくくなる。

「これでいいか」

これが川上なりの譲歩なのだろう信用の形とも言える。それがわかったから咲夜もそれ以上は言わない事にする。

「全く……でも貴方も美鈴みたいな冗談を言うのね、少し……意外」

咲夜の川上の印象は全く遊びのない人間だと思っていたようだ。

「まあ、たまにはな」

くつとまだ含み笑いを漏らしながら川上はくしゃくしゃになったゴールデンバツトの箱から折れ曲がった一本を取り出し手で曲がりを直しながら啞え火を点けた。

第43話

森に面した街道。

そこに一匹のハンターが潜んでいた。

赤茶けた髪に赤い和服に身を包んだ少女、まだあどけなさや愛らしさの残る顔は十台後半くらいか。

否、少女は見かけ通りの年齢ではない、齢百五十歳を越える妖怪だった。

生粋の人喰い妖怪だった。

その妖怪は特筆すべき能力があるという訳でもない特別強い妖力を持つという訳ではない、しかしその生涯においてすでに数百人もの人間を喰らってきた。

：：：そうこの妖怪はただ対人目的のハント（狩猟）が上手かったのだ。

たいていの馬鹿な人喰い妖怪は獲物の前に堂々と姿をさらし力技で相手をしとめようとす。しかし外来人ならともかく幻想郷の妖怪なれしている人間には大抵逃げられてしまうのがオチだった。故に幻想郷の人喰い妖怪は案外人肉にはありつけなかった。

赤い少女の姿をした妖怪は嗤う、馬鹿じゃないのかと？そんなやり方で人などしと

められる訳がない。赤い妖怪にとって人間はただの捕食対象にすぎない、しかし人間が馬鹿じゃないことも知っている奴らが存外しぶといことも。

だからその赤い妖怪は気配を消して身を潜めるあるいは死角から忍び寄る、そうして待ち伏せか忍び寄りにより人間を間合いにひきつけると一瞬で自分という捕食者に気付かれる前に飛び掛りその爪で一撃で仕留める。

赤い妖怪は対人間の生粋のハンターだった。彼女が仕留めそこなった人間はなく彼女を見たもので生きている人間もないから特に人間達の間で危険視されているということもないが、人里を出た時 motto も恐ろしいのは皮肉にもどんな大妖怪より無名の赤い妖怪だといつても過言ではなかったらう

そうしてそのハンターとしての妖怪は街道に面した茂みに身を隠して獲物の到来を待っている。もう何時間も動かず待っている。かならずこの道に獲物が通るとは限らない待ち伏せは無駄骨になる可能性もある、しかしハンターとしての妖怪の勘がここだと告げていたのだ。

おそらく今日は獲物にありつけるだろうという確信めいた思いがあった。この妖怪のひしめく幻想郷においてもここまで自分で人間を殺し喰らっているものもこの赤い妖怪の少女くらいではなかったらうか。

この泰平の幻想郷においては。

赤い妖怪は思う。

——人間と妖怪の共存？

——スペルカードルールによる決闘？

くだらない、妖怪は嗤った。例え共存だとしても人間が被捕食者で妖怪が捕食者である関係は変わらない。食料に付き合ってルール合わせて決闘する必要もない。ただ人喰い妖怪として自分は獲物である人間を喰い続ける。

そういつか死ぬまで。

その妖怪は骨の髄まで人喰い妖怪だったといえるだろう。

——そのいつかくる自分の命日が今日だとは夢にも思わなかったろうが。

道を歩いてくる人間の気配に妖怪は口元を歪めた。来た！今日の獲物。

赤い妖怪は道を歩いてくる人間を観察し考える。前を行くのがメイド服に身をつつんだ銀髪の少女、その後ろに黒服で腰に帯刀し背に長大な刀を背負った黒髪の青年。二人か、赤い妖怪は思った。自分を見た人間は生かしておきたくない。片方を仕留めるのに成功してもその間にもう片方に逃げられたらダメだ、なら……

妖怪の中でもう算段は決まった『二人』とも殺す。自分なら簡単だ。妖怪の考えはこうだった。まず狙いは黒服の男、理由は二つ、まず刀で武装しているので万一抵抗されないように先に不意打ちでさっさと片付けるべきだという判断、もう一つは男を仕留め

た瞬間前に行く連れの少女が後ろで何が起こったか理解が追いつかない内に少女も殺す。赤い妖怪はそれを完璧にこなす自信があった生粋のハンターとしての自信だ。

赤い妖怪は呼吸を落ち着かせ気配を殺す。後は自分が潜んでいる位置にまで男が近づくまで待つだけだ。2メートルにもみたくない絶好の間合いにもっとも近づいた瞬間1秒もかけず男を殺しすぐ少女も殺す。特にまだ若々しい少女は実に旨そうだと思った。

「さて、きょうはごちそうね♪」

そう赤い妖怪は無邪気に笑ってその凶悪性に相応しくない甘い透明感のある少女の声でつぶやいた。

森に面した道を咲夜と川上は歩いていた。特に話題を交わしながらという事もない川上も咲夜もあまり無駄口をきかないという事もあってふたりは足並み揃えて一定の全く同じペースで黙々と進行していた。それはどこか軍隊の歩兵めいていたかもしれない。ふと川上が懐に手を入れ新しいゴールデンバットを取り出すと封をあげトントンと指で軽く叩いて詰まったタバコを取り出し一本啜え右手で風防を作りながら左手のガスライターで火を点けた。ふう、と歩きながら紫煙を吐く。

そんな川上を気にもせず歩みを進めていた咲夜をもつてしても自身が通ったすぐそばにハンターが息を潜めていたことに気付けなかった。

故にさらに三歩歩み川上が赤い妖怪の間合いに入った瞬間妖怪の全瞬発力を用いて茂みから川上に飛び掛る音を聞いた時には全てが終わっていた。とっさに咲夜は振り返る。しかし妖怪が川上を殺すのに1秒とかわからず時間停止も間に合わないため判断が追いつかない。故に振り返った咲夜がみるのは妖怪の爪で貫かれ即死した川上――

――のはずだった。

「……え？」

チーンツと澄んだ鈴のような音が響いた時には先ほどまで川上がいた場所に抜き手を放った格好の赤い妖怪とその飛び掛る妖怪の脇を入り身するようにすれ違い妖怪の後ろで相手に向き直りで唾えタバコのまま悠然とたたずむ川上。

「妖怪！　こんなところに!？」

突然のことに驚愕しつつダブルエッジのナイフを抜く咲夜。しかし様子がおかしい赤い少女の姿をした妖怪はゆっくりと川上に向き直ると今度こそというように手を振り上げた。

その妖怪の首に赤い線が走った。

「カツ・」

そんな声なのか空気漏れなのかわからない音を立てると少女の顔をした妖怪の首が地面にぼとんと落ちた。パラパラと一緒に斬れた赤茶けた髪も落ち大量の血が断面からしぶく。

咲夜も目撃しなかったし当の妖怪も理解できなかつたろう。川上は飛び掛る妖怪に対して身をおわしつつ抜刀で妖怪の首を刈ると同時に納刀していたなどは。鈴のような音が響いたのは高速の納刀時に出た鏗鳴りだった。

しかし首のない赤い妖怪はそれでも、脳が、首が、すでに無くても、まるで人間を狩る事を、肉が、内臓が記憶しやり遂げようとするようにふりあげた爪を川上に振り下ろした。人間の形をしたものが首がないにも関わらず敵に攻撃を続けようとする異様。

しかし川上はその攻撃を斜め後ろ45°の角度で一步下がるだけで避けた。その悠然とした体裁きは優雅ですらあった。そして下がるその動きで間合いを計りつつ本来自然の構え（無構え）が多い川上が左腰を引いて右手を柄に添える『抜刀の構え』を取った。

次の瞬間高速の鞘走りと体術が生み出す左下斜めから右上斜めへと走る低い軌道の神速の逆袈裟の抜刀が妖怪の右脇腹から入り左胸へと深々と抜けた。川上は今度はすぐに納刀せず正眼の構えに移り残心を見せている。咲夜も突然の事に驚愕しつつも

そこは紅魔館のメイド長どうとでも動けるように身構えている。

妖怪は自身が身につけてた和服の帯も一閃で断ち切られてしまい和服ははだけ、下に何も着けていなかったのか白い肌の傷一つない裸体があらわになる。首の無い妖怪の少女の裸体は見る者によつては倒錯的な美を感じるだろう。その少女の白いお腹に赤い線が走ると傷口がぱくりと開きぬめぬめとした光沢をもった鮮やかな紅色をし、それに黄色い脂肪が絡みついた管状の内臓がびちゃりと音を立てて地面に広がった。遅れて切り口からどぷりと血が飛沫し少女の裸体と内臓を紅く彩った。あたりに蔓延する臭いは血の臭いもあるが何より内臓の生臭さと内臓の内容物も漏れたのか便臭に近い刺激臭、それにも咲夜も川上も表情を変えない。

そして糸が切れたように妖怪の身体は前のめりに崩れ落ち、もう動かなかった。

こうして無名の人食い妖怪はその百五十年の生涯に終止符を打った。彼女がこの結末を迎えた原因をあえて言うなら彼女が人間を本当に獲物としかみていなかったからだ。人がいれば喰う、そんな彼女はまさか『決して手を出してはいけない類の人間』がいるとは考えもしなかった為であろう。

川上は構えを解いて右手に刀を握ったまま左手でタバコを最後の一吸いするとそのまま投げ捨てた。そして頬に浴びてしまった返り血を手の甲で拭いたその挙動はどこか猫じみしていたが。服にも少量ながら返り血を浴びてしまっていた。

「危ない所だったわね」

すでに茂みに妖怪が潜み川上に襲いかかったものと判断が追いついた咲夜が川上に言う。

「なにが？」

たいして危ない所なんてあったかとも言うように川上は無感情に言った。ふと刀身に付いた血を指に取り口に運ぶ。濃い味だな、川上は思った。

「そんなもの口にしちゃ駄目よ……。貴方今殺されかけたのよ？」

咲夜は思う。自分も気付けなかった妖怪の待ち伏せ攻撃によく反応出来たものだと。襲われたのが自分だったら時間停止で危機回避が間に合ったとは思わがそれでもぞつとしない。川上は懐から懐紙を取り出し、刀身にこびり付いた妖怪の血脂を拭うと使った懐紙をバツと撒くように投げ捨てた。妖怪の血を吸い紅と白の斑になった和紙が辺りに花びらのように舞った。死体と死臭の中でそれはどこか幻想的な風景だった。思わずそんな中心にいる相変わらず眠そうな表情を崩さず刀を納める川上に咲夜は見られた。

「あんな見え見えの奇襲など脅威としては妹様のじゃれ付きの足元にも及ばないな」

「貴方まさか……。待ち伏せに気付いていたの？」

「ああ、『視えて』いた」

見えてだつて？自分も気付かなかつたのを見ていた？そんな馬鹿な。そこまで考えてパチュリーが咲夜に言ったことを思い出す。たしかパチュリー様は魔女的見解からこの男は眼に魔眼やそれに類似した異能を宿している可能性があると言っていた。なら今視えていたと言つたのは……。

「そう、それが貴方が宿してる魔眼の能力つて訳？」

「そんな大層なものは持つていない。俺は武術をかじつて身を守るのに精一杯の一人のか弱い人間だよ」

咲夜は鎌を掛けたつもりだったが皮肉に笑つた川上に煙にまかれてしまう。なにかが弱いだ。咲夜からみても川上の近接戦闘力は今までみたどんな人間をも凌駕する。仮にだが白兵戦に持ち込まれたらあの霊夢でも（霊夢は体術でも達人クラスである）川上には勝ち目は薄いのではないだろうか。

「しかしこいつは巧みに待ち伏せしてるつもりだったのだろうが、気配の消し方は上手いが駄目だな。この赤い和服では目立ちすぎるカムフラージュがなつていない。うちの道場なら『失格』だな」

川上は川上で殺した妖怪にダメだししながらタバコに火を点けている。その緊張感のかけた姿を見ながらこの男の眼は何を見ているのだろうと咲夜は思った。自分と

は違う世界を視ている、それに興味を持った。

「ところですまない。服を汚してしまった」

川上は使用人用に支給された服に返り血を浴びてしまったことを謝罪した。

「……ああ、いいのよ。その程度なら落ちるし帰ったら着替えましょうね」

「ああ、わかった」

「それとごめんなさい。お嬢様から頼まれて貴方の護衛の意味もあつての案内なのに危険にさらしてしまつて」

自分にまかされた仕事を危うく全うできなくなる所だった咲夜は律儀に謝る。案外素直なところもあるのかも知れない。しかしそれに対する川上の返答は——

「問題ない。自分で自分を守れない奴は死んでも当然だ」

——いつも通りだった。

「……そうね、香霧堂ももう少しだから進みましようか」

気を取り直して案内を進めようとしたしかしその前に川上に向き直り——

「お見事なお手並みでしたわ」

——心からの賛辞を。

それに対して川上は俯いてくつと笑い——

「ありがとう」

そう愉快そうに口にした。

第44話

魔法の森の入口付近、其処に奇妙な建物があつた。香霧堂と看板の掲げられた建物の外観は狸の置物や道路標識などわけのわからないものが雑多に散乱していた。それは中も同様で様々な無秩序ながらくたなどが商品として並べられていた。

そんな乱雑な店内でカウンターに座り一人黙々と手元の本のページの捲る男が一人。男は民族風の独特の服に身を包み首には黒いチョーカー、適当にカッツされた特徴的な銀髪に眼鏡をかけている。顔立ちは柔和そうで整っているが今はその顔は何の表情も映してない。男は香霧堂店主、森近霧之助だつた。

霧之助は時間を持って余してるように本を読んでいる。それはそうだろうそもそもこの店は滅多に客など来ない。故に霧之助は持って余して時間の本を読むか新しい道具の使用法の研究などに使うしかない。でなければたまに客でもない白黒の魔法使いや紅白の巫女がやってきて勝手に茶を飲んだり店の商品を勝手に持って行ったりされるだけだ。まあ霧之助も彼女達は嫌いではない。だが好き勝手されすぎではないか？霧之助は思った。

カランカラン

その時人の入店を示す店のドアのベルが鳴った。霧之助はすぐには「いらつしやいませ」とは言わなかった。店としてはあるまじき事だがこの店に来店するのは純粹な客より前途の魔法使いか巫女の場合が圧倒的に多いからだ。故に挨拶を言いよんで入口に眼を向け少しして眉を顰めると言った。

「いらつしやいませでいいのかな？ 随分と物騒なお客様のようだけど」

「それで正解ですわ。店主さん」

来客の一人は数少ない常連の咲夜である。しかしその後ろに幽鬼のように立っている礼服と思われる黒服に腰に刀を差し背中以身の丈にせまるような野太刀を背負った無表情で暗い三白眼をした男に眼を止め霧之助は不信に思った。また咲夜自身もメイド服にナイフを仕込んでいる。『物騒な客』とは言いえて妙だろう。そもそも霧之助は咲夜がそんな男を連れてくるのは今まで見たことないため不信に思うのも無理ない事だった。

「見ない顔だけど、紅魔館は新しく執事でも雇ったのかい？ 見た所人間のようだけど」

「似たようなものですわ。路頭に迷っていた外来人をお嬢様が哀れに想い雇い入れたのですの。お嬢様は慈悲深いですから」

「まあたしかに君の所のお嬢様は吸血鬼なのに気まぐれに優しい所があるね。しか

し外来人か……」

そこで咲夜が肘でぼんやりしていた川上を小突く。挨拶くらいしろという意味が込められていたモノだが川上はギリギリその意思を汲み挨拶をする。

「川上という、宜しく」

やはり極めて簡潔な自己紹介になった。咲夜ももう少し何とか出来ないのかと苦い顔をしている。しかし霧之助は川上を興味深げにみている。

「外来人との事だけどころからこっちの世界に？」

「ほんの数日前だ」

霧之助の質問に淀みなく答える川上に霧之助は眼鏡の奥から鋭い眼でその刀や身体や表情を観察している。

「なるほど……ただの人間それも外来人を雇うというのもおかしい話だと思っただけ、たしかにレミリアなら彼に興味を持ちそうだね」

「そう思われますか？」

霧之助の言葉に咲夜がそう聞き返す。

「僕も外来人はあまり見たことがあるわけじゃないが、それでも彼が只者じゃない事は分かるよ」

「貴方から見てもそう見えますか」

咲夜はそう返す、ちなみに川上はすでに店内を物色し始めていた。太刀の拵を見つ
け手に持ち重量で刀身が入っている事を確認し太刀を抜くと刀は真剣ではあったが完
全に腐食し錆に覆われていた。これでは錆が深すぎて研ぎに出しても修復不可能だろ
う、川上は珍しく苦い顔をしながら太刀を戻した。

「さてお客さん、客としてきたからには用件があるのだろう。なにをお求めかな？」
霧之助が二人に聞く。そこで初めて川上は霧之助に向き直った。霧之助は彼の三
白眼に見据えられたときなぜか寒気が走った。

「刀剣用の手入れ用具、それが欲しい」

「日本刀用の道具ということかい？ 少し待ってくれ」

そう言いながら霧之助は商品の山を漁るとしばらくして木の箱を取り出した。

「これでいいのかな、確認してくれないか」

川上は無言で箱を受け取り中をあらためる、打ち粉、錆止め油、目釘抜き、拭い紙、
ネル、完全にそろっている。

「完璧だ、これが欲しい。ただな……」

川上はちらりと咲夜を見る、当然彼は無一文だから自分でそれを買う事は不可能で
あった。

「メイド長、給金の前借は効くだろうか？」

ずうずうしくふてぶてしい川上の提案にいつそ面白そうに笑いながら咲夜は言った。

「いいわよそれくらい、払っておくわ。確かに貴方も館の使用人だものね。給金くらい出ておかしくないわよね」

「恩にきる」

そう川上の礼を聞きつつ咲夜は霧之助に支払いを済ませる。

「そういえば君はつい先日まで外の世界にいたんだよね？」

支払いも終わり満足げに手入れ用具を持っていた川上に霧之助は唐突に話題を振る。

「ああ、その通りだ」

「なら当然外の道具の事には詳しいよね？」

「人並みだな、エンジニアだったりした訳じゃないから、むしろ俺の専門は『人間』だからな、それがどうかしたのか」

「この店は幻想郷に流れてきた外の道具も扱っている。外には様々な道具があるが僕的能力で道具の名称と用途はわかるんだ」

「それで？」

なんとなく話は読めて来た川上だがなにも言わず続きを促す。

「ただ困った事に用途は分かっても恥ずかしい話だけど。どうすれば効果が得られるか使用法までは分からないんだ。そこで外の人間の君によればいくつか道具を見てもらいたい。そして使用法が分かればおしえてほしいんだ」

霧之助はあまり触れ合う機会がないので今回は道具の謎を解く絶好のチャンスだと考えた。対して川上の表情は冷めていた。

「半額」

「は?」

一言だけ言った川上の言葉の意味が分からず思わず問の抜けた声を出してしまう霧之助。

「さっきの手入れ用具を半額にしたらその頼み聞いてやる」

川上は今度は口元に皮肉げな笑みを薄っすら浮かべてそう提案した。

「……たしかに何の対価もないというのはフェアじゃないな。分かったその条件を飲む」

「交渉成立だな」

霧之助は頷いて咲夜に受け取った代金を半額払い戻した。

「いいのかしら?」

「いいんだよ」

眩く咲夜に無感情に川上はそう返す。

「では、使い方が分からない道具を見せてくれ」

さっさと初めて終わらせてしまおうと思いい川上は言った

「ではさっそくだがこれを見ほしい」

霧之助は黒い小型の箱状のものを取り出した。

「これは『ラジオ』というものでこれで遠くで喋る人の声を聞くことなどが出来るみたいなんだ。ただ僕にはどうやっても聞くことができないんだ。君なら使い方が分かるかな？」

川上は一瞥しただけでにべもなく答えた。

「限りなく不可能だ。使えない。まず電源となる電池等がここでは手に入らないだろう。君が持っているなら別だが。それに仮に電源が確保できても隔離されてるといふこの世界じゃあ電波が拾えないだろう」

電波が通る程度の別世界ならすでに幻想郷は露見しているべきだろう。

「少々難しかったけどつまりこれは使えないんだね。ならこれは……」

そうして霧之助は他にもいくつか道具を見せ使用方法を川上に問うた。携帯電話等ほとんどが使用不可能なものばかりで霧之助を落胆させたが、いくつかは使えない事もないものもあった。その使用法を川上を教えると霧之助は嬉しそうに礼を言った。

そして最後に

「じゃあこれはどうだろう?」

霧之助は鈍い光の鉄で出来たそれをゴトリとテーブルの上に置いた、それを見て川上の眉がピクリと動いた。

「これは『拳銃』と言つて弾を射出するための道具のようだ。危なそうだから僕は弄つていないけどこれがあれば誰でも弾幕ごっこが出来るかもとおもつてね」

「これは……鉄砲ですか? 変わった形ですが……」

咲夜は銃のことをある程度知っていたのかそう言う。まさか火縄銃やフリントロックと比べているのだろうか?

「でもなんかこれも精密そうですが使えるのですかね?」

「使える」

整備のされていない銃など壊れてて当然だろうし暴発の危険もあり危険極まりない。咲夜の当然の疑問に川上は一言だけでそう答えた。

「川上?」

「使える。この銃はまだ『生きて』いる」

川上は銃を見ているようで別のなにかを視ているような眼付きでそう言い切った。

「店主」

「なんだい？」

「これの用途を弾を射出するといったがそれは少し違う」

川上な腰の刀の柄を指先で叩きながら言った。

「これの用途はこの刀と同じ、『人殺し』だ」

「なっ！」

川上は冷たくしかしどこか面白がっているように言った。

「そうですね鉄砲の用途は人の殺傷ですわ」

「そうか、だったら『ぶっこ』にはつかえないな……」

落胆する霧之助だが、川上はなおも銃を鋭い眼で観察している。

「キンバー社の45口径、コルト社のガバメントのコピーか。マイナーだな」

そう独り言のように呟く。

「これの使い方は分かるかい？」

「分かる」

「教えてくれないか？」

そう言われて川上は銃を手に取り実際に撃つてみせることはせず。

「まず、銃身をクリーニングしたらマガジンを装填しスライドを引いて薬室に弾を

送ったら安全装置を外し引き金を引けば撃てる」

口頭の説明で済ませた。

「……実際に撃ってみてはくれないのかい？」

「銃は嫌いだね、必要もないなら撃つどころか触りたくもない」

必要ならその限りではないがねといしながら川上は笑う。それはどこか自嘲気味だった。

「それで、もう用は済んだかい」

「ああ、もう大体の道具はみてもらった。世話になったね」

「そうか、だったら俺はこれで失礼させてもらう」

「では私も失礼しますわ」

「ああ、ありがとう。なにかあつたらまた来るといいよ」

そんな霧之助の声を背に二人は店を出た。

「ちよつと意外だったわ」

「なにが」

店の外、早速帰路を歩きながらタバコに火を点ける川上に咲夜が言った。

「貴方だったらあの銃に興味を示し欲しがるとおもって」

咲夜の言葉に川上は無表情のまま

「言つたら」

「嫌いなんだ」
——吐き捨てた。

第45話

モノクロの世界——

そこではすべての物体、現象が停止していた。

空を飛ぶ鳥が中空で羽ばたきもせず静止しており、植木の葉からこぼれ落ちた水の雫が球状となりやはり地にも落ちず停止していた。メイド服に身を包み背からカゲロウのような羽の生えた少女は躓いて完全にバランスを崩して転ぶ瞬間の途中の姿勢で魔法のように固まっていた。まるで時が止まっているかのような世界。

それもそのはず、実際に時は止まっていた。

色のない世界でただひとつの色彩があった。

煌くような艶やかな銀髪に白磁のごとく透き通るような肌、メイドが着るエプロンドレス——ただしスカートの丈は短めだが——に身を包んだどこか幼さも残しながらも凛とした優美な立ち姿の少女。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜だった。

このモノクロの世界で動くものは彼女だけだった。当然だ、ここは彼女の世界彼女だけの世界なのだから。これが彼女のもつ『時間を操る程度の能力』で時間停止をおこない作り出された世界だった。

この世界で動けるものは咲夜と咲夜が触れて時間停止を解いた無機物だけだった、人のような生き物には干渉される事はない代わりに咲夜も時間停止中の人に干渉は出来ない。時間停止中に誰かを移動させたりナイフを突き立て殺害するような事も不可能。

零時間で人にナイフが刺さるなどありえないからだ。

だが大した問題ではない。能力で人を殺したかったら時間停止で背後に回って構えてから停止を解いた瞬間頸椎にナイフを突き立てれば誰でも即死させられるからだ。

人が持つにはあまりに強力過ぎる能力。だがその能力が万能でもないことも咲夜は理解していた。

彼女以外一切の例外なく動くものがない世界、彼女の主さえもこの世界の中では彼女に干渉出来ない。

それは孤独だった。

この世界を知ってしまった時からある意味彼女は孤独だったのかもしれない。

咲夜がただの人間とは一線を画する最も大きな理由がこの時を操る能力であり、咲

夜の骨子と言えるのがこの力であった。

しかしこの色彩のない世界にいる時、時折咲夜は恐怖に駆られることがあった。ある日突然能力を失ってしまふこと、——それ自体はそれほどの恐怖ではない。だがこのモノクロの世界で能力を失ったら？

永遠の孤独の世界に閉じ込められる事になったら？

零時間の中から出られなくなったら、対外的に見て咲夜は消滅という形となるだろう。そして咲夜は死ぬまで、あるいは永遠を孤独の世界で過ごすことになるだろう。

咲夜は能力を使うことにそういうリスクが伴うと思っている。あまりに強力な能力だ、そういうしつぺがえしがあつてもおかしくはない。

だがリスクがあつても咲夜は能力を行使することに躊躇いはない。この力こそがレミリア・スカレーットの従者たるものとして必要なものだからだ。だから少女はいつも完全なる孤独の世界を駆ける。

そして彼女はモノクロの世界の中転びそうになっている部下のメイド妖精の前にクツシオンを置く。これで時間停止を解いた後メイドが倒れこんでも怪我はしない。咲夜が指を鳴らすパチンという音と共に時間停止のモノクロの世界が解ける。

「きゃあ！ ……あれ？ 痛くない？」

「足元には気をつけなさい」

「あれ、メイド長」

クツションに倒れこんだメイド妖精は顔を上げて自分の上司である咲夜を見とめた。

「あの、ありがとうございます」

「どうやら自分が助けられた事に気づいたメイドが礼を言った。」

「いいのよついでだったから。それより仕事に戻りなさい」

「はい、わかりました」

妖精メイドがそう言つて顔を上げた時には咲夜は煙のように消えて幻のようにそこにはいかなかった。妖精メイドは何度か眼をしばたかせた後すでに誰も居ない空間に一礼をした。

黒い礼服に身を包んだ細身の男がいた。彼は腰のベルトに常寸の刀を一振り帯刀しておりやや前髪の長い黒髪に黒の眼でひと目で日本人と分かる男だった。歳の頃は20代前半と思われる男の顔立ちは整つてはいたがその眼は鋭利な輪郭に白眼に対して比率の小さい黒目が正面や上を見ると黒眼の左右だけでなく下にも白眼が見える。三白眼でそれが酷薄な雰囲気を漂わせ男を近づき難い印象を与えていた。

男は紅魔館の唯一人の男の使用人、川上だった。

川上が香霧堂に行つてから数日が経つていた。それからの川上の立ち振るまいはマイペースの一言だった。言われた仕事をただ黙々と驚異的な集中力でこなしていた事もあればいつの間にか持ち場を離れ図書館で本を読んでいたという堂々としたさばり振りをみせた事もある。

フランやメイド妖精のアニスとテーブルゲームなどで遊んでいることもあれば、遊んで欲しそうに近寄つてきたアニスを煩わしそうに窓から外に放り投げ捨てた事もある。昼間に勝手に川上のベットで寝ていたフランを恐るべき事に壁に投げ飛ばした事もある（怒つて暴れたフランによつて部屋は半壊したが川上本人は傷ひとつ付かずに咲夜に部屋を変えてくれと顔色一つ変えずに言つてのけた）。

かと思えばフランとネコの兄妹のように仲良くくっついて寝ていたこともある。レミアアのボードゲームに付き合うこともあれば、暇があれば中庭で剣の素振りの鍛錬を延々と三時間もやっていた事もあれば、よく日の当たるテラスで本を読んでいたかと思えばそのまま陽だまりの中無防備に昼寝をしていたりした事もある。

川上という男は気まぐれだった。

猫のように気まぐれで移り気だったのだ。

そして今日彼は館の廊下の清掃を言い渡されそれに従事していた。

いや従事しているのか？バケツは彼の足元に置かれ中に張られた水はそこそこ黒く濁っているからある程度彼が仕事していたのが伺える。

しかしモツプは壁に立てかけられ、川上本人は格好を崩して壁に寄りかかりタバコを喫煙していた。サボりか？ただの休憩か？

彼は少し上を向いて長く濃い紫煙を吐く。吸ってるのがフィルター付きタバコと違い吸い口まで葉の詰まった両切のため口に葉が入ったのかペツと葉を吐く。

そしてすこし上向きにどこかを見ているようでも見えていないようなけだるげな眼をぼんやりと中空に向けながらふう、と一息吐いた。

タバコを指に挟んだ手を口にやりもう一口煙を吸い、吐く。そこで川上はさも煩わしげにちっつ、と舌打ちすると携帯灰皿にタバコを押し付け消した。そしてかつたるような緩慢な動作で壁に寄りかかっていたのを立ち直り右に向き直り眼を向けた。

そしてそこには銀髪のメイド、十六夜咲夜がいた。

モノクロの世界の中で咲夜は一人の男に眼を向けていた。ほかの事象と同じく停止しているそれは紅魔館に最近勤めだした外来人、川上だった。停止している彼は掃除中なのに壁によりかかり指に火の付いたタバコを挟みぼんやりとした様子だ。

咲夜は紅魔館に来てからの川上を観察していた。いや、それはむしろ監視と言ったほうがふさわしいかもしれない。

理由は川上がここに最初に来てから懸念していた事、すなわち川上が自分の主、レミア・スカーレットの脅威となりえないか？その一点だった。そして今まで川上を見ていて下した判断それは――

なんだかよくわからない。だった……。

まず白兵戦では恐ろしく腕が立つ。その点では考えたくないがレミアでも川上の間合いで戦ったら危ないのではないかと思わせるほどに。

それは川上の古流武術の錬度の高さもさることながら先読みの異常なほどの上手さに由来していると咲夜は分析していた。まるで次に何が来るのか分かっているような異常なまでの勘の良さ。いやあるいはそれがパチュリーの言っていた川上の能力の片鱗なのかもしれない。

さらに人を斬り殺すのも妖怪を斬り殺すのも殺意もなく包丁で野菜を切るのとなんら変わらない感覚でやってのける神経は人間として破綻している。しかも主であるレミアにも運命が読めないという謎も懸念である。

これだけで考えれば川上は滅茶苦茶危険な人物なように思える。

だが川上には悪意だとか邪気の匂いもまったくないのである。無邪気故に虫の

足をもぎ取り遊ぶ子供のような残酷さはあるだろう。しかしそれイコール危険だろうか？

それに普段のかつたるげとか投げやりな様子も見ていると、よほどの意味なくしては精力的に誰かを攻撃するとも思えない。そう考えると無害、いやでも何の意味もなく周りを攻撃するかもしれない。

つまるところよく分からないのである。咲夜では川上という人間を理解しきるのは無理だった。

あるいは誰にも無理なのかも知れない。

——故に咲夜ははつきりさせる事にした。咲夜は時間停止を解く。

色を取り戻した世界で川上は一つ舌打ちした。それは顔も向けてもいないのに死角に咲夜が出現したのが明らかにわかつている態度だった。タバコを消すと面倒そうに壁から体を起こし咲夜に向き直った。

5メートルの距離で黒髪の青年と銀髪の少女は相對していた。

「……いいの？　メイド長自らこんなところでサボリとは」

「それは今の今まで堂々とサボっていた貴方が言えた事じゃないわね」

まあ、貴方のは今に始まった事じゃないけど。そんなことを続けた咲夜に川上は特に反論もしない。なんでもよさげだった。ここまでは軽口の応酬あるいは牽制か。

まだ笑い混じりの川上の答えに咲夜の周りの温度が下がった気がした。

「……なにがくだらないと言うの？」

冷静に、だが底冷えるような声で咲夜はまた聞く。

川上はすぐには答えずくつくつと残りの笑いをひとときしり吐き出した後ふう、とひとつ息をつく。その意図は呆れか侮蔑かあるいは関心か？顔を上げた川上はあれほど愉快げな笑いの余韻の一欠けらもなく眠たげな眼をした面倒そうな顔だった。

「なにつて」

投げやりに川上は言う。

「その質問、相手に直接聞いて意味あるのか？」

心底無意味だと川上は言った。敵か味方が分からない相手への対処。それが『お前は敵か？』と問うという手段だということの愚を言外に含ませていた。

「はい、そうです。とでも答えれば満足か？」

面倒臭そうに言う川上に咲夜はうつむく。自分の愚直さを恥じたのか、それとも怒りを覚えたのか？

「……そうね、確かに貴方の言う通りだわ」

どちらでもなかった。

瞬間川上の目の前から咲夜が消え、その時には川上は体を投げ出すように前返り受

身を行っていた。一刹那前に川上の首があつた空間を後ろから銀光が煌き走つた、受身のまま座構えに移行した川上に今度は正面から眉間に真つ直ぐ走る銀光。しかしそれは川上が懐からとつさに抜いたナイフの平面部分で止められていた。

時間停止による瞬間移動での後ろからナイフで斬りつけをかわされたうえ、川上の受身の移動地点に置いておくかのように刺突を放つた咲夜は、それすらも止められ顔に一瞬驚愕が走る。その隙を狙い座構えからの川上の前蹴りが咲夜の膝を狙うが、すでにその空間に咲夜はおらず蹴りは空を切つた。

「……やっぱり直接……確かめる事にするわ」

声は川上の後ろから聞こえた。川上は無言で立ち上がる。

「どうやら咲夜は少々荒っぽい方法で川上を試すことにしたようだ。『真実は斬ればわかる』……どこかの庭師のがうつつたのかも知れない。」

川上は投げやりに構えもせず振り返る。だがそこには咲夜は居なかつた。

「どこを見ているの?」

声は川上の真後ろ、耳元で聞こえた。

「廊下」

川上はもはやピントのずれた返答をした。

ギンツ、と金属音とともに中空で銀光と火花が弾けた。時間停止で川上の側面に移

動しながらの咲夜の斬撃を川上はナイフの峰部分ブレードバックで弾いたのだ。川上と咲夜は互いのナイフが弾けると同時にバックステップし今度は互いにシースナイフを持つ形で正面から対峙した。

咲夜が左手に持つナイフは普段良く使う投擲用の銀製ダガーではなく刃長14cm程度の細身で片刃の炭素鋼のブレード持つ相手を直接脛に刻むためのナイフだった。

川上が右手に持つナイフは刃長13cmのストレートポイントのATS、ステンレス鋼製の多目的性のあるユーティリティナイフだった。自前ではなく魔理沙の家から持ち出した物だった。

川上は刀を抜かなかった。なぜなら本来なら得物はリーチのあるほうが有利だ。だがリーチのある武器は懐が甘くなりがちである。そして咲夜の時間停止の前にリーチ差などないに等しい。懐にあっさり入られてあの世行きである。故にあえて相手と同じリーチの短武器を使う。川上は得物の選択ミスはしなかった。

川上は咲夜を眼の前にふう……と息を付く。その息を吐き終わり吸い……に転換する瞬間の僅かな隙を狙い一刀足以上はなれていた距離を無視し咲夜のナイフの連撃が川上の急所に迫るが、川上は一つを体裁きで避け二つをブレードバックで弾き、突きを避けながらその小手を逆に切り裂こうと手首の返しだけで極めてコンパクトな斬撃を放つがそれは外された。

眼の前から消えた咲夜に対し川上はノールックで真後ろに突きを放つ。それは時間停止で後ろに回っていた咲夜の喉元に迫ったが咲夜は危うくスエーバックでそれをかわし、冷や汗をかく暇も惜しんで時間停止も利用して突きこんできた川上の腕を取り切り裂こうとしたが、やはりノールックのまま放たれた川上の後ろ蹴りが腕に気を取られていた咲夜の水月にモロに入り咲夜は床に転がった。

激痛に息の詰った咲夜は刹那に死を予感し、とっさに絶対の安全圏である時間停止を展開する。瞬時にモノクロに染まる世界で咲夜はなんとか顔を上げ川上も間違いないく停止していることを確認すると、安心して床に伏せ腹部を襲う激痛と呼吸困難にゲホゲホと咽びながら悶絶した。今のは効いた。咲夜は思った。時間停止にまで簡単についてくるとは思わなかった。こちらが能力を使わなかったらこれでは勝負にもならない。

「……本当に人間なの？」

自分が言えた義理ではないがと、何とか床から立ち上がり咲夜はそう思った。とりあえず腹部のダメージが抜けるのを待つ。そして戦闘可能にまで回復すると今度こそは手傷を川上に負わせようとほとんど川上に密着するほどに接近し、腰溜めに構えたナイフの切っ先を川上の腹部に添えた状態で時間停止を解くと同時に体ごとナイフを突き込んだ。

が川上はいきなり目の前に現ると共に体ごと突きを放ってきた咲夜に即座に対応しその場で回転し体の軸を咲夜のナイフから外し、自分のナイフで突きを絡めるように外に完全に逃がした。体当たりに近い感覚での突きの力のベクトルを流されてしまった。

咲夜は刹那に無防備になってしまい時間停止も間に合わず川上に投げられ満足な受身も取れずに背中から床に叩きつけられ一瞬息が止まった。

「ゴホッ……とんだ化け物ね」

時間停止に逃げず床に転がったまま咲夜は吐き捨てる。それを川上は追撃もせず悠然と見下ろした。

「君は冷静なようで意外とそうでもないな」

川上の言葉への返答は左側面からわき腹めがけた突きだったが、川上は左手で腰に差した刀の柄を使い容易くそれを受ける。

「ああ、お嬢様が絡むと特にそうなのか」

今度は真正面から眉間を狙った鋭い突きが飛んで来た。川上が後だしで繰り出した突きが咲夜の突きを弾いて外しそのまま咲夜の首筋に走るが咲夜もとっさに首を傾げてかわす。弾いてから攻撃に転じるのではない、相手の攻撃を外すのと自分の攻撃が一拍子。新陰流剣術でいう合撃の応用だった。

「少し肩の力を抜いて冷静になったほうがいい」

「珍しく貴方も良く喋る……わね!!」

いいつつ斬撃を一つフェイントに咲夜は頭部を狙った上段蹴りを放つ、がまた蹴り足は力のベクトルを外され同時に軸足を掬われ投げられてしまう。今度はすかさず川上は床に倒れた咲夜に直打法でナイフを打った投げたが、それは一刹那前まで咲夜が倒れていた床を穿っただけに終わった。

即座に死角から襲ってくる咲夜のナイフを体を投げ出すような前返りで床を転がりながら避け突き刺さっていたナイフを回収し、そのまま前面に回り込んでいた咲夜を斬り上げるがこれもかわされる。

川上と咲夜は互いに決定打に欠けた状態で再び相對した。互いに呼吸の乱れはない。

「そもそもお嬢様の意思で雇われた俺を君の独断で殺す事はむしろ君がお嬢様への謀反となるんじゃないか？」

それは正鵠を突いていたのか咲夜の眉がピクリと上がる。

「まあ君も本気で殺りに来ていないようだが」

互いにナイフを手に無造作に垂らした状態で川上は言葉を紡ぐ。

「確かに俺がお嬢様に刃を向ける事がありえないとは言わない。絶対なぞないから

な

「だが、相応の理由やメリットがなければそれをする意味がない。自分の命を賭ける訳だからな、だから君が懸念する事態はまず起こらないと思ってくれていい」

相対していた二人が瞬きの間に互いの急所を捕らえて交錯していた。咲夜のナイフが川上の眼球の一ミリ手前で寸止められており、川上のナイフは咲夜の頸動脈に突きつけられていた。

咲夜がそのままナイフを突き込めば眼球を破り眼底も貫き脳まで到達し川上を絶命たらしめるが脳が破壊されるまでの僅かな時間で川上のナイフも咲夜の頸動脈を破るだろう。つまり条件は互いに同じ。互いが互いの命を握って膠着していた。

「信頼しろとは言わない。だが信用しろ」

やはり投げやりに川上はそれを言った。

「できなきやこのまま殺せ」

そのまま2秒ほど動かなかつた両者だがやがてどちらからともなくナイフを引いた。

「確かに貴方のいう事も一理あるわね」

咲夜は静かに告げた。

「私は貴方を信じさせてもらおうわよ、川上」

「……お好きに」

川上の返答も聞かずに咲夜はそのまま去った。川上は手元のナイフに目を落とした。ブレードのバックや平面部分には無数の斬り込み疵が走り僅かに刃毀れしている。まあキズはどうしようもないがシャープニングすればナイフとしてはまだ使えるだろう、川上はそう考えながら適当に手近な部屋に入って一息ついた。そして少し気疲れした彼はソファアーに身を投げ出し、寝た。

結局この日の川上の本来の仕事の廊下掃除は中途半端にしか果たされなかった。

——咲夜は自室までなんとか辿りつくど壁に寄りかかり荒い息を吐いた。

……咲夜の全身が悲鳴を上げていた。川上から受けた当て身も投げも並のもではなかった。一撃で戦闘不能になるような内臓まで響き骨を軋ませるそれをいくつか受けながら時間停止も利用し何とか戦闘続行していたが流石に無理がたたった。

川上も言っていたように咲夜も本気という訳ではなかった。だが勘違いしてはいけないが決して容赦はしなかった。本気ではなくとも殺す気でやっていた。だが傷一つ負わず事もかなわなかった。あの男は取り敢えずは信用に足りえる人物だと咲夜は

今回判断した。

それと同時に化け物だとも。

咲夜の手にはポイント切っ先が折れ、エッジがボロボロに刃毀れしもう使い物にならないナイフが握られていた。

第46話

——日も暮れた頃のレミリアの私室。

少し前に目を覚まし着替えを済ませたレミリアは従者である咲夜に目覚めの紅茶を頼み優雅に椅子に座していた。時間停止を利用して手早く紅茶の用意を終えた咲夜はティーカップにゆっくりと緋色の液体を注ぐ。なおこの際が一番紅茶の香りがたつので時間は停止せずちやんとレミリアの前で注ぐ。

「どうぞ、お嬢様。お熱いのでお気を付け下さい」

言いつつレミリアの前にカップを静かに置く。レミリアはありがとう一言礼を言いカップを両手で包むように持ち上げる。その仕草は幼さを感じさせる。そして口元に持ってきた熱い紅茶にふうふうと息を吹きかけ少しづつ冷ます。

その大変愛らしい仕草に後ろに控えた従者は密かにご満悦だった。

レミリアは冷めてきた紅茶を一口飲むと目を閉じたまま満足げに一つ頷いた。

「……美味しいわね、葉を変えたの？ ブレンドはB型の血ね」

「はい、良い茶葉が手に入りましたので、血のブレンドの割合も少し変えてみました」

主に好評だったのが嬉しいのか微笑んで咲夜は説明した。レミリアはもう一口ゆつくりと味わいカップをソーサに置いた。

「そう、ブレンドの割合はこのくらいも香りが立って中々いいわね。ところで……」
ふとレミリアの雰囲気微妙に変わったのを機敏に咲夜は感じ取った。

「私の居ない所で川上にちよつかいをかけたようね」

気付かれていた、そう思つて咲夜の表情が固まった。

「私が気付かないとでも思つて？」

「も、申し訳ありませんお嬢様。ですが……」

慌てて弁明しようとする従者に対してレミリアは片手を上げて制した。それで咲夜は口をつむぐが内心は冷や汗ものだった。レミリアは変わらぬ優雅さと愛らしさで紅茶を一口飲んでから告げた。

「まあ別にいいのよ。貴方なりの考えがあつての行動でしょうしね。だからと言ってもあまり勝手なことばかりされても困るけどね。ま、どちらにせよ貴方にじやれ付かれてそれで死んだのならあの男もその程度の運命というだけの話だしね」

「はい……出過ぎた真似をして申し訳ありませんでした。以後気をつけます」

どうやらレミリアは咲夜の勝手な行動に心底ご立腹という訳ではないようだった。咲夜は主の怒りを買わずに済んだ事に内心安堵しつつ謝罪した。

「まあ、私はあの男面白そうだし結構気に入ってるから本気で殺しちや駄目よ」
取り様によつては次はないと言っているとも取れるレミリアの発言、咲夜は承知しましたと返す。レミリアは紅茶を飲み干すと咲夜におかわりと言った。咲夜は紅茶のおかわりをカップに注いだ。

「それに咲夜の不安は不要だと思ふわよ」

再び両手で包んだカップの中身をふうふうと冷ましながらレミリアは言った。

「何故そうお考えですか？」

咲夜の疑問の言葉を聞きつつレミリアはカップに口をつける。そしてカップを下ろすと淡い青色をした自身の前髪を指先でいじりながら考えるそぶりを見せつつ答える。

「ん、川上は確かに人間にしては得体の知れないところがあるけど……なんというか飼いたいなものでしょあれは。猫は鼠や鳥を殺す事はあつても飼い主を殺す飼い猫はいないわ」

飼い猫、主のその喩えがあまりに的確すぎると思つて咲夜は思わず笑みを零した。雇われの身でありながら川上の奔放さも勝手なところも確かに気まぐれな飼い猫そのものだ。咲夜は忠実さ故『悪魔の犬』なんて言われる事もあつたが同じ人間でも川上は猫か、咲夜はそう思つた。

「ふふ、猫は言いえて妙ですわお嬢様」

微笑んでそういう咲夜に案外人を見る目があるのかも知れない吸血鬼、レミリアは「でしょう」と得意げに薄い胸を張りつつ紅茶を飲む。

「で、どうだったの？」

主語のないレミリアの唐突な問いかけに咲夜は小首をかしげる。

「あの……どう、とは？」

「川上に刃を向けたんでしょ。手ごたえはどうだったか私としても興味あるわね」
主の言いたいことが理解できた咲夜だったがその顔は苦々しい。

あまり思い出したくもない川上と切り結んだ時のことを思い出してしまったためだ。

「あの時は……ある程度とはいえ容赦はしませんでした。しかし……」

「傷一つ負わず事すら適いませんでした。むしろ当技、投技をいくつか受けてしまった私のほうが……結局あの時は川上の底を知るのは出来ませんでした」

「ほう」

流石に悔しさもあつたのか苦い顔で語る咲夜とは対照的にレミリアは関心しているような面白がつているような風に眉を上げ相槌を打つ。

「先ほどお嬢様は『本気では殺してはいけない』と仰りましたが仮に私が本気で殺し

にかかっても殺れるか……少なくともその時は私も本気で命を賭けないと話にならないでしょう」

「咲夜でも殺しきれるかわからない……か」

「はい、しかも川上自身が自分の命を投げ出す事を何とも思っていない印象がありました。急所をナイフが掠めるようなギリギリの綱渡りを行いながら本人にはまるで感情の揺らぎが感じられない」

「同じ人間として言わせてもらおうならあの男、正直怪物です」

レミリアは片目を閉じながら残った紅茶を飲み干しカップを置いた。そしてテーブルに肘をつき両手を組んだ格好でくくつ、と背中を笑みで揺らした。

「私の咲夜にそこまで言わせるとはやはりあの男を他に取られる前に私のものにしたのは正解だったかしらね。面白いわあの男、面白い」

「どうやら自身が業物を手に入れた事を確信したようにレミリアは愉悦に笑った。」

「ところで咲夜、話は変わるけど」

「はい、なんででしょう?」

「お腹すいた、ご飯」

「すぐにご用意いたしますね」

にこりと笑って咲夜は夕食の準備のため退室した。

——日も暮れた紅魔館の門前。

中華風の衣服に身を包んだ紅魔館の門番である妖怪、紅美鈴と黒い礼服姿で腰に刀、背中に身の丈に迫る大太刀を背負った同じく紅魔館の使用人である人間、川上は二人で門の左右に立っていた。

「どうやら今日の川上の持ち場は門番らしい。言いつけたのは咲夜だったがどういう基準で采配しているのだろうか。もしかして適当に決めているのではないか?、川上は内心そんなことを思っていた。まあ正直どうでもいいのだが。」

「美鈴は手を後ろに組んだまま直立していたが、川上は壁に背を預けタバコを啜えておりまるでやる気が感じられない。しかし彼の左手からカリカリと固いものが擦れる音がした。」

彼は厨房から拝借してきた殻付きのオニグルミを二つ、手の中でクルクルと回していた。クルミ同士を握り合わせるよくある握力の鍛錬ではなく、クルミ同士を手の中でスムーズに回転させる事により武器を扱う上で命となる手の内と指先の微細な感覚を養うための鍛錬だった。暇なので川上は地味に鍛錬しつつ門番をしていた。

ちなみに実は美鈴も後ろ手でクルミを回していた。川上に勧められたのでクルミをもらつてやつてみていた。

「なあ、門番」

暇を持て余した川上が美鈴に話かける。

「私の名前は美鈴ですよ。そして川上さんも門番です……で、なんですか」

「暇だ」

「しよがないんですよ。門番はこういう仕事ですから。必要な事でもありません」

川上はふうと紫煙を吐き短くなったタバコを落として踏み消す。すでに彼の足元には吸殻が数十本分はあつた。

「しかし……二人は要らないんじゃないか？」

それに美鈴は困つたようにははと笑う。

「ま、まあ、そうかも知れませんが川上さん一人だとまだ何かあつた時不安がありますし。ほら、門番って危険もありますから」

「君は俺の教育係だったのか？　しかしそんなに危険な事があるのか」

「それはもちろんありますよ。例えば」

ちやうどその時空から降りてきてストツと着地した少女が二人の目の前に立つた。

腰まで届く長い黒髪だが瞳は魔性の金色、鳥の濡羽色の翼をもった明らかな妖怪の少女。その顔には微笑みを貼り付けているが全身から威圧感が滲み穏やかな雰囲気ではない。

「……こういう事もありますから」

「なるほど」

美鈴の言葉に分かっているのかいないのか川上は妖怪を前に頷いた。

「ご用件は？」

雑談はそこまでに門番として自身も威圧感を放ちながら美鈴は妖怪に問う。

「はじめまして、名乗る必要は……ありませんね。実は私は最近この幻想郷に来たばかりなのですが」

「そんな方がこの紅魔館になんの用です？」

慇懃無礼な口調の妖怪に美鈴は辛抱強く対応する。

「決まっているでしょう？ この世界で強いと聞く吸血鬼。ちよつとその方を倒して新参者のこの私がこの世界で名を上げようと思ひましてね」

「どうやら自己顕示欲旺盛な妖怪なようだった。それだけ聞けば十分と言うように美鈴は告げる。」

「ではお嬢様に会わせる事は出来ませんね。ここでお引取り願います」

「おや、そちらの方は人間ですね」

妖怪は美鈴の言葉は無視して気だるげな目付きで成り行きを見守っていた川上に顔を向ける。

「こんな所に人間がいるとは思いませんでしたが、これは行幸。見れば中々に男前、私の好みですね。ついでに私のものにしてしましましょう」

「かつてに俺を君のものにするな」

川上は疲れた声で一応抗議する。

「でしたら私に勝てたら見逃して差し上げてもかまいませんよ。まあまだスペルカードルールというものに慣れきっていないので手加減が上手くできる保障はありませんが」

「まずいと美鈴は思った川上は飛ぶことも出来ないただの人間だからスペルカードルールでは対抗出来ない。ここは自分が介入しないといけない」

「川上さん、下がってください、ここは私が！」

「いやそのスペルカードルールとやらだが俺には出来ない戦い方だ、悪いが自分のやり方でやらせてもらう」

川上も美鈴を無視して妖怪に告げる、その言葉を聞き妖怪は笑みを歪める。

「ほう、どんなやり方ですか？まさかただの人間がその刀でよう……は？」

妖怪は自身の体を見下ろした妖怪には理解できたが信じる事が出来なかった。

川上の握る野太刀の長大な刀身が自分の体を肩口から鳩尾付近まで割っているなどとは。

川上の背負った野太刀での大きく体を使う体術を利用しつつ右手で太刀を背中越しに抜きつつ左手で鞘を払うアシスト、それらが合わさって可能とした野太刀での背中越しの抜刀術。

高速で放たれたそれに全く反応出来なかった妖怪は長大な刀の自重とスピードで西瓜の如く体を両断された。がくりと膝が折れる。

「……あ……りえ……ない……こんなこと……は」

心臓も割れてるはずがまだ息があるのを見て取って川上は妖怪に深々と食い込んだ野太刀を握る両手から右手を離し腰のもう一振りの刀を片手で抜き放った。それは妖怪の首に深く食い込んだ。

シュツと食い込んだ刀身を振り切ると3分の2ほど斬れた首からブシュツと血飛沫が舞った。もつともすでに心臓が破壊されてたためか勢いはたいした事なかったが、そこで妖怪の意識も命も切れていた。

川上が妖怪の体に蹴込みを放つと食い込んでいた野太刀が抜け妖怪の屍が地面に投げ出され血溜りを広げた。川上は左手に野太刀を右手に刀を無造作に下げ無機質な

目で死体を見下していた。何を思うのか？あるいは何も考えていないのか。

（あんな長い刀で抜刀に二刀術ですか……それにしてもうわー容赦ないですね）

傍から見ていた美鈴は関心と畏怖交じりにそんな事を考えていた。川上の剣術は同じ武術を得意とする美鈴から見ても思いもよらないものだった。武人として川上から得られるものは多そうだと美鈴は思った。

「何？　この惨状は？」

夕食に二人を呼びに来た咲夜は思わずそう呟いた。

第47話

静かな夜だった

下弦の月の淡い明りにぼんやりと照らされた草原、吹き付けた風にサア、と草々がなびいた。

夜の闇に解け込むような人の輪郭、それは黒の服に身を包む細身の男、男は腰に一振りの刀を差していた。

両切りのシガレットを啜えたまま男はのんびりと時折立ち止まり空を見上げ紫煙を吐いたりしつつ蒙昧に歩いていった。まるで目的地も定まらないように。

それはそうだ男——川上には始めから目的等無い。

紅魔館の私室でふと夜中に目を覚ました川上は窓から見えた月に誘われるようにフラフラと館から出て歩きだしただけ。つまり川上は何となくで歩いていった。夜行性の猫が散歩するかのごとく。

しかしそれは幻想郷の人間ならまずやらないだろう危険行為であると言えただろう。夜は妖怪の時間だその夜の世界に人間がおいそれと踏み込むべきではない。そして危険な存在は妖怪ばかりとも限らない。

川上は足を止め煙草を投げ捨てた。

幻想郷は人間と妖怪の世界である、様々な妖怪がいれば当然人間にも様々な者がいる。所謂悪人と呼ばれる者も居れば、妖怪を心良く思わない過激派もいる、例えば：：川上の周りには何処から現れたのか多くの人影がありいつの間にか川上は囲まれていた。

：：里に住まず略奪行為を生業とする野盗などだ。

川上を囲む数十人はいる野盗団はみな刀や短刀、短筒などで武装していた。その中から一人が川上の前に歩み出る。

「みぐるみ全部置いていきな」

粗暴な風貌に絶対的優位に立っている者の愉悅の笑みを湛え野盗の男は言った。強奪行為等に慣れた野盗達は川上の服装等から簡単に外来人だと見抜いていた。

そして数の上で圧倒的不利に立っている川上は相変わらず感情の読めない坐った眼で特になにも言わずに懐に手を入れるとゆっくりと錢袋を取り出した。咲夜から自由にしていると渡されていた給金だった。それを男の前に放る。

「これで全部か？」

「確認するといい」

「ふん、肝の据わった奴だな。嫌いじゃないぜ」

余裕からかそんな事にニヤつきながらいつつ錢袋を拾おうとした男、その首が落ちた。

森の比較的浅い所に一軒の屋台があった。

「~~~~~♪~~~~~♪」

小さく歌を口ずさみながら捌いた八目鰻を串に刺している少女は屋台に合わせてか和服に身を包み、異形の翼と羽のような耳を持ちその耳に一つピアスをしていた。姿こそ可憐な少女だが一目で人間ではないと分かる。

少女は道楽で八目鰻の屋台等やっている夜雀、ミスティア・ローレライという名の妖怪だった。人間を襲い殺すのも大好きだが人間に歌を聞かせたり屋台でもてなし話をするのも好きな典型的なお気楽妖怪だった。

彼女は人間達にとって危険視されてる反面、人気もある妖怪だ。実際ミスティアの屋台は人妖問わず好評だったりするのだ。事実彼女の料理の腕は確かだった。

今日は人も来やすいよう森の浅い所で屋台を開いていた。しかしもう深夜だから

来客する人間は多分ないだろうが、だがこの時間は妖怪の活動時間だから妖怪の来客は多分あるだろう、等とやはり気楽に考えながらミスティアは料理の下拵えをしていた。

先程発砲音が幾つか聞こえたが、人間が妖怪に襲われるとか何らかの争いでもしているのだろうと思うだけでミスティアは対して気にも留めてなかった。自分の屋台には直接関係ない事だ。

「♪~~~~お客さん来ないかなー」

粗方下拵えも終えて、そんな事を呟くミスティア。とりあえず手持ちぶさたになつてしまったので瓶に残っている屋台のお酒でも少し呑んで客を待つか、そんな事を考え一升瓶から吟醸酒を注いでいた時だった。

屋台の前、暗闇に包まれた森の中を黒の洋服に身を包み抜き身の刀を左手に持つ人間が一人音も無くしかし俊敏に走ってきた。そのすぐ後ろに足の早い薄い汚れた和服に身を包んだやはり刀を手にした三人の男が追いつがって来ている。更に遠くからは「逃がすなあ!」「殺せ!!」だのと剣呑な怒声が聞こえてくる。

先程の発砲音の原因はこの争いかとミスティアは酒を一口飲みつつ思った。一人相手にどうやら多数の人間が寄つてたかつて襲い掛かっているらしい。

川上を囲んでいた野盗団は三十人以上いたが既に十人以上が死傷していた。

走って森に入った川上は追いつがって来た足が飛び抜けて早い三人を背中で把握すると走る勢いのままその場でくるりと転身しながら左の刀をヒュルツと振るうと全力で走って来た勢いのまま三人の野盗が全員地面に勢いよく倒れ臥せ血を地面に広げた。一人は即死しなかったのか地面に手をつき何とか立ち上がろうとしたが川上がその後頭部に即座に踵を落とすと地面に顔面を埋めてびくびくと痙攣しやがて動かなくなった。

それを最後まで確認する事もなく川上は無音の俊敏さで木々の闇の中に飛び込み紛れた。傍から見ていたミステリアの妖怪の眼を持ってしても最早川上が何処にいるのか把握出来なかった。闇に紛れて逃げたのだろうか、思いつつミステリアは酒を口に運ぶ。すつきりした口当たりには華やかな香りが鼻に抜ける。やはりいい酒だ、ミステリアは思った。

遅れて十数人程の武装した男達が木々の間から駆けつけ切り伏せられた仲間三人の死体を見て悪態を吐く。

「くそッ、ふざけやがって!」

「必ず殺せ! 逃がすな!」

「何処に逃げたか痕跡があるはずだ探せ!」

殺気だつて喚き合う男達を傍から見てミステイアは馬鹿馬鹿しいなあと思った。人間同士でそんなに必死になつて殺しあつて何になるのか。不毛な、そんな事よりウチで呑んでいけばいいのに、妖怪である所のミステイアからするとその程度の感想しか浮かばなかつた。

「おーい、人間さん達、そんな事より一杯やつて行かないかい？」

思つたままミステイアは野盗団に屋台から声をかけた。

「足跡は!？」

「この森の暗さじゃ見えねえ！」

しかし野盗団はミステイアの声等聞こえないようにスルーし川上の逃げた痕跡をばらけて探し初めただけだつた。

「地の果てまで追い詰めてで——」

そして一人が叫んでいる所で肩口から背中を割られた。

川上は初めから逃げて等いなかつた。素早く木の上を上り潜んで男達が分散した所を音もなく跳躍落下して一人を斬つた。落下する重量を利用した強力な斬撃は簡単に相手を絶命足らしめた。そのまま斬つた相手が崩れ落ちるより早く川上はノールツクで斜め後ろにいた男の首も斬つた。更に左へ跳躍めいた踏み込みと共に刀を振るうと更に槍をもつていた男の首もずれて落ちた。三人の男が血飛沫をあげてほぼ同時に

崩れ落ちる。

無駄の無い最少の動きを最速で行う川上は木からの跳躍から約二秒で三人を絶命させた。

そこで初めて周りの男達も川上の奇襲に気付く。川上に比較的近かった一人が短筒、所謂火縄式の古式拳銃を川上に真つ直ぐ向け標準したが間合い、位取りがまずかつた。

つまり真つ直ぐ向けた短筒を握る手がちようどいい具合に川上の剣の間合いに入った。男は引き金を引いたつもりだったが、発砲されない。男が不思議に思った絶妙なタイミングで疾うに断たれていた短筒を握る男の小手先がぼとんと落ち切断面から血が飛ぶ。男が何が起こったか分からないという顔、その眉間に刀が突き込まれ男は何がなんだか分からない内に死んだ。

川上は軽く横に飛び囲まれないように優位な位取りをする。そこにちようどもう一人が刀を大上段に振り上げ川上を殺さんとするが川上は刀を躲すでもなく受けるでもなく攻めの姿勢で相手の刀が振り下ろされるより十倍速く懐に踏み込んで握った刀の柄頭をもちいた当身で男の鼻の頭を潰し相手が堪らず崩れた所にすかさず首を刀を食い込ませ体の動きで引き斬る。小さく地味でありながらもある種の優雅さを感じる

川上の体術。

血飛沫をあげながら倒れ伏せる男の前で返り血を浴びつつも実に涼しげな川上の眼、それは残りの野盗団の大半が戦慄を覚えるに充分な暗く冷たい眼。

「意外と人間同士の戦いも面白いものね」

そう屋台から酒の肴に殺し合いを観戦しつつ可憐な顔に面白がっているような笑みを張りつけたミスティアが誰に言うでもなく呟いた。

第48話

森の中にある一軒の屋台

その中から夜雀の奏でる静かな詩が聞こえていた。

夜雀——ミステリア・ローレライ、激しい曲を好んで唄う事の多い彼女にしては珍しい選曲の穏やかで優しい歌声だった。

そして屋台の前の森ではその優しい詩の中で男達は殺し合っていた。

だが果たしてそれは殺し合いと呼べるものだったろうか？何十人といった野盗団の武闘派達がたった一人の黒服の男に次々と斬り殺されていたそれは虐殺という方がふさわしいのではなかったか。

野盗達は仲間が次々と殺され倒れる中必死に目の前の男を仕留めようと躍起になっ

ていた。一方、黒服の男、川上はただ聞こえるがまま、見えるがまま感じるがままに敵を倒していた。ふと耳から入る夜雀の詩に感嘆する。綺麗な歌だ、川上は一人の敵の心の臓を抉りながらそう思った。

悲鳴、断末魔、怒声、怒号、咆哮、命乞い、風に木の葉がなびく、そして歌声。

全長7尺に及ぶ大薙刀を持った男が川上をその刃で切り払う、目方にして川上の刀の三、四倍はリーチのあるその武器には2尺3寸の刀では尋常では勝ちえない。

川上は体を引いて切り払う薙刀の間合いを切りつつその刃を己の刀で巻くように反らした。そして手首を返して刃筋を相手に向け、しかし鎬筋を相手の薙刀に付けたまま一息に川上は自分の間合いまで踏み込んだ。相手は切り反せなかった。川上が薙刀に刀を付けたまま薙刀の柄をレールのように入ってきたので薙刀を刀で制されて咄嗟に反す事が不可能だった。さくりと薙刀に付いてきた刀が川上の手首の反しで半円を描き男の首筋に食い込む。

川上が蹴込みを男に入れると首筋に食い込んだ刀が頸動脈を破り血煙を撒き男が吹き飛ぶが男が用いた得物は川上の左手にあった。川上は男を蹴る際薙刀を捕っていた。

後ろから川上を斬り付けてきた男の刃を軽く跳んで避け、今しがた殺した男の腹に自分の刀を突き刺し立て、再び跳び技で敵に対する自分の優位な位置に位取りを行い、川上は大薙刀を腰の後ろに回すように構えた。

先ほど川上に刃を振るった男が再び川上に踊り掛かった瞬間川上を中心とし薙刀の刃が竜巻の如く豪ツ！と回転し川上を斬ろうとした。囲んでいた男、系 三人が薙刀の暴風に巻き込まれ吹き飛び血と内臓を撒き散らした。その内一人は咄嗟に踏み込む

事により刃で斬り飛ばされる事を避けえたが柄で払い飛ばされ仰向けに倒され急いで上体を起した所に薙刀の刃の捻りながらの繰り突きが男の腹に大きな風穴を空けた。男は目を見開き自分のぐちやぐちやに穴が空いた腹からこんこんと血が湧きだすのを見ていたがやがて力尽きたのかゆつくりとそのまま上体を倒した。

その時点で三十人余いた野盗団は両手で数えられるまでに減っていたが。

夜雀の奏でる詩の中静かに正眼に薙刀を構えるたった一人の男、川上にすでに残った野盗は構えてはいるものの戦意を喪失していた。

ほとんどの者は余りに一方的な川上の虐殺に近い戦闘に怒りや殺意より死への絶対の恐怖が勝り腰が引けていた。

また少数の冷静な者、判断力のある者はこれ以上の戦闘はリスクが高過ぎると判断していた。もう仲間の大部分が殺されているのだ、相手は別格過ぎる。これ以上戦闘を続けて仮にこの男を殺しえたとして果たして仲間は何人が残るか、得る物が無い。そもそも残った仲間は大半が怯えているのが気配で解る。これでは続けたらまず間違いない。皆死ぬ、いや殺される。

もしこの野盗団に優れた判断力と指揮能力がある統率者が居たならばこれほどの損害になる前に川上の脅威に気付き早い段階で撤退を指示し被害を最少に抑える事も出来ただろう。

しかしこの野盗団の頭は後方指示タイプではなく、野武士に近く、腕が立ち、自ら前線に立つ事を好むタイプだった。故に自ら川上を仕留めようとした結果早い段階で草原で血の海の中で果てていた。

残党達は無言の中仲間内の意向が一致したのを察すると、川上に隙を見せぬよう構えつつしかし、一人、また一人と少しづつ後退りして距離を取っていった。

そして充分距離を取った所で皆一斉に背を向け走りだし夜の森へと消えたいった。夜盗達の気配が完全に消えたのを確認し川上は構えを解き薙刀を落とした。

夜雀の歌もまた終わった。

川上とミスティアは同時に余韻を鎮めるように静かに息を吐いた。余韻といえど二人はそれぞれ別のものだったろうが。

川上は一つの死体に歩みより刺し立てておいた愛刀を引き抜くとこびり付いた血脂を懐紙で丁寧に拭いた。そして静かに鞆に納めると懐から煙草を取出し火を点けた。

ミスティアは歌で震わせた喉に残った酒を流し落ち着かせると屋台の前の惨状を改めて見た。ざっと見て十人ほどが死体となり転がり、地面は血濡れとなり腕や首やどことも知れぬヌラヌラとした内臓等のパーツが落ちていいる。凄惨な死臭が屋台まで届いてきた。流石に屋台の前がこの有様はまずいかなあとミスティアはぼんやりと思つた。

だがそんなことより一人生きている男を客として確保してしまえばいいかと考えた。屋台の前の惨状を作り出したのがその男なのだがミスティアは細かい事は気にしない。

「おにーさん、呑んでいきなよ。そんなに殺して疲れたでしょ？」

そうミスティアは川上に声を張り上げたが川上は屋台の方に手を向けた。ちよつと待てという意だった。

「？」

ミスティアは取り敢えず黙つてみると川上は死体の側にしやがみ何かをやっているようだった。

また別の死体へと近付き川上は死体の懐から銭を抜いた。死人から金品を奪うとは最早どちらが盗賊だったのかもわからない。

そして辺りにあつた死体全部から金を抜きその内一人が持っていた一口の刀も鹵確して死体の腰にあつた鞆に納め、左手に持ったままミスティアの屋台に歩みより席に着いた。

「一番いい酒と肴を」

今しがた金で暖かくなつた懐で言つた。

「はいー、少しまっててねー♪」

た。

屋台の前で元の金の持ち主達が冷たくなり始めている事等二人とも気にしなかつ

第49話

森の中での夜雀―ミステリア・ローレライの屋台

黒髪に酷薄な印象の三白眼とやる気のない空気を纏った男、川上が先に出された大吟醸酒をぼんやりと口に運んでおり、屋台の内側ではミステリアが鼻歌混じりに蒲焼きを炭火で焼いていた。

爽やかな香りでありながら重厚な口あたりの酒が川上の喉を熱くし、それが気付けなくなったのか蒙昧だった川上の眼の色がいくぶん変わった、そして煙草を取出して火を点ける、その時袖口が血に濡れている事に気付いた、無論川上の血ではなく返り血であつた。

両切り煙草をゆっくり吹かしつつ襟首を引つ張つてみるとそこにも血の染みがついていた、というか服全体にポツポツと染みになっている、まあいいか、紫煙を吐きつつ川上はそう思った。

それよりもと左に立て掛けていた一口の刀を手取る、川上が元々持っていた愛刀ではない、野盗の一人の死体から拝借したものだ、刀は他にも野党達のが数口落ちていたが川上は何故か迷わずその一口だけを取った。

川上は刀を検分するようにまずは拵えを改めた、外装は打刀拵、鞘は多少傷があるが塗りは青味かがつた細かい粒子が見える、なんと云ったか川上は考えた、青貝塗という類だろうが。

柄は鮫皮やエイの皮ではなく水気に強い牛革を下地に青糸を菱巻にしたものだ、そして柄自体が常の物より長めであった、抜刀や居合の使い手の中には長柄を好んで使った者もいるという、柄は薩摩拵えのそれにも近いか？川上はそう思った。

小柄はなかつた、実用本位な拵えであつたらう、川上は煙草を最後の一口を吸うと灰皿に押し付け消して酒を一口含んだ。

そして今度は鞘を払うと刀身を改めた、一般的な鎚造り、刃長約二尺四寸、反りは心持ち浅く、身幅や重ねは尋常か、全体的な体配は寛文新刀の姿か。

「お兄さん、その刀いいものなの？」

刀を鋭く検分する川上に目を向けたミスティアが手は動かしながら声をかけたが川上は手をミスティアに向けて待てをかける、刀を改めている時に無闇に口を開くと錆の原因になる。

そして肌や刃文を見る、地金は肌が細かく詰み明るく冴える、刃文は焼刃がやや広く互の目を主調とした乱刃、刃中には細かい白い粒子のような匂口が盛んについている、屋台の光に刃を透かすと刀身は下品にギラついたものではなく曇りがかつたような

刃だった、そして刀身には擦れ疵一つなかった、元の持ち主は大切に手入れしていたのが伺える。

川上は顔を上げ調理しているミスティアを見る。

「串を一本貸してくれ」

静かにそういう川上にミスティアは何も言わずウナギを打つのに使う鉄串を一本渡した。

川上は鉄串を目釘抜き変わりに柄から目釘を抜き鏢を押し上げて刀身を緩めて懐紙で刀身を掴んで刀を柄から抜いた、そして柄に納められていた茎を改める、銘は：：大和守安定とある、川上はへえと思わず感嘆した。

安定の作刀は切れ味に定評があり江戸期には安定の刀で多く罪人の死体での試斬が積極的に行われその刃味に切り手が感心したと言う、川上の記憶によれば安定の刀は罪人の死体五体を重ねて両断した五ツ胴を記録したものがあつた程だ、良業物50工に位列している名工であつた。

出来のいい刃だとは思つたがかの名工の作だつたとは、前の持ち主が大切にしてくれるものももうなげける。

川上は茎を持ったまま鉄串で刀身を軽く叩き音を見る、固いようで複雑な含みのある音、弾力性、粘りのある証拠、紛れもない業物だ思わず川上の口元に笑みが浮かんだ。

そして満足気に刀身全体を今一度眺めてから莖を柄に納めて目釘を打ち固定して懐紙で刀身を優しく拭い鞘に静かに納刀した。

安定を自身の左に立て掛け懐から両切り煙草を取出し浅く口にくわえつつ唐突に言った。

「いい物だ」

ミステリアはその言葉に顔を上げた、いきなりの言葉なので一人言かと思つたがこちらに向けて言つたらしい事から一瞬遅れて先程自分が問いかけた事を思いだした。

「その刀?どのくらいいい物なの?」

川上はライターで煙草に火を点け一口吸うと、借りた鉄串を返しながら言つた。

「命を預ける差料としては相応しい物だ」

さしりよう?単語の意味は分からなかったが刀を指しているのだろうかと思スティアは解釈した。

「それに銘も名の知れた刀工だ、刀自体も出来が良い、刀剣としての値打ちもそれに良いだろうな」

「それは良かったねえ、いくらくらいするの?」

「俺は鑑定士じゃないからそこまではわからないな」

口の端に笑みを浮かべつつ川上は答えた。

「はいお待ちどうさま」

そこでミスティアが焼き上がったヤツメウナギの蒲焼を出した、川上は頂くよと言言つて左手に箸を取り柔らかく焼き上げられ香ばしい香りのウナギを一口口に運びゆつくりと咀嚼して一言

「美味しい」

と、洩らした。

「そうでしょう、焼き鳥なんかよりもウナギだよ、目にもいいよ」

賛辞に気を良くしたのかそう笑顔で語るミスティアに何故焼き鳥?と思いつつ酒も飲む、ウナギの脂の旨味が口の中で広がるように酒で蘇って感じられる、最高の酒と肴だ。

「そういえばお兄さん、何であんな団体さんと戦つてたの?」

「成り行き」

一口で済ませて残つた酒を飲み干した、開けたグラスを差し出すとミスティアが酌をする。

「人間も色々あるみたいだねえ」

「さつき歌つていたな」

労つたつもりなのかも知れないミスティアに川上は全然関係ない事を問いかけた。

「うん、聞いてたの」

「綺麗な歌だった」

ウナギを口に運びつつそう感想を述べた。

「もつと聞きたい？」

歌が大好きなミスティアは笑って問い掛けて、それに川上も珍しく機嫌良さげに口元に笑みを浮かべてグラスを傾けた。

「是非とも」

その夜は夜雀にしては珍しい鈴の音のような優しく澄んだ歌声が森の中でずっと奏でられた。

第50話

明け方、紅魔館

朝日が登り眩ぼゆい光が霧の湖に反射しキラキラと宝石ねように湖面が光る、そんな湖のそばに悠然と佇む紅い館。

扉を音もなく押し開け館の玄関ホールに入ってきたのは黒の服と腰に二口の刀を差した青年、この館に雇われる使用人の男、川上である。

彼はいつも眠たげな眼をさらにどんよりと濁らせている、腐りきった魚でもこんな眼はしまい。

彼は深夜まで夜雀の屋台で呑んで今帰宅したのだ、俗にいう朝帰り、住み込みの使用人と云う身分でありながらである。

朝まで呑みながら彼の歩みはフラつく事もなく綺麗な普段通りの歩法であったが、目付きの為か纏っている空気はさながらタールのようだった。

自室へと歩む彼の前方から廊下を歩いてくるのは銀髪のメイド服の少女はこの館のメイド長を務める十六夜咲夜だった、朝早くからすでに仕事を初めているのか、いや、主人が吸血鬼だという事を考えると合わせてむしろ夜に仕事をしているのか？

あるいは彼女は自身の時間停止能力を用いて1日中仕事しているのかも知れない。

「ただいま」

川上は咲夜に帰宅の挨拶をし

「お帰りなさい」

咲夜もそれに返礼し二人は廊下をすれ違う。

「いや、いやいやいや待ちなさい」

いや、すれ違いかけて咲夜は遅れながら色々おかしい事に気付いて川上を呼び止めた。

「なんだ?」

川上は仕方なしと言わんばかりに面倒そうに立ち止まり聞き返す。

「何じゃないでしょ、貴方寝ずに出かけてたの」

「そうだ」

問い詰める咲夜に、肯定する川上。

「呑んでいたの?」

「ああ」

川上から酒の臭いを感じたのか聞く咲夜の言葉に川上やはり短く肯定するだけ

だった。

咲夜は口を開きかけたが言うべき言葉が見つからず文字通り閉口した。

勝手に抜け出して朝まで呑んでいたってこの男何を勝手に、いや、別に夜間外出するなどは言わなかったし自由な時間に何をしていても、しかし……

「何もないならもういいだろうか、眠い」

川上はどうやら寝たいらしい、仕事は？という疑問が咲夜の頭をよぎるのだがそれより

「ちよつと待ちなさい」

咲夜は川上に歩みより服の袖口を掴んだ、茶褐色のモノがついている、乾いた血、他人のか川上自身のか。

「怪我しているの?」

「いや」

咲夜の問いは短く否定された、見たところ負傷している様子は確かになかったつまり他人の血、それに腰に普段とは違う刀が、何をしていたのか問いかけようか迷い

「そう、ならその服は着替えなさい、もういいわよ、おやすみなさい」

追及しない事にした、何故か?

「おやすみ」

「起きたら仕事手伝ってもらおうわよ」

自室に歩き出した川上に一言だけそう告げると彼は背中越しに軽く手をあげるだけで答えた。

それを見届けると、咲夜はどうしたものかと思案する。

またあの男は人を斬った、まさか人里に所属してる人を斬ったのではなからうか、それはまずいと咲夜は考える、人里の人間との関係が悪化してしまう要因にもなりかねない、ただでさえ妖怪をよく思わない一部の人間だっているのに。

ふう、と一つ息をつく、後で川上には人殺しを控えるように言っておくべきだろう。

咲夜は気分を切り替え朝食の支度を始めるためキッチンへと向かった、ついでに川上の酔い覚ましでも作ってやろうと考えながら。

部屋に戻った川上は二口の刀を置き服を無雑作に脱ぎ捨て、着流しを着込んだ、テーブルの上に投げ出されたソフトパックから一本の紙巻きを取り出し吸い口をテーブルで叩き唾えて火を付ける。

ゆつくりと一口をゆつくりと吸い込み長い紫煙を吐く、思考は鈍く、判断力が低下しているのを自覚した。興が乗って呑み過ぎたかとぼんやりと川上は思った。

「開いている」

紫煙を燻らせながら目線も動かず川上は扉の向こうに声をかけた。

「失礼するわ」

そう言いつつ部屋に入ってきたのは先程玄関ホールで別れた咲夜だった。

「貴方透視でも出来るの？」

ノックするより先にドアの向こうのこちらに声をかけてきた川上に咲夜は感心かむしろ呆れ交じりかそんな事を言う、もつとも川上が常人にはない感性を持っている事はどうに察していただろうが。

「用はなんだ？」

咲夜の問いかけは軽くながし眠たげに完結に聞く。

「これ、喉乾いているでしょう？飲んでおきなさい」

川上の前に置かれたのはグラス注がれたアップルジュースであった。

「二日酔いの予防にもなるわ」

「ああ、いただきよ、ありがとう」

咲夜の好意を素直に受け取ったのか、川上はそう礼を言いつつタバコをもみ消した、やはり雰囲気は妙だが邪気のない男だと咲夜は思った。

「夜遊びは程々にしなさいね、おやすみなさい」

そう言つて退室する咲夜の背中におやすみと挨拶を返すと川上はグラスを一気に

煽った、爽やかな酸味が喉をスツキリとさせた、手製で絞ったジュースなのかやけに香り高かった。

そのまま川上はベットに倒れこむとゆっくりと目を閉じた。

第51話

「ねえ、咲夜」

「はい、お嬢様」

早朝、館のテラスで食後のお茶を楽しんでいたレミリアはふと空を仰ぎながら従者に声をかけた。

「今日はいいい天気ね」

「はい、お嬢様、今日は朝からいい曇り模様ですわ」

主の言葉に館のメイド長を勤める十六夜咲夜はそう返す。

ふざけたような会話だが決して言葉遊びや皮肉ではない、太陽と流水が天敵の吸血鬼であるレミリアにとって、昼間は曇り空こそ絶好の日和なのだ。

「決めた、今日は出かけるわよ」

突如として外出を決めるが気まぐれな主の提案には慣れているのだろう、咲夜は柔らかな微笑みを浮かべたまま行き先を尋ねた。

「霊夢の所」

即答であった、レミリアは霊夢がお気に入りだから神社までこうしてたまに遊びに

行く、無論咲夜も付き添いだ、あの無愛想な霊夢だが、訪ねるとなんだかんだ言いつつお茶を淹れてくれるのだ、ああいう所は確かに憎めないと思夜も思った。

あの巫女は全てをしてしまうのだ。

しかし咲夜はそれは裏を返せば何ごとにも大して思う所がないという事なのかも知れないとも考えていた、その在り方は誰かにも似ているような気が

「咲夜？」

「あ、申し訳ありません、すぐに支度します」

主の呼び掛けに思考から戻りすぐに返答をする。

「川上も呼んできなさい」

「彼も同行させるのですか？」

咲夜は聞き返しはしたが多分最初からそのつもりだろうなあとは思っていたので驚きはしていない。

「まあ、念の為の護衛よ」

口元に笑みを浮かべレミリアはそう言うが大きな力を持つ吸血鬼が、人間を護衛に付けるなど可笑しな話である、咲夜も同行するのだからそれだけで事足りるだろう。

要は気に入った玩具を手元に置いておきたい心理みたいなものだろうと思夜は思った、元も子もない話だが、レミリアは長く生きているが外見相応に子供らしいとこ

がある。

もつとも川上本人は自身が玩具扱いだろうが王様扱いだろうがそんな事、気にも止めないかも知れないが。

「では川上にも用意をさせますので」

最後に失礼しますといいい残して咲夜はその場を後にした。

レミリアは一人カップの中の緋色の液体を眺めくつ、とまだ熱いそれを飲み干した。今日はどの日傘にしようかなんて事を考えながら。

紅魔館の厨房では、食後の片付けをしているメイド妖精に混じり川上はペティナイフを研いでいた。

調理用のペティナイフや包丁が幾つか鈍ってきていたので手入れをしなくてはと思っていた咲夜がちようどいいだろうと川上に頼んだ仕事だった、刃物使いならシャープニングなどの手入れのスキルは基本だ、如何に優れたナイフでも使い続ければ必ず切れ味は落ちるからだ。

川上は中仕上げ研石の上をペティナイフの刃を角度を決めて滑らせていた、角度を一定に定めて研がないといくらシャープニングしても鋭利なエッジには仕上がらない、すでに何口かのペティナイフと包丁は手入れを終えたらしく並べられている。

手入れが終わったナイフ達は単にシャープニングしただけでなく磨きもかけられ

たらしくブレードが銀の飴のように滑らかに光っていた。

そんな厨房の扉が開かれ入って来たのはメイド長たる、咲夜だった、彼女は、仕事するメイド達にご苦勞様などとねぎらいの言葉をかけ、妖精メイド達も会釈を返すが川上はそちらに見向きもせず砥石にかけたエツジに光を当てて見て角度を確認していた。

咲夜は黙々と作業をしている川上に歩みよると特に声をかける事もせず、置かれていた手入れの終わったペティナイフの一つを手に取り検めた、エツジは極めて目の細かい超仕上げ砥までされているらしく刃が鏡面のように滑らかだった。

咲夜は左手に持ったナイフの刃を右手親指の爪の上に軽く立てた、そして爪の上を軽く滑らせようとするが刃は自重だけで爪に食い込むかのように一切滑らない、少しでもエツジが鈍っていると刃は爪の上を滑るのだ。

今度は人差し指でエツジをそっと少しなぞるとそれだけで薄皮一枚が切れた、カミソリ並に鋭利な研ぎ上がりだ、調理用としてはこの上ない仕上げだ。

「見事な仕上げだね、文句のつけようもないわ」

「そうか」

咲夜の賞賛の言葉にも川上は再びペティナイフを砥石の上で滑らせつつ一言返すだけだった、もつとも仮に駄目出しされても川上にもこれ以上の仕事は出来なかったが。

刃物に対しては真摯なのねなどと思いつつ、咲夜はここに来た目的を思いだす。

「作業中悪いけれどそれより優先する仕事が出来たわ」

「なんだ？」

川上は両面研ぎあげ最後にバリを取りつつ聞き返す。

「お嬢様が外出なさるわ、貴方も、護衛として同行」

「時間は？」

「二十分後に玄関ホールに待機」

「分かった」

「じゃあまた後でね」

そう完結なやり取りを終えると自分も準備するのか咲夜は厨房から退出した。

川上は出かけるまでに中研ぎを終えたこの一本だけ仕上げてしまおうと仕上げ砥

石を取り出した。

第52話

「うーん」

「どうなさいましたか？」

何が気になるのか小さく唸る主にメイドは尋ねた。

暇つぶしに外出し博麗神社へと向かう林道を歩く三人組、日傘を差した小さな体躯のレミリアを先頭にレミリアの三步左後ろをメイド服の咲夜、右後ろを礼服の川上が歩いていた、飛ばずに徒歩の移動であった。

レミリアは外出する際は徒歩の場合も多かった、外の世界を地面から感じながらの散歩もまた好きだったからだ。

もつともそもそも飛んでしまうと川上が同行出来なくなるのだが。

「今日は暑いわね」

そんな事を何となしにレミリアは呟いた。

「夏ですからね、今日は雲りですから日差しは辛くはないですが」

そういつつ咲夜は空を仰ぐ雲空の上では日はサンサンと照っている事だろう、普段は涼しげな咲夜も歩いていて僅かに汗ばむ。

「少し休みますか？」

「大丈夫、もう直ぐだしね」

まあ、後三分程で神社は見える、休憩を挟むほどの事はない。

しかし日傘を差しているレミリアはまだいいだろう、この暑さの中でメイド服では咲夜も辛いだろうが彼女は少なくとも表情にそれは出さない。

しかし、もっとも辛いのは黒尽くめの男川上だろう、ふと川上はこの暑さの中どんな表情をしているだろうと咲夜は彼の方を振り向く。

「……あれ？」

「どうかしたの？……あ」

後ろの従者の怪訝な声に向き直ったレミリアもまた足を止めた。

三人はいつの間にか二人になっていた、そこにいるべき男がいない、もともと気配が希薄だから居なくなっていたのに気づかなかった。

ふたりは辺りをゆっくりと見渡しあの男は見える範囲には居ないと確認すると、そのまま互いに目を合わせ

「しかしこうも暑いと霊夢もだれているかも知れないわね」

「霊夢がだらけているのはいつもの事ですわ」

互いにあえて居ない川上には触れず歩き出した。

どうせ放っておいても別にくだばりそうもないのだ、レミリア、咲夜共にそう思っていたためか、いや、咲夜は一旦レミリアと神社に向かつてから迷子の川上を探そうと思っていたが。

ともあれ一人減つてた一行だが何事もないように神社へと進む。

一方博麗神社では博麗霊夢が掃除を終えた境内の石畳に打ち水をしていた、パシヤリと桶から水を撒き霊夢は一息つく。

これで少しは温度も下がるだろうと霊夢は考える、もつとも彼女自身の顔色は暑さに参っているようには見えない、あるいは纏っている変則的な巫女服が通気性がいいのかも知れない。

そしてふと鳥居の方に顔を向ける、石段を登ってくる僅かな音に気付いたのだ、誰だろう？ 霊夢は思った、魔理沙を始めとして神社に現れる人妖は結構居るが石段からではなく空から飛んでくる者が多い、空を飛べぬ人里の者か？ それも珍しい、しかし、妖怪が現れる事より普通の人間が現れる事のほうが珍しいとは神社としてはどうなのか。

珍しい参拝客か招かねざる客か客でもない人外か。

果たして石段を登ってきたのは黒い服を纏った若い男であつた、しかも帯剣してい

る。

人間のようにだが人里の人間にも見えないが、霊夢は思った、というか何処かで見た事があるようなとも。

男は鳥居をくぐり軸のぶれない歩みで境内に入ってきた、男の顔をみるとやはり見覚えある据わった眼。

「こんにちは」

「こんにちは」

そして霊夢が男の挨拶に返答した所で男が少し前に神社に来た外来人だと思いついた。

そういえば魔理沙に連れて後川上がどうなったか等は魔理沙から聞きもしていない
し霊夢は知らなかった。

「お久しぶりね、お元気そうで何より」

「お陰様で」

霊夢の社交辞令的な挨拶に、そう川上は返す、特に今の川上の現場に霊夢のお陰という事は無かったが。

「今日はどうしたの？素敵な御賽銭箱はあちらよ」

「特にどうしたという訳ではない」

賽銭箱云々は流し川上は端的にそう言った。

「用も無しに来たという訳じゃないでしょ」

「そのまさかだ」

川上は口の端を軽く上げて皮肉げに少し笑い、煙草を啜えた。

靈夢は空を仰ぎ一つ息を吐いた、会うのは二度目だがどうも取っ掛かりがないというか掴み所がないというか、靈夢は思った。

「冷やかashi?」

「違う、用があるのは俺ではない、俺はただの付き添いだよ」

煙草に火を点けつつ川上は答える、しかし付き添いといいつつ川上一人にしか見えな
い。

「貴方一人で付き添いなのか?」

「何故か先に着いた」

「付き添ってないわねそれ」

のんびりと煙草を吹かす川上に靈夢は突っ込む、もしかしてこの人はアホなのだろう
か、そんな事を思った。

「結局誰の付き添いなのよ?」

「今来る」

端的に答え川上は自分が上がってきた石畳を後ろ手に示す、違わず少しして誰かが上がってくるのを霊夢を感じた。

「あ、川上いたよ咲夜」

「そのようですね」

果たして境内に現れたのは日傘を差した幼き外見の吸血鬼とその従者のメイド長。

「……あいつらか」

小さく霊夢は呟く、この男中々厄介な連中に関わっているらしい、レミリアが人間と関わるとは意外、でもないか、などと霊夢は考える。

「ご機嫌よう、霊夢」

「はい、こんにちは、この暑い中ご苦勞なことね」

挨拶の言葉をかけたレミリアと黙礼する咲夜に労いとも皮肉ともとれる返礼をする
霊夢。

「川上、ちゃんとついてこなきゃ駄目じゃない」

「すまない」

窘める咲夜に対しタバコを携帯灰皿に揉み消しつつ一言で川上は済ませた。

「取り敢えず暑いし上がらせてもらいましょ」

「そうするか」

そういつつ霊夢の了承も待たず三人は中へと歩き出した。
一つ溜息だけつき何も言わず霊夢も後に続いた。

第53話

人里を出て暫くの森の中で上白沢慧音は沈黙していた。

青みがかかった艶のある長髪に落ち着きと聡明さを感じさせる綺麗な顔立ちの彼女だったが、今その顔色は紙の色に近い。

森の中、多数の人間の死体が発見されたと報告を受け里の者数名と共に検分に来た彼女だった。

「…酷い」

改めて目の前の凄惨な光景にそう呟いた。

そこには比較的新しい死体が10人以上散らかっていた、内臓を零し、腕が飛び、頭が割れ脳を零し、首が胴体と生き別れとなり、腹に大穴が空き壮絶な骸を晒している、また野良妖怪か動物に荒らされたのか食られた形跡のある死体もあった、森から外れた所でも死体が見つかっている犠牲者はのべ20人以上か、さらに季節は夏である、死後ある程度は時間がたっている事もあり吐き気を催す酸鼻な臭いが漂っていた。

「本当に酷いですね」

慧音の後ろから共に検分について来た里の若者が言った、すでに吐いてきたのだろ

う、顔は青白く手拭きで口元を抑えていた。

「大丈夫か？」

「ええ、何とか、先生は大丈夫ですか」

「大丈夫とは言わないが君よりはこういうのには慣れてるよ」

若者に答えつつ、慧音はまだ死体を改めている里の者達に目を戻した、死体を調べた結果少なくとも里に住まう人間ではないと分かった、もつとも里の人間だったらより大事になっているだろう。

「一体何があつたんですかね、みな武装してるし荒くれ共が仲間割れでもしたのでしようか？」

「そういう様子ではない、な」

「先生はわかるんですか？」

「いや、精々推測しか出来ないんだが……」

慧音が見た限り妙な現場だった、皆武装しており抜刀して死んでいるから争いの結果なのは明らかだ、しかし。

「殆どは刀傷だ、しかも切り口からして相当な手練に間違いない」

「単身の仕業って事ですか？なら、刃物を使う物の怪の類ですか」

「そうかも知れないんだが、少しおかしい」

「何処がですか？」

「争いがあつたのは事実だろうが争つた痕がないんだ」

そう、硬めの口調で話す慧音に若者は首を傾げる、争つたのに争つた痕がない？

「どういう意味です」

「彼らの武器を見てみなさい、争つたのに刀剣類に血の一滴はおろか激しい刃こぼれや打ち込み疵、折れなどの損傷がない」

恐らく野盗などの類の荒くれ共の死体は皆武器を持ち争おうとしたのは違いないが、その刀などは以前からと思われる小さな刃こぼれくらいしか傷みが無かつた。

「恐らくだが戦つたが傷を負わせる事はおろか、切り結ぶ事さえ出来なかつたのだらう」

「……抗つたのに一方的に殺されたって事ですか」

若者はそう白い顔で呟く、この人数が一方的に単騎に蹂躪されるとは、戦闘力の次元が違ったのだろう、しかし…

「それほどの事をやってのけたという事はやはり妖怪では？」

妖怪は文字通り人外の力を有している、単騎でそれほどの力を持っているなら妖怪と考えるのが自然だと若者は考えた。

「その可能性もあるが、犠牲者は里の外で生きてきた人々の集まりだ、彼らも馬鹿じゃ

ない、危険だと理解している妖怪と争うだろうか」

そう言われて若者も考える、野良妖怪の危険は里の人間でも理解してる、まして危険な里の外で生活していた連中がその危険な妖怪に自ら争いを仕掛けるだろうか、死体は立ち向かっていった形で死んでるように見える、なら？

「まさか相手は…」

まさかという思いで若者はそれを言いかけたが

「人間」

続きは慧音が口にした。

「私の勘だな」

「先生！ここで死んでる連中は金を一人も持ってない、多分盗られちよる！」
死体を見聞していた里の者が一人立ち上がり慧音にそう言った。

「金を取る…」

「ますます人間的だな」

呟く若者にそう慧音は言う。

「でも先生、全部で数十人、武装して荒事になれてるような連中です」
思い直したように若者は慧音に反論する。

「二人でこれを全部切り殺すなんて人間に出来る事ではないですよ」

「人間を甘く見過ぎだよ」

慧音は若者にハンカチを渡しながら言った、彼は凄惨な光景と暑さにも当てられたのかただでさえ色の無い顔に冷や汗までかいていた。

「少し休んでなさい」

「先生は？」

言いながら竹の水筒を渡し慧音に若者が聞く。

「私はもう少し調べる、この後吊つてあげないとだしな」

素晴らしい慧音は血と腐臭の立ち上る現場に足を進めようとして地面に白い物が落ちていたのに気付きそれを拾った。

「煙草か」

それは煙草の吸殻だったさほど珍しくもない紙巻き煙草の、最近里の愛煙家の間で流行りだしてるフィルター付きでもない両切り。

まだ新しいそれがこの現場と関係あるものかもしれないと慧音は思いそれを懐紙に包み懐にいれた。

博麗神社では室内で三人が卓を囲んでいた。

レミリアはちゃぶ台の上に上体を乗せだれており、咲夜は座布団の上に綺麗に正座

し、川上は刀を置き壁に背を預け胡座をかいていた。

「畳の上も落ち着くわねえ」

レミリアは弛緩した空気の中誰にともなく呟いた、洋館住まいだが和式も好むようだ。

「なら館に和室でも作つたら」

軽口を返しつつ戻ってきた霊夢が各々の前に冷たいお茶を配る、歓迎してないような態度ながらその実博麗の巫女は来るもの拒まずである。

「それもいいわねえ」

本気なのかそうなのかわからないとして考えてないような間延びした口調で言いながらレミリアは卓の真ん中に置かれていた赤い林檎の果実を手に取りぼんやりとした様子でそれを川上に渡す。

「剥いて」

若干甘えたようなニュアンスでそう言われた川上は何も言わずにポケットから折り畳みナイフを取り出しブレードを起こすとシャリシャリと剥きだした。

「レミリア、眠いの？」

ずいぶん弛緩した様子の子のレミリアに霊夢がお茶を啜りつつ聞く。

「眠くないわよ、ただ道中暑かったから、ここは涼しくわねえ」

レミリアもまた冷たいお茶を飲みつつ答える、神社の和室は風通しも良く中々快適だった、軒先に吊るされた風鈴が涼しげな澄んだ音を立てる。

川上が手際良く等分した林檎を傍らに置いてあつた新聞紙に乗せ卓に差し出した、ちなみに果汁が染みた新聞紙には文々。新聞とあつた。

川上が切つた林檎は皮を全部剥かずV字に切られて何故かウサギの形に可愛らしく剥かれていたが、あえて誰も突つ込まない、いや内心咲夜は嘖き出しかけたが表情には出さなかつた。

「まあ、そんな事よりも今日は霊夢に新しい私の忠実な使用人を紹介しておこうと思つてね」

シヤリシヤリと林檎を食べつつレミリアは川上に目を向けた。

「川上さんでしょ知ってるわ」

当の本人は会話を聞いているのかいないのか煙草に火を点けている姿は全く忠実そうには見えない。

「なんだ、知つてたのね」

「一度会つただけだけどね」

林檎を嚙りつつもつまらなそうに言うレミリアに霊夢も林檎を一切れ食べつつ答え

る。

「ふうん、なら・・・」

レミリアは口の端を吊り上げ笑みを浮かべた、吸血鬼の特徴である牙が覗く。

「実力の方は知ってるかしらー」

第54話

「・・・さあ、知らないわ」

急に川上の技量を問いかけられた霊夢はそうとしか言えなかった、せいぜい腕は立つんだろうなと思ってはいたが。

「そう、なら知りたくない?」

どうもレミリアは新しい玩具もとい使用人の能力を見せたくてたまらないらしい、子どもっぽい考え方だ。

「つまり何がしたいの」

霊夢は聞き返すが一応話題のトピックである川上は自分は関係ないかのようにと茶を啜っていた。

「川上、霊夢と立合いなさい」

いきなりレミリアは川上に命じたが。

「面倒」

「右に同じ」

川上、霊夢、両者に切り捨てられた。

「……」

レミリアは何か言おうとしたが言葉にならず、助けを求めて咲夜を見た。

咄嗟に主の意にそう為この場をどうすべきか咲夜は頭を回転させる、川上と霊夢に手合わせさせればいい、しかしどこか似通った気怠げな雰囲気のある二人をどう動かす？川上は強くいえば何とかなるか？霊夢はどうする？川上の力量を見せるだけなら自分が霊夢の変わりに手合わせの相手になるか？

2、3秒の内にそれだけ考えた咲夜が言ったのは。

「私も見たいです」

もう少し上手い事が言えないのか私は、確かにみたいけど、咲夜は自分を恥つつ次に何を言うべきか考え

「いいじゃない、相手してもらいなさい霊夢」

言ったのはここには居ない人物だった。

「…紫？」

「貴方最近稽古不足でしょう、まして体術の稽古なんて相手が中々いないのだからいい機会じゃない」

声はすれども姿は見えない、その甘く、妖しい声は霊夢に立ち合うよう言っていた。

「なんでわざわざそんな事しなきゃならないのよ」

霊夢は相手が姿を見せない事には得に言及せず言い返した。

「有事の際に備え稽古は出来るときにするのが博麗の巫女ですわよ」

声はそういうと霊夢は反論を諦めたのかふうと息を吐いた。

しかしもう片方の川上は話を聞いているのかいないのか啞えタバコで眠たげにぼんやりしているだけだ。

そしてとりあえず成り行きに任せる事にしたのか、言い出しつぺのレミリアと咲夜はリングを齧りつつ静観している。

「せっかくだから余興として勝ったほうは景品を取る、なんてどうかしら?」

姿なき声がそういうと川上の目の前が裂けるように空間が小さく割れた、異常な現象にも川上は顔色を変えない。

しかし空間の割れ目から古ぼけた鉄の端のようなものが覗きそこに刻まれた字を見て川上の眼の色がにわかにな変わった。

「本物か?」

「正銘ですわ、貴方好みでしょう?」

眩くような川上の問に声は何処か楽しげに答える。

川上が霊夢に目線を向けると二人の目が合った。

「…しようがないわね」

霊夢がそう呟くと川上は吸いさしのタバコを携帯灰皿で消して右手に刀を持ち立ち上がった。

「外でやりましょう」

霊夢も立ち上がり言う。

無言で川上は頷き霊夢と共に部屋を出た。

「さて、面白いものが見れそうね」

「ええ」

最後の一欠のリンゴを口に放り込みレミリアも立ち上がり、咲夜も後に続いた。

博麗神社境内に五人の人間が集まった。

霊夢はただ突っ立っているだけに見えるが纏っている空気に微塵の隙もない、博麗希代の天才は武芸とて並ではない。

川上は眠たげで何処をみているかよくわからない目で緊張しているのか何を思っているのかよくわからない、玉砂利が敷かれた地面を確かめるようにジャツと一回踏んだだけだ。

レミリアと咲夜は木陰で二人を見ている、レミリアはこれが見たかったのだろう嬉し

げに笑みを浮かべ、咲夜はレミリアに日傘を差しもう片手に川上から預かった刀を抱えている。

そしてつい先ほど暇つぶしにきたらしい霧雨魔理沙はいい見せ物だという風に賽銭箱の上に腰掛け見物している。

「もう、さつさと終わらせるわよ」

霊夢が挑発してみた台詞を言うが彼女の場合他意はなく素で言っているのだろう。

「咲夜、予想は？」

楽しげな口調でレミリアが従者に問いかける。

「難しいです、霊夢は勿論ですが、川上も達人です、力量が高すぎるもの同士だと勝負は拮抗するかも知れません」

咲夜はそう前置き

「それでもあえて言うなら川上です」

そう言った。

「そう」

クスクスとレミリアは楽しげだ。

「お嬢様なら結果もわかるのではありませんか？」

運命を視て操る自らの主に咲夜は問う。

「言つたでしよあの子に關しては視えないと、だからこそ面白いのよ」
レミリアはそういい笑つた。

川上は始める前の一服かちようど最後の一本のタバコを取り出し火をつけソフト
バツクをクシヤリと握り潰し懐に納めた

第55話

博麗神社——賽銭箱に腰掛け自身の帽子を手の中で弄びつつ魔理沙は境内で対峙している二人を見ていた

口の端に笑みを浮かべながら

普段澄ました顔した霊夢が負ける所が見れるかもと魔理沙は期待していた、少し捻くれた彼女は普段滅多に失敗しない友人の失態を見るのが密かに好きだった。

当の霊夢と川上は二間の距離を挟んで対峙していた。

霊夢は左前の半身になり左手をゆるりと挙げて軽く肩の前に構える。

川上は自然な立ち姿から膝をえまして僅か腰を落としたりやはり左手を自分の生中線の前鳩尾の高さで柔らかく構える。

霊夢も川上も互いの呼吸や拍子を測り隙を伺うが、両者とも隙がない

「もう始まっています」

咲夜が言った、誰が開始の合図をするでもなく二人は自然と始めていた。

にわかには風が吹き、何処かで澄んだ鳥の鳴き声があった。

そして立合に没入する

程度の手合いなら楽なのだ、川上はそう思う。

「綺麗な声だな」

静かにそう言った川上に

「近くの木に巣をつくつてゐるみたいね」

霊夢は答える。

周りが見えている、実戦の心得くらい当たり前にもっているかと川上は思う。

隙がない、呼吸も読めない、間も盗めない、今の会話で隙が出来るかとも思ったがまるで崩せない。

出来る、霊夢と川上は互いにそう思った。

ざり、と歩み足で川上が少し距離を詰める、両者が交錯するにはまだ遠い。

「…ずいぶん大人しいわねえ」

「下手に動けないんですよ二人とも」

つぶやいたレミリアに咲夜が言う。

互いに手練れである以上お互い下手に仕掛けられない、隙のない相手に強引に攻めるのは負けを意味する、攻めようという意自体が隙だからだ。

故に武術では如何に相手を崩すかが重要だ、崩せば、相手に隙を作れば勝てる。

まずは崩す、そしてきつかけを掴んだ方が勝ちだ。

その定石に則つて川上は動いた、煙草の空パックを懐に戻した時密かに右手の内に握りこんでいた飛針と呼ばれる細い棒手裏剣を手から自然に落とし、中空で靈夢に向かつて蹴り飛ばした。

しかし回転しながら迫つた飛針を靈夢は左手の広い袖部分で弾いた、飛び道具は意外と布生地で留めることが出来る。

駄目か、川上は思った、今のを咄嗟に避けようとしたり当たつて怯んだりして体制が崩れたらそこで決めるつもりだったがしかし体幹を一切揺らさず顔色一つ変えずに防がれた。

不意打ちの邪法だが、手の内に握り込んでいたのを読んでいたか、咄嗟にあの余裕で受けたのか、どちらせよに尋常のモノではない。

そして、また降着する、川上が左半身の靈夢の外に回り込むように一歩進めると靈夢も応じて外に回り込まれぬようにゆるりと足を進め、そんなせめぎ合いを暫く続けていると、やがて両者は互い手の届く距離に踏み入れていた。

周りの緊張感が俄かに高まる、完全に交戦距離に入り咲夜や魔理沙が息を飲み立合を見守る、しかし当の川上と靈夢はその距離にあつて緊張もなく無駄に力まず脱力を保つていた。

この距離から相手の崩すか隙を突くかの駆け引きが応酬されるか、しかしお互い下手

に仕掛けられないのは変わらない。

先に仕掛けたのは霊夢だった。

前に出していた左手の一閃、川上の顎を狙う順突きだった、とつさに川上は軽く構えていた左腕を上げ前腕でガードした。

「ツッ」

早い

踏み込みも体重移動もない肩から先だけで打った軽い当身だが起りが全く見えず早く、川上でも突き手を掌握するような事が出来なかった、しかも

拳が硬い

そう川上は思った重さはないにしろ当てる瞬間握りこみ撃ち抜くような突きは受けた前腕の骨の髄に痺れが走った、顎に貫つてたら決められていただろう。

崩すための牽制の突きだったが、川上は舌を巻いた、だが川上を崩すにはいたらなかった。

そうして三たびの膠着、流石に同じ突きを二度も用いる程霊夢も愚かではない、同じ手を使えば今度は流石に対処されるだろう、川上のような手練に突き手を掌握されたらそこで勝負ありである。

相手を崩す切っ掛けが掴めない、こうなつてくると

「根比べ、ですかね」

咲夜がポツリと言った。

お互い下手に先に動くと負けるといふ状況に陥っている、そうなると思妙なせめぎ合
いの中でどちらかが集中を切らして僅かにでも隙を見せたほうが負けという持久戦に
もつれこんでくるか。

「根比べ？」

レミリアが言った

「あの二人が？」

「……」

レミリアの言葉に咲夜もまた考える。

霊夢と川上、二人の気性、果たして二人が相手の集中が切れるまで待つ・

か？

はたして、咲夜が考えた通り二人は呑気だが面倒をさつさと終わらせようとする気性
故、待つのではなく罅が明かない状況に自ら罅が明ける。

先に動いたのは再び霊夢だった、彼女は右手を伸ばし川上の襟首を掴みにいった、別
段早くもなくまるで服のゴミでもとるような無造作な動きだった。

その無造作故に攻めの意も起こりも捉えられない、武術の強みは早さばかりではな

い、反応しやすい早さより意識の死角に入る遅い動きも時には有効だ。

霊夢としてはこの掴み手に反応されてもされなくてもどっちでもよかった、川上が反応出来なかつたらそのまま襟首を掴むと同時、崩しを入れて投げて固める、それで終わりだ

そして川上が反応してしまっても

川上は無造作に襟首を掴みに来た霊夢の手首をとつさに掴んでしまった、同時に川上が何かするより早く霊夢は一気に腰を落とし沈みこむ、川上は掴んだ霊夢の手を反射的に離せなくなり、霊夢の沈む動作で川上は逆に腰が浮いてしまう、見事な崩しの手管。

霊夢はその動きの流れを切らずに自らの右手首を掴む川上の左腕上腕外側に自分の左前腕を持っていくと手首を掴まれた右手で掴んでいる川上の左手首を巻くように内に絡めて腰を使い川上の上腕外側に添えた左手を川上の前腕内側から右手で迎えにいき川上の肘を順関節気味に、それに伴い肩を完全に極めた、肘の筋が伸びて悲鳴をあげ、肩も上がり、激痛と反射で川上は背を逸らしてしまう。

襟首を掴みにいく動作からここまで流水の様に自然で淀みのない見事な技前だった、しまったなと川上は他人事のように思う、この状態まで持っていかれては抜けるのは不可能に近かった。

霊夢は極めた川上の腕はキープした状態で右足を引きつつ一気に腰を落とし投げに

かかった、このまま倒して固めれば終わり、この投げの動作に無理に堪えようとすれば肘が砕けて筋が破断するだけである。

しかし投げにいった刹那の出来事、霊夢は僅か違和感を感じた一瞬極めている腕に感じる手応えが緩んだ、川上の足が地から浮いたのである、倒れるにしても僅かに早かった、おそらく完全に崩れる前に自ら後返り受身を取り逃げるつもりだと霊夢は咄嗟に判断した、甘い、霊夢はそれに反応し一気に腰を落とす、自ら飛んだのならまともに受身など取らせず空中で背中から地面に落とす！

しかし、その刹那、首と肩に何か絡んだ瞬間には霊夢の視界は反転していた。

「——え？」

天地が逆転した事に頭での理解は追いつかなかったが、霊夢の体は反射的に動き頭から落ちないよう最低限の受け身を取った。

何故自分が？確実に投げたと思ったのに逆に投げられた？そう一瞬考えたのが致命的だった。

川上は倒れた霊夢の上を既に取っていた、まずい！霊夢がそう思った瞬間には腕を取られ肩関節を極められていた。

肩に走る激痛、しかし倒された状態ならまだ返せる、と思った瞬間肩だけでなく、全身に激痛が走り霊夢は声すら出せなくなつた。

川上の足が霊夢の鼠蹊部、股関節と太ももの付け根にある点穴を押さえていた。肩を極められ足の起点の点穴を抑えられてたもう動く事はまず不可能。

「そこまでよ」

姿なき声が静かに止めを告げた。それで川上も固め技を辞めて霊夢を開放する。

「…勝負ありですね」

「ええ」

冷静に告げる咲夜にレミリアが返す、勝負はそこそこ楽しめたのか短い返答だが声色は満足そうだった。

「つ、う、」

別に何処かを傷めたわけではないが固め技の激痛が尾を引いているのか少し呻きつつ霊夢が立ち上がる。

「紫、私は何をされたの」

巫女服をはたき汚れを落としながら、霊夢は尋ねた。

「簡単な返し技ですわ、彼は投げらながら足絡みを貴方にかけて自分が上をとるよう貴方を一緒に倒しただけです」

「…あー」

姿なき声に霊夢はそういう返し技があつたかと得心したような、声を出した。

川上は既に一仕事終えた後の一服に火を付けていた。

ずっと無言で霊夢と川上の勝負を見届けていた魔理沙は始まる前とは打って変わって何処か面白くなさそうに口をへの字に曲げて二人を見ていた。

第56話

博麗神社境内

つい先ほどまでは5人しか居なかつたその場にか6人目が現れていた。

まるで何も無い場所から突然現れように、あるいは始めからいたかのよう。

その人物は容姿を見れば可憐な少女だった。長い金髪をいくつかの房にわけてリボンで束ねておりやはりリボンのついた帽子を被っていた。

体つきは少女としては比較的長身で160cm台前半か、服装はゆつたりとした紫のフリルのついたドレスに白い手袋をして、手には畳んだ日傘を持っていた。

顔つきは何処か幼さを残すが口元を釣り上げるような何処か不吉な笑みには幼さとは矛盾した妖艶さを感じさせる。

いつの間にか現れていた少女に特に驚くようなまともなものはこの場になかつた、いや、先程から聞こえていた姿なき声の主を皆知っていたのである。

すなわち彼女が幻想郷の賢者と言われ、幻想郷最古参の妖怪、スキマ妖怪と言われる八雲紫である。

霊夢は既に立ち上がり巫女服を叩き汚れを軽く落とす、紫がいつの間にか現れてる事

には靈夢にはなれっこであった。もとより神出鬼没な妖怪である。

「だから常々言っているでしょう。貴女は稽古不足だと、だから体術で簡単に遅れをとるのです。」

紫は靈夢に対してそう叱責する、その声は少女のような高く甘さを含んでいたが、同時に口調はその声色に似合わぬ落ち着きと色気も含んでいた。

八雲紫は少女のように見えるが何故か妙齡の女性にも思える、そんな矛盾した印象の妖怪だった。

「悪かったわね、元々体術は専門外なのよ。」

靈夢は紫に面倒くさそうに反論する。

「巫女として巫術はもちろん、体術も修めていて当たり前です。大体彼も本気を出していない事くらい貴女も分かっているでしょう、せめて彼を本気にさせるくらいには稽古して欲しいですわね。」

靈夢は叱責されながら、どこ吹く風というように極められた肩を回して傷めてないか確認していた、特に筋などは伸びたりしていない。

その二人のやり取りを他の四人は特に表情も変えずに見ている、割りと見慣れた光景だったのかも知れない。

いや、一人だけ、初めて、正確には初めてではないが、川上は八雲紫を見て目を細

めていた、これまで彼が見せた事のない表情だった、目ざとく咲夜だけは川上の表情の変化を見てとっていた。

「なんにせよ、これで体術の稽古の必要も理解出来たでしょう。精進しなさい、何なら彼から稽古を付けてもらうのもいいかも知れないですわね」

紫の言葉に霊夢は何も反論せず溜息を一つついた。やはりやらなきや良かった、霊夢はそう思った。

歴代巫女最高とも言われる天賦の才の持ち主である博麗の麒麟児である霊夢だったが、その最大の欠点が努力嫌いな点であった。

そして当の川上は二人のやり取りに興味を失ったかのように明後日の方角を向きタバコを吹かしていた。

「と、失礼、ご挨拶がまだでしたね」

ふと川上の真後ろから紫の声が聞こえた、川上が視線を外すまでは霊夢の方に居たはずだが、川上は特に驚きもせずタバコを携帯灰皿に押し付け振り返る。

「こうして、ちゃんと挨拶するのは初めてでしたわね、私は八雲紫と言います、以後お見知り置きを」

紫は口元を扇子で隠しつつ、表向き丁寧川上に挨拶した、口元は見えないが眼が嗤っていた。

「川上という、以後適当に宜しく頼む」

そして川上はいつも通りに完結に適当な挨拶を返す、紫を見る目は先程とは違いいつも通りの眠たげな眼だ。

「約束の物は？」

川上は短くそう要求した、川上がこの勝負に乗ったのは勝つたら取れる褒美の為だ。

「せっかちですわね、そう急ぐ必要はありません、これでしよう？」

紫は素晴らしいつつスキマ妖怪と呼ばれる所以の空間の裂け目から二つの包みを取り出した。

一つは無地の臘脂色の刀袋に包まれたものでもう一つは艶やかな西陣織りに包まれたもの。

「新々刀、刀工は固山宗次。裁断銘三つ胴土壇入り。二尺三寸五分、優しい太刀姿に近いですわ。白鞘入り、拵えは半太刀拵えです」

川上は白鞘入りの刀身と拵えの二つを紫から受けとると、短く礼をいい、踵を返した。「その男をここに呼んだのはお前か」

川上が咲夜に預けていた刀を受け取っているとキレミアが突然断定口調で何処か楽しそうに言った。

それは八雲紫への問いかけであった。

「さあ、どうでしょうね」

紫は口元を扇子で隠しながらクスクスと鈴を転がすような声で小さく笑い、レミリアもそれ以上言及せず紫と同じように笑った。

「貴方、よろしければ、うちの霊夢にまた稽古つけて居ただけでないでしょうか」

紫のその言葉は川上に向けられていた。川上は紫を一瞥しただけで答えは変えさなかつた。

「いずれまたそうなるわ、そういずれね」

紫はそう一人ごちてまたクスクスと笑った、その様は愛らしい見かけに拘らず胡散臭さに溢れていた。

「そろそろ帰りましょうか」

「かしこまりました」

レミリアの言葉に咲夜は日傘を開く、川上は帯剣しなおしていたが、さらに左手に二本の刀袋を持つ。

ふと霊夢は賽銭箱に腰掛けていた友人がいつの間にか居なくなっていた事に気付いたが、帰ったのだらうと判断した。

「あいつは何しに来たのかしら」

そう小さく呟く霊夢だったがすぐにどうでもよくなり、食事の用意をどうするかとい

う事に感心が移ってしまった。

第57話

魔理沙は魔法の森にある自宅に一人帰宅した。

霊夢と川上の立合を見届けて、神社での皆のやり取りを最後まで見ずに誰にも何も言わず帰ってきた。

何故か酷く気に入らなかつたのだ、あの勝負が。何故だろう、霊夢が負ければなんとなく面白いと思っていたし、そして期待通り霊夢の負けだった。

なのに何故彼女は苛つきに似た感情を覚えたのだろうか、魔理沙自身よく整理の付かない感情を持って余し、彼女は居間のソファーに身を投げるように横になり苛立しげに瞼を閉じ指で瞼を上から揉んだ。

ふと、彼女は立ち上がり部屋の片隅に置いてある自身の収集品の一つである刀掛けに掛けられた一振りの刀を手にとると鞘を払った。

抜き身の白刃を暫く眺めると、魔理沙は柄を両手で握り上段に振りかぶり、思い切り振り下ろした。

その斬り下ろしは恐らく豆腐一つ斬れなかつただろう。魔理沙は刀線に刃筋を立てるといふ斬り下ろしの基本も出来ず、腕だけで振るつたため刀を止める事も出来ず刀は

流れて危うく床を打ちそうになった。

前振った時もそうだった、それで魔理沙は刀を武器にする選択は切り捨てたのコレクシヨンにした。

前にあの男はこの刀片手で綺麗に斬り下ろしたがやはり魔理沙には同じ事は出来ない。分かつていたさ、そう思いつつ刀を納め刀掛けに戻した。

魔理沙は部屋から奥へと繋がる廊下へと歩みを進めた。

魔理沙には霊夢のような才能も巫術もない、川上のような卓越した武芸の腕もない凡人だ。

魔理沙は廊下の一番奥のドア、自身の私室の前に立つ。

しかし凡人なりに魔理沙は考える、自身に出来る事さえ突き詰めれば。

魔理沙はポケットから鍵を取り出した、彼女は自宅を留守にする際も自宅の玄関には鍵を掛けないが、自身の私室だけは必ず鍵を掛けていた。

魔理沙の友人の霊夢は常に遙か高みを飛ぶ人間だった、誰も本当の意味で彼女と飛べる人間も妖怪も居なかった。

魔理沙は鍵を開けて私室に入り内側から鍵を掛けた。誰も入れた事のない彼女の私室は窓もないため薄暗い。

霊夢は努力らしい努力もしない、しかし彼女は天賦の才だけでその実力は人間の域を

超えている。天才という形容詞すら霊夢を表すには生温い。そして本当は霊夢は恐らく誰も見てはいない。

魔理沙の私室は壁一面に全て本棚が置いてありそれらに魔法の研究用の資料だろうか、大量の様々な本が納められており、さらに床には本棚に入りきらなかったのか大量の本が決して狭くない部屋の三分の一以上の床に乱雑に積まれ埋めつくされていた。奥には机が一つ置いてある。

どこまで努力すれば魔理沙は霊夢に……魔理沙に取つて霊夢は昔からの親友である。ギリ、と魔理沙は無意識に歯噛みをした。

しかし魔理沙が霊夢に向ける感情が単純に友情だけではないもつと複雑なものであると果たして何人が気付いているだろうか。

魔理沙は部屋のランプを灯した。

いつか見た星空、あの星を魔法でこの手にしたら、霊夢いる高さにも手が届くのではないかと、そう思ってしまったのだ。

部屋に明かりが灯るとふと部屋に違和感が浮かびあがる。本棚に納められた資料や文献は様々な厚さ、大きさ、装丁であり同じ本は一つとしてなかったが、床に積まれた本は全て分厚い黒い装丁の同じ本であった。

しかし、今日いつも遙か高みを飛ぶ霊夢が地の底を駆ける一人の男によつて地面に墮

とされた。

魔理沙は机の上の実験道具の一つ、試験管を手に取り茸から抽出し固めた固形物を入れ液体で満たしたそれがどのような反応を起こしているか注意深く観察する。

霊夢に取って体術だけで対抗するなんてボクサーが両腕を縛ってボクシングの試合をするようなモノだとは魔理沙も分かっている、しかし霊夢が川上に負けて期待していた愉悦はなかった。

魔理沙は実験の結果を机の上に置いてあつた本に書き記し始めた、その本には魔理沙が書き記した茸のスケッチや細かい特性、実験の詳細などが書かれていおり、魔理沙の研究用ノートである事が伺えた。

そのノートは分厚い黒い装丁の本だった。

魔理沙の私室の床の半ばを埋めつくして積まれてる大量の本と同じものだった。

果たして誰が信じるであろうか、その数百の本は全て魔理沙の半生をかけて記した研究結果を纏めたノートだった。

第58話

紅魔館三階廊下、夕刻

使用人用の黒服に身を包み、やや長めの前髪の下から三白眼がちの昏い眼を覗かせており、整った顔立ちながら陰性の空気を纏う男が一人。

その日の仕事を丁度終わらせた所の、この館の使用人である川上であつた。彼は腰に一振りの刀を差してるがその刀は幻想郷に来た時に一緒に持つて来ていた愛刀、奥州政長ではなく野盗の死体から盗つた大和守安定だつた。

彼はこれからやりたい事があつたが、一人の妖精メイドに絡まれていた。

「遊ぼう」

セミロングの髪に小さな体躯のメイドは彼に何故か懐いているアニスであつた、元々名無しで名前も川上がつけたものである。

「断る」

そう端的に断つて川上は歩み去ろうとすると袖を引かれて立ち止まる、首だけで振り返るとアニスが袖を引いて真つ直ぐな眼で川上を見上げていた。

川上はため息を一つついた。

川上の鳩尾程度の背丈しかないアニスに川上は膝をついて目線を合わせる。右腕をアニスの腿を通して背中に回して右腕一本で横抱き、いわゆるお姫様抱っこして立ち上がる。

突然抱っこされてアニスは眼をぱちくりさせていたが川上に左手で頭を軽くポンと撫でられると心地良さそうに目を細めた。

川上はそのまま歩いて左手で手近な窓を開けた。

川上は腕の中のアニスを窓の外におもむろに投げ捨てた、そして丁寧に窓を締める。用事を済ませる為に川上は歩きだした。

紅魔館厨房

ここでは、メイド長である咲夜と、他数名のメイド妖精が夕食の下拵えをしていた。

咲夜は肉や野菜を切る時川上に手入れを頼んだ包丁やペティナイフを使っていたが、カリソリのように鋭利に研ぎ上げられたナイフは食材を手ごたえなく切れ中々気持ちのいい切れ味に内心満足していた。

「メイド長」

スープレーストックを取っていた時、咲夜は突然後ろから男の声で呼ばれ驚きを隠しつ

つ振り返る。

するとそこには案の定川上が立っていた、何時の間に厨房に入り後ろにまで近づいてきたのか、まるで猫みたいに神出鬼没で咲夜にも気配が感じられずこうして度々驚かされる。

「何かしら？自分の仕事は終わったの？」

とりあえず咲夜は冷静に問う。

「人肉は誰が捌いている？」

「…私だけぞ」

何故そのような多少剣呑な事を聞くのかわからなかったが咲夜は答える。

「枝肉にする前の人間は？」

「…屠殺した後血抜きするわね」

「その死体は今あるか？」

「何がしたいの？」

質問の意図がさっぱりわからずに咲夜は簡潔に尋ねた。

そして川上も咲夜に簡潔に希望を伝えた。

紅魔館庭園

川上はスコップを使い穴を掘り土を盛っていた。

「しかし、菜園を少し貸して欲しいと言うから何事かと思いましたが、随分と変わった鍛錬をするのですね」

そういった川上を手伝って土を盛っているのは美鈴であった。

彼女は柔らかい土質の菜園の使っていない部分を川上に言われ貸していた、わざわざ手伝っている当たり彼女もお人好しなのかも知れない。

「別に鍛錬ではない、ただの試しだ」

いいつつ、川上は盛った土に石が混じってないか注意深くみながら、あれば丁寧に取除いた。

「このくらいでいいだろう」

盛った土をスコップで平らに慣らすと地面より高くなつた土台が出来た、ちょうど一人が横たわれるくらいの面積。

川上は一旦館の中に戻ると、しばらくして人一人肩に担いで戻ってきた。

それは30代前半程度と思わしき男性の、全裸の死体であった。咲夜が屠殺し、捌く前のものをお湯を使い擬似的に生きた体温に温めたもの。

「確かに私の国では試刀に死体を使うという事はないですね。こちらの国の刀は人間で試すとは聞いた事はありませんが」

川上は拵えたばかりの土を盛り作った土壇に両腕をバンザイさせた状態で寝かせ、仰向けではなく横にする。

「ある程度目利きで武用に使えるかは分かる、でもどんな名工の作でも、目利きしても斬つてみないとわからないのさ」

要は川上は江戸時代よろしく死体で試し斬りをしたかったのだ、まだ大和守安定は何も斬つてないから、確かめてみる必要があると川上は考えた。

「そして人を斬る刀を試すなら人を斬るのが一番」

美鈴はそのような試斬は見たことないので興味深く静観している。
始めるつもりだ。

川上は腰の安定をゆっくりと抜いた、赤みがかつた夕陽に照らされその刀身は複雑な色を含んだ光を反射させ煌めく。

思わずその美しさに美鈴は感嘆した、斬るのが勿体無いくらい傷一つない美しい白刃だった。

川上はあらかじめ置いてあつた桶から柄杓で水を刀身にかけて浄めを行う。

「三の胴で行くか」

三の胴は寝かせた死体を鳩尾の高さで両断する斬り方である。なお、死体はあくまでも食用のため咲夜には斬つていいのは一度までと言われている。

川上は刀を無造作に掲げたままゆっくりと深い腹式呼吸を行い臍下丹田に力を込めて行く。

ス、と滑るように死体を横たえた土壇の前に歩みを進めて川上は刀をピンと屹立たせた上段の構えを取った。

美鈴はドクリと胸が一つ高鳴った。彼女は川上の力みも気負いもない構えを見てただ純粹に思った、美しいと。

川上は頭上に取り上げた上段で再びゆっくり、ゆっくりと腹に空気を入れるように息を吸い

次の一瞬には既に刀を振り下ろし切っていた。

時代劇の効果音のようなザシュツツという音もしなければ骨を断つガシュツツという硬い音でもなく、強いて言えば強く平手打ちした時のような音だった。

川上の振り下ろした安定は胴を両断し、土壇まで切り込んでいた。

——三ノ胴土壇入ル

死体の断面からは鋭利に断たれた骨と内臓が露出していた、血抜きはされていたのでほとんど血は滲まない。

川上は刀を持ち上げた、刀身が少し白んでいるだけで僅かな刃毀れもなかった。

「お見事です」

川上の試刀の業前を見ていた美鈴はそう惜しみなく賛辞を贈った。

川上は聴いていないのか刀を見ている、まるで通り抜けたように手ごたえがまるで無かった、凄まじい斬れ味、粘りもある。

「盗人の腰に飾られてるだけには勿体無い刀だ」

「はい？」

「いや、何でもない」

川上はそういうと刀を丁寧な懐紙で拭い納刀した。

「死体を返してくる」

川上はそういうと二つに分かれた死体の内容物が断面から溢れないように両腕で抱え上げた。

「じゃあ盛った土は私が戻しておくので任せて下さい」

「ありがとう」

川上は美鈴に返し、館に戻っていった。

「うん、いいもの見た」

美鈴は一人呟きながらスコップで土を戻し始めた。

第59話

紅魔館

ふと自室にいたレミリアは窓辺に歩き窓から外を見下ろす。

そこからは紅魔館庭園から正面門から霧の湖まで見通せる。

そして門の前には帯刀した一人の男が立っていた、紅魔館新人使用人の川上である。

彼は美鈴の休憩中の交代として門番に立っていた、レミリアは口元に薄い笑みを浮かべてお気に入りその男を自室から眺める。

彼がいる門前から屋敷内4階レミリアの私室まではかなりの距離が離れていたが、身体能力の高い吸血鬼の眼は川上の表情まではつきり見通す事が出来た。

ふとその無表情な横顔が軽く振り返りその眼がレミリアと合う。

流石にこの距離で室内から見ている事に気付かれるとか思わなかったのかレミリアは少し驚く、それとも目が合ったのは偶然だったか？おそらくそうではあるまい。

ちよつと驚いたがとりあえずレミリアは笑顔で川上に向つて手を振った、労いのつもりだが、幼く愛らしい笑顔での労いはメイド長あたりならご満悦だったろう。

しかし川上は申し訳程度の返礼のつもりか軽く手を挙げると、視線をあつさり切つ

て、門番の仕事に戻った。

レミリアはちよつと拗ねたような顔をした、つれない男、などと内心思いつつ。レミリアは窓際から離れてテーブルの上に置いてあるベルを鳴らした。

りんりん、という澄んだ音がなつて数秒、レミリアしか居なかつた室内に気配もなくドアの前に唐突に銀髪のメイドが現れた。

「お呼びでしょうか、お嬢様」

呼び出しに応じて参じたのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜だった。

「お茶をお願い、今日はアールグレイで」

「かしこまりました」

主人の希望を了承すると昨夜は右足を引き右回りに体を反転させ右足を戻すというメイドというより軍隊さながらの回れ右をするとそのまま歩いて退室せず、来た時と同じく唐突に姿を消した。

それを見届けるでもなくレミリアは椅子に座り両手をテーブルの上で組んで一つため息を吐いた。

「お待たせしました」

そこにちよつと咲夜がティーセットを持ちテーブルの横に現れた、待たせた等といったつも部屋を出て行ってから10秒もたつてなかつた、本人は時間停止能力のせいで時

間感覚がおかしくなっているのかもしれない。

「ん、ありがとう、今日も暑いわね」

ティーポットからカップに紅茶を注ぐ咲夜にレミリアは礼を言いつつぼやく、暑いといいつつも紅茶はホットだったが、紅茶は熱いのが一番美味しいというレミリアのちよつとしたこだわりだった。

「今日は日差しも強いのですので」

答えつつ、咲夜はレミリアの前に静かにティーカップを置く、まずレミリアはカップを持ち香りを楽しむ、ベルガモットという柑橘類で香りをつけた柑橘系の爽やかさと華やかな香りがアールグレイの魅力だ。

カップに口をつけて一口飲み、レミリアは窓を見た、外はさぞ厳しい日差しが降り注いでるだろう。

「あの子にも飲み物でも差し入れてあげなさい」

この日差しの中での外での立ち仕事の川上を気遣つての言葉だった、レミリアは我儘であるが館の主として下の人間を気遣う度量も持ち合わせている。

「それでしたらすでに持たせてあります」

「流石ね」

「恐縮です」

そして咲夜もまたメイド長として部下を気遣う器があつた、彼女はメイドとしてだけではなく管理者としても優秀であつた。

紅魔館門前

門壁に軽く背中を預けて川上は立っていた、壁には野太刀が立て掛けてあり、腰に刀を一振り差している、日差しは厳しく普段は涼しげな顔も僅かに汗ばんでいた。着ている使用人用の黒の紳士服も見るからに暑苦しい。

ふと、遠くから一人の人間が歩いてくるのが見えた、どうやらこの館に向かつて来るようだ。

川上は咲夜から持たされた水筒を取り上げて飲んだ、中身は塩分と糖分を加え香料で香り付けした補給水だ。

向かってくる相手がはつきり見える距離になつた、薄汚れた和装に袴姿だ、歳の頃は30代後半か。

川上は懐からゴールデンバットのソフトパックを取り出し一本抜くと浅く啜え火を点けた、のんびりと煙を吸い、吐く。

川上が2本目のタバコに火を点けた頃には男は10メートル近くまで来ていた男は無造作な動作で小型の火縄銃である短筒を取り出し火縄に火を点けると火挟に火縄を挟み射撃準備をする、洗練とは程遠い手際だつた。

川上に向かい銃口を上げ火蓋を切った。

川上は指に深く挟んだシガレットを口にやりゆつくりと煙を吸った。

男は川上に向け引き金を引いた。

辺りに轟く銃声と共に川上の頭の斜め上の門壁に着弾し砕けた破片が川上の肩に落ちる、川上は発砲されても啞えタバコのまま一步も動かなかつた、男の射撃の技量はお粗末だった、いやうつむき気味でそもそもまともに狙つてすらいなかつたのかもしれない。

男は再装填もしようともせず短筒を地面に投げ打ち、無造作に門前へと歩み寄つてくる、川上はタバコを最後に一服吸うと地面に落とし靴で踏み消した。

男は川上の二メートル前で立ち止まった、男の腰には大小が二本差しされていた、お互いの剣共に抜き打ちの間合いに入っている。

「用件は？」

「あ、ああ？」

川上の言葉に反応し、男は顔を上げ目の前の館を仰いだ、まるで今始めて自分がどこにいるのか理解したような反応。

「ここは確か・・・悪魔の館だったな」

ボソボソと呟く男、その目は正気ではなく、澱みきつており凄まじい憎悪と殺意を発

散していた。

「物件は」

「皆殺しだ」

「帰れ」

男の物騒な言葉に即答する川上、即座に斬ってしまったのは川上としては自重している方か。

「俺の妻と娘は里の外で下劣な妖怪に喰い殺された」

男は聞いてもいない自分語りを始めてしまい川上は内心溜息をついた、狂ってしまったているのかあるいは悲劇に襲われた自分に酔っているのだろうかと川上は思った。

「奴らは理性も無ければ品もないのか俺が慌てて探し出した時には二人とも食い残しがグチャグチャさ、これでも大事にしてきた家族だったんだけどな」

男は陰気にくく、と笑った、対する川上は男をつまらないもののように見ている。

「だからそいつを探し出してぶち殺すために里の外で化け物をぶち殺しまくったって訳だ」

危うい笑みを浮かべつつ男はいうが、一人で妖怪狩りをするなど自殺行為に近い狂気の沙汰だ、しかし男は実際に妖怪を殺して生き残ってきたのだろう、服の汚れは良く見ると茶褐色がこびり付いている。

葉隠れに曰く、正気にては大業ならず。

「スペルカードルールだかなんだかしらねえが、俺達普通の人間にそんなことが出来るかよ！それが出来なきや結局大人しく食われるしかないってのか、妖怪の賢者だか巫女だか偉そうに平等を唱えるがふざけんじやねえぞっ!!」

男が吼えた、この幻想郷の欺瞞、いや世界そのものへの理不尽への憎悪の叫び。

銃声を聞きつけたのか館のレミリアの私室から窓越しにレミリアと咲夜も様子を見ていた、レミリアは表情は毅然としていたがまるで縋るように咲夜のスカート裾を掴んでいた。

「何故俺の妻が、娘が殺されなきやならなかった」

「弱いからだ」

一転して泣きそうに呻くように言った男に川上は冷たく返した、男がハッと顔をあげる。

「身を守る力もなかったのは弱いからだ」

男は呆然とした顔で川上を見返していた。

「身を守るための知恵や知識を付けようともしなかったのは弱いからだ」

男の表情が変わっていく、何故か惚けたような笑みを浮かべる

「身を守る力も知恵も危機管理もなかった、弱いから殺された、それだけの事だろう」

「そんな喚くような事じゃない」

川上のあくまで冷静な物言いに男の顔が笑みからゆっくりと憤怒の鬼相に変化した。もうお互いなにも言うことはなかった、男は静かに腰を少し落とし川上はただ立ったままだった。

刹那の瞬間には二人は交わっていた、男が抜き打たんとする機先を制し一瞬で刀の柄にかけて男の右手を川上が距離を一步つめ自身の右手で抑えた、当然男は抜けない。

男の判断は早く即座に鯉口にかけていた左手を上げたがそれより遥かに早く川上の左手の指が相手の右眼を抉っていた。

眼球は案外硬いものであるが鍛えられた川上の指は簡単に相手の眼を突き破った。

呻いて男の刀の柄を握る右手が緩んだ瞬間、川上が相手の刀の柄尻を右手で捉え相手に向けて跳ね上げた、狙い違わず男自身の腰の刀の鐔が男の無事な左目をしたたかに打った。

両目とも破壊されてなお男は振り上げた左拳を闇雲に振り下ろした、見えなくてもすぐ前に敵はいると思つての攻撃、しかし拳は空を切った。

川上は既に相手の前から間合いをとつていた、その右手には下がり際鞘から抜き取つた相手自身の刀が刃を上向きにして握られている。

川上は刀身の中程に左手を添えて腰を入れて突き込み、それはあっさり相手の首を貫

いた。

「ち、く、しょう」

男は自らの首を貫く刀身を掴みながら怨むように呻いた、気管は無事だったのか。

川上は峰に添えた左手で刀を上突き上げる、上を向いたまま刺さった刃は首を下から上へ裂き顎に当たって止まった。

「ち、く」

川上は柄を捻って刀身を90度回転させた。そのまま下がりながら刀を抜く、男の首から血しぶきが上がった。

男はそれでも破壊されて血涙を流した眼窩で川上を睨み何か言いたげに血の溢れる口を動かしていたが言葉にならず、やがて糸が切れたように前のめりに倒れた。

男は死んだ。

川上は頬を濡らす返り血を手の甲で拭い、刀を改めた。

男の刀は相当酷使してきたのだろう、刃は脂がこびりつき大小の刃毀れだらけで鋸刃状態になっていた。

「履き違えた平等を唱えるなど欺瞞だというのは同意だ」

川上は一人つぶやいた。

「不平等こそが平等だ」

川上は刀を地面に突き立てた。

「…哀れですね」

レミリアの私室から一部始終を見ていた咲夜はそう呟いた、彼女なら川上が男を殺す前に仲裁する事も出来たが、咲夜はそうはしなかった。

「哀れんじや駄目よ」

レミリアはもう窓際から離れてテーブルへと歩きつつ言った。

「その同情はただの傲慢よ」

レミリアは席に座りつつ言った。

「…はい」

咲夜は答えた、主人のいう通りである、しかし一方で思う。

「迷ったの?」

咲夜は答えられなかった、止めるべきではと思ってしまったのだ。何を馬鹿な、相手はこの館に害意があったのだ、それにもう終わってしまった事だ。

「貴女は間違っていないわ」

「あの男は死にたがっていた」

「そうかも、知れせんね」

咲夜もそう感じたからこそ動かなかったのかも知れない、川上が介錯するのが相応しいと。

「おいで」

レミリアは柔らかい声で咲夜を呼んだ。

「はい」

「しゃがんで」

咲夜は主の膝元に騎士のように片膝をついた。レミリアは咲夜の前髪をあげると額に口付けた。

「お嬢様」

「紅茶が冷めてしまったわね。咲夜、淹れなおしてくれる？」

「かしこまりました、お嬢様」

少し頬が紅潮した咲夜は立ち上がると、レミリアの小さく柔らかい手を取りその甲にキスを返した。

迷いは消えていた、咲夜は笑顔を一つレミリアに向け退室した。

残されたレミリアの顔にふと寂しげな表情を掠める。

いや、王たる吸血鬼としてこんな時にあげる表情として相応しくない、レミリアは思った。

レミリアは一人口の端を釣り上げるように笑みを浮かべた。

第60話

とある田舎の小さな建物

中は板張りの床に建物は木で組まれ窓がガラスではなく障子のはめ込まれた武家屋敷のような作り。

十畳程の広さで北西の位置に神棚が祀っており、また『香取大明神』『鹿島大明神』の二柱の神の名が書かれた掛軸が掛けられている。

また壁にある刀掛けにいくつもの木剣が掛けられていた。

ここはとある古流剣術を伝えている道場であった。

その道場にゆつくりと血だまりが広がっていく。

袴に稽古着の五人の人間が倒れ、血の池に沈んでいた、この道場の高弟も二人を含め一人を除き全滅、返り血に染まったゆつたりとした黒服に身を包んだ青年が血刀を引っさげて立っていた。

あつという間だった、稽古中の事だ、皆が木剣で組太刀していた時、道場の門を開いて風のように入ってきた青年は真剣で五人を撫で斬りにした、突然の事に誰も何も出来ないまま斬り伏せられた。

「うつ、く」

一人、まだ息のあつた門弟が肘を床に突き上体を起こそうともがく。

「仕損じたか」

青年はポツリと呟きもがいていた門弟の首を上から刺し貫き柄を捻つて決り止めを刺した。

青年は刀を血振りして昏い三白眼を道場の奥に向ける、そこにはただ一人の生き残りのこの道場の長である師範の中年の男が腰を抜かしていた。

川上が一步進めると師範はひい、と情けない声を漏らした。

「立ち合え」

青年は腰に差していたもう一振りの刀を鞘ぐるみそのまま師範の前の床に置いた。

「な、なんで、あんた、何を」

師範は状況が信じられないのか要領を得ない。

「以前見学させて貰った時貴方は出来ると見えた」

「見込み違い、ではないだろう立ち合え」

青年にそれをしたかっただけにこんな凶行に及んだのか？師範が情けない表情で道場を見渡す、出入り口は青年が背にしており、窓は小さい、逃げられない。

「逃走も降伏も無駄だ生きたかったら抵抗しろ」

顔面蒼白になった師範は息も荒く這いずるように自分の前に置かれた刀に縋りつく。師範は震える手で刀の鯉口を切った。

次の瞬間青年は一刀足以上あった距離を一步で詰めまだ構えもしていない師範に斬撃を放った、パンツと音がして両断された鞘が床に落ちた。

青年は即座に横に向き直り構える、そこに今の斬撃を刀を抜きつつ横返りで避けた師範が座構えで刀を構えていた。

顔色は青白い、戦闘に必要な所から血の気が引き必要な所に集められている為であり闘争反応を上手く律している証。

そこには先程まで情けなく震えていた中年はいなかった、荒かった呼吸も整い半眼で青年を見据える瞳は色がない、剣と己を律した剣客がそこにいた。

師範は座構えから流れるように立ち上がり、青年に左肩を向ける真半身になり刀を脇構えにした、その動作に一切の漬け込む隙がない。

青年は真つ直ぐ相手の中心に剣先を付ける青眼に構えた。

お互いの切り間から随分離れた位置で二人はせめぎ合う、師範はゆつくりとした動作で隙を見せぬよう左に回るように足を進め、青年も師範の中心から剣先が外れぬよう足を開く。

しかし、状況は足場が限定的だった、五人の死体が床に倒れ伏せているからだ、師範

が左に回る内死体に近づいていく。

瞬間、死体を取り落とし床に転がっていた木剣を師範が青年に向かって蹴り上げ、ほぼ同時に青年が師範に向かって踏み込む。

木剣は顔に向かってきていた、これを貰って怯んだりしたら終わりである、しかし青年はあえて踏み込む、顎を引き顔を横に向けしかし眼は瞑らず側頭部で木剣を受けた、痛みが走るが鼻頭や目に当たった訳ではないからそれだけだ。

左足での踏み込みのままに振りかぶった刀を相手の左肩に真つ向に斬り下ろす。

瞬間師範は後ろの右足を僅か外に踏みつつ脇構えにしていた刀を真つ向に引き直りながら振りかぶった、これにより真半身で左肩を相手に向けた状態から左肩は引かれ青年の斬撃を抜く。

もとより真半身になっていたのは左肩に誘う為だった、そこから僅かに青年に遅れて刀を真つ向に斬り下ろす、さすれば抜かれた事により空ぶった青年の柄中の拳を断てる。

が、しかし青年は斬りおろした斬撃の軌道を変化させ刀を右腰で構える脇構えへと変化、これにより師範の斬りおろしも抜かれた。

本来の太刀筋を隠すフェイントからの後ろの右足を右回りに前に踏み込み後ろ回りの要領で剣を左から右に薙ぎ払った。

斬撃は師範の真つ向切りを振り下ろしきつたタイミングで両の上腕を深々と斬り裂かれ刀を取り落とした。

師範が木剣を蹴り上げてから、決着まで一瞬だったが、その一瞬に極めて行動な技の読み合いやせめぎ合いが行われた。

「つー……見事」

師範は自分の負けを理解しその口からは敵手への賞賛が意識もせず出た。同じ剣術家としてその技量への素直な敬意。

師範は膝をついた、骨まで及ぶ傷の両腕からは夥しい出血、もちろん動かせない、逃げる事も出来ず戦闘続行も不可能。

「……介錯を」

師範は観念した、出来る事は晩節を汚すまいという事だけだ、師範は頭を垂れうなじを差し出した。

「感謝する」

青年は師範に言った、突然道場に押しかけ門弟を殺し問答無用で立合いを挑んだ男から向けられたのは感謝の念だ、師範は思わず苦い笑みを浮かべた。

青年はゆっくり刀を八相に取り上げた。

「諸行無常」

唱えるは涅槃經の言靈、唱えつつ青年は刀を握る小指を締めた。

「是生滅法」

次に薬指を締める。八相に構えたまま腰を少し落とす。

「生滅滅已」

中指を締める。狙うは刀を打ち込むうなじではなく刀が抜ける喉笛。

「寂滅為楽」

唱え終えた瞬間には刀を振り下ろし切っていた——

紅魔館図書館

パチユリーはいつもの本が山積みになったテーブルの定位置で本を開き、羊皮紙に羽根ペンで独自の術式の設計を書き連ねていた。

この当たりは魔術と言えど学問に近く、狙った効果の術を作るにはロジックに則り術式を組まねばならない。

基本的な頭の回転と時には発想力も要求される、また術者により術式は癖が出る、パチユリーは正統派というか几帳面で丁寧な術式を組む。

少々疲れを覚えて、ペンを置き伸びをした。

ふと傍のソファーを見ると大きく背もたれに腕を回して深く座ったまま俯き寝ている川上とその川上の膝を枕にソファーに横になりやはり安らかな顔で寝ているフランクの二人がいた。

暇なのか、二人して一時間程前にここに来たが何時の間にか寝ている、猫の兄妹をのようだ、ぼんやりと半眼で二人を見ながらパチュリーはそんなことを思った。

「よう、パチュリー」

そこに声がかかりそちらを見ると、図書館常連の泥棒魔理沙の姿、今日は来客の多い日だ。

「お、川上もいたのか。というかずいぶんフランに懐かれてるな」

ソファーで寝ている二人を見て、魔理沙は若干意外そうに言う。

「性格的に妹様と反りが合うみたいね」

「確かに、フランと付き合うには頭のネジが二、三本抜けてる奴じゃないと無理だしな」

そういつて魔理沙は笑った、川上のことを頭のネジが抜けてる扱いしたが、彼女自身も人のことを言えないのだが、自覚があるかどうか。

「ところでこいつ使用人だろ、仕事はいいのか？」

「…今日の仕事は終えた」

魔理沙の言葉に低い声で答えたのはそれまで寝むつていると思われた川上自身だった。

「なんだ、起きてたのか」

「今、起きた」

無意識に第三者の来訪を感じ取り目が覚めた川上は顔を上げた、寝起きで眼が普段以上に坐っている。

「いい夢たくさん見れた？」

「……」

パチュリーの一風変わった起き抜けの挨拶に川上はふと考えた、何か夢を見ていたよな気がする、また追憶めいた、最近はそんな夢が多い。

しかし起きてしまうとどんな内容かは零れ落ちてしまった。夢なんてそんなものだろう、しかし。

「いい夢だったかもな」

「そう」

寝起きの気分は悪くなかった、川上にとっていい夢だったのだろう。

「お呼びですか？あ、魔理沙さんこんにちは」

そこにパチュリーから簡単な念話で呼び出された小悪魔が現れた。

「お茶をお願いするわ、貴方も飲む？」

「貰おう」

「私もな」

「わかりました、少々お待ちください」

小悪魔は紅茶を淹れに下がった。川上はソファーから立ち上がり——川上の膝で寝ていたフランがソファーから転げ落ちふぎや、と声を立てた——気持ちよさそうに伸びをした。

第61話

真竹が密集して生えた竹林、そこに一人の男が啞え煙草で歩いてた。

前髪がやや長い黒髪に端正な顔立ちだが、正面や上を見る時に三白眼になりがちな坐った眼が男に酷薄な印象を与える。

黒いゆつたりとした服を纏い腰に刀を一振り差し、さらに背中には全長五尺を軽く超える大太刀を背負い、剣呑な雰囲気を漂わせている。

男は紅魔館使用人の川上であつた、彼は今迷いの竹林と言われる所を歩いている。

何故か？それは簡単である、上司に当たるメイド長、十六夜咲夜に彼がお使いを頼まれたからだ。

場所は迷いの竹林の中にある永遠亭なる所、そこにいる薬師から薬を貰ってくる事。

永遠亭は薬を売っている、普段は向こうから薬売りがくるらしいが、今回妖精用や妖怪用の薬がタイミング悪く幾つか切れてしまったので今回手の空いている川上が直接向かう事になった。

そうして、貰ってくる薬と竹林から永遠亭への道のりを書いたメモを貰い出発したわけだ。まだ日は高いが鬱蒼とした竹林は日がささず薄暗い。

ふと川上は立ち止まり、啞えてたタバコを吹く。

永遠亭は何処だ？と

竹林に入るまでは良かった、だが迷いの竹林と言われるだけあって成長が早く目印にならない竹、微妙に方向感覚を狂わせる地形により、よほどこの場所に慣れていないと大抵迷う。

そして川上も例に漏れず自分が何処にいるか見失った、しかもこの竹林は妖化した獣が出る事もある危険地帯でもある、慣れないものがおいそれと踏み込みべき場所ではなかった。

そんな事は川上に頼んだ咲夜も承知だが、咲夜もレミアも川上なら死にはしないだろうという、ぞんざいな信頼で送り出した。

川上はともかく目的地に着く事が優先と考えた、そして辺りをその眼でゆつくりと見渡した、そうする事で何か彼には掴めるのだろうか。

しかし川上は眼を細めた、彼の鋭い皮膚感覚が刺すような気配が向けられている事に気付く。

まだ遠い、が、いる。三匹、囲まれた。

運の悪い事に妖化した獣に見つかってしまったようだ、タバコの匂いが不味かっただろうか、相手はゆつくりだが確実に距離を詰めてきている事、明確な殺気を川上は感じ

た。

川上は動かない、ただ相手が近づいてくるのに任せている、やがて、視認出来る距離まできた獣が竹藪の中から姿を現した、外見は狼や野犬のようだが、まるで熊並みの大きさはやはりただの獣ではない。

川上の肌を痛いほど刺す殺気、いや殺気と言うより強力な食欲の念に近いかも知れない。

川上は刀の鯉口を切った――

同じく迷いの竹林に一人の少女の姿があった。

髪は真っ白なロングヘア、白髪だが艶のある白く細い髪は綺麗で老成した白髪ではない、その髪には白地に赤が入った大きなリボンをつけている。

真紅の眼に服装は白のカッターシャツにもんぺのような袴のような独特なズボンをサスペンダーで吊っている、ズボンには何か意味があるのが護符のようなものが複数縫い付けられていた。

少女――藤原妹紅は最近愛飲しているフィルター付き紙巻煙草を啜えたまま竹林を散策していた。

吸い口にフィルターをついた紙巻煙草は最近外の世界から入ってきたものだが里の若者には人氣が出初めている。

妹紅もキセルや両切りより手軽なので最近はおっぱら好んで吸っていた。

彼女がこの竹林に住んでいるが、こうして出歩いているのには明確な用事がある訳ではない。

ただ、友人である上白沢慧音から最近、里の外で起こった事件等を聞かされていて少々気になったというのがある。

大した事件でもないといえばそれまでののだが、何か、引つかかるような。それに里の人間に何かあっても不味い。

長く生きている彼女は何か風向きのおかしさを感じる勘が鋭いのかも知れない、それで何気なく竹林に変わった様子がないか様子見という訳だ。

はたして彼女の勘は幸か不幸か当たった、歩いている内に妹紅は風に乗るほんの僅かな血生臭を感じとった。

妹紅は啞えてた煙草を落として踏み消すとそちらに走った。

妹紅の健脚で時間にして十数秒ほど移動した場所は獣臭と死臭に満ちていた。

妖化した犬型の獣が三匹、死んでいる、妹紅は足を進めしやがんで死体の一つを改める。

間違いなく、人為的な殺害、しかも鋭利なこの傷は…

「そのアンタ、ここそこそ見てないで出てきなよ」

辺りには誰もいなかったが、妹紅はしやがんだままそう言った。

いや

いなかったと思われたが、その声に応じるように一人の男が姿を見せた、何処から現れたのか、最初からそこにいたのか。

男は未だ血の滴る血刀を携えていた、この獣を斬ったのは誰かなどとは聞くまでもない。

妹紅は立ち上がり、男に向き直った。

竹林の中白髪の少女と黒髪の青年が対峙した――

第62話

迷いの竹林

三匹の獣が骸となり転がっている前で藤原妹紅は一人の男と対峙していた。

おそらく妹紅が駆けつける前に獣を斬り伏せたと思われる抜き身の血刀を提げた男は昏い半眼で妹紅の事を見ていたがその眼には何の感情も伺えない。

ふと、男が懐に手を入れ、妹紅は思わず身構えるが、懐から取り出したのは懐紙でありそれで刀身を拭うと刀を納めた。何時までも人前で白刃を掲げてるべきではないと思つたのかも知れない。

男の挙動を見ていて妹紅はふと自分が鳥肌を立てている事に気付いた、ゾクリときた。この男、只者じゃあない。妹紅は一目で男：川上の技量を見抜いた。

妹紅は何か言わなければと口を開きかけ。

「いんにちは」

川上からの抑揚ない挨拶で遮られた。

「あ、ああ、こんにちは」

ただの挨拶という普通過ぎる川上の言葉に一瞬毒気を抜かれる。

しかし気を取り直す、見ない顔の男、刀、手練れ、慧音から聞いた事件、里の外で野盗が殺された、斬殺。

この男、おそらく関係している、妹紅はそう思い口を開いた。

『聞きたい事がある』

川上と妹紅は同時に異口同音の言葉を発していた、また妹紅は出鼻を挫かれた気分になる。

「なんだ？」

先に問い直したのは川上だった、彼としてはとつとと永遠亭とやらの場所を聞いて用事を済ませたかったのだが。

「私は藤原妹紅だ、アンタの名前は？」

「清水という」

川上は名を問うてきた妹紅にピリツとした違和感を感じ即座に偽名を答える。

「そうか、清水さん、ちよつと聞きたいんだが最近里の外で起こった事件を知ってるか

？」

「心当たりはないが」

妹紅の詰問に川上は即答する。表情や声の調子を見ていたが、妹紅にも感情がまるで読めない。

しかし、いやだからこそやはりこの男妙だ、放つて置けない。妹紅はそう考えた。

「少し話が聞きたい、一緒に来てくれないか？」

「用事があるので断らせて貰う」

「アンタは人里の人間か？ 普段何処に住んでいる？」

「急いでいるので失礼する」

妹紅の詰問を黙殺し、川上は背中を向け歩き出した。

「おい、ちょっとまで」

妹紅はすぐに川上に追いつがり肩に手をかけた。

瞬間妹紅は後ろに弾かれた、背中を使った当身を食らったのだ、バランスが崩れた一

瞬、妹紅はチツと舌打ちをした。

その妹紅の首が飛んだ、振り向きざま抜き打ちで妹紅の首を跳ねた川上の姿がぶれる。

妹紅の首が落ちる前に妹紅の両肩口から腕も切り落とされ、鼠蹊部も足の付け根に浴いV字に斬り裂かれ、さらに心臓も突かれていた。

ただ殺すだけなら首を跳ねただけで済んだはずだが、計六回は殺せている執拗な攻撃

を加えたのは何故か。

川上が刀を抜くと妹紅の亡骸は倒れ伏す。しかし川上は刀を構えたまま、残心するよう
うに後退する、と

妹紅の亡骸から熱風を感じる勢いで火柱が立った。死体は紅蓮の炎に包まれ見えな
くなるがこの火力では黒焦げになるはずだ。

いや

紅蓮の炎が意識を持つかのように動き、まるで人を包むかのように炎が人型に収斂し
た瞬間炎は跡形もなく散った。

「ふうん」

川上は感嘆しているともどうでもよさげとも取れる声を上げた。

そこには今しがた膾にして殺害した少女、藤原妹紅が元通りに立っていた、服までが
元通りだ。

藤原妹紅は不死身だった。

「生憎だがその程度の斬撃じゃあ私は殺せない」

「そのようだ」

「……驚かないんだな」

川上は自分が首を跳ねた相手が生き返っても驚かなかった、まるでこうなる事がわ

かつてたように。

この男、危険過ぎる。妹紅がそう結論付けるには川上の挙動は充分すぎた。

「あんたがそうくるならこつちも多少手荒になるが、清水さんだったか、一緒に来てもらう」

「断る」

「問答無用！」

妹紅は川上をまず炎で足止めせんと川上の目の前に炎のカーテンを展開するが、川上は炎に一瞬も怯まずに妹紅に向かって炎のカーテンを突っ切り踏み込んで来た。

逆に虚を突かれたのは妹紅である、彼女は右手に高熱量の炎を生み出し、しかしその右腕を落とされた、とっさに放った妹紅の蹴りが川上の小手を捉え、刀を跳ね飛ばしたが、川上は構わずに妹紅に組み付く。

妹紅は川上の押す力に反発して足腰を踏ん張ったが僅かに前傾になった瞬間に川上が捨身投げを繰り出し妹紅は前に一回転して叩きつけられた。

妹紅が強かに体を打ち付け　一瞬息が詰まった瞬間に川上の両腕が倒れ伏せた妹紅の首に蛇のように巻き付いた。

「や、やめ」

自身が不死身である事は分かっているとはいえ妹紅は本能的恐怖から声をあげ。次の瞬間妹紅の首は上下逆に回されて頸椎を破壊されていた、即死。

川上は即座に起き上がり、取り落とした刀を拾い、竹林の中に走り姿を消した。少し遅れて死亡した妹紅がまた炎と化して収束して蘇生した。

「くそ」

妹紅は思わず悪態を付いた、相手に向けてではない、相手が手練れと分かっているながら無様を晒す自身へと、思えば最近ぬるま湯に浸かり平和ボケしていたのではなかったか。

「殺す訳にはいかないが、足を焼いて動けなくさせて貰う」

そういい、妹紅は背中に炎の翼を展開して、一気に飛び上がった。

そして竹藪から飛び出さない程度の高度で滞空し、下を伺う、居る。視認は出来ないが逃げたのではない、どこかに潜んでいると妹紅は感じとった。

「大した隠形だが、なら炙りださせてもらおう！」

妹紅は地表に対してパスを繋なぎ、妖術を用いて広範囲を燃やした。辺りが火の海になる、流石にじつとはしていられまい。

これで出てこないならさらに範囲と火力をあげればいい、相手はいくら腕が立つてもただの人間、飛べないだろう。手の届かない位置に飛んでしまえば、相手はなにも出来

ないがこちらは一方的に攻撃出来る。

少々反則的だが、こうなれば相手も観念するはず。火に炙られた竹がパンツと破裂音を立てた。

さらに立て続けにパンという破裂音が続いた、破裂音？

そう妹紅が疑問を感じた時いくつもの竹が傾き、全てが妹紅に向けて倒れかかった。た。

「チっ」

迂闊だった破裂音ではない、川上が竹を斬った切断音だったのだ、妹紅は竹より低い高さで飛んでいたから枝や葉が伸びた竹がいくつも折り重なってくる。

まるで空中で投網を投げられたように、妹紅は竹に空中で絡められてしまい、飛行を制限された。

「時間稼ぎのつもりか」

こんなものと蹴散らしかけたところに竹が軋む音が聞こえ、妹紅は目を向けそして凍りついた。

妹紅より高い竹の頂点あたりがしなりその上にあの男が乗っていた。

どうやってそんな高さまで、何故あんな細い竹の頂点に乗れる、妹紅がそう考えた刹那、川上は空中の妹紅に向かい飛びかかってきた。

まずい、妹紅は竹に覆い被されてすぐには挙動出来ない。咄嗟に相手の得物を狙う。川上が右手に握る刀の柄にパスを繋ぐ、後は炎上させれば相手の刀もろとも手まで焼ける。

しかし術を発動させる瞬間川上は刀を空中に投げ打った、パスは刀に繋がっていたため空中で刀が激しく燃え上がっただけだった。

妹紅は唾然とする、目に見えるはずのない術の発動。どういう危機回避能力なのか。

しかし唾然とする暇などなかった、バサバサと音を立て、川上は竹諸共妹紅に空中に組み付いて落ちる。

一瞬だった、いきなり人間の重さと落下エネルギーが掛かり妹紅も飛行を立て直すまもなく一緒に落下してしまう、地表は近い、妹紅は受け身を取ろうとして、しかし組み付いたままの川上の掌底で顎を跳ね上げられた。

こいつ！そう思った次の瞬間妹紅と川上は火の海と化した地表に激突してそこで妹紅の意識はブラックアウトした――

第63話

迷いの竹林

煤けた竹林の中で藤原妹紅は意識を取り戻した。

少しの間ぼんやりとしていたが、どうして自分がここに倒れていたかやがて思い出す。

清水と名乗る怪しい男、最近起こった事件との関連性、いきなり殺された事、こちらも戦闘に応じるが、最後は宙から落とされ意識を手放した事。

してやられた、妹紅はギリツと歯噛みした。死んだらすぐ初期状態でリセットされる事を見抜かれ致命傷にならないよう失神させられたのだ。

妹紅が意識を無くした時点で術は制御を失ったはずだが、幸いにこのあたりは地面にあまり燃焼物がなかったお陰か自然と鎮火したようである。

もはやあの男も逃げてこの竹林にはいまい。しかしただの人間に三度も不覚を取つたなどと知れたらアイツに何と言われるか。

気が立っているのを自覚して妹紅は懐からタバコを取り出し啜えると術で火を付けて一服した。

とにかく清水という男については慧音に報告するべきだろう。そう考え妹紅は啞えタバコのまま立ち上がると服の土埃を叩き落として、人里へと歩きだした。

——同刻、迷いの竹林

川上は永遠亭を尋ね行き歩いてた。妹紅は竹林から逃げただろうと考えたが、この男は裏をかいて逃げずに自分の用事を優先した。

いや、裏をかいたというより何も考えてないだけかも知れなかった。

腰に差した刀は鞘は無事だが柄は火に巻かれたせいで、柄巻きも鮫皮も焼け、中の木まで一部炭化してしまっている。

刀身も同様だ、かなりの熱量に焼かれもはや見る影もない、刃物というのは鋼な対して綿密な熱処理によりその性能を引き出されている、その為熱で簡単に性能のバランスが崩れるので火には非常に弱い。

まして一度焼かれてしまった刀はもう元には戻らない、一応焼き直しは出来るが美術的にも武器的にも元の価値は取り戻せない。

川上が幻想郷に来た時から持ち込んでいた愛刀、良業物の一工の作、奥州政長は死んだ。

故にこそ早く永遠亭に辿りつきたかった。刀はまだ武器として使えない事もないかも知れないが、柄まで焼けてるものでは有事の際心許ない、かといって竹が密に生えている現状況では背中の野太刀は長過ぎて取り回しに難がある。

川上は足を止めた。

背中を竹に預け懐からタバコを取り出し火を付け一服吸う。

「まあ、なんとかなるか」

紫煙を吐きながら川上はぼんやりと呟いた。

同じく迷いの竹林で一服する川上を眺める第三の人間、いや妖怪がいた。

癖つ毛の短めな黒髪に柔らかな兎の耳外見上の歳の頃は推定7才前後といったところか、極めて小さな体軀、顔付きも幼いが、その幼さに似合わぬ老獪さも何処か匂わせる。桃色のワンピースに身を包みニンジン型のネックレスをしている。

その幼い姿からは考え難いがこの迷いの竹林の最長老である妖怪うさぎ、因幡てゐである。

てゐは藪の中に身を隠しつつ川上をしばらく観察していたが、ふむう、と息を吐く。

たまたま見つけたが、なにやら変わった人間で面白そうだと彼女の好奇心が曝いた。暇つぶしに尾行でもしてみよう事にてゐるは決めた、別に尾行してどうこうする訳でもないが。長生きの妖怪に取っては退屈は猛毒なのだ。

男が吸っていたタバコを消して、体を起こすと歩きだす、てゐるもそれに合わせて竹藪の中をある程度距離を持ち尾行を始める。

てゐるとつてこの竹林は庭のようなもの、常人なら真つ直ぐ歩く事すらままならぬほど厄介な竹林の中を完全に把握しているのはてゐるだけであり、尾行もお手の物である。それがどうした事か？見失わぬようにある程度の距離で視界に入れていた男の背中を見失ってしまった。

急に居なくなる訳がないとてゐるは見失した地点に走り辺りを見渡すが男は竹の間を行く内に煙のように消えてしまった。

「はて？？」

不可解な事もあるなど腕を組み首を傾げたてゐる、しかし彼女をさらなる不可解が襲った。

「何か用か？」

それは先程までは誰も周囲にいないと思っていたてゐるの背後から低い、何処か投げや

りな声が聞こえた。

てゐは振り返った。

「…特に何かつてことはないんだけど」

そしてそこにいた男にそう返す。そこには先程まで尾行していたが見失つた男が何時の間にか立っていた。

流石に驚いた、神出鬼没でまるでスキマ妖怪みたいだ。しかし驚きが表面上出ないのはてゐの年の功か。

さてどうしたものかとてゐは少し考えて。

地面を蹴った、文字通り脱兎の如く逃げに移る。

しかしその最初の一步に川上が足を引つ掛ける。

「ふぎや」

それで前のめりにてゐは盛大にすつ転んだ、さらに脹脛の一点を川上の爪先が押さええた。

「あいたたた！ いたい！ いたい！」

稲妻が走るような痛みが押さええられた脹脛から走り、堪らずてゐは悲鳴をあげた、そこで川上の足は引かれた、下手な事はするなという一種の警告か。

うー、と呻きつつ地面に転がっているてゐの手首を握ると軽く引くだけでてゐは立た

された、立とうと思ったり、立とうとしたりしなかったのに、何故か立った自分自身に思わずキョトンとしてしまう。

「聞きたい事がある」

「何さ？急に転ばせるし踏むし、いたいけなうさぎに乱暴しといて」

「手荒に扱ったのは悪かった、さつきタチの悪いのに絡まれてまたその類かと思つてね」

恨みがましいいてゐの言葉に端的に謝罪する川上だが、彼自身も人の事が言えないタチの悪さを自覚しているかどうか。

「まあ、いいや。慣れてるといえば慣れてるから、それで何？」

「永遠亭というのが何処か知らないか？」

「うん？何の用で？」

「薬師が居ると聞いて、薬が欲しい」

「ああ、お師匠様の薬が欲しいの」

川上の希望を聞き納得するてゐ、彼女もまた、永遠亭の関係者でその『薬師』とは浅からぬ仲である。

「お兄さん、名前は」

「…川上と言う、よろしく頼む」

川上は名乗る時僅かに考えるように言い淀んだ。

「私は因幡てゐ、案内するから付いてきて」

てゐは川上を変にちよつかいかけるべきではないと判断して、素直に案内する事にした。まあ、ちよつと道中の罫にうっかり誘導してしまうかも知れないが。

「感謝する」

川上は短く礼をいいタバコを取り出し啜えかけて

「すまないけど、煙草はよしてくれるかい、私は健康には気を使つてるんだ」
てゐに止められて大人しくタバコを懐に納めた。

しようがなく川上は手持ち無沙汰なままてゐについて歩きだした――

第64話

「何のつもりだ？」

「あいたたた！離して！あやまるから！」

鈴仙・優曇華院・イナバは目を疑った。

人里に葉を売りに行った帰り。迷いの竹林、永遠亭からそう離れていない所で自分の部下のてゐが一人の男に背中に回された腕を極められ、ナイフを突きつけられていたのだ。

「止めなさい！」

一体どういう状況かと考える暇もなく、男に指先を向け即座に妖力弾を発砲出来る状態で静止の声をかける。

男の反応も早かった、てゐの拘束はそのままに相手に対して向き直り、片膝を突き半身の居合腰となる。見事に小さな体躯のてゐの体の陰に隠れた。

「れーせん！たすけてー！」

川上が腰を落とした事により逆にさらに腕が極まりてゐは爪先立ちになりながら苦痛にてゐは鈴仙に助けを求めた。

「てゐを離しなさい！」

しかし流石にてゐを弾除けにされては撃てない、鈴仙は実力行使の前に警告する。

「了承した、だが君も腕を下ろして貰う」

しかし男——紅魔館使用人である川上はあつさり承諾した。

「わかつたわ」

鈴仙も相手の要請を飲む。

「3」

鈴仙が言った

「2」

続けて川上がカウントした

「1」

両者同時にカウントを終え、また同時に鈴仙は撃たんとしていた腕を下ろし、川上はてゐを離した。

解放されるとてゐはやはり脱兎の如く走り出し鈴仙に飛びついた。

「てゐ、大丈夫？」

「鈴仙、わたしあいつ嫌い」

「えっ？」

「後よろしく」

てゐるは最後に川上に向かいべーと舌を出し、竹藪の中に駆け込んでいった。

「なんなの・・・」

鈴仙は少し呆然としたが、しばらくして川上に向き直った。

「貴方は何故てゐに刃を突きつけていたのです」

ともかく目の前の正体不明のナイフ野郎を詰問すべきだと判断したようだ、しかもこの男、大刀と長刀も持っている、何故か大刀は燃えた後があるが。

「あのウサギに永遠亭への案内を頼んだ」

川上はナイフを納め、かわりに煙草を取り出して火を点けつつ事の顛末を説明し出した。

「・・・それで?」

鈴仙は相槌を打ちつつ、川上の眼で一瞬見竦められ、背中を撫でられたような悪寒が走った。昏くて冷たい眼、この眼は危ない。

「案内されてる中、三度意図的に罠に誘導された、害意があるものかと判断した」

鈴仙は頭痛を堪えるように額を抑えた、てゐに悪気はない、悪戯なのだ、そう悪戯。しかし相手を見るべきだと鈴仙は思った。

この波長がさつきから狂ったように短くなったり長くなったり滅茶苦茶な男に冗談

は通じそうにない。

そう、例えば、例えばだが死地や戦場の空気に慣れた人間なら敵意と捉えて当たり前なのだ。

「・・・ただの子供の悪戯ですよ、悪意はありません」

「そうだったか」

川上は悪びれもせずに相槌を打って煙草を一服吸った。

まあ、いい。鈴仙は思った、たまにはてゐも痛い目に遭った方がいい薬だろう。それより問題はこの異常な男、完全に狂い人のソレに鈴仙の眼には視えるが話は通じるらしい。

鈴仙・優曇華院・イナバは姿勢を正した。彼女は白のブラウスに赤いネクタイを締め、その上に紺のブレザー、ミニスカートに足元はローファーといった服装で身を包む。

特徴的なのは真紅の眼と膝下まで届きそうな程に長い薄い紫の髪に、てゐとは違い立っているのが先がヨレているウサギの耳。幼さを残した端正な顔立ちだが目付きに時折険が混じる。

「永遠亭になんの御用でしょう」

鈴仙は問いただした。

「薬師がいると聞いている、薬が買いたい」

普通と言えは普通の理由、永遠亭といえは後は精々急患が出た時くらいしか客はこない。

「私は永遠亭で薬売りをしています、鈴仙・優曇華院・イナバと申します。」

「紅魔館の使いの川上という、よろしくお願いする。薬師は君じゃあないな」

「はい、その方は私の師匠です、すぐそこなので案内します」

紅魔館の使い、何故こんな人間の男が？と鈴仙は川上という男にどうにも引つかかりを感じたが、大人しく案内する事にした。狂った客でもただの客でも所詮は一人の人間なのだから。

「感謝する…が、もう罠に誘導されるのはごめんだが」

川上はそんな冗談なのか警告なのかよくわからない事を言う、鈴仙はどうにも調子が狂わされる、本来狂わす側なのに。

鈴仙は黙って永遠亭に歩きだした、もちろん罠などに誘導などせず。

数分と歩かず目的地に着いた、川上の目の前に広がるのは大きな武家屋敷だった。

竹林の中に立つ屋敷は雅な和の美しさがあつた、それを見る川上の眼が静かに細められる。

「どうかしましたか？」

「いや」

しばし屋敷を見据えたまま動かなかつた川上に鈴仙は声を掛けたが。

「いい屋敷だな」

帰ってきたのはそれだけだった。

鈴仙は屋敷の門扉を潜る。

「戻りました」

鈴仙は帰宅の挨拶を言い川上に向き直る。

「ごうぞ」

そう言われて川上も門扉を潜って屋敷に入った。

「刀をお預かりします」

鈴仙にそう言われ川上は背中の野太刀を外し鈴仙に渡した、屋敷内では小刀以上の刀は身から放すのがマナーである。

「腰のものは」

鈴仙は手渡された野太刀が目方に反して意外と手持ちが軽い事に驚きつつ川上がもう一振り持つ腰の刀に目をやった。

「無作法ですまないがこちらはいい、見ての通りもう使えるものではないのでね」

鈴仙はそれ以上は言及しなかつた、廊下を歩く永遠亭に住む人化した妖怪兔のイナバ

である一人に野太刀を預けて何事か指示した。

「師匠はこちらはです」

そして屋敷内を暫く歩いた先の一室の前で鈴仙は川上に言った。

「お師匠様、戻りました」

「入りなさい」

襖越しに涼しげな落ち着いた女性の声が返ってきて、それで鈴仙は襖を開け室内に踏み入った。

「おかえり」

「先日急変した患者さんですが、今日ステリしましたので処置を終えてきました。」

「そう、御苦労」

鈴仙が報告した相手は長い銀髪を三つ編みにした大人びた雰囲気的美女であり、服ら半袖にフリルをあしらった上に下のスカートともに右半分、左半分で色が赤と青に分かれたアシンメトリーなものであり、また服全体に星座をあしらった意匠を凝らしている。

彼女が天才と称される月の民の薬師、八意永琳であった。

「あと、お師匠様にお客さんです」

「あらそう」

「失礼する」

やり取りを聞いていた川上もタイミングを見計らって一言かけて入室した、そして永琳に眼を向けた瞬間動きが止まる。

川上はまたすう、と眼を細めて

「へえ」

と、どこか面白そうに呟いた。

第65話

永遠亭の一室、そこで三人の男女が向き直っていた。

一人は黒髪に三白眼、腰に刀を差した男、紅魔館使用人川上。

一人は薄い紫のロングの髪に真紅の眼とヨレヨレのウサギの耳が特徴的な鈴仙・優曇華院・イナバ。

最後の一人は艶やかな銀髪を三つ編みに纏め、右半分と左半分で赤と青に分かれていますという何とも形容しがたい服に身を包んだ八意永琳。

「で、何の薬が入用？」

永琳は初見から自分を見て妙な反応を示した川上には触れずに用件に入った。

川上も特に何も言わずに椅子に座ると懐から一枚の羊皮紙を取り出し永琳に手渡した。

「紅魔館の遣い、ね。あそこも新しく人を雇ったのね」

永琳はそこに書かれている処方して欲しい薬品とレミリア・スカーレットの署名を目を走らせて呟く。

「川上という、よろしく頼む」

「ええ」

永琳は川上の自己紹介にどうしても良きそうに素つ気なく答え、自分は名乗りもせず、渡された羊皮紙にサラサラとペンで何かを書き加えて後ろに控えていた鈴仙に手渡した。

「今から処方する必要があるものもあるわ、暫く待っていていなさい」

「承知した」

「鈴仙、彼を客室に」

「わかりました」

永琳と川上、鈴仙はそう端的なやり取りを交わした、永琳はあまり無駄は好まないのかも知れない、ふと鈴仙は話し方が二人似通つてゐる気がした。

川上は鈴仙に促されて、失礼する、と一言残し退室した。

鈴仙を案内され川上は屋敷内を歩きつつ言った。

「あの薬師、腕がいいと聞いたが」

「そうですね、師匠は天才、という形容詞すら生温いような方ですから」

川上の言葉に鈴仙はそう答えた、鈴仙の口調はやや固いが師に対して敬愛を持っている事が伺えた。

そして幾ばくかの畏れ。

「そのようだな」

そう相槌を打ちつつ川上の口の端が釣り上がり冷笑が浮かべていたが、前に行く鈴仙は気づかない。

「薬に関しては何でも作り出せるようだな」

「そうですね…おおよそ薬ならどのようなものでも師匠なら作れてしまうでしょう」

そう雑談している内に客間の一室に着き、川上は通された。

「後ほどお茶をお持ちしますので」

そう言つて鈴仙は立ち去つた。十畳ほどの部屋に卓と座布団だけという簡潔な部屋を川上は一度見渡すと腰から焼けた刀を鞘ぐるみのまま抜いて右手に持つと座布団に正座に刀を右横に刃を自分に向けて置く。

川上は正座したまま静かに瞑目した。

鈴仙が茶の用意をする前に師である永琳から受け取つた処方箋に記載された薬品、材料を薬品室に取りに行く途中だった。

「姫様」

「あら、イナバ」

廊下で出会い声を掛けた相手は、一人の小柄な女性だった。

墨を流したような艶やかな長い黒髪に切り揃えられた前髪、綺麗に整いつつ童のような愛らしさも感じられる顔には有るか無しかの微笑を浮かべている。

身を包むピンク色の服は胸元に白いリボンがあしらわれておりゆったりとして長い袖丈は手先を隠している。スカートは赤い生地でさらに下に白いスカートを重ねているようであるが、これも床につくほど長い。

それらの服装は洋装だが服全体に月に雲、桜に竹、紅葉など和風の意匠が凝らしてあり和洋折衷といったところか。

屋敷と同じく見る者に和の美を感じさせる女性だったが、それもそのはずこの人物が永遠亭の姫、蓬萊山輝夜だった。

「客かしら」

「はい、妙な男性ですが、薬を買いに」

問いかけに答えた鈴仙の言葉に輝夜は興味を抱く。

鈴仙は普段他人にあまり関心がないので、人間に何がしかの形容をする事自体珍しい。そう輝夜は思った。

「妙な殿方ね、どう妙なの？」

「それは」

「やはりいいわ」

答えようとした鈴仙は質問した輝夜自身に遮られ鼻白む。

「自分で見てくるわ」

「あつ、姫様！」

輝夜はそう一言いい、どこか眠たげな眼で一つ微笑むと咄嗟に出た鈴仙の制止も黙殺し歩き去っていった。

どうにも興味を抱かせてしまったらしい、長い時を生きる者にとつては好奇心ではなく、退屈こそが己を殺すものなのだ。

まあ、問題はないだろうと鈴仙は思う、材料を師に届けた後の茶は二人分用意したほうがよさそうだ。

客間で正座のまま瞑目したまま静かに呼吸していた川上はゆっくりと眼を開いた。

「こんにちは」

開いた視界の横に川上が座る場所から斜の場所に女性が一人座り口元を長い袖口で隠し微笑んでいた。

女は突然にそこに居た、川上は眼を閉じていたが他の四感は人が近づくと足音、襖を開

ける音、近づくと気配、そういったモノは一切なく唐突に、あるいは最初からのようにそこに居た。

「こんには」

挨拶を返しつつふと川上は似た感覚を思い出した、これと同じ事をやるメイドがあつた館にも居たな、と。

「ちよつとお顔を拝見しても」

返答も聞かずにその女性、蓬萊山輝夜は唐突に川上の顔を両手で包み、ずいっと顔を近づけた。

吐息のかかりそうな至近距離から輝夜は川上の眼を覗きこんだ、彼女の茶色がかった黒い澄んだ瞳が川上の眼の奥を見据える。

対して川上は特に反応も示さない、輝夜と同じブラウンの瞳は輝夜の眼を見返して二人の視線がからまつている、ように見えるが違う、川上の視線は輝夜の眼に向いてるだけで焦点は定まつていない。

至近距離から見ると虚ろにも見える眼は何も見てはいないようで。あるいは全てを見ているのかもしれない。

「嫌な眼をしているのね」

「君は綺麗な眼をしているな」

輝夜は川上から顔を離し面白そうに感想を言い、川上はつらまなそうに感想を述べた。

「私は蓬萊山輝夜、この屋敷の主人、貴方のお名前は、劍客さん？」

「川上と言う、よろしく頼む」

「貴方みたいな武芸者は久しぶりに見るわ、御子神にちよつと似ているかも」

「ところで聞きたいんだが」

名乗り合った所で川上が切り出した。

「ここは禁煙か？」

懐からゴールデンバットのパックを取り出し軽く降りつつ聞いた。

第66話

「竹取物語、という御伽噺を貴方は知っているかしら」

川上は足を崩し胡座をかき煙草を吹かしていた。よく見るとその胡座は左下腿部は正座と同じ要領で左太腿から尻の下に折りたたまれた妙な胡座だ。

そんな川上に輝夜は一つ問いかける。

「その話を知らない日本人はまずいないだろうな」

川上は紫煙を吐きつつ答える、彼の態度何も考えてないようにも、あるいは一見しただけで十を見通していて、それでしらばっくれているようにも感じられる。

「そう、ところでその物語の姫は知っている」

「知っているな、まあ、実在したとしても生きててもいない、ようだけどな」

含みのある川上の返答に輝夜の笑みが深くなり濡れた眼で川上を見る。

「そんな事までわかるのね、心眼、という域じゃないみたいね」

「失礼します」

そんなお互いにとって意味もない会話を続けていた所、鈴仙が盆を持ち入室してきた。

「どうぞ、お熱いのでお気をつけ下さい」

「ありがとう」

「頂くわ」

鈴仙は丁寧に注意を促しつつ、二人の前の卓上に湯呑み、そして茶請けだろう、和菓子の練り切りの小皿を置いた。

「ではごゆっくり」

そう一つ頭を下げると鈴仙は回れ右して退室して行った、給仕ではないはずだが客人に失礼のないよう礼節を払う心構えが伺える。

川上は携帯灰皿に短くなつた煙草を入れ。目の前に置かれた茶を一口含む。熱いと注意されたがむしろ適温で猫舌の川上にも抵抗なく呑めた。

仄かな甘味と渋みのバランス、鼻に抜ける香り、雑味のない舌触り、どこか安心感を誘う一杯の茶はおそらく一級品のモノだろう。

輝夜も上品な仕草で茶に口をつけて、一息つく、童女のようにも見えるが何処か色気も感じる仕草だった。

「ところで貴方、ここに来る途中何かあった」

一呼吸置いたところで眼を細めて聞いてきた輝夜を川上は一瞥し、その目線が自身の右手側に置かれた焼けた刀に移る。

「獣にじやれつかれたり兎にからかわれたり、くらいだな」

「獣の中に私と同じような奴がいたんじゃないかしら？」

輝夜は邪気の無い笑みを深めて一步深く尋ねた。

「いたな」

対して川上は何の感慨も無さそうに告げるだけだった。

「やっぱりアイツの炎ね」

独り言のように呟きつつ、輝夜は練り切りを菓子楊枝で切り分け一口食べた。

「で、何回殺したの」

「普通ならば七回分」

川上は茶を口に運びつつ端的に答えた。

「貴方、面白い人ね」

輝夜は口元に笑みを湛えたまま、流し目で川上を見た、明らかに妹紅との関係性を理解しているだろうに別にどうでも良さそうな投げやりな態度。

なるほど悪くない、アイツを七回殺すというのも上々、輝夜はそう思った。

「だけど、損失も無しとはいかなかったようね」

その輝夜の言葉は明らかに川上の焼失した刀に向けられていた。

「その刀でここから帰るのは危険じゃないかしら」

「刀が無かったら戦えない」

川上は煙草に火を点けつつ、静かに言った。

「なんてものが武術といえるか？」

川上は紫煙をゆつくりと燻らせながら口の端に笑みを浮かべていた。

そんな川上に輝夜も鈴を転がすような綺麗な声で笑った、面白い、やつぱり似ているかも知れない、抜身の刀のような懐かしい武人、御子神、いや確か名を変えて小野某といつたか。

「どちらにせよ刀の代わりは必要でしょう」

輝夜が左腕を上げると西陣織の刀袋が握られていた、どこから取り出したのか、最初から持っていたのか。

ス、と両手で差し出された刀袋を川上は受け取り袋を解き中から一振りの刀を取り出した。

打刀拵えだが、その特徴から尾張拵えと言われるモノ、いや。

「柳生拵えか」

鏢は通常のものだったが柄に特徴があり、目貫の位置が普通の拵えと裏表逆である事、そして柄の峰側が平たく削つてある事、片手打ちでも手の内を決め易くする為の工夫は、新陰流で有名な尾張柳生の麒麟児といわれた柳生連也の考案と言われている、極

めて実戦的な拵え。

川上は懐から取り出した飛針を目釘抜き代わりに目釘を抜いて、鞘を抜く前に柄を抜き中子を改める。

美中国住次吉

美中青江派でも有名な刀工の銘、時代は南北朝時代だったか、と川上は思う。

そのまま刃を上には鞘から峰を滑らせるように抜き、刃を改める。

肌は良く詰んだ板目肌、刃文は綺麗に乱れのない直刃に深い匂い出来、古刀独特の青黒く、青江派の凄みを湛えた刃は美しさと同時に不吉な怪しさを纏っている、刃味も尋常ではないだろう。

刃長は約二尺二寸五分、身幅や重ねは尋常で鰐元近くで反る腰反り、また銘が履き表に切られていた事を考えると打刀拵えだが刀身は太刀らしい。

擦り上げられているのが残念だが並の名刀ではない。

川上は柄を戻し目釘を入れ鞘に刀を納めた。

「いい物だな」

「あげるわ」

「なら頂く」

さらりと譲渡されたが値段を付けたらとんでもない事になりえる刀であるが二人は

大した事ではないように思っているらしい。

「で、望みは」

貸しを作ろうとしていると川上は理解し、要望を端的に聞くと、また輝夜も話が早いと笑った

「貴方が斬ったあの子、また会ったら後適当に二、三回殺して」

「了解した」

とんでもない要望であったが川上は抑揚ない口調で了承の意を伝えると、刀袋に焼けた政長を入れ、今し方譲渡された青江を自分の右脇に置いた。

それを見て輝夜は微笑んで残った茶を飲み干した。

「では失礼するわ、また機会があったら一献やりましょう」

素晴らしい終わった時にはすでに輝夜はそこに居なかった、ただ残された茶碗と減っている練り切りだけが彼女のいた痕跡だった。

「是非」

川上はもう居ない相手に言い、煙草に火を点けた。

結局練り切りに手をつけたのは輝夜だけだった。

第67話

永遠亭

永琳は診察兼調薬室で鈴仙から持つて来て貰った薬の材料を計量していた。

書類に何か書き込みつつ一つ一つを正確に計量する作業に没頭していたそれは何処か鬼気迫るものを感じさせる集中だった。

そのような収束的な集中は得てして視野を狭めるものだ、だから彼女は気付くのが遅れた。

永琳がハツとして後ろを振り返ったそこには部屋の入り口の前に幽鬼のように立つ男、川上だった、右手には先程腰に差していた物とは違う鞘ぐるみの刀を握っていた。その刀には見覚えがある永遠亭にある様々な道具の中の一つの武器だ、名物だが永琳にとつては大した価値を見出せないが、まさかかつてに持ち出した訳ではあるまい。

「…何か用かしら」

気付かぬまに室内に入られてた事に驚く様子も咎める様子も見せず、永琳は聞いた。

「君は『外』の薬も作れるな」

「モノによるけど作れない事もないわね」

川上の言う外、とは幻想郷の外を指す事は分かった、何故そんな事を聞くのか、いや意図は考えればわかる。

「欲しい葉がある——」

永琳の部屋から出た川上は屋敷内を散策していた、この男は客間でじつとしていられないのだろうか。

廊下を歩きながら川上の蒙昧な眼がふらふらと視線を彷徨わせていた、何かを観察しているように。

妙だと川上は思った、紅魔館はあちこちに歪みが視えた、しかしこの屋敷は逆だ、不自然に何も視えない、これは似ていた、今日1日で会ったあり得ない在り方をした三人と。

川上は柱の一つに歩みより左拳でコンコンとノックするように軽く小突く、特におかしい感触ではない。

続けて今度は左手掌底を柱に添えて、膝の抜きで腰を落とすと同時に床を踏みしめ床から伝わる勁を掌底から柱に伝えた。

おかしな感触もないが壁も天井も軋み一つしなかった、どうやらベクトルは違えどこの屋敷もあの館同様弄つてあるらしい、そう川上は思った。

「何でもアリか」

ぼつりと独り言を呟く川上の口元は薄い笑みが浮かんでいた事に本人が気付いていたか？

廊下を音のしない滑るような歩みで進んでいた川上はふと一つの障子に手をかけ何気なく開けた。

そこに川上の方を見て突然の事に驚愕し動かない鈴仙がいた。

川上が開けた部屋は食堂らしかった、食卓について井から箸でうどんを掬った体制のまま鈴仙は硬直していた、遅い昼食はたぬきうどんのようだ。

川上は何も言わず襖を閉めてその場を後にした。

川上が去っていても鈴仙はしばらくその体制のまま動けなかった、掬ったうどんが箸から滑り落ちた。

「清水、か、もう一度その男の特徴を聞かせてくれ」

人里、上白沢慧音宅

そこで、慧音は尋ねてきた友人の妹紅の話を聞いていた。

「年齢は多分20代、身長は170cm半ば、やや前髪が長めの癖のない黒髪に中肉中背で身体の線を隠すような大きめの黒い洋装、腰には刀を一振り鶴鴿差しにしてさらに背中に五尺以上はある野太刀を背負っていた」

胡座をかいていた妹紅はそこまで一息で説明すると唇を湿らせるように湯呑みから茶を一口啜り、続きを話す。

「剣を使ってたが、あれは武芸百般に通じている、しかも並の練度じゃない、ただの人間にあれだけ刻まれたのは久々だよ」

自重気味に笑って妹紅は言った。

「大丈夫なのか」

「それでどうこうなる身体じゃないのは慧音も知っているだろう」

あつさりそう返したが、慧音とて妹紅の身体は先刻承知。ならばおそらく身体を心配したわけではなかっただろう、ふと慧音の眼に寂しげな色がよぎる。

「そんなことより、その男だが一番わかりやすいのは眼だ、三白眼がちの眼なんだが妙に据わっている、気味の悪い眼だ、多分見れば分かる」

「眼か」

眩きながら慧音は立ち上がり柵の引き出しにから懐紙につつまれたものを取り出した。

それは現場に落ちていた紙巻タバコの吸殻、死んでいた野盗達のものという可能性があつたが、そのタバコは巻き紙にアルファベットが刻印されていた、GOLDIEとまでは分かるが後は分からない。

少し調べたがそんな紙巻タバコは幻想郷には出回つてなく恐らく外来品だという事が分かった。

「その清水が持っていた刀の一振りには私が燃やしたから刀はもう差してるかわからないが」

「妹紅、その男、紙巻タバコを吸って居なかつたか」

「いや、吸ってはいなかつたし会つてすぐ争つたからそんな暇も、いや・・・」

ふと妹紅は考える、あの男と組み付いた時確かに自分の物と違う独特のタバコの匂いがしたように思えた。

「言われてみればそいつの服にタバコの匂いが付いていた気がする、それがどうした？」

「いや・・・」

慧音は吸殻を摘んで妹紅に見せた、妹紅は眼を細めてそれを観察する。

「見た事ないタバコだな、それが下手人の物か？」

「可能性がある、外来品らしい」

妹紅はまた考える、妙な雰囲気と落ち着きがあつたからその考えにいたらなかつたが、確かにあの男、外来人の特徴もあつた。

「その清水と名乗る男が野盗団を斬つた人物だと思うか」

妹紅は即答した。

「私の勘だが間違いない」

「私はその事件を聞いても正直あまり興味はなかつた、里の人間でもない荒くれ者が何人死のうがどうでもよかつた」

妹紅の独白を慧音は黙って聞いていた、実際この事件を知っているものも殆どの人間があまり問題と捉えていない者ばかりだつた。

事実として犠牲者は人里の人間すら襲い殺す事もある極悪人の徒党、討伐されるのが当然だし、むしろ内心悪人が死んでくれて良かったと思つている者もいるだろう。

しかし慧音はそう簡単には物事を見ない、表面的にしか見ようとしないと潜在的な問題を見逃すからだ。

「だけど気が変わった、あの男は危険だ、捨て置けない」

そして妹紅も引つかかりを感じたようだ。

「慧音も清水という男、注意してくれ」

妹紅は紙巻タバコを取り出し、フィルター付きのそれを啜え術で火を付けた。

「分かった……ところでタバコは体に悪いぞ」

慧音の注意に妹紅は紫煙を吐いて苦笑いを浮かべた。

「おいおい慧音、そりゃ皮肉かい」

「そういうつもりはないのだが、吸いすぎるなよ」

いたって大真面目な顔でそういう慧音に妹紅はケラケラと楽しげに笑った。

「慧音は面白いな」

「そうか？ そろそろ食事にするか、食べてくだろ」

何故笑われたのか慧音にはよくわからなかったが食事の支度をしようと立ち上が

りながら問い掛けた。

「ああ、食べてくよ」

妹紅は穏やかに笑いながら暖かさに浸るように目を閉じて答えた――

同刻、永遠亭

縁側から見渡せた美しい日本庭園、そこを川上は歩いていて、すでに日は傾いている。

一本の柳の木の下まで来ると川上は幹に手を付き、木を見上げた、彼は屋敷を散策するとうより観察している風だった。

ふと、右手に持っていた美中青江次吉を左手に持ち替え鞘から抜き払った。

刀身を掲げ眼でその妖しい輝きの刃を観察する、少しチューニングを合わせて視ると黒がかった紫が幾つもの刀身に纏わり付いているのが分かった。

「日く付き物件とは、中々面白いものを渡す姫様だ」

薄く笑って小さく呟くと刃を鞘に収め、柳に寄りかかり川上はタバコに火を付けた。

巻紙にはGOLDENBATと銘柄が入ったその愛呑タバコを――

第68話

「で、今日中には出来ないと?」

「はい、少々調合に手間がかかってしまって、明日には出来るそうです、申し訳ありません」

客間で腰を落ち着けて待っていた川上に鈴仙は師からの言葉を伝えた、内心ではあのからいの薬にそんなに時間がかかる事に首を捻りながら。

「分かった」

そう言つて川上は左手に刀と右手に刀袋を握り立ち上がった。

「明日また出直す」

「いえ、また来ていただくのは手間でしょうから師匠が今夜は泊まつて行つて下さいと」

鈴仙から言伝を聞いた川上は立つたまま視線を中空に向け何か少し考えている様子だった。しかし確かに二度手間より楽だと結論付けたのかそのまま座り直した。

「では世話になる」

「はい、部屋はこの客間を使って下さい、あちらの押し入れに布団も入ってますので」

鈴仙が指し示した押し入れの方に川上がぼんやりと眼を向ける、その様子を鈴仙は気付かれないよう観察する、意外と隙がある、これなら・

「今、何を考えた」

ス、その瞬間川上の三白眼が鈴仙の方に向き、静かな声でそう問われ鈴仙は背筋がゾツとした。

あらぬ考えがよぎったのを見透かされた衝撃は効いた、一瞬鈴仙は川上に言葉を返す事が出来なかつた、むしろ失態はそれだつたらう。

川上は薄く笑つてタバコを啜えた。

「まあ、いい」

「…夕食の支度が出来たらお呼びします」

遅れて鈴仙は自分が言うべき言葉を見つけた、そしてそれだけ言つて退室した。

客間から少し離れて鈴仙は顔を俯かせ自身の兎の耳を右手で握り締めた。

衝撃なのは見透かされた事だけではなかつた、武人を前にして言われて初めて気付く程自然と殺意が湧いていたのだ。

どうすれば殺せるか？

鈴仙は自分を嫌悪する、治す側に回つてもまだ自分がかつての自分が抜けきらない、ただ敵を効率良く壊す軍人としてのの。

「で、あの男はそんなものを作れと」

調薬室、楽しそうに話しかけてくる輝夜に作業の手も止めずに永琳は端的に答えた。

「ええ」

「そんなのよく了承したわねえ」

くすくすと小さく笑う輝夜はごく機嫌な様子だ。

「まあ、作れる物だし特に拒否する理由もないわね」

永琳は材料を測り何か書類に時折ペンを走らせながら答えた。

「でもそんなものを使うなんてとんでもない御仁ねえ」

「そういう人間もいるものよ」

機嫌良さげに話す輝夜と对象的に作業しつつ答えている永琳だがその受け答えに決してぞんざいな印象を受けないのが不思議だった。

「でも永琳ならその程度の薬副作用を無くして作る事くらい出来るでしょう」

「そんな事は頼まれていないわ、それに」

永琳は作業の手を止め輝夜を真顔で見て言った

「そういう物にはしつぺ返しがあるべきよ」

その言葉には言外に自虐とも皮肉とも取れる物が含まれていた、輝夜はそれに気付い

てやはりくすくすと笑う。

「全くその通りね」

「私の事ばかりだけど輝夜、貴女も彼にうちの刀を渡したじゃない」

「中々の武人だったものだから、ああいう人に似合うと思つたの。まあ、大した物でもないいいでしょ」

「まあ確かに大した物でもないわね」

色々な意味で充分大したもののだが、二人の価値観は常人のそれでは測れないようだ。

「それにあのくらの武人なんてたまにいますでしょう」

「そうね、まあ数百年くらいに一人居るくらいね」

二人はどうも価値観だけでなく時間感覚もズレているらしい。

「なんにせよあの人、悪くないわよ」

「そう」

終始楽しそうにしている輝夜に対して永琳はあまり興味なさそうに言った。

「たしかにああ眼がいいのに平然としていられるのは人としては凄いかも知れないわね」

縁側にから望める日本庭園、風が吹くと竹がぶつかり合うカラカラとした小気味よい音と葉が擦れ合う音が鳴り合う、空は茜色に染まっていた、武家屋敷ならではの美景。それを川上は縁側に胡座をかきタバコを吹かしながらぼんやりと見ていた、いや見ているのだろうか？ただ何もする事もなく何もしていなかったのかも知れない。

川上は暫しゴールデンバットの両切りならではの濃厚な口当たりの煙を口の中で転がして楽しみ、短くなつたタバコを携帯灰皿に押し込むとそのまま体を倒して縁側に仰向けに倒れた。

ぼんやりとした眼で暫し中空を見上げていたがやがて彼は眼を閉じた
寝た。

川上が眠り10分が立ったのを確認すると、無音で彼に忍び寄る幼い少女がいた。

彼女は充分な距離まで近づき、川上の呼吸で寝ている事を確認し、手にした小さな木槌を振り上げる。

そして川上の頭目掛けて振り下ろしたが、その瞬間少女は床に潰れるように叩き伏せられる。

「…また、君か」

「…また、これか」

同時に言葉を発したのは奇襲を躲して鞘ぐるみの刀で腕絡みを掛けうつ伏せに倒した川上と、倒された襲撃者の因幡てゐであつた。

川上は度重なる攻撃行為にこのまま刀を抜いて斬つてしまふべきかと考えたがそれはまずいかと思ひ直した。

「この屋敷の兎は客の不意を打つのが挨拶なのか？」

「お兄さんも家人を押し倒すなんて客としては随分乱暴じゃないか、そういうの嫌じゃないけど、まだ夜這いには早い時間だよ」

皮肉に腕を極められたまま飄々と皮肉を返すてゐは外見には似合わない老獪さを感じさせる。

「折るぞ」

「えっ、ちょー！痛い痛い！」

川上は付き合つてられないとばかりに刀を絡めたままの腕を床に寝かせて刀で肘を極めたまま手首を捻りながら引き上げる、即座に肘と手首の関節の筋が破断しそうになり激痛を訴えて来た。

「（めんなさい、許して！）」

余裕が剥がれるのはあつと言う間だつた。川上は極めた手から木槌をもぎとりつつ

腕を解放するとてゐは腕をさすりながら立ち上がった。

「昼間も言ったけどいたいたいな兎に何ていう事をするの」

「…次は肩の関節を抜いた後捻って靱帯を捻じ切る」

川上は木槌を庭に投げ捨てながらてゐに事実としての最終警告をした、次があれば彼は当たり前のようにそれをやるだろう。

それが分かるのだろう、てゐはため息を一つついた。

「悪戯でこんなリスク取るんじや割りに合わないね、やめたやめた」

どっかりとてゐは川上の隣に腰を下ろした。

「お兄さん外の間でしよ、なんでこんなところまで来たの？」

そうてゐは先程まで川上が見ていた縁側からの景色に眼を向けながら問いかけた。

しかし、暫し待てど返答がこない、てゐが川上を見ると彼はもう寝ていた、睡眠に戻ったのだ。

「ええー…」

なんだこりや、てゐは思わず笑いが込み上げてきた、無茶苦茶じゃないかこの男。

夕食の支度が整い川上を呼びに来た鈴仙が見たのは何故か縁側で並んで昼寝している川上とてゐの姿だった。

第69話

紅魔館

レミリアは私室で咲夜の淹れた紅茶を飲みつつぼんやりとしていた。

「帰ってきませんね」

咲夜のつぶやきは主語が抜けていたが。

「帰ってこないわね」

レミリアには伝わったらしくそのままの返答が来た。

「死んだのでしょうか？」

「そう思う？」

「ありえませんか」

迷いの竹林に単身向かわせるといふ危険性から咲夜はその可能性を口にしたが、問い返されるとあつさり否定した。

自分で言うておいてなんだが咲夜には川上が死ぬ所が想像出来なかった、ふらりと居なくなるという事ならありえそうだが。

「どこかで道草でも食っているのでしょう心配しなくてもじき帰ってくるわよ」

レミリアは断言した、咲夜としては川上はここにいつまでもいる理由はないのだからどこか別の気に入った場所に移ってもおかしくはないと思つていたのだが。

「わかるのですか?」

「わかるわよ、猫は家に着くなんて言葉があるけどあれは嘘よね、川上は気に入った人の所からは離れないわ」

「お嬢様の懐の深さなら当然です」

成る程、一理あると咲夜は思つた、何より主人がそういうならそうなのだ。

「違う違う、私じゃなくて」

「?」

レミリアはくつくつと笑いながら否定した、レミリアは自分が川上に気に入いられてと言つたのではない、むしろ逆だレミリアが川上を気に入っている。

「気付いてないの? 貴女川上にずいぶん懐かれてるわよ」

「はい?」

考えもしなかつた事を言われ咲夜は思わず間の抜けた返答をしてしまった。

「あれだけ世話をしてやってればそうなるわよ」

「いや、色々危なっかしいので見ていられないので。いや、しかし懐かれていますという事はないのでは」

「あるのよ、分かりにくいけど川上は貴女にだけは甘えているわ」

微妙に慌てる咲夜を見て笑いながらレミリアは言った、この幼い王は存外に部下をよく見ていた。

「中々難しい子だからね、これからもあの子の事みてあげて」

「はい」

レミリアは柔らかい笑顔でそういうと咲夜は僅かに紅潮した頬を押さえながらもはつきりと答えた。

永遠亭

縁側で着流しに身を包んだ川上は輝夜とともに酒を飲み交わしていた。

特に多くを語らずに静かに呑んでいた、川上が持つ盃に満たした酒に月が浮かんでいた、今宵は三日月。川上は少しづつ酒を飲み下す。

川上の隣で輝夜も静かに酒を飲んでいて、酒精の為僅かに赤みを帯びた頬に濡れた黒い瞳、長い黒髪は美しさと色気を漂わせる。ふと輝夜は月を見上げた、懐かしい月を。

「ねえ、貴方は月は好きかしら」

唐突な輝夜の問い掛けに川上も三日月を見上げた。そして反芻する、月は好きか？

川上は夜を生きて来た人間だ、月はいつもはるかに遠い空にある身近なものだった。故に好きかどうかという対象ではなかった、ただ夜の明るさに関わる光源という認識だったからだ。

「考えた事もない」

川上は正直にそう答えた。

「君はどうなんだ？」

「そうね……」

川上の問い返しに暫し輝夜は考える。

「こうして地上で見上げているのが一番かしらね、綺麗じゃない」

「視点、視座、視野が変われば見えなかったモノも見えてくる……」

どこか含みのある輝夜の答えを聞いて、川上は独り言のように呟く。

「そうね、醜いものも見ようによつては美しくもなる、貴方はそういう眼の使い方が上手いのね」

「皆、モノの見方を固定し過ぎなだけだ、皆一つも正面は強固な守りで突破は無理でも視点を変えたら裏ががら空き、なんて事いくらでもある」

川上はそういうつつ盃を空けた、そして手酌で酒を注ぐ。

「人間は案外見えていない事に気付かないものじゃないかしら」

「そうだろうな」

川上はちびりと盃に口を付けて月を仰いだ、雲のない夜空に浮かぶ三日月。

「確かに見えてなかった、君を言われて気付いたが綺麗なものだったのだな」

川上は一つ新しいモノの見方を手に入れたようだ。

「でしよう」

その隣で輝夜は楽しそうにくすくすと笑った。

死にたくない

そう思い引き金を引く、遠くで知らぬ誰かが私の弾で頭が弾けて死んだ。

死にたくない

土囊の後ろに隠れながら敵に応射していた時すぐ隣にいた仲間が胸から血飛沫を上げて倒れていくのがスローモーションのように見えた、訓練生から一緒だった仲間。

死にたくない

超至近距離で唐突に敵とコンタクトした、慌てて飛びかかってくる敵に銃を撃つ暇もなく殴り倒され、もみ合いになり無我夢中でナイフを抜き刺した、刺して刺して刺して、

何十回刺したか忘れた頃に相手が死んでいるのにやっと気付いた。

死にたくない

敵を制圧して近づいてみて初めて気付いた、彼らは少年兵だった。粗悪な量産品の銃を持たされた少年兵達を高性能なびかぴかな銃を持たされた私が撃ち殺した。私が撃つた幼い男の子は胸から血を流し血の溢れる口で助けて、と言った、私は命乞いする少年の頭に銃口を向け引き金を引いた。

死にたくなかった。

真つ暗闇の中昔の仲間が私を取り囲んでいる、皆何故か顔がない、私は言うべき言葉を探し気付く、私こそがどの面を下げて皆の前に出れるのだ、皆が何を言いたいか聞かえてくる。

なんでお前だけ逃げた

私は自身の耳を握りしめてうずくまり仲間達から眼を逸らした、そうしているとふとすぐ前に気配を感じ顔を上げた。

目の前に立っていたのは私自身だった、眼に昏い火を灯した私が何かを言う。

何故お前は生きている

ああああ

ごめんなさいごめんなさい、死にたくなかったんですごめんなさいごめんなさい。私はうずくまり夢中で謝る。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん……

そこで鈴仙は跳ね起きた、久々に見た悪夢、胸は激しく鼓動を打ち右手で胸元を掴む、呼吸が苦しく死の恐怖に頭が一杯になり叫びだしそうになる。

鈴仙は震える手で枕元に常備してある師から処方された発作時の精神安定剤を取り、錠剤を水も使わずに飲み込んだ。

そのまま鈴仙は布団から壁際まで這っていき壁際で夢の中でやったように自身の兎の耳を握りしめてうずくまった。

きつといつもそうしているのだろう、ヨレヨレになるまで癬がついた耳が物語っていた。

鈴仙は全てのものから眼を閉じ耳を塞ぐ、それでも世界全てから苛まれるような恐怖に支配され頭の中は痺れ歯の根が合わなくなる。

月の逃亡兵であった彼女は当時戦争神経症及びサイバー症候群で壊れかけていた、現在はいぶ改善されたが、それでもたまに苛まれるのだ。

ただ、彼女は薬の効き目が現れ楽になるのを待つしかない、それしかないのだ。

きっと自分が殺し、見捨てた人達はもつと苦しかった

やがて三十分も部屋の隅で震えていると呼吸が楽になり、だいぶ落ち着いてきた。

鈴仙は立ち上がり枕元の水差しから水を飲んだ、もし師匠が処方してくれた薬がなかつたらどうなっているのだろうと思う。

まだ冷たくなつた体に熱が戻らない、眠る気分になれなかつた、鈴仙は部屋を出る。廊下を歩みつつふと思う。

今日出会つた妙な人間、あの男はきつとこういふ感情には無縁だろう。なんとなく分かる戦場にはそういう人間が一定数いるのだ。

鈴仙は立ち止まる。

縁側に腰掛け一人川上は唾えタバコで酒を傾けていた。

鈴仙は言つた

「私は貴方が羨ましい——」

第70話

永遠亭

縁側に腰掛けた一組の男女が盃を交わしていた。

川上と鈴仙は二人とも着流しに身を包み、川上は啞えタバコで、鈴仙はちびちびと酒を口にしていた。

悪夢を見て部屋から出た鈴仙は何も言わずに川上の隣に座ったが、川上も特に何も言わずに盃を差し出しただけだった。

鈴仙がそうした事に深い理由はない、ただ一人は心細かったのだ。

そして川上の隣は居心地は悪くなかった、こうしていて気付いたが特にこちらを氣遣うでもなく無関心な態度は師匠である永琳に近い雰囲気があった。

それが鈴仙を救ったのだろう、情などなんの救いにもならない事を鈴仙は知っている、突き放す救いもあるのだ。

煙草をもみ消して酒を一口飲んで、ふと川上は口を開いた。

「月は好きか」

川上は自覚しているだろうか、その問いが鈴仙にとって急所を突くにも近い事を。

その問いに鈴仙の動きは止まった、しばらくして顔をうつむかせて言った。

「月は、見たくないです」

逃げ出したはずの故郷、しかし鈴仙がどんなに逃げても逃げても月は彼女を嘲笑うかのように必ず空にあった。

川上は空から眼をそらす鈴仙にを一瞥しふと、月を見上げて言った。

「ダチヨウの幸福という話がある」

唐突な語り口、鈴仙には聞いた事のない話だった。

「ダチヨウという生き物は砂漠においてどうしようもない危険を前にした時ある防衛行動を取る」

鈴仙は無言で聞いていた。

「それは頭を砂の中に突っ込んでしまうとと言うものだ、そうすれば何も見えず聞こえず危険なんかないとダチヨウは安心する、だからダチヨウの幸福」

くっ、と川上は笑う

「滑稽な話だろう」

「…私はそのダチヨウが羨ましいです」

鈴仙のほつりと眩く。

「見えなければ安心できるならその方がいいです」

くつくと少し笑い、無表情に戻ると川上は盃を空けて言った。

「オレはそうは思わない」

「何故です」

「簡単な一般論だ」

川上は盃に手酌で酒を注いだ。

「なんの解決になつていない」

「…その通りですね」

その通りだ、全てを見捨てて逃げ出しておいて見ないふりして安心するとは度し難い卑怯だろう、鈴仙はそう思う。

「君は兎だ、もっと生き汚いだろう」

「…その通りですよ」

自分はダチヨウのようににはなれないのだから、いつそそうなれたらと思うがそれはやつてはならない卑怯事

卑怯事？鈴仙は思わず自嘲する、自分が一体どの面下げて卑怯事を断ずるのか。

「だからそのダチヨウより私が一番間違っていると思います」

「それは自惚れだな」

川上はちびりと酒を口にしつつ言った。

「君なんかが一番の訳がないだろう、そんなに自分が特別なつもりか？」
その口調には僅かな嘲りのニュアンスがあった。

鈴仙はその言葉を聞き静かに怒りが湧きあがってきた、訳知り顔で語つてこの男に自分の何がわかるというのだ。

「貴方こそ何様のつもりですか、貴方に私の気持ちを理解出来るとでもいうのですか」
「理解出来ないし理解する必要もないし理解するつもりもない」

川上は断言して酒を飲み下す、盃というのは雰囲気はでるがチヨコチヨコ注ぐ必要があるのが面倒だ、グラスの方が良かったな、などと関係ない事を考えつつ。

ふ、と今度は鈴仙があからさまな嘲笑を浮かべた。

「貴方は人を殺す事をどう感じますか」
唐突な質問に川上は少し考え首を捻る。

「どう、とは？特にどうという事もないが」
「殺す必要があったら殺すだけの話だろう」
「殺す必要があつたら殺すだけの話だろう」

「ほら、こんな人間に最初からわかる訳ないのだ、鈴仙は白けたようにそう考えた。

「なら貴方は狂っているって事ですよ」

「そうか」

嘲るような鈴仙の言葉に平然と答える川上、狂気の魔眼の持ち主に狂っていると断ぜられるとは皮肉である。

「私からすれば貴方の方が遥かに理解出来ない、何故平然と他人を殺せる！」

「価値観の相違だな」

語尾が荒くなってきた鈴仙に川上はあくまで抑揚なく答える。

「私は、誰も殺したくなんてなかったのに……」

川上はふ、と鼻で笑った、そしてタバコに火を点けて一服し煙を吐くと言った。

「なら殺さなきゃ良かっただろ」

あまりに単純明快な理論、他人の情への理解など一切否定した答え。

「順番が逆だ、少なくとも殺してから言うべき事ではない」

ふふ、と鈴仙は笑った、あんまりにも正論だと思った、自分は決定的に間違ったのだ。

この男は少なくとも正しい、正しい、だからこそ

後から後から湧き上がる憤りを抑えられない、正しさという理不尽さにだろうか、あるいは狂人への嫌悪からだろうか、ただの八つ当たりかも知れない。

「全くその通りよ」

口調も変わり底冷えするような鈴仙の声と立ち上る怒気に川上は立ち上がった、縁側から降りて中庭で立ち止まる。

そろそろ寝るか川上は思った。

「来い」

だから寝る前に軽く運動

その声は平静だが今迄と違い闘気を滲ませていた。

鈴仙もそれに気付きなるほどと思う。

私とやりたい訳だ。

丁度いいお誘いだ、鈴仙自身川上を叩きのめせば今の腹立ちも幾分スッキリするだろう。

鈴仙も庭に降りた。

「二つ指摘するが君は本当の事を言っていない」

川上はそう言つて最後に深く煙を吸うとタバコを携帯灰皿に入れた。

「君は殺人を厭んでないない」

だつて今、いや最初あつた時から鈴仙は川上をどう壊せばいいか無意識に模索し続けている。

川上には察気術を使うまでもなく自明のことだった、相手の視線移動を見ていれば鈴仙がこちらの急所や隙を伺っているのがあからさまだ。

殺したくないといいつつどう殺すか常に考える、その自己矛盾に鈴仙はとうに気付い

ていたのだろう。

「刀はいいの?」

川上の指摘に応じず得物を使わないのかと鈴仙は問う。

「たずねゆく道のあるじや夜の杖」

「つくこそいらぬ月のいずれば」

返答は短歌だった、鈴仙にはその真意はわからなかったが月という単語が出る所に苛立ちを感じた。

鈴仙は左を前に半身になり両腕を上げガードを固めた、軍隊格闘におけるオーソドックスな構え。

川上は足を肩幅に軽く腰を落とすだけで無造作にも見える無構えだ、鈴仙は内心嘲る、古い武術の達人気取りか、手も無造作に下げているから腰に目を付ければ相手の挙動が丸分かりではないか。

懸念は魔眼で視ても波が滅茶苦茶で感情などから挙動を読むのは難しい所だが。

川上はスタスタと構えている鈴仙にまるで散歩にでも行くような気軽さで歩み詰める。

慢心するつもりはない確かにこの男は強いのだろう。まあ、しかし大した問題にはならない、鈴仙は思う。

もう相手は私の術中に落ちて居るのだから。

川上が向かう所に鈴仙は見えても鈴仙は居ない。

位相がズレているのだ

鈴仙は川上を横から見ていた幻影の鈴仙に立ち向かう川上は鈴仙から見ると隙だらけ。

そして川上は間に入る直前で後ろ足に重心を置いた、一気に地を蹴り幻影へと距離を潰すつもりだ。

だから川上の横を奪った鈴仙は地を蹴らんとした決定的瞬間を狙えばいい、左拳で川上の耳の後ろの頭蓋骨の付け根、乳様突起を強打、相手が前後不覚になった瞬間をサイドステップから右フックで喉を潰して終わり。

乳様突起と迷走神経への殴打のコンビネーション、相手を破壊するための一切の遊びのない攻撃。

川上が足に力を込めた瞬間鈴仙は左で撃ち抜ぬき――

そして気がつくとも鈴仙は夜空を仰いでいた、気を失っていたのは一瞬だった。

鈴仙の敗因は相手にわかりやすく地面を蹴って移動しようなんてあからさま過ぎる『誘い』にも気付かないほど冷静さを欠いていた事であろう。

「なんで分かったの」

倒れ伏せながら鈴仙は呟く、幻影がばれるはずがないのだ、あれは鈴仙の能力で完全に自分の位相をずらしたものの、ただ姿をずらしたというレベルではない。

「眼に頼り過ぎだ」

川上は鈴仙を見下ろしそう言つて背を向けた。

「おやすみ」

そう言つて川上は去つていった。

「ああ……」

全く見えなかったが顎に貫つたらしい一撃のせいで鈴仙はまだぼんやりして大の字になつたまま漫然と空を見上げた、もう自分がどんな感情を抱いていたのかもわからな
い。

ただ視界に映る故郷を見て彼女もまた始めて気付いた。

地上からみる月はこんなにも――

「……綺麗、だなあ」

第71話

紅魔館正門前

門番として仕事中の美鈴は一匹の白猫の前でしゃがみこんでいた。

青い眼の長い尻尾を巻いて座ったスリムな体型をしま綺麗な純白の猫。

「おいし〜?」

ニコニコとして自分のおやつである干し肉を少しづつ千切つて差し出す美鈴の手から猫は無心で食べていた。

ふと次に差し出されは肉片に猫は座ったまま反応しなくなった。

「ん、どうしたの?お腹いっぱい?」

そう美鈴が猫な語りかけた瞬間うなじに冷たい感覚が走り、美鈴は咄嗟に振り返る。

黒い洋装に身を包み、腰に刀を二本差しにした、端正な顔付きだが無機質な眼をした男、川上が真後ろに立ち美鈴を見下ろしていた。

「と、これは川上さん、お帰りなさい」

「ただいま」

慌てて立ち上がり、迎えの言葉を発する美鈴に対して、川上は端的に挨拶を返した。

「恥ずかしながら不覚を取りました」

その言葉には返答をせずに川上は踵を返して門の方に歩こうとして彼には珍しい事にバランスを崩した。

川上が眼を下すと彼の足元にいつのまに近づいたのか先ほどの白猫がまとわりつきゴロゴロと喉を鳴らしながら足に顔を擦りつけていた。

川上はしやがみこみ猫を持ち上げると黙って美鈴に差し出した。

「え、つと」

川上の顔と猫に交互に視線をやり、美鈴はとりあえず猫を受け取った。

そして川上は今度こそ正門をくぐり歩き去った。

美鈴は猫を抱いたまま壁にもたれてストーンと座り込んだ。

「一本取られちゃったなあ」

気を操る程の達人の美鈴に全く気取られず後ろを取り、殺気だけで頸椎を穿たれた。

戯れではなく同じ武芸を志すものとしての警告だったのだろう、容易く後ろを取られるものではないと。

事実不心得だったなと思う、猫に対して紅魔館、壁がある方を背にしやがんでいれば後ろは取られたりしなかったのだ。

「常在戦場か、私もまだまだ修行不足だなあ」

膝の上で丸くなつた猫を撫でながら美鈴は呟いた。

紅魔館、メイド長で十六夜咲夜は今日も館内で仕事に奔走していた。

といつても廊下に面した窓ガラスを一枚一枚掃除する地道な仕事だったが、彼女がガラスを拭っている時ふと声がかかる。

「ただいま」

帰ってきたか、相変わらず神出鬼没な男だと思いつつ咲夜は振り返る。

「お帰りなさい……ずいぶん愉快な帰宅ね」

そこにいた川上はメイド妖精のアニスを肩車して、いやされていたというべきか、いた。

「頼まれた物だ」

川上はその事には触れずに永遠亭から貰ってきた薬を手渡した。

「お疲れ様、今日は自由にしていいわよ」

咲夜は劳いの言葉をかけつつ薬を受け取った、眼では川上の腰の柄の焼けた刀と見たことのない刀の二振りを確認しながら。

「分かった」

「ちよつとまつて」

踵を返そうとしたところを咲夜は静止した。

咲夜は立ち止まった川上の腕と上体に簡単に手を這わせ確認する。

「怪我はないみたいね」

「ああ」

どうせ何か一悶着あつたのだらうと確認したが無傷、実際の所川上は幻想郷に来てから今まで幾つか修羅場を潜りながら血の一滴も流してはいなかつた。

「後、お嬢様に一言挨拶しておきなさい」

「わかつた」

そして今度こそ川上は踵を返して立ち去つていった。

咲夜も葉を納めに行こうとしてふと呟いた

「あのメイドはなんで肩の上にいたのかしら？」

レミリアは私室で一人暇を持って余して読書などしていた、傍らのテーブルのティーカップの中で紅茶が冷め切っていた。

そこでドアがノックされた、暇なレミリアは誰だか知らないが来訪者に内心喜ぶ。

「入りなさい」

入りなさいのはいい、辺りでドアを開けて入ってきたのは使いに出していた使用人の川上だった、何故かメイドを肩車した。

「先ほど帰った」

「お帰りなさい、お疲れ様ね」

「失礼する」

川上は挨拶を終えると回れ右して退室した。

レミリアは冷め切って渋みしか感じない紅茶を一口飲み、そして呟いた。

「…それだけ？」

川上は当てられた自室に戻り、一息つく、手を肩の上に回してアリスをベッドの上に投げ、タバコを唾え火を点ける。

そのままクローゼットを開け、野太刀、そして焼けた奥州政長、輝夜から授かった青江次吉ともに刀袋に入れて中に納める。

そして差料にする刀をどうするかと思う、大和守安定か固山宗次、しかし宗次はまだ試していない。

ふと川上の目線がベッドで寝っころがりこちらを見ているアリスに向けられた、川上は少し考えたが、結局安定を刀袋から出して腰に差した。

そして、内ポケットに入れていた白いケースを取り出す、少し考え内ポケットに戻す。タバコから伸びた灰が落ちそうになり慌てて灰皿に落とす。

第72話

紅魔館

夕刻、仕事も終わり自室に戻った川上は白鞆に入った刀、固山宗次を抜き、刀身を拭いさらに打ち粉を打った上でまた拭い塗ってあった油を除去した。

そうして油を拭うと地金が鮮明に写った、一目で金が良いとわかる代物、また紫は優しい太刀姿などと言っていたが、その体配は重ね厚く大切つ先になったゴリツとしたまるで合戦期の太刀のそれ、実戦性に立ち戻った新々刀らしいそれだ。

姿と金は如何にも実戦的と言った感じだ、手持ちもずつしりとくる、また試し銘は人体二つを重ねて切った二つ胴。

疑う訳ではないが。

川上は刀に薄く油を引き、半太刀拵えの外装に納めた。

試してみるか。

川上は立ち上がり安定を差し腰にさらに宗次を二本刺しにして立ち上がった。

またメイド長に頼んでもいいが、川上はそんな事を思いつつ部屋を出た。

川上が正門を出ると門番の美鈴は立ったまま器用に眠っていた。

川上はそれを一瞥だけして、歩きだす。

「どちらに?」

その背中に声がかかった。

眠っていた美鈴である、川上がそうであるように彼女も睡眠時の意識コントロールくらしい当たり前に出来る、彼女が仕事で寝ているのは怠惰な理由ではなく寝ていても差し支えがないからであった。

「少し出てくる」

「…分かりましたお気をつけて」

そう簡単なやりとりだけで川上は歩き出した、遠く見える湖が傾いていく陽光を反射して輝いていた。

霧の湖

「ふざけやがってこのガキがあ!」

「わあああん」

「おのれ、卑怯だぞおまえ大ちゃんをはなせ!」

人間一人と妖精二人が揉めていた、事の顛末は水を求めにきた如何にも荒くれ者と

いった風貌の男にイタズラを仕掛けたチルノに激昂した男が近くにいた友人の大妖精に刀を突きつけたというものだ。

妖精相手に大人気ないと言えばそうなのだが、そうなくても無理はない、まず男は元々暴力家であること、何より男の虫の居所が最悪であった。

それもそのはずだ、彼は仲間達と野盗団を組んでいたのだがつい最近たった一人相手に壊滅状態に追い込まれたばかりなのだ。

男は川上が切った野盗団の残党だった。

チルノは友人が盾に取られているのでどうにも男を攻撃出来ない。

「手を頭の上に組んで地面に伏せろ！ガキ」

「くっそー！」

「チルノちゃん、いう通りにしちや駄目！」

「黙ってろ！」

男も馬鹿ではない、チルノが並の妖精の力じゃない事を悟り、無力化しようとするが、人質に取られた大妖精はいう通りにすればまずい事になるとチルノを制止する。

側から見ると滑稽だがまあ修羅場である。

そこに。

「ちよつといいか」

唐突に声がかかった、そこには三人しかいないと思われたがいつの間にか湧いた第四者。

「ああ！」

男は振り返ろうとして、そのままがくりと膝を折り仰向けに倒れた。

「はっ？」

男は訳が分からないと言った様子だ、何故自分が空を仰いでいるのか。

「ひっ」

男の腕から解放された大妖精が思わず引きつった声を上げて後ずさった。

それも無理はない、男は自分で気づいていないが背中から腹部を抜ける程深々と斬られ大量の血を溢れさせていた。

「お、まえは」

そして男の視界の隅に一人の青年がこちらを見下ろしているのが写った、その顔は忘れもしない、あの夜の。

その化け物があの昏い眼でこちらを見つめたまま刀を上段に取り上げて・

「まっ」

そこで男の人生は終わった。

川上は今しがた男の頭を割った固山宗次を取り上げて懐紙で拭くと刃を改めた。

刃味は上々、背骨もろとも腹部を大部分、頭蓋骨を斬って刃毀れ一つなし、文句無し
の合格点。

生き試しもたまにはいい、そんな事を思いながら川上は刀を納める、ちなみに彼自身
が壊滅させた野盗の残党を狩った形になるのだが川上がそんな事に気付いているはず
もなく。

そこで妖精二人に畏怖の眼で見られてる事に気付いた。

一人は薄い水色のセミシヨートの髪に気の強そうな顔立ち、青いワンピース、背中に
氷にしか見えない羽という出で立ち。

もう一人は緑の髪を黄色いリボンでサイドテールに束ね、大人しくそうな表情で白
シャツ上下青い服に、虫のような羽。

この湖付近に良くいる氷の妖精チルノとその友人大妖精である。

「こんには」

とりあえず川上は挨拶をした。

「へ、こんには」

「なに、あんた!?!」

それに対しておっかなびつくりの挨拶と不躰な返答が同時に帰ってきた、チルノちゃ
んと大妖精の不安気な声がかかる。

川上は少し考える、とりあえず斬ってしまつたが。

「もしかしてこの男は君達の連れだつただろうか？」

だつたらまずかつたかと思つたが。

「い、いえ、そういう訳では」

「知らないよそんな奴！」

「なら問題ないな」

あつさり否定された。

「問題ないって！あんたこんな事して、して……？」

勢い勇んで言いかけたチルノだったが、尻すぼみになり。

「問題ないわね！」

断言した、多分何も考えずに喋っているのではないか。

「あ、あの、助けてくれたんですか？」

恐々とそう聞いたのは大妖精である、それを聞いて川上は首を傾げる。

「いや」

その言葉は大妖精の予想通りだつたと言える、川上から助けたとか助けるとかの意が全く汲み取れない、それが分かる程度に大妖精は聡明だつた。

幸いというか、仮に大妖精の位置が男の前ではなく、男の後ろだつたら自分が両断

されていたら、事までは考えが及ばなかったが。

「助かったのか？」

「はい、ありがとうございます」

とりあえず結果的に助かっただけと理解しながらも礼は伝えるあたり妖精としては律儀であつた。

「おまえ大ちゃんを助けてくれたのか！」

「…いや」

そして、話を全く聞いていなかったのか、理解しなかったのかチルノの発言は川上を僅かに困惑させる程だつた。

大妖精は何か口を開きかけ、しかしどういふべきかと考え、川上に目配せをする。

その視線を受け、川上は何と無く読み取つて、目を伏せて了承の意を表す。

そういう事にしておこう、と。

「そつか、ありがとう！」

「どういたしまして」

川上は形式的に返礼しながらチルノに歩みよる、そして左手を翳した。明確な冷気が感じられる。

「氷か」

「何よ?」

チルノは訝しげに自分にかざされた川上の手の指を握る、冷たい、人間の感触ではない、川上はそう思った。

「何でも」

いいながら川上は掴まれた指を右手で解き、回れ右して今度は今しがた殺した男の死体を検分し始めた。

とりあえず錢を抜く、刀は：駄刀と言うわけではないが普通であり、刃毀れもある、わざわざ取る必要もない。

中も見ておこうと川上は男の死体をうつ伏せにして背中にナイフを入れ背骨や内臓を改める。

「おー、中こんなになってんだ」

何時の間にか寄ってきていたチルノがしゃがんで川上の解剖もどきを興味深そうに見ている、大妖精は少し離れた所にいた。

特に何も言わずに川上は背骨の切断を見る、無駄に骨が欠けたりしておらずに如何に刃味の凄まじさが分かる。

「この切れてる豆みたいの何?」

「腎臓」

右の腎臓は見事に上下に分かれていた、腹部大動脈も、これは止めを刺さなくてもほぼ即死だったろう。

「なにそれ？」

「泌尿器」

「何するところ？」

「血液の濾過、排出、尿を作ったりだな」

そして、その後いちいち内蔵に興味を示すチルノに川上は何の気紛れか簡単に説明してやるのだった。

第73話

「意外ね」

一杯の紅茶を前にそうレミリアは嘆息した。

対面に席に着く川上は何も言わない。

それは二人が暇つぶしにリバーシに興じていた時だ、川上もレミリアも異常に強く大
体戦績はややレミリア優勢の互角。

ふと紅茶が欲しくなったレミリアが咲夜を呼ぼうかと思った時目の前でボンヤリと
石を手の中で弄んでいた川上を見て戯れに紅茶を淹れろと命じた事による。

紅茶を淹れるだけと言えど淹れ方の手順一つ、技術一つで味は如何様にもなっていま
う、そう簡単な事ではないのだが。

頼まれた川上は無言で席を外すと冷めないようティーポットと温めたカップを持っ
てきて、二人分回し注ぎ、ベストドロップまで落とした。

茶葉はセイロンのようだったがゴールデンルールに則って基本は押さえてあるその
紅茶は中々の味だった。

無論咲夜のそれには及ばないが。

いや、レミリアはたまに変なモノをブレンドをしてくる事がある咲夜のモノより興味安定しているかも知れないなどと思う。

「どこかで教わった事でもあるの？」

「メイド長を見た」

「それだけ？」

見ただけでこれだけ再現したのなら凄い学習能力だが、そういえば咲夜も川上の事を仕事の上ではそこそ必要領がいいと称していたか。

もつとも流星に見ただけではない、正確には咲夜の手際を見た川上は何となく興味を持ち、暇つぶしに調べてみて試しに淹れたりしていたのだ。

無気力なようでもたまに突拍子のない事を始める男である。

「美味しいけど血がブレンドされてないのが惜しいわね」

「血か」

そういえばメイド長は紅茶に入れていたかと川上は思い出す。

そして懐からナイフを取り出すと人差し指の横っ腹に当てた。

「あ」

レミリアが小さな声を上げた時にはもうナイフで小さく押し切っていた、たちまち指から血が溢れる。

「そこまでしなくてもいいんだけど」

「いらぬのか」

「勿体無いから頂くわ」

それを聞いて川上は右手を伸ばし人差し指を差し出す、レミリアは舌を出し指先から落ちた血の雫を受け止めた。

レミリアはそのまま指先にチュツと口付け、両手で彼の手を包む。

剣を握っている割りにはたいして大きくない手であり、武骨には見えない、しかしわかりにくい指の付け根の関節は潰れている、異常なのは掌が硬く冷たい鋼を思わせる感触だった。

また、うつすらとした刃物傷が幾つか浮かんでいる、それだけだ、外見的にはタコもなく特徴はない手、触った感触はおかしいが。

「ん…」

レミリアは掌まで伝ってしまった血をゆっくりと舌でなぞって舐めとる、幼い容姿でありながらその仕草には色香を感じさせる。

そのまま川上の指先を啣え傷口を吸う、血を吸い出される感触に川上の背に寒気に似たものが走った。

そしてレミリアは指先を解放した、レミリアの舌先と川上の指先の間に銀の橋が架か

りぷつりと切れた。

指先は完全に血を舐めとられまた、新たな出血も止まっていた、というか結構吸い出されたのか指先の感覚がなくなっていた。

「(一)馳走様」

レミリアはそう言いつつハンカチで口元を拭い、また川上の指先も手ずから拭った。

「味はどうだ」

川上は興味本意でそう聞いてみた。

「正直…普通ね」

レミリアはそう微妙な反応を漏らした、結構血も個人差が大きく人により味は大きく変わるが、川上の血は不味くはないが美味くも無かった、普通としかいいようがない。

「そうか」

「味が良ければ使用人兼食料にもなれたんだけど」

どうでも良さそうな川上の返答にレミリアは微笑んでとんでもない事を言う、吸血鬼風のジョークだったろうか、あるいは本気かも知れない。

「それは残念」

全く残念そうでは無かったが、これも皮肉なのか本気なのか分かりかねた。

パシリ、と川上はボードに石を置いた。

「あつ」

それで川上の黒の石が大多数になる、今回の勝負はそれで決した。

咲夜は一人自室の鏡の前に居た。

その鏡は妙なもので、真ん中上よりを中心に来の字になるように放射状にマーカーで線が引かれていた。

それは咲夜が鏡の前に立つと中心点が咲夜の首の付け根、正中線にくるように引かれている。

咲夜はスカートの下、太腿のホルダーに納めているナイフを抜く。

その炭素鋼で出来た刃の切れ味を確かめるとナイフを順手に持つ左手、左足前の半身になる。

ふっ、と息を吐きつつ、まず各線をなぞって中心点に向かうような刺突を八本繰り出し最後に真真っ直ぐ中心点に向かって突く。

続けて線にそって流れるような斬撃を八本放つ。早く、かつ線から外れない正確な斬り。

咲夜は小手先ではなく全身の連動で最適化された斬撃と刺突を暫し鏡に向かい流れの中で途切れなく繰り出し続けた。

ふ、と小さく息を吐き咲夜はナイフを止めた、手の内で半回転させてナイフを逆手にスイツチし、また半回転させ順手に戻す、手の内でナイフが吸い付くようないつもの感覚。

そのままタタンとその場で素早くステップを踏む、革底のブーツが軽快に踊る。

「……」

少し感覚に足がついてこない気がする、最近練習不足だったのが祟ったか。

暫しステップを繰り返しフットワークを反復して練習する、武道というより格闘術よりの軽快なステップだが、軸足に一旦蹴足を引きつけて鋭く四方に方向転換するフットワークはどの格闘術のものとも違う。

それはバトミントンにおけるチャイニーズステップと呼ばれるそれに近かった。

やはり途切れなく、しばらく繰り返して咲夜は足を止めた、少し息が荒くなっている程度で顔色は涼しい。

久しぶりに対人練習もやっておこうか、咲夜はそう考えた。

といつても咲夜の練習相手になる者など限られている、いつもこういう時は武の心得のある美鈴に頼んで。

いや

そういえば今は美鈴だけでは無かった。

フランは唾えていた指を解放した。

「こうやって直接吸うのって初めてかも、量少ないね」

「で、どうだ？」

川上は聞いた、フランはんぐ、と少し考え。

「思ったより美味しくないね、普通かな？」

「…そうか」

フランの感想に釈然としなないという風に見える、彼は姉妹二人に一体何をやっているのか。

「何やってるの」

横からかかった声はいつの間にか現れた咲夜のものであった。

「別に」

「味見」

川上とフランは同時に答えた、まあ二人が奇行に走るのも慣れたもので咲夜は軽く流す。

「妹様、ちょっと川上をお借りしてもよろしいですか」

「いいよ、ちゃんと返してね」

フランはそう答えて背を向けスタスタと歩き去っていった、移り気なものである。

「ちよつと付き合いなさい」

「わかった」

端的なやりとりで咲夜は川上の手をあつさり借りる事が出来た。

第74話

「(ハハ)でいいわね」

川上を連れて出た咲夜が呟く、川上は懐から煙草を取り出して啜えた。

咲夜はナイフを取り出し川上に放った、川上はハンドル部を握りキヤッチした。

「刃引きか」

呟いて川上は煙草に火を付けた、刃長15cmほどのストレートポイントのナイフだが刃は引いてあり切れない、切っ先も丸めてある、訓練用であろう。

「模擬戦、軽く相手して」

「わかった」

軽くだな、と小さく呟いて。

「準備はいいの？」

「殺しにきた敵の前で準備体操出来るのならな」

咲夜の問いに川上は紫煙を吐き軽口で答えた。

「なら始めましょうか」

咲夜は左手に川上に渡したのと同じ刃引きを順手に握り半身に構えた。

「ああ」

川上も指に深く挟んだ紙巻で最後に深く一服して、唐突に火のついた煙草を咲夜に向かつて弾いた。

しかし咲夜は一切反応しない、煙草は火口が咲夜の胸元に当たり服を焦がす前に地面に落ちただけに終わった。

「貴方のその手のやり口も見慣れてきたわ」

事も無げに咲夜は言うが川上は何も答えない、無造作に下げている左手の中でナイフを半回転させて順手にスイツチし咲夜に対し左を前に僅か斜に立った。

川上もあえて左構え、左利きの咲夜にとつても互いにサウスポーというのはあまり経験がないかも知れない。

咲夜は一步で間合に入ると前に出したナイフを軽くちらつかせる、威嚇でもあり牽制にもなる。

川上が誘いに乗り下からすくい上げるように咲夜のナイフを握る左手を狙ったが当然軽く腕を引くだけで躲され即座に咲夜が残った川上の左手を狙い小手の返しで小さな斬撃を行うがこれも川上は躲す。

さらに咲夜は踏み込み深めにまだ前にある川上の左腕に右から左へと鋭く切り込むが、川上が右サイドに一步入りつつ右手で小手を抑え斬撃を捌いた、咲夜もすぐ構えに

もどる。

その構えに戻る間隙に川上のナイフが深く咲夜の喉元に迫るが咲夜も余裕を持って右サイドステップで躲し、川上の引き手に合わせてフェイントを一つ入れる。

ナイフに限らず刃物相手に真つ直ぐ下がるのは自殺行為、ナイフにおいては相手の腕の裏に回るのがセオリーであるが、お互いその程度承知である。

咲夜と川上のナイフの応酬は上から見るとお互い反時計回りに行われていた、川上が切り込めば咲夜は避けつつ、首筋にあからさまに隙を見て誘いだとわかりつつもナイフを伸ばすと川上のナイフで止められる。

そうしてお互い大振りせず細かい切りをネチネチと繰り返し合う、咲夜も川上もお互い小手や拳に幾つか斬撃を受けていた。

ナイフは一撃必殺である必要はない、ようは相手が嫌がる事をしつこく続けるのがセオリーだ。

致命的ではないが小さく捌ききれない切りを細かく当てていき、手傷を増やしていけば相手は出血による血圧低下で自ずと能力が低下していく、そうなれば勝ちは見えてくる、相手が手傷に焦りを見せて慌てて大振りしてきたところを仕留めても勝ち。

ここまででは、やや咲夜が手傷が多い程度でほぼ互角、もちろん刃引きなので実際に傷や出血があるわけではないが。

しかし

「解れてきたから私も一段階上げるわ、貴方も遠慮しないで」

「わかった」

最初こそ奇襲を仕掛けたが、川上もあくまで訓練相手として咲夜に合わせていたのだが、咲夜にとつてはもう少し高度な訓練がしたかったから川上に頼んだ。

とたんに、咲夜の動きが変わった、一段階と言ったが動きと反射のキレが明らかにそれまでと数段上になり、フットワークからのフェイントを混ぜたコンパクトで鋭い斬撃が川上を襲う。

一方、川上の方は一見して早さや鋭さが変わったようには見えない。

しかし何故だろう、明らかにそれまでと段違いとなった咲夜の斬撃が一切当たらなくなった。

咲夜はフットワークとトラップینگと呼ばれる捌きの技術で川上のナイフを外す、が幾つか斬撃を浴びてしまう。

対して、川上は咲夜のナイフを体捌きと軽く手で抑える程度で全て外す。

変だ。咲夜はそう思った、当たる間合いだと思ったのに届かない、逆に川上のナイフは間合いの外だと思ったのに伸びてくる。

ふ、と咲夜のナイフを外しつつ川上がインサイドに深く腰を落として入り身してく

る、そのまま足を細かく切られる、足は戦鬪においては命である、咲夜は嫌がつて斬り払いつつ斜めに飛ぶが、やはり間合いが狂つてるのか簡単に捌かれてしまう。

やっぱり純粋な体術の技量では敵わない、咲夜はそう思った、しかし。

「奇妙な動きね、こつちが空回させられてる気分だわ」

「そう思わせたならこちらのモノ」

油断なくナイフを構えながら感想を述べた咲夜に川上は言った。

「純粋に強い、手強い、そう思わせるのが強者つわもの」

しかし、と続ける。

「一方相手に、こいつ何か変だ、妙だぞ、そう思わせるのが曲者くせもの」

なるほど、川上ほど曲者という形容詞が似合う男も居ないな等と咲夜は思った。

「元来君もこつち寄りだろう」

そう、咲夜もまた時を操るといふ奇術師でありトリックスターであった。

咲夜は踏み込みナイフを振るうがやはり軽く捌かれる。

「まず自分と相手の顔の距離で間合いを測る癖を抜く事だ」

錯覚、人間は相手との目線の距離で間合いを取ってしまう、咲夜は言われてから川上が腰を落とす事を途中から多用しだした事に気付いた。

「なるほど」

咲夜はさつきから間合いが狂うトリックのひとつに舌を巻いた、腰を落としてつつ入り身すると顔の距離が変わらないため距離も変わつてないと錯覚する。

だが咲夜とて奇術師、川上が曲者としての常套で来るのなら咲夜もその一手を使わせて貰うのみ。

咲夜はナイフで牽制しながら機をうかがう。咲夜はこれまで川上に対して上体のみしか攻撃していないに加えてナイフしか使っていない、これが布石となる。

瞬間、咲夜は川上の斬撃をフットワークで外しながら首筋に鋭くスラツシュを浴びせんと

フエイントを入れた。

ミスデイレクション。上と見せかけて下、咲夜の前蹴りが川上の金的を狙う、もちろん寸止めするが。

が、寸止めの必要はなかった。川上は左に体を引きつつ右ももで蹴りを捌いた。

そして蹴り足は戻せなかった、川上は左のナイフのブレイドバックで咲夜の蹴り足をアキレス腱辺りで捌き上げつつ入り身して右の手刀を咲夜の顎下に添える。

あ、これはマズイ。そう咲夜は思った。

死ぬ。そう咄嗟に予感して自由な両腕で後頭部を抱えるようにして顎を精一杯引き頭を守る。

が、川上は本来なら後頭部から容赦なく落とす所を途中で技を抜いたので咲夜は仰向けに倒れるだけに終わった。

模擬戦である事も忘れ咲夜は本気で殺されるところでしまった。

「いかに虚実を使つても勝とうと色気を出せば相手には伝わる」

咲夜は後ろ返りで体制を立て直し、ナイフを構えた。

咲夜が先手を取りナイフではなく右の掌打を打つ、川上はやはり腰を落としながら入り身してくるが、咲夜はあえて懐に誘つた。トリックが割れている以上咲夜は錯覚には引つかからない、顔ではなく足の位置で距離を測る。

そしてこの至近距離から川上のナイフを足に受けながらも左のナイフで首筋に放つ、足を切らせても首を切れば勝ち。

が、川上は受身のひとつ縦流れでそのまま仰向けに倒れ咲夜のナイフを躲す、戦闘中に自ら倒れるというのは下策に見えるがそうも言えない。

相手にとって足元というのは実は大きな死角の一つである、そして倒れた川上は咲夜の足に自身の足で脚絡みを掛けて倒す。

文字通り足元を掬われ反転しながらうつ伏せに倒された咲夜は咄嗟に前受身を取つたが、川上は脚絡みを掛けたまま座構えになり咲夜の足を固めた。

激痛に咲夜はすぐに床を叩きタップする、それを見て川上は足を解放しトンと軽くナ

イフの先で咲夜の背中、腎臓の上を突いて立ち上がった。

咲夜も立ち上がる、全く、これが実戦なら何回殺されたものかといつそ清々しく思いながら。

何度目かになる仕切り直し。

「次で最後にしよう」

「ええ」

川上の言葉に咲夜は頷く、川上は半身になりナイフを下げた。

咲夜は気付いた、川上が右にナイフをスイッチしている、その瞬間川上のナイフが下から切り上げてくる起こりを捉えた。

川上の右のナイフは下から来て、咲夜の左のナイフはそれより早く川上の右肩を貫ける、考えるよりも早く反射的に咲夜が左の突きを川上の右肩に放った。

刹那、川上は後ろの左足を開き轉身しながら左手で咲夜の小手を取った、左を出す動きで川上の右肩は引かれ咲夜のナイフは抜かれた。

そのまま川上の轉身と体を落とす事で咲夜は突きの勢いをそのままに前に投げ飛ばされた。

新陰流剣術、一刀兩段の崩し技。^{アレレンジ}

咲夜は前返り受身を取って立ち上がり、一つ頷いた。

やはり格上相手と手を合わせるのが一番勉強になる。

川上を手の内でナイフを反転させハンドルを咲夜に差し出した。

「いい稽古になった」

「こちらこそいい練習になったわ、ありがとう」

咲夜はナイフを受け取り返礼した。

「もう少し付き合ってくれない」

咲夜はナイフを収めながら微笑んだ。

「お茶、飲むでしょ」

「頂こう」

川上は煙草を啜えつつ口の端に僅かに笑みを浮かべ答えた。

第75話

「いやあ、川上さんが来てくれたおかげで私も休みが取れるようになりましたよ」

美鈴は機嫌良く川上の手を握りブンブン振りながら言った。

「それはメイド長に言え」

今日は門を任される事になった川上はそう言った、彼自身が持ち場を決めている訳ではない、がしかし川上がいる事で美鈴に暇が出来るようになったのも事実。

「あはは、そうですね咲夜さんあれで優しいですから」

機嫌良く美鈴は言った、今日は昨夜から門の前で立ちっぱなしであり徹夜明けのテンションなのだろうか、いや実際は仮眠を取りながらだった。

「じゃあ門は頼みますね、今日はゆっくり眠れそうです」

「ああ」

気楽に言つて美鈴は館の中に戻ろうと門に手を掛け

「川上さん」

「頼みますよ」

さっきの言葉を繰り返した、先程とは違い言葉に力がある。

「了解した」

それを聞いて美鈴は門をくぐり立ち去っていった。

川上は使用人用の礼服に腰には安定、背中に野太刀という出で立ち、今日も陽が照って暑くなりそうだった。

数時間後、川上は野太刀は壁に立てかけていたがずっと立ったまま瞑目し門に詰めていた、何もせず立っているだけという仕事はある意味極めて過酷であるが見事にそれをこなしていた。

「あれ、門番が変わってる？」

妙に辺りが涼しくなったと思ったらふと子供の声が聞こえて川上は眼を開けた。

そこには見覚えのある妖精二人がいた、氷精のチルノと大妖精だった。

「こんにちは」

「こんにちは」

大妖精が控えめに挨拶して、川上もそれに答えた。

「もしかしていつもの門番はクビになったのか?」

「いや、いつもの今日は休みだクビではない」

勝手に驚愕しているチルノに川上は端的に事実を伝える。

「あんただれ？どつたでみたよーな」

「チルノちゃん、この前湖で会ったえーと、刀の人だよ」

チルノは川上を忘れていたようだが、あのインパクトの出会いで忘れるとは馬鹿なのか大物なのか。

「あー、おっさんをかいぼーした人か」

「そういえばお名前なんていうんですか？」

「川上という、よろしく」

なんとか思い出したチルノと名を問いかけてきた大妖精に川上は名乗る。

「要件は？」

「門番と遊びにきた！」

川上と問いにチルノは天真爛漫に答えた、やたらと元気である。

「門番は寝ている」

自分も今は門番なのだが川上はそう答えた。

「じゃああんたでもいいわ」

「チルノちゃん」

色々と恐れを知らないチルノに大妖精は思わず静止の声を掛ける、向こう見ずなチルノの勢いは眩しくすらあった。

「仕事中だ」

「なんの仕事？」

「門番」

「寝てるだけの仕事ね！」

「…」

もはや言葉も出ず、川上は煙草を啜えて火を付けた。

「すみません…」

大妖精がフオローのように謝るが、彼女は川上に対して若干の怯えが感じられる。

川上は長く紫煙を吐き、大妖精に手招きをした。

大妖精はおずおずと川上に歩み寄る。

「食うか」

川上は懐から軽食として携帯していた干し肉を大妖精に差し出した。

「はあ、頂きます」

とりあえず大妖精は断るのも何だと思ったのか干し肉を受け取り小さく一口噛んだ。

「あ、美味しい」

咲夜手製の干し肉である、塩と香辛料の塩梅が絶妙であり噛めば噛むほど旨味が広がる一品、川上はこれを気に入っていた。

「あたいにも！」

強請るチルノにも川上は干し肉を一切れ啜えさせた。

「それはやるから遊ぶならそこらへんで遊んでいろ」

そうしてくれば川上も助かる、チルノが近くにいと涼しいのだ。

「なあ、またかいぼーやろうよ」

「検体がないだろ」

全く突拍子もないチルノの言葉に川上は突っ込む、生物学にでも凝りだしたのだろうか。

「けんたい？」

「チルノちゃん、動物が必要だよ」

「カエルならあるぞ！」

そして取り出したるは12cmはあろうかというウシガエル、そんなもの一体何処にし
まっていたのか。

理科の授業じゃあるまいしと思いつながら、川上はカエルをひっくり返すと四肢の付け
根を飛針で貫いて地面に貼り付けにした。

ポケットから折り畳みナイフを取り出し片手でブレードを起こす、刃長6cmほどの刃
はカミソリの如く鋭利に研がれている。

川上はそれを大妖精に渡した。

「喉元から股まで切りさげろ」

「私ですか？」

「内臓まで切らないようにナイフを入れる」

「わかりました」

特に異議も唱えずに大妖精は地面にしゃがみこみ、カエルにナイフを当てる、適当に加減して切つ先を入れると淀みなく切り落ろした。

「開けばいいんですか？」

「ああ」

大妖精は川上に聞くとナイフで腹腔を切り開き内臓を露出させた、赤い血が溢れる。

「おー、大ちゃんうまいな」

確かに大妖精は容姿は幼いがナイフを扱う手際は素人のそれじゃない。

「魚くらいならよく捌くから」

大妖精ははにかんで言った、実は彼女は料理が特技である。

「で、どうするんだこれ？」

「適当に引き摺り出して切り分けてみるなりして構造を調べろ」

言われてチルノは楽しそうに大妖精に切ってもらいながら内臓をつまみ出し、これは

何だ、何に使うんだと、好奇心旺盛に川上に聞く、川上は干し肉を齧りながらそれに適当に答えた。

一時間程して川上はまた門前に立って瞑目していた、チルノと大妖精は遊ぶようにカエルで勉強して帰っていった、チルノが帰ると暑さが際立つ。

ふと、川上は眼を開けた、また来客らしい。

ふわり、と地面に降り立ったのは見覚えのある白と黒の魔法使い。

「よう、今日はお前が門番かい？」

曲がりなりにも年上の男に対しても蓮葉な口の聞き方をするのは魔理沙であった。

「こんにちは」

「こんにちは、相変わらずうまくやってるみたいだな」

川上の挨拶に応えつつ魔理沙はそう言った。実際常人なら一カ月もせずに精神か肉体を壊しそうな職場である。

が、魔理沙はこの男が常人ではない事は分かりきっている。

「用件は？」

「何時も通り、本を借りに来たただけだぜ」

それを聞いて川上は右足を一步だけ前に出した、それだけだったが魔理沙は背筋が冷

たくなった。

まさかこいつ、門番として働くつもりか、そう思った。普段が美鈴なだけに魔理沙は油断していたのだ。

「なんだ、やる気か？」

魔理沙は両手で箒を上げて言った、まずい、約四間の距離、これでは、そう思いながら。

「飛べ」

「は？」

川上は一言そういい、魔理沙はその言葉の意味を理解するのに少しかかった。

「意外だな、見逃す気か？」

「見逃すわけではないが、俺には飛ぶ相手には目も手も届かない」

建前もいいところである、実際この間合いなら川上は魔理沙が飛ぼうとしたところで瞬き一つ分で斬り伏せる事も捕縛する事も出来る。

魔理沙は思わずくつ、と笑った。いつも涼しい顔しながら案外に不器用な奴だ、何処かの誰かと被る。

「なら、お前の手の及ばない場所から入るしかないな」

そう言い残して魔理沙は地面を蹴ると箒に跨り上昇し、門を超えていった。

川上は無言で壁際まで戻り煙草に火をつけた。

——後日、紅魔館正門前

今日もまた門番として立っていたのは川上だった、本日は曇り空、川上は胡桃を握り合わせて手の内を鍛錬しながら仕事をしていた。

「よう、今日もお前が門番かい」

そして今日も空から軽快に降り立ったのは魔理沙だった、川上が門番なら空から進入すればいいだけだと分かっているがなぜ川上の前に立ったのか。

「こんにちは、用件は」

「本を借りに」

魔理沙はニヤリと笑って答えた、何故川上の前に降りたか、それは彼女が負けず嫌いだからに他ならない。

「今日も飛んでいいののか？」

少し挑発的な口調で言うのと、それに応じるように川上は無言で魔理沙を見据えた。

「…だよなあ」

二回目はないだろうと思ってた、底冷えするような暗い眼で見据えられて魔理沙は思わず膝を折りたくなるのを堪える。

判断は早かった、左で迎撃出来るよう箒を構え右を八卦炉を取り出さんと懐に入れ

た。

——そして

「捕まえてきた」

「捕まっただぜ」

川上は片手で背中に回した魔理沙の両腕を捕縛しながら突き出した。

図書館にいたパチュリーに。

「いや、捕まえたのはいいけど、なんでここにつれてくるのよ」

パチュリーは半眼で突っ込む、色々おかしかった。

「具体的に捕まえたらどうしろと言われていないので、それとも斬っても良かったか

？」

「わかったわ、後は私に任せなさい」

本を閉じながら投げやりにパチュリーがそういうと川上は魔理沙を解放し、任せると

一言残して立ち去って行った。

「なあ、あいつ実はいい奴なのか？」

「ええ、分かりにくいですけど川上さん優しいですよ」

ちようど紅茶を持ってきた小悪魔が微笑みながら、魔理沙に答えた。

「優しいねえ」

優しいってなんだろう、思わずパチユリーは哲学的な思考に陥ってしまった。

第76話

「着いたぜ」

魔理沙の言葉に川上は箒から飛んで軽く着地する。

「ふうん」

川上は遙か上空、白玉楼前まで魔理沙に乗せてきて貰った、目の前には石段が永遠と上まで伸びていた。

「長いな」

「だな、飛んでくか」

「いや、歩いてく」

川上の返答に魔理沙は少し意外そうに見返した、この何段あるかわからない石段をわざわざ登るとは。

「物好きな奴だな、じゃあ私は適当に先に行つてるぜ」

「ああ」

そう言つて魔理沙は箒に乗って石段を飛んで遙か先に言つてしまった。

川上は煙草を啜え、火を点けると石段を一步づつ登り始めた。

彼が石段を歩いていく事にしたのには大した意味はない、それも趣きがあるかと思っただけだ。

それを言えば川上がそもそもここにいるのにも大した意味がない、冥界とやらに人間が行けるというのに興味を惹かれただけだ。

なので魔理沙に足になってくれなしかと頼んで二人でここに来たというわけだ。

川上は段差を一步一步登りつつ、思う。独特な空気だ、単純に言えば涼しくて快適。

そして、静かだった。生き物の気配も無く音もしない世界。

魅力的ではないだろう、しかしこの侘しさにこそ美を感じるというのは如何にも和の美感ではないか。

しかし

一時間も登った頃だろうかようやく白玉楼の中々広大な門が見えてきた。

肌にはピリピリとした感覚、どうにもここにも守人はいるらしい。

川上は石段を登り切りふ、と小さく息を吐いて門をくぐった。

瞬間横から襲いかかってきた銀閃を川上は体で座構えに沈みつつ避けると同時に右肩越しに体全体を使つ野太刀での抜き打ちで相手の足を払う。

相手も一刀を送った直後だというのにその一撃を軽く跳躍してやり過ごした。

川上と相手は同時に刀を返して次の一刀を放っていた、相手は首を跳ねようと横薙ぎ

に、川上は斬ってくる相手の小手を断とうと真つ向に。

瞬間、相手が僅かに拍子を遅らせ、結果川上の刀は相手の小手を捕らえず剣を切り下ろしたそのまま川上は膝を折敷、相手の刀も刀の髪を数本飛ばしただけで抜かれた。

剣の一つの境地である相打ちならぬ相抜き、二人は互いに後ろに飛んだ。

とき、と軽い音を立てて川上の野太刀の鞘が玉砂利の上に落ちた。

川上は目の前の襲撃者を見る、身長は150cm台の前半だろう、少女だった。

艶のある白髪をポブカットにして黒いリボンをしている、白のシャツに緑のブレザーに短いスカートという出で立ち。

しかし手には少女の身の丈を超えるほどの反りの浅い長刀を構え、腰にはもう一振り小刀を携えている。

白玉楼の庭師兼剣術指南役、魂魄妖夢であった。

奇しくも長刀と腰に刀という武装は川上とまるで鏡合わせのようだ。

見かけは愛らしい少女だがこの世界で見かけで判断する事ほど愚かな事はない、そして川上は良くも悪くも見かけで判断するという基準がなかった。

いや、見た目の問題ではない、今の数合での彼女の剣の冴えは・・

そして、妖夢もまた川上を見据えて

惚けたように表情が消えた。

妖夢は説明のつけようもない危機感に襲われ、全力で不意を打ったが即座に応じてきた謎の相手。片手に自身の楼観剣と同程度の尺の刀を掲げて色の無い瞳でこちらを見ているその黒衣の男。

その男の瞳に見据えられた時ドクリと一つ胸が跳ねた、体に熱が回り頭の中にふつふつと湧き上がってくる妖夢でも言いようのない感情に突き動かされるように

楼観剣を八相に構えた。

川上も応じるように半身になり野太刀を上段に構えた。

距離はお互いの間合いに少し遠かった、切り間の広さで言えば剣の尺はほぼ同程度だが身長がある分川上が有利。

妖夢は亀の如くゆっくりと歩み、間合いを詰めていく、地味だが遅いスピードで足を運びながらも体幹も構えも一切崩さない、並の技量では不可能だ。

少しずつ少しずつ距離を詰めていく、先に間合いに届くのは川上である、そのアドバンテージの距離に入って果たし川上はどう出るか、妖夢は策があるのか。

後少して相手の間合いに入る、その微妙な距離に妖夢が踏み込んだ時

川上の野太刀が妖夢の左肘を狙い振り抜かれた、咄嗟に妖夢は肘を引き付け躲す。まだ間合いではなかったのに川上の剣は届いた、予想だにできなかった上に起こりも全く見えない剣、何故妖夢は避け得たのか。

何も不思議な事ではない、今妖夢にとつて目の前の男の事が全てなのだから。

川上が剣を振り抜いたその小手を狙いすかさず妖夢は剣を送った。

しかし川上も振り切ったところから自然な体捌きで逆の脇構えに移りつつ妖夢の剣を抜く。

その構えからくるのは、妖夢は自身の右脇腹にピリツと熱を感じ川上の逆袈裟の切り上げを読み、その場で降り敷いて座構えからの真上への切り上げでこちらを切りにくる小手を断たんとする次の自身の行動を客観的に予測した。

しかし、川上は脇構えから自然と剣を取り揚げ逆袈裟ではなく真つ向に斬ってきた。

川上の動きに合わせ剣を下から跳ね上げんともじりかけた妖夢は、決定的に虚をつかれ

しかし迷いなく前へと飛び込んだ、川上の切り下ろしを下から拾い上げるように受けとめ、鏢元に落とし込んだ。

「この私が鏢迫りに甘んじるなんて、いつ以来でしょう」

妖夢は初めて口を開いた、その口調は苦渋や屈辱ではなく歓喜の色に染まっていた。

川上と妖夢は鏢元で相手の力に対して押し合ひではなく相手を崩すための行動な抜き合ひを油断なく行う、相手が押してきたら自身は抜き、即座に押すが相手も抜く。崩れた所を仕留めんとす。

そのまま二人は鐙を合わせた剣を下段に回し互いに半身になり体を合わせて肩でも迫り合う、超至近距離から二人の視線が交わった。

一瞬川上は後ろの踵を浮かせ小さく、しかし強く地面を踏み、その反作用を肩で妖夢にぶつけ弾き飛ばした、暗勁と言われる技法か。

即座に川上は追撃せんと剣を繰り出し、妖夢は飛ばされた勢いに逆らわず倒れこみつ追撃せんと剣を繰り出した。

川上はほんの一步が踏み込めずお互いの斬撃は空を切る。

妖夢は倒れながら後ろ返りをして立ち上がり剣を青眼に構える、川上も剣をこめかみの横で天に真つ直ぐ屹立させる八相の変化に構える。

「不謹慎ですが、とても楽しいですね」

触れれば死ぬ白刃を応酬しながら妖夢は笑みすら浮かべてそう言った。

「そうだな」

川上也答えた。

「一生続けばいいと思ってしまう」

思いは通じた、妖夢の頭は激情とも言える多幸福感が溢れていた。

そう、他に何もいらぬ、今この瞬間があればいい、妖夢もまたそう思ってしまった

のだ――

第77話

白玉楼、まるで冬の山のように静謐な空気の中で二人の剣客が対峙していた。

青眼に長刀・楼観剣を構える白髪の少女は魂魄妖夢。

こめかみ右横で剣を天に屹立させるように無銘の野太刀を構える黒髪の青年は川上。

川上は後ろの足を爪先を浮かせるようにして踵で足を右斜め前に半歩入れる。

最初に届かない切り間を相手に悟られないように盗んだ技法だった、上体を一切揺らさず足を僅かに入れる、玉砂利の上で音もさせずにそれを行うのはどれほどの高等技術か。

これにより、川上は上体を動かさずに斜め右前へと一寸以上の間合いを盗んだ、青眼に構えた妖夢の左小手が狙える。

たかが一寸、僅かに3センチ、しかし剣術の妙は一寸の間にあると言われる程たかが一寸は大きい。

だが、妖夢は青眼を剣尖を右に寝かせて角度をつけ剣を川上の首筋から左肘につけるように構えて川上の動きを抑えた。

どうやら間合いを盗む技法は気付かれていたらしい、大した慧眼だと川上は感心する、これでは左小手に打って出ても後の先で負けるだろう。

しかし、妖夢がそれに気付いたのは道理である、誰だつて一心に関心を寄せている相手の事は小さな事でも気付くものだ。

妖夢は一步足を進め、川上を圧倒する。斜めに首筋に向けられた剣尖が川上を威圧する。

川上の八相の変化に構えた剣の下から隠れるようにつけられた斜めに角度をつけた青眼の剣、肘も抑えられており強引に打っていけず、このまま間合いを詰められたら詰みだ。

負け、か？

いや

即座に川上は活路を見出す。お互いに剣が届く切り間、剣を下からつけられ頭は深く打てず、小手は後の先が待つており斬れない。

だが相手の剣よりさらに下に打てる場所があった、相手が前に出してる右脚、その脛めがけ川上は腰を低く落として斬り込んだ。

妖夢はそれも読んでいたのだろう、右脚を折り畳むように浮かせ脛狙いの斬撃を抜くと同時に剣を頭上に取り揚げ浮かせた右脚を地面につけると同時に川上の頭に真っ向

に斬り込んだ。

川上の反応もまた早かった、脛斬りを抜かれると同時に、頭を真つ向に割らんとする妖夢の斬撃に刀を下段から掬い上げるように真つ直ぐに相手の刀の鎬筋に自身の刀を付けてすぐ刀身を寝かせる事で鎬と反りの作用で相手の斬りの軌道を外した。

説明すれば長いが実際は瞬き一つ分の時間で行われた事だ、妖夢は自身の剣が外され、相手の剣に自身の中心を取られた事に即座に八相になりながら大きく下がった、絶好の好機であつたが川上はあえて追わずに見送つた。

やはり、この人は。妖夢の頭の中でずっと渦巻いてた感情がさらに熱を持った。

この人は強い、そしてふと先程からの感情が腹に落ちた感覚があつた。

精神的には年頃の娘としては何もおかしな事ではない。

最初なんだかよくわからなかつたのが腑に落ちたのだ、なんて事はなかつた、妖夢は気付くと言わずにはいられなかつた。

「私は魂魄妖夢」

「貴方に、惚れました」

少女を焦がす、この感情を恋情と言わずしてなんといいのか。

「だから、私を」

全身全霊を込め

斬つて。

「応^{おう}」

妖夢の内なる声に応じたのだろうか、川上は短く答えた。

そして二人は構えあつた、川上は上段に、妖夢は脇構えに。

そして次の一合はお互いなんの装飾もないシンプルなものだった、妖夢は跳ね上げの斬撃を川上は真つ向斬り下ろしの斬撃を。

結果両者の剣は交差する。

川上のコンパクトに斬り下ろした剣は、妖夢の跳ね上げんとする剣の柄中を捉えて押えていた。上手い具合に柄を握る妖夢の右と左の拳の間を押えていた。十文字と言われる勝口。

川上は柄を捉えた剣先に重みを乗せて妖夢の剣を制する、そして剣尖はそのまま相手の中心を捉えていた、一歩進めれば妖夢を突ける。

万事休すである、そして止めを刺そうと川上が突きこもうとした間隙

野太刀が弾け飛び川上の手を離れた。

足蹴、柄を抑えていた川上の剣尖が妖夢を突きにいかんとする僅かな間隙を縫つて妖夢は川上の小手を蹴り上げた。

川上の剣の手の内は指で強く締めるものではない。彼は剣を手の内で自在に操る事

を優先するため武器を握る手の内は雛鳥を包み込むが如く柔らかく握る。

しかし、それは時に手の内が甘くなりやすいという弱点になりうる、あるいは妖夢はそれすら気付いていたのだろうか。

そして立場は逆転していた、ほんの一瞬前は妖夢に王手がかかっていたのだが、得物が手から離れた以上今度は川上が絶体絶命であった。

妖夢は剣を振りかぶりつつ流れるように大きく下がりに、楼観剣の切り間を一杯に使い万全を期して

渾身の一刀を振り下ろした。

この一刀に対してどう躲しても、川上は死ぬ、横に捌いても即座に横薙ぎで倒される。まして長刀に対して後ろに下がってはほんの数秒の延命にしかない。

故に川上に躲すなどと意識は無かった。

死をもたらす白刃の下へと自ら踏み込んだ、正気の沙汰ではない、しかし活路はいっただってそこにある。

切り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ踏み込んでみよ極楽もあり

川上は潜り込みつつ深々と踏み込んで妖夢の柄と小手を両手で捉えていた。

無刀取り

しかし妖夢は怯まない、川上は下から妖夢の柄を捉え、妖夢は上から潰すつもりで自

重を全てかける。

そこには先程の鏢迫りのような抜き合いのような駆け引きなどなかった、妖夢は己が想いを全て込めてぶつけるが如く上から渾身の力をかける。

「ツエアアアアッ！」

妖夢の裂帛の気合いと共に柄を捉える川上に自重と丹田に満ちる力が上から襲いかかってきて潰されそうになる。川上もまた無声の気合いにて膝で地面から突き上げる力をぶつけて対抗する。

「臨」

川上が妖夢の力に抵抗しながら小さく呟いた。

「兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」

唱え終わると同時に川上は柄を捉えたまま轉身し投げた、妖夢は一回転して背中から落ちた。

そして致命的だったのは得物を手放してしまった事だった、楼観剣は川上の手の中にあった。

再三の立場の逆転、しかし妖夢は倒れ伏せ川上は既に剣を取り揚げているこの状況、もうさらなる逆は見込めないだろう。

川上はこの素晴らしい時間が終わる事に胸に何かがよぎり、しかし最後で最高の瞬間

の為に楼観劍を妖夢の首めがけ振り下ろし。

その時妖夢は相手の思劍いを一身に受ける事に最高の多幸福感を確かに感じていた――

第78話

「・・不粋な」

その声には川上には珍しく不機嫌そうな響きがあつた。まるで夢中になつてた遊びを中断された子供のような。

川上の繰り出した楼観剣は何時の間にか煙の如く現れた女性の持つ扇子で高い位置で止められていた。

「ゆ、幽々子様」

妖夢は上体を起こしてその女性の名を呼んだ。

川上は剣を下ろすと、害意がない事を示す礼法として楼観剣を背中に回した。

その女性はフリルと桜花の意匠があしらわれた独特な着物に身を包み、柔らかく癖のある桃色がかつた髪にナイトキャップのような帽子を被っている。

整つた顔付きはともすれば幼くも見える、柔和そうな表情だが全身に纏う雰囲気は底知れない深みがあつた。

この白玉楼の主であり冥界の管理人である西行寺幽々子だつた。

「駄目よお、妖夢」

幽々子は口を開いた、何処か甘く間延びしたような口調。

「年頃だから恋に夢中になるのはわかるけど、私は貴方に死ぬ事は許してないわよ」
全く緊迫感のない口調だった。妖夢には手厳しい言葉だった。

「め、面目次第もございません」

妖夢は慌てて片膝をついての古式礼を取り謝罪した。

「わかればいいのよ、でも貴方が殿方にあんなに夢中になるなんてねえ」

くすくすと口元を扇子で隠し小さく笑いながら幽々子は言った。妖夢は礼を取りながら顔をうつむかせて赤面する、我を忘れる程夢中になっていたのを自覚したのだから。

「・・・」

一方、幽々子に暗い眼を向けていた川上は訝しげな表情になっていた。

「こんにちは、西行寺幽々子といます。お武家さま」

そんな川上に反応したのか、幽々子はそう川上に挨拶した。

「こんにちは、川上という、武家ではない」

返礼だけして興が削がれたように川上は歩きだし、楼観剣の柄を妖夢に差し出した。

「ありがとうございます」

楼観剣を返すと川上は跳ね上げられた自身の野太刀を拾った。

「あの刀、大丈夫ですか」

「ああ」

玉砂利の上に落とし、鑊迫りもしたが粘り強い刃のおかげで刃を合わせた時に刃が捲かれただけで、他は刃毀れもなかった、これなら簡単に直る。

鞘も拾い刀を納めながら川上は思う、そういえばまともに切り結んだのは何時以来になるか。

川上は煙草を取り出して火を点け深くゆっくり煙を吸い込むと一息ついた。

ふと気づくと幽々子が川上の顔を観察するように凝視していた。

「何だ？」

「あら、ごめんなさい」

川上に問われるとくすりと笑って幽々子は視線を切った。

「妖夢、中に案内してあげなさい。好きな人なんですよ？」

「い、いや、幽々子様！」

好きな人と言う発言に妖夢は赤面して声が裏返った。これはからかわれているのだらう。

「私は先に戻ってるわねー」

そう言い残して幽々子は何処かふわふわとした足取りで歩き去っていった。

そして二人取り残される、先程まで殺し合っていたのに、一変して冷静になると妖夢は勢いに任せ色々ともない事を口走った事に気付き居たたまれなくなる。

「(い、い)案内します」

「さっきの人は君の主か何かか？」

「はい、私は幽々子様の元でこの白玉楼の庭師として働かせて貰ってます」

自分で聞いておきながら妖夢の言葉にふうん、と川上はどうでも良さそうに呟く。

「綺麗な方でしよう、幽々子様は」

「・・・ああ」

笑顔で妖夢に問われ、川上は言い淀んだ。

綺麗も何も顔なんて見えなかったのだから仕方ない。

川上の眼には幽々子と名乗った存在が真っ黒な塊にした視えなかったのだから。

「よう、遅かったな」

屋敷内の一室に通された川上を見て、既に寛いでいた魔理沙が手の内で金属をカチャカチャ弄びながら言った。

「どうやら知恵の輪を解いているようだ、川上を置いて帰る訳にもいかず手持ち無沙汰だったのだろう。」

「今、お茶をお持ちしますね」

川上を部屋まで案内した妖夢はそう言って退室した。

「どうだ？あいつの事だからお前を見た瞬間斬りかかってきたんじゃないか」

「ああ、中々楽しめた」

魔理沙の言葉に川上は腰を下ろし、右横に刀をおきながら事も無げに答えた。

「ほんとにやったのか、相変わらずおかしな奴だぜ」

魔理沙は目線を手の内の知恵の輪に落としたままそう言ったが、魔理沙が言ったおかしな奴とは一体どちらを指していったのか。

「そうよお、それで妖夢ったらこの人に惚れちゃって告白までしたんだから」

何時の間にか煙のように室内に現れていた幽々子が楽しげな口調でそういう、魔理沙は目線を上げて一瞥して。

「まともじゃないな」

至極まともな感想を述べた。まあ幻想郷においてまともな精神を説く事ほど馬鹿らしい事はない。

また、魔理沙も他人の色恋にそれ以上口を出すほどヤボではなかった。

「お持ちしました」

妖夢が人数分の茶とお茶請けを持って戻ってきた、最初は居なかった筈だが妖夢は主

の事を見越していたのかちやんと幽々子の分もあつた。

「頂くぜ」

「ありがとう」

口々に礼を言い、緑茶に口を付けた。川上は一口飲み熱すぎたらしく湯呑みを下ろした。

「で、どうするの妖夢」

「はい？」

「この人の婿入りは何時にする？」

ちやうど自身も湯呑みに口を付けた所だった妖夢は茶を吹いた。とつさに横を向き誰にも吹きかけずにすんだがゴホゴホと咽せる。

お茶請けの煎餅をボリボリ齧っていた魔理沙はくくつと笑い、川上は聞いているのか熱そうにチビチビと茶を飲んでいる。

「ゆ、幽々子様、それは色々と」

「あら、女が一度殿方に惚れたのなら力づくでも自分の物にするくらいの覚悟が必要よお」

呼吸を整えて妖夢が反論しようとすると思幽々子は中々に過激な意見を言う。

「それは、一理ありますね」

そして妖夢も困惑すると思いきや若干脳筋気味な所があるせいか同意してしまう。女は強しとは良く言ったものだ。

「だ、そうだけ、川上」

けらけらと実に楽しそうに魔理沙は話の中心のはずなのに蚊帳の外にいる川上に話を振る。

「そういう考えは嫌いじゃない」

相変わらず茶をちびりと飲みながら川上は言った。欲しいものは力で手に入れる、弱肉強食、力が全て、なるほど単純明快でいいじゃないか。

「俺が欲しければ、斬ってみろ」

指先で横に置いた刀の鞘をコンコンと示し、口の端で笑い川上は言った。

妖夢はその言葉を受け、身体の震えを抑えるように片腕で自身の身体を抱いた、その表情は確かに女の顔だった。

どうにもこの二人では殺し愛になってしまうようだった――

第79話

どんなに綺麗でも それは人殺しの道具だよ――

「川上さんは流派は何ですか？」

白玉楼、客間。妖夢は川上に質問をしてみた、それに対して川上は昏い目線を返す。

「なんだと思う」

妖夢は流派を尋ねたのは流石に不躰だったかと後悔しかけたが、川上からは逆に質問で返されて、妖夢はしばし考えこむ。

「立合いでは水月を盗む技法、十文字の勝口等が見られました、これらは新陰流の特色です」

ですが、と妖夢は続ける。

「半身を基本とする構え、斬る色合いの強い太刀筋、丹田を出す姿勢、これらは新陰流とは大きく異なるものです、おそらく川上さんは他流の技法も崩して取り入れてものもと推察します」

ふむ、と川上は一つ頷く、妖夢は大きくは間違えてないようだと考えてさらに続ける。「半身の構えや最短距離を無駄なく移動する体捌き、剣撃に柔を多用する所から見ると

に、川上さんの流派は柔を中心として各種武器を扱う、合戦を意識した総合的武術流派かと」

「妖夢は慧眼ねえ」

感心したようなそんでもないようなほにやりとした口調で幽々子が言った。

「で、結局何流なんだ？」

肝心な所を魔理沙が突っ込むと。

「わかりません」

妖夢はきつぱりと言った、後一步はわからなかったようだ。

川上はやつと飲みやすい温度に下がった茶で喉を湿らせて言った。

「正解だ」

「しかし流派はわかりません、私の知りうるモノには該当するものはありませんでした」

「流派は名乗らない事になっている」

妖夢の反論に川上はあつきり言った。

「・・・当然の心得かと思えます、愚かな質問をしました」

武士にとつては流派を知られるというのは自身の強みと弱みを知られるも同然である、戦う以前に情報で負けている事に他ならない。

「いや、そうではない」

やはり不躰だったと妖夢が反省しかけたところで川上が否定をした。

「誰もが流派に属すれば流派に囚われる」

当然ではある、流派ごとに勝口も技法も心法も教習も全然違うのだから属する者はそのやり方に準じなければならない。

「流派に誇りを持ち、流派を守る者も沢山いる」

だが、この男の感心はそんな所にあるのではなく。

「突き詰めれば流派は武のアプローチの違いだ、骨子は同じ」

そう、骨子は同じ。

如何に殺すかから派生しただけ。

「だから俺のはただの術・でいい」

少し長く喋った川上は茶を飲み一息いれる。

「骨子・・・」

妖夢はつぶやく、彼の言う骨子は何なのか、それは剣を合わせた妖夢には分かる。

「それはどうか」

異を唱えたのは武術とは直接関わりない魔理沙だった。

「目指す所が同じだからと言つても本末転倒な方法論を唱える奴はいくらでもいるだ

ろ、流派の名は確たる方法論を持つているって証明になるんじゃないか」

「それも事実である、元々殺し合いの中から生まれた兵法が、心法や礼法、様々な物が付いてきた、やがてそれらに傾倒してしまった物もある。確かに武士として必要なものではあつたのだろう。

しかし、それらは本当に武に必要なのか？

そして現代に至つては腕を競い合う競技としての武道となるにいたる。

これは本来の武の目的を見失つてしまつていゝのではないか。

「それらしく言っているがあんた自身目的なんてないように見えるぜ」

魔理沙の言葉は的はずれだつたのだろうか？川上の目的とはそもそも何だつたのだろうか。

「魔理沙、それは違う。私達に目的等必要ない」

反論したのは川上ではなく妖夢だつた、なお、幽々子は話に置いてかれてこくりこくりと舟を漕いでいた。

「私達は剣を振るうだけでいい、理由など後付けなのよ、それでも敢えて目的をあげるなら」

「斬る事」

最後は川上が告げた。

「手段の目的化か、それこそ本末転倒だな」

魔理沙は肩をすくめ皮肉に笑った。

「全く」

自覚があるのかないのか伺い知れない川上が魔理沙の言葉を自認した。

「だが、シンプルでいいじゃないか、勿体ぶった建前を並べるより私は好きだぜ」

どうやら魔理沙も簡潔な目的は嫌いではないようだ。

何故なら彼女もまた幼い頃見た星を今も追いつづけてる少女なのだから。

川上は刀を持ち立ち上がった。

「庭を見せて貰っても構わないか」

「はい、宜しければ案内します」

「頼む」

そう簡潔にやり取りして川上と妖夢は退室した。

辻斬りコンビだな等と思いつつながら魔理沙も部屋を出た、二人を追うつもりはないよう

で廊下を歩いていった。

誰も居なくなつた部屋で、幽々子はいつの間にか眼を覚まして、冷めた茶を啜つてい

た。

「紫の忠告を聞いて正解だったわねえ」

曰く、近く来る男と妖夢は斬り合い殺される。だから良く見ててねと気軽な忠告。

「まあ、あの手の人なら妖夢は夢中になつちやうわねえ」

主として子の成長を見るような嬉しいような寂しいような思いを感じる幽々子は、実に人間くさい亡霊だった。

「ふうん」

白玉楼の庭、玉砂利の上を歩きながら川上は呟いた。

言つてしまえば永遠亭のような日本庭園、だが趣きは幾分違った。

永遠亭の庭は夏の緑の強い生命感を感じさせた。

対して此方の庭は侘び寂びの世界、庭木はある、しかし侘しく、寂しい、命より虚無感を感じさせる。

だが、趣きがあるのは両者とも同じだった、いや、川上という男に相応しく居ると絵になるのはどちらかというと・・

「庭の手入れは君が」

「はい、僭越ながら」

「見事なものだな」

「ありがとうございます」

妖夢は自分の仕事の成果を褒められて、嬉しそうに笑った、先ほど斬り合いをしていた時の狂気すら孕んだ歓喜の笑みに比べると年相応に見える爛漫な笑顔。

しかし、外見年齢と実年齢が一致しないのが当たり前この世界で年相応という形容はおかしいかもしれなかった。

ふと、妖夢は先ほどの会話を思い出す、この人にとっては武は・・

「一つ聞いても宜しいでしょうか？」

「なんだ」

川上の返答はいつも通りの抑揚のないものだったが、妖夢は問いかけた。

「川上さんは何故剣を取ったのですか？」

我々に剣を振るう理由などない、何事も斬る故に武。

しかし、理由はなくともきっかけ・・・はあったのではないだろうか、ふと考える、妖夢自身剣を取ったきっかけはなんだったか。

「子供の頃、友人がいた」

川上からの答えは意外とすぐに返ってきた。

「ある日、一緒に遊んでいる時その友人を殺した」

「・・それは何故」

「わからない、ただ無防備な背中を見た時に気付いたら、という奴で自分でも意識せずだった」

川上の言葉はいつも通り平坦だった。

「その時当たり前だが人は殺すと死ぬのだと知った、そして興味を持った」

「そして剣を取った、ということですか」

川上は頷いた。内容は中々衝撃的ではあるがきつかけ自体は有り触れたものと言える、要は興味本位だ。

「そうしたら中々に面白い、以来研練を続けている」

妖夢は思った、先ほど理由を問われた時、この人は斬る事と言ったが、果たしてそれは本心だったのか。

妖夢は何となく理解したのだ。斬る事、というよりもっと純粹にこの人は――

第80話

何故いけないのかと聞いても誰も明確には答えてくれなかった――

白玉楼、男女の前に別れの時がやってきた。

「もう、行ってしまおうのですか」

「ああ」

特にもう何も無いし、と小さく呟いたのは紅魔館使用人の川上である。

「あの、最後に一度だけでいいです・・頭を撫でてくれませんか」

そう、濡れた眼でねだったのは白玉楼の庭師兼剣術指南役である妖夢である。

その言葉を受け川上は左手を伸ばす、妖夢は眼を閉じた。

そして次の瞬間、妖夢は額を指で弾かれた、痛い、冗談じゃなく痛かった、と言うか脳が揺れて一瞬膝が折れた。

川上の指はコインや鉄球があれば所謂指弾すら出来る凶器である、妖夢は思わず額を抑えるが川上はくつくくと笑いながらタバコを啜えた。

妖夢が顔を上げた時、川上はシースに納められたナイフを一つ妖夢に渡した。

ナイフを受け取りひどい人なのか、と妖夢は眩く、そう、こういう人、妖夢が惚れたのは熱もなくただ鋭いだけの刃金のような人だった。

川上は踵を返した。

「あのーいつかもう一度、また・・」

「紅魔館」

言いかけた妖夢に川上は言った。

「俺はそこにいる、俺が欲しければ斬りたければ何時でも来い」

「っ、はい、必ず」

妖夢は再見の誓を口にした、川上は紫煙を一つ吐き、石畳を降りていった。

「おい、歩いて降りても帰れないぜ、私の事忘れてるだろ、乗れよ」

そして、魔理沙に突っ込まれていた、締まらない別れである。

そうして二人が去ったあと、妖夢は鹿の角の柄を握り、シースからナイフを抜いた。

現れた刃長15センチ程の鏡面仕上げの艶やかな刃、幻想郷では珍しい不銹鋼の輝き、その冷たいナイフに妖夢はあの男を思った――

「おかえりなさい」

「ただいま」

紅魔館に戻り、川上は廊下でバツタリ出会った咲夜に挨拶した。

「どうだった？」

「中々楽しめた」

「そう、それは良かったわね」

簡単な会話をして、二人はすれ違った。

「あつ、と」

ふと、背中越しに咲夜が何か思いついたように声を出し川上は首だけで振り向いた。

「何処かにナイフ落ちてなかったかしら？スタツグハンドルで鏡面仕上げのスレンレ

ス鋼でこのくらいのもんだけど」

いいつつ咲夜は手で尺を示していた。

「いや」

「そう、困ったわね、何処に落としたのかしら」

小さく川上が否定すると咲夜は片手を頬に添え困った様子を見せる。

どう考えても見つからない理由として最も怪しむべき男が目の前にいるのだが、完璧

なように少し天然なメイド長は素で気付かない。

「見つけたら拾っておく」

「ええ、お願い」

それだけ言って川上は自室へと歩いて行った。

「ねえ、貴女」

フランドールはいつものように暇を持って余しており、そして暇潰しに一人のメイド妖精を呼び止めた。

「は、はい、なんででしょう」

メイドは萎縮しつつ答えた、フランドールは無邪気な笑みを浮かべているだけだが、存在自体から何か立ち昇るような熱量がメイドをたじろがせた。

「私、暇、遊ぼう」

フランドールは区切った単語で希望を伝えた。

「あ、あの、私掃除がありますので」

そしてメイドは目の前の吸血鬼への畏怖からか、断ってしまった。

致命的である。まず、主人の妹の希望に対し出来ないと答える等論外。

そして、単純な力関係において圧倒的な相手の機嫌を損なう事などあつてはならなかった。

「へえ」

すう、とフランンドールの顔から笑顔が消えた。

「貴女、私と遊びたくないんだ」

そのまるで色のない表情と声にメイド妖精は自分の命運を知った。

「そういう訳では・・ありません、も、申し訳」

「じゃあいいよ」

震える声で弁明しようとするメイドの言葉を最後まで聞かずにフランンドールは無造作に歩み寄るとまるで金縛りにあったかのようにぴくりとも動けないメイドの首を左手で掴むと腕一本で持ち上げ宙づりにした。

首が締まりメイド妖精はもがき、フランンドールの腕から逃れようと両手で抵抗するが、妖精の細腕では吸血鬼の才智を越えた膂力をどうする事も出来るはずがなかった。

「貴女で遊ばせてもらおうから」

一点、弾んだ声でフランンドールはいつつつ思う、こんな折れやすい首を折らずに持ち上げられるなんて、自分は力の使い方が凄く上手くなった。

フランンドールは右腕でもがくメイドの腕を握り潰した。

「つつ~~~~!!」

ゴギョリと前腕の骨が粉碎する男と共にメイドは絶叫したが、首を絞められてる為声

なき悲鳴に終わった。

フランドールはそのままメイドの腕を引きちぎり無造作に千切れた腕を投げ捨て、ついで、右手をメイドの腹部に添えた。

「ツ〜〜ツ〜〜!!」

エプロンドレス越しに腹を無造作に引き裂いた、湯気の立つ臓腑がまろび出て床にびちやりと音を立て落ちた。

フランドールはメイドを床に無造作に落とした。

メイドはもう荒い息を吐いて臓腑の溢れる腹を無事な片腕で抑え丸くなるだけだった。

フランドールは口元を三日月型に歪めてしゃがみ、メイドの頭を掴み引つ張るように、力を少しずつ込めた。

「あ、あ、ああが」

みし、と首が軋み、メイドが恐怖と苦痛に声を上げる、フランドールがさらに力を込めるとメイドはまだこれほどまで力が残っていたのかと思うほどの凄まじい断末魔の絶叫をあげ、しかしゴキヤという音と共に絶叫は止んだ。

フランドールは堪えきれぬという風にクスクスと笑いながら、立ち上がり無造作なサツカーボールキックを放つと血塗れで元は愛らしかった顔を断末魔の苦痛で歪めた

メイドの生首が転がっていった。

一通り笑いが収まると、一変してフランドールは顔から一切の表情が消えていた。

「・・・つままない」

壊してる最中は楽しいのに終わってしまうと残ってるのは壊れた相手と血と屍臭で汚れた自分だけだ。

「つままない」

繰り返し返した、誰も、何も彼女を満足させるものは無かった。

フランドールはそういうものなのだ、彼女に並び立つものは後にも先にも何も無い、欠けているのだ、それは手に入らない。

フランドールも自分自身の事だ、薄々理解していた、諦めていた、彼女の生は一人旅である。

フランドールは一人だけ、回りにあるのは人形だけ、そういう世界だ。

フランドールは誰からも理解されず、フランドールも誰も理解出来ない。

足元の死臭を放つ残骸に目を落とす、妖精は死なないらしい、だからいくら壊しても大丈夫、死なない、ところで

「死ぬってなに？」

どうでもよい疑問を口に出しつつ、フランドールは歩きだした。

第81話

紅魔館廊下——

川上と相對したアニスは右手に模擬短刀を構えていた。

約一間の距離をアニスは膝の抜きによる起こりのない動作で即座に川上の懐まで距離を詰めて、体の小ささを利用して低い位置から川上の両太ももを切り流れで股間を寸止めで突く。

さらに、沈みこみつつ相手の脛にぶつかっていくように相手の足を掬い、川上を倒すと、相手の足の間に位取り、下腹部を模擬短で突いて止め。

そのまま下がると、川上も後返りで立ち上がる。

「概ね良い。倒した所から両足を制する位置への位取りは流れるように出来ればより良い」

川上は今受けた技のフィードバックをアニスを返す。

「君の体格では足を絡められて寝技に持ち込またら負けるからな」

川上はアニスに稽古をつけていた、最初は言ってしまう暇つぶしで始めた事なのだ

が、アニス自身が関心を持ったらしく、意欲的なのと存外に覚えがいいので、たまにやっている事であった。

川上自身は人に教えた事がない訳ではないがあまり機会はなかった、彼自身が内弟子だった時代は道場では実力はあれど最年少という事であまり指導側に回る事は少なかったのだ。

しかし、こうして改めて人に教えるというのもまた勉強になるものだ、川上はそう思った。

「あの、せんせー」

「何だ？」

「さっき、凄いい声がしたよ〜」

「そうだな」

川上はアニスの問いかけに頷く。

「どう思う？」

「何かあったのかなー？」

「間違いなくあった、それにあれは命の危険に瀕した時の声、場所は割と近く」

「つまり、ここら辺も危険という事だ」

「ふーん」

川上が平然と結論付けたのに対して、アニスも平然と返す。

「五感で感じ、危機を避ける、そういう危機管理能力は術や技より大事だ」

直進すれば危機があると理解してながら迂回もせず、まっすぐ歩く男が何を言っているのか。

しかし、理解していて直進するのと理解せずに直進するのでは大きな違いがある。

「もう一回」

川上は小さくそういうと、アニスは構えた、川上が適当な間合いに調節すると、アニスは先ほどの技で再び川上を倒す。

「せんせー」

「何だ」

アニスが川上の足の間に位取りした所で視線を廊下の先に向けて言った。

「危険ってあれかな?」

その言葉を受け、川上はそちらに目を向けもせず、答えた。

「そうかもな」

言った瞬間に川上はアニスに脚絡みを掛け倒し、座構えになりながら腕を極め模擬短を奪った、アニスは床を叩きタップすると川上は解放する。

「伏兵が現れて眼前の敵から意識を外す奴はいない」

コツ、と床をローファーが叩く音がした。

小さく足音を立てながら廊下を歩いていたフランドールは漫然とした眼をしていたが、川上達を見つけ一変して爛と輝いた。

「l a s l a s l a l a」

何やら機嫌よく口ずさみつつフランドールはステップを踏むように二人の元にやってきた。

「な・に・を・しているの？」

「じゅーじゅつの稽古ー」

答えたのはアニスであった、フランドールは服を血に染めた上、纏った空気を震わせるような、波動を感じさせるが、アニスは物怖じをしない。

知らぬまに、どっかの誰かに感化されてしまったのかも知れない。

「お兄様の武術？」

「触り程度だがな」

川上はそういつつアニスに模擬短を返す。

「私にも教えて」

「君には必要ない」

にべもなく言われてフランドールは少しむっとする。

「なんで」

「例えば、こいつの技を覚えてみる」

そう言つて、川上はアニスに合図する、それでアニスは先ほどからやつてる型を川上に掛けた。

「どう思う」

立ち上げながら川上は問いかける。

「なんか、普通だね」

「君なら今の十倍の距離から飛び込めるだろう」

「うん」

「つまりはそういう事だ、武術は弱い人間が強きに対抗する為のもの、元々強い生き物が覚える必要はない」

「そうなの？」

「数十間の距離を一步で踏み込める身体能力がある奴が数間の距離を詰める技術を持つても意味ないだろう」

欺瞞、である。

川上は武術をそのようには考えてはいない、純粹に強きを持つて弱きを挫くすべし
か思っていない。

しかし、フランドールに教えないのは何故か、それは身につけても意味がない云々ではなくまず身につかないからだ。

武術は力ではなく術を学ぶものだ、極論になるが術を学ぶ上では力は邪魔でしかない、格闘技やスポーツで慣らした男が武術をやると、大抵が力技になってしまい本来の術が身につかない事が多い。

むしろアニスのような女子の方が力に頼らず工夫をする為覚えが早い。

まして、人智を超えた力を持つ吸血鬼に術理を体得させるのはまず無理だろう。

「じゃあ役に立たないの？」

「君にはな」

ん、とフランドールは考える様子を見せる。

「つまり壊せばいいの？」

「ああ」

「なら私得意だよ」

瞬間、廊下に飾られてた調度品の壺が、爆砕した。

「わあ」

アニスが小さく驚きの声をあげ、川上は無言で目を細めてそれを見た、壺は破片ではなく完全に崩壊して粒子状に近かった。

「ね、ちよつときゆつてすればいいから簡単なの、こつやつて」

フランドールは笑みを浮かべながら次にアニスを見据えた、フランドールの視界ではアニスの身体に緊張した部分である幾つかの目が観える、その中の核の目を自身の伸ばした左手の中に手繰り、握り――

「？」

握れ、ない。握ろうとしたが手がフランドールの言う事を聞かなかつた、左肘から先がだらんと下がってしまつて重い、腕つてどうやって動かすんだつけど、間の抜けた事をフランドールは考えた。

「稽古中だ、邪魔するな」

言つたのは川上である、フランドールはアニスへと視野が狭くなつていたので気付かなかつたが何かをされた。

フランドールは釈然としない表情で試しに今度は川上に右手を伸ばし、川上の目を手繰り――

パン、と爪先で右の上腕を蹴り抜かれた、それで右腕も左同様全く感覚がなくなつた、ゴムみたいになつた腕の普段は感じない重みにフランドールは驚いた。

上腕には肉付きが薄く神経が表皮に近い点があるがここをピンポイントで突かれると神経にダメージを与える事が出来る、川上は最初は貫手で、次に蹴りでフランドール

の両腕を殺した。

「腕が動かないよ?」

「暫くしたら動く、後でテールゲームに付き合ってくれ」

そう言つて、川上はフランドールを体良く躲した。

「ほんと!じゃあブラックジャックやろう!」

「ああ」

素晴らしいつつ既にフランドールから意識が移っている昏い眼を見てフランドールは何か胸を過ぎった。

「ねえ、お兄様って——」

「妹様」

言いかけたフランドールの肩に手を置いたのは咲夜だった。

「トランプの前にお風呂入つて着替えましようね」

先程はつちやけたせいで、血みどろの服と死臭をさせているフランドールをそのままにしておけないと、咲夜はフランドールを抱っこして、歩き出した。フランドールは少しむくれたが特に何も言わない。

二人が去つていった後、アニスが言った。

「あの、腕を動かさなくするのどうやるの?」

「弱筋という急所がある、腕を出せ」
そうして川上はしばし、アニスへの手解きを続けた。

第82話

紅魔館地下図書館

既に時間は深夜であつたが、いつものようにパチュリーは知識を求めて、本を読み漁り、そして手元のノートに思いつくままに魔術理論を覚え書きしていく。

そして、知識と覚え書きを元に自身の魔術理論を構築して、オリジナルのグリモワールを編纂していく、彼女の魔女としてのライフワーク。

その為の基本であり、彼女が最も重視することが知識の収集である、それを求め本を読む。

本とは人類が集積した知識の産物だ、パチュリーはこれに全てを求めた。

パチュリーが着くテーブルの向かい側では、白い着流しに身を包つみ澱んだ眼をした男が手元の本を読んでいた。

紅魔館新人使用人の川上は、暇つぶしにふらりと訪れた図書館で珍しい本を見つけて読みふけていた。

ちなみに本は柳生宗矩著者、兵法家伝書の写本と思われるものであつた。

パチュリーはふと顔を上げる、そして川上が目に入り、そういえば先程から居たな等

と思う、余り自分から喋る男ではなく静かなので居てもあまり気にならない。

パチュリーは思う、この男も生きる上でただ一つを追い求める事しか知らない人間ではないかと。

川上については多くは知らないパチュリーはしかしそう思った。

ならば問う

「貴方は何が目的で生きてるの」

「…そう言う君は？」

唐突なパチュリーの問いかけだったが、川上は少し間を置いて逆に問い返した、なんだか目的がどうのと似たような話を少し前にしたような気がするなどと思いながら。

「全てを識る事を」

パチュリーは即答した、魔女以前の彼女の原点、それは知識欲の一言と言える、何故なのかと疑問を抱かずにはいられない、そして答えを探さずにはいられない、パチュリーのその気質は妄執じみていた。

「そうか」

本に書いてある事なんてごく一部、そんな事を思ったが彼はどうでもいいので口にはない。

「貴方は？」

「略奪」

川上は完結に答えた。

「それが生きる事」

生きるという事は他から奪う事。

「そうね」

話を逸らされた、パチュリーは生が何かとは聞いた訳ではない、何かある、そう感じたがしかし

本質的にはこの男には何もないのかも知れない、パチュリーはふとそう思った。気にはなるが。

パチュリーは伸びをした、ずっと座りっぱなしで身体が強張っていた。

パチュリーは立ち上がり、ソファーに歩いて行った。

「貴方が使うのは東洋の武術だったわよね」

「ああ」

パチュリーの問いかけに川上は短く答える。

「活法は使える?」

ソファーに座りながら続けて聞いた。

「…仰向けに寝ろ」

何を求められているのか察した川上は本を閉じながらそう言った。

殺法に通じれば活法にも通じる、柔術などでは殺法の対義として活法を伝え所も多い。

平たく言えば鍼灸や整体である。

黙って仰向けになったパチュリー川上は上半身から順に術を施した。

ゆったりした服だからわかりにくいに触れてみるとパチュリーの身体はむちむちとしており柔らかくも張りがあつた、喘息持ちとの事だが気管支以外の健康状態は決して悪くないらしい。

点穴や筋を捉えつつ各関節を回し、状態を見ていく。

パツと手早く上から下に見た結果は歪み、という程ではないが、ずっと座りっぱなしの為か、目や各部に負荷が掛かつていたので解していく。

さらにうつ伏せにして背中などにも施術をしていく、このような活法も実際殺法としての術の応用である、毒は薬にもなるのだ。

パチュリーは黙って受けている、特に痛みとかはない、というか気持ちよかつた、身体が温まってくる感覚がある。

川上は足先まで解して終わるとパチュリーは心地よさに耐えきれなかつたのか仰向けのまま静かに寝息を立てていた。

川上は無言で立ち上がり、席に戻って読みかけの本を開いた。

「あれ、パチュリー様はどこに」

暫し川上は黙読していたが、ふと現れた気配と共に声が聞こえた。

「寝た」

川上は顔も上げずに気配の主である小悪魔に対し片手で後ろのソファアーを示した。

「パチュリー様、こんな所で寝ちゃったんですか」

あんまり人前で寝たりしないから珍しいなと思いつつ小悪魔はソファアーに歩みよる、あどけない寝顔はパチュリーを百年を生きる魔女というよりただの少女のように見せた。

「パチュリー様をベッドに寝かせて来ます」

おそらく川上に向けてだろう、小悪魔はそう言つて、パチュリーの上体を起こすと腕を差し入れて横抱きに抱っこした。

人間一人を動かすというのか考えるほど簡単ではない、小柄な女性とはいえ軽々抱き上げる様や手際をみると小悪魔は他人の身体を動かす上での心得があるのだろう。

小悪魔はパチュリーを抱き上げたまま私室へと運んでいった。

ふと、川上は腕時計を見た、深夜2時43分、先程から感じてる空腹感が強くなつていた。

本を閉じて彼は歩き出した。

特に関係はないがパチュリーを寝かしつけた後、寝る前に川上とお茶でも飲もうと小悪魔が戻ってきた時には彼は影も形もなく肩透かしを食らう事になる。

紅魔館食堂

川上は固くなったパンにラードを塗りたくり、それをビールで流し込んでいた。

適当に厨房を漁り、見つけた食糧だがカロリーさえ取ればいいと言わんばかりの雑な食事。

暫く無心で食べていた川上だがふと気配を感じた。

「…お腹空いたの?」

おそらく朝食の仕込みだろう、厨房に行こうとしていた咲夜である、こんな深夜だがまだ仕事をしているらしい。

カン、とラードの缶にバターナイフを突っ込み、もそもそとパンを齧りつつ川上は頷いた。

バターナイフに伸ばした川上の手を軽く咲夜は抑えた。

「スープ、簡単なものだけどすぐ作るから待ってなさい」

川上は口の中のものをビールで流し込むと、短く礼を言った。

この食べられれば何でもいいというぞんざいな食事、この男は色々無頓着でどうにも
咲夜は放って置けない。

何となくわかる、節々に現れているのだ、少し咲夜の胸に寂しさがよぎる、彼の昏い
眼は他人など何とも思っていないのと同時に彼自身の事も……

咲夜は思考を切り替え、厨房にあるストックと野菜から作るスープを頭の中で組み立
てながら厨房へと歩いたを

第83話

十六夜咲夜は困惑していた。

今日は人里に下りて買物に来ていたのだ、一応手伝いとして下つ端使用人の川上を連れて、もっとも手伝いというのは建前で案内だったのかも知れない。

人里はいつも通り賑わっていた、そこまでは良かった、咲夜は川上に強く言い聞かせた、勝手な行動をせざるを得ないようにと、また目を離さないようにもしていたのだ。なのに何故だろう、常に離れてないか気を配っていたつもりなのにあつさりあの男の姿を見失っているのは。

俄然心配になってくる、絶対に人里で殺生は厳禁とここを来る前にも言い聞かせてきた、しかし、あの男はルールを破る事をなんとも思わないタイプだ。

万が一に川上が人里で問題を起こす事になれば自分の主人にも責が及ぶ事になりかねない。

ともかく探す事が先決か、考えてしかし、咲夜は息を一つ吐いた、いくらなんでも子供じゃあるまいし、そう考えて咲夜は当初の目的を果たすことにした。

ああいう手合いはいくら気にかけても駄目な時は駄目なのだから。

蕎麦屋でざるそばを啜るその男は少々周囲の目を引いた。

人里の人間は和装のものがほとんどだがその人間は黒い洋装を着込み、しかし腰に一振りの刀を差し、さらに長大な野太刀を席に立てかけているというチグハグな格好だからだ。

しかし、目を引くといっても多少だ、多くのものは横目で見るくらいである、実際男より奇抜な外見をした人間や妖怪など人里でもよく見られるからである。

その男は紅魔館使用人の川上であつた、今日の仕事はメイド長の買物の手伝いである。

しかし人里という場所に興味を惹かれた彼はメイド長からはぐれて散策していた、そして昼時なので蕎麦屋に入った。

川上はざるそばを平らげ茶を一杯飲むと勘定を済ませ蕎麦屋を出た、中々の味だつた。

川上は腹ごなしも兼ねてまた当て所なく歩き始めた、商店が連ねる通りから少し閑静な方に入る。

商店街といったらいいのか、そこから一本裏に入るだけで今度は静かな住宅地と行った様子だ。

人里は幻想郷の人間が殆ど住んでいる場所と聞いたが流石に広いようだ。

彼の癖なのかあまり人気のない方を選び川上は歩く、すると何やら数人の男と少女が揉めている場面に出くわした。

「あんたが稗田家の当主だな」

「人違いではないですか？」

「生憎あんたみたいな目立つガキを見間違える程目は腐つちやいねえよ」

歩みよりながら川上は一瞥する、男が三人に少女が一人、大の男が三人で少女を囲んでいる様子だが、少女は状況に飲まれず冷静な様子だ。

川上がすぐそばを通った時、やつと皆が川上に気付いたが、その時既に四人に興味を失ったのか何もないかのようにすれ違った。

男達は川上が帯刀しているのを見て、そして、川上が興味のない様子ですれ違うのを見てお互いに不可侵とばかりにスルーした、男達は短刀くらいしか凶器は持つてなかったものもある。

「ともかく黙ってついてきてもらおうか、抵抗しなきや悪いようにはしないよ」

「助けて下さい」

しかし、男三人とは違い、少女は川上をスルーせずにはつきりと助けを求めた。

川上は足を止めて首だけでそちらを一瞥する、男達にも緊張が走る。

「自分でなんとかしろ」

しかし、川上には助ける義理も理由もないので抑揚なくそう返して再び歩きだした。

その一瞬のやりとりで少女は川上の眼や視線と表情、声などで大体どういう手合いか理解し、そして言った。

「そう、荒木、貴方は前々から思ってたけど稗田家の護衛としては失格ですね、もういから佐々木を呼んで来て下さい」

チツ、と少女の意図を理解して川上は一つ舌打ちして歩む速度を上げたが、やはりと
いうか無駄だった。

男達は川上を関係者だと誤認し、中間の護衛に連絡されたらまずいと判断し短刀を振りかざし襲いかかってきた。

一人目、川上に短刀を突き込むが外に躲され突き手を捕られると同時に左の平拳での鍵突きで首を打たれ失神、そのまま投げられもう一人にぶつけられる。

二人目、逆手に構えた短刀を腰だめにに体ごと突き込んでくるが、川上は体捌きでい
なすと同時に崩しをいれつつ足元を払い前に投げると見事に一回転して背中から落ち
た。

すぐに短刀を握る腕を取り脇腹に蹴りをいれあばらをへし折り、短刀を握る指に指絡
めをかけてやはり指をへし折りつつ短刀を奪う。

三人目、一人目をぶつけられて体制が大きく崩れて立て直して川上に襲いかからんとした時には投げられた短刀が腿の外側に刺さり呆気なく倒れた。

川上は短刀が刺さっている以外の倒れてる二人に腿に蹴りを入れて追つてこれないように入念に足を潰した。

「糞ッ」

短刀で腿をやられた男は立ち上がれないが、苦し紛れに手にした短刀を投げたが回転しながら迫ったそれを川上は最低限の動きで避けた。

川上はそれで踵を返して歩いて行き、角を曲がり姿を消した、男は一人は失神しており、一人は悶絶し、一人は動脈など急所こそ外れたが腿にナイフを受け、誰も追う事は出来なかった。

「では、失礼します」

少女また悠然と一言かけて歩き去った。

二つ角を曲がったところで川上は壁に背を預けて、懐からゴールデンバッドを取り出してマッチを擦り着火して、深く煙を吸った。

長く紫煙を吐き風味を楽しみ一息ついたところで、軽い足音が近づいてくる。

現れたのは 先程の少女であった、若草色の着物に身を纏い、紫がかったセミロング

の髪に花の髪飾り、容姿はまだ子供と言つてもいいだろう、愛らしい顔つきであった。

人里における名家の稗田家当主であり、九代目御阿礼の子である稗田阿求であった。

「助けて頂いてありがとうございます」

「…」

屈託無く笑顔で礼を言つてくる阿求だったが、それが皮肉に感じられたのは川上の気のせいか、彼は何も返さなかつた。

川上は助けてなどいない、阿求は状況を把握し、状況を利用して、だつた一言で状況を打開して見せた。

つまりは川上が言つた通り自分で何とかしたのだ、しかもそれを言つた川上を利用するという皮肉な方法で。

再三になるが見かけで判断するほど幻想郷では愚かな事はないが、見かけからは考えられない老獪なやり口だつた。

だが、悪くない。川上はどちらかといえば阿求に好ましいものを感じた、自身を優先し身を守る、その方法として言葉だけで状況を動かすという立派な兵法に通じている、身を守る知恵も力も付けない者より余程まともではないか。

「俺は君ではなく自分の身を守つただけだ」

「御謙遜を」

クスリと笑つて阿求は言った、邪氣のない仕草だが、皮肉というより建前なのかも知れない。

通行人を利用したのではなく通行人に助けて貰つたという方が通りがいい、先程のやり口から見てもそのくらいは考えかねない。

「失礼する」

川上は携帯灰皿にタバコを入れると、歩きかけたが。

「お待ち下さい」

阿求に手を取られて静止された。

足を止め川上は振り返る、身長差があるため阿求は見下ろされる形になる、昏い眼に見据えられても阿求は笑顔を崩さない。

「御礼させて下さい、近くにお団子の美味しい茶屋があるんですよ」

そう手を取つたまま柔らかくいう、その阿求に他意を見たくなくとも川上の眼は見てしまう。

「なら、馳走になろう」

「では、こちらです」

して――

表通りに出て並んで歩いてると阿求は奇しくも咲夜と同じ目にあう事になる。

「逃げられちゃった」

煙のように消えた川上に阿求は一人ごちる。

「面白そうな外来の人だったから話を聞きたかったんだけど、ワケありかしら」
呟いて、まあいいかと阿求は歩き始めた。

しようがないから一人でお茶をして帰るかと考えながら。

第84話

「それは本当か？」

「ええ、黒い洋服に刀を鵺鴿差しにして野太刀を背負った特徴的な目付きの男性ですねよ、見ましたよ」

里の外で起きた虐殺事件。ある日その関係者ではないかとされる清水なる男らしき目撃証言が人里で出たのを偶然慧音は聞いた。

そして、男の人里での足取りを追ってみたが、拾える証言は断片的であり聞いた限りでは特に実のある証言はなかった、精々蕎麦屋で昼食を普通に食べていた事が分かったくらいだ。

そして仕事で必要な資料を借りに稗田家を訪れた時、雑談の中で何気なくその事を話せば阿求がそれらしき人物を見たという。思わず慧音は実を乗り出した。

「見た、というか助けて貰いましたね」

「助けて貰った？詳しく聞かせてくれないか」

阿求の言葉に慧音は問いかける。

「ちようどあの日一人歩きしていた時男達三人に囲まれてしまいました、向こうの事

情は聞いてませんが、明らかに私を狙っていた様子なのでまあ反妖怪の過激派か何かかも知れませんか」

「里でか…流石にその連中も捨て置けないな、いやすまん、それで」
慧音は続きを促す。

「たまたま先程の話に出てきた容姿の方が通りかかりまして、三人を倒して貰ったのでおかげで助かりました」

嘘ではないが正確な事実ともいえない事を阿求は言った。

「ふむ…どう倒した、三人組はどうなった？」

「男達は合口で襲いかかりましたが剣も抜かず当身と柔だけで、あまり武芸の事はわかりませんが達人といえるかと」

「また殺害せずに制してました、少し後で屋敷の者をやりましたがすでに三人ともいませんでしたので」

「そうか」

何か考えるように慧音は相槌を打った。

「生憎名前を聞きそびれてしまいました、外見的特徴はその清水という人と相違ありません、外来人のようでした」

「ふむ…」

引つかかる所があるのか、少し慧音は釈然としない様子。妹紅から聞いたイメージと人助けをするという行動がいまいち一致しないのかも知れない。

「その男、紙巻煙草を吸っていなかったか？あるいは匂いがしたとか」

「両切りで外来の品と思われるものを喫んでいましたね、確か紙にアルファベットで G・O・L・D・E・N・B・A・T と刻印が入っていました」

「GOLD、か」

決まりだ、現場に落ちていた吸い殻と同じ、その男はクロだ。

「その男、阿求から見てどう思った」

「どう、ですか？といますと」

漠然とした慧音の問いに阿求は首を傾げた。

「私の友人がその男に斬られたんだ」

そして、慧音は妹紅から聞いたあらましを阿求に話した。

「なるほど、そのような事が」

一通り聞いた阿求は、カランとグラスを鳴らしアイステイヤーで喉を湿らせた。大きな武家屋敷に阿求も着物なのでアイステイヤーは若干そぐわなかったがこれは単に阿求自身紅茶党の為である。

「うむ、で君から見てその男がどう見えたか聞きたい」

「そうですね…」

それを聞いて阿求はおもむろに引き出しを引いて中から何かを取り出した。

「ここに一口の刀子とうすがあります」

「?うむ」

阿求はちよつとした時に使う刃物を片手で記して言った。

「こんな感じに見えましたね」

「…刃のようだった、と?」

「ちよつと違いますが、そんな感じですね」

にこりと笑って阿求は言った。

「先生、例えばこの刀子がある事は悪いことでしょうか」

「?あると便利だと思うが、いいも悪いもないんじゃないか」

抽象的な問いに慧音は若干戸惑いつつ答える。

「便利です、素手では切れないものを容易に切る事も、これで木から仏像を削り出す事も出来ます」

しかし、と阿求は続ける。

「人を傷つける事も殺める事も十二分に出来ます」

「それは使う人間次第だろう、道具に罪を求めても意味はない」

「そうですね、私が受けた印象も同じです、あの方はいい人でも悪い人でもありません」

むう、と慧音は小さく唸り自分もグラスを傾ける。

「阿求、私が言ってるのは道具ではなく人間のことでござい」

そうですね、と阿求は何処かつかみ所のない笑顔でいう。

「しかし、善悪も人間が取り決めた尺度であり絶対的なものではありません、そのような物差しに当てはめる事が出来ない存在」

ちよつと違うかと阿求は言葉を探す。

「物差しで長短ではなく重さを測ろうとするようなそもそも当てはめる事自体が間違っている、そういう存在、先生ならなんとなくわかりませんか」

上手く言えなくてすみませんと阿求は付け足す、それを受けて慧音も少し考える。

「わからなくはない、人間は驚くほどに多様な者達がいるからな」

慧音として様々な人間は見てきた、阿求の言いたい事もなんとなくわかる。

「無論、その清水という人物が悪い良いに関わらず問題を引き起こすという事もあるでしょうね、ただ」

「ただ、なんだ」

「先ほどはその方に助けて貰ったといいましたが、正確に言うとその方は私を助ける

素振りも見せずまた、厄介ごとから逃げる素振りも見せずただ通りすがった所を男達が襲いかかったので、その方は降りかかる火の粉を払った、というのが本当の所です」

「ふむ」

慧音は得心したように相槌を打った、ようは助けて貰ったというより結果的に助かった、という事だ。

「その時、最初言った通りその彼は抜かなかったんですよ、刀を」

「抜かなかった…」

先程聞いた時は聞き流してしまっただが、改めて言われると違和感がある。

「抜けばその方が早かったし、安全でしたでしょうね、相手は合口で襲いかかって来ていたのですから」

「なのに、抜かなかった…」

「何故かはわかりませんがね、殺生を避けたのかも知れませんが、あるいはただ刀が消耗するのが嫌だっただけかも知れません」

「だから先生——」

話を終えた慧音は資料を片手に稗田亭の庭に降りた。

「まずは会って話をしてみては、か」

そうすべきなのだろうな、慧音は思う、確かに会つてもいないのに先入観から危険人物視してしまつていた所はある、もつとも友人が斬られてる事実に変わりないが。

「先生」

気配なく背後から声を掛けられて、慧音は振り返つた。

「君は、唐沢君か」

そこに立つていた、着物に袴、大小を二本差しにした細面のまだ二十代後半と思われる年若い男は人里の剣術道場の高弟であり唯心一刀流免許皆伝の唐沢という男である。

小柄ながら鍛え抜かれた体軀、そしてとにかく腕が立つた、道場においては天才と名高く、二十歳前にして印可を得た。

また、野良妖怪五匹をあつという間に切り倒した逸話は有名であり、人里の外での護衛を勤めたり、また正式な稗田家の人間でなながらも剣腕を買われ護衛としてたまに出入りしている程の名人であつた。

「お久しぶりです」

そういつつ頭を下げる唐沢の眼に慧音は何かを感じた。

「もしかして聞いていたのか」

「…失礼ながら」

「まさか、君は」

「阿求様の言葉も一理あります」

唐沢は慧音の言葉を遮り言った。

「刃は使い方を誤れば悲劇を生みます。しかし刃を扱うのは我々なのです、件の人物が心無く刃を握る、そういうモノであれば同じ刃を扱うものとして私は捨て置けません」

そこまで一息に言った、彼は単に腕が立つだけでなく人格者として知られていた、しかし。

「唐沢君」

「…正直に言うに興味もあります、それ程の使い手そのものにただ、会ってみたいと、そして」

慧音は薄々理解していた、剣に関しては年若くしてもはや同年代で彼の相手になるものはいない、天才故の孤独。そんな彼が自身と変わらぬ歳の使い手が居ると聞いて何も思わぬ訳がない。

「私が会って判断します、そしてその者に心が無ければ」

その際は語る言葉は無用であろう、彼には、剣客には腰の刀があるのだから。

「その気なら止めはしないが、ならせめて数人で行った方がいい」

「私一人でもいいです、おそらく件の人物の前にただ数を揃えても意味はありません」

自身過剰とも取れる言葉に流石に慧音も語気を荒げる。

「相手の力量はまだわからない、少なくとも夜盗を二十人以上切り伏せる人物だ、いくら君でも危険だ！」

「先生」

対して唐沢の言葉は静かだった。

「私も決して驕るつもりはないですが」

いいつつ唐沢は庭の隅に落ちてた薪を拾い上げるとおもむろに上に放り投げた。

パン！と言う音が響き四つに分割された薪が落ちた頃には唐沢はもう納刀の動作に入っていた。

「私くらいになると荒くれ者など何十人いても物の数ではないのですよ」

薪は縦に正確に一閃、水平に一閃され空中で四分割された、その抜刀は刃の色すら見る事か叶わない、人間以上の動体視力の慧眼でも刃の軌道が見切れない超絶技。

唐沢はそのまま歩きだした、里の外を当たるつもりなのだろう。

「唐沢君」

慧音はその背中に声を掛けたが、唐沢は足を止めず、慧音も続く言葉が見つからなかった。

彼の剣腕は慧音もよく知っている、今みた通りだ、並の妖怪など簡単に切り伏せる達

人、どんな形であれ彼なら帰ってくるだろうという安心感はある。

しかし、一抹の不安もあった、彼に限ってとは思う大丈夫だと思う、しかし…

その二日後村人の手により首を跳ねられた唐沢の死体が人里に運び込まれた。

それは件の剣客の仕業なのか、あるいは夜盗か妖怪の手によるものか、ようとして知れなかった。

第85話

一人の青年が居た。

青年は武術を志し貪欲に学び、そして実践した。

やがて、青年は類比なき使い手となり一つの極致にまで到達したと師に言わしめた。

青年は満足しなかった。

極めたと思えば続きがある、終わったと思えばそこから始まる。

青年は極めるなんて事はないのだと薄々理解していた、道に終わりなどない、ただただ進む。

稽古も続け、様々な流派の工夫を取り入れ、様々な相手と実戦して、しかし青年は壁に突き当たる。

頭打ち、ここが自分の限界

とは、青年は思わなかった彼は考える考えて考えてそしてあまりに簡単な答えにたどり着く。

最後にものをいうのは基本の基だということ、迷ったら基本を思い出せと誰かの言葉を思い出した。

一つ、一つでもいい更に先に行けるなら、青年は剣を選んだ。

剣の基本を考える、甲冑剣法から時代が下がると平服での素肌剣術になった、そして素肌剣術において大抵の流派の基本は真つ向切り下ろしだ。

基本である、しかし新陰流においては十文字勝ち、一刀流の切落しなどただ真つ向に切り下ろすだけの一手を必勝の勝口にしている所は多い。

青年はただ上から下に真つ直ぐ切り下ろす事を愚直に始めた――

「リザイン」

「やった、私の勝ち」

フランドールは川上に対して勝どきをあげた。

対して川上は何も言わずに煙草を啜えた、火を点けて一服し、吐いた紫煙は夜の空気の中溶けていった。

紅魔館のバルコニー、時刻は夜、川上はフランドールとチェスなどに興じていた。

良くレミアアとテールブルゲームを嗜んでる川上を見てフランドールもやりたがった、それは単なる遊び心か姉への對抗心か、ともかく川上はたまに相手をしていた。

戦績は現状五分五分である、しかしレミアアと渡り合うほどの川上にまだまだ初心者

のフランドールがそこまでいい勝負が出来るはずがない。

実際フランドールは何も考えていないようで頭の回転が良く視野が広いのか初心者ながら飲み込むは早かったが、最初のうちは言葉にするのも憚るほどのボロ負けでの連敗だった。

しかし、痲癩を起こしたフランドールがボードごとテーブルを打ち抜いて粉碎して、さらに一部屋を壊滅させた当たりでやつと川上は手加減する事を覚えた。

それから川上は気付かれぬよう徐々に手を抜き現状のパワーバランスまで持っていった、つまりは接待プレイである。

言うまでもなく圧勝するのも手加減するのも川上には暇つぶしにもならぬ時間の浪費だ、しかし上司の咲夜にそれも仕事と言われては無碍には出来ない、どちらにせよ別に川上は時間に追われている訳でもないので構わなかった。

バルコニーは風が感じられ今夜は過ごしやすかった、ふと空を見上げると空にはほぼ真円に近い月が浮かんでいた、今日は妙に大きくみえる。

月、かどこかの姫が月に関して言っていた事を思い出す。

「妹様」

川上はチェスの駒を初期化しながら呼びかけた。

「月は好きか」

特に意味もない問いかけだった、吸血鬼というと月というイメージからのただの興味本位。

「月？」

川上の問いを受けてフランドールは唇に指を当てんぐ、と考えこんでいるような仕草。

そう難しい事だろうかと川上は思いつつ灰皿で煙草をもみ消した、そこでフランドールは腑に落ちたような顔になり指を川上に向けた。

「名前」

「？」

フランドールの言葉の意味が川上にはわからなかった。

「名前とは？」

「名前と呼んで」

フランドールは川上の問いなど全く無視してそんなことより何か引っかけかかりなんでしょうと考えた。

そして気づいたのは川上はフランドールが知る限り誰も名を呼んでいないという事だ、この男は役職や種族などで呼びかけている。

川上としてはそう呼べと言われたなら特に逆らう理由もない、ない、が。

「君の名前はなんだったか？」

すでに覚えていかなかった、フルネームを聞いたのはいつだったか、川上は名前には無頓着である。

「フランドール、フランドール・スカーレット」

「フランドールか」

「フランドールで」

「分かった」

「呼んで」

妙に拘るが名前に思い入れでもあるのか、あるいは特に深い意味もないのか。

「フラン」

川上は記号を読み上げるとき棒読みで言われた通り呼んだ。

しかし、それで十分だったのかフランドールは満足気に笑った。

結局川上の問いの答えは帰ってこなかった。

「先手だ」

そう促して川上は煙草を取り出し吸い口をテーブルでコンと数回叩いて啜えた。

フランドールは勢い勇み白いポーンを取った。

そしてそのゲームは

「チエックメイト」

フランドールの宣言に川上は降参というように両手を軽く上げた。

「やった！また勝った」

フランドールの二連勝、しかし川上がわざと勝負を拮抗するようにしてから戦略の組み立てが中々上手くなってきた。

次は勝つかかと思いつつ川上は煙草を取り出し吸い吸い口を叩き啜える、すでに傍らに置かれた灰皿は吸い殻が溢れ出しそうになっていた。

「お兄様さつきから吸い過ぎ！煙草は身体に悪いんだよ」

さつきからチエーンスモーキングしている川上にフランがびしりと注意した。

「煙草なんかより生きてる事が一番身体に悪い」

川上はふつと笑いそう冗談なのか本気なのかわからない事を返して火を点けた。

「そうなの？」

フランは言葉をそのまま受け取り首を傾げた。

「生きてればいずれ死ぬからな」

「私も死ぬの？」

川上の言葉にフランドールは何故か眼を爛と輝かせて言った。

「死ぬだろうな」

「死んだら死ぬって何かわかるかな？」

「死んだら死ぬのだからわからないだろう」

「え？」

「ん？」

フランドールは首を傾げ、川上も何も考えてなかった為自分が何を言っているのかよく分からなくなり啞え煙草のまま首を傾げる。

「お茶が入りました」

そんなある意味絶妙なタイミングで咲夜が現れた。フランドールの前に紅茶、川上の前にコーヒーをそれぞれ置く。

「ありがとう、咲夜」

「ありがとう」

フランドールに続いて川上も礼を言う、川上はコーヒーに口を付けようとして舌を火傷しそうになりカップを下ろした。

「あと、こちらを」

咲夜が御茶請けとしてテーブルに置いたのは焼き立てと思われるクッキーであった、バターの香ばしい匂いがする。

「これ、変わってるけどおいしいね」

フランドールが早速一つ口にしてそう感想を漏らした。

「川上、貴方も」

「いや、遠慮する」

「勧める咲夜に川上は短く断りつつ煙草を揉み消した。

「いいから一つ食べなさい」

咲夜は何故か強く勧めた、彼女なら川上が甘味を嫌う事くらい分かっているそうだが、実際川上はここに来てから甘いものはフルーツですらほとんど口にしなかった。

が、とりあえず言われた通り川上は一つ口にする、まだ暖かいクッキーは口どけが良くホロリと崩れ、チーズの風味とバターの香りが鼻に抜ける。そして川上にとって胸の悪くなるような嫌な甘みが：

「美味しい、な」

しなかった。程よい塩気がチーズの風味と調和する。

「甘いものばかりがお菓子じゃないのよ」

柔らかく笑って咲夜は言った、チーズクッキー。甘くないクッキーである。

「では失礼します」

咲夜はその場で一礼して、消えた。

「咲夜、こんなの作れたんだ」

フランドールのカップを両手で包んで息を吹きかけて冷ましつつ、呟くように言った。

川上は特に何も言わずにクツキーを一つ口に放り込み、盤上の駒を初期化し始めた。フランドールとのゲームが終わるまで川上のチェーンスモーキングは止まった。

第86話

一人の少年がいた

少年はごく普通に出会いごく普通に恋愛しごく普通に結婚したごく普通の両親の元で生まれごく普通の家庭で育った子供だった。

その少年の生まれや環境には特筆すべきところのないどこにでもいる子供だったといえるだろう。

ただ、その少年は子供としては少し周りと違うように見えたのが少年の母親には気がかりだった。

良く言えば落ち着いているのだが、子供らしい豊かな感受性が見えず、あまり自分から何かを訴える事もなかった。

しかし、何かの障害を持つっていると判断された訳ではなく、幼稚園でも得に問題が起きる事もない。

少し母親は引っかけかりがあったが多少他の子と違っててもそれでいいじゃないかと母親は少年を存分に愛した。

少年が小学校に上がって少し経った頃、少年の家にどこからか子猫が迷いこんできた

事があつた。

母親はまだ生まれて大して経っていないだろうその子猫と戯れる少年を微笑ましく思つた、どこから迷い込んだかわからないが飼い主が見つからなければその子猫を飼うのも情操教育にいいかも知れないなんて思いながら。

母親はすぐに驚愕する事となる。

少年は戯れていた子猫の胴と首を強く掴むと首を思い切り捻つた、子猫は死んだ。

母親は子猫の死体を弄り観察している少年を信じられない思いで見つて、すぐに烈火の如く怒つた。初めて息子に手を挙げた。

少年は初めてみる母親の変わりように殴られても泣くこともなくキョトンとしていたが、すぐに母親に謝つた。

暫くして母親は自分が動転して頭ごなしに怒鳴りつけてしまった事を後悔した。まだ子供なのだ、命の尊さをわからなくてもおかしくはない、あのくらいの子供は割と残酷な遊びもすると夫に諭されたのもあつた。

母親は少年に怒り過ぎたと、殴つた事を謝つた。その上で猫の命の大切を言い聞かせた。

しかし少年は母親の話を聞きながら怒られた時とさして変わらない表情だつた。

いよいよもつて、母親は自分の息子を気味が悪いと感じてしまった。母親として失格

だと自己嫌悪に陥りつつも、明確にそう感じてしまったのだ。

夫に相談した。夫はまだ子供なんだからと、成長すれば大丈夫など当たり障りのない事を言っていてちゃんと向き合ってくれなかった。

母親は悩んだがその後そのような残酷な所を見せる事もなく、小学校でも友人が出来て良く一緒に遊んでるのを見て安心する。少年の友人は少年とは逆で活発で悪戯好きなやんちゃな子だった。

大丈夫、別に息子はおかしくない。

活発な友人は少年を良く引つ張って遊んだ、様々なものに好奇心を示して自分を連れて行ってくれる友人の事が少年は好きだった。

ある時やんちゃな友人は普段は施錠されて出切り禁止となっている学校の屋上に少年と一緒に忍びこんだ。

初めて出る屋上に友人ははしやいだ、少年も風が気持ちいいと思った。屋上にはフェンスもなく、縁から簡単に真下をみる事が出来た。

友人は縁から身を乗り出しすげえ高いと喜び、少年にお前も見てみるよと言った。

少年は友人の背を押しした。

友人はあっけなくバランスを崩し縁を越えて消えた。少年は縁から地面を見ると遙

か下に友人が倒れているのが見えた。

少年は階段を降りて校舎を出て友人を確認した。

すでに数人の人間が集まり騒ぎになり始めていたが少年は倒れた友人の近くにしゃがみ込みうつ伏せに倒れ伏せ、割れた頭から血と灰色の内容物が溢れているのを観察した。

少年は地面にぶち撒けられたぐずぐずの脳に手を伸ばした辺りで教師に慌てて引き離された。

この事故・・・を受けて学校側は安全管理を問われフェンスを設置することとなる。

少年は呼びだされた母親と共に関係者に悪戯で共に屋上に出た事、縁から身を乗り出した友人が下に落ちた事などを表情を変えずに言葉少なに説明した。

教師達は目の前で友人を亡くしたショックが強いのだろうと解釈して哀れんだ。

しかし少年の母親をその様をみて2つの事を確信した。
友人は息子が落としたのだ。

そしてもう一つ、自分が悪魔を産んでしまった事を：

紅魔館、夕刻

時計台となつてゐる屋上で一人の男が刀を振り上げていた。

特徴的な昏く鋭利な三白眼となつたブラウンの眼にかかる程度の黒い髪、顔立ちを整つてはいるが眼のせいで不吉な印象がつきまとう。使用人としての礼服に身を包んでいるがそれも陰性の雰囲気の一役かつてゐる。

紅魔館の下つ端使用人の川上である。

彼は上段に屹立させた刀をゆっくり、ゆっくりと亀ですら欠伸が出そうな速度で呼気と共に斬りおろしていく。

そして時間をかけて下まで降ろすと静かに腹に入れるように息を吸い臍下丹田に力を込める。そしてまた元の上段に戻る。

眠たくなるような素振り、人が見たらこんな事をしてなんの意味があるのかと思うだろう。

しかしスローモーションの如き遅さで真つ向に斬りおろし体幹はもちろんのこと刀も刃筋も地面に対し完全に垂直で1℃たりともブレない。どこまで練り上げればそれが可能となるかわかるものは中々ないだろう。

風が吹き何処からか巻き上げられたのかわからない木の葉が止まっているのとさして変わらぬ刃に当たると2つに分かれて飛んでいった。

彼はそれを暫し続け、辺りが茜色になるころ刀を拭つて鞘に納めた。

息は上がっていなかつたが前髪から滴るほどには汗が出ていた。さして運動量があつたようには見えなかつたが何故か？

傍らに置いてあつた水筒を取り上げ補給水をゆつくりと飲んだ。

そして川上は上を脱ぎ捨て白シャツになると屋上の端まで歩いていき切り立つた縁に腰掛けた。

すぐ足元をみると見ると遥か下に庭園が見える。落ちればひとたまりもないだろう。

川上はポケットから干し肉を取り出し少しづつ齧つた。

口の中で肉を噛みつつ視線を上げると、高さ故に景色が一望出来た。赤く染まつた空、広い湖に夕陽が反射して宝石のように輝いている。

その絶景を見ながら川上の表情は特に変わることもなく、眠そうな眼で干し肉の最後の一欠片を放り込み咀嚼した。

第87話

「居ないわね」

夜、川上は食事の時間にも現れないので部屋を見に来た咲夜だったがやはり見つからなかった。

今日は夕方まで仕事を任せていたので眠っているのかと思いきや部屋にも居ない、どうにも出かけているらしい。今は川上はオフの時間だから別にいいのだが、食事も取らずに何処にいったのだろうかと思夜は思った。

やる気無さげにずっと寝ていると思えば、ふらふらと出かける事もある。咲夜にも行動パターンが掴み難い相手だ、わかるのは一人稽古だけは定期的に行っている事くらいである。

まあいいかと咲夜は食堂に戻った。

黒の私服に身を包んだ川上は森の中で佇んでいた。

歌が聞こえたのだ、曲調こそ違えど何処か聞き覚えのある綺麗な歌声だったそしてふらふらと近づいていき気付いたら目が光を失っていた。

「お久しぶり、刀のおにーさん」

頭上から声をかけたのは木の枝に腰掛けた夜雀のミスティア・ローレライであった。屋台で出会った時の和風ではなく禍々しいデザインの茶色のジャンパーズスカート姿だった。

そう、今夜は彼女は屋台の女将では無く一匹の妖怪だった。

「もう歌は聞こえないよ」

そうミスティアは告げた、こうして今夜妖怪と人間が出会いやる事は一つだ。

「そうだな、もう聞けない」

川上は応じた、彼の夜目が利くはずのそれが像を映さなくなった、失明、はしていないのはわかるが。

川上は腰の刀を抜いた、右手に持ち構えもせずに立ち一見無造作だ。

ミスティアは立ち上がり無音で別の木の枝に飛び移り川上の背後と頭上の優位を取った。

相手を夜盲症にさせる能力。これにミスティアは絶対の自信を置いていた、人間はおろか妖怪相手ですら優位に立てるのだ。

如何に刀を抜いても見えなければどうしようもない、自明の理である。何処から来るかわからぬ相手を機能を失った眼で迎撃出来るはずもない。

機能を失っていればだが。

ミスティアが木上で構えた時川上は剣先を挙げかけて、動きを止めた。ミスティアも少し遅れて頭上を仰ごうとした時にはその人物は川上の背後、ミスティアとの間に降り立った。

その人物は口の中で一節の短い詠唱を唱えると手にした大幣を一払いする。ただそれだけで周囲の空気が豪と唸りを上げ風の束となりミスティアに襲いかかった。

「っ、山の巫女!」

並の人間なら切り刻まれてしまうほどのまるで斧のような暴風に襲われて咄嗟に後ろに飛んだミスティアは浅手ではあったが妖怪の天敵の前に即座に敗退を選択しそのまま飛び去った。

「逃げられましたか」

深追いする様子はないその人物は緑がかかったロングの髪に翡翠のような綺麗な丸い眼、水色のスカートと白に青に縁取りがなされた上着。極めて変則的だが巫女服である。霊夢のそれとは全く違うが袖が独立しており肩と腋が出ている所は何故か共通している。

乱入したのは幻想郷のもう一つの神社である守谷神社の風祝である東風谷早苗であった、彼女もまた霊夢と同じ妖怪退治のような事もしている。

出かけていた帰りだったのだろうか、人が妖怪に襲われてるとみてまきに出番とばかりに飛び込んだようだ。

斃すに至らなかつたが多少は薬になっただろう、まあ良しと早苗は考えた。

そして襲われていた様子の男に振り返りつつ声をかける。

「大丈夫です、か」

口にした言葉は川上の姿を見て尻切れになりそうになつたが早苗は辛うじて言い切つた。

彼女は見た。

夜の薄闇に少し浮く黒い洋装に身にまとい僅かな月光を反射させる白刃を手に冷たくつまらなそうな昏い眼でこちらをみる川上を。

早苗は理論や理屈よりフィーリング、直感などの感覚を大事にしてあまり物事を深く考えないタイプだ、実は理詰め of 魔理沙とは間逆であり性格こそ違えど天才肌の靈夢に近い。

故に初対面の相手も一見して、少し話せばもう大体早苗の中で相手のイメージは固まつてしまうのだが。

——気持ちが悪い

それが早苗が川上に対して抱いたイメージである。どこがとは明確には言えないだ

ろう、感覚的なものでしかないのだから。

早苗をぼんやり見ていた川上は自身の刀に目を落とし、次にミステリアが逃げ去った方向に視線をやり、最後に早苗の所に眼が戻ってきた。

怖気が背中に走り無意識に早苗は右足を一步引いてしまった。早苗は川上から眼を離せない、いや離してはいけない。

川上は結局刀を上げるとそれで自身の左手を軽く切り、刃に少し血を付けてそれを拭つてから納刀した。

「礼を言う、助かった」

川上は言った、そう手間が省けた。そんな内心の声が早苗に伝わったかは定かではないが、少なくともその言葉を受けた早苗には感謝がまるで感じられなかった事は確かである。

「いえ、ご無事なら何よりです」

自分が表情を失っていたのに気付いて早苗は慌てて笑顔を取り繕った、自然な笑顔になったかは自信がないが。

早苗は何か続けるべきだと言葉を探す、が何時もならこのような場合相手を気遣い送るのが普通であった。

そう、夜道でか弱い人間が襲われていたのだ。何時ものように夜歩きは危険だと注意

し、危ないから送りますの一言を言えばいいだけだ。

なのに、何故それを口に出出来ないのか。

元来真面目な所のある早苗である、人を助けたなら最後までやらなければならない。取り繕い送ると言えればいい。そう思う。

一方で関わり合いたくない、早くここから去りたい。相手への嫌悪感からそうも思つてしまい葛藤する。

川上は懐から煙草のソフトパックを取り出し一本啜え、火をつけると目の前の巫女を一瞥だけして無造作に歩き出した。

それを見て無意識の内に早苗はパーソナルスペースに入られるのを嫌い斜めに下がった。

しかし、川上は何も言わない早苗に何の関心もないように横を通り過ぎて歩き去っていった。

早苗は去っていく川上の背中を見据え、口を開きかけたが何も言えなかった。仕方ない、こちらが何かいう前に去ってしまったのだから。そんな欺瞞的な思考が早苗の頭に浮かび、彼女は少し自己嫌悪した。

でも、もう会いたくはない。その考えは早苗は自己否定しなかった。

「よし」

小さく声を出し早苗は切り替える、何もなかった事にしよう。
そう割り切ってしまうと早苗もその場から飛び去り神社へと帰っていった。

第88話

僅かに月光の差す林の中にポツリ、ポツリと緑がかつた青い光がフワフワと浮いていた。

何処か幻想的な光は時期遅れの蛍だった、近くに小さな川があるのだろうか。

そんな蛍の光の中で一つ他と違う光があった。他が青い光に対してそれだけは緋色の光だった。

その緋色の蛍もまた他の蛍のように少し光が強くなったり弱くなったりとしている。しかし近づいて見れば蛍ではない事はすぐにわかる。

紙巻煙草の火口であった。

川上は一本の木を背にしてぼんやりと一服していた。ふと時計をみる、十一時十四分。

館を出てから随分経っていた。川上は何を求めて彷徨い歩いていたのだろうか、あるいは何も求めていないのだろうか。

彼は空腹である事を自覚した、食事がまだだった。煙草を落とし踏み消した。

ふと視線を上げる、眼が合った。

しかし断じて周囲には虫以外の生物はいない、川上は腰の刀の柄を左の指でコンコンと小さく叩いた。

しばらく視線を向けていたがやがて興味が薄れたのか視線を切った。

戻るか。そう考えて川上はその場を歩き去った。

1 Km以上離れた山の上で視線の主は凍りついていた。

「二人とも、誰かが近くにいるよ」

「えっ、妖怪かな？」

「ともかく見に行ってみるわよ」

「あっ、人間じゃない」

「長い刀と短い刀って、なんかどっかで見たとことがあるような格好ねえ。男だけど」

「林の中で人間一人なんて無用心だなあ」

そう夜道で木の陰から男……川上を見ていたのは三人組の妖精だった。

一人はややくすんだ金髪をツーサイドアップにして青いつり目でブラウスに赤い口ングスカートといった出で立ちの妖精サニーミルク。

並んでいるのは薄い色の金髪を縦ロールにし、視力でも悪いのかジト目になりがちな赤い眼。黒いリボンを所々にあしらった白いワンピースに帽子の妖精ルナチャイルド。

二人から一步下がった所にいるのは艶のある切り揃えた長い黒髪。ブラウンのたれ目で青いドレスに身を包んだ妖精スターサファイア。

皆薄い虫のような羽を持ち幼く愛らしい容姿をした如何にもな妖精である。三人は仲が良く同じ木と一緒に暮らしており光の三妖精と言われるトリオだ。

赤、白、青の三人は各自の能力を駆使しながら川上を尾行する。サニーミルクは光を屈折させ、ルナチャイルドは周囲の音を遮断し、スターサファイアは動くものの気配を探る。三人の能力は親和性が高く、三つ揃うとステルス、サイレント、レーダとなり強力な隠形となる。悪戯好きの妖精にはこの上ない能力であろう。

「で、どうするの」

「決まってるでしょ、無用心な人間は私達が懲らしめてあげないと！」

サニーミルクはそういつてまず手始めに光を屈折させる能力を応用し周囲の風景を男の歩く速度に合わせて少しずつずらした。

当然これをやられると真っ直ぐ歩いてるつもりでも本人の自覚なく進行方向が曲がっていく。いかに人が目に頼っているのか人は自分で気付いていないものだ。

結果本人は真っ直ぐ歩いてるはずなのに同じ所をグルグル回ってどうなってるのかと目を白黒させる、それだけでも充分面白い。上手く調節すれば木にぶつける事も出来る、何もなかったはずなのにいきなり木にぶつかって人間が驚愕する様などは三妖精に

とつて爆笑ものだ。

「あれ？あの人変な方向にいつてるわよ」

指摘したのはスターサファイアである、傍目から男は歩きながら少しずつ曲がついていく。傍目からそう見えるという事はつまり。

「なんで、あの人真っ直ぐ歩いてる！」

サニーミルクはそう言った、男は風景に關係なく直進していた。

「本当？それはおかしいわね」

「もしかして目が見えてないんじゃない？」

ずれていく風景に惑わされれないなどまずありえない。あり得るとしたら風景など見えていないのか、あるいは見えていないのか。

「うーん、盲目には見えないけどなあ。おかしいわね」

「どうする？」

三妖精がそんな相談をしている頃、川上は歩きつつややこしい思いをしていた、見えるものと視えるものがズレている。光が三つか。煩わしいなと思ひ、川上はゆつくりと呼吸を変えていく、そして木陰を利用して死角に入ると川上は印を切つて呪しゆを小さく唱えた。

「オシリアニチャマリシエイソワワカ
俺阿爾恒摩利制曳莎訶」

「あれ？見失っちゃった。スター」

木陰に入った男の姿を追った三人だったが、何処へいったのか見失ってしまい、サニーミルクはスターサファイアに呼びかける。レーダとなるスターサファイアがいる限り単体で三妖精を撒くことは難しい。

「ちよつとまって、あれ？動いてないのかな」

おかしいなどとスターサファイアは思った。動いていないとレーダーには引っかかりにくくはなるが動物は生命活動をしている以上レーダーに見えなくなるという事はない。だがスターサファイアの能力は男をロストした。

「んー？」

「どうしたの？」

訝しむような表情を浮かべたスターサファイアにルナチャイルドが問いかけた、スターサファイアはそれには答えず集中してより広範囲を精密にリサーチした。

結果、人間と見られる大型動物は自分のそばにいる二人を除くと少し遠くに一人。こっちは違った、大きさから先程まで一緒に居た方だ、あの男じゃない。

「……見えなくなった」

「え?」

「消えた、みたい」

答えを聞きキョトンとするサニーミルクとルナチャイルドの二人。しかし次第に顔が青ざめていく。

「消えたって、まさか幽霊?」

ぞつとしながらルナチャイルドは言った、冷静に考えれば幻想郷において幽霊を怖れるというのもおかしな話だが。

「でも確かに人間に見えたわよ」

「でも人間が少し目を離れた間に消えるなんて」

そう三人は怖さ半分好奇心半分に語っていた時、いきなりルナチャイルドの膝がかくりと折れた。

後ろからルナチャイルドの態勢を崩し左脇から左腕を回し手で後頭部を抑え、右手で右手首を掌握して拘束したのはいつのまにか忍び寄っていた川上だった。

『わーっ!?!』

一瞬遅れてサニーミルクとスターサファイアの二人が声を出して驚き、走って川上から距離を取った。

「ちよつと、ルナ捕まっちゃったじゃない!なんで能力解いたの!」

「使つてたわよ！スターこそすぐそばにいたじゃない！」

距離を置いたもののルナチャイルドが拘束されてしまったため見捨てて逃げる事も出来ず、混乱した二人は現状の打開には全く役立たない叱責をし合う。

一方捕まったルナチャイルドは拘束を抜け出す事も出来るはずもなく、意味のある言葉も出せずに涙目であうあういう事しか出来なかつた。

「何のつも」

り、とまで言い切らずに川上は即座に体を切るようにして背後に向き直つた。数瞬間に川上の後頭部があつた空間を棒先が打ち抜いた。

川上は突きが伸びきつた瞬間の棒を左手で捉えると腰を入れて棒に力を伝えた。

「わっ！」

それだけで突きを放つた小柄な人物は足が浮き背中から落ちた。

「いてて、相変わらず訳のわからない技を使うな」

「魔理沙さん！」

ぼやきながら立ち上がったのは棒一否、箒を持った霧雨魔理沙だった。ちなみにその時川上から解放されたルナチャイルドは慌てて距離を取ろうとした結果地面にすつ転んだ。

「それで突くなら逆も使つたほうがいい、範囲が広く目潰しになる」

川上は魔理沙に箒の穂先の有効性を説きながら柄を手放した。魔理沙は度々体術で遅れを取った事を根に持っているのか会うとたまに不意打ちで一本を取ろうと挑戦してくる。もつとも今迄全部軽くあしらわれているが。

軽くあしらわれているだけなら随分甘い扱いだろう。

「覚えておくれ。で、何こんな夜道で子供に絡んでるんだ？まあ想像はつくが」

今夜は魔理沙は三妖精に付き合つて虫採りなどをしていた。付き合いもいい為か三妖精とは仲がいいほうだ。

「歩いている時何か干渉された」

煙草を取り出しつつ言つた川上に魔理沙は内心やっぱりなと思つた。冗談が通じない相手なのだ。

「子供の悪戯だよ、いちいち目くじら立てたら大人気ないぜ」

そうか、と無感情に返しながら火を点ける川上を見てスターファイアは言つた。

「魔理沙さん、この人知り合いませんか？」

「ああ、最近こつちに来た外来人で今紅魔館の、あー、執事をやっている川上つていう奴だ」

『えっ！あの館の執事!?!』

「いや、執事ではない」

見事にハモって驚いた三人に川上は紫煙を吐き冷静に告げる。執事は上級使用人だ、新入りの下つ端もいい所の人間が執事のわけはない。

しかし下つ端とはいえ雑務能力はそこそこだが、やはり川上では色んな意味で執事は務まらないだろう。

「じゃあなんなんですか？」

「雑用」

先程驚かされたにも関わらず物怖じせず聞いてくるサニーミルクに川上は端的に答えを返した。

スターサファイアは澄まし顔でその言葉につまりあの館に捕まった奴隷だろうかなどと失礼な事を考えていた。

川上は啞え煙草で四人に背を向け歩き出した。

「こんな夜にどこ行くんだ？」

「館に戻る」

それだけ返してぶれない歩みで川上は歩み去っていった。

「魔理沙さん、なんなんですかあの人の？」

「なんか武術の達人の変人だな」

ルナチャイルドの言葉に魔理沙はそう答えた。しかし人を変人呼ばわりする彼女自

身も充分変である。

「でも、なんか能力が効かなかったんですけど、いつかの兎の妖怪みたいな」

「効かなかったのか？」

一つ考えて、魔理沙は言った。

「まあ、そういう事もあるだろ」

別に不思議な事ではない、もとよりこの地はなんでもありなのだから。もつとも外の世界の武術家が、というのはおかしな気もするが魔理沙はそんな細かい事は気にしない。

ふと気がついたようにスターサファイアが言った。

「あ、今度はちゃんと見える」

第89話

「ねえ」

紅魔館のラウンジで川上は煙草を燻らせながら自分で淹れた珈琲を啜ってボンヤリとしていた所、唐突に入ってきたレミリアに声を掛けられた。

「何だ?」

休憩中か、サボりかわからぬが一服していた所を邪魔される形になっても特に感情は伺えない川上の返答。その隣のソファでメイド妖精のアニスが苦そうにやはり珈琲を飲んでいた。

「貴方強わよね?」

「弱い」

いきなりなレミリアの問いに、川上は即答した。

レミリアは暇だった。

「弱い人間が咲夜をあしらうかしら。謙遜も行き過ぎると傲慢になるわよ」

「謙遜ではない」

川上は深く最後の一口を吸い煙草を揉み消した。そう謙遜ではない。さほどの慎ま

しきはこの男にはない。

「弱いから工夫した。だからある程度出来るようになった」

戦う牙も強靱な肉体も失った人間。そのか弱い生物が地球上の頂点に立てたのは工夫にほかならない。

いつだって、本当の強者とは弱者の中から生まれる。弱者の中から生まれた一人の化け物が強者と弱者の立場をひっくり返しうる。

「言葉遊びね」

ふっ、と笑ってレミリアは言った。

「強者は強いから強い。そこに弱いからとか工夫だとかもつともらしい理由なんて必要ないわ」

それはまさに生まれつきの強者、王者故に言える傲岸不遜だった。

「ど？」

「貴方は強い人間だけど、まだ私の体で感じていないところに気付いたの」

「立合えと？」

「まさか、貴方の中では立合いはどちらかが死ぬ。そういうものでしょ」

レミリアも暇だからという理由で流石に部下に殺し合いを仕掛けはしない。ましてやお気に入りならば。

「試し合いか」

「試し合うんじゃないわ、私が貴方を試すのよ」

あくまでも傲慢な態度を崩さないレミリア、川上は少し考えた。

「君がやれ」

「？」

川上は隣りのアニスに無茶振りをしたが、当のアニスは珈琲を頑張つて飲んでいたので二人の会話を聞いておらず急に話しを振られて首を傾げただけだった。このメイドは仮にもこの館のトップの前なのにこの居直り方は馬鹿なのか大物なのか。

溜息を一つ吐いて珈琲を飲み干して川上は立ち上がる。試される方にとってはなんの意味もないのだ。

「どうすればいい」

「何でもいいわ。貴方の力を持ってこの私の体を犯してみせて」

問う川上にレミリアは静かで妖艶でそして魂を揺さぶるような声で告げた。その体から立ち昇るような紅が川上に視えた。

「なら、今から抜き打ちで君の首を跳ねる、外してみせろ」

「予告しておいて外さないというつもり？大した自信ね」

川上が申し出たのは真つ向勝負である。言つて見れば野球で投手がど真ん中スト

レートを予告して打てるものなら打ってみると言っているようなものだ。搦め手を好む彼らしくない申し出だ。

川上はレミリアの前に立った、相手が得物を持ってないのを加味してもかなり近間だった。身長差から横一文字に抜き打てばちょうどレミリアの首が落とせる。

レミリアは右腕に妖力を集め纏わせて強化した。この腕なら素手で刀を止める事くらい造作もない。川上の左腰からの抜き打ちが右からこちらの首を襲う、それに誤魔化しはない、ならば止めてみせる。

レミリアは単純な火力においては妹に劣るが近接戦なら妹を上回る。曲がりなりにグングニルも神槍の名を冠した槍の使い手なのだ。

王として自称弱者の剣を甘んじて受けるつもりは毛頭なかった。

川上は自然な立ち姿のまま刀の鯉口を切った、僅かにはばき鯉口から覗く。もう一刹那で刀を走らせる事が出来る状態だ、レミリアはドクリドクリと心の臓が高鳴るのを感じていた。

それでも、とレミリアは思う。もし弱者が自分に刃を届かせる事が出来たなら。

何時でも抜ける状態で川上は敢えてゆつくりと右手を上げて柄へと持っていった。まるで抜くまでのカウントダウンでもするかのよう。

川上の右手が下から柄に添えられた。

来る。レミリアは身構えた、瞬きの瞬間。次の一刹那、あるいは一秒後か。いずれにせよ来る。来る。

——もし、出来たのなら

なんの反応も出来なかつたレミリアの首に刃が当てられていた。

——それはもう弱者ではなく化け物だ

レミリアは右の首筋に感じるゾツとする刃の冷たさに惚けたような表情を浮かべていたが、やがて別の表情に変化していった、それは屈辱でも憤怒でもなく歓喜だった。

レミリアは首に付けられた刀を握ると無造作に引つ張った。引かれた刀に川上は逆らってもせず付いて来たところをレミリアは川上の襟首を掴み下に引き寄せた。

そしてレミリアは笑顔でお氣に入りのぬいぐるみを抱くように抜き身の刀を引つぎ、そのままの川上をその小さな体躯で胸に強く掻き抱いた。

自分の眼のつけた人間。やはりこうでなくては。レミリアはそう思った。

「見事よ。よくやったわ」

「満足してもらえたか」

身長差故に膝を付いて白刃を手にしたまま大人しく抱かれたまま川上はレミリアの賞賛に答えた。彼女からはオレンジの柑橘系に花のフローラルな甘いニュアンスが混じる匂いがした。ネロリと呼ばれるビターオレンジの花から取れる香油のものである。

「なんで、寸止とめたの?」

「服が汚れる」

それは斬られたレミリアの服の事か返り血を浴びる川上の服の事か。どちらにせよ、川上はあまりそんな氣遣いはしなさそうな男であるとレミリアは思ってたが。

「紅茶を淹れてくれる?」

「わかった」

レミリアは川上解放し、退屈が吹き飛んだのか、すっかり上機嫌になりながら茶を頼み、川上も立ち上がり立ち上がりながら応じた。

「キャンディね」

レミリアの注文に川上は刀を拭って納めてから背を向けた。紅茶の用意をするために。

じやれついでる二人に全く眼もくれず珈琲と格闘していたアニスがやつと一杯を飲み終わった。

川上がやったのは、首を斬ると予告し、そして相手に受けさせる。その上で来るのが分かっているのに相手は受ける事が出来ないという——つまりは子供騙しである。

なんの事はない、川上はやはり真つ向勝負ではなく搦め手を使ったのだ。

このトリックの種は、来るのが分かっているのに外せないというのが凄い。と思わせ

るだけである。実際は違う、これは斬る川上側が有利なのだ。

受けに徹している相手に防御させないというのはさして難しい事ではなく多少の技量があれば出来る。

相手は受ける事に意識がいき、自然と緊張して居着いてしまうものだ。

そして斬る側は相手が受けだけで攻撃してくる事もないのだから、反撃の心配もなく一撃入れる事に全てを費やせる。実戦ではあり得ない事だ。極論すると試し割りや試し斬りとかわからない。

そもそも攻撃と防御なら圧倒的に攻撃の方が有利なのだ、故に本来は武術に純粹な受けなどないのである。

斬る側が圧倒的有利な条件を、受け側が圧倒的有利にさも見せかける。これは武術を学んでいる人間が良くやるパフォーマンスである。なんて事はないと川上は自分で思っている。

しかし、文字通り人知を超えた、規格外の反射速度や動体視力を持つ吸血鬼に、はたしてそんなトリックだけで首を取れるものなのだろうか？

もし、先程の光景を咲夜が見ていたとしたら、彼女も奇術師である。川上のマジックの種など簡単に見破ったろう。

そしてその上で彼女はこういっただろう。あんな小細工だけではお嬢様の防御を抜

く事など出来るはずがないと。

第90話

紅魔館、庭園。

昼食が終わって3時間ほど、日が大分西に傾いてきた時刻。館で雇われてる妖精メイドの多くが整列していた。

彼女らは割と士気や能力が高く有事の最に戦闘要員として動員される事があるメイド達だった。彼女らは手に木槍を持ち前に立てていた。

メイド達の前に立つのは、涼しげな表情と綺麗な立ち姿のメイド長である十六夜咲夜、一文字に口を結んで一本筋の入った立ち姿の門番である紅美鈴、眠たげで陰気な雰囲気である気のない立ち姿の使用人の川上の三名。

今日はたまにやっている格闘訓練の日であった。ここに先発されてるメイド達は訓練も真面目にこなす素養があった。というより楽しんで出来る素養というべきか。そして三名のうち咲夜は監督役、後の二人は教官役であった。

「メイド長」

川上は小さく声を掛けた。川上は仕事だと呼ばれて出てきてみれば何も説明されず今ここに立っていた、しかし何をやらせたいのかくらいは分かる。

「何?」

「俺は人に教える事には慣れていない」

「良く一緒にいるメイドに教えてるじゃない」

咲夜にそう反論され川上は黙る。それはそうなのだがこれ程の人員を指南するというのは川上に取っては未知の事だ。

「それに何故かあの子も参加してるけど」

咲夜が目線で示すと前線に並ぶ一人は黒髪を肩口まで伸ばして好奇心に輝いている眼をしたメイドのアニスだった。戦闘員でもないのにここにいるのはおそらく川上の影響であろう。

「まあ、私達が主に見ますから川上さんは回りながら気になった所を修正してくればいいですよ」

「……」

軽く言ってくる美鈴に川上は最早何も言わなかった。ただ彼が武芸に秀でていう理由でここに連れてきたのだろう、しかし少々安直な考えだった。スポーツの世界では言われる事だが名選手が名監督となるとは限らないのだ。

だが、別にやれと言われたのならやるだけである。軽く見渡し危うい所を指摘くらいなら出来る。

「皆、注目」

咲夜が良く通る声でメイド達に呼びかけた。それまで何処か散漫で浮ついた雰
囲気だったのが、一気に皆の集中が三人に集まる。

「今回もいつも通り槍での基礎訓練を行うわ。槍での基本はまず突き、これをあ
る程度習得しなさい」

「熟練すれば槍は突きばかりじゃないわ。槍での戦いの基本をまず見なさい」

そう言つて咲夜は控えている二人に目配せする。美鈴が頷き六尺強の槍と細身
の木剣を取る、槍は棒の先に穂先の代わりに綿を入れて布で包んだたんぽが付いた稽古
用のたんぽ槍と言われるものだ。

「適当に受けて下さい」

美鈴は小さく伝えながら川上に木剣を渡した。川上は受け、つまりは負ける側と
して即興演武しろという事らしい。

川上は木剣を受け取ると美鈴と三間の距離を置き右前の半身で正眼に構える。
美鈴も槍を左手を口にして刺突が行えるよう左前の半身で構え穂先を川上に向けた。

瞬間美鈴の閃光のような突きが走る。川上は体捌きと剣で突きを外したが、川上
が外した瞬間にはもう突くより早く手元に引かれた槍から二撃めの刺突が放たれた。

これを川上は二つ目の突きを紙一重で外しつつ入り身。剣先を相手に向けたま

ま間合いを詰め抑えようとするが、即座に美鈴は槍を返して石突側の右打ち払いで川上の剣を払う。剣尖が流れた所に美鈴は一步踏み込みながら川上の喉に石突での突きを寸止めに入れる。

さらに、川上にたいして背中に回り込むくらい深く入身しながら槍を絡めて川上を地面に倒すと美鈴は軽く跳躍して安全な位置に位取りしながら止めの突きは川上の首筋に寸止めた。

槍の機能を十二分に使い、長い物を短く使うといった技量の高さを伺える見事な美鈴の業前だった。メイド達から感嘆の声が漏れる。川上は後ろ返りで立ち上がった。

今の槍術に関して美鈴がメイド達に声を張り上げた。

「このように、槍は長さだけに頼るものではありません。間合いの長さに慢心すると痛い目を見ます、例えば」

美鈴が川上に目配せした、川上は小さく頷き両者先程と同じ間合いと構えを取った。

一合目は同じだった。二撃目の突きが来た瞬間、今度は川上は発勁の応用で木剣で槍を強く上から打ち据えた。強いエネルギーで上から叩き落とされたら槍は地面にぶつかり、美鈴の手は痺れ槍を引くのも返すのも僅かに遅れ、その瞬間には間合いを詰めた川上の剣先が美鈴の右小手を抑えていた。

ス、と川上は離れる。同時に美鈴は槍を手元に引いた、改めてメイド達に向かつて立つと美鈴は声を上げた。

「このように、一突目を外されてあっさり負け、ということにもなりかねません。これを防ぐ為、突きにおいて一番重要な事は何かわかる人はいますか？」

「引くこと！」

美鈴の問いかけに即答したのはアニスである。基礎的な心得は一通り川上から教えられている。

「その通りです。突きは、突く事より引く事だ肝要。これを念頭に置いて練習して下さい」

そうして、練習が始まった。メイド達が手にしているのは美鈴が使ったものより短く四尺程度の手槍である。しかし、幼い体躯のメイド達にはこのくらいが体格にあっているのだろう。

それに紅魔館内は広いと言えど長物をぶつけずに扱うのは難しい。長い物を持たせても文字通りの無用の長物となるだろう。

各々が左手を口にして右で突く基本を練習している。しかし、手突きになつてしまっている者も多かった。腰で突くという基礎を美鈴や咲夜が教える。

川上はメイド達の間を歩きながら皆を観察していた。技量は皆似たり寄つたり

である。ふと、一人のメイドに目を付けた。金髪を背中まで伸ばしたメイドは鋭い目と真剣な面持ちで木からぶら下げた缶詰の空き缶を突いていた。

川上は本人に気付かれないようにそのメイドを観察していた。金髪のメイドは缶を鋭く突く。突かれた缶は大きく揺れるが、メイドはまた構えに戻ると大きく動く缶を突きで捉えて見せた。さらに揺れる缶をまた突く。

このメイドは一人突出しているようだ。動く缶程の的を捉え続けるのは中々であるし、全身を使った突き方も及第点である。集中のあまり周りが見えていないのはご愛嬌だ。

しかし、大事な事が忘れられている。

川上は無音で金髪のメイドに近づき肩に手を置いた、びっくりとしてメイドが振り返った。単なる呼びかけではなく軽い戒めの意味もあつたかも知れない。

「いい突き方だ、精度もいい」

「?ありがとうございます」

いきなり褒められて、少し当惑しながらメイドは答えた。川上は少し遠くで槍を突いては打突に繋げる事をしていたアニスに目をやる。

アニスはすぐ気付いた。川上が手招きすると嬉しそうに寄ってきた。川上は金髪メイドにたんぽ槍を渡した。

「こいつを突け」

「え？」

「本気で当てろ、稽古用だから大事にはならない」

「君はこれだ」

川上はアニスに刃長一尺二寸程度の小太刀の木剣を手渡した。そして一突き目に合わせて寸止めると耳打ちした。

「分かりました」

一応の指南役である川上に言われ、とりあえずメイドは言われた通りにする。メイドは槍を左前の半身の正眼に構えてアニスにと対峙する。アニスは口元に笑みを浮かべたまま小太刀を持つ右を前に半身になり、しかし刀は構えずに無造作に垂らしたままだった。

お互いの距離はちょうど一步踏み込みつつ突けば当たる槍の間合いであり、アニスの小さな刀では遠く届かない。大丈夫だろうか。そうメイドは思う、間合いの差がこんなにあればこちらの方が有利だ、たんぽ槍といえど本気で突いたら怪我してしまう。

しかし、やるからには手は抜く気はなかった。

「行くよ」

「ん」

メイドはそう宣言して、アニスはそれに対し単音で応じた。アニスの右前半身の構えから右肩か右腕、あるいは首か頭が狙える。頭や首は危険だ、となると狙いは肩か腕の中段突き。

メイドのまず少しだけ右で穂先を突き出し、突く氣勢だけを見せた。そこからすかさず全身を使った突き一閃。アニスは相手の裏に回るように足を運びこれを外す。渾身の一突きを外されメイドは虚を突かれてしまう。

すかさず、アニスは前足の膝を抜き、体が自由落下する瞬間後ろ足で強く地面を踏み、間合いを即座に詰めた。地面を蹴るのではなく踏む歩法。

あつけなく懐に入られてしまったメイドは何も出来ずに左小手、続けて首筋に剣を寸止めで入れられた。

「…凄い」

メイドは思わずそう漏らした。あつというまに間合いを潰した踏み込みがまるで消えたみたいに捉えられなかったのだ。アニスは一つ笑みを咲かせて下がった。

「始める時門番が言った事を覚えてるか」

「あつ」

川上の言葉で何がまずかったのか理解した。引くこと。金髪のメイドは突く事に意識が行き過ぎて突きっぱなしになっていた。

アニスは体に癖がなく教えた事をすぐ噛み砕き自身の体で覚える天賦の才に近いものがある。短期間の指導で稽古とはいえ槍に勝つのは誰でも出来るものではない。

しかし、アニスの技量では槍を外すと同時に距離を潰す事は出来ない。躲してから踏み込みまでに継ぎがある以上、ちゃんと基本通りに引くことが出来ていればこう簡単に負ける事は無かった。

川上は口で言えば済む事を敢えて負けさせた上で指摘した。

「突いている時、自身の姿がどうなっているか。良く良く吟味する事だ」

そういいながら川上は先程までメイドが使っていた木槍を取りメイド達と違い右手側を口にして構え、ぶら下がってる空缶に対しパシュツ、と突きを一閃させた。突くと引き戻すが一連になっていて突きの瞬間が捉えられない。

おー、と思わずメイドが感嘆した。川上は木槍をメイドに返して、もう教えるべき事は終わったとばかりに背を向け歩き出した。

メイドはその背を見送り、よくわからない踏み込みを見せたアニスにキラキラ光る眼を向けて言った。

「貴女凄いのね」

「先生の方が凄いわよ」

アニスはあっけらかんといひ空缶を指差した、その指先に視線を向けたメイドは

それに気づき驚愕した。

一切揺れていないぶら下がった空缶には貫通した穴が開いていた。

第91話

とある武家屋敷の大広間。

複数室を障子を取り払い一室と使っているらしい、その場には数十名の人間達がいた。

多くは三十代から中年までの男性だったが、一部にはまだ十代と見受けられる少年や、中年女性なども見受けられた。

皆表情は様々だった。口を結び厳しい表情をした男、もの悲しげな目をした寂しそうな中年、三白顔になった眼の中に激しい憎悪が燃えた女性、陰惨な笑みを口元に浮かべた若者。

皆が同じ表情を浮かべているわけではないが、皆の顔が悪意や憎悪、殺意といった負の感情から来ているところは共通していた。

各々刀や短刀、手槍などの武器を身につけていた。笑みを浮かべる若者などは抱えた刀を愛しそうに撫でて血みどろの闘争の予感に酔っていた。これらは彼らの抵抗の象徴である。

ふと座敷に一人の男が現れ、皆がその男に顔を向けた。四十代前半と思しき男

は、簡素な和服に袴姿、大小を腰に二本差しにしていた。鋭利な輪郭に強い意志を瞳に宿し、背中くらいで切り揃えた髪を後ろに束ねていた。そしてやはり彼も強い憎悪を持ちながらそれを発散させぬよう心の中に留めていた。

男はこの集団のリーダーだった。

「この幻想郷は人妖の平等と共存を実現した理想郷である」

リーダーである男は静謐な口調で語り始めた。皆も黙って傾聴している。

「皆もそう教えられて、いや刷り込まれて来ただろう。しかし私は疑問を抱いた」
「妖怪は人を襲い人に恐れられる。人は妖怪を恐れて妖怪を退治する。そういうルールであるという」

立ったままで男は皆に視線を送りながら、しかしあくまで静かに語る。

「このルールの上で人妖は平等であると、人は喰われ、妖は倒され、そして共存していくと。かつての外の世界はそうだったのだと、この幻想郷セカイもそうなのだと言ふ。しかしこれを語ったのは誰だ」

静かで平坦だった男の口調が段々抑揚が付き強い口調になっていく。リーダーは今一度皆の顔を見渡す。皆段々眼光が強くなっていった。

「ほかならぬ妖怪なのだ、我々はこの幻想郷セカイで確かに喰われてきた。妖も倒しだろう。しかし！」

「我々は死んだら終わりだ、死んだ人間は生き返らぬ。妖怪は退治などといって封印などが精々だ、完全に滅する事が出来るのは雑魚妖怪が精々」

「そして、人間でありながら妖怪を斃す力のある者はいつら妖怪を滅したか？我々人間を、皆の愛する者達を喰らった怪物達に復讐してくれたか？」

「否ッ！」

男はヒートアップするように強い口調と身振りで皆に語りかけ問いかけ、最後の一言は右腕を大きく振りながらの怒号に近かった。それを聞いていた皆の眼の憎悪が増した。

「何もしてはくれない！やつらには我々の悲しみは無縁なのだ！スペルカードルールなどという遊びで退治したなどと宣う。博麗の巫女はどうだ!？」

そこで男は一つ間を置いた。

「妖怪退治屋などと自称しておきながら、神社であるの巫女は妖怪と馴れ合っているではないか!!」

激しい身振りと共に叫ぶように男は皆に言った。

「妖怪の山の守矢神社の風祝はどうだ!？」

「……人里では耳触りのいい事をのたまいながら、山の妖怪に崇められて信仰を得たなどと悦に浸っているではないか」

今度は意思の籠ったしかしあくまで静かな口調で皆に視線をやりながら言った。

「妖怪の巣窟の寺など語るに値しない」

「妖怪を斃す立場にいる人間達の代表達が明らかに妖怪に通じている。この矛盾に何故誰も疑問に思わないのだ!？」

そして、男は皆一人一人の顔を見渡し告げた。

「この幻想郷は明らかに妖怪達に都合よく出来ている」

男は絶望感の込めた口調で続けた。

「認めたくない事実だ、だが認めなくば何も変わるまい。我々は妖怪達に飼われている家畜にすぎない」

「里の人間の多くは気が付かない。あるいは認めたくなくて気が付かないふりをしてしている者もいるだろう」

そこまで引くトーンで顔を伏せるように言った男は突然顔をあげ、眼を剥いて声をあらん限りに張り上げた。

「それでいいのかッ!!」

「ここに居る者達は気が付かないふりなど出来ないハズだ!自分の愛するものを殺されてなお気が付かないふりなど出来るハズがないッ!!」

「思い出せ失った者達の声を!思い出せ!化け物どもに殺された愛する者の骸

をッ！」

話を聞いていた皆、愛しき人を妖怪に奪われた反妖怪派組織の構成員達の眼に憎悪と殺意が燃え上がった。

「忘れるな！正しき怒りをッ!!」

『おおおおおオオオッ!!』

溢れんばかりの憎悪に酔いしれるように武器を握りしめその場の殆どのものが力の限り咆哮した。

そして場がゆっくりと鎮まり返ったところで男は告げた。

「やつらが平等を謳うのならその通りにしてやろうではないか」

男は腰に差した刀を鞘ぐるのまま抜いて右手で突き出して吠えた。

「皆、これは反逆である！私は化け物どもを許しはしないッ！」

最後に自分の思いを告げて、男はレトリックを凝らした演説を終えた。

演説の熱が冷めてきた頃、指針を決めるための情報交換がまず行われた。

「稗田阿求を取り囲んだ同士が妙な男にやられた、だと」

その中で一つ気になる話があるという幹部の言葉を聞いてリーダーの男はそれを傾聴していた。

「義憤にかられた通りすがりか稗田の関係者ではないのか？」

「それがどうも違うようです」

幹部の男は神妙な顔で語った。

「連中から話を聞くと、稗田阿求の言葉で稗田家の護衛だと思つて突つかかったらしいんですが、冷静に考えてみるとおかしいみたいで」

「関係者ではなかつたと」

「ええ、なんでもその男は稗田を取り囲んでる所に通りすがりだけで素通りしようとしたそうで。どうも稗田に謀られたらしい、と」

「あのガキが考えそうな小賢しいやり方だな。だが話は稗田ではなくその男の事か」

男はすぐに話の筋を理解して先を促した。

「はい、まず恐ろしく腕が立つたと。そいつは帯刀していたらしいですが刀も抜かずに、でして。三人の中二人はまだまともに動けません」

「それだけなら特に気になる点はないな、まだ何かあるんだろう」

先を促す男に幹部は一つ頷いて続けた。

「はい。立見さんは里の外での野党団の事件はご存知で？」

「無論知っている。里の人間からも殺掠する不逞の輩、当然の末路だ」

問われたリーダーである男——立見はそう吐き捨てた。

「それがですね、寺子屋に通じた知り合いから聞いたんですが上白沢の奴は奴らを殺した奴の目処が付いてるようなんです。まだ見つけていないそうですが」

幹部の言葉を聞いて立見は思案しながら口を開いた。

「殺した奴、だど？ 単身の仕業なのか、数十人やられたはずだ。いや、それより、まさか」

話の流れに立見は気付いたらしい、幹部の男が告げた。

「上白沢が目処を付けている相手は、名は清水。背格好はウチの連中をやった奴と全く同だそうです」

「確実とは言えませんが。この話をしておかない訳にはいかないと思ひまして」
うむ、と一つ唸り思案する立見。十秒ほど考えて口を開いた。

「その清水なる人間、どう思う」

「連中の話を聞くと義憤なので動く人間ではなさそうですね。しかし里の者でもなし、注意すべきかと」

立見は髭もない顎を撫でながら、慎重に言った。

「危険はあるだろう。だが何事も効果があるのは劇薬だ」

「立見さん」

側近は意外そうに立見を見返して、意味なく名を呼んだ。

「利用できれば、切り札の一つになる。あくまで可能性の一つだ、だがその清水なる男の情報は集めておけ」

側近もまた考えこむ。自分の所の者がやられたから危険分子と決めつけていたが、立見の言う通りまだどのような者かわかっていないのだ。

危険なモノというのはいずれの使い方によつては大きな武器となりえる。そこを立見は分かっていた。

「わかりました。そのように」

この人とならきつと化け物たちに一泡吹かせられる。そう確信めいたものを抱きながら敬意を込めて側近は答えた。

幻想郷にいくつも燻っている火種。その一つが燃え上がらんと熱を蓄えつつあった。

第92話

「運命?」

「そう運命って何? お姉様が良く言っている」

川上は夜半、余暇を持って余したので、図書館で紅茶を飲みつつ本を捲っていた。この館に来てから本を読む事が多くなった。

テーブルの対面。椅子に座り本を読むパチュリーの膝に座ったフランドールが唐突に川上に問いかけて来た。

川上は全く思いも寄せたことのない単語。運命というモノに関して問いかけられて、返すべき答えが見つからずに本をパタンと閉じる。

川上は紅茶を一口飲み考えた。フランドールを膝に乗せたパチュリーは本に目を落として何も口出しはしなかった、そもそも聞いていないのかも知れない。

「解釈次第でどうとでも言える漫然とした概念、だろう」

しかし、特に運命に対して一家言ある。という訳でもないので川上はいい加減な答えを返す。

「解釈次第で?」

「妹様はゴルデイオスの結び目という話を知っているか」

「フランよ。知らない、何それ」

川上は唐突に話を始めた。それに対してフランドルは自分の呼び方を訂正しつつ答える。

「アレクサンドロス三世という人物は」

「聞いた事あるような気がするけど、よく知らない」

「紀元前4世紀のマケドニアの王。伝説的な大英雄と語られる人物よ」

川上の問いに答えられなかったフランドルに対して、パチュリーが補足した。どうやら話は聞いていたらしい。

「その王様がどうしたの？」

川上はパチュリーの前ではタバコを吸えないので懐から取り出した干し肉を取り出した。ちまちまと嘔みながら続きを話し始める。

「リュディアという地にある神殿に一つの戦車が祀ってあったそうさ。戦車はかつての国王が神殿の柱に固く結びつけてあった」

「そしてその地には、その結び目を解いた者がアジアの王になる。という伝説があったそうさ。その結び目は頑強で多くの腕に覚えのある者たちが挑戦したが誰も解けなかった」

川上は一息吐き干し肉を食い千切り、紅茶で流しこんでから、君なら解けるかも知れないがなどと言った。

フランドールは分かっているような分かってないような顔で続きを促した。

「そしてその地に遠征してきたアレクサンドロスはその結び目に挑戦したのだそう。さてそれでどうなったと思う？」

川上の問いかけにフランドールは少し考えた。

「大英雄で王様なんですよ？解いちやっただんじょ」

フランドールの予想は大英雄の逸話にありそうな展開としては至極真つ当だったろう。

「いいや、結び目は固かった中々解けない。アレクサンドロスは無理だと判断した」

「大した事ないんだね」

「そこまではな。しかしアレクサンドロスは無理と判断するやいなやナイフを抜いて結び目を断ち切ってしまった」

「へえー」

川上は二本指を立てた指剣で断ち切る素振りを入れつつそういい。フランドールは素直にそういうやり方があるかと感心した。

「当然、それを見ていた人々の中にはそれは違うだろう、結び目は手で解いてこそ意味

があるはずだ。アレクサンドロスは間違えてると考えたものはいるはずだ」

「だがアレクサンドロスはこう言ったという」

川上はそこで一つ間を置いた。

「曰く、運命とは、伝説によつてもたらされるものではなく、自らの劍によつて切り拓くものである」

続きは小さな声量だが何故か耳に通る高い響きの声が告げた。

「アレクサンドロス三世はそう言つたらしいわ」

川上に代わり、かの大英雄の言葉を紡いだのはパチュリーだった。

「そして、アレクサンドロスは数々の戦に勝利して、結び目の予言通りにアジアの王となつた」

川上は干し肉の残りを口に放り込みつつ言つた。

「結び目を解いたから王様になつた？」

「結び目を斬つたからこそ王になつた、と俺は解釈する」

口の中でもくもくと咀嚼しつつフランドールの言葉に川上は答える。そう恐らく斬つたのが伝説の結び目だろうとただの結び目だろうとアレクサンドロスの偉業が変わる訳がない、それはパチュリーの言つた言葉からわかる。

「解けないから切つちやうなんて貴方がしそうだね」

クスクスと笑いながらフランドールはそう感想を述べた。パチュリーはフランドールの髪を手櫛で優しく梳きながら言った。

「解けなければ切る。最初のアプローチが駄目ならすぐさまベクトルを転換する。確かに貴方の兵法に通ずるものがあるわね」

「アレクサンドロスは兵法家だ、何も不思議じゃない」

川上は干し肉の飲み下しながら言った。

「意外かも知れないけどレミイは運命至上主義ではないわ。むしろアレクサンドロスのような者を好む」

「ふうん」

川上は紅茶の残りを飲み干しつつどうでも良さそうに返答した。適当に煙に巻くために出した小話である。しかも仕入先はこの図書館の蔵書。

「お兄様だったらその結び目をどうする？」

フランドールの問いかけに川上は、さあ？とだけ答えて席を立つと片手で礼を残してその場を退席した。

「ねえパチュリー、お兄様だったらどうすると思う？」

その場に残されたフランドールはパチュリーの豊かな胸に後頭部を埋めつつ少し弾んだ声で問いかける。

パチュリーは少し考える。先程フランドールが言った事、結び目を切るとは如何にもあの男がやりそうな事だ。

「妹様の言う通り。彼なら斬るでしょうね」

「そうかな？」

フランドールは意味なくパチュリーの二の腕を揉むように触れながら言った。

「案外結び目に何もしないかも。意味がないからつて」

フランドールの言葉にパチュリーはその考えは成る程あの男らしいと思わず笑った。

紅魔館のメイド長である咲夜が厨房で食器を片付けている時、ふと気付いて振り返ってみると棚を物色している川上がいた。

この男は神出鬼没でしかも気配が捉えられないので、全く心臓に悪いが咲夜も段々慣れてきた。咲夜自身が能力上全く同じ感想を他人に言われる事がこれまでたまにあったのだが、成る程自分が他人からどうという印象を与えていたのか始めて分かった。

咲夜は気にせずに仕事に戻る。

「メイド長」

「何？」

川上に声を掛けられて咲夜は始めて手を拭きながら川上に向き直った。

「スープか何か頼めるだろうか？」

どうやら川上は小腹が空いたのか食料を漁りに来たらしいが、成果が芳しくなかったようだ。

「お腹空いたの？いいわよ。少し待ってて」

咲夜は朝食用の仕込みの中ですぐに使えるもので頭の中で野菜スープのレシピを組み立てつつ答えた。

「ありがとう」

礼を言って川上は厨房を出て行く。その後、咲夜は適当にキャベツやら人参やらベーコンを出しつつふと気付く。

あの男はコーヒーだの死体だのは所望した事はあるが、夜食を頼まれたのは初めてだなと。

続けて主人の言葉を思い出す——川上は貴女には懐いているわよ——
うーん、と咲夜は少し考える。そうなのかなあ、と。

まあ、いいかとあっさり割り切ると咲夜はスープの具にする野菜を刻み初めた。

第93話

深い森に覆われた山。

幻想郷においては個人主義の妖怪達にしては珍しく、妖怪達が社会を築きその拠点としてゐる通称妖怪の山。

まだ陽の高い午前中、山に開いた長く続く参道を歩く二人組がいた。

やや小柄な体躯に白黒のエプロンドレスに身を包みトンガリ帽子という出で立ちで、緩くカールした金髪で幼さを残した愛らしい顔に飄々とした笑みを浮かべ。身の丈ほどの箒を担いで歩いている少女は霧雨魔理沙である。

比較的長身に、地味な黒い長袖の洋服を着込み。ベルトに刀を差して背中に五尺を超える反りの浅い野太刀を背負い。黒髪に黒い眼、整つてはいるが坐つた三白眼が近寄りが見たい酷薄で昏い印象を与えてしまう顔付きに眠たげな表情を浮かべて歩いているのは川上である。

今日は風が吹いており過ごしやすい。晩夏の秋めいた風は涼しかった。

「道は外れるなよ、ここの奴らは細かい事をいちいちうるさいんだ」

「ああ」

川上は妖怪の山にあるという守谷神社に興味を持ち参拝に来ていた。魔理沙は暇つぶしも兼ねた案内役であった。

妖怪の山の妖怪達は他者に排他的である事で有名であり、基本的に部外者が山に立ち入る事は許さない。

一応守谷神社の参拝客の為の特別な措置として決まった参道に限り部外者の通行を許している。

「神社がもう一つあるのはいいが、これで参拝客など来るのか？」

「まあ、参拝出来なくはないが、実際客は殆どこないらしいぜ。まあ、わざわざ山に立ち入ってまで来る物好きなんかそうそういないだろ」

川上の言葉に魔理沙はあっさりと言った。実際参道が開けてるとはいえわざわざ妖怪達の本拠地に立ち入り険しい道を踏破してまで参拝するほどの信者などまじらないだろう。

参道といえど歩きやすく整備なんて全くされてない道だったが、魔理沙も川上もその手の道行は慣れているのか足運びに淀みは無かった。

「霊夢の所の神社も大概だが、こっちの神社の参拝客は絶望的らしいぜ。もつとも山の妖怪達に結構信じられてるらしいが」

「へえ」

魔理沙の解説に川上は気の無いあいずちを打った、そして懐からゴールデンバットを取り出しつつ言った。

「その神社は確か何といった？」

「守谷神社だ」

守谷神社、守谷。何か引つかかるような、そんな事を思いつつ川上は啞えた紙巻に火を点けた。

歩きつつ一服吸った所で、川上は左腕を出して魔理沙を静止した。

「どうした？」

魔理沙が聞いたのと同時に参道の脇の森から白い人影が飛び出し、二人の前に立ち塞がった。

約五間の距離を置いて進行方向に立ったその人物はショートカットというには長い白い艶のある髪をしており、頭には獣の耳、さらに山伏風の帽子を乗せている。眼は赤く童顔で愛らしい顔立ちだが、浮かべる表情は鋭く、どこか精悍さも感じさせる。

やはり白い上着は腋が空いており、二の腕に独立した袖を着用しているのは風祝の東風谷早苗に近い。スカートは黒地に縁が赤のダンダラ模様となっており秋の紅葉を思わせるような意匠だった。腰には煌びやかな太刀拵の一振りの太刀を佩いており、小刀も一振り差していた。

「お前は、確か……：楳か？」

魔理沙は突如として立ち塞がった相手の名——白狼天狗の犬走楳の名を呼んだ。

「何の用だ？別に山に押し入るようなつもりはないぜ」

驚きから気を取り直した魔理沙がどうにも剣呑な雰囲気発する楳にそう告げる。

「貴女に用は無い」

魔理沙には一瞥もくれずに楳は返答した、彼女は魔理沙などではなくずっとただ一人を見ている。最初から。この山に入った瞬間、いやそれ以前から。

楳の視線の先にいるのは紫煙を浮かべて蒙昧な眼をした川上だった。

「こうして相見えるのは初めてと言うべきか二度目と言うべきだろうか」

「そちらから出向いてきてくれた事に感謝する。いつかの蛍の光の中のをせせらぎでの挑戦、確かに受けさせて貰う」

川上はぼんやりと思いを巡らす。そう言えば誰か見てるから戯れに挑発的な仕事をした事があつた。そう言えばこちらの方角だったかと川上は思った。

「おい、ちよつと待て！この山で揉めたらこつちがタダじゃすまないぜ」

魔理沙は慌てて割つて入った。天狗は妖怪の山で縦社会を築いている種族である。目の前の楳は哨戒役の下っ端と言えど手を出したら面倒ごとになるのは想像に難しくはない。

「心配無用。今私は公人としてここに立っているのではない。私人として、一匹の天狗として、一人の武人として貴方の前に立っている！」

かつて川上が戯れに近い考えでした行為。それが犬走権という天狗の、いや武人の何かに触れてしまったのか。

権の声には嘲りや怒りと言った色は無かった。強い意志の籠った張りのある少し低めの響き。

「おいおい、はいそうですかと間に受ける奴が」

「京八流、犬走権！一手所望す！」

抗議しかけた魔理沙の言葉を遮り権は声を川上に向け張り上げた。

権の右手が豪奢でありながら振るうのに差し支える邪魔は省いた麗しい外装の太刀に手がかかり、ゆっくりりと太刀を抜いた。

抜いちちゃったよ。魔理沙は眼も当てられずそう思うしかなかった。面倒ごとになった、何とかこの場を納められないか、とそこまで考えて悪い予感がして振り返った。

悪い予感が当たり魔理沙は帰りたくなった。川上は既に抜刀を済ませていたのだ。プツと川上は短くなった煙草を吹いて踏み消して言った。

「承知した」

権が初めて小さく笑みを浮かべた。少女らしく愛らしい笑みとはかけ離れた攻撃

性から来る笑い。

椀は太刀をゆつくりと取り上げて、八草に構えてると言った。

「——征くぞ」

第94話

魔理沙はもう帰つてしまふべきかと考えていた。

天狗が社会を築く妖怪の山、川上と連れ立つて不可侵のはずの参道を歩いていたら急に一匹の天狗が何故か川上に挑戦してきたのだ。

そしてそれを川上が受けた。詰みだ。川上が負けて死ぬのはまあ良くはないが、まだいいでしょう。ましてや勝つてしまつても天狗社会に戦線布告する事と同義。

魔理沙が巻き込まれない内に帰りたくなるのも無理からぬ事だった。

しかし、案内に出る時、自分は空けるわけにはいかない。危なっかしいから良く見ていてと咲夜に頼まれている。あの咲夜に頼まれるとどうにも魔理沙もあつさり見限るといふ事も忍びなかつた。

魔理沙は頭を巡らせて、一言川上に言った。

「殺すな！」

殺さなければどうとでもなる。しかし無茶な言い振りだったかも知れない。真剣同士で手心を加えろと言つたようなものだ、そもそも白狼天狗は頑丈だからそう簡単には死なない。言うべきでは無かつたかも知れないと魔理沙は思った。

しかし、言おうが言うまいが今の言葉、剣鬼に果たして伝わっただろうか？

川上が反りの浅く切っ先の小さくなる寛文新刀の特徴を備えた安定を半身となり青眼に構えた。

対する権はこめかみの横で太刀を八草に取り上げている。太刀は如何にも武骨で実質本位と言った具合であり、身幅も広く反りははばきもとで踏ん張りの効いた腰反りで大切っ先となっている。

打刀に比べると明らかに長寸で二尺七寸強はあるだろう。二尺四寸の安定に比べ三寸は長い。たかが三寸、されど三寸の優位。

立ち位置。参道の坂はきつめだ。権が上位に立ち、川上は下位に立つ。

上を取っているという事だけ聞くと権が優位に感じられるかも知れない。一般に戦闘は上を取る物と思われがちだが、その実違う。

事、剣術の弱点は下段にある。低い位置へと太刀を送るのは難しく、そして低い位置への攻撃を受けるのも難題だ。

常に相手の上から剣を送るしかない権と相手より下から剣を送れる川上、どちらが優位かは明らかである。

しかし、この山は権の陣地。それだけで単純に地の理が川上にあるとも言えない。なればどちらが上か明らかにするには剣を振るう他無かった。

川上は青眼のまま呼吸や拍動すら感じさせずに微動だにしない。

動いたのは椀だった。八草のまま走って行つて無造作に横殴りに太刀を川上に叩きこんできた。

はつきり言つて洗練されてるとは言えぬ動き。しかしその力とスピードは異常だった。川上は先先の先も後の先も取る事を見送り上段に取り上げつつ下がって間合いを切り外す。

斬撃をやり過ぎし剣先が流れた瞬間。川上は切り込もうとして——また一步下がるしかなかった。剣先が流れたと見えたが、あり得ない臂力で強引に軌道を反転させて凄まじいスピードで切り返して来たのだ。

攻めてくる相手に対し二度も下がって剣を避けるという川上らしからぬ悪手。しかし、一太刀目の後そのまま切り込んでいたら川上の刀が椀の頭を割るより早く椀の太刀が川上の胴体を上下に分割していただろう。

正直に言つて椀の剣腕は凡庸だった。剣術は魂魄妖夢の方が遥かに上だ。しかし速さ、力が普通ではない。

ましてこんな異常な力で振られる異常な速さで走る剣を刀でまともに受けるなどとは考えられない。受けた刀ごとへし切られる。

椀はさらに剣を振つた勢いを殺さずに後ろ回しの要領で踏み込み背中を見せて一

回転しつつ刀を頭上に取り上げて唐竹割りに斬り落としてきた。

これを川上は左サイドに真半身になりながら入身し、椀の腕にやつと一太刀を浴びせ——刀が右上腕に食込まんとした瞬間に椀はお構いなしとばかりに斬り落とした太刀を横薙ぎにしてきた。

咄嗟に川上は左手で椀の右小手を抑えて太刀を封じ、しかし力まかせに振り抜かれて川上は横に弾き飛ばされた。

チツ、と二人は同時に舌打ちした。川上の一刀で上腕を斬られ、右腕など知った事かと切り返したのに仕損じた椀。そして骨まで到達出来なかつた一刀と椀の肉体の強靱さを悟り、相手の戦闘能力を一切削ぐ事が出来なかつた事を理解した川上。

「入ったぞ！もう辞めろ！」

椀が流血したのを見て、魔理沙が静止した。

「否！」

それに対して椀が否定して。

「浅い」

川上が追認した。

「流石あの距離からこちらの視線を認識するだけある。只者ではないと思つたが、想像以上に来る」

椀は刀を上段に構えながら、川上に対して賛辞を口にした。

「そちらは名高い天狗とみるがそれにしてはいささか優雅さにかける」

対して川上は抑揚なく挑発的な台詞を口にした。

「剣など相手を叩き斬ればそれでいい」

椀は挑発には乗らなかつた。自分の剣が凡庸だと自覚しており、その上でそれで良しとしている。

剣術など要は、自分は守りつつ相手を斬る技術である。並みではない頑強な肉体と、人智を越えた臂力と瞬発力を備えた椀には必要ないのであろう。

「如何に練り上げて洗練しようが、私に届かぬのなら貴方の剣こそ無意味だったという事だ」

椀は意趣返しに挑発的な台詞を返して、川上は無表情に全くと返した。

はつきり言つて、勝つだけなら川上には刀を捨てる類の勝口はいくつか視えた。元来この川上という男は剣を取りながらも勝つ為なら剣を捨てる事を厭わない。

この男は武芸者であるが武士ではなく武道はあれど士道はない。

この男が学んできた武術流派は生き残る為ならどんな卑劣もよしとする。それ故同じ古流武術家にすら忌避されるような流派であり、だから川上は学んだのだ。

しかし、剣を捨てて勝つのはこの場合は川上の目的に繋がるのか。

彼は神社が見たかった。

椀が気合と共に一瞬で間合いを詰め落雷のような斬撃を落として来たのに対し、川上は今度は右サイドに入身をした。

そして椀の左上腕を襲ったのは今度は刀ではなく右手であった。川上が椀の前腕を掌握して指が痛みに食い込み二、三回揉み込まれた。

椀は痛みに顔を顰める。腕を掌握し捕手で倒してくる気であると即座に理解して、また強引に腕ごと横薙ぎにして川上を引き離した。

椀は相手が攻めあぐねているのを感じていた、このまま油断なく攻め続けば勝てる。そう確信した。

椀は今度は逆袈裟に斬り上げようとして——左腕がビキリと小さく鳴ったのを聴いた、直後に腕全体に激痛。意志とは関係なく左指が開いた。

「つつっ！」

苦痛に歯を食いしばった。左腕の筋肉が痙攣を起こし硬直していく。腕が攣った状態、俗にいうこむら返り。

川上は指を食い込ませれば相手の筋や神経に作用する事が出来る。相手の四肢を封じる事もなんという事もなく、このような小技も結構役に立つのだ。

椀が斬ろうとして斬れなかった逆袈裟の隙を見逃す川上ではない。刀を逆の八相

に取り上げ即座に踏み込んできた。

椀はいふ事を聞かぬ左手を捨て置き右だけで斬り上げようとしたが、初動が圧倒的に遅れた為、起こりで右手首を斬り飛ばされ太刀を握ったままの右手が斜め前に飛んで行った。

川上は平に寝かせた切っ先を椀の喉に付けた。万事休す、椀は右手と太刀を喪失して左は動かさず、両足も位を取られているため有効な蹴りは出せず、勝負有りである。

そう魔理沙も思つた瞬間、椀は動いた。首が切っ先で軽く裂けるのも構わずに刀の裏に入りつつ川上に向かって大口を開けて踏み込んだ。犬走椀の最初から持ち得た最後の武器はその牙と凄まじい咬合力であつた。

しかし川上は左で椀の襟首を掴みつつ自ら横流れで倒れこみながら椀の腿の付け根を足で跳ね上げる捨身投げで椀の突進力を利用してあっさり投げた。

椀は綺麗に一回転して背中から地面に落ちた、その時には後ろ返りした川上が上からのし掛かり刀身を首に押し当てた。

今度こそ、詰みである。両肩の起点を川上の膝が抑えていた。

「参った」

椀は負けを認めた。

魔理沙は一息ついた、何とかかなりそうだと思ひ、しかし悪寒を感じて周りを見渡し

た。

——周囲の森に白狼天狗の赤く光る眼がいくつも浮かんでた。

第95話

まずい、囲まれた。

何時の間にだ。魔理沙はそんな事を思い、しかし、問題はそこじゃない事に気づく。ある意味想定通り、悪い意味で。魔理沙の懸念は実際のモノとなり、川上は勝つてそこを数多の哨戒天狗に目撃された。

宣戦の布告も同義と取られただろう。事実、魔理沙の予想を裏切らず、周囲の森の木上に四人はいる白狼天狗達からの闘気、いや殺意が肌を刺していた。

「貴様ア！」

そしてとうとう殺意を抑えきれず破裂させた血の気盛んな白い髪を腰まで伸ばした一人が火蓋を切った。

腰から太刀を抜くと、文字通り発砲されたかのように木から川上に向かい白い閃光が走る。軌跡に白い残像が映るのしか見えぬ矢のようなスピード。

「止めろ！」

同時に強く、大きく、良く通るやや低めの椛の音が森に響いた。

椛自身の制止を受けて、飛び出した白狼天狗は川上の目前で止まっていた。

いや、制止で止まったのだろうか？天狗が川上に向かい太刀を袈裟に振り下ろさんとしたその右の裏小手を川上の刀が下から抑えていた。

そして魔理沙も懐に手を入れ構えていた。一触即発。

「これは私が望んだ立合いだ。この勝負に水を差す気ならば、私への侮辱行為と取る。何人たりとも許さん！」

椀の言葉は先程の制止と違い大声ではなかったがやはり良く通り、強い意思を感じさせた。

「しかし、先輩……」

飛び出してきた白狼天狗は裏小手を取られ、さらに椀に叱責され複雑な感情に困惑して声を上げたが、続く言葉がなかった。

「椀、貴女はその者により斬られた。これはその者の我々天狗への敵対行為では」

木上で事態を静観していた一匹の白狼天狗が意見した。

「それは違う。この山での規律を侵したのはこの者ではなくこの私だ」

椀は立ち上がり、同僚と思きその天狗に向かい言った。

「私は人間に対して不可侵とされたこの道にて、不当にこの者に刀を向けた。この者は自衛をして、この結果になったに過ぎない。」

「その人間二人、貴方達の意見は？」

「相違ない」

「ああ、間違いないぜ」

椀の意見を聞き、その天狗は川上と魔理沙に話を振った。二人は追認した。

「先輩」

「下がってくれ。気遣いは感謝する、ありがとう」

椀は自身の為に飛び出して来た後輩に厳しくも優しく礼をいい、椀より頭一つ低い後輩の頭をポンと軽く撫でた。

川上は刀を下げたまま煙草を取り出し、火を点けていた。

それでその天狗は太刀を納めた。椀に一礼をして、最後に川上を殺しかねないような眼で一瞬睨み。その場を下がった。

「皆……この事を報告するならば、私の事を告発しろ！その他一切の虚偽はこの私が許さん！」

椀はその場にいた全員にそう言うのと、皆それに応じて一礼した。椀も返礼する。それで集まった白狼天狗達は一人を残しその場から飛び去った。

椀は木の上に一人だけ残った白狼天狗の事を見据えた。小柄で他の白狼天狗達と同じ装束の少女、艶のある長い白髪を右肩越しに前で束ねて体の前で房として垂らしていた。整った顔には表情も無く何処か眠たげな感情の読めぬ眼が、彼女を見た目よりも

大人びて見せた。そして佩用している太刀は身の丈を超える腰反りの強い野太刀だった。

「隊長」

権はその白狼天狗、哨戒隊長の彼女に呼びかけた。

しかし、その少女はただ感情のない眼でぼんやりと権の方を見ている。いや、ぼんやりとした眼なのでわかりにくいがその視点は権ではなく川上か。

「…本日も異常無し」

やがて、その天狗は聞き取れるギリギリの音量でポツリと呟くと背を向け、飛び去っていった。権はその背に敬意を込め礼をした。

それを見届け、川上は唾え煙草のまま刀を懐紙で拭い、納刀をした。

「迷惑を掛けた」

権が川上に礼をしながらそう謝罪した。この謝罪はおそらく立合いを仕掛けた事ではなく、仲間の白狼天狗達とのしがらみに巻き込んだ事へのものだろう。

「いや」

川上は迷惑に思っていない事を一言で伝えた。しかし、彼はそれだけでは伝わり難い事を自覚していないのか、伝える気がないのか。

「全くだぜ、そもそもそう思うなら最初から自重してくれよ」

魔理沙は不要に自身の胃を痛めた事もあり、文句を返した。

「確かに無関係な貴女にも迷惑を掛けた。血が騒ぎ自身を抑えきれなかった、立合いの結果といい自身の未熟さを痛感するばかりだ」

そう、椀は未熟を痛感したのだろう、そこに嘘は無かった。しかし彼女の表情は何処か晴れやかだった。

「貴方の名前は」

椀は川上に尋ねた、川上は煙草を落とし踏み消しながら答えた。

「川上」

「川上、か。かわかみ、その名前、忘れない」

椀はその名の響きを吟味するように口にしながらそう言った。そして自身の右手が付いたままの落とした太刀へと歩いていく。

椀は太刀から自身の手を取ろうと思ったが、何故かその前に川上が居た、何気ない動きが捉えられない。

川上は椀の太刀に手を伸ばし、椀の切られながらも柄を握ったままの椀の右手を解して太刀から剥がした。椀は川上の行為に害意がないものと判断して黙って見ていた。

川上は太刀を拾うと、自身の刀にしたように懐紙で拭った。

「鯉口を」

それで川上の意図を理解し、椀は動きを取り戻した左手で腰の鞆の鯉口を抑えた。

川上はその鯉口に太刀の切先を合わせ、刃を鞆に当てぬように椀の腰に太刀を納めた。右手を喪失して、左だけでは太刀の納刀は難しかったろう。

「氣遣い感謝する」

椀は礼を言いながら残った自身の右手を拾った。

「いずれ博麗神社で宴会がある。私も次の宴会に出よう」

「ではその時があつたら俺も出よう」

椀の唐突な言葉に川上は少し考えてから返した。

「その時は一献酌み交わそう」

「是非」

そう椀は約束を口にして笑みを浮かべた。屈託のない笑みは童顔も相まってそれまでの印象を覆し、彼女をただの器量好しの少女のように見せた。

その表情を浮かべていたのも束の間、武人らしい顔つきを取り戻すと川上に一礼した、川上も返礼する。

「失礼する」

そう言い残して椀は背を向け、飛び去っていった。川上は早々に視線を切つて煙草を取り出す。

「あいつ、笑った方が可愛いな」

取り敢えず場が収まったと、一安心した魔理沙の口から出たのは全く関係ない独り言のような感想だった。

そして、何してくれるんだと川上に文句を言いかけて口を開くが、そこで考えた。

あれが極めて危険な状況を綱渡りしていた事を気付かない程、川上は馬鹿ではないのは魔理沙も分かっている。

煙草にマッチで火を点ける川上を見ながら魔理沙は思った。分かった上でこのようなのだ、自分の事などどうでもいいかのような投げやりな行動。

なんか、切ない奴だな。そう魔理沙は思った、彼女がこの感想を抱いた相手は川上で2人目だった。苦笑いを浮かべながら川上の背を軽く叩いた。

「さ、いくぜ」

「ああ」

魔理沙は先を歩き出し。川上も煙草の風味を楽しみつつその後を追った。

第96話

「ふ……む」

妖怪の上空。

高高度の空中で仁王立ちにて手を組んでいる、鴉天狗が一匹。

背には文字通り鴉の濡れ羽色の鳥の羽を生やし、同じ色の黒いセミロングの髪に魔性を示す赤い瞳のまだ少女らしさが抜けきらぬ綺麗な顔立ち。

服装は黒いフリルのついたミニスカートと白いシャツとスツキリしたものだ。現代的なデザインに見える赤い靴はその実高い一本下駄であった、そこと山伏風の帽子くらいしか天狗らしい所がない。

しかし、見かけによらずこの鴉天狗、射命丸文は長い時を生き様々な経験と高い能力を有する。その実力に裏付けされ天狗社会でもそこそこ高い地位についているのだ。

「川上……清水、ね」

文はポツリと呟いた。文は自費出版で娯楽度の高い新聞を出版する事をライフワークとしている新聞記者でもある。そのネタ探しの中で例の事件やその下手人と目される清水なる者の情報は掴んでいた、というかとうに川上には辿り着いていた。

「清水が偽名なのか……どちらも偽名なのか」

ぼんやりと文は呟く。

「まあ、殺人事件の事なんて記事にしたくないしね」

文は川上には興味が無かった。あの手の剣呑な人間は自分の記事に使えない。事件に関してもノータッチだ、ただ今回山に入ってきたから監視してただけ。

血の気盛んな権が突つかかったようだった。簡単にあしらわれていたようだが、あの娘もまだ若いからなあと文は思った。

「それに気付かれてるよねえ、コレ」

高高度から一応気付かれないよう監視していたのだが、件の人間はこちらこそ見上げはしないが、過敏な文の皮膚感覚が遥か下の男の意識が度々こちらを探るのを感じていた。

「…文様」

「わひゃつー!」

いきなり直ぐ後ろから声を掛けられて文は飛び上がった、もつとも飛び上がりずともここは中空であつたが。

慌てて向き直ると、そこには先程一悶着あつた現場にいた体の前で白い髪を垂らし、長大な太刀を佩いた白狼天狗、哨戒隊隊長の彼女がいた。

どうもこちらにも文は気付かれていたらしい。

「貴女か、心臓に悪いわね」

「いめんささい」

文が文句を言うのと隊長は素直にしかし感情の籠らぬ声で謝った。

文から見てもこの隊長は小さくて可愛らしく、声も小さいながら高く澄んでいて耳に心地よい。しかしその静謐な雰囲気は底知れぬモノを感じる。

あくまで文は聞いただけであるがこの隊長、見かけからは想像できないが、個人戦闘能力がもはや下端の哨戒天狗の域を遥かに超え、大天狗をして彼女一人で山の白狼天狗全員を相手取り全滅させる事が出来ると言われた規格外である。

しかし、本人は自身の地位に無頓着なので哨戒隊長に甘んじている。あまり人を束ねる事に向いてなさそうに見えるが、感情表現こそ希薄だが優しく気遣いも出来る為部下には概ね慕われているという。

曰くもしこの山が緊急事態になったら最前線の虎口前の要となる戦力とされる。文は少々信じがたい思いがあつたが、この対峙しているとまるで飲み込まれそうな錯覚を起こしそうな深みのある空気を纏っていて、感覚的に文はやり合いたくはないなと思う。

これでも文は大妖怪クラスである、圧倒的に格下の白狼天狗に負けるなんて文も思

われない。しかし簡単に勝てるイメージも浮かばないのだ。

今にしてもこんな開けた空中で声を掛けられるまで、接近も気配も感じとれなかった。

「それで、どうしたの」

「…本日も異常無し」

文が聞くと帰ってきたのは業務報告だった。

虚偽の。

「あー…」

「本日は異常無し」

隊長が何しに來たのか理解した文に、彼女は無感情に繰り返した。

事の顛末を文が把握している事を分かっているから、椀の問題行動を咎めないで欲しいと訴えたかったのだろう。無感情なのに文にはどこか必死に見える。

何となく彼女は部下に慕われる理由が分かる気がした。

「分かったわ、ご苦勞様」

文は最初から問題にする気など無かったので何も知らない体で返した。両者とも組織の一員としては全く褒められた行為ではなかっただろう、しかし。

「ありがとう、文様」

隊長はほんの少しの微笑みをみせて、文に礼を言った。その顔と声に文は心動かされるモノがあつた。

「貴女はいい娘ね」

文は隊長の帽子を手にとると手で髪を乱さないように優しく頭を撫でた。雪のように白い細い髪は水のような手触りで、甘く、でも落ち着いた白檀の匂いがした。

ついやつてしまったが、流石に子供扱いしすぎて失礼だつたらうかと文は少し思ったが、隊長は邪魔にならないように獣耳を寝かせて気持ち良さそうに目を細めていた。

なんか、大人しい犬みたいで可愛いなと文は思った。ほんとにこの娘強いのだろうか、文は隊長が戦うところはおろか剣を抜いた所もみた事がない。

そういえば以前上司が言っていた事を思い出した、この娘が剣を抜いた所を見た事があるのはこの山でも数える程しかない、何故なら彼女が剣を抜いた所を見た奴は大抵そこで死ぬからだ。などと冗談めかしていつていた。

「さ、仕事に戻りなさい」

文は帽子を元通りに被せて隊長に言った。隊長は頷いて一つ礼をして、急ぐでも無く山へと降りていった。

「ヤッソ」

私も椀の様子でも見に行くか、そう文は考えると、その場には一陣の風が吹いた瞬間

間もう文の姿は無かった。

誰も彼女の姿は捉えられず、誰も彼女より前には居らず——幻想郷最速。それが射命丸文の異名であつた。

「つ、疲れた……」

参道を踏破した魔理沙は、少し息が上がっていた。流石に険しい道を神社まで登るのはバイタリティーの塊のような彼女でもキツかつたようだ。

「気紛れに歩くもんじゃないぜこれ、飛べば良かった」

魔理沙がそうボヤク一方、川上は息こそ上がっていないが、暑さもあつて汗をかいている。彼は懐から水筒を取り出し補給水をゆっくりと飲んだ。

「私にも」

魔理沙の要求に川上は水筒を手渡し、魔理沙は補給水を煽つた。水分をだいぶ失つたのだろう。まだ晩夏なのに二人とも黒基調の服なので見た目からして暑苦しい。

「美味いなこれ、咲夜か？」

「ああ」

魔理沙は感想を言いつつ水筒を川上に返して、彼は頷きつつ受けとると歩き出し

た。

魔理沙と川上は共に守矢神社の大きな鳥居を潜った。

ふむ、と川上は一つ唸る。かなり広い境内だ。しかし既視感もある、川上は神楽殿に目を向けた。引つかかるものがあるのか首を傾げる。

「どうかしたのか？」

川上の様子に魔理沙が声を掛けた所で、横合いから別の声がかかった。

「あれ、魔理沙さん。ここにちはーウチの神社までくるなんて珍し……」

守矢神社の風祝、東風谷早苗は珍しい参拝客、魔理沙に気づいて元氣良く声を掛けた途中に隣にいる人物に気付いた。

忘れもしない、あの夜の気味の悪い男。早苗は一瞬凍りつき。

「……いいですね。もしかして用事ですか？」

——多分手おくれ過ぎる取り繕いをしてなんとか最後までいい切った。

第97話

守矢神社境内

そこには三人の男女がいた。

黒いゆつたりした洋装に身を包み、刀と野太刀の二振りを持刀した男、川上。

白黒のエプロンドレスにとんがり帽子。木帚を担いだ霧雨魔理沙。

青いと白の変則的な巫女服に編み上げブーツを履き、竹箒を手にした東風谷早苗。

魔理沙は早苗が川上を確認した瞬間に表情を凍らせたのを見て、突っ込むべきかどうか迷った素振りを見せたが、結局口にした。

「あー、二人は知り合いだったか？」

その言葉に川上は魔理沙を一瞥して、そして不自然な反応を見せた早苗を見て、首を傾げた。彼はあの夜の邂逅を忘れているのかも知れない。

「いえ、まあ、知り合いという程ではないですが、少しすれ違い程度といえますか」

早苗の方は忘れるはずもなかったが、その説明は要領を得ず、また川上への嫌悪感を隠し切れていないのか少々礼を欠いていた。

「おい、お前何かしたのか？」

その様子に何かあつたらしいと思つた魔理沙はそう川上に小さく尋ねた。
「心当たりがない」

川上は答える。実際彼は特に早苗に何もしていない。しかし、一目見て何故かこの相手を自分は好きになれそうだと直感するように、その逆もある。早苗にとつての川上がそうだっただけの話だ。

「いえ、本当に大した事ではないのですが、夜の森でそちらの方が妖怪に襲われそうになつていたので、追ひ払つた事がありました」

「へえ」

何とか笑顔をとり繕い説明した早苗に魔理沙はそんな事があつたのかと思ひながら川上の方を見るが、川上は無表情のままだった。

こいつ、覚えていないな。さっきの態度と合わせ魔理沙はそう直感した。つまり川上にとつてその程度だったのだ。

「はは、追つ払つたつて早苗が助けたのは実は妖怪だったつてオチじゃないか？」

魔理沙は冗談交じりにそう茶化すが、川上が冗談に乗つてくれるはずもなく、早苗も表情を失つた。

早苗は魔理沙の冗談に気を悪くしたのではない。魔理沙の冗談が冗談に聞こえたかつたのだ。あの時自分が助けたのは人間と夜雀、果たしてどちらだったのか。彼女は

川上という男に対して何も知らないはずなのに、そう早苗は思った。

いや、聡い早苗は一目である程度理解してしまったのかも知れない。

「あー…」

場が持たない。どうやら早苗は川上と反りが合わないらしい事を理解した魔理沙はそう思った。

「それで魔理沙さんのお友達なんですか」

早苗も自分が空気を重くしている自覚はあり、ともかく再び微笑を取り繕い魔理沙に話を振った。

「ああ、そうだ」

魔理沙はそれに笑って肯定した。川上と魔理沙は一概に友達の関係で済ませられるようなものかという疑問はあるが、少なくとも魔理沙は川上を面白い奴と少なからず思っているの、そう答えた。

それに即答したのは川上の反応を見てみたかったという悪戯心もあったが、魔理沙は視界の端で川上を観察していたがやはりとか眠たげな表情は変わらなかった。

「そうだよな」

「ああ」

魔理沙がさらに川上の二の腕を軽く叩きつつ本人にも同意を求めると、全く感情の

込もらない投げやりな肯定が返ってきた。

早苗はどう反応していいかわからずしかし微笑みは何とか維持していた。すると魔理沙は笑った。場の空気を持たす為の気遣いだったのだろう、霧雨魔理沙という少女は大雑把に見えて意外と細かい所に気が回る。

「はっはっ、まあ見ての通りこういう奴なんだよ。今は紅魔館で使用人をしている、お誂え向きって感じだろ」

「えっ、レミリアさんの所ですか？」

魔理沙の言葉に早苗が軽く驚きを示した所で川上が一步前に出た。

「川上という、よろしく頼む」

「はい、私も名乗り遅れました。この守矢神社で風祝をしている東風谷早苗と申します」

川上が礼と共に名乗ったのに対して、早苗も名乗っていなかった事に気付き礼を返した。ここで川上に握手でも求められなかったのは早苗にとって助かった。

「ふむ」

離れた場所から胡座をかきながらその三人を眺めながら、何か釈然としない様子の

人物がいた。

女性としてはやや大柄で、伶俐な印象の整った顔立ちで強い意志を感じさせる赤みの強い茶色の瞳。青みがかった髪はボリュミーなセミロングで何故か楓の意匠が凝らされた冠状の注連縄を頭に付けていた。

白い長袖の上から赤い半袖の上着を着ており、暗い色のロングスカート。服の上からでも女性的な丸みを帯びた綺麗なラインが分かった。袖口や腰などにもあちこちに小さな注連縄を巻き、胸には鏡とアクセサリーとしては少々前衛的である。

全体的に奇天烈な格好をした女性はこの守矢神社の祭神の石柱、文字通りの神である八坂神奈子だった。

神奈子は三人の中の一人の男、川上に目を向け首を捻っていた。

「何か……」

「おや、どうしたの神奈子？」

丁度そこで神奈子に対して後ろから声がかかった。

振り返りもしない神奈子に声の主である小さな少女は勝手に神奈子の横に並んだ。

少女は子供そのものの体軀を青と白の壺装束に身を包み、体軀の割に長い足には白のニーソックスを着用している。

綺麗な顔立ちにはいたいけな愛らしさを感じさせるが、口元に時折邪気を感じさせ

る陰性の笑みが浮かぶ。ショートボブにカットされた発光しているかの如く感じるほど艶のある金髪に二つの目玉の衣装がされた変則的な市女笠とも取れる類いの帽子を被っていた。

やはり奇天烈な格好をした女の子もまたこの神社の祭神、洩矢諏訪子だった。

「あら、人間の参拝客？珍しいね」

諏訪子は早苗が対応している二人に目を向けて言った。いや、一人は早苗の友人でもある白黒魔法使いである。真に目を引くのはもう一人の。

「いや、あの男なんだが……」

「ありや、色んな意味で珍しいね。外の人間っぽいけど出来るね。少し外れかけてるくらいにかな？」

神奈子の呟きに諏訪子は川上に関してを遠くから一瞥しただけで、スラスラと口にした。

「何処かで見覚えがあるような気がするんだ」

その諏訪子の言葉に神奈子は川上を見据えたままさつきから引つかかっていた疑問を呈した。

「ふーん、外の人間ならもしかして私達がここに来る前の事とか？」

「あ」

諏訪子の返答に神奈子はその可能性を見落としてたのだろう、得心がいったとばかりに膝を打った。

「思い出した、あれは十年前くらいか。外にいた頃この神社で奉納演武した流派にいた少年だ」

一度記憶を探し当てれば引き出すのは容易だった。もはら外では存在しないも同然になっていた頃の事、神奈子はある日催された演武をひやかし程度に眺めていた、彼女は軍神としての色合いもあるが故にその演武には全く興味は無かった。

「この時代の武術など点数稼ぎゲームか舞術に成り下がった型踊りに過ぎないと思っ
てみていたのだが」

「違った？」

神奈子は頷く。外の頃の晩年は記憶すらも朧げだったが、あの日の事は覚えてい
る。

「二人：使い手がいた。今の時代も捨てたものじゃないと正直驚いたよ。一人は流派
の宗主と思わしき初老の男、そしてもう一人は明らかに最年少と思わしき少年」

「それがあの子？」

諏訪子の間に神奈子は肯首して続けた。

「まだ子供と言ってもいい少年がやってるのはあくまで演武なのに、少年の立つ神楽

殿に私は確かに合戦場を見た」

「空間の認識すら捻じ曲げる。まあ、そんならいはしそうだねえ」

神奈子の言葉に諏訪子は軽い調子で返した。

「しかし、私が一番驚いたのは演武が終わった時だ」

「うん？」

「宗主が前に出て座礼をして、門弟一同もそれに倣って礼をして終わった。そして皆立ち上がった後、少年一人だけはこちらを向いて一礼したんだ」

あれは神奈子も虚をつかれた。他の門弟達は誰もいない方に礼をした少年に対し、殆どが訝しげな表情を浮かべていたが、宗主だけがそれを見て神妙な顔をしていた。

ありえないと言えた。いかに神といえど神奈子は当時外の世界ではもう居ないも同然に存在の力は弱まっていたのだらな、認識出来るはずがない。

「視えたの？見鬼の類い？」

「さあ？漠然と存在を感じ取った程度だったと思うが」

ふむ、と諏訪子は少し考える。外の世界にもまだまだ神秘を体現する人間はいたという事か。

「所で、話は変わるけど何か早苗はやりにくそうにしているね」

諏訪子は3人の方に目を向けて言った。遠目から見ても早苗の態度が硬い事が分

かる。

「早苗には合わないのだろうよ。ああいう人間は良くも悪くも印象が強いからな、好かれる相手と嫌われる相手が極端だ」

三人の中から川上は外れて神前へと歩き出したのを見て、諏訪子は歩き出した。彼女は少し興味が湧いた。

「んじゃあ、早苗に任せるのも酷だからちよつと私が行つてくるよ」

「そうか」

神奈子は座ったままでそう短く返した。

川上は手水舎で手を洗い、口をゆすいで清めを行った。いかに清めても血に染まった彼の不浄を落せるかは疑問だが。

神前に立つと彼は白い硬貨を出し賽銭箱に置くようにして納めた、そして鈴を鳴らし作法に則り拍手と礼をする。

この際に願ひ事などはあまり好ましくはない、基本的には自分の住所や感謝などを伝えるものだ、願ひ事ではなく決意や目的を報告する程度が良いとされる。

神として人間と同じと考えれば分かる事ではある。軽い気持ちで信仰心も無いのに神頼み、そしてそれが叶った所でお礼や報告にもこない不届き者の無礼者を相手はどう

思うだろうか。

そして、手を合わせ頭を下げる川上は頭の中で何を伝えているのだろうか？彼は願いなどするだろうか？では何を報告しているのか、それは本人と神のみぞ知ると言った所か。

つまりこの場に置いて川上が何を思ったか知るものは彼以外にもいるという事だ。

「いい神社でしょ」

最後に一礼をした川上の後ろから高く澄み、何処か甘えたニュアンスの口調の童女そのものの声が掛かった。

「そんな所に向かわなくても直接神様に頭を下げる事も物申す事も出来るんだから」
川上は無表情に振り返った。

「慇懃無礼って知ってる？何も思う所もないのに形だけなぞつて貰っても神様としてはあまりいい気分はしないものだよ、ハリボテのお兄さん」

目の前の土着神、洩矢諏訪子を見て川上は口元に笑みを浮かべた。

第98話

守矢神社の神前で黒衣の男と小さな神が相對していた。

「改めて初めまして、お兄さん。洩矢諏訪子だよ」

そう守矢神社の祭神の一柱、洩矢諏訪子は自己紹介した。

「お名前は？貴方そっちに對しても名乗りもしなかつたね」

諏訪子は神前の方にちらりと目線をやりながら尋ねた。気楽な口調だが無礼を咎めているとも取れる、本人にその気があるかは不明だが。

「失礼した。初めまして、川上という」

口元に面白がっているような笑みを浮かべた川上は申し訳程度に非礼を詫びつつ名乗って礼をした。頭を上げ際に諏訪子の足元付近から二回何かをなぞるように視線移動したのを諏訪子は見て取った。

「地脈も視えるのかな、凄い眼がいいね。ウチの早苗以上だ」

諏訪子は無邪気に笑って川上の眼を評価する、川上は煙草を無言で取り出した。

「吸つてもいいか？」

「いいよー、境内ではポイ捨てしないでね。外の世界に比べるとこつちはみんなマ

ナー悪くてねえ」

どうでもいい愚痴とともに許可されたので川上は両切り煙草を一本啜えてマツチを擦った。

「…地脈に繋がってる方が余程凄いと思うが」

川上は深く吸い込んだ紫煙を吐いてから、自分の感想を告げた。

「そりゃこれでも神様だもん、凄いや」

諏訪子はそれに対して弾んだ声で答える、笑みが先程までの無邪気なものから変質して口元を吊り上げるような何処か不吉さを感じさせるものとなっていた。

「だろいな」

川上は短く返して口元に煙草を運んだ。実際凄いや。この神社自体が山のエネルギーの流れの中核にあるが、この目の前の小さな少女にしか見えない神はその脈に繋がっている。大地そのもののエネルギーに干渉出来るというのはすなわち天災そのものであり、そんな存在まさしく人智を超えた神といえよう。

「そういう貴方も人間に出来ない事の一つも出来るんじゃないの」

「不可能事など存在せずという」

諏訪子の間に川上は皮肉に笑って紫煙を吐きつつ煙に巻くように答えた。

「違くないねえ、神と話すのは初めて？」

「対話になったのは初めてだな、知り合いなら訳のわからない言語で捲し立てられても困ると伝えておいてくれ」

川上は本気なのだか冗談なのだかわからぬ口調でさらりととんでもない事を言う。

「それが誰か知らないからなあ。ここじゃその必要ないけど、そういう風に伝えないと神託っぽくないでしょ？それに後々何となく分かったんじゃない」

諏訪子はクスクスと笑いながら川上の話に平然と返す。神も演出が必要なのだろうか。

「まあ、役には立った」

神の言葉を役に立ったで済ます川上に諏訪子は吹き出しそうになった。この子面白い、神奈子に見せよう。諏訪子はそう思った。

「そうだ、私も神らしく貴方が幻想郷に来て何を思ったか当ててみようか」

諏訪子は指をピンと立て唐突にそう言った。川上も興味を惹かれたのか少し表情が変わった。

「ああ」

「ずばり、『和服は斬りやすい』じゃないかな」

諏訪子が得意げに言ったその言葉に川上は一瞬目を細めて、思わず笑みを浮かべた。

「違つた？」

「いや、合っている」

和服は布により特別斬りやすいと言つた事はないが、洋服は装飾や機能に金具を使つていたり、革を使つたりしてる事が多く、實際着ている人間を斬る事を考えると刀には優しくない。

確かに刃を立てやすいなど川上はここに来てから一度ならず考えた。そして諏訪子は自分の冗談に川上が笑みを浮かべたのを確認した。

川上は携帯灰皿を取り出して吸い殻を入れた。

「まあ、人間の参拝客も久々だしお茶でも飲んでつてよ」

諏訪子はそう言つて早苗を呼んだ。

早苗に二人を居住区の離れに案内させた後、諏訪子は神奈子の元に戻つてきた。

「どうだ？」

「案外遊びがあるかな。面白いよ、あの子」

問いかけてきた神奈子に諏訪子はそう評した。諏訪子から見て、川上は感受性が低そうに見えて意外と豊かに思えた。

「後、工夫をしていたね」

「なんのだ？ いや愚問か」

諏訪子が続けたのに対して神奈子は疑問を発しかけたが、すぐに検討がついたのか引つ込めた。

「そう、神様をどう斬るか。彼首筋を狙う癖が強いね、ピリピリ来た」

トントンと自身の首筋を叩きながら諏訪子は笑顔で言った。

「まあ、急所であり着ているものや仕込んだものにも邪魔されんから妥当な所だろう」
「ま、でも斬れないって分かったみたいだけどね」

神奈子の返答に諏訪子はそう返す。人間に神が斬れる訳もなく。諏訪子も神奈子も神として今の姿形を持つてはいるが、神に姿形など意味は無く、わかりやすく形を取っているだけに過ぎない。

見えている姿が本質ではない以上、それを斬る事は出来ない。水や霞を斬るのに等しい行為だ。

「さて、どうかかな」

「？」

疑問を呈した神奈子に対して諏訪子は怪訝な顔をした。

「不可能事は存在せず。本当にあの男が下した答えが『斬れない』だったのか聞いてみるのも面白い」

奇しくも川上と同じ言葉を吐いた神奈子はくつ、とニヒルな笑みを浮かべて歩き出した。諏訪子も同様に笑みを浮かべて後に続いた。

「それで華仙にまたどやさされてたけど、馬の耳に念仏だったなありや」

「霊夢さんも相変わらさずですなえ」

神社の離れの一室。三人はちやぶ台を囲み茶を手に談笑していた。

川上は生来口数が多い訳ではなく、また早苗に苦手意識も持たれてる事もあってか、話には殆ど参加せずに茶に口をつけながらサラダ煎餅をボリボリと齧っていた。お茶請けが羊羹や和菓子などでは無かった事は彼には幸いだったろう。

そこにタン、と小気味よい音をさせて障子を開け放ち入室したのは八坂神奈子であった。

「神奈子様」

早苗は少々驚きを込めて名を呼んだ。流星に祭神が自ら客間まで客人の元にくるのは珍しい事だった。

「久しいね、白黒の魔法使い」

「よお、核エネルギーの研究捗ってるか」

魔理沙は片手を上げて神奈子相手にあまりに気軽過ぎる挨拶をした。もつとも神奈子も非礼などを全く気にしている様子はない、この幻想郷ではその程度一々気にしていたらやっついていられないのかも知れない。

「まあ、ぼちぼちにね」

どかりと腰を落としてつつ神奈子は答えた。川上は煎餅を啜えたまま神奈子を2秒くらい半眼で見つめたが、煎餅を噛み砕く作業に戻った。

「すまない早苗。私にも茶を頼むよ」

「はい、ただいま」

早苗は頼まれるより先に腰を浮かせていたが、そう答えて退室した。

神奈子は川上を見る。右手側に刀が二振り刃を外向きにして置いてある。非礼には当たらない程度に警戒してますよ、といった所か。

また胡座を搔いていて一見寛いでいるが、よく見ると左足は正座の時のように下腿を腿から尻の下に折り畳んだ胡座であり、即座に座構え、居合腰になれる武芸者としての座り方だ。部屋の中での座っている位置からも外物とのものの心得が身についている事が伺える。

また、まだ夏なのにやや大きめの長袖もそういった心得の一つだろう、どうやら袖の下に布の手甲を巻いて筋金変わりに棒手裏剣を仕込んでいる。武器であり防具にな

る。他多数の仕込みがある。

そして、この纏った空気。張り詰めているわけでもない、むしろ弛緩しているが何とも言えない空間で自身を包まれているような掌握されているような感覚。

十年前見た時すでに神奈子の目を引いた少年は、もはやあの頃とは比べものにならない。出来る。神奈子はそう評価を下した。

「こうして会うのは二度目になるか、君は覚えていないかも知れないが。私は八坂神奈子だ」

「失礼ながら覚えてはいない。川上という、よろしく頼む」

神の割りにはかなりフランクに挨拶をしてきたもう一人の神である八坂神奈子に川上は煙草に火をつけつつ名乗った。

第99話

「それで川上と言ったか」

神奈子は早苗が持つてきた湯飲みから茶を一口啜り、口を湿らせてから言った。

「君に一つ聞きたい事があつてね」

早苗は少し表情を硬くしたまま元の場所に座りなおした。川上は紙巻から一服吸つてから言った。

「なんだろう」

「これは私の事は気にせず君の忌憚無い意見を聞きたいのだが」

神奈子はそう前置きをした。魔理沙は話にも入れず手元で知恵の輪をカチャカチャと弄つていた。

「ああ」

「君は神を斬れると思うか」

「斬れる斬れないで言えば斬れるだろう」

「そうか、では質問を変えようか。君は神を斬れるか」

その質問に驚きの表情を見せたのは川上ではなく早苗である。

「斬れないな」

「そうか、嘘だな。本当は」

「斬れる」

川上はあつさり前言を覆した。かちやり、かちやりと音がしていた。また雲行きが怪しくなってきたと魔理沙は思いながらもはや口だしもせず、顔すらあげない。

「ほう、根拠はあるのかな」

その言葉に川上は答えも返さずに深く最後の一口を吸ってから煙草を消した。湯飲みから残った茶を飲み干す。

「境内を見学させて貰ってもいいだろうか」

そして川上が発した言葉は全く別の事だった。しかし神奈子は何か得心がいったような顔をした。

「ああ、構わないよ。案内はいるかい」

その言葉に早苗の表情が一瞬強張った。川上は右手で刀を一振り取り立ち上がった。

「必要ない」

それだけ言い残して川上は部屋から退室して歩き去っていった。神奈子は何処か楽しんでいっているような顔で湯飲みを取った。

「あの、神奈子様。あの人は」

「さあ、根拠でも探しにいったのかもね」

神奈子は茶を啜りながら面白がっているように答えた。

「後早苗、相手に不快感を覚えてもそれを表に出してはいけない」

神奈子は一転して毅然とした口調で苦言を漏らした。

「嫌悪を見せれば付け込まれる。例え嫌いな相手でも嫌悪を押し隠し、好意を見せる。そうすれば上手く相手を使う事も出来る、それが賢い女のやり方ってもんさ」

くつ、と笑みを浮かべてそう神奈子は早苗に説いた。早苗も思わず笑う。

「はい、分かりました」

「そういう意味じゃあの男の方が上手か……」

本人は自覚していないだろうが、などと神奈子は呟いた。

かちやんと金属音がして魔理沙が弄っていた金具が二つに分離した。

「おつ、やつと外れた」

昔々の話である。

ある所に村があり、そこにはたいそう美しい女がいたという。

その美しい女は同じ村の青年と恋仲だった。二人はたいそう仲が良く日々を幸せに過ごしていた。

しかしこの二人の幸せはある悲劇によりいつまでも続かなかつた。

ある日女が一匹の虎に襲われて無残に殺されて喰われてしまったのだ。

恋人を殺され一人残された青年は嘆き、悲しみ、怒り、慟哭し泣いた。来る日も来る日泣き喚き、波も枯れる頃には最早悲しみなければ喜びもなく青年の中にはただ一つしか残つて居なかつた。

殺意である。

もはや青年を突き動かすのは恋人を殺した虎への殺意だけだった、武器を取り虎を殺すために森に入る青年の顔にもはや昔日の穏やかな風貌は残つていなかった。

来る日も来る日も仇を討つために虎を探す日々。そしてある日とうとう林の間で遠くに横たわる大きな虎を青年は見つけた。

憎い、憎い憎い虎。彼は矢を弓に番えると引き絞つた。涙を流し齒を食いしばり凄まじい形相で弦を引いた、一心に殺意を込めて放つた矢は遠距離にも関わらず狙い違わずに虎に突き刺さつた。

青年はすかさず次の矢を番え、止めを刺さんと慎重に歩みより、そして自身の勘違いに気付き力が抜けた。

遠くからは横たわる虎と見間違えたそれは大きな岩だったのだ。そしてその岩に彼の放った矢の一隻が深々と刺さっていた。

あり得ない事だ。何の変哲もない矢が岩に刺さる訳がない。青年は不可思議な光景に試しに矢をその岩に放つてみたが全て弾かれるだけだった。

恐らくは青年の執念が不可能な現象を可能としたのだろう。奇跡の、しかし必然の一射。

人の念は岩すら容易抜く。中国の故事である。

同じ理念を掲げる日本武術には馬庭念流という剣術流派がある。これもその流派名が表す通りただ一念を貫き通す事を極意とする。

その日、守谷神社の裏の湖に乾いた音が響き、一斉にあたりの鳥達が飛び立った。洩矢諏訪子は奇跡のけん一刀を見た。

暫くして戻ってきた川上と魔理沙、早苗と神奈子は茶を飲みながらお互いに近況などを語り合い、気付けば良い時間だった。

「魔理沙さんもまたたまにはうちの神社にも来てくださいいね」

「ここにくるの面倒なんだよあ、まあ気が向いたらくるぜ」

そろそろ帰ろうという事になった境内で並んで立つ川上と魔理沙、二人に相對する

早苗と神奈子がそう別れの挨拶を交わしていた。

「川上さんも、またいらして下さい」

「気が向いたら」

早苗は最初に比べると大分自然に川上にそう言った、暫く談笑していて苦手意識が薄れたのか、あるいは神奈子の教えを守っているだけかも知れない。

「縁があつたらまた会おう。私も根拠が知りたいしな」

神奈子の言葉に川上は目礼で返した。

「じゃあな」

「失礼する」

魔理沙は片手を上げ背を向け、川上は一礼して回れ右をして歩きだした。

「また歩いて降りる気か、乗れよ」

そう川上の背に箒に乗って追いつき魔理沙が突っ込んでいたが、それを見届けずに神奈子は背を向けた。

「そういえば諏訪子様のお姿が見えませんか」

早苗も神奈子の後ろに付いて歩きながらふと先ほどから気になっていた事を言った。

「近くにはいるようだ、ちよつと様子を見てくる」

「では私は夕食の支度をしてますので」

「ああ、いつもすまないね」

神奈子の言葉に早苗は一礼をしてその場を歩き去っていった。

神奈子は迷いなく、真つ直ぐに神社の裏手の湖の方へと足を進めた。

さく、と足元で小さな音を立てて林を抜けると開けた場所に出た。

大きく広がる湖、その湖面は沈みつつある太陽光を反射して眩く光っていた。

大小の岩が転がるそのほと。高さだけで2メートルはあるだろう大岩の上に諏

訪子は腰掛けてまるで姿通りの子供のよう足に足をぶらぶらとさせていた。

神奈子はその岩に向かって歩みよると岩の上から諏訪子が顔を向けた。

「いつからうちの神社は天石立神社になったんだ？」

神奈子は苦笑いまじりに、しかし何処か嬉しげにそう言った。

「ちよつと前に、残念ながらやったのは石舟斎じやあなかつたけどね」

諏訪子が腰掛けている大岩は真ん中から真つ二つに割れていた。

誰がそんな事できるか、この場なら大地に干渉する事が出来る諏訪子なら簡単だろ

うが、人間には無理なはずである。

いや、その岩の滑らかな断面は斬れていたのだ。

この大岩を斬る。言うまでもなくあり得ない。手頃な拳程の大きさの石でも刀で斬ろうとすれば並の刀では折れるだろう、良くて割るのが精々。

あり得ない？ 神奈子は自分の思考に自嘲した。さつき諏訪子が口にしたように過去これを成し遂げた剣客が一人いるではないか。

今も外の世界で現存するその大岩の名を神奈子は思い出した、確か一刀石。

「どーする神奈子、この石も新しい名所にしちゃおう？」

諏訪子は笑いながら羽ばたくように袖をパタパタさせながら聞いてきた。

「二番煎じじゃないか、そもそもこの山で天狗を斬った云々の触れ込みはまずいだろう」

「逆にぴったりかも知れないけどね」

苦笑いして答えた神奈子に諏訪子は返しながら大岩から飛び降り、高さや体重を感じさせない軽い着地をした。

「どう思う？」

「ホントに斬れるようになりかねないね、このままじゃ」

諏訪子は肩を竦めてへらりとした顔で緊張感なく答えた。

「面白いな」

「面白いね」

神奈子と諏訪子は笑って互いに言い合った。

「しかし、差し当たり我々には関係ないか」

神奈子は笑って断ち切られた岩を撫でながらそう言った。

「そうだね、信仰してくれなそうだし」

「力をやると言えば信仰するかも知れんぞあのタイプは」

神奈子は諏訪子に向き直り冗談めかして言った。

「信仰してくれないかも知れないねあのタイプは」

神奈子の言葉に諏訪子も面白がっているような口調で返した。

「戻るか」

神奈子の言葉に諏訪子は頷き、二柱は湖に背を向けた。

「兎角、人間は面白い」

最後にその言葉を残して。

第100話

紅魔館、正門前。

二人の男女が対峙していた。

緑の変則的華人服に身を包んだ赤い髪の少女は紅魔館門番の紅美鈴。

艶のない黒色の礼服を着込み、黒い髪の青年は紅魔館下級使用人の川上。

川上の腰に刀はなく、少し離れた門の壁前に置かれていた。二人とも無手であった。

「一手お願いします」

「承知」

二人はそう交わすと、三間の距離を取って構えた。

散打である。しかし無手とはいえ実戦形式近い、目や耳、金的など急所狙いこそ禁じてあるが、相手にダメージを与えないようにするのもお互いの裁量と技量次第という危険なものだ。

達人の四肢は武器など無くても簡単に人体を破壊するからだ、真剣で自由攻防するのに等しき無謀。

美鈴は左手を前に出して肘を軽く曲げ掌を上にも指も緩く上を向いて、左前の半身となり右腕は軽く胸の前に置いて、両足は肩幅で構える。

川上は右前の半身で、肘を突つ張らずに刀の反りのように気持ち緩く曲げて指先を対敵の方に。左手は首筋を隠すように添える。両足のスタンスは広めで後ろ足重心で軽く腰を落とし構える。

ズ、と美鈴が足の踵を前に入れて今度は爪先を入れるという足を浮かさない歩法でジワリジワリと距離を詰める。

一気に距離を詰めるのではない。ゆっくりと詰めていくが、好機と見れば何時でも一瞬で踏みこめるように体勢を作っている。張り詰めた弓矢を向けられているような威圧感が川上の肌を刺す。

しかしそれに対して川上はいきなり構えを解いた。両手を下げ棒立ちになりいきなり散歩でもするように美鈴に対して一歩歩みだした。

美鈴は一瞬、虚を突かれた。いきなり無構えになり、歩き出した川上に踏み込むべきかの判断が遅れ。

瞬間まだ一間以上あった距離が潰れ、川上の右の手刀が美鈴の首筋に襲いかかった。

前の足を軸に後ろ回して一回転して前に出る変則歩法。一見して危険だがある程

度の距離なら普通に踏み込むより早い。

一歩下がりが危うく躲した美鈴はすぐさま後ろの足から踏み込んで右の頂肘を川上の右脇腹に叩き込む。

これを川上は左半身になりながらアイトサイドに体で外すと同時に左掌底が鍵突きの要領で美鈴の右耳の後ろ、乳様突起を軽く打った。

一瞬平衡感覚が狂い次の動作が遅れた美鈴の右手首を川上が掌握したが、美鈴は反射的に体を落として腰で握られた手を切った。そのまま自分の裏にいる川上に対して後ろ回しで左肘で川上の頭部を狙う。

しかし肘は川上を捉えずに逆にその場で座構えになった川上の左の貫手が美鈴の空いた脇腹、肋骨側面の隙間に刺さる。

骨の間から太い針を刺し込まれたような激痛が美鈴を襲い、その間にまた川上は美鈴の右腕の裏に回っていた。

しかし、美鈴もこれに合わせて前足を開き川上に合わせて左の中段の逆突きを放ちとうとう川上に当てる、いや浅いか？と美鈴は思った。水月に当たったが瞬間化勁で逃がされた、手ごたえは少なからずあったが。

川上は後ろに飛んで距離を取ったが、普段殆ど変わらない表情が小さく苦悶に歪み、続いて背中が丸まった。

明らかにダメージがあった。好機と見て踏み込みかけた美鈴は川上の氣の流れを視て、危うくその場にとどまり機を見送った。

擬態であつた。ダメージは確かにあつたのだろう、しかしダメージを逆手に取り大袈裟に姿勢を崩し好機と見せ相手を誘う。

しかし美鈴はくの字に折れた川上の足腰が即座に莫大なエネルギーを発生させられるように流れを作っていたのを見逃さなかつた。安易に好機と踏み込めば後の先でやられていただろう、作られた好機ほど危険な物はない。

踏み込んでこなかつた美鈴に川上は小さく口元に笑みを浮かべて右半身で立ち軽く右手を上げて美鈴に向ける構えを取つた。

今度は先に仕掛けたのは美鈴だつた。素直な左の崩拳を打ち抜くがこれを川上はやはり前に出ながら美鈴のアウトサイドに躲し同時に右の手刀が首筋を左手が美鈴の突き手を掌握した。

そして美鈴は左肩を耳に付けるほど上げるシヨルダーブロックで川上の手刀を止め、左肘を極められる前に自ら飛びながら前返りをした。

一瞬でも判断が遅れていれば美鈴は左肘を破壊されていただろう。前返りから即座に美鈴は即座に向き直るとそこに川上は居なかつた、皮膚感覚を頼りに向き直る時間も惜しみ自身の右後ろに蹴りを放つと浅くだが手ごたえがあつた。

美鈴は飛んで距離を取り仕切り直す。先ほどの蹴りは脇腹に当たったようだがもう川上は大袈裟に痛がったりはしなかった。

なんとも相手をしていて妙な感じだ、美鈴はそう思った。こちらの攻めはすかされる。常にこちらからは攻めにくい方へと位を取る、死角へと回る、虚実を入れこちらを疑心暗鬼に誘う。

なるほど、こうしてみると初めて会った時の彼が自身を邪道と言った意味がわかる、言つてしまえばネチネチと陰湿なやり方だ。

しかし本物だった。攻めれば必ずこちらが不利になる、こちらに合わせて優位へと変化していくやり方は勝ちへと自然と流れる水のような動きだ。

攻めにくる相手に必ず勝つ。古流剣術の極意に交差法というものがあるが、川上が用いるのはそれに近い。

ふ、と次の瞬間一瞬で距離を潰して川上の左の順突きが襲つて来た。膝の抜きを用いた起りの分らない踏み込みからの突き。

美鈴は右腕でとつさに突きを払うと、川上は払われたのを利用して前腕を畳んでそのまま深く踏み込み肘での当身に繋げてきた。

美鈴も流石であり危うい所でそれも左肘で払つたが、なんとさらに川上は再三そのまま踏み込み今度は左肩口から背中を使った体での当身を体が開いた美鈴に入れた。

もろに強い勁を喰らい吹き飛ばされた美鈴はそのまま後ろ返りをしてダメージを押して体制を維持する。今のは鉄山靠でつざんこう！美鈴はそう驚愕した。

それに突きから払われたのを利用して同じ腕で頂肘、さらに鉄山靠と繋げるのはまるで近接戦を主体とする外家拳、八極拳のような攻め手。

まるで美鈴のお株を奪いような攻め。美鈴は思った、盗まれたのか？あるいは元々持っていたのか？

迷いは捨てそのまま川上を迎え討ち、二人は交錯した。

川上の突きから変化して美鈴の首筋を襲った右の手刀は首筋の寸前で前に出た左肩越しに美鈴の右手で止められていた。

同時に死角から浮き上がるように川上の顎を襲った美鈴の左拳もまた寸前で川上の左上腕に止められていた。

二人はそこで攻めを止めそのまま互いの拳剣を引いた。

そのまま二人は数歩下がりがり、美鈴は合掌して礼をし、川上も返礼した。

「良い稽古になりました」

「どちらもだ」

そうさつきまで互いの急所に牙を突き立てようとしたとは思えぬ穏やかな声で——もつとも川上は普段の口調と判別するのが困難だが——言葉を交わした。

「一つ質問いいでしょうか」

「なんだ」

美鈴の問いに川上は煙草を取り出しながら短く答えた。

「途中、私の使う拳法に似た攻めがありました。貴方はどこでそれを」

「師に学んだ」

美鈴の質問の答えは極めて端的だった。

「もう少し言えば……俺の学んだ流派は大陸から渡った武術が元になっている所があるとされる。事実かわからんがその為かも知れん」

「確かにこの国の武にも少なからず影響を与えた、というのは知識としてはあります」

川上は煙草を一服吸い込み紫煙を吐いて、補足を加えた。

「後は師が中国に渡っていた事がある、そこで学んだものかも知れん」

「貴方の使い方は似てはいますがこちらの基本とはまた違うものです」

「そうだろうか」

それはそうだ、大陸渡りとして何百年。師が学んでそれを崩し、それをまた川上が崩した。原型オリジナルと同じ訳はない。

「では、また機会があったら」

「はい、是非またよろしく願います」

川上は振り返りもそこそこにそう言つて、刀を拾い門をくぐつた。美鈴も引き止めはせずに背中に礼をして見送つた。

今の散打の振り返り、分析、反省は後は幾らでも一人でやればいい。だが今はそれより。

美鈴は壁に寄りかかり苦痛に一つ呻くと体を抱くようにして、座り込んだ。

モロに貰つたのは少ないのにまだ視界が揺れている、体が痛みを、悲鳴を上げていく。門番が門で弱みを見せてはいけないのはわかつてはいるのだが。

「今少し……誰もこない事を願うしかないか」

美鈴は一人呟いた。

ポトリと煙草が落ちた。

「ぐっ……げほ……っ」

川上は人気の無い庭の片隅で嘔吐した。服を汚さぬよう前のめりで吐瀉物を撒き散らす。

内臓が暴れている、美鈴の攻撃は的確に点穴を狙い内臓にダメージを与える。

しかし、川上は殆ど威力を殺した、まともに貰つたのは無いにも関わらずこれか、川上は内心笑つた。

全て吐きつくして、しばらく胃液を絞り出すように吐いた後ようやく内臓の痙攣が治まってきた。

ザツ、と靴で砂をかけてぞんざいに吐瀉物を誤魔化し川上は歩き出した。しばらくダメージを抜くため休む必要がある。

誰もこないどこかに向けて川上はまだ残るダメージを見せないように歩みを進めた。

猫に好かれる人間というのは条件がある。

猫は気紛れで、そして本質的に一匹なのだ。

だから猫を気にし過ぎてはいけなく、構い過ぎてはいけなく。

——別に猫が居なくても構わないと思っている。

しかし自然に面倒を見る、最低限を気にかける。

——別に猫が居てもいいと思っている。

存在する事も存在しない事も許容する。その考え方ができる人間は少ない、だがそんな人間がいればどんな気難しい猫も懐いてしまうのかも知れない。

十六夜咲夜は困惑していた。

その男と知り合ってから一番の困惑だったろう。

その困り方はちょうど小動物が膝に乗ってきて気持ち良さそうに寝てしまい動くに動けなくなる、そんな状況に似ていた。

ソファーに座り衣装に針を通す作業をしていた咲夜、その肩に川上が寄りかかり無防備にも寝息を立てていた。

嘘でしょう、と咲夜は思う。この男は確かに良く寝る、色んな所で寝ている姿を見る。しかしそれでも隙は見せず、無造作に近づいたりすれば即座に起きた。

それが針を持つている自分の真横で、というか肩で、寝ている。気配と呼吸から見て狸寝入りではなく本当に熟睡していた。少しでも変な動きをしたら川上は起きるだろう。咲夜は動くに動けず混乱の中で何故こうなつたと考える。

ただラウンジで暇そうに本を読んでいた川上を見つけたから何気なくコーヒーを勧めた。飲むというので二人分淹れて川上にコーヒーを出し、他に誰もいないので自分も何気なく隣に座り針子仕事など始めた。

それだけなのだ、そしたらいつの間にかこうなつた。寄りかかられた瞬間ふざけるタイプでもなし一体何のつもりかと思つたら寝ていた。

どうする？咲夜は思った。上手く自分が動いてソファーに横にさせて、いや無理

だ、少し動けば絶対に起きる。

時間停止と解除を慎重に連続して少しづつ調整すれば頭を膝に持っていけないだろうか？その考えを咲夜は却下した。能力使用のような不自然は絶対に気付かれて起きる。

咲夜は進退窮まった。このまま川上が起きるまで身動き出来ないかと覚悟したところで、ガチャリとラウンジの扉が開いた。

「咲……や」

入室してきたのは彼女の主、レミリアだった。彼女は自身の従者を見つけて呼びかけたところで川上に気付き、声に驚愕が現れた。

そして咲夜はレミリアに対してではなく川上に意識が行っていた、あ、起きた。触れた肩から伝わる感覚で咲夜はそう確信した。

川上の呼吸も覚醒時のそれに変わったがしかし彼は動かない。レミリアはどうすべきかと考えて忍び足で二人に近づいていった。

5秒立った当たりで川上は自然と身を起こして、くつと伸びをした。レミリアが立ち止まる、川上はゆっくりといつもの蒙昧とした眼を開けた。

咲夜もレミリアも動かなかった。川上は目の前にある飲みかけの冷めたコーヒールを取り飲み干すと立ち上がり、何も言わない二人を尻目にスタスタと退室した。

パタリとドアが閉まった所で咲夜とレミリアは妙な緊張感から開放された。

「…お邪魔だったかしら」

「いえ、そういう訳では」

レミリアの言葉に咲夜は落ち着きを取り繕い答える。レミリアが来て結果的には咲夜は下手に動けない状態を脱する事が出来た。

「…寝てたの？あの子」

「…はい」

「そう……貴女やっぱり凄いわね」

レミリアは微笑んで感心したように言った。

咲夜は身動きの取れない状態から自由になり助かったとホツとした反面、ほんの僅かな残念さを感じていた。

第101話

紅魔館大図書館

その日の川上は咲夜の采配で図書館で司書である小悪魔の書物の管理を手伝っていた。

本を抱えて目的の書架を探して川上は歩く。そして目録と本に貼られた番号を参照しながら本を所定の位置に戻していく。

この膨大な図書館の様々な書物も流石に無秩序に書架に詰められてる訳もなく、小悪魔により理路整然と管理されていた。

しかし、一見訳のわからない本が多いのに蔵書の管理方法に何故か日本十進分類方が採用されていた。

ふと、本を戻しながら書架の本の中に欠けがある事に気付く。番号を見てもあるはずのものが抜けている。

こういう欠けは曰く白黒のネズミに食われたらしい。気付いたらチェックするよ
うに言われているので川上は手元のノートに欠けた番号をメモした。

また川上は残った書物の番号を見る、今度は番号500台が多かった。技術書であ

るが、この図書館は最近出版された外の世界のいわゆる外来本まで何でもありである、一体何処から仕入れているのか。

しかし川上にはそんな瑣末ごとなどどうでもいいのか頭の中で500の書架の位置を思い出してそちらには歩み出した。

粗方の整理を終えて川上は図書館の中心近くにあるパチュリーの定位置である所まで戻ってきてどかりとソファアに座った。

「苦勞様」

少し離れた机の前で椅子に座り本を広げながら羊皮紙に何か書き込んでいたパチュリーは眼を紙に落としたまま労いの言葉を掛けた。あまり感情が籠っていないがそれはパチュリーの性格によるもので特に川上に対する悪感情などではないのだろう。

川上は軽く手を挙げて応じた。無意識に煙草を取り出しかけたがふと思ひ留まり、結局口淋しいので変わりに懐から干し肉を取り出し噛み始めた。

「川上さん、終わりましたか」

そこに本を一抱えして現れたベストに身を包んだ赤髪の図書館司書の小悪魔が川上に声をかけた。川上は肯定を返す。

「じゃあ一休みしましょう、紅茶淹れますね」

そう言つて抱えていた本を机の上に置いて、一旦場を去ると手早く紅茶を三人分用意してパチュリーと川上の前に出し、自分は川上と同じソファアに座つた。

川上はカツプを一口運んでやはり彼には熱かつたのか、カツプを置き干し肉を啜えて冷めるのを待つた。

ふと、小悪魔は川上がソファアに立てている刀に眼を向ける。小悪魔は川上が腕が立つらしい事を聞いてはいるが彼女は川上が刀を抜いた所を見た事がなかつた。

というか、そもそも日本刀剣の類いをちゃんと見た機会が無かつた。ふと興味が湧いた。

「川上さんの刀は切れ味がいいのですか」

「良い」

興味本位の質問は一言で返された。普通なら会話を続けるのを断念する所だが、川上の性格をある程度掴み、さらに攻める時は攻める小悪魔はさらに言った。

「私、刀を見た事ないんですよ。見せて頂けますか？」

小悪魔の言葉に川上は肉を咀嚼しつつ懐から和紙を出した。そして刀を掴み鞘を払う。

「刀身はだには素手で触るな」

そう一言言つて、柄は抜かずに刀身の中程を懐紙越しに左手で持ち小悪魔に手渡し

た。

小悪魔は懐紙を使い直接触れないよう刀を光に透かして見た。

大和守安定。もう、大分人を斬ったそれはかつて野党の腰に差されていた時の疵一つなく綺麗に研ぎ上げられた状態からは大違いだった。

物打ち付近は刃毀れなどはないが刀身は線のようなヒケ疵だらけである。化粧研ぎも血脂で大分剥げてしまい、刃中や地金の働きどころか刃文すら曖昧になっている。

刀の美術的美しさは実の所研ぎ師による化粧による所が大きい。しかし、はばき元付近はまだ冴え渡る地金や刃文、湖面のような透き通ったような美しさが健在だ。

それに見るに堪えない物打ちと総合してみても、刀が眩しい輝きを放つるように小悪魔には感じられた。その輝きは野党の腰の飾りであった頃より、人を斬るようになってから増していたかも知れない。

「…綺麗」

小悪魔はそう嘆息した。川上は干し肉を齧り、少し冷めた紅茶を啜った。干し肉に紅茶はおかしい気がするが彼は細かい事は気にしない。

「どんなに綺麗でも、それは人殺しの道具だ」

そう川上はなんの熱も籠らない、事実を告げる口調でそう言った。

「そうですね」

その言葉は果たして刀に対するものだけだったのだろうか、そう小悪魔は深読みしてしまう。

「でもただの人殺しの道具ならこんなに綺麗ではないと、そう思います」

だから小悪魔は感じた事を言った。嘘は言わずに、相手に伝わるように。

川上は何も言わずに小悪魔から刀を受け取り、一拭いだけして鞘に納めた。

小悪魔はただ微笑んで言った。

「ありがとうございます」

「ああ」

川上はぼんやりと答えて色の変わらぬ眼で紅茶を口に運んだ。

紅魔館の廊下を歩く一人の闖入者がいた。

その女性は長身であり170 cmを少し超えるだろう、体型は女性的な肉感的でありながら大柄という印象ではない絶妙なバランスだった。

ショートボブの細いが硬そうな質の金色の髪、眼はわかりやすい魔性を示す金眼。整い過ぎて人間離れしている済ました顔つきも魔的である。普段は帽子を被っている事が多いがその日は被っておらずに頭から獣耳がぴんと立っていた。

服装は白いロングスカートにその上から、青い前掛けを重ねている。ゆったりした服だがそれでも豊かな胸元が隠しきれていない。左右の腕は互いの長い袖の中に入れており、格好や服装共に中華風である。

しかし特筆すべきはその腰から伸びた獣の尾であろう。一かたまりの豊かな毛に覆われた巨大な尾に見えるそれは、良くみると柔らかそうな一本一本の尻尾が何本も纏めて生えておりさながら房になっている。

その数およそ九本。妖獣の中でも最高位に位置する九尾の妖狐の証。

彼女はスキマ妖怪である八雲紫の式神である八雲藍だった。

式神とは術により対象を強化、制御して使役するものであるが、最強格の妖獣たる九尾^{ハク}の妖狐^ドに式神^{ソフド}を付けて自身の道具とする。そんな事を平然とやってのけるスキマ妖怪が如何程に規格外なのか解る事実だ。

そんな八雲藍は体重を感じさせない軽い歩調で廊下を進んでいたが、彼女の前に立ち塞がる一人のメイドがいた。

「いらつしやいませ、お客様。しかし今日は主人からは来客があるとは言付かっておりません」

十六夜咲夜であった。メイド長として来客のもてなしは彼女の大事な仕事の一つだ。

「それはそうだろうね、別に今日尋ねるとは伝えとないからね」

対する八雲藍は口元に微笑さえ浮かべて、穏やかな物腰で答えた。彼女は無表情だと恐ろしさを感じる程の冷たい美人と見えたが、軽い笑みを浮かべただけで今度は邪気のない童女めいた愛らしさを感じる。表情一つで玉虫色に変わる不思議な印象。

「なら、相応のおもてなししか出来ませんが」

その言葉とともにナイフの切っ先を突きつけられるような冷たい殺気が八雲藍に向けられたが、彼女は微笑を浮かべたまま平然としていた。

「いや、事のついでに寄っただけだったからね。それに君犬には用はないんだ」

八雲藍の口調も物腰もあくまで穏やかだった。これは彼女の性格によるものであったが、しかし傲慢さと上から目線はあからさまに現れている。これは絶対的強者としての自覚によるものであり本人に悪気は無かった、ある意味より悪辣だとも言えるが。

「別に大した用事でもないんだよ。それでもここで闘るかい？」

ふ、と咲夜は一つ息を吐いた。正直な所この怪物を自分一人でどうこう出来るとは思っていない、スペルカードルールに則つとらなければ勝負にもならないだろう。

しかし、もし自身の主人を害するつもりなら咲夜は彼我の実力差など無関係に殺す。それだけの話である。

「では何の用なのよ？」

咲夜は威圧するためにあえて取つていた慇懃な態度を止めて尋ねた。

「ここに川上と名乗る男がいるだろう。一度顔が見ておこうと思つてね、連れて来てくれるかな」

咲夜は口を開きかけて何も言わずに閉じた。何故と問いたかつたがおそらく八雲藍の主人のスキマ妖怪絡みだろうと思つた、あの妖怪は何かしら川上に関心がある様子だった。

そして咲夜の考察の通り、八雲藍は主人の八雲紫から軽く聞かされた剣客の事をふと仕事が終わつた後に思い出して折角だから一度見ておこうと思ひここにいる。本当に大した理由ではなかつた。

「……ちよつと待つてなさい」

そう言い残し咲夜は煙のようにその場から消えた、時間停止によるゼロ時間移動。八雲藍は動かず待つていると1分程で咲夜は先程と同じ立ち位置に現れた。

「今呼んだわ、近くにいたからすぐ来る」

「わざわざすまないね」

咲夜の言葉に八雲藍は穏やかな表情で労いの言葉をかけるが――

――そのままの体勢で両者が待つてから10分ほどが経過してしまつた。

咲夜は懐中時計を開き見てため息を吐いた。

「少し失礼するわ」

そう言つて再び咲夜はその場から消えた。八雲藍はあくまで穏やかな微笑を浮かべたまま終始表情を変えなかつた。

二分程して咲夜は今度は歩いて廊下を戻つてきた、一人の男を連れて。

170センチ台半ばの中肉中背で礼服に身を包み、無造作に切られた艶のある黒髪に前髪の奥で三白眼になつた髪と同じ色の吸い込まれそうに昏い眼。腰のベルトには一振りの刀を鶴鶴差しにして、眠たげというか投げやりというか陰性の雰囲気をもつたその男。

その男を見て藍の発光しているかの如く金眼が一際強く光つた。

「連れてきたわよ」

川上を連れてきた咲夜はそう簡潔に藍に告げた。

「ああ、ありがとう」

そう答えた藍の言葉は何処か上滑りしていた、それどころではなかつた。

直感で藍はわかつたのである。自分はこの男を好きになるだろう、と。

年甲斐もなく男を見てこんな気分させられるとは、藍はそう自嘲した。自分もまだ若いということか、ともかく藍は声を出した。

「初めましてだね、私は八雲藍。君も会ったと思うが八雲紫様の式神をしている者だよ、以後よろしく」

二人が並ぶと身長差はあまり無かった。藍は川上に特徴的な紙巻煙草の匂いを感じた、それに紛れてしまっているのか彼自身の体臭は薄い。

「初めまして、紅魔館使用人の川上という。所で一つ聞いても？」

「なんだい？」

穏やかに応じた藍に川上は大真面目な顔と口調で言った。

「八雲紫とは誰だ？」

藍は吹き出しそうになりすぐ横を向き俯いた。川上の肩を叩き咲夜が何事か川上に耳打ちをした、おそらく神社で遭遇したスキマ妖怪だと伝えているのだろう。

彼は名前には無頓着であり、それを覚える能力にも欠陥を持っていた。実はレミリアの名すら覚えていない。

「失礼、以後よろしく頼む」

彼の記憶の一人の妖怪と八雲紫という名前が一致したのか、川上は形だけ非礼を詫びつつ改めてそう言った。

「うむ」

とりあえず意味なく相槌を打ちつつ、藍は一步步み寄った。先程の直感の通りだつ

た、一秒毎に愛おしさが募る。

ただの自己紹介だけでズレた性格が分かる、そして陰鬱な雰囲気いたはけに惑わされず見ると眼に一切の邪気が無い。藍には川上がどこか幼気いたはけにすら見えた。

どうしたものか、持って帰りたい。藍は素でそう思った。自身の式であり溺愛する橙にも抱くのに近い愛おしさを覚える。しかし、攫ってしまうのはまずいだらうと理性が告げる。

そもそもこの手の男は体だけ手に入れても意味がないタイプだという計算も働く。まず心を開かないこの手のタイプには搦め手は必要なし。

とん、とさらに藍は一步出し川上に対して超近接距離に入った。川上は藍に花の甘い香りの中にほんの僅かに生き物としての生臭さが混じった体臭を感じた。有り体に言えば雄を欲情させる雌の匂い。

藍は凄いな、と思った。川上はこの距離から警戒しているだろうに全くそれを感じさせず脱力を保ったまま藍を見るともなく見ている。空間で掌握されている感覚を藍は感じる。

それを見ている咲夜は内心ハラハラしている。大丈夫だろうか、川上を見る八雲藍の眼の色が明らかに変わっているのに咲夜は気がついた。どうやらまた変なのにかれたのか。

藍は相手を刺激しないように袖からゆっくり手を抜き左手を伸ばし川上の頬に持っていた。川上は動かない。

何かされるか？大丈夫だろうか、川上が動かないから大丈夫か。咲夜は何か異常があれば即座に動けるように川上以上に身構えていた。

すつ、と藍が上体を倒し顔を寄せた。藍は視界の端で川上の左手を見る、鯉口には伸びない、表情も動かない。行けるか。

そのまま藍は最後の数瞬はままよと眼を瞑り、顔を傾けて川上に口付けをした。川上は一切動かない。

キス、か？粘膜接触による何らかの術を使われ、いや、川上なら気付くはず、動かない、大丈夫そう、か？咲夜はそう連続的な思考の中でいつでも動けるつもりだが、身構え過ぎて全身が硬直しているのに気がつかない。

唇同士の表面的な接触を二秒だけ続けて藍は離れた。どうやら妙な事はされなかつたらしいと咲夜もホツと息をつく。

「(バ)馳走様」

「お粗末様」

柔らかい笑顔で言った藍に川上は皮肉なのか真面目なのかわからない口調で返した。これで好意は示せただろうと藍は思う。全く表情を変えてくれないのが寂しいが。

「また会いにくるよ」

「構わないが、しかし」

藍はしかし、なんだと構える。川上は手で藍の後ろの咲夜を示した。

「館の通行許可はメイド長か門番に」

くつ、と藍は一つ笑って言った。案外に律儀なところが見れて得した気分だ。

「フリーパスだから大丈夫だ」

川上がそうなのか、と咲夜に眼を向けるとそんな訳ないでしょう、と咲夜は首を振った。

「では失礼するよ」

そう言い残し藍は踵を返して歩き去っていった。それを見送りながら咲夜はぼんやりと害意が無ければキスクらい出来るのかと思った。ちよつと自分もやってみたくなつたが狐の後というのは癪だ。

「何もされなかった？」

咲夜は念の為に川上に尋ねた。

「特には」

川上は懐から煙草を取り出しながら一言で答えた。

第102話

「報告します、敵です！相手は人型の妖怪、並の力ではありません！」

自室でぼんやりと椅子に座り頬杖をついたレミリアに咲夜はいかにも緊急事態といった様子で捲し立てた。

「敵はスペルカードルールは無視。美鈴が門前で交戦しましたが戦闘不能に追いやられました！明らかな宣戦布告です」

「全く」

レミリアは呆れるように呟いた。指先で前髪を弄びながら。

「それだけの力を持つているのにいきなり破滅的な行動に走るなんて、やっぱり永い時間に退屈は猛毒ってことなのかしらねえ」

——十五分前、紅魔館正門前

夜の帳も降りた頃、門番の紅美鈴の前に影のように現れた一人の妖怪。

色素の薄いやや長めの茶髪に灰色の虹彩の眼。女顔とも取れる中性的な顔立ちの少年。現代的な黒の艶のあるレザーの服に身を包み、金属の装飾を多くあしらって

る。

幻想郷では珍しく、しかしある意味妖怪としては珍しくはない奇抜な姿の少年。

一目見て美鈴の肌が泡立った。表情は変わらないが飢えた虎のような凄まじい殺気が美鈴に向けられた、この人は危険だと美鈴は直感した。

「……（？）用件は？」

それでも美鈴は形式として問いかけた。

返ってきたのはあまりに明確な意思表示だった。

少年は一瞬で距離を潰して美鈴の腹を素手で貫いた。美鈴は一切の反応が出来なかった。

「がっー！」

生理的反射から当然動けなくなる。はずなのだがそれを無視して美鈴は妖力を纏った右拳を繰り出して反撃した。

しかしその拳が届くより先に無慈悲な少年の膝蹴りが美鈴を吹き飛ばした。勢いよく門壁に叩きつけられた美鈴はその衝撃に耐えられなかった壁と共に崩れ落ちた。

少年は会心の手ごたえに無言のまま蹴り足を戻した。そのまま正門の方に足を進めかけて、足を止めた。

がらりと瓦礫の中から血を流しながら美鈴は体を起こして立った。上腹部は破ら

れ内臓に深刻なダメージ。胸郭には肋骨粉碎と肺破裂のダメージ。いかにフィジカルが強い妖怪とて動けるような状態ではなかった。

されど美鈴の眼の鬨氣に一点の曇りは無かった。手負いの龍が此処は通さぬと雄弁に語っていた。

少年はなんのためらいなく踏み込みと共に左のパンチを繰り出す。美鈴にはあまりに次元違いの打撃を避けえない。一度見た打撃なら本来捌けるがその最初の一発での被害でもう足が言うことを効かないのだ。

故に顔を襲うそれをただ右で受けた。容易く右の前腕が滅茶苦茶に折れ殺しきれない衝撃に美鈴の頭蓋が歪む。

しかし美鈴は打撃をガードの上から貰いながら腰を落とし大地の反作用を利用して真下から相手の鳩尾を左拳で突き上げた。会心の角度とタイミングで入り相手の動きが止まった。

この瞬間にしか勝機はないと見極めた美鈴は妖力を集中させた右足で真上に垂直蹴りで顎を撃ち抜いた、凄まじい足の可動域である。そしてそのまま相手を真上に跳ね飛ばした。

宙へと舞った敵を逃さずに美鈴も跳んだ。すぐに相手の横へ並び、空中で横倒しになった自らの体を一回転させつつ、渾身の左肘を相手に落とした。遠心力とともに全身

運動と空中での慣性、全てのエネルギーを鋭利に尖った肘に乗せる。それは城門への破壊槌の威力を持った斧の如きもの。

その一撃が直撃すればどんな相手だって打ち砕いたろう。だがしかし、相手の少年は自分の胸を襲ったそれを攻撃の軌道に合わせて自らも回転しつつ上腕で払って容易く流して見せた。大技故に見切るのも容易だったのか、むしろ恐れるべきは先の二撃をモロに喰らいながらもさして効いてなさそうなタフネスだったかも知れない。

そのまま少年は美鈴の首を左手で掴みさらに生きている美鈴の左腕を抱え込み抵抗出来ぬようにして、宙を蹴って真下に跳んだ……。

流星の様に地表へと落ちる瞬間に落下エネルギーに乗せて少年は左腕を突き出し美鈴を叩き付けた。

土煙りの中、平然と少年は立ち上がる。少年は一切傷を負っておらずあくまで穏やかな表情だった。

美鈴はもう立ち上がってはこなかった。

少年は軽い足取りで正面から門を破り敷地内へと進入した。

「それで？」

レミリアは咲夜に敵情を問いかけた。

「相手は美鈴を破った後館内には攻め入らずに正面の庭から動かずにこちらを伺つてます」

「なるほどねえ」

レミリアはテーブルの上で手を組んで言った。

「こちらが打つて出るのを待ち構えてる、か。随分大きな態度ね」

「紛れもなく大妖怪クラスです、こちらの残存戦力では今反撃に出られるのは……」

メイド妖精は論外である。パチュリも魔術師としての実力は高位ではあるが彼女はフィジカルも弱く決して戦闘向けとは言えない。

残るは咲夜自身と川上。しかし咲夜は大妖怪に対しては火力不足を自覚していた、自身の能力は極めて利便性が高いが攻撃手段はナイフである。極めて強靱な肉体と生命力を誇る大妖怪相手に決定的なダメージを与えうる自信が無かった。

咲夜は川上も同様と考えた。彼の技術はそもそもが対人用の殺人術なのだ、大妖怪相手にダメージを与えるような絶対的な攻撃手段………がないはずである。

フランドールは戦力としては数えてはいけない。確かに敵を容易に滅ぼしうるが、あれは天災の如きものだ。コントロールのできない脅威を戦力としては使う事はあつてはならない。

ならば……

「私が出るわ」

「お嬢様」

レミリアはそう軽く言つて静かに立ち上がった。城に攻め込んだ敵に対して王キング自らが前に出て迎撃するという、チェスでもあるいは戦場の戦略でもまずありえぬ一手。

しかしこの夜の王にボードゲームや人間の戦略論は通用しなかった。

「相手は身一つでこの館に攻めて来た。ならばこちらも館の主人として私が迎えるのが筋というものよ」

「お嬢様、しかし…」

しかし、何と続けようとしたのか。咲夜は首筋が粟立つような怖気に続けるべき言葉を忘れた。

レミリアが嗤つていた、口の端を吊り上げるように。

「それに、私のモノ美鈴に手を出したのだから、それが決して安い買い物ではないという事を分からせてやるわ」

この口調は怒りなどでは無く、闘争への予感からとろけるような甘い、甘い愉悅に染まっていた。

その怪物を見て咲夜は思い出した。平穏な日々が続き忘れかけていたレミリア・ス

カーレットという闘争に生きた夜の女王、戦鬼の徒という本質を。

震えかけた身体を律して咲夜は言った。

「(武運を)」

そしてレミリアは敵情を確認した。

「相手は正面の庭だったわね」

「はい」

レミリアは少し考えて笑顔で咲夜に問いかけた。

「どこから登場するのが一番かっこいいかしら」

少年は待っていた。

館の真正面、庭の真ん中に陣取り動かずに。

からなず打って出てくるはずだ、立て籠り籠城戦を決め込む程度の相手ではない。

そう信じてすらいた。

果たして、紅魔館の門が開かれて夜の闇の中から滲み出るように人影が現れた。

その人物はレミリア・スカーレットではなく一振りの刀を差した川上であった。

少年は表情に少々怪訝そうな色が浮かぶ。打って出てくるとは思っていたが、出て

きたのはただの人間なのである。

いや

少年は気づいた。違うと。

この人間はこちらに何の関心を抱いていなかった、一瞥だけしてスタスタ歩いてくる。

咲夜は川上に一つ頼んだ、それは門前で負傷して倒れている美鈴の救出である。

レミリアが敵の殲滅に出る事が決まり、咲夜はパチュリーとともにすぐに治療が出来るように用意し、その間に敵の場所を川上に教えて、美鈴を地下図書館まで運んでくるように伝えた。

結果川上は美鈴を回収に向かっているのだ、最短距離で敵の横を通つて。

咲夜は慌てていた為かミスをした。彼女が敵の場所を教え、川上に頼んだのは川上の隠形能力を買つてである、つまり敵に気づかれぬように美鈴を救出して欲しかった。

しかし、咲夜は敵の場所と美鈴を救出という事しか伝えなかつた。川上は認識がズレてる事が多い事を把握している咲夜は普段なら敵に見つからずという意図が伝わるように言えただろう。

少年は歩いてくる川上を見ていたが、やがて視線を切つた。

お互いそこにはないものと思つているかのように、立ち尽くしている少年と歩いてい

く川上がすれ違った。

川上は正門へと消えていった。

それでも少年は動かなかつた、しかしそこに澄んだ声が降り注いだ。

「今晚わ。今夜は綺麗な三日月ね」

少年はゆつくりと顔を上げた。

屋上の縁でレミリア・スカーレットが笑みを浮かべて立ち、少年を見下ろしていた。

第103話

紅魔館、屋上

そこで庭に佇む少年を見下ろして立つのは、レミリア・スカーレットだった。彼女は、その幼く愛らしい顔に普段とは違う雰囲気の陶然としたような薄い笑みを浮かべていた。

見下ろされたやや小柄な少年は見かけの上の歳からはややそぐわない黒のレザーの上下にシルバーのアクセサリーで身を固めている。その少年も灰色の眼の瞳孔が開き光を増して、獰猛な笑みを浮かべている。歡喜を感じているのは明らかだ。

見かけはまだ幼さが拭いきれぬ少年だが、妖怪としてどれほどの力を秘めているのか。力でもって美鈴を無傷で撃破した事からして実力は明らかに超常のレベルであることに違いない。

「貴方が欲しいのはこの館かしら、それとも私？」

レミリアの甘い問いかけに少年の目線が強くなり真つ直ぐにレミリアを見据える。それは言葉よりも雄弁な意思表示。目の前の敵の命が取れるなら他に何もいらないと。

「全く、そんな眼で見つめられるとこっつ、ちも熱くなってしまっじやない」

レミリアの台詞が途中で途切れかけたが、戸惑いに揺れながらも言い切った。

彼女は見たのである、ボロボロの美鈴を肩に担いで正門から少年の方へと歩いてくる川上の姿を。

何やってんのよあの子は、いい所なのに。

そう思ったが、レミリアは気を取り直して言葉を紡ぐ。僅かに萎えかけた闘志を高めるために。

「今夜は三日月、大して力が湧かないけれど……まあ、簡単過ぎてもつまらないしいでしよう」

レミリアは月を仰いだ。妖怪は月の満ち欠けに影響を受けるが吸血鬼であるレミリアは特に月の影響を強く受ける。

発揮出来る妖力は月が満ちるのに比例して高まるが、大きく欠けている三日月では大した力を出せない事になる。だがそれで良い、本人が言った通りこのくらいが面白い。

満月ではレミリア・スカーレットは無敵。それではせっかくの闘争が味気ない。

川上は扉を開いて館の中へと戻っていった。

「貴方喋らないわねえ、ウチにいる猫より無口だわ」

その言葉を受けても少年は口を開かない。早く、早く闘やろう。そう眼が訴えてい

た。

レミリアは語りながら闘志を、殺意を、高めに高めていた、爆発に向けて。

「言葉は不要、かしら。じゃあそろそろ始めましょうか」

そして今それらは余りに高まりその圧力に今か今かと解放の瞬間を待ちわびている。

レミリアはトン、と縁を蹴り、屋上から身を投げ出して空中で静止した。そして炎のように鮮やかな紅がその身から立ち昇る。

それまで不可視だった妖力が常人にも見える程の密度で解放されたのである。その紅は攻撃性と闘志を意味する色。端的に危険性を表すその色がレミリア・スカーレットの本質だったのかも知れない。

少年も応じるように嬉々として妖力を体内で収斂する。放出させているレミリアとは対象に溜めに溜める。

レミリアの手から放出された紅が一つの形を作る。妖力が集まり2メートル程の朱槍として顕現した。

北欧神話の英雄の槍にあやかり、グングニルと名付けられた槍。魔である自身が持つそれに神槍の名を冠したのはレミリアの皮肉だったのかも知れない。

しかし、その紅い槍に込められた思いは端的だった。強く、ただ強く、より強く。そ

の願いのもと編み込まれた槍は禍々しくありながらも神々しくすらあった。

「久しく忘れていたけどいいものね」

ふと、レミリアは郷愁を覚えているような穏やかな笑みを浮かべて言った。

「この闘争こうしゅうに臨む時の空気、血が滾つて、魂が震えるよう。貴方もそう思わない？」
問を向けられた少年は答えない。しかしその歓喜と殺意に満ち満ちた顔は否定を
しているようには見えなかった。

「今夜くらいはかつての私に戻るのも悪くないわ。楽しませてね」

その言葉に応じるように少年は地面を蹴り、弾丸のようにレミリアに襲い掛か
た。

紅美鈴は紅魔館の一室で目を覚ました。

「気がついた？」

美鈴は直ぐに跳ね起きようとしたが身体が全く美鈴の命令を聞かなかつた。どこ
かを動かそうとするだけで全身に激痛が走る。人間なら四回は死んでいるだろうダ
メージだった。

パチュリーにより治療は終わっており、極めて頑丈な肉体をもつ妖怪である美鈴な

らしばらく安静にしていれば回復は早いであろう。しかし流石にすぐさま動ける程の軽い傷ではない。

「寝ていなさい、もう大丈夫だから」

「敵は!?!」

咲夜の言葉も聞かず美鈴は問いかけた、自分の身体の事などどうでも良い。ただ自身が止められなかった敵の現状をどうにかしなければという思いだけだった。

「お嬢様が出たわ」

咲夜はそんな美鈴に端的に事実を伝えた。美鈴はそれを聞いてベットの上で項垂れた。

「:すみません咲夜さん、門を、守りませんでした」

「そうね」

苦渋を滲ませて言った美鈴に咲夜は短く答えただけだった。美鈴は奮戦したが敗北した。実戦というのは過程がどうであつても勝ちか負けか、生き残つたか死んだか。結果が全てである。労いも慰めも無意味であると咲夜は知っていた。

「すみません。私さえ不覚を取らなければ、お嬢様のお手を煩わせずに済んだのに!」

その美鈴の言葉は自身の主人の敗北の可能性を考慮に入れる何処か、その発想がそ

もそも美鈴の中には無いようだった。

美鈴は知っているのだ。レミア・スカーレットが本気で闘争こうしあひに臨んだ時、勝利という結果にしか収束しないという事実を誰よりも。

「そうね」

咲夜はそれだけをいい、手を伸ばして美鈴の頬を撫でた。

「ならもつと強くなって今度はお嬢様に楽をさせてあげなさい」

咲夜も美鈴同様に主人の闘争に敗北がない事を知っていた。そして敗者が出来る事はより強くなるしかない事を。敗北して次がある事自体が僥倖なのだから。

「なれ、ますかね。私ももつと強く」

「なれるわよ」

弱音とも取れる美鈴の口調に咲夜は笑って断言した。

そう強くなれる。本当の強者はいつだって敗北の苦渋を知りどん底で泥を啜った弱者の中から生まれるのだから。

中空で紅の槍と紺の剣が交わり弾けた。

力に押され後方に吹き飛ばされた少年は空中で見えない壁があるかのようにそこに足で踏みとどまり、溜めるように足を曲げて強く宙を蹴り矢のようにレミアに向か

い跳躍した。

一瞬でレミリアの懐に肉薄した少年は、右手の紺の剣でレミリアの胸を貫き、そのまま遙か後方まで撃ち抜く。

剣に串刺しにされたレミリアは下方に吹き飛ばされて大木にぶつかり礫にされる。それを上空から少年は嬉々とした表情で見下ろしていた、やはり見えない地面があるかのように空中で立つて。

彼は自身の妖力を右手に送り所々が黒く沈む濃い青色、紺の剣をもう一振り練った。剣といえどエネルギーの塊なので不定形ではあるが刀身に当たる部分と柄に当たる部分との間、ヒルトと思われる部分が異様に大きくせり出しまるで十字架のようだった。西洋のロングソードに近いフォルムか。

今の一撃は並の妖怪なら挽肉状のミートソースになってもおかしくない威力であつた。しかしレミリアは原型を保っている、だが普通に考えてダメージがないわけではない。

しかし張り付けになったレミリアが一緒黒い霧に包まれて、そこから大量の蝙蝠が飛び去るともうそこには大木に突き刺さった紺の剣しか残らなかつた。

大量の蝙蝠が少年の目の前で集まって黒い霧となり、一瞬の後にはもう無傷のレミリアがそこにいた。

「今のは中々効いたわよ」

そう陶然とした声で嘯くレミリアに少年は楽しくて仕方ないというようにさらに
獰猛な笑みを深くする。だんだん人間離れして——もともと人間ではないが——いよ
いよ獣じみた形相になってきていた。

二人は戦う内に館から大きく離れており、すでに湖を超え森の上空だった。

レミリアが神速で距離を詰めざまに槍を横殴りに振るつたが、それより早く宙を
蹴って飛んだ少年は遙か上空にいた。

そして二度、三度とやはり中空を蹴って方向転換してレミリアに向かって真下に跳
んできた。

即座に両者は交錯して、槍と剣を合わせる。今度は力負けする前に少年は見えない
壁を叩くように左手で中空を叩き横に飛び、そしてまた宙を蹴ってレミリアの下方へと
斜め下に跳び、すれ違い様にレミリアの右足を切り飛ばして言った。

「速いわね」

下へと跳んだ少年は地表近くでまた方向転換しつつ数回宙を蹴ってあつという間
にレミリアより上空にいた。

少年は妖怪としては特異な空中移動をしていた。空中で自在に不可視の壁を作り、

それを足場にして跳躍を繰り返して移動しているのだ。すなわち飛ぶのではなく跳んでいる。

方向転換するにも壁を利用して跳躍する必要があるので通常の飛行に比べて小回りが効かない。しかし妖怪としても圧倒的な身体能力を用いて跳躍するという移動法はその欠点を補って余りある速力と移動距離があった。

少年が本気なら一キロの距離を一回の跳躍で超える事が出来たろう。

レミリアの失った足に黒いコウモリがチキチキと集まり、すぐに元通りの足に再生した。

そのまま上空の少年に向けて赤い妖力をレーザーとして三条放つが、少年は既にそこには居ない。レミリアは直感的に真横を槍で刺突する。惜しくもすれ違う少年の脇腹の肉を削り飛ばしたが代償にレミリアは首を飛ばされた。

首を失い墜落するレミリアに少年が上から打ち下ろしに投擲した幾振りもの紺の妖剣が大量に殺到してレミリアの肉体を跡形もなく消し飛ばし、さらに地面をクレータ状に削った。

ククスと愛らしさと妖艶さが混じった笑い声が先行して、すぐにまた中空でコウモリが集まりレミリアを形作った。

いくら殺しても再生する不死身性を見せるレミリア。常人なら殺しても殺しても

死なないという事実だけで戦意喪失していただろう。殺し続けるというのは想像を絶するストレスを伴うのだ。

しかし少年は笑っていた。嬉しい、楽しいと。

実際の所少年は速力に加えて巧くもありレミリアばかりが攻撃を貰っていた。被撃率はレミリアが五もらった所でようやく少年に一撃入るかどうかといった所だ。

レミリアの不死身性故に致命傷にはならないがレミリアの攻撃も凄まじいタフネスを誇る少年に有効なダメージが通らない。互いに決定打がない。

しかし再生するにも妖力は使う。このまま殺され続けていれば妖力が尽きるとはどちらが先か。

——いや

「楽しいわね」

レミリアは弾んだ声で告げた。

「楽しくて、いつまでも続けていたくなるわ。でもこれ以上は霊夢にでも邪魔されたら事ね」

どちらかが力尽きるまで続きはしないだろう。こんな派手に闘争行為を起こっているのだ、いつ管理者側の介入が来るかわからない。

「だから残念だけど、そろそろ幕を引きましょう」

その言葉を聞き少年は拗ねたような顔をした。楽しくて仕方ない遊びを止められた子供のように。

レミリアはコウモリに分解して。高高度で集まり顕現した。

その姿を見て、終わりを宣告され浮かない顔をしていた少年の眼が尋常ではない光を帯びた。

レミリアが本気になった。辺りの空気は一変した。漏れ出ている妖力の質が変わり空気が重さを増した。

それだけでレミリアが次の一撃を決着とする意思が明瞭に少年に伝わった。

レミリアは右手の槍に妖力を流し込む。次の攻撃や再生に使う為の余力など考えずに莫大な妖力を槍へと。

凄まじい量の力を送り込みながらレミリアはそれが槍の外に漏れぬようにコントロールし、僅か2メートルの槍の中へと込める。僅かな器に過ぎた妖力を圧縮する、圧縮し、圧力を高めに高める。

その気なら攻撃を仕掛けて妨害する事も出来たはずだが少年はそれをしなかった。少年の眼に決死の光が宿った。

レミリアの槍は凄まじい圧力に耐えきれないというように唸りを上げ始めた。そのただそこにあるだけでその場にいるものを跪かせるような圧倒的な力を感じさせる

朱い槍。まさしくそれは神槍グングニルの名に相応しいものだ。

その槍からは何人も逃れ得ない。それを破るには——
少年もまた自身の余力の全てを一振りの紺の剣に込めた。

真つ向から打ち勝つ他ないのだ。

もはや二人の間に言葉はなく。最後の最高の刹那へと示し合わせたように構えた。

レミリアは自身を一個の射出装置として左手を真つ直ぐ少年へ向けて突き出して照準して右腕と上体を一杯に使って大きく槍を振りかぶった。

そして逃れ得ぬ神槍に狙いを付けられた少年もまた剣を両手で背中につくくらい大きく振り被る。

来る。

「うおおおっ——」

その瞬間少年は力の限り咆哮した。死へと向かう刹那に、百年振りに得た生きていくというこの上ない実感。最高の充実を感じて叫び、そして渾身の力で剣を振り下ろした。

レミリアもそれに合わせて、神槍グングニルを少年に向けて投げた。

瞬間、紅い閃光が少年へと走り。一瞬遅れて圧縮されていた妖力が解放されて周囲50メートルを紅いエネルギー波に飲み込まれた。

決着は一瞬だった。

妖力の炸裂が取まると大きくクレーター状に陥没した地面には槍を自らの全てを捨て迎撃した少年の体は跡形も残っていないかった。

ここに一人の妖怪は死んだ。

「さようなら」

レミリアは一抹の寂しさを感じさせる微笑を浮かべて言った。

「久々に楽しい闘争ごうしあひだったわ」

でも、今夜は終わり。

だから

「また一時の和を楽しみましょう。ゆっくりと流れる陽だまりの中で微睡むような心地の良い時間を」

そしていつかくる闘争の時 その時は願わくば

「次はもっと激おどましいしい闘争を望むわ」

レミリアは決着の場に背を向けてクスリと一つ笑った。

決着の時、その槍の起こした振動が伝わり暗い部屋に揺れが走った。

その部屋のベットの所で揺れにも関せず川上は横向きに既に寝息を立てていた。

第104話

「咲夜」

深夜二時、スカーレット姉妹の食事が終わった後の片付けを厨房でしていた咲夜。その背中にいつのまにか入ってきたレミリアが声をかけた。

「なんででしょうか、お嬢様」

咲夜はお嬢様が厨房に立ち入るなんて珍しいな、と思いながら作業の手を止めて問いかけた。その時気付く、いつものナイトキャップをしていない。

レミリアは咲夜のエプロンの裾をくいと引き、甘えたニユアンスで言った。

「抱っこ」

「今日は甘えん坊ですのね」

そういいながら咲夜はしゃがんで視線を合わせた。全く不思議な御人だと咲夜は思う。ついこの前のように王の風格を見せることもあれば、落ち着いた淑女のようにも振る舞う。時には見かけのまま、いや下手したら見かけ以上に幼い一面も見せる。

咲夜はレミリアを両腕で引き寄せ抱き締めた。そしてしばし頭を撫でる。そしてそのまま横抱きにして立ち上がった。

咲夜は慈しむようにレミリアを抱いた。

いとしい、いとしい、私のお嬢様

私は最後まで貴女と寄り添います。

レミリアは腕の中で目を細めて咲夜の胸に顔を寄せた。穏やかな心音が伝わってくる。胸の大きな美鈴と違い、咲夜の胸は僅かな隆起がある程度の乳房とも言えぬ薄い胸だった、レミリアは咲夜のこの胸が落ち着いて好きだった。

レミリアはしばし穏やかに咲夜の心音を聞いていたが、カチャと小さな音を聞きふとそちらに目を向ける。

川上がテーブルの上の銀食器を黙々と磨いていた。レミリアは固まった、厨房には咲夜以外メイド妖精も誰もいないと思っていたのだ。

一部始終を見られていた事に気付いたレミリアの顔が真っ赤になった。それを見て怪訝に思い咲夜もレミリアの目線を追う。

「あ」

咲夜は今思い出したという声を出した。そう言えば手伝いでいたのである。黙々と仕事をしている川上は存在感が路傍の石のようになってしまったため失念してしまった。

どうも主人は見られなくなかったようだ。まだ川上に対してはちよつと見栄を張

りたいのだろう。もっとも気にすべき相手では無いと咲夜は思った、どうみてもただ手元の作業だけにしか目を向けていないあの男はこちらに関してなんの感想も抱いてはいないだろう。

とりあえず主人に気を利かせて、咲夜は何も言わず赤面したレミリアを抱っこしたまま厨房から出て行った。

川上は一人、黙々とシルバーを磨き続けていた。

フランドールは自室で紙に絵を描いていた。

鉛筆を用いて画用紙に素描をしている、描いているのは紅魔館地下図書館の住人、パチュリーだった。

本人がモデルとして目の前に居るわけでもなく、おそらく記憶をもとに描いているのだろう。椅子に座ったパチュリーの絵は妙に精巧に描かれており、陰の濃淡もつけられている。

これは鉛筆を用いて描写するという作業を通じて力の加減を学ぶ為の、姉に言われて始めた訓練だった。しかし描き初めてみると段々と誰に教わったわけでもないのに妙に上手いデッサンを描いてみせてレミリアを驚かせた。

フランドールの描くパチュリーの絵には何故か身体のところどころに黒く塗り潰

した丸がいくつか書き込まれている。丸は中心の周りは塗り潰されてはおらず目の光彩を思わせる。

フランドールの見る世界はそのように見えているのだろうか。

フランドールの部屋は荒れていた。部屋の壁や天井に大小の袂れがいくつかあり、千切りられた熊のぬいぐるみの四肢や首が並べられている、上半身と下半身に分けられたアンティークドールが机の上に置かれている。

しかし、ただ荒れているだけではない、何か奇妙な印象を抱かせる部屋でもあった。家具も新品のようなベッドもあれば半分が千切れとんだような壊れた机もある。

しかも、家具の配置が無秩序だった。部屋の隅に本棚を置くとか、椅子とテーブルと向かい合わせるとかの普通なら誰でもそうするセオリーのようなものを無視し。何故かベッドがドアの前に置かれていたり、本棚が部屋の中心やや外れた所に置いてあったり、椅子は横倒しになっていたりした。

千切られたぬいぐるみもよく見ると、妙に理路整然と並べられている。

一見すると滅茶苦茶である。しかしこの部屋はフランドールにとつての聖域であり、彼女の中の決まった秩序に基づいている。この部屋のフランドールが決めた秩序を把握しているのは現状レミアと咲夜だけだ、掃除は咲夜しか出来ない。

この部屋に立ち入る者は殆どいない、不可侵の領域と館の者は認識している。昔、

フランドールと意気投合し遊びに来たメイド妖精が何気なく並べられた千切れられたぬいぐるみの足を3センチ程ズラしてしまった結果、痲癩を起こしたフランドールに粉砕されてしまった事があつた。

この部屋は他の者からみると滅茶苦茶で意味不明、フランドール本人にとつても特に意味はない。しかし彼女にしかわからない収まりがある。

そう意味不明といえはもう一つこの部屋に意味のわからないものが存在する。壁際に座つて、床に置いた画用紙に眼を落とし、右手の鉛筆を迷いながら走らせている、自身の右手側に一振りの刀を置いた礼服の青年。

川上である。何故彼がこの部屋にいるのか。

簡単な話である、彼にとつてはこの部屋に居てはいけない理由はない。つまり川上にとつてここにいるのに意味はない。ただ足が向いた、などの理由だろう。

フランドールも自身の部屋の無秩序な秩序を崩そうとはしない川上がいることを許していた。

そうして川上はフランドールに何気なく絵を描く事を勧められて、共に絵を描いていた。

なんとなしに部屋に横倒しになっていた椅子をモチーフとして描き始めたが、しかし彼の素描はフランドールのそれと比べると一見で素人のものと分かる粗末なもの

だった。

武芸者の定義の一つに、芸の一字が入るように武だけではなく芸事や遊芸を嗜む者という考えがある。例えば書や絵画などを残している宮本武蔵などが有名である。

その考え方からすれば、川上は武芸者としてはまだ未熟だったのかも知れない。遊芸の類いはあまり得意ではなかった。

それにモチーフをありのまま観察するというのも難しかった。彼の視界はノイズがかかり過ぎるのだ。

フランドールは一枚描き終わると紙の隅に数字を書き込んだ。059312147。サイン代わりなのか、これも全く意味のない数字の羅列であるがやはりフランドールのみに分かる秩序だった。

「描けた？」

フランドールの問いかけに川上は頷いた、彼もとりあえず描きあげた。始めた事なので一応は形になるまではやった。

「見せて」

言われて川上は歪んだ椅子の描き込まれた紙を手渡す。

「下手くそだね」

しばしその絵を見つめてフランドールは一言で切つて捨てた。川上も全くと追認する。逆に上手いと言われたら当惑する類いの絵なのだから。

フランドールは自身の絵は見せる事はせずに壁際であぐらをかく川上の懐に背を預けてフランドールも座つた。

ふう、とフランドールは落ち着いたように一息ついた。

「最近ね」

そして唐突にフランドールは語り出した。

「お姉様やパチュリーに、成長したね。偉くなつたねつて。言つて貰えるようになったよ」

「でもね、悲しいつて思つた時も笑つて。怒つた時も出来るだけ我慢して」

いつもより子供じみた口調でしかしどこか淡々としたフランドールに、川上はぼんやりとした眼で口を挟まず黙つて聞いている、あるいは聞いていない。

「そうしないとみんなをガツカリさせちゃうから」

そしてフランドールは寂しげに笑つた。何かが足りないのだ。

「そんな時、私、嘘ついてる。私はこんなんじゃないのにつて、嫌な気持ちになる」
「みんなそうなのかな」

フランドールの問いかけともとれる言葉にも川上は何も言わない。彼にはそもそもそ

も答えなどわからない。

「貴方は」

「貴方は嘘を言わないのね」

高く甘い、そして何処か冷たい声でフランドールは言った。フランドールは背を預けているため川上には彼女の表情は見えない。

「だけど多分本当の事も言わない」

「大変だな」

そこで初めて川上は口を開いた、月並みな感想にフランドールの頭に疑問符が浮かぶ。

「誰かに期待するのも、期待されるのも」

極めて抜き身な感想だった。ふふ、とフランドールは笑った。ああ、そうか。

「貴方は楽に生きてるのね」

フランドールは足りないのではない、きつと捨て切れただけなのだ。

「私はそうはなれなかつたな」

そう実に495年。それだけたつてしかし捨て切れない。

だつてみんな優しかったから。

寂しげな少女が抛り所を求めするように背中を預けてきて、腕を回して抱きしめる事くらい簡単に来る事だった。しかし川上という男は決してそれをしなかった。

それはただ単に彼にとって意味がないからしないだけかも知れない。

あるいは、理解していかからかも知れない。安易な優しさはどんな暴力よりも残忍な事だという事を。

第105話

月が満ちた夜道、場所は知れない。

白い着流しに身を包んだ男は啞え煙草で月を仰いだ。

20代前半だろう、その男。艶のある黒髪だが無頓着に切られ、前髪の奥から覗く三白眼は夜の暗に瞳孔が開らいていつも以上に黒く昏い。顔立ちは割と整っていた、しかし全体として纏った雰囲気は深さと不吉さがあり彼の魅力を損なっていた。

帯に一振りの刀を差し、さらに背に野太刀を紐で背負う。雪のように真つ白い着流しに身を包んでおりながら発散する陰気故まるで幽鬼の如く感じられる。

現在紅魔館、下つ端使用人の川上である。館を抜け出し今夜は何処へいくのか。

無論決まってははいない。例によつてただふらふらと散歩しているだけだ。何処へいくのか、いつ戻るのかといった事は川上すらわからない。

彼は煙草を落とし踏み消すと歩き出した。

暫し歩いた時茂みから一匹の山犬が姿を現した、気が立っているのか飢えているのか唸りを上げて川上の前に立ち塞がる。

大きな赤毛の日本犬だ、しかし川上を見上げて牙を剥いて唸る様は飼いなさらされた

犬ではなく狼を思わせる。背筋が冷たくなる殺気と迫力はたかが犬と馬鹿に出来たものではない。

川上は無言で犬を見据えた。特に何をしたわけでもないが、自然と犬は唸るのをやめた。そして恐る恐るという風に歩みを進めて川上の足元にやってきた。

川上はしやがむ。すると大体目の高さが合うくらいには大きな犬だった。彼は手を伸ばして犬の首元を撫ぜた。

短く、硬さとしなやかさのある毛皮は心地の良い手触りだ、犬も気持ちよそうに身を任せていた。暫し川上は手触りを楽しみ立ち上がる。犬は川上を見上げていたが川上は既に視線を切っていた。

川上が歩き出すと犬はその場で動かず少しの川上の背を見送り、やがて自然と自身も川上とは逆方向に歩き出した。

一人と一匹が交わり別れてから半刻程また川上が歩いたころ。

小さな声がどこからか聞こえた気がした。細い、どこからとも響いたとも知れぬ女の声のような。

川上は特に気にする様子もなく、歩みを止めない。だがその時。

「当たって…砕け…」

今度の声は明瞭だった。

「うらめしやー!」

元氣よく木陰から川上の前に飛び出したのは青い影。川上は立ち止まった。

「うらめしやー!……あれ?」

飛び出して来たのは、水色の髪と髪と同じ水色と赤色の虹彩異色の瞳。愛らしい顔に悪戯っぽい表情を浮かべている。服装も上は白いシャツの上から水色のベストを着込み、下も水色のミニスカート。素足に下駄を履き。手に大きな紫の傘を持つ。

全体としての色合いが空を思わせる小柄な少女は付喪神、多々良小傘だった。

「今晚は」

相手の求める所がわからない川上は取り敢えず挨拶し。

「今晚はー!……驚いてくれない? 駄目かー」

小傘は元氣よく挨拶を返して、しかし相手を驚かすという目的が達成出来なかった事に息を吐いた。

「暗いし、夜道だからいけると思ったのにー」

月が満ちているとは言え他に光源のない幻想郷の夜道は暗い。新月なら伸ばした腕の先が見えないくらい闇に覆われる。確かにいきなり飛び出してくれば驚く人もいよう。もつとも驚かすという意図にしては爛漫過ぎたきらいはあるが。

「あれ、その刀、貴方お侍さん?」

今夜は妙なものに出くわすものだと思い、しかし相手にもう用がないなら立ち去ろうと川上が思ひかけた時、機先を制するように小傘が言った、何か興味を抱いたように。

「見せて」

いきなり妙なものに絡まれて、差料を見せろと言う。夜盗かもわからぬ相手の言葉に応じる者などまづいまい。

しかし川上は小傘の悪戯つ子のような顔の眼の光に何かを感じたのか。無言で鞘を払い、抜き身を懐紙で挟み小傘に手渡した。

小傘を傘を折りたたみ下げると刀を受け取り、それを手に月明かりに翳した。この暗さでは鑑賞も何もあつたものではないと思うが。

まだ幼さが残る少女。武芸に長けてるとも見えない小傘が刀を掲げる姿。しかし川上は小傘に刀が妙に様になっていると感じた。

「金がいい、堅そうに見えて刃の粘りも悪くない。安定でも中々良い出来。いい刀を使っているね」

この暗闇の中、一見で小傘はそう評した。驚くべき事だった。暗闇は妖怪故に夜目が効くのかも知れないが、しかし、中子を見たわけでもなく。化粧が落ちて見えにくくなった金を見ただけで刀工まで言い当てた。

剣術使いには見えないが、おそらく刀剣の専門家。刀剣を取り扱う商人か、いや。

「刀工か」

多々良小傘。鍛冶を得意とし、刃物を鍛造する腕は確かである。武器も、刀も彼女は打つ。

「貴方も凄腕だね、この時代の刀の体配は癖があるのに。ここ最近だけで数人は斬つて一切疵らしい疵も捻れもない。刃筋に一切の狂いがないところはいいかないよ」

刀を見るだけで使用状態と川上の技量を見抜く慧眼。

「自然に刃を通せばいいだけだ」

「ふうん、安定をこう使えるんだ。うん」

事も無げに嘯く川上に、小傘は何か思いついたように頷いた。

「貴方私の工房に来て」

案内された場所は二人が出会った所からほど近く。人気のない所に多々良小傘の工房があった。

「どこぞ、入って」

「お邪魔する」

小傘に言われるがまま工房に立ち入る川上。川上は鍛冶場に興味を抱いたのであろうか、しかし小傘は何故人間をわざわざ仕事場に呼び寄せたのか。

入って所は雑多な道具やらがいつぱいのごみごみした場所だった。隣はどうやらこの工房の心臓部である鍛冶場らしい、川上は申し訳程度に置かれていた椅子に腰を下ろした。

「お茶飲む？無いんだけどねー」

冗談のつもりか爛漫に笑いながら傘を傍に自分も座った小傘に、川上は特に何も言わず煙草に火をつけた。

「見ないの？隣？」

鍛冶場であろう、炉やふいご、金床やら水槽やら当然揃っており小傘の誇りだ。

「いや」

川上はわざわざ鍛冶場を見学というつもりな無いようだ。おかしな事ではない、刀は道具だ。コンピュータがどう作るのか、製造工程を知らずともコンピュータという道具を使う事は出来る。彼は刀という道具を作る工程にはさしたる興味はない。

しかし、鍛冶場は女人禁制では無かったかどうでもいい事を考えていた。もつとも歴史上女人の刀鍛冶も居ないわけではなかった、この幻想郷で突っ込むべき事では無かっただろう。

「わざわざ鍛冶場の案内に呼んだ訳ではないだろう」

紫煙を吐きつつそう低く抑えた越えて川上が言うと、小傘はちよつとむくれた。

「そうなんだけど、少しくらい興味持つてくれても」

そうぶつくさといいつつ小傘は工房の一角を指差した。

刀掛けに黒漆の無骨な天正拵が一振り掛かっていた。本身が入っている事を川上は見抜く。しかし何故工房に拵に納めた状態で置いてあるのか。

川上は煙草の火を消すと立ち上がって歩みより、刀掛けから刀を取った。そのまま作法に則り刀を掲げ。

「刀礼はいいよ」

頭を下げかけた川上を小傘は制した。それに思う所があつたのか川上は首だけで振り返り、そこで初めて小傘をちゃんと見た。二秒程見据えて刀に向き直り、鞘を払った。

言うまでもなく小傘自身の作刀だろうそれは、しかし奇しくも安定と同じ江戸前期に特徴的な体配、寛文新刀の姿をしていた。反りは目視で殆ど感じられないほど浅く直刀に近い。小切先になり元と先の身幅に開きがある。尺は二尺三寸六分といった所か。

当然最近打つたものだろうが、しかし何故寛文新刀期の代配で打ち上げたのか。続けて金を見る。

それは妖怪が鍛えたというにはあまりに健全な地金をしていた。健全といつても

状態の事ではない、一箇所地金に膨らむような鍛え割れがあった。しかしあまりに丁寧に鍛錬し真摯に鍛え込んだ、そういう詰んだ板目肌をしていた。

刃文は直刃だ、面白みはないが綺麗に真っ直ぐ刃文を焼くというのは相当の技量を伺わせる。刃中には匂いが付き、白い粒子が刃文に沿って走り二重刃のようになっており、雲をどこか思わせる。

全体で見ると派手さや華やかさといったものは感じられない。ただこの刀に込められた思想は端的だ。強くあれ。粘り、切れる。ただそれだけを思い叩き、鍛え、焼き、なましたのだ。

その願いを一身に受けた刃は透き通っていた。川上はその刃に青空を感じる。

「銘は？」

「銘は切った事ないよ、必要？」

川上の問いに小傘はそう返した。無銘。だが川上の腹にはストーンと落ちた。この刀には、いやこのような刀を鍛える刀工にはふさわしくあった。

「寛文期の刀は特徴的だよ、無骨で。反りも浅いし突きに適して斬るには適さないと言われるけど」

「そうは思わない」

小傘の言葉に川上は否定を返した。小傘は面白そうに笑って続けた。

「そう、同時期に試し切りが盛んに行われるようになったんだ。そして寛文新刀も沢山試された。その結果から私も貴方と同じように考えたの」

「癖はあるけど、単純に刃味だけでいうなら一番じゃないかって」

「そこまで言つて小傘は川上の手の中の作刀を指した。」

「だからここ最近工夫してみたの。出来が一番綺麗だったのは里の刀剣商が買つていったんだけどね、そのお金で拵えを作らせたんだ」

つまりこの刀は影打ちに当たるといふ事だろう、おそらく大きな鍛え割れのせいだ。刀剣商の目には止まらなかつたのだらう。しかしわざわざ拵えまで作つたのなら。

「疵はあれど出来は劣らないという訳か」

「それは違うね、それが一番いい出来なの、商人も見ろ目が無いね」

べ、と舌を出してそう言つて小傘は笑つた。彼女は機能を損なう訳ではない疵など何も鑑みないようだ。

「値は？」

「何せ一番の出来だからね。でもまあ、お値段の方は大勉強つて事で」

そういかにもな前口上で告げた値段は、しかし本当に安かつた。妙だと川上は思つた。刀は刀工一人居れば作れるというものではない。武器として設えるには研師、塗師、鞘師、柄巻師、白銀師、鐔師。刀工の他にざつと言つてこのくらいの職人が関わる。

拵を作らせたと言っていた、質素だが実質剛健な拵に見える。当然他の職人に作らせ必要経費がかかった筈だ。

刀一振りにちやんとした拵えを作らせれば、ものにもよるが比較的安価な刀一振りの値段がかかってもおかしくない。小傘の要求した値段ではどう考えても足が出る。

「随分安い」

「ははは。正直な所をいうと、この値段じゃ持つてけドロボーって感じに近いかな」

川上の感想に小傘は爛漫に笑いながら言う。それはおそらく事実なのだろう。

「でも、その安定を見てわかったの。貴方はそれを使うに相応しいって」

ふと、爛漫な笑みから何処か哀愁を感じさせる微笑に変えてポツリと小傘は言った。同じ寛文新刀を使っていたから、というだけではなさそうだ。

「私も今はこんなナリだけどね、もともとは物だったんだ」

小傘は傍の毒々しい色をした傘を見やって言った。

「貴方は物を道具として正しく使ってくれる、大事に正しく、容赦なく使い潰す。道具に取ってはそれが一番嬉しいの」

刀は——刀は武器である。道具である。物であり、消耗品だ。それが本質。ただ蔵に納めて代々守っていく事が大切にする事という訳ではない。元は同じ物であった小傘はそれが痛いほどわかった、そしてそうして物として使ってもらい、壊れる。小傘が

切望ししかし得る事が出来なかつたのだ。

「私は貴方にその刀を使って欲しい」

もつとも、全くのタダっていうのは可哀想だからねと小傘は笑つた。

川上は刀を納めて、置くと懐から手持ちの金を全部出して小傘に渡した。

「前金だ。不足分は3日以内に払いに来る。俺は川上という、今は紅魔館に居る」

川上が給金として貰つてゐるのは大した額でもないが、死体から金を回収したりしてゐる事も充分払える範囲だ。

「私は多々良小傘、刀は持つていつていいよ」

自身も遅れて名乗りながら、立ち上がり物置になつてゐる一角を漁つた。

「これ休め鞆。合わせものだからサービスね」

買い上げた無銘刀を取つた川上に、小傘が白鞆を差し出した。柄はない、必要ないのだ。

小傘は刀袋に包む事すらしなかつた。川上は刀をそのまま腰に安定と共に二本差しにして、結ばれていた下緒を解き帯の前で結ばずに軽く通した。

「新身だから、良く油を馴染ませてやつてね」

「ああ」

打ち立ての刀は錆びやすいので頻繁に手入れが必要となる、川上は返答した後小傘

に向き直った。

「確かに使わせて頂く」

そう言つて一礼をした。彼がいつも行う形式的な礼より幾分敬意が籠つていように見えるのは気のせいか。

「うん」

「ありがとう」

小傘はただ嬉しそうにそう返し。川上は踵を返した。良い、良い物を手に入れたと充実感を胸に。

第106話

夕刻、霧の湖

四人組の男がいた。

和服に身を包み、四人は各々帯刀している。一様に一方を見て何か小声で相談し合っている。

四人組が見ているほうには木に背を預けて地面に腰を下ろして、夕陽を反射して紅く煌めく湖面を見ているのかいないのか啞え煙草でぼんやりした様子の一人の男。

礼服姿のその男は20代前半。腰に二振りの刀を二本差しにし、傍らに長寸の野太刀を置いていた。艶はあるが無造作な印象の黒髪に、特徴的な半眼で三白眼となった不吉な眼。

紅魔館使用人、川上であつた。

「どう思う?」

「九分九厘だな」

「同感だ間違いないねえ」

四人組は川上を観察しその特徴から、自身の組織における尋人だと相談しつつもほぼ確信していた。

四人組は反妖怪派抵抗組織の構成員だった。

「尾けて住処を暴くのはどうだ？」

「いや、落ち着け。おそらく気付かれる。いや、どうもすでに気付かれてるように思う」

「確かに深追いはヤベエかもな」

四人組の一人は尾行を提案してたが。冷静さと勘の良さを合わせ持った男が制した。男は帯刀はしていなかったが艶のある飴色の仕込杖を突いていた。そしてそのままその男は提案した。

「ここで、話を付けよう」

その言葉に他の三人は一様に驚愕を示した。

「そっちのほうがヤベエだろ、相手は数十人を一人で斬るような奴だぞ」

「だけど：：こういう性格かまではまず話してみない事にはわからないのは確かかも」

「そりゃそうだが危険だろう、それに見た感じ空気がどうも良くない。最悪いきなり切りかかれるかもしれん。話通りなら四人でも危ないぞ」

皆口々に仕込杖の男に意見した。それを目で制して口を開く。

「危険は承知だ、だが向こうも馬鹿ではあるまい。お前」
「僕か？」

男は四人の中で一番若そうな一人を指名した。

「お前はすぐ里に戻れ。清水と思しきを見つけたと伝えたら。誰か数人連れてまたこゝまで戻ってこい」

「え、それは」

「出来ればあの男を立見さんの所まで連れていき話を聞くように交渉する。」

「これからするのはあくまで話し合いだが。一応保険だ、頼む」

仕込杖の男が頭を下げると、頼まれた方も否やとは言えなかった。

「わかった」

そう言つて若そうな男は里の方へと歩き去つていった。

「話し合いは俺だけでいい、お前達は控えていていい」

「いや、もしかしたらやばいだろ。俺も行くぜ」

「人数がいるだけでも話し合いは有利に運ぶだろう。俺も助力する」

「わかった」

そうして三人は川上へと歩み寄つていった。

三人はわかりやすいように少々大げさなくらいに足音を立てていたが、川上は前

方、湖面の方を向いたまま目線も動かさなかった。もう彼我の距離は5メートルもなく、
気付いていないはずはないが。

「すまない、兄さん。ちよつといいか」

「なんだ」

仕込杖の男が先頭に立つて声を掛けた。後の二人はすぐ後ろで控えていた。川上
は立ち上がりもしなかった、ただ顔だけ向けて三人を一瞥だけして返答をした。

その石ころでも見るかの如く何の熱の込もらない視線になぞられた男の中の一人
がぶるりと身震いをした。如何に湖のほとり、夕刻とは言え、震えるような気温ではな
い。

「貴方は清水ではないか、最近野盗の徒党を数十人切った」

単刀直入な問いかけに他の二人に緊張が走った。しかし当の川上は短くなつた煙
草を落としながら、目線を切り。そのまま視線は何かを考えているのかふらふらと中空
を彷徨つた。数秒で得心がいったというように目線が戻ってきた。

「多分そうだが」

自分の事なのに多分とはおかしな話だが、それには触れず男は釘を刺した。

「早まった事は考えなくてくれ。一応言っておくがもう仲間の一人が貴方の事を組織
の人間に伝えに行っている。それにこちらは貴方の事をどうしようというつもり

はない」

「貴方の情報もある程度集まっている、紅魔館だろう」

機先を制した男に川上はやはり腰を下ろしたまま動かさなかつた。紅魔館を出したのはただのカマかけだ。ただ、阿求を囲んだ仲間がやられた日に里で紅魔館の銀髪のメイドと共にいたという目撃情報があつた事と、今の場所も紅魔館にほど近いという根拠とも言えぬ根拠。しかし川上は否定も肯定もしない。

後ろの二人はひとまず安心というように胸を撫で下ろした。

「では何の用だ」

「話がしたい」

「聞こう」

あつさり呑んだ川上に対して、仕込杖の男は自分達の組織の理念を整然と説いた。川上は男たちの方もみずに夕陽が沈み征く湖面の方を向きながらそれを聞いていた。

「つまりは、妖怪はルール違反さえしなければ人間を食つてもいい。食われたこつちは文句は言えない」

「このルールが正しければ、それも仕方ないと言えるかも知れないが。そもそもルールを提唱したのは妖怪側だ、妖怪に都合よく出来てるのはもちろん抜け道だらけだ」

「そうだろうな」

ルールの不当性を説く男に川上は感情の読めない相槌をうつ。

「実質、里の人間は妖怪からすれば家畜小屋の豚に過ぎないという事だ。管理されていつでも食える。しかし、里の人間の大半は現実を見ようとはせず、現状に甘んじている」

「貴方は外の人間だろうか？外がどのようなものかは知らないがこれ程人間が軽んじられる世界ではあるまい？」

男の問いかけに川上は答えない。逆に問い返した。

「それを聞かせて俺に何をしろと」

「…出来れば同じ人間として協力して欲しい。妖怪と本当の平等を勝ち取る為に」

「もちろん、無理にとは言わない。最初に言ったように俺達はある程度をどうこうするつもりはない」

川上は日が沈み切った湖面の方をむきながら煙草を取り出して火を付けた。まもなく夜の帳が降りるだろう。

「ともかく一度俺達のリーダーに会っては貰えないだろうか。話しを聞くだけでもいい。協力してくれれば話し合い次第でリーダーも貴方の要求なりも聞くはずだ」

そう冷静に語り終えた男に川上はゆっくりと一服し、紫煙を吐いた。やがてポツリと呟いた。

「…ちようどいいか」

川上はまだ二口しか吸って居なかつた煙草を落とすとおもむろに立ち上がった。思わず後ろの二人は一步後ずさったが、それには目もくれずに言った。

「その人物の所に案内してくれ」

第107話

「案内をしてくれ」

川上の言葉に仕込杖の男はゆつくりと頷いた。

「わかった、里だ。着いてきてくれ」

川上は野太刀を背負った。その間に仕込杖の男は他の二人に軽く目配せをしジェスチャーで何かを伝えた。

「いざいざ」

川上がそう言うのと仕込杖の男が前に立って歩き始め、川上はその後ろに着いていく。

更に川上の斜め後ろに位置取りし二人の男が歩く。ちょうど川上はトライアングルの真ん中に位置していた。仕込杖の男は川上に対して移動中も油断無く包囲網を固める堅実振りを見せた。

四人は会話も無く一丁程歩いたが、意外な事に川上が口を開いた。

「聞いてもいいだろうか」

「答えられる事なら」

仕込杖の男に向けた川上の言葉に、男は歩きながら向き直りもせずには答えた。
 「君は妖怪に誰かを殺されたのか」

川上の素朴ですらある問いかけに後ろを歩く二人の顔に苦渋が浮かんだ。この組織にいる多くの人間が近い者を妖怪に何らかの形で奪われているのだ。仕込杖の男は川上からは背中しか見え、表情は伺いしれない。

「二人娘がいた。殺された」

仕込杖は感情の籠らぬ声色で端的に事実を答えた。彼はもはやその事実に対しては感情が焼き切れてしまったのだろうか。

「妻はいないのか」

「妻は」

続けて川上は問いかけて、仕込杖の男が口を開きかけたところで川上は鯉口を切りながら後ろに引き直り、抜刀。全くの無音だった。鞘離れの瞬間、体を開き大きな一閃が纏めて後ろの二人の首前半分を断ち切った。

「ゴヤ」

後ろの二人が膝が折れて崩れおち始めたところで、川上は剣を逆八艘に取り上げながら前に向き直り、言葉が続けていた仕込杖の男を背後から左袈裟に斬り上げた。刀は男の左肩口から胸郭までを斬りさげて深々と入った刀は胸に抜けていた。

後ろの二人が血しづきを上げながら地面に崩れ落ち終わったところで川上は男の背中に蹴込みを放つ。食い込んだ刀が抜けて男は地面に前のめりに叩き伏せられた。仕込杖が転がり、すぐ血溜まりを広げた。

三人を即死させて、川上は刀の血脂を死体の衣服になすりつけて拭うと刀を改めた。何時もと違い刀を二本差しにした腰から抜き放ったのはほぼ直刀の無銘だった。

「…見事」

川上はそう嘆息した。体幹を斬りさげたが強く粘る刃はいささかの瑕疵もない、しかし特筆すべきは刃味だろう。自重を持って自然な操刀で斬っただけだが、まるで裂けやすくなくなった古袈裟を裂くかの如く人体を断った。もとより刀工多々良小傘により斬れ味の工夫として打たれた刀だが習作などとは思えぬ斬れ味。

彼らの死因は川上が刀の試料を求めていた時に出会ってしまった、ただそれだけの不幸な巡り合わせである。

川上は刀を納めて、しゃがみ込み死体の懐を探り銭を抜いた。闖入者の声がかかったのはそんな時だった。

「おお！凄いい、今日は大収穫だ」

川上はとうに気配には気付いていたのだろう、声に構わずに二人、三人と銭を抜き立ち上がった。

そして川上が目を向けた先には一匹の妖怪が嬉しそうに佇んでいた。

赤髪を両サイドで三つ編みにして黒いリボンで括り、前髪は切り揃えている、髪の中から黒い猫耳がピンと立っていた。鮮やかな赤い虹彩の瞳はつり目だがきつきさは無く、全体的に幼い印象で可愛らしい顔付きに、人懐こそうな表情を浮かべている。

黒地に緑の細かい意匠の入った、ややゴシックロリータ調の上下に身を包み、あちこちに赤いリボンをあしらっている。小柄であり身長は140cm台だろう、腰から黒い二股のしっぽが伸びている。しかし顔付きや小柄な体格からは想像出来ないが、服の上からでも胸の大きさがわかり足腰も丸みを帯びている。

幼さを匂わせる少女のような体軀だが、体はまだ少女らしさを残しながらも乳房や足回りが女性に成熟している。ともすればアンバランスとなりかねないが、その二つを美しい域で絶妙に両立していた。

通称ネコとも呼ばれる一輪車を携えた赤と黒の色のメリハリが印象的な妖怪は火車と呼ばれる妖怪。火焰猫燐であった。本人が長い名を嫌う為通称はお燐と呼ばれる。彼女は幻想郷における地底のとある妖怪のペットであり灼熱地獄後にて管理の仕事もしている妖怪でもある。

「お兄さん、この死体貰っていいかい？」

高く活発そうな声色でお燐は川上に対して人懐こく聞いてきた。彼女の仕事は死

体集めであったが、それは仕事だけではなく多分に趣味も含んでいた。つまり彼女は死体愛好者である。

「好きに、いや」

川上はお燐に答えかけて、何かに気付いたように言葉を止めると横に目線を送った。

なんだろうと、視線を追いお燐もそちらを見た。しかし何も居らず別に何も変わった様子はない。

お燐が視線を正面に戻すとそこには先程までいた川上が消えていた。ほんの僅かに目を離れた隙に煙のように。

「はて？」

忍者か何かかなと首を傾げ。まあともかく死体は回収してよさそうだと考えた。今日はこんなに新鮮な死体が三つも手に入ったと嬉しくなる。

しかし、死体をネコ車に乗せようとした所。彼女の耳がピクリと動く、人の気配が近づいてくる。

果たして現れたのは四人組の刀や槍で武装した人間だった、仕込杖の男の指示で里に戻った男と共に来た増援であった。

男達は倒れ伏せた三人の死体と傍らにいる妖怪、お燐を見つけ顔色を失った。すぐ

に一人が気色ばみお燐に向けて怒鳴った。

「てめえ！やりやがったな！」

もともと妖怪を憎悪している連中である、すぐに皆鬼の形相になって武器を抜いた。

「え？あたいじゃないよ」

お燐はその様を見てもきよんとした様子を見せて事実を告げるだけだ。

「ふざけんじゃねえ！」

「乱暴だねえ、あたいはわざわざ殺したりしないよただ死体を貰おうと」

「待った！皆、清水が居ない」

お燐の言葉の途中で最初に清水を見つけ、皆を呼びに言った若い男が言った。

「三人とも清水と話し合うつもりだった」

状況を冷静に見る事が出来るのか若い男は言った、一人が半ば恫喝するようにお燐に聞いた。

「てめえがやったんじゃねえのか!？」

「違うよ」

一言で否定されて四人のうちの一人が慌てて近づき取りすがって仲間の死体を調べ

「刀疵だ、これは」

男は傷を見て言った。しかも皆一太刀でやられている。これはまるで……

男は顔を上げて何故か恍惚とした表情を浮かべているお燐に聞いた。

「お前！刀を持った若い男を見なかったか、黒い洋服だ」

「見たも何も」

お燐は何を言っているのかという表情で指を真つ直ぐ指す。男の後ろを。

男は立ち上がり後ろに向き直り、そこで昏い三白眼と眼が合った。

「へ？」

それが男の遺言となった。川上の無銘が一閃し、男の首が飛んだ。血飛沫をあげて胴体は崩れおち、首はクルクルと宙を舞い、落ちてきた所をお燐が両手でキャッチした。お燐は慈しむような表情で男の生首を掲げて見て、ゆっくりと生首の唇に口づけした。

川上もまた想像以上の試しを行えた、血脂に濡れてぬらりとした刀を掲げて満足げにそれを眺めていた。

四人は全滅していた。一人が仲間の死体を調べてる僅かな間に接近し、気付かれる前に三人とも切った。おそらく四人共に自分が死んだ事に気付かなかつただろう。

戦闘になる前に一方的に殺害を完了としてしまう。無音殺傷術サイレンキリング、川上が学んだ流派

の技術であり彼の得意手の一つだ。

「お兄さん、ありがとう！」

「ああ」

お燐は生首を恭しく猫車に納めながら川上に礼を言った。対する川上は刀を懐紙で丁寧に拭いながら、何故礼を言われてるのかわからなかったがとりあえず適当に応じた。

人間の死体が大好きな彼女からすれば死体を作ってくれる人は余りいない為貴重だ。彼女は妖怪に殺された人間は余り興味を抱けないのだ。しかし、川上が斬った死体は一太刀、無駄も無理もない刀疵による死体達にお燐は美学を感じた。

お燐は手を伸ばして死体に働きかける、すると死体達はマリオネットのような不自然な動きで皆立ち上がった。死体を猫車に乗せる為に死体自らに動いてもらう、お燐は死体などを操る事も出来る生来の死ネクロマンサー霊術師でもあった。

「待て」

「？」

不気味な動きで立ち上がる死体を見て待ったを掛けたのは川上だ、訝しんだお燐の前で川上は立ち上がったまま奇妙な体制で動かない死体各4体の懐から銭を抜いた。そして一体が帯びていた脇差も取った。

「いこぞ」

「はこよ」

お燐は金になぞ興味もないので黙って待っていたが、川上の声に死体を動かし始める、まさに文字通りゾンビの如く生気のない動きで——実際にはないのだが——皆猫車に自ら殺到したが。

「嬉しいんだけど全部載せきれないねえ」

系7体の死体を猫車に積めば山盛りもいいところである。お燐は嬉しい悲鳴をあげる。

「なら何回かに分ければいい」

「そうするしかないね」

何気ない川上の口出しにお燐は頷き。猫車に死体を載せて上手く安定するように作業を始めた。

川上は煙草に火をつけながら空腹を覚えて、戻る為に歩き始めた。

第108話

紅魔館の庭では大きな面積の花壇があり、色とりどりの晩夏の花が咲き誇っていた。

その花の咲き誇る中でカン！という小気味良い音が響く。

二人の人物が木剣で切り結ぶ音だった。

一人は上背のある黒髪にダーススーツの青年。

一人は短身にセミロングの黒髪。メイド服姿の女の子。

紅魔館の使用人である川上とアニスであった。

川上は全長三尺三寸、一般的なものより細身で反りもなく軽い赤檜の木剣。アニスが用いるのは同じ体配の木剣だが一尺七寸ほどの小太刀だ。

二人は稽古をしていたが、所謂一般的な型稽古ではなくむしろ立合いに近かった。アニスに自由に攻めさせて、川上はそれを捌く。アニスは容赦なく当てに行くが川上は寸止める。

危険である。受け切れなければ川上は大怪我を免れず川上が寸止めを失敗すればアニスが大怪我ないしは死ぬ。川上の技量ならどちらもありえないのだろうか、それにしてもまだ未熟なものにこのような型破りな稽古をさせるのは本来なら言語道断であ

ろう。

上背がある川上は突つ立つる姿勢で高いところから太刀を送る。アニスの課題は身長的にも得物からもリーチが違い過ぎる相手に対して入り身にて懐を盗む事だ。

低い相手には腰を落とすのが一つのセオリーだが川上はあえて腰を高くして分かりやすくしている。

下段で軽く角度をつけた川上の剣先をアニスは小太刀で払って入ろうとしたが、川上の剣先はビクともしなかった。逆にアニスの小太刀に川上の剣先がくつついてきて、アニスが小太刀を引いても離れなかった。なんとか小太刀を引こうとしていたらアニスはいつのまにか剣先で小手を押しえられた。

ヒュツ！と剣先が返り切り落としてきたのをアニスは咄嗟に一步下がって躲す。

「真つ直ぐ下がるな。押しさば回れ」

叱責しながら川上が送った低い袈裟斬りをアニスは打ち払いながら入り身して小太刀を流して鼠蹊部を切りつけてくる。川上は落とされた刀をすぐ戻して受けた。

「そつうだ」

いいつつ、距離をとろうと川上は下がるがアニスは突き放されんと小太刀で川上の刀を抑えながら回りこむように付いていく。

——引かば斜めに。

アニスに至近距離から膝で川上の脛を蹴ろうとするが川上は膝を上げてこれをカツトした。

しかし、川上の足を浮いた瞬間を意図してか、たまたまかわからぬが捉えて川上のさらに懐に入りつつアニスはフリーの左手で川上の木剣の握る右手。自身の細い指を滑り込ませ強く握らず緩んでいる川上の右側人差し指を握り。指を逆関節に極めながら背負い投げのように低く背中を密着させるように入り込むと、自身の左肩を出すようにしつつ体を落として指を折りつつ投げに入った。

小さい関節は鍛えようがなく、そういった所を狙えばアニスのような小さなものでも相手を制するのは可能だ。川上は指を掌握された時点で相手に逆らわず、アニスが体を落とす瞬間に自らアニスを飛び越えるように前返り受身をして指を壊されるのを防いだ。

受身のまま座構えになりアニスからみて背を向けている川上に、アニスはここを好機とみたのか踏み込んだ。

——だが

川上が後ろを向き直りもせずにノールックで放った左片手打ちの剣先がアニスの左脇腹で寸止められた。

右側で小太刀を握り、追撃に気を取られ体が開いたアニスに左から襲う刀は全く反

応出来なかった。

「今日は終わりにしよう」

そういつて川上は刀を納めるように左腰、左手に木剣を持ちかえ一礼。アニスも小太刀でそれに習った。

「ありがとーございしました」

キチンと礼法を守るアニスに川上は頷きタバコを取り出して火を付けた。

「安易に深追いはするものではない、死を招く」

そしてフィードバックとして、稽古の反省点を告げた。

「だが入り身してから指を狙い捕手に行つたのは見事だつた」

そしてもちろんよい所も告げる。アニスは爛々とした目で頷いていた。

そう見事、そういう他はない。短期間の指導にも関わらず最早初心者に出来る動きではないのだ。子供というのは骨を掴むのが上手いものだが、このアニス。天稟に加え、興味を持った事への熱意が凄い。川上が指導しなくても、自主的にやっている一人稽古の量は川上すら上回っているかも知れない。

「お疲れ様」

そんな二人に声をかける人物がいた。長身で綺麗な顔立ちに柔和そうな表情を浮かべる者は八雲藍である。

いつから見ていたのか、そもそも何故紅魔館にいるのか、と言った疑問は川上は突っ込まなかった。

もとより、また来る、フリーパスだのと言っていた相手である。別に居たとしてもおかしいことではない。特に悪意を持った相手でないと分かっていたのでいちいち川上は気にしない。

あるいは悪意がある相手でも彼は気にしないかも知れないが。

「疲れただろう」

そういつつ藍は竹水筒を差し出した。実際には川上は息一つ乱してなく疲れてはいない、稽古においても極力消耗を避ける癖を付けている。だが無言で水筒を受け取った。

特に喉も渴いていなかったが水筒から一口だけ口に含む。僅かな雑味もなく、仄かな緑の爽やかな香りの中に豊かな自然を感じさせる水を口の中で転がし、ゆっくりと飲みくんだした。

「見事な剣腕だな、外の世界にもまだ古い技術が残っているんだね」

渴きを覚えていた訳ではなかったが染みるな、と思っていた川上に藍が今の稽古に對してそう評してきた。好奇心旺盛なアニスは藍の背後に回って、彼女の非常に豊かで柔らかそうな尻尾を身体全体を使い弄っていた。

「現代では飛び道具が発達している。今では銃を使えば人差し指さえ動かせば子供でも格闘技の王者を殺せる」

クイ、と人差し指を曲げる仕草を見せて川上は言った。

「人殺しも合理的になったものだね」

藍は穏やかな微笑みを浮かべたまま皮肉そうに言った。言いつつ背後で藍は自慢の尻尾を操つてアニスの身体を巻いたり撫でたりしていた。

「にも関わらず、未だにプロの戦闘屋が武術を熱心に学ぶ」

「如何に道具が発達しようともそれを使うのは人間。身体の使い方がモノをいう、という訳か」

頷いて川上は藍に竹水筒を返した。藍は尻尾からアニスを解放して後ろに向き直りアニスにも水筒を渡した。

「君も上手いな、いい師を持ったね」

水筒からこくこく、と飲むアニスを撫でつつ藍は言った。アニスは大妖怪相手でも物怖じしない笑顔を向けて礼を言つて水筒を返すと元気に走つて館に戻つていった。

「アレはモノになりそうだね」

そう藍は所見を述べる。川上は口元に軽い笑みを浮かべただけでそれには答えずに、館の方へと歩き出した。

そこを何気なく歩みより藍は後ろから川上に抱きついて見せた。後ろから川上の肩越しに腕を回し密着する、そうしてみると長身の藍は川上に対して僅かに低い程度で身長差がほぼないのが分かる。

「ふむ、今日は君の匂いがわかるな」

息は乱さずとも少し汗ばんでいるのか、前回は感じられなかった川上の匂いを藍は楽しんだ。

「放してくれ」

川上は歩けなくなりそう訴える、後ろから包み込まれる感覚に藍の雌の匂いが混じる。しかも存外力強い。

「もう少し」

その返答を聞くやいなや川上は一瞬で体を落とすと同時に身体を開く。腰や背中であぶつかるように。背後から羽交締めにされたときの返し技。

「おっと」

しかし流石は大妖怪といったところか。藍は川上の浮沈の動きに反応し、自身も腰を落として技をすかした。

「こう見えても私も身体の使い方には多少の自身があるんだよ」

藍はそう囁いて川上の耳元にふっ、と息を吹きかけた。

無言で川上は重心をズラして背後の藍に体重を掛ける。藍は咄嗟に踏ん張る。

その瞬間川上は今度は体を前に掛けた。藍はおつ、と思つた瞬間に不味い事実になり付いた。

川上の肩越しに回した両腕。それが川上の胸の前で交差し、両手首を掌握されていた。両腕とも肘をすでに逆関節とも極められている。

藍は後ろからおぶさるように抱きついていたのだ、つまり。

次の瞬間川上は藍に低く腰をぶつけるかのように入つて体を落とす。腕関節を取つた逆背負い投げ。藍は咄嗟に地を蹴つた。

両腕とも極めて投げて関節を破壊しつつ受身不能で頭から落とすわかりやすい殺し技だが藍は自ら飛んで一回転してふわりと川上の前に両の足で着地した。

「確かに上手いな」

川上は感心してるのか、そうではないのかよくわからない口調で告げた。

「だろう？しかし、まさか投げにまで持つていかれると思わなかつたから少し驚いたよ」

藍も穏やかな口調でやはり本当に驚いてるのかわからないが、実際に彼女は感心していた。

そうして再び歩き出した川上に今度は藍は並んで歩いた。川上の右手側、腕を伸ば

して届かない程度の彼の制空権に身を置いて。

「この後お茶でもどうだい」

「珈琲なら」

「なら私が淹れよう」

そう何気ない会話をしつつ川上は煙草を啜えた。

第109話

紅魔館の一室。

ここは誰の部屋でもなく、またどう使ってもいい数多の空部屋の一つ。

フランドールはソファアの上で、紅魔館門番の紅美鈴の膝枕で横になり、ぼんやりとした眼をしていた。

紅美鈴は少し困ったような表情で、しかし慈しむように膝の上のフランドールの髪を梳いていた。

何故ここにフランドールと美鈴がいるのか。美鈴は単に今日は暇いとまが出されている。ちなみに今門番をやっているのは下っ端使用人川上である。たまの休み、どうしようかと思っていたところ、フランドールに捕まり引つ張られてきたのだ。

フランドールは何故ここにいるか。そういう気分だったのだ。今日はあまり人に会いたく無い、一人になりたい。しかし同時に矛盾するように、一人にもなりたくなかった。だから美鈴を捕まえ誰もこない部屋にいた。

横になってしかし眠らずに倦んだような眼で表情を動かさないフランドールは名前の通り何処か人形めいていた。

「どうしたんですか、妹様」

いつもとは違う何処か危うげな儂さを感じさせるフランドールに美鈴は氣遣わしげに尋ねる。

「別にどうもしないけど」

高く、しかし感情を感じさせない声はりん、と鳴る風鈴のようだった。ガラスのように透き通つて、あまりに冷たかった。

そう別にどうした、という訳ではない。ふとした時に襲われる感覚だ、自分は何をすべきなのか。一体何をしているのか。何をしようが意味はないのではないか。

そんな事がぐるぐると頭の中を回り、やがて考えるのにも疲れてしまう。虚無感とでもいべきものにのしかかられ疲れる。

「She went and hangged herself and then there were none. (一人が首を吊つて、そして誰もいなくなった)」
流れるように口にしたフランドールの言葉に美鈴はどきりとした。たまにフランドールが口にする有名な一節。単なるお気に入り、であるのか。

「誰も」

美鈴は優しい、しかし僅かな苦味の混じった笑みを浮かべて言った。

「誰も、妹様を一人になんてしませんよ」

「嘘」

フランドールはそれを無邪気に信じられなかった。実に495年間、495年間だ。彼女が暗い地下の底で一人ぼっちだった期間。

フランドールは人形には成り切れなかった。ただ美鈴の言葉に縋る事が出来ないのだ。

ふと思ひ出す。かつて何も考えずにすんでいた頃。初めて人間と、思い切り遊んだ時のこと。白黒の魔法使い、自身を前に引くことなど知らぬと不敵に笑った彼女。眩しかった。あれから色々余計な事を考えるようになった。

——あの魔法使いは何と言っていたか、あの一節はフランドールの知らないものだった。

「She got married and then there were none…」

「?それは」

また流れるように呟いた硬く澄んだフランドールの言葉に美鈴は問い返す。

「魔理沙が、いつていたの。なんでかな?結婚なんて出来る訳もないし、してもしようがないのに」

「どういう意味だったんだろう?」

ねえ、魔理沙。

あなたはわたしとちがつて光つてて綺麗だね。

「そんなの簡単ですよ」

美鈴は自身の膝の上で独白するフランドールを撫でながら優しく笑った。あの泥棒も洒落た事を言うものだと思いつつながら。

「She got married and then there were none」

「幸せになれよ。です」

美鈴の優しく、しかし強い断言に、ガラス玉のようなフランドールの紅い瞳が光を帯びた。やがて瞳は濡れていき瞳から雫が止めどなく溢れだした。

透明な涙が美鈴の膝を濡らす。美鈴はただそんなフランドールの頬を撫でていた。

大丈夫、私が生きてる限りは一緒にいます。

そういつか、何処かで誰かが口にした誓いに良く似た事を美鈴は思う。口にはしなかった、口だけではなんとでも言える。嘘にしない為の方法は美鈴は一つしか知らない。

実行し続けるだけである。

博麗の巫女は妖怪退治の専門家である。妖怪に怯える人里の人間にも、危険な妖怪という脅威に対する切り札という認識だ。

しかし、人里にも退魔を生業とする存在がいけないわけではない。とりわけ人里で名門とされ代々続く陰陽道の家系が一つ。陰ながら人々に頼りにされている存在だ。

特に当代の当主は陰陽術師として凄腕である。既に齢は七十を過ぎ御隠居の身であるが、博麗とも技術交流があつた。

「これだ、確認しな」

人里でも目立たない小屋の中でその安っぽい和風に身を包んだ白髪の術師が、紙片を差し出し言った。

博麗霊夢はその無地の紙片の束をパラパラと確認した。懐から金を出して術師に渡して告げた。

「問題ありません。これで」

術師は渡された金額を確認もせずにごんざいに傍らの袋に入れた。そして年季が入り味わいのある風体の煙管を取り出し、箱からひとつまみの刻み煙草を取って丸めて煙管に詰めた。

「嬢ちゃんもでっかくなつたなあ」

術師はふつと笑ってそういった。泣く子も黙る博麗の巫女相手に嬢ちゃん扱いである。皺が深く頑固そうな顔つきだが笑みを浮かべると案外に愛嬌がある。しかし眼が並々ならぬ鋭さを備えていた。

「それでしようか」

霊夢の答えは素つ気なく、あまり表情も変わらなかつた。術師はマッチで火を付け煙管を一服し濃い紫煙を吐いた。

「ああ、先代は真面目だったが嬢ちゃんと同じやあな。先代には悪いが比べるのが馬鹿らしくなつちまう」

でっかくなつた、というのは技量としての意味もあつたのかそう術師は言つた。また煙管から一服。

「ありがとうございます」

霊夢は先代の技量など知らない。自身の技量にもあまり思う所がないのか、返礼は言っているだけという感じが強い。

ふつと笑って術師は煙管から左手の平にまだ火種の残る灰を落とした。煙管を啜え右手でまた刻み煙草を丸めて詰めると左手の火種を継いだ。

「今日は失礼します」

そう言つて霊夢はもう用はないと言うように踵を返した。彼女は仕事に使う札の

素体を買って求めに来たのだ。私はまず紙を用いて色々仕込みそれを素体とするのだがこれが面倒な作業なのだ。無論霊夢も出来るが腕の確かさから、霊夢はこの術師に委託していた。

「そうだ、少し気になったんだがな」

「はー」

退出しかけた霊夢に何気ない口調で術師は問いかけた。霊夢は背を向いたまま首だけで振り向き応じる。術師は深く一服してから言った。

「作らせたネタなんだかよ、それ普段使う奴を作るんじやあねえよな」

術師は紫煙を吐いて言った、飄々とした軽い口調ながらに何処か鋭さがある。

「ごっこ遊びには過ぎる。退魔札、だけじゃない。そこまで手の込んだネタを元にすりゃ霊力、いや神力にすらやり様によつては干渉するモノも出来るぜ。妖怪だけじゃなく人間やら神さん相手とでもやらかすのか」

まあ、俺のネタがいいからだからだがな。と冗談交じりに術師は継ぎ足した。霊夢は初めて小さく笑みを見せた。

「二応もしもの事も考えるのも博麗私の仕事なので」

「そうか、ごっこ遊びのルールが出来ても、まあそこらへんは変わらねえか」

術師も本当は全て承知なのだろう。そう言つて最後の一服を吸った。霊夢も一言

残して今度こそ小屋を出た。

術師はトンと叩き煙管の灰を落とした。

第110話

料理は出来る？という問いに対しての答えは、できなくもないという答えだった。

川上という男にしてははつきりしない言葉だったが、それも本人がただ落とした鳥や殺した獣を解体して塩焼きにしただけ、といった行為も料理と言えるのかという疑問故だった。

それを聞いた咲夜はまあ、料理と言えなくもないけどワイルドに過ぎるなど思った。しかし想像通りである、放っておくとかなりぞんざいな食事をしているこの男が解体した肉で手の込んだ料理を作るはずもなかった。

厨房係のメイドの手が足りなかったので、とりあえず簡単な手伝いくらい出来るだろうと咲夜は川上を厨房に入れた。

さてメインはどうするかと考える、まだメニューは決めてなかった。咲夜は意外と行き当たりばつたりに決める所があった。

「好きな料理は？」

ヒントになるかと思ひ、食材を確認しつつ咲夜は何気なく川上に尋ねる。

「ブラウンシチュー」

すぐ帰ってきた返答に少し意外な思いをする。美味しい物自体は好きみたいだが、もともと食事自体にこだわりは無さそうだからもう少し迷う素振りを見せるかと咲夜は思っていた。

あるいは思いつきをパツと返したただけかも知れない。咲夜は考えを切り替える。ブラウンソースを作つてシチューでいいかと即断した。すぐに頭の中でサイドメニューの組み合わせと調理工程を組み立てると、作業を始めた。

咲夜は玉ねぎを数個川上に渡し指示した。

「みじん切りにして」

川上は流石に玉ねぎの皮を剥くだのの常識くらいは知っていた。実は咲夜は頼んでおいて何だがいきなり切り始めたりしないかと少し思っていたがちゃんと剥き始めたので杞憂だったかと思ひ自分の作業を進める。

玉ねぎを洗うと川上はペティナイフを取り、玉ねぎを半分に寸断した。カミソリのように研ぎ上げられた刃はバターを溶かすように玉ねぎを切る心地よい切れ味だ。

そのまま半分にカットした玉ねぎをトントンとスライスし始めて、数回で川上は違和感を覚える。始めて使うペティナイフが手に馴染まない。

川上は懐の内ポケットに仕込んだシースから刃長16センチ程度のシースナイフを抜くとブレードを水で流しそれでスライスを始めた。手にかかる重みが心地よく、使

い慣れたハンドルはこちらの方が扱い易かった。

しかしいかにも使い込んでそうな長さと同厚そうな艶消しを施されたブレードを横目で見て咲夜は川上の手を止めた。

「人を殺した刃物で料理しちゃ駄目よ」

その言葉を受けて川上は手元のナイフに目を落とす。どうやら咲夜の睨んだ通り人をかけた刃らしい。しかし川上は問うた。

「何故だ？」

「食べる人も気持ちのいいものじゃないでしょう」

全くわからないという風に疑問を呈する川上に、咲夜は答える。しかし川上の疑問はむしろ深まった。

咲夜は一瞬詰まる、まるでフランドールの無邪気な疑問にぶつけられた時と近い感覚を覚えた、この男は本当にわからないのだ。言葉を選び説明する。

「人を殺したもので調理した料理には、不快感を覚える人が多いの」

その言葉に川上は考えるように目線が中空を泳ぎ、すぐに咲夜の方へと戻ってきた。

「そもそもこの館ではその殺した人が料理として出ているが」

声色は変わらないが、全くわからないという様子は咲夜に伝わった。確かにそれを

言われると咲夜自身自分がチグハグは事を言っているような気にもなる。

「確かにお嬢様達は気にしないからいいわ。でも料理は私達と同じ人も食べる事があ
るから、それを考慮して」

それを聞いても川上の表情は変わらない。今一つピンと来ていないのか、咲夜は続
けた。

「料理は気遣いなの、人への気遣いを忘れちゃ駄目」

「わかった」

そこまで言われて川上は頷いた。納得するとまではいかないまでも一理あると考
えたのかも知れない。彼は懐にナイフを納めると、ズボンのポケットから別のユーテ
ィナイフを抜いた。

「こつちは人を切っていない」

そのエッジは健在ながらブレードが傷だらけのナイフを見て思わず咲夜の顔に微
妙な苦笑いが浮かんだ。いつだったか咲夜が川上に突つかかった時に彼が用いていた
ナイフだった。川上においては別にこれを抜いたのに皮肉だの意図はないだろう。

「そう、偉いわね」

そう言いながら咲夜は自身より高い位置にある川上の頭へと手を伸ばしかけ――
ギリギリで軌道修正して彼の肩のホコリを叩いて誤魔化した。

危なかつた、何をやっているの。と咲夜は思った。いう事を聞いた川上を自然と子供扱いして撫でようとしてしまった。自分より大きい男相手に本当に何をやっているのか。

若干不自然な咲夜の動作だったが特に思うところは無いのは川上は玉ねぎのスライスを再開した。

相手は理解はしないまでもそういうのもだとわかつてくれたのだからと咲夜も自分の作業に戻る、その時ふと閃くように気づいた。ハッと川上を見る、彼は特に表情もなくリズムよくスライスを続けていた。

彼の形だけなぞったような張りぼてじみた挙動が多いのはこういう事の繰り返し結果だったのかも知れない。

博麗神社——

博麗霊夢は神社の裏手に広がる森を歩いていた。

最近では三妖精などが住み着いている森だが、そこより深い位置に当たるこのあたりは妖精も妖怪も人間も入る事はない。

この周囲は人払いの結界を張ってあった。この結界を張ったこの場所は人間、妖

怪、動物など全ての者が無意識化の中に避けるようになる。もっとも始めから意識的にかつ明確この場所を目指している場合は無力であるが。また結界自体の存在も気取られぬように結界に隠匿の術を重ね掛けしていた。

目的の場所にたどり着き霊夢は印を組んで何かしら口の中で唱えた。すると何もなかったように見えた木々の中に小さな蔵が表れた。

先程の人払に重ね掛けした隠匿の術よりも遥かに高度な隠匿結界だった。五感、意識的、無意識的、探知サーチの類の術や能力、全てからこの蔵を隠す強力な結界だ。犬走棍の千里眼やアリス・マーガトロイドの幻視であつても見破るのは不可能。

そして最後は蔵そのものに掛けられた結界である。物理的、靈的、術的、なんらかの異能力、あらゆる干渉を通さない超強力な防護結界。この結界故人たりともこの蔵に立ち入る事は出来ない。

そう、この蔵は人払、隠匿、防護、三重の結界に守られていたのだ。全て博麗にのみ伝わる秘術中の秘術を用いており、博麗の者しか開くのは不可能。

霊夢は左手で指剣を作り何かしらの字を中空に切ると、呪を唱え防護結界を一時開いた。

霊夢は古びた鍵を取り出した、蔵の入り口は重厚で古びた南京錠が掛けられていた。これほど幾重にも強力に守られた蔵の最後の守りがただの錠というのもおかしい。

話だ。

霊夢は鍵を開けて誇りっぽい蔵に立ち入った。中は何かしら巫術的な作業を行うらしい道具とスペース。それに棚がありそこには多量の桐箱が納められていた。

霊夢は小脇に抱えていた札に使う素体の紙束をバサリと補充した。そして机の上にある最近与えられた資料に目を通す。

棚に納められた桐箱には一つ一つに名前が振られていた。風見幽香、フランドール・スカーレット、霊鳥路空、といった妖怪から。守矢諏訪子と言った神。十六夜咲夜などの人間の名もあった。

全て幻想郷において、本人の能力や環境、思想などを加味して本人が好む好まざるに関わらず現状の和を崩すリスクがある者達だった。

桐箱の中には名前の相手を斃す、あるいは封印する必勝の一手が納められている。それらは八雲紫がリストアップし、あらゆる手段で調べた対象の弱点を始めたデータ資料として渡したものを元に霊夢が作ったものだ。

幻想郷を大きく乱すリスクに対する管理体制。万が一の備えだが、他の者には知られていない博麗霊夢の陰の役割である。霊夢はあくまで無表情で資料に目を通していった。その記述から必勝の手段を組み立てながら。

棚は人間、妖怪、神、霊などカテゴリーに分けられてある程度整理されていた。ま

たリスクの高い者ほど柵の下に納められている。

人間の柵の中、一番下に納められていた桐箱に記された名は霧雨魔理沙だった。

第111話

かつん、かつん、と音が響く。

まだ、目新しい鉄骨の階段を一人の男が降りていた。

黒い礼服に身を包つみ、適当に切られた黒髪。顔立ちは比較的整ってはいるが、三白眼になりがちな坐つた眼に陰性の雰囲気を発散して何処か近寄りが見たい空気を纏つた二十代前半と思わしき青年。

紅魔館使用人の川上である。彼は腰のベルトに一振りの刀——大和守安定をたばさみ、無銘の野太刀は長寸ゆえ腰には差さず背負っていた。

コツリ、と足元のローファーが音を立てて川上は地の底に降り立った。

彼は今しがた自身が降りてきた鉄骨の組まれた大きな縦穴を見上げる。随分深くまで降りたらしい。何気なく散策して見て見つけた大穴。降りられるようなので何気なく降りてみた。

幻想郷の地下に広がる地底。そんな話を誰かに聞いたような気がした、おそらくここが入り口ではないかと川上は考えた。

視線を上から戻す。洞窟になつていているようだ。しかしここですら既に薄暗く洞窟

の先は光源もなさそうだ、足場もおぼつかない中で暗闇の洞窟を行くなど準備がなければ論外だろう。

川上の鋭敏な皮膚感覚と眼ならその限りではないがしかし彼でも光源があるに越した事はない。川上は懐中から小型のマグライトを取り出した、普段は外している電池を入れる。

彼はライトを点けてしかし、体の前で構えずに体の軸から外した所でライトを構えて歩きだした。

しばし歩く、非常に広いが中々に足場が悪い。川上は洞窟の天井にマグライトを向けた、所謂鍾乳洞という奴なのか氷柱状の鐘乳石が見受けられる。中々見事なものだ。

「嬉しいな」

ふと、その時声が聞こえた。高く澄んだ、幼い女の子の声。

「どうしてこんな所を一人で歩いてるの」

声は洞窟の中を反響するように聞こえた。まるで全ての方向から音がやってくるようで、何処から声が発せられてるのか全くわからない。川上のライトの光の範囲外は真つ暗で何も視認する事は出来なかつた。

しかし、川上は返答も、声の主を探す事もしなければ足も止めずに歩いていた。

「貴方の首、私に頂戴」

その発言と共に濃密な殺気が川上に向けて殺到した。その途端マグライトが川上の手を離れたのか自由落下し、カツンと音を立てて地面に落ちて転がって止まった。

洞窟内で見えるのは地面に落ちたマグライトが照らす僅かな範囲のみで、それ意外の空間は黒で塗り潰したような闇だ。辺りにはどろりとした殺気が漂うのみで音もせず、姿も見えずに川上もその対敵も伺いしれない。

数秒の静寂の後にガツと硬い音と高い少女の鋭い悲鳴が上がった。ガンツと音かして丁度マグライトの光の範囲に悲鳴の主が倒れ込み、その姿が見えた。

地面に倒れ込み右の腋より下、肋骨側面を押さえているのは、まだ7歳以上ではないだろうというような幼い体躯とまだ綺麗というより可愛らしい印象の強い顔立ちの女の子だった。白い襦袢に身を包み、緑の髪をツインテールにしている。

傍らには桶が転がっていた、それごと貫かれたのだらう桶には細い穴が空いており、傷は深く急所をやられたのか押さえた手の下から血が壊れた蛇口のように溢れていた。

洞窟や井戸を縄張りとする釣瓶落としのキスメであった。彼女は人を見ればとていえず殺すという可愛い顔をして割と残忍な性格の妖怪らしい妖怪だ。

キスメは咄嗟に転がる桶を右手で掴み投げると、すぐさま地を蹴って飛んだ。ほぼ同時にガンと桶が硬い何かにつかつた音がして同じくライトの範囲に入った黒衣の

川上が剣を振るう、キスメの右腕が上腕の半ばで落ちたが僅かに離脱のほうが速かった。

トツと音を立てて川上も飛び技でまたライトの範囲外へと消えた。二、三軽い地面を踏む音と共に。パシンという小気味よい音が聞こえたがもう悲鳴は聞こえてこない。

軽い足音を立てて光の中に戻ってきたのは血刀を引つぎげた川上だった。襟口にポツポツと返り血が付いていた。川上は地面に転がる小さなキスメの腕を剣で刺して、重くなった剣先を持ち上げ串刺しになった腕を観察した。

仕損じたか、とぼんやりと川上は思う。三太刀目は首筋に打ち込んだがそれでも仕留めきれず逃してしまった。

まだまだ未熟だなと川上は痛感した。しかし客観的に見て幻想郷に来てからの彼の剣の冴えは明らかに凄味を増してきている。三太刀共に致命傷を与えており恐るべきは妖怪の生命力か。

川上は自嘲気味に小さく笑みを浮かべて剣を血振りして刺さった腕を飛ばすと、懐から取り出した紙で丁寧に拭き納めた。頬に付いた血を手の甲でぐしりと拭う、猫が顔を洗うかのような仕草だった。

そして、落としたマグライトを拾い上げると、コツリコツリとゆつくりと再び歩き出した。

暫し歩くと洞窟を抜け、途端に視界と空間が広がった。明るい、とまでは行かず少々薄暗いが充分な光量がある。驚くべきは空間の広さか、地下にこんな世界があると
はと川上は少々感心した。

川上はマグライトから電池を抜き取り懐に納めた。技術力に極端な歪みがあるらしい幻想郷においては電池一つも入手するのは難しいだろう、温存するに越したことは無い。

改めて目の前の光景に身を向ける、取り敢えず眼前にあるのは河だった、地下にこれ程のと思える程度に川幅がある。しかし檜造りの古い和的な味わいのある橋が架かっている、であれば特に問題ないだろう橋を渡れば先に進める。わざわざ何がいるか深さもわからぬ川を横断する選択をするのはまずいなだろう。

少々気になる点を述べれば橋の上、欄干に寄りかかって佇んでいる女性が川上の方を見ていくくらいか。

川上はその人物に眼を合わせて眼を細めた、2秒程の観察で興味を失ったように視線を切った。彼は躊躇なく橋を渡る。

が、しかしというかやはりというかその女は身を起こすと川上の進行方向に立ち塞がった。

第112話

十六夜咲夜は最後まで人間である。

咲夜は主のレミリア・スカーレットに紅茶を淹れていた。いつもの、かつては焦がれても得難かった日常。

彼女の淹れた紅茶を一口飲み微笑む主、レミリアは愛らしく幼い少女の姿をした吸血鬼。十六夜咲夜にとって愛しい愛しい化物だ。あるじ

かつて、まだ十六夜咲夜ではなかった一人の幼い化物がいた。

幼きころから当たり前のように使えた時を操る奇術。生まれ持つてその少女には当たり前前だった力。それが一般の大衆にとっての異常であると幼き少女には分別がつかなかったのは無理からぬ事だろう。

少女が鬼子として扱われるのは必然だった。ありえない異能力を持つ化物、親にも捨てられ誰からも迫害される事となる。

麗しい銀髪に整った顔立ち。しかしそれも見方によれば魔性と恐れられた。

この世には事実として存在するのだ。常人の常識を全て覆す能力を持った人間が生まれ続けてしまうという事は。

もつともそのような異端の子供は生まれてきても大抵は生きる事が出来ずに、10人中9人は死ぬ。

何故か？ 考えるまでもないだろう。周囲の人間がそんな異端者を見逃すわけではない。迫害により殺されるか、生きられずに死ぬか、自ら命を断つか。

だが銀髪の少女はしぶとかった。迫害の中、世界から弾かれるような感覚の孤独の中で這い蹲り泥水を啜つても必死に生き延びたのだ。

時を止める能力。この異能力さえなければ彼女は普通の人間として生きられたはずだ。こんなものがなければと思った。だがまともには生きられない少女が今日まで生きのびれたのも能力のおかげであった。二律背反。

皆が自分を化物だと言う、ならば化物になってやろうじゃないか。

少女の能力は殺人には非常に便利であった。彼女は当時正しく化物であったのだ。だが。

十六夜咲夜は今でもはつきりとあの時の事を覚えている。

大きな月を背にした紅い悪魔。本物の怪物を眼にした圧倒的な恐怖、同時に美しいと感じた少しの感動。衝撃だった。

おそらく十六夜咲夜の身が朽ち果てるその時まであの時の光景が色合わせる事はないだろう。

紅い悪魔は嗤つて少女を有象無象の人間に過ぎぬと断じた。

そして少女自身も本物を前にして一目で理解した。自分は化物なのだなどと悲劇のヒロインぶっていた、その驕り高ぶった鼻っ面を完膚なきまでにへし折られた。

こうして少女は人間になれたのだ。

十六夜咲夜は最後まで人間である。

人間である事に拘り続けるのはかつて自身を人間扱いしなかつた周囲に対する意趣返し、単なる意地でもある。人間である事は彼女の意地だ。

そして何よりレミリア・スカーレットにより人として生きる事の許された十六夜咲夜の、レミリアと共に寄り添う決意だった。

幻想郷、地底。

川に架かる橋の上で黒い礼服装で刀を帯びて野太刀を背負つた男は川上である。

立ち止まつた川上の前には女性が一人。

平均よりやや小柄な女性はあまり明るくはない金髪の少し癖のあるショートボブ。やや釣り目がちな緑眼は負の感情に囚われてるように暗い印象を与えるが不思議と澄んだ眼にも見える、少し幼さを残した綺麗な顔立ちだった。服装はペルシアンドレスにも似た特徴的なもので、服の縁には橋を模した意匠が凝らしてあった。

橋姫であり、地底と地上を繋ぐ橋の番人の様な存在でもある水橋パルスィである。

「こんにちは」

進行上に立ち塞がった相手を無視して横を通り過ぎる。とはせずにとりあえず川上は当たり障りない挨拶をした。

「人間がわざわざこのようなところに何の用？引き返して光差す地上に戻った方がいいわ……と言いたいところだけど」

パルスィはただの人間である川上に親切にも忠告を与えた、と見せかけてスツ、と川上の昏く沈んだ眼を見て続けた。

「貴方は私達寄り、ね。光の下を歩くのではなく、光の差さない地の底を這い蹲るのがお似合いの文字通りの日陰者」

川上は何も言わずに懐からゴールデンバットのパックを取り出し、一本啜えてマツチで着火した。

「誰からも認められる事が無かった、そういう眼をしているわ」

川上は旨そうに紫煙を吐いた。地底は湿度が高いのか煙草がいい具合に甘くなった。

「そして、貴方自身誰も認めない。それでいいと、どうでもいいという眼」

パルスィは川上を睨めつけながら苛ついたようにギリつと爪を噛んだ。

「妬ましい……どうしてそんな割り切った眼が出来るの、まるであの巫女のように」

「それで、何がしたい？」

川上は随分と一方的に捲したてるなど思いながら一服した、結局相手が何を求めているのか分からず言った。

「別に何もしたくないわ」

それだけ言つて、パルスイは道を開けてまた欄干に寄りかかった。川上は啞え煙草で歩き始める。

「貴方、名前は」

「川上」

横から掛かった問いに川上は歩みを止めず、向き直りもせず一言で返した。

「忘れるまでは覚えておくわ」

パルスイの答えには応じずに川上はさっさと橋を渡り先へと進んだ。

再び短い洞窟を通り、抜けた川上は周囲を仰ぎ感嘆した。

地底、巨大都市の旧都。

その名の通りまるで古の都を思わせる古い町並みだ。人里も古めかしかったがここはそれ以上。タイムスリップでもしたかのようだ。

薄暗い地下の古い都。非常に味わいがあった。しかし驚くべきは広さであろう、上を仰いだ程度ではこの都の端は何処だか検討がつかない。地下都市だから所謂ジオフロ

ントと言うべきか。

川上は好奇心を刺激されたのか珍しく眼が光った。そして散策を始める。

暫し歩くと繁華街のような場所に出た。地下世界とは言えかなり賑わっており活気がある。住人は大半はやはり妖怪のようだ、姿は人とは変わらないものから亜人じみたもの、完全に人型から外れた奇妙な存在まで出揃っている。

人里は主に人間で賑わっていたが、ここはその逆か。

ふと川上は立ち止まる、紅魔館を出てからだいぶ経つ、空腹を感じた。帰るにしても労力と時間が必要だ。

川上は歩きながら眼を走らせる。一軒の食事処を見つけた、今は食事時としては中途半端な時間な為に客の入りは疎らなようだ。

腹ごなしをする事を決めて川上は暖簾をくぐった。

第113話

幻想郷、地底。

旧都にて川上は店に入り、席に着くとたぬきうどんを注文した。品が出てくるまで川上はポケットから胡桃を二個出して手の内で転がしながら暫し待つ。

客は川上の他にはカウンターに2名しか居なかった。

暫し待つと厳つい顔付きのやや無愛想な店主がたぬきうどんを出した。川上は手を合わせるとカウンターに置いてある調味料から七味を取り多めに振りかけて食べ始めた。

暫し麵を啜っていた川上だがそんな彼の後ろに立った人影があった。

「ようにいちゃん」

随分馴れ馴れしい態度でその人物は声を掛けてきた。川上は箸を止め首だけで向き直る。立っていたのは人型ではあったものの灰色の肌の異様な巨漢で一目で人間では無いと知れた。

「何だ」

「見ない顔だな、上の人間だな？」

「そうだが」

川上は答えてうどんを一口啜る。

「飯時に悪いんだがよ、ちよつとそこまで付き合ってくれねえか」

口調こそ軽いが巨漢の言葉には剣？な敵意が感じられた。

「要件は？」

「死んで貰う。死体は表通りで晒してやるよ」

極めて端的な死刑宣告だった。しかしこの巨漢の口ぶりはキスマメなどのように妖怪として当たり前に人を襲う、という行動原理とはまた違うような憎悪を感じられる。

川上はその宣告を聞いてうどんを箸で掬いながら言った。

「食べ終わるまで待て」

その瞬間大きな破壊音が上がり川上の真横のカウンターが大破していた。巨漢が拳を振り下ろしたらしい。

「店の中で困りますよ」

カウンターの内側で黙々と仕事をしていた店主は店の一部を破壊され面倒くさそうに注意した。

しかし、巨漢はそんな店主の言葉は耳に届いて居ないらしい。川上の一言で切れたのか怒りの表情と同時に破顔したかのような凄まじい形相になっていた。川上はうどん

を啜る手を止めなかった。

「ここらまで俺を舐めた糞野郎はあんたが初めてだ」

「殺したいと思うのなら御託を並べずさっさと殺せばいいのでは？」

巨漢の回りくどさに疑問を抱いたのか、川上はうどんを呑み下すとそう男に言った。あくまで川上に取っては問いかけたのだが、もはや誰が聞いても挑発にしか聞こえなかったらう。

さらに巨漢の形相が歪んだ。いよいよ理性を吹っ切るほど切れたらしい、人体を容易く肉塊にする拳を振り上げた。

川上はそのタイミングで啜っていたうどんを後ろに放り投げた。そのどんぶりが巨漢の顔にぶち当たった、熱い麺と汁が眼を襲い顔を焼き巨漢は怯む。

一秒も時間が稼げれば充分過ぎた。川上は向き直りながらお互いの詰まった距離から右の逆手抜刀を真下から一閃。巨漢の正中線を切り抜き刃は顎に当たって止まった。

刀を戻して左手を添えながら頭上で刀を返しつつ右を順に持ち替えて左から右へと水平に一閃。狭い店内で見事な刀捌きだった。

首が落ちて、崩れ落ちかけた胴体に川上は蹴込みを放った。巨体が入り口の引戸をぶち破り表へと叩きつけられる、店のすぐ外から啞然とした複数の声が聞こえた。

店内にいた二名の客の中、一人はまだ食べかけの定食を残して席を立ち退店したが、

もう一人は我関せずとばかりに川上の方を一切見ずに酒を呑んでいた。ある程度のゴタゴタは旧都では珍しくはないのだろうか。

「お客さん。店中で困りますよ」

店主はどんぶりを拭いながら疲れたような声で先程とほぼ同じ注意を發した。

「すまない。それとうどんのお代わりを頼む、出来れば小盛りで」

川上は席に着いて、刀を拭いながら謝罪と追加注文をした。店主は疲れた溜息を吐いた。

川上が食事を終えて破れた入り口から暖簾を潜り店を出るとある程度の人々——大半は人ではなさそうだが——が遠巻きに巨漢の死体を見ていた。現れた刀を携え、黒服に血糊を付けた川上に周囲の人々がどよめく。

川上は構わずに歩み出そうとしたが、待ち構えていたように三人の妖怪が川上の前に立ち塞がった。

「ただで済む、とは思っちゃいないよな？」

川上は溜息を吐いた。絡まれたので切り払ったら、また絡まれる、今度は三人。悪循環だ。

「こちらとしては本意ではなかった。金なら多少持ち合わせがある、謝罪と金でここは

納めてもらえないだろうか」

キリがないと思つたのか珍しく川上は和解を持ちかける。彼にしてはかなりの譲歩といえるのだが、逆に三人組の怒気が高まる。逆効果だったようだ。

「金なんざ貴様が死んだ後で勝手に抜かせてもらう。まず首を寄越せ」

川上は今し方出てきた店を伺う。そこに首なら一つ転がつてるが、相手の求める首はそれではない事くらいは理解していた。

「分かつた、ただ人氣の無いところに場所を移して貰いたい」

「ああ？時間稼いで逃げる気か？」

川上が交渉に入った時、何気ない足取りで近づく少女がいた。

火焰猫燐であった。通りすがりに巨漢の死体を見て一応回収しておくかと思ひ空気も読まずに四人、いや死体へと近づいた。本人自身は妖怪の死体には正直興味はなかつたが。

「寄るんじゃねえ！」

三人組の一人がお燐を見て鋭く静止した。彼はお燐の事を知っているようだった。

「郷太の事を持つてはいかせないぞ、薄汚い屍肉喰いの猫が」

郷太とは死んだ巨漢の名か。恫喝されてもお燐は涼しげに笑みさえ浮かべて反論した。

「いや、あたかも正直興味ないんだけどね。燃料程度にはなるかなって。ほら友達も役にたったほうが嬉しいでしょ？死ねばみんな同じなんだしさ」

その言い草に男は明らかに切れた。

「ふざけんじゃねえぞ！あの忌々しい三つ目の飼い猫風情が！」

その言葉が発せられた瞬間、辺りの空気が一変した。

「今、さとり様の事を言ったのかい」

三人組が思わず顔色を失い後ずさった。野次馬すら表情を凍らせている。自身が手酷く侮辱されても顔色一つ変えなかったお憐が自身の主を侮辱された瞬間豹変した。

彼女の顔にそれまでの人懐っこそうな笑みとは違い、口の端を吊り上げる壮絶な笑みを浮かべていた。辺りの空気がどろりとするような凄まじい殺気を全身から放つ。

形勢が三人組をお憐が威圧する形になった時、川上はこれ幸いとばかりに気配を消して歩きだした、その時。

「——待ちな」

声がかかった。

特別大声ではなかったが、ここにいる皆の耳に良く通った。そして問答無用で動きを静止させられるような強い声。川上も自然と足を止めた、いや止まったのか。

野次馬達が自然と道を開けた。そこをかつ、かつ、と足元の下駄の音を立てて歩いて

くる一人の人物。

川上はそちらを見てすう、と眼を細めた。

その人物は女性だが身長は高めで八雲藍と同じく170センチを超えるくらいか、高い下駄の為殊更身長が高く感じられる。明るい金髪を背中まで伸ばし、頭には赤い角が一本生えている。

両手首に手枷に鎖を垂らし、足にも枷が嵌められている。鎖は繋がってはおらず拘束されている訳ではない。もつとも仮に鎖が繋がれていてもこの人物には拘束足り得なかつただろう。

右手に朱塗の大きな杯を携え、怜悧で綺麗な顔立ちに獰猛な笑みを浮かべていたのは星熊勇儀その人だった。

第114話

幻想郷、地底。

旧都の一角にて人垣が出来つつあった。

「勇儀さんー！」

川上を狙い、お燐と対峙することになった三人組の一人が現れた人物の名を呼んだ。

鬼の四天王の一角である力の勇儀こと星熊勇儀その人。

恐らくは地底世界最強。四天王はもはや鬼というレベルではない。鬼神と呼ぶべき力量を持った怪物だ。

「お前らは下がってな。その男相手はお前らじゃ力不足だ」

からん、と下駄の音を立て歩みよりながら勇儀は三人組に向けて言った。

川上は勇儀をぼんやりとした眼で見ている。

「お燐、死体を持つていく事は私が許さない」

「ただ、さよりの事を悪く言ったのは私から謝る。だからここは私の顔に免じてそれ以外は勘弁してやってくれ」

勇儀からそう声をかけられて、お燐は大きく息を吐いて怒気を抑えた。しかし顔はま

だ不機嫌そうだ。謝罪なら三人組の方から欲しいのだろう。

川上はスツと目線を動かした、勇儀の登場のせいかな野次馬がどんどん集まり周囲の人垣が厚くなっていく。川上は誰にも聞こえぬように口の中だけで舌打ちをした。

「死んだのは……郷太か」

勇儀は転がつてる死体を一瞥してそう呟いた。

「馬鹿だねえ、弱つちい癖に喧嘩ばかり売つてるからこうなるんだよ」
「本当に馬鹿だねえ」

勇儀はそう言って口元に寂しげな、慈しむような微笑を一つ浮かべ、大きな盃に注がれた酒を一息で空けた。

「さて、ものふ士の兄さん」

一転してどこか獣じみた笑みを浮かべて勇儀は川上に向き直る。

「士ではない」

「さて、どうかな。確かに頼光達とは違うようだが、眼が似ている。忌々しい眼付きだ」
川上の訂正に勇儀は何処か遠くを見るような眼で勇儀は言った。彼女が今見つめるのは川上ではなく、千年以上前の在りし日か。

「そいつはね、私の飲み仲間なんだ。昔色々あつたんだろうね、人間つて奴を毛嫌いしていた。馬鹿な奴だったが、私はその馬鹿が好きだったよ」

嘘を嫌うという鬼らしい、竹を割ったような気持ちのいい言い草だった。

「言っておくと私はあんたみたいな男も嫌いじゃあない。一度共に飲み明かしたいとすら思う」

「……」

勇儀の言葉に川上は瞑目したまま答えなかった。何かを考えているのか、いや彼はもう理解していた。

「でもケジメつてもんがある、私は飲み仲間を殺された。当然あんたも殺した理由があっただろう」

自分が最悪を呼び寄せてしまった事に。

「ならば決まりだ、喧嘩をしよう」

「おおお！」と周囲の人垣がどよめいた。あの鬼の最強格たる星熊勇儀が人間相手に喧嘩を売ったのだ。それも明らかにごっこ遊びではない。ステゴロだ。

川上は眼を開くと今一度周囲を見た。勇儀と交戦した場合、生還率は零に等しいだろう。そう冷静に判断した。生物としての格が違い過ぎるのは一目で分かった。

交戦が駄目なら逃走、しかし周囲は人垣に囲まれてしまった。そもそも背中を向ければその時点で死を迎えるだろう。手持ちの手段で有効な時間稼ぎは……

「おい兄さん。腰の刀は飾りかい」

川上が交戦を躊躇っているのを見越してか、勇儀が挑発した。だが挑発の意味もなく、必要も無かった。ちょうど川上が交戦意外の選択が面倒くさくなつて来たところだからだ。

「分かつた」

川上が言った。食事は先程済ませたばかりだが彼は常に腹八分目までしか満たさない。動くのに支障はない。

「やろう」

川上の返答を生きて人垣から歓声が上がった。この時、勇儀の喧嘩が決まったのだ。

「決まりだ。決着はあんたが死ねば私の勝ち。私が死ぬか私に負けを認めさせる事が出来ればあんたの勝ちだ」

川上はその条件に頷いた。どうやら川上側にギブアップは認められないらしい。いよいよ持つて川上が生還する確率が勇儀が手心を加えて命までは取らずに終えるくらいしか無くなつてきた。

そして、よりあり得ない確率として川上が勇儀を斃すか。

「始める前に一服いいだろうか」

川上は懐から煙草のソフトパックを抜いてそう断つた。最後の一服じみている。

「ああ、いこよ」

そう答えて勇儀は自身も盃に酒を注いだ。川上は紙巻を一本啜えてマツチを擦って着火して深くゆつくり一服して、旨そうに紫煙を吐いた。

「ちよいといいかい」

その時お燐が勇儀に声を掛けた。彼女の顔にはもう人懐っこそうな笑みが戻っていた。

「なんだい？」

「このお兄さんの死体、予約していいかな？」

『構わない』

答えは、問われた勇儀と、他ならぬ川上自身。二人から異口同音に放たれた。

目を丸くしたお燐に勇儀は一つ笑って言った。

「だそくだよ」

本人からも了解を取りお燐は笑みを咲かせた。

「お兄さんは身体付きが綺麗だからエントランスで飾られるとかどうだい？」

「好きにしてください」

露悪的とも言えるお燐の問いかけに、川上は煙草を一服吸って投げ遣りに答えた。死んだ後の事など彼には全く持つてどうでもいい事なのだろう。

「待たせた」

川上は煙草を一本吸い終えて、吸い殻を足元に落として踏み消した。周囲の野次馬達は加速度的に数を増している。ここ旧都にはあの勇儀の喧嘩が見れるとあつては、親の死に目でも駆けつけるという連中は沢山いた。そのくらいの大イベントだ。

そしてギャラリーに取つては川上はあくまでもその勇儀の喧嘩の犠牲者でしかない。無論勇儀が喧嘩を吹っ掛けたという事で弱い訳はないというのは皆も承知だ。ただ、求められているのはなるべくいい戦いをして勇儀の引き立て役として死ぬ事だけである。

しかし、川上という男は競技者でも、客を喜ばせるプロでも、エンターテイナーでもなかった。彼にギャラリーの望む所など理解出来るはずもない。

勇儀は大事な盃を置いた。これは酒を零さぬようとハンドを付けてやるいつもの遊びではない。

「じゃあ始めるか。しかし、いいのかい？ 喧嘩を売った私が言うのもなんだが、私はこちらの奴とは違う本物の化物だよ」

あまりにも絶望的な戦闘となるのは川上も十二分に理解している。

「俺も昔は良くそう言われた」

挑発とも取れる勇儀の言葉に川上は抑揚なくそう答えて、腰の安定をおもむろに抜いた。刃を上に向けて顔の前に立てて改める。刃毀れ、曲がり、捻れ、無し。

身体は十全。眼前の鬼を斬るのに一切の支障無し。

「我が胸に 剣術理念抱きしめて」

川上は歌を詠んだ。ゆっくりと剣を八艘に掲げる。

「斬り征く今ぞ 樂しかりける」

その様に野次馬達が皆一様に息を呑んだ。

今、鬼神の前に相對しているのは何処までも透き通った一匹の剣鬼だった。

第115話

「さて、と」

勇儀は身体の調子を確かめるように肩をぐるりと回して、首を鳴らした。

そしておもむろに足を上げて地面を踏みしめた。ズン、と重い音を立て周囲の建物がグラグラ揺れた。野次馬達もそれだけで多くがバランスを崩した。

刀を八草に取り上げて腰を据えた川上はよろけもしなかったが、しかし軽く足を踏み鳴らしただけで圧倒的な力量を見せつけた。戦いの前の威嚇行為か、あるいは相手の反応を見る様子見か。

しかし川上は読まれぬように静かな呼吸を保ったまま半眼で勇儀を見るともなく見ているだけで表情も変えない。

勇儀は薄く笑い。からん、からんと音を立てて散歩でもするように気楽に川上へと歩み寄って行った。周囲のギャラリ―達が息を呑み緊張感が高まる。

「まず最初はサーブスだよ、避けな」

勇儀はそう言つて川上の切り間の一步外で右拳を高く振り上げた、合わせて川上の八草の刀が降りて脇構えへと変化する。

勇儀は深々と踏み込んで放り投げるかのように軽く右拳を振り下ろした。避けろと言われたにも関わらず川上も踏み込み切り上げた。

ゴン！と硬く重い音がして空振りした勇儀の拳は地面に刺さり地面を陥没させて周囲に軽く蜘蛛の巣状の亀裂が走る。

しかしそれをアウトサイドに避けつつ切り上げた川上の刀は勇儀の振った右の脇の下に深々と食い込んだ。動脈、神経群の集まった急所。

すぐ川上は勇儀の左へと回りながら刀を返して首筋を切りつける。切っ先三寸埋まれば終わり。

脇の下、首、共に十分な深さで入ったはずだった。しかし川上は思い切り後ろに飛んだ。一瞬遅れて川上のいた場所に勇儀の無造作な裏拳が通過した。

勇儀の拳が刺さった地面は凄惨な惨状である。もはや漫画か何かの威力だ、しかも明らかに軽く振るっただけで。

だが何よりもおかしいのは。

勇儀はゆっくりと川上に向き直りくっ、と笑って見せた。

——傷一つつかない勇儀だ

深さは充分、刃筋も通った。致命傷の筈であった。しかしまるで硬質ゴムの表面を滑ったような奇妙な手ごたえ。

「そんな鈍なまくらじゃあ私は切れないよ」

薄い笑みを浮かべたまま勇儀は言った。鈍？安定の切れ味ならあれで充分なのだ。今迄の妖怪も確かに頑丈だったが切れた。

だが、と川上は思った。

川上は左手を懐に入れて棒手裏剣を抜いた。切っ先を植物から抽出した毒液に付けて乾かしを数回やった、美鈴に使ったものと同じ。

妖怪にも効くことは美鈴で証明済み。川上はこれ見よがしに左手を振り上げた。距離四間、川上の技量なら充分な間合い。

川上は手裏剣を打った。四間の距離を直打法で打ち出された棒手裏剣は正確に四分の一回転し剣先から勇儀の首元に飛んだ。

川上は当てるのでは無く、相手がどう出るか様子見の為に打ったのだろう、しかし。

勇儀は避けも払いもしなかった。棒立ちのまま喉元に手裏剣を受けた。正確に剣先が当たったにも関わらず、手裏剣は刺さらずに弾かれて虚しく地面を転がった。

ちっ、と川上は舌打ちした。

頑丈というレベルではない。文字通り、刃が立たない。

勇儀は転がった棒手裏剣を拾い上げると片手でベキリとへし折った。

無茶苦茶だ。戦いにおいて攻撃とは最大である必要はなく最適であればいい。

人を殺すのに対物ライフルを持ち出して人体を木っ端微塵に粉碎する必要はない。22口径の拳銃で首に二、三発穴を開ければそれで充分なのである。

しかし目の前の鬼の存在は何なのか。そんな現実を一切合切無視する。充分過ぎる攻撃で傷一つつかずに、逆に向こうの攻撃は全て過剰^{オーバーキル}だ。

どうする？使うか？川上はいつも懐に入れてあるものの存在をを考える。

いや、現状必要なのは相手を倒す有効な攻撃だ、これを使う事自体は打開にならない、川上はそう却下した。

ここで川上が思い浮かんだまともな方法論は三つ。まずは一つを選択^{アプローチ}。

勇儀はのんびりと歩みより右拳を繰り出してきた、まるっきりの大振り^{テレフオンパンチ}川上にすれば当たる方が難しいが、掠っただけで死に繋がるとくれば足も竦むものだ。

これを右に避けて大きく八相に取り上げた川上は発勁とも言われる大エネルギーを発するため、の身体操作を持って渾身の袈裟懸けを放つ。並の相手なら肩口から脇腹まで刀が抜けて二つの肉塊に分かれる切断力。

しかし、バチンと弾ける音とともに川上の手に嫌な感触を残して刀は勇儀の肩口に弾かれた。川上は眼を向けず手の内の感覚だけで刀の状態を把握する。思い切り切り込んで弾かれたのだ、並の刀なら折れ飛んでいるところだが、安定の粘り強さか幸いにも曲がりはいかなかった。

方法一失敗。勇儀が構わず繰り出した左フックを川上は下に潜る。

刀を右片手持ちにして川上は右肩、肩甲骨を落とした。勇儀が左のスイングブローを放つて来たところにインサイドに潜り刀を握ったままの右拳を勇儀の鳩尾に叩き込んだ。古流唐手術に伝わる当破あては、衝撃は勇儀の背中に抜けた。

甲冑を着込んだ事を想定する古流柔術では透かしと呼ばれる技法、いわゆる浸透勁である。甲冑の上から内蔵を潰す、ガワだけの防御を固めても中に抜ける打撃の前に意味はない。

しかし。

「少し響いた、いい拳打じやないか」

勇儀は笑ってそう賞賛した、それだけだった。確かに勁は中を通り背中に抜けたが、方法二失敗。

勇儀は足を高々と上げて戦鎚の様に踵を落としてきたが、川上は大きく飛んで下がって躲した。勇儀の体は強く堅いだけでなく柔軟性もあるらしい。

勇儀は拳打を振り回してるだけだ、まだ遊んでるようだがしかし、彼女にとってこれが至極単純で有効な戦法なのだろう。彼女は相手の如何なる攻撃も効かないが、彼女の攻撃は一発で相手を粉碎する。防御などせず攻め続ければ自ずと勝てる。

であれば、甲冑を着た相手なら隙間を狙うのが介者剣術のセオリー。同じように人体

にも隙間はある。どう鍛えようとも鍛えられない部分、あるいは強くなつては困る部分がある。

「なあ、楽しいかい」

勇儀は川上に向かい唐突に問いかけた。川上は半ば無意識に問い返す。

「楽しい？」

「さつきから笑つてるよ、あんた」

勇儀自身歯を剥いた獐猛な笑顔を浮かべていたが、そう言われて川上は初めて自分の表情に意識がいった。確かに口角が釣り上がっていた。

「そうだな」

川上は追認しつつ笑みは消さなかつた、剣を星眼に構える。

勇儀が拳を繰り出さんとする意を取つて川上は先々の先を取つた。渾身の繰り突きで勇儀の右眼を打ち抜いた。観客の中からうわあ、というような悲鳴に似たものがある。

勇儀が右拳を振つてきたのをアウトサイドに抜けて平突きを勇儀の左耳腔に突き込む。

ちつ、と勇儀が舌打ちした。

「小賢しい！」

川上へと向き直りながら右腕を大きく薙ぎ払ったが川上は膝を折り敷き下に躲した。刀身を左で中取りした。

刀を股間に向け思い切り突き上げた。いや、股間より奥、女性器、膣口へと。

言うまでもなく男でなくても神經群の集まった女性器は急所だ。まして川上は膣口から中に貫き通してから抉って殺す気だった。

しかし、刀身は一分たりとも刺さらなかった。

「乱暴だねえ、ただ私を犯すにはやっぱり鈍なまくらだよそれは」

そういう勇儀は眼にも耳にも傷一つついていない。どこにも攻撃が通る場所がない。もはや人体構造すら無視した出鱈目な耐久力。

勇儀は足元に居る川上に左の回り蹴りを放つ。川上は咄嗟に中取りした刀身を立てて蹴り足を迎え撃ちながら咄嗟に受身で後ろに転がろうとした。

あるいは——川上の力では切れずとも相手自身の力を刀で迎えば切れるのではと一縷の望みもあつたが蹴り足を受けた刀は中程から振じられて折れ飛んだ。爪先が僅かに川上の肩に擦り、それだけで川上の体は横に吹き飛ばされた。

必死に受身の応用で転がりながら力を殺したが、勢いは殺し切れずに川上は一軒の家屋の壁に叩きつけられた。

息が詰まった。幸い致命的なダメージではないが受身が上手く出来なければ恐らく

今ので勝負はついていたであろう。

方法三失敗。手詰まり、だ。

ダメージを与える手段がない。仮にここに對物ライフルがあり勇儀に連射したとしても倒す事は叶わないだろう。

人垣となつた観客がどよめいた、こりや勝負あつたな、と誰かが呟いた。

もう手がない。川上は周囲の音が遠くなつていく。變わりに視界はいつもは見ないようにしている鬱陶しいものに溢れ、耳に雑音が飛び込んでくる。あまりに雑多な情報量に川上の意識が揺らぐ。

「もう、終わりがかい？」

勇儀の声が聞こえた。まだ武器はあつた、転がつた時身体から離れた野太刀が転がっている、見ずとも分かる。

ここまで来たら本来なら逃走へと思考を移すべきだが、もはや川上の意識にその選択は抜け落ちていた。そうだ、まだまともじやない方法論アプローチが一つあつたのだ。

川上は何事も無かつたかのように立ち上がり右手に残つていた捻れ折れた安定の残骸を勇儀の方に投げ打つとスタスタと歩き、野太刀を拾つた。

「そっくなくちやね」

勇儀は不敵に、嬉しそうに笑つた。

第116話

川上は野太刀の鞘から長大な刀身を抜く。古刀然とした青味を帯びた刃が薄暗い地底の中で燐光を放っているかの如く錯覚を覚えた。

からん、鞘が落ちる。

「鞘を捨てるとは小次郎破れたり、とでも言えばいいかい」

勇儀は愉快そうに笑ってそう揶揄した。

「生きていたら、後で拾う」

対して先程から普段以上に焦点が定かではない川上は至極まともな返答をした。もつとも彼は常に刀を抜く以上納める事など考えてはいないのかも知れない。

「さて、鬼退治には如何にもといった長刀だが。それでどうする？」

勇儀は言った。如何に刀を変えても相手の攻撃手段が先程受けたので全部ならもう相手には何も出来ない。そう理解していた。

しかし気になった。先程から相手の雰囲気は言えないが変わったような気がする事が。

すう、と川上は静かな呼吸を行う。ゆっくりと息を腹に落とすようにして臍下丹田に

力を入れ。ゆっくりとした呼気とともに刀を上段に取り上げた。

上段。五行の構えでは火の構えに当たる、守りを捨て攻めだけを考えた構え。身体をから空きにする代わりに屹立した剣の上からの威圧で相手を押しつぶして火のような攻撃で倒す名人の位。

が、しかし川上の屹立した剣には威圧感もなかった、剣気や殺気といったものすら感じられない。ただ蒙昧な眼をして上段に構える姿はただそこにあるだけの枯れ木めいていた。

しかし、勇儀はその様に僅かな危機感を覚える。やはり先程までと違う。明らかに相手は次で終わりのつもりであろう。であるのになんなんだ、この自然な姿は。

警戒心を高めた勇儀が今迄構えもせず拳を振り回しているだけだったのが、左は下げたまま、右拳を上げて構えた。ギャラリーもお互いの空気が変わった事に気付き、小さくどよめいた。

勇儀は川上の一挙手一投足を見逃さぬようにコンセントレーションを高める。途端

——自分が何と対峙しているのか分からなくなった

ハツとして、勇儀は川上を認識する。何だ今のは、こいつは確かに此処にいるのか？ 何かに似ている、まるでこいし……いや？

まずい、次で殺さない。勇儀は直感し、もう遊びは無かった。最速最短、回避不能

の渾身の右を放つ為勇儀は左足を踏み込み――

――全く気付く間もなく間合いに入った川上が目の前に居た。

死

勇儀の脳裏に浮かんだのはその一文字。勇儀が反射的に後ろに飛ぶ事が出来たのは、千年以上前の都で死を実感させられた経験のおかげだった。

ギャラリーの誰も見る事の出来なかつた一瞬の交錯。気がついたら川上は一太刀を終えており勇儀が後退していた。ギャラリーが戸惑つたようにどよめく、鬼が下がつたのだ。

勇儀は、惚けていた。私は生きてるのか？今、確かに勇儀は死を錯覚させられたのだ。何処も斬られていない、勇儀はそう確認し――直後に裏切られた。

まずぼとりと彼女の右前腕が落ちた。勇儀は地面に転がつた腕を見て一瞬これは誰の腕だと考えた。

だが次の瞬間右肩から右胸にかけての切断面から血がしぶいた。斬、ら、れ、た、勇儀はそう気付いたと同時に膝をついた。

勇儀は地面にかかる陰を見て我に返り、顔を上げた。川上は昏い眼で勇儀を見下して野太刀の剣先を突きつけていた。

ギャラリーは目の前の光景を見て息も漏らせなかった。片方が膝を着き、片方は見下ろして武器を突きつけている。決着の光景である。

「くっ、ふふふ」

勇儀の口から自然と笑いが溢れた。斬られる筈がないと思っていた、自分にとつてはただの喧嘩。相手の刃が自身を傷付ける筈はないと驕っていた。先程膝を着いた瞬間の首を垂れていた時、もう一太刀さっきのを浴びていたら首を落とされていたのだ。焼きが回ったなど自嘲する。

「私の負けだ」

勇儀の投了の声を聞いてギャラリー達から爆発的な歓声が上がった。全員勇儀の勝利、いや、力を見るために集まったのだ、誰も予想していなかった大番狂わせ。

「勇儀に勝つちまった!」

「人間じゃねえ、バケモンだ!」

「鬼を斬った」

そうあちこちから歓声とも悲鳴とも付かぬ声上がる。

「首級が欲しければこのまま落とせ」

勇儀はそう言つて、うなじを差し出した。川上は周囲を伺う。厚い人垣から感じられるのは決して険悪な雰囲気ではない。しかしかなり名が知れた目の前の鬼の首を落と

せばどうなるかはわからない。

川上は剣を引いた。数歩歩いて鞘を拾う。刀は腕を落として胸腔まで斬り下げたはずにも関わらず血の一滴どころか、僅かな脂すら付着していない。川上は長大な刀身を器用に血振りだけして鞘に納めた。

「もう少し、か」

最高の強敵に放った一刀の手ごたえに川上はポツリとそう呟き、懐からゴールデンバットを出して啜えた。

「私は星熊勇儀。あんたの名を聞かせてくれ」

勇儀の問いに川上はマッチを擦り着火して。紫煙を一つ吐いてから答えた。

「川上」

川上はそう一言で名乗り、折れた安定を拾う。しかし折れ目付近は手酷く振じれておりもはや鞘にも納められそうにない。川上は腰の鞘を抜いて折れた安定と共に捨てた。

「その名前、死ぬまで忘れられそうにないよ」

勇儀の言葉に川上は答えずに、右手に鞘ぐるみの野太刀を携えて歩き出した。川上が向かう先へと人垣が自然と割れた。歩みゆく川上に誰も彼もが、恐れ、畏怖の視線やあらい気味の悪いものでも見るような眼を向けていた。そして少しの確かな感動や敬意。

「綺麗……」

その男の死体を欲しがった、しかし叶わなかった一匹の黒猫はしかし、溢れ落ちるよ
うに一言呟いた。

川上は場を去った後、勇儀は大の字に倒れた。まだ続く出血が地面を濡らす。慌てて
数人の妖怪が飛び出した。

「勇儀さん！」

「大丈夫ですか!？」

「くっ」

その声を掛けられた勇儀は小さく呻き、そして。

「あっはっはっはっはっはっ！」

破顔して大声で笑った。実に愉快そうに笑った。気持ちよさそうに笑った。

「勇儀さん?」

「いやー、長生きはしてみるもんだなお前達」

勇儀の身を案じた妖怪達は戸惑った様子だが、勇儀は最高の気分だった。死んだ仲間
には悪いと思いつつもこんなに気分がいいのは久方ぶりだ。

「お前ら見たか! 鬼を斬る人間だぞ! もう会えないと思つてた」

勇儀はそう言つて立ち上がった。未だ血を流す勇儀が取り巻き達が言う。

「手当を」

「こんなの唾でもつけときや治る！そんな事より郷太を埋めてやったら弔い酒と私の祝
敗会だ！付き合え」

その言葉に取り巻き達は顔を見合わせた。一人が肩を竦めて、他の皆が自然と笑つ
た。

「もちろんのお供しますよ。浴びるほど呑みましよう」

全く気持ちのいい人だと、皆思い笑った。

第117話

「おおおつー！」

幻想郷、地底、旧都にて一人の妖怪の雄叫びが響いた。

叫びとともに妖怪は一人の男へと躍りかかる。男は右手を懐に入れると次の瞬間強い光が妖怪の目を焼いた。男が妖怪の目に向けたのはマグライトであった。

薄暗い旧都では効果が高く、妖怪は一瞬眩みそれが命取りとなる。次の一瞬で上腹部から電撃的な灼熱感が妖怪を襲った。男——川上が左に構えたナイフが妖怪の鳩尾を深々と刺して抉った。

妖怪が前のめりになった瞬間川上は右で逆手に持ったマグライトを相手の左前腕に引つ掛けて捕手。深く入身して足を相手の後ろに入れて左のナイフで喉を切り裂きつつ投げて頭から落とした。

即座に逆手にスイツチしたナイフを振り下ろして、顎の下から頭蓋内の脳幹を破壊して止めを刺した。

ゆらりと体を起こした川上は左手に携えた血脂に濡れたナイフを一振りした。厚く重いハマグリ刃にカミソリの切れ味を両立した刃長約16センチのブラックコーティ

ングされたブレード。シンプルなデザインのパルクニーベン社製のA1。

既に周囲は今し方の相手を入れて三人が死体となって転がっていた。残るは屈強な男の姿をした一人。外見は人間にしか見えないが妖怪である。

勇儀と一戦終えて、三丁も行かない内にこの襲撃であった。勇儀の仇打ちなのか、川上を危険視したのか、あるいは単に強い相手を見て血の猛りが抑えられなかったのか。残った妖怪は舌打ちした。屈辱であった、鬼の四天王すら斬った男に取ってはただの妖怪など紙切れ同然なのか。背中に背負った刀すら抜きすらしないとはい。

自分一人になっても妖怪は敗走を選択はしなかった。死を覚悟して顔に笑みすら浮かんでいた、勝てずともその刀を抜かせてみせる。そう決意した。

追い詰められた、あるいは開き直った相手というのは厄介なものである。その妖怪なら抜かせる事は出来たかも知れない。しかし、現実には彼により残酷な最後を突き付けた。

川上は視た、中空に浮かぶ髑髏の形に黒く沈んだ塊を。それは後ろから川上と対峙していた妖怪に取り憑く。

かくん、と妖怪の膝が折れた。妖怪は震える身体で何とか後ろに向き直る。

「て、めえ、化け、猫……」

そこにいたのは先程妖怪に取り憑いた黒く沈んだ不定形の髑髏を纏った火焰猫燐で

あつた。

「ごめんね」

お燐は屈託ない笑顔でそういつて鬮體——怨霊をもう一つ操り妖怪に取り憑かせた。それで相手は電池が切れたように地に伏せて死んだ。

珍しい事であつた。お燐は趣味こそ良いとは言い難いが、穏当で人懐こく、人を殺すことも、妖怪同士で争う事も滅多に無いのだ。

お燐の周囲に漂っていた怨霊は陰のように形を失いお燐の身体に込まれるように消えた。

「助かつた、ありがとう」

唐突に介入してきたお燐の真意は川上の知る所では無かつた。とりあえず手間が省けたので礼を言う。

「いや、お安い御用さー」

お燐は、お燐は我慢ならなかつたのだ。目の前の美しいモノがああの程度の有象無造に侵されることが。

川上はナイフを拭つて納めると変わりに両切り煙草を取り出した。一本啜えつつ言つた。

「それで、予約のものを回収に来たのか？」

川上は火をつけ一服しつつ、普段より強い目線でお燐を見据えた。

その眼で見据えられると思いの外恐く、お燐は狼狽する。予約という言葉ですっかり忘れていたが確かに勇儀の前でそんな事を言った。本人に悪意は一切無かったが自分が死ぬものとして扱われるのは気分のいいものではないだろう。

「そんなつもりはないよ！お兄さん怒ってるのかい？その、ごめんよ」

お燐は猫耳をペタリと寝かせて、二股の尻尾を自身の体に巻きつけつつ謝った。相手を異様に畏縮させてしまった事に川上は少々驚く。怒っているのかと聞かれても何故自分が怒らなければならないのか川上には理解できない。

しかし改めて自身の心身を見つめ直して気がつく。怒りではない、少し猛っている。先程の鬼との戦闘を終え、ずっと取り組んできた一刀の工夫に進展が見られ、今更のようには体が熱くなっていた。

こんな事で昂ぶるなんてまさに未熟さの露呈だと川上は思わず自嘲を浮かべつつ一服して言った。

「いや、怒ってはいない。では何か用だろうか」

「あの、それは！お兄さん、綺麗だったから！」

川上の問いにお燐は今度は顔を上げピンと耳と尻尾を立てて勢い良く言った。言つたはいいが上手くお燐でも整理出来ていないのだ。川上も怪訝な表情を浮かべる。

「だから、あたいは生きてる人間がこんな綺麗に思ったのは初めてで」

ワタワタしつつお燐はいっぱいいっぱいになりつつ言葉を紡ぐ。随分表示豊かだ。川上はとりあえず目の前の相手が自分に好感を抱いているらしい事は分かった。

「そうか、ありがとう。死体のほうは欲しければ死んだ時勝手に持って行って構わない」
ピクリとお燐の耳が反応した。

「死んで欲しくないな…」

ポツリとお燐は言った。何を言うのだとお燐自身も思う。死体を集める、それはお燐のアイデンティティに関わる事だ。

「お兄さんは生きてる方が綺麗だよ。だから死んで欲しくないよ」

死を否定したくはない。否定する気はないが、しかしお燐は確かにそう思ったのだ、自身に嘘はつけなかった。しかし、

「俺は死ぬ」

他でもない川上自身がそれを肯定した。彼は分かっている、人は死ぬのだ。彼に取って死は絶対であり、覆ってはならないものなのだ。

お燐は何かを言おうとして

川上は自分に伸びてきた手を危うい所で掌握して轉身した。

「あれ？」

掌握された手首で小手返しの理合でコロんと転がされた第三者の少女がどうしてこうなっているのかわからぬという風に声を出した。

「こいし様！居たんですか？」

お燐は川上に倒されて初めて認識出来たその少女に驚いて声をかけた。

「うん、いたよ。お兄さんはどうして分かったの」

「眼がいいからな」

透明感のある綺麗な声で川上に問いかけた少女は、薄く緑がかつたくすんだ癖つ毛をセミロングにして黄色いリボンをあしらった帽子を被っていた。

幼い顔立ちは可愛らしく笑みを浮かべているが、緑の眼はぼんやりとしているような、何を見ているのか分からないような焦点の合わない何処か違和感を感じさせる眼をしている。川上にも似通ったもののある眼だ。

服は上は黄色の生地到手元が見えないくらい袖が広く長めだった。下は緑地に薄く花が意匠されたスカートだった。

特徴的なのは左胸の前の紫がかつた握り拳大程度の深い紫色の球体、いやそれは閉じてはいたが瞳だった。そしてその瞳かの伸びる幾つかの管が身体回りに巻きついていた。

覚妖怪である古明地こいしである。覚はその第三の眼で人の心を読む能力を持った

妖怪であるが、こいしはその読心能力を厭い自ら瞳を閉じた事により全く別の資質を開花させたレアケース。

自分のアイデンティティである読心能力を捨てた結果。自分自身を失った少女。それを悲劇と呼ぶか、あるいは喜劇と呼ぶべきか。

自我のないこいしは無意識で常に動き、他者の無意識に入り込む。お燐が視界に入っているこいしを認識出来なかったように彼女は例え目の前にも誰も路傍の石にいちいち気を払う事などないように誰にも気付かれない。

くい、と川上が手首を返すとこいしは自然と起き上がった。川上はこいしを観察するような眼付きをしていた。しかし、こいしを見る川上は小さく、ほんの小さくだが彼が普段浮かべないような厳しい顔つきをしていた。

ス、とさりげない動きで川上は数歩距離を取り、こいしに対して斜に立って短くなつた煙草を踏み消した。こいしは柔らかく笑ってお燐に言った。

「お燐が生きてる人に興味を持つなんて珍しいね」

「えっ、はい、まあ」

こいしにそう言われ戸惑いつつお燐は答える。お燐にとってはこいしは主人の妹に当たるが、同じ死体愛好家ネクロフィリアとして仲は良い。

「それは恋です！」

そしてこいしはいきなりお燐に指を突き付けて声を張り上げて言った。あー、と言いつつお燐は顔を紅潮させて頬をかいた。言われればそうなのだろうと言う気もする。

「よしーじゃあお兄さんを私のペットにしちゃおう！」

「あー、こいし様？」

お燐はまた突拍子も無い事を言い始めてしまったと、困惑した。事実こいし自身に自我がないのでその場のノリで動くような所があり掴みどころがないのだ。川上は2本目の煙草を啜えて火をつけていた。

「そしたら館で二人共一緒だよ、猫のつがいだー」

「つがいって……」

こいしはどうやらお燐の為に言っているようだ、ペットが気に入ったオスが居るから一緒に飼ってあげよう。という単純極まりない思想だが。流石にお燐もこれに赤面しつつも呆れるような微妙な表情を浮かべていた。

「よし、じゃーお姉ちゃんに頼みにいこー！」

こいしは歩きながら唐突に川上の手を取り進みだした。一瞬ピクリと川上の肩が反応したが、結局彼は逆らわず歩きだした。何を思っているのか、どうでもいいのか。

お燐も次いで二人を追い出した。流石に無茶苦茶だろうと思う反面、飼って貰えたら正直嬉しいなと思いつながら。

第118話

反妖怪派組織のトップ。立見裕章は自分が藪を突いて蛇を出してしまった事を自覚していた。彼は頭を悩ませる。

いつもの集会に使われる屋敷の一室で主要なメンバー達が集まり会議となったが、皆一様に熱い怒り、そして狼狽を露わに激しく舌戦を交わしていた。

「清水って奴は確実に捕らえるかでなければ殺すべきだ!」

「仲間が七人やられてんだぞ!ぬるい事をいうな。確実に殺せ」

「おい、まだみんな死んだと決まったわけじゃあないだろ」

「生きていると思うか?」

「口を慎め!」

「綺麗事を言っている場合じゃあないだろ、現実を見ろ」

……これである。里の外を回っていた仲間から清水と思わしき人間が見つかったと、今話し合いをしていると報告があった。万一を考えてすぐに援軍を送った。

結果清水の元へ向かった仲間は都合七人は帰ってこなかった。清水も行方知れず、仲間達は見つからずに行方不明と処理された。

正直仲間が無事だと考えているものはいないだろう。立見にしてもおそらくは清水が殺した後死体を見つからぬよう隠蔽したか、あるいは死体は妖怪に食い尽くされたのか。

役人は動かない。里の外で行方不明では妖怪に襲われた不幸な事故で済まされてしまう。それもこれも元は忌々しい妖怪達のせいだ。

「ともかく清水を探し出してツケを払ってもらわなければならない」

だが、風向きがまずい。仲間が人間にやられたという事により、本来の敵である妖怪より目先の敵に皆目が行ってしまい初めている。立見は方向の修正を測る。

「清水という男には確かに同士の仇を討たなければならないだろう」

立見は重々しい口調で告げた。

「だが、一つ分かった事がある。同士が清水にやられたのであればその男はまず間違はなく妖怪側に着いている」

立見の言葉に仲間が口を出した。

「じゃあ立見さん。俺たちはわざわざ敵を一人増やしちまったって事ですか」

その男は暗にこれは清水を追えと命じた立見の責任ではと言っていた。大半の仲間は清水への憤りだが、少数、立見の判断に不審を抱いている者もいた。

客観的に言つて、清水という男を探す事を考えた立見の悪手とも一概に言い難い。か

の者が武器になるのは確かだったのだ、同じ人間である以上協力を取り付けられる可能性はあったし、せいぜい傍観者だろうと考えた。

敵対関係になるとは、可能性としては考えなかつた訳ではない。だから立見も慎重にと命じたし。清水を見つけた仲間も独断先行せず報告を寄越した。それが無かつたら完全に清水の情報も無く仲間が消えていただけだったろう。

「狼狽えるな！」

一喝したのは立見の信頼する忠実な幹部であつた。

「いくら腕が立つからとて敵一人増えたくらいで何だという！我々は幻想郷の半分、妖怪全部と事を構えるつもりでやってきたはずだ！」

「ああ……確かにその通りだ」

幹部の熱弁に立見を責めかけていた仲間は熱が冷めたようだった。

「我々がやる事は変わらない。清水が妖怪側というなら都合だ。妖怪と事を構えれば自然と清水も出てくるだろう、妖怪共々我々の怒りを思い知らせてやればいい」

「うむ……確かに相手は明らかに妖怪に味方している。ならばいずれはその時がくるだろうな」

「そもそも清水が妖怪側でなければかかる羽目にはならなかつたはずなので立見の都合という言葉は詭弁を弄したに過ぎないが、皆は頷いた。

しかしここに居るものは知る由もない、清水——川上が厳密に誰の味方でもない。「仇は皆取る。妖怪共にも妖怪に組した連中にもだ、皆良く刀を手入れしておけ。その時は近い」

立見は静かだが力の籠った口調でそういうと、皆重々しい表情で頷いた。

とりあえず、皆の舵取りはこんな所だろう。立見は考えた。しかし、清水は実際問題どうするか。当面は捨て置くか、いや、立見自身が言ったようにいずればぶつかる事になる予感がする。

そして、相手が妖怪側の何処かの陣営に組しているのは明らかだろう。清水の手掛り、目撃情報や場所をを鑑みると可能性は

——紅魔館か？

かつんと、川上は音を立てて石造りの硬い床を歩いた。

古明地こいしに引っ張りこまれたのは古明地こいしの姉であり地底世界においては知らぬ者が居ない大物、古明地さとの屋敷、地霊殿であった。

名前の割に屋敷は洋館であった。黒を基調とした内装、ステンドグラスなどの意匠が凝らされた館だったが紅魔館とはまた違い、ゴシック調というのか何処か退廃的な美を感じさせる館だ。

川上はエントランスホールに立ち上を見上げる。天井の高いホールには窓に円形のステンドグラスが使われており、薄暗いホールの中に様々な色彩のガラスを通り淡く色づいた光が入ってきていた。

そして、川上は視線を少し落とすと。ステンドグラスの下に一人の少女が貼り付けにされていた。

すでに死しており蠟のような肌質をしている少女は歳の頃は十代前半と言った所だろう。全裸であつたが体付きが女として成熟を始めた所で丸みを帯び始めており、子供から少し女よりの微妙なバランスが倒錯的な美しさを感じさせた。

少女の死体は両の腕を大きく広げて手首の尺骨と橈骨の間に杭を打たれていた。両足は足の甲を纏めて貫かれて貼り付けにされていた。

それだけでは自重で胴体は沈み込んでしまい、上手く張り付けには出来ないの腋の下などにも杭を打ち身体は沈まないように補助されていた。

そして天井から伸びるいくつもの太い鎖がまるで少女を拘束するように身体に巻きついていていた。顔は頭の重さで俯き、同じ目線だつたなら目元などは見えなかつただろう。しかし下から見上げている川上には見えた。

その少女はどういう人生を送り、終えたのだろうか。身体付きの割には大人びた綺麗な顔付きであり、僅かに微笑んでいるかのようにも見える安らかな顔をしていた。

川上はそれを眺めながら煙草に火をつけた。その死体のオブジェはかの磔刑にされた聖人がモチーフなのだろう。ありがちと言えばありがちなモチーフである、しかし。

「どう、綺麗でしょ？」

後ろからそう声を掛けたのはお燐であった。彼女は川上の横に並び立つ、近くからだとお燐からは少し苦み走った甘い白檀にも似た香りがした。没薬ミルラの匂いだった。

これは彼女の作品のようだ。死体をオブジェにするなど真つ当な感覚で言えばただの悪趣味だろうが。

「ああ、綺麗だな」

あいにくそのような感覚は持ち合わせていない川上はそのオブジェの美を素直に認めた。お燐は自慢の作品を褒められて嬉しそうに尻尾を立てて笑う。

いや、美しい物の前にくだらない道徳観や倫理観を安っぽく持ち出す方がナンセンスというものだろう。少なくともこの幻想の地では。

地底は地上より涼しいが、それでもまだ蒸し暑さを感じた。死体は新しいものには見えないが、傷みなどなく綺麗なものだ。

おそらくは死体の血液や体液を薬剤で置換するなどの防腐処理がされているのだろう。だとするとお燐はエンバリーミングの技術を持っているのかも知れない。あるいは能力によるものだろうか。

「お燐はそれ好きだよね」

ふ、と唐突にすぐ後ろから聞こえたのはこいしの声だった。慣れているのかお燐は驚く様子もなく振り返る、川上は表情を変えずに煙草を口に運んだが、その実彼はとつさに跳びのきそうになるのを堪えた程、驚愕していた。

川上をして気配を掴むのが酷く困難な相手だった。

「はい、拾って来たなかでも特に綺麗だと思ひまして」

「確かに女の子は綺麗だけど私はあのオブジェは嫌だなあ」

お燐の返答にこいしは蒙昧な瞳でそう返した。どうも彼女の美観には合わなかったのか、お燐は少々顔を曇らせた。よほどのお気に入りなのだろう。

「そんな事よりお姉ちゃん会ってくれて。こつちだよ、ついてきて」

こいしは川上の手を取り歩き出した。随分気安く、強引だが、文字通り本人は何も考えていないのだろう。

左手を握られた川上は器用に片手だけで携帯灰皿を取り出しスライドさせて短くなったシガレットを中に捨てた。

川上にとつてもこいしは視野に入れて触れていた方が、精神衛生上良い相手だった。

第119話

武術には一つの境地とされる場所がある。

武において教えられる重要な概念は捨てる事である。

例えば、いざ外敵に襲われる。逃げる手段もなく、交戦しか手段がないとする。この時どう心得れば良いだろうか？

死んでたまるか、絶対に負けない。と意気込む事だろうか？

違う

生に執着する心は確実に緊張を起す。自然と身体は固まり、居つく。結果迎えるのは死だ。

身を捨ててこそ 浮かぶ瀬もあり

この言葉の通り、負ければ死の戦いにおいては生への執着を捨てる必要がある。交戦しか手段が無くなった時点でもうだめだと諦めて死ぬのだ。

生を捨てたその時身体は脱力を得られる。自由に動けるようになりその先に光がある。結果死ぬつもりが案外生き残れてしまう。

皮肉にも死を避けようと戦うより死を受け入れて戦う者が生き残るのである。

これが、捨てる事が肝要と言われる所以の一つである。武においては技を掛けようとする心を捨て、剣も捨て、執着を捨て、こだわりを捨て、身を捨て、その先に得られる境地。

無我である。

しかしこの境地に達した武人が過去果たして何人いたであろうか。

しかしその境地に立った稀有な事例が川上の前に紛れもなく立っていた。

古明地こいし

文字通り自分を捨てた結果あっさりとならぬ無我の境地に立った怪物である。川上は最初から認識する事が出来た。しかし川上をしてそれしか出来ないのだ。

覚妖怪とは人の心を読み、嫌悪や恐怖を買う妖怪だ。その性質故に本来は戦闘向きではない種族であるが、こいしは高い戦闘力を見せる。無我はその戦闘能力の骨子なのかも知れない。

最初にこいしがおもむろに川上に手を伸ばして来た時、川上はその動きの気配や起りなどを全く捉えられなかった。慌てて手を取り反射的に投げてしまった。

こいし自身の気配も視認しないと全く捉えられない。こいし自身を視ても、また彼女の周囲から入る情報も少なく彼の武器が活かせない。

こいしは川上にとってこれまで会ってきた強力な力を持つ妖怪達とは異質の脅威を

感じさせた。仮にこいしが川上を殺す気になれば十中八九、川上は死ぬだろう。

そんなこいしに手を引かれつつ彼女の姉の所に歩き出した川上に、お燐は追いつきすぎりなく川上の右腕の袖を取り、注意を引いた。

「ちよつとお兄さん」

川上はお燐の方に耳を傾けて、お燐は知らせておくべきだと思い一言だけ耳打ちした。

——さとり様は心を読む事が出来る。

こいしと違い姉の古明地さとりは読心能力を使う。彼女が嫌われ者が多い地底の住人にすら嫌われ、恐れられているのはひとえにこの能力故である。

文字通り心を読むのである。表面的なものではなく深層心理すら読む。果たして、そんな相手の前に立ちたいと思う者がいるだろうか。

居ない、と断言していいだろう。心に秘するもの、知らせては絶対にいけない弱味。それらが無い者などいない。それらを全て丸裸にする相手と付き合えるなどとその恐ろしさを知らないから言える綺麗事であろう。ある意味では覚妖怪とは他のどんな妖怪よりも恐ろしいものなのだ。

しかし、川上は

分かった

と、小さくお燐に返すだけだった。

やがてこいしは一つの扉の前に立つと、ノックすらせずに扉を開け放ち中に入った。ここが古明地さとのりの部屋なのだろう、川上は引つ張られるように入室した。扉を潜る際に非礼にならぬよう一応、失礼する。と彼は言った。

室内は壁一面に本棚が並び書物だらけ。窓すらなく埃っぽい空気で薄暗かった。

「この人だよお姉ちゃん！ 飼っていい？」

「貴方が、勇儀さんを斬ったという人間ですか」

机の前の椅子に腰掛けた古明地さとはこいしの言葉には応じずに言った。なおこいしは川上が勇儀と交戦している時観戦していた。さとはは先程鬼を斬った人間にお燐が恋したから私が飼うとか、こいしから支離滅裂な説明を受けた所だ。こいしと川上に遅れてお燐も入室してきた、色々心配だったのだろう。

古明地さとは薄く紫がかったくせつ毛であり、長さは肩にかかるかかからないか程度で無造作に切られていた。ヘアバンドをしている。顔立ちは姉妹らしく、こいしに似通った所のある幼くも綺麗に整っていたが、浮かべてる表情はこいしとは似つかない。深い紅の瞳は半眼になっており、無表情も相まって眠たげにも見える。身体付きなどは違うが本の量といひパチュリーを連想させる。

フリルをあしらった水色の上着に、ピンクのスカートにはバラの意匠が凝らされてい

る。

こいしと同じく読心能力の要となる第三の眼とそれに繋がる管は身体にまとわりついていた。こいしと違うのは第三の眼が赤い事と閉じているこいしに対して開かれておりギョロリとした黒目が見える。

さとりは自身の膝に顎を乗せて甘える一匹の大きな犬を撫でつつ、お燐に目を向けた。鬼の四天王を斬ったなどと信じ難かったのだが、お燐から読み込めるイメージでどうやら事実らしいと分かった。

「はじめまして。川上という、以後宜しくお願いする」

「はい、はじめまして。私は地霊殿の主の古明地さとりと申します。ウチのペットがお世話になったようで」

川上はこいしの手から離れ二歩程下がりつつ挨拶をする。さとりも返礼しつついつものように出方を考えようとして川上を第三の眼で見据えて、顔に当惑が浮かんだ。

何なのこれ

川上は読心能力の程を見ようとしているのか、さとりを観察するような眼で見ている。しかし逆にさとりは第三の眼を背けたくなった。

煩過ぎる

川上の意識から入ってくるのは凄まじい情報量だった。周囲の環境から雑多に支離

滅裂に無差別に彼は情報を取り入れまくっており。いや、彼自身コントロール出来ず情報を拾ってしまうのだろう。無茶苦茶だ、人間より遥かに優れた感覚を持った猫でもこんな意識をしていない。

まるで混線しまくっているラジオである。見ているさとりの頭が痛くなる情報の氾濫。川上は繋がってしまっている以上仕方ないとはいえ良くオーバードローを起さないものだ。

これでは彼自身の言語での思考を拾い上げるのは困難だった、何となくイメージは捉えられるが。

「……どうやら私の力を見たいみたいです、申し訳ないですが、口での会話でいいでしょうか？ 貴方の思考は酷く読みにくいのです」

「承知した」

さとりの言葉には苦渋が滲んでいた。当然だろう、人の心を暴き、秘すべき思いに土足で踏み込み相手に疎まれ、忌われるのがさとりのアイデンティティなのだ。それが活かせないとあっては。

さとりにはわかるのは川上が色々な意味で人として破綻している事だ。

いや、さとりは思い直す。表面的な意識は読み切れなければより深い深層心理。無意識と言ったレベルに踏み込む方法がある。得てしてトラウマと言われるものの原因は

そこに封印されている事が多いのだ、もつとも本人も大抵は自覚していないレベルのものなのがさとりにとつては使いにくいが。

「失礼」

さとりは一言だけ、断つて両の眼を閉じて第三の眼に集中して川上のより深い所に潜る。

意識を超え前意識へと。さらに潜り無意識へと。そこでも異常を感じる、普通意識の情報量は少なく。無意識は膨大な情報が支離滅裂に存在しているのに、この男はまるで逆だった、むしろ無意識に異様に何も無いのだ。

だが、さとりは深い深い地点に一つのイメージを見つけた。恐らくこれがこの男の原風景だ。さとりはイメージを覗く。

低い視点だった。どこかの家のダイニングだろうか、椅子が一脚転がっていた、前には女性が一人倒れていた。手元を見る。血塗れの果物ナイフをやはり血塗れの小さな手が握っていた、ポタポタと血が落ちるのは果物ナイフからだけではない。この腕自身からも出血しているのか。

女性は頭から血を流し、喉笛にも刺傷を負って夥しい血を流していた。ヒュー、ヒュー、と傷から漏れる呼吸音が聞こえた。女性は必死に顔を上げる、何故かその女性があんな顔をしているのかは見えなかった、認識を阻害されてるかのよう。

ただ口元は見えた、血を零す口が動き

「……………」

何かを言った。

そこでさとりは両眼を開き戻ってきた。こいしは相変わらず何が楽しいのかわからないがさとりを見て笑っており、お憐は困惑と心配が入り混じった様子で川上とさとりを見ていた。

「……………母親を」

さとのりのその一言に川上は表情も変えなかつた。それで思う、やはり自覚出来ていないのだ。

さとりは珍しく少しの同情の混じった眼で川上を見た。彼女は正しく理解したのだ。川上はもう終わってしまっている事を。

第120話

幻想郷、地霊殿

古明地さとりの私室に集まっているのは、四人。古明地さとり、古明地こいしの姉妹。及びペットの火焰猫燐、そして勝手にペット候補にされている川上。

「それでお姉ちゃん、飼っていい!」

言語思考が読みにくいという、極めて扱いにくい川上相手にさとりは少々困惑気味だったが、構わずこいしが勢いよく訊いた。

「ええ、構わないけど。ただその人は戻る人があるみたいよ」

「やったー!」

さとりは帰るところ、ではなく戻るところと言った。

さとりの屋敷では飼うと言ってもさとりもこいしも放任主義である。放っておいて居つくか懐くものだけが屋敷にいる、川上は居着かないだろうとさとりにはわかった。ペットにしようがペットにしなからうがそんな取り決めはこの男には関係ない。

こいしは構わないと言うところだけ聞いて喜んでいた。こちらは何も考えていないのだろう。

「川上さん、ですか。ここから戻るのには遠いし少々遅い時間です。今夜は館で休んで
いってはい」

「構わないのか？」

川上は話の流れに興味ないように眠たげな目で視線を外していたが、さとりの言葉で
さとりは視線を戻して返答をした。川上が時計に眼を落とすと確かにもう19時近い。

「構いません。貴方もペットですので館はある程度好きに使って構いません」

「それにお燐もその方が喜ぶので」

その言葉にはお燐は顔を赤くしつつも眼を伏せて平静を繕っていた。

「感謝する」

川上は礼を言つて踵を返した。スタスタと歩き、失礼する、と一言残して退室した。
それまで何が楽しいのか笑顔だったこいしはふと真顔になり、ふらふらとやはり部屋を
出て行つた。

「あの、さとり様。読みにくいというのはい？」

最後に残つたお燐がさとりは問いかけた、さとりはお燐を一瞥した。どうも妹の言つ
てた事は本当のようだとさとりは思った。お燐は川上に入れ込んでいる。

「何らかの能力のようですね、単純に意識に情報が氾濫して彼自身の思考が読みにくいのか」

「そんな事があるんですねえ」

お燐は驚いたような感心したような声を出した。自身の主人が読めない相手など妹のこいしくらしいか思いつかなかつたからだ。

「でも全く読めないわけじゃないんですよね？」

「表面的なイメージがわかる程度ね、彼は少し疲れたから休みたがつていたわ」

「どうやら屋敷に泊まつていつていいと言つたのは川上を氣遣つての事だつたようだ、いやむしろお燐を氣遣つてか、そのどちらもか。」

「あのつ。じゃああた、皆をどう思つてるかくらいなら！」

いきなり尻尾を立て真つ赤な顔でいっばいいっばいに言つたお燐に少々驚きつつさとりは、言葉を返そうとして。

「やつぱりいいです！失礼します！」

返す暇なく、そう言つてお燐は出て行つた。知るのが怖くなつたのか、知るのはフェアではないと思つたのか。

さとりはギシリと椅子に背を預けて息を吐いた。下から一匹の犬がクリクリとした目でさとりを見上げていた、その犬は純粹までの好意をさとり伝えていた。

その犬を撫でつつ思う。お燐の質問、中々答えかねるものだ。彼は我々に思う所がないわけではない。

漠然としたイメージだが、川上はさとりには好奇、こいしには脅威を感じていた。一

番彼が好意に近いもの抱いていたのはお燐であった。

しかし、だからなんだというのだ。川上は自分と他人を絶望的なまでに分けて考える人間だ。

ましてや彼の深淵を覗いたさとりには明確に分かった。彼はある意味平等だ、残酷なまでに。彼の剣は一切合切を差別せずには断ち切る。無論お燐も。

一聞すると耳触りのいい平等という言葉。しかしそのなんと残酷な事だろうか。しかし、しかしだ。さとりが彼の滅茶苦茶な心の中で見つけた一人のイメージ。

平等な彼の中で例えどんな意味でも特別な人がいるとしたら――

川上は退室した後、館のラウンジに出た。とは言ってもソファアールとどこか武骨なテールブルが並び、殺風景なものだったが、彼はこの飾り気のない場所が気に入った。

野太刀を背から降ろしてソファアールに野太刀を抱えたまま横向きに寝っ転がるとそのまま寝た。

暫くして遅れてお燐が足音と気配を殺して、ラウンジに現れた。川上が熟睡している様子を把握する。

彼女は自身もそうであるように、直感的に川上はちよつとした事で起きてしまう事を

理解したので、彼を起こさぬように慎重に彼の寝ているソファアの隣のソファアに座つた。

隣とはいえ川上の寝ている場所から遠くもないが近くもない距離。彼女は穏やかな顔で静かに寝息を立てる川上を眺めていた。

いつも陰鬱な雰囲気を纏っている川上は、何処か剣呑な眼を閉じて寝入っている姿は棘もなく普段より少し幼げにも見えた。

お燐はまた普段とは違う顔の川上を飽きる事なく見ていた。

しかしコツ、と誰かの足音がしてお燐は顔を上げる。綺麗でどこか幼気な声でした。「うにゅ? お燐、帰つてたの」

その女性は少し癖のある艶やかな長い黒髪に緑のリボンをしていた。背は160代後半はあるだろう。高めの身長に綺麗な顔立ちの美人だったが、浮かべる表情が何処かあどけなく、顔立ちの割に幼い印象を受けた。

服装は白いブラウスに緑のスカートという出で立ちだ。胸元はかなり大きく隆起しており服が窮屈そうに見えるほどの胸の大きさだった。

特に印象的なのは隆起した胸元の上部に露出した深紅の大きな異形の瞳だ黒い瞳孔が縦に割れている。まるで大きな楕円形のキャッツアイルビーのようにも見えて、不気味にも美しくも見えた。

背中には髪と同じの文字通り鴉の濡れ羽色の大きな羽を持ち、上から白いマントを羽織っていた。

お燐の親友であり、同じペットでもある霊鳥路空、通称はお空であった。たまに間欠泉地下センターで仕事をしている。

お燐は口の前で指を立て静かにとジエスチャーをした。起きてしまう。

「こいし様から聞いたよ、その人がお燐のお嬢さん？」

一応意を汲んだのか、声を落としてゆっくりお空は歩み寄って来たが、お燐はわたわたとジャスチャーを追加する。それじゃあ駄目！起きる！起きる！

起きた。川上は横になったまま薄目を開けてお空を観察していた。ごろりと仰向けになり懐からゴールデンバットを取り出し啜えた。

川上は火を付けて深く一服した。

第121話

地霊殿、ラウンジ。

お空の登場にすっかり目が覚めてしまった川上は体を起こし、足を組んで何処か横柄な格好で煙草を吹かしていた。

紫煙を吐きつつ、川上はその昏く眠たげな眼付きでお空を観察した。座ったまま立っているお空を見るので、下から睨めつけるような不吉な目線となった。お空はそれだけに僅かに眉を顰めた。

「煙いー！」

煙草が嫌いなのか、川上の目付きが気に食わなかったのか、お空は煙草を吹かす川上に文句を言った。

「ああ、すまない」

川上はそう言つて最後にもう一口だけ吸うつもりで煙草を啜えた。お空は川上が煙草を消す意思がないと思つたのかツカツカとローファーを鳴らして歩みより、川上の啜えた煙草に手を伸ばした。

川上は伸びて来た手を左手に握つた鞘ぐるみの野太刀の柄で払つた。近づかれると

お空からウツデーに果実のニュアンスが混じった甘い匂いがした。
乳フランキンセンスの香り
だった。

「消すから、触るな」

その川上の物言いも癩に障ったのかお空の目付きが険しくなる。

「はい、喧嘩しないの」

少し険悪な空気になった、その二人の間にお燐が割って入る。

「私こいつ嫌い！」

お空は言った。彼女は外見の割に精神年齢が幼めで人の好き嫌いも極めてハッキリしており、また態度も明け透けだ。川上は嫌いなタイプに分類されたい。

川上は煙草を携帯灰皿でもみ消すと立ち上がった、流星に煩わしくなったのか。

「あつ、お兄さん！」

気を悪くしたのかとお燐は川上に声を掛けたが、川上は背中越しにひらりと一つ手を振り、ラウンジから出て行った。

「どうしたんだい、お空？いきなりあんなに突っかかるなんて」

お燐は少々困惑したように聞いた、態度が明け透けなお空にしても今回は少々過剰に思えた。

「だって眼付きが気持ち悪いし、それに何か偉そう」

お空もまた感覚的な判断をするタイプなのか、一見で川上に嫌悪感を抱いたようだ。「そうかねえ、いい眼だと思っただけだね」

「お燐あんなのがいいの？お婿さんは別の人にしなよ」

お空の言葉に、お燐は既につがい扱いされてる事に思わず赤面しつつも笑みが零れた。何処か苦味のある笑みだった。

「あたいはあの人がいいんだよ、それに」

「それに？」

お空の問いにお燐は笑って言った。

「どちらにせよ、相手にされてないくらいあたいでわかっているから。大丈夫だよ」

どこか悲しげなお燐の様子にお空もまた心を痛めたのか、憤った様子を一変させて言った。

「なんかそれ、寂しいよ」

「あたいはずっと死体を相手にしてきたからね、一方通行には慣れてるよ」

お燐はそう言って、少し寂しそうに笑った。

そして親友のお燐にこんな顔をさせる川上の事をお空はやはり好きにはなれそうに無かった。

川上は眠りは妨げられてしまったので、改めて何処かの個室で休眠を取ろうと思つたが空腹を覚え、うろついていた。

薄暗い館の中には猫だのオウムだの雑多な動物がポツポツと見られた、その割には館内は不衛生な様子は見受けられなかったが。

ふと、川上はエントランスの死体オラジエの事を思う。あれは良く館内の鳥に食べられないなと。

暫しうろつき食堂、及びそこからつながるキッチンを見つけて勝手に中を漁つた。

硬くなったバケツトがあつた。後は生肉があつた、どうやら人肉ではない、鹿肉か？肉の質感だけで人肉がわかるのは紅魔館住まいならではか。

あるいは川上はそれより前に人肉の質感くらい見分けられたかもしれない。

川上はナイフで肉を適当なサイズに切り塩や香辛料で簡単に下ごしらえできると火を通した。極めて簡易的なステーキ。

バケツトも炙り、フォークだけ借りる。食堂に一人で座りピツチャーからグラスに水を注ぐ。パンと肉と水だけという簡素な食事を始めた。

川上は自前のフォルディングナイフで肉を切り口に運ぶ、最低限の味付けとぞんざいな調理の割には味は悪くない、肉の質と熟成具合が良かったのだろう。

短時間で川上は食事を腹に納めてカン、とフオークを置いた。口を拭い、懐からゴールデンバットを取り出して啜える。最後の一本だったのか彼はソフトパックを握り潰した。もう一箱携帯していたのは幸いであった。

川上が遠火で着火した所に食堂に入ってきた人物がいた。

古明地さとりであった。彼女は眠たげな両の半眼と第三の眼で食卓に座った川上を一瞥した。

「食事中、いや食後でしたか」

「事後で悪いが食料と厨房は使わせて貰った」

さとのりの言葉に川上は紫煙を吐いてそう答えた。

「構いません、一応貴方もペットなのでこの館のものは勝手に食べて下さい。決まった時に餌をあげるわけではないので」

動物を飼う姿勢としては問題がありすぎる言葉のように思えたが、川上はそこには突っ込まず礼を言つて頭を下げただけだった。

「食後ならお茶でも飲みますか？紅茶ですが」

さとりは茶を飲みに来たらしい。わざわざ自分で茶を淹れるとは館の主人らしくはないが、それについてとばかりに川上にも淹れてくれるつもりらしい。川上はふと一応現在の自分の主人の赤い悪魔を思い出した。

「いや、差し支えなければ俺が淹れてもいいだろうか？」

川上の提案にさとりは眠たげな眼を僅かに見開いて少し驚きを示した。

「じゃあ、頼みます」

川上は煙草を携帯灰皿でもみ消し立ち上がりキッチンに消えた。さとりは大人しく食卓につき小脇に抱えていたハードカバーの重そうな本を開いた。

川上はキッチンを再びあさり茶器と茶葉を用意して、ケトルでグラグラにお湯を沸かして紅茶を淹れる。砂時計があつたのでちゃんと抽出時間も測れる。

川上はカップを三客用意して、十分な時間抽出すると茶こしストレーナーを使いカップに均一に回し注ぐ。

さとりは三客のカップを見て、次に第三の眼を川上に向け混線しまくった意識の中から情報を拾う。そして自分のすぐ隣の席に目を向けた。居るのだと分かつて初めて認識出来た。

「こいし、いつの間に」

「うん、ずつといたよ」

さとりの言葉に応じたのはこいしであった。彼女は川上が食事中からここにいた。さとりが来ると彼女に寄り添うように隣の席に移動した。

「お兄さん、こつちを一度も見ないから気付いてないのかと思った」

こいしは爛漫な子供らしいとも感情を抑えた落ち着いた調子とも取れる不思議な声色で川上に言った。それに対して川上は特に答えなかつた。

こいしは自分を見てくれる稀有な存在に出会つた。彼女を常に意識してくれる存在は貴重であり、例え認識して貰えてもすぐに忘れさられる。そんな自分を意識出来る相手に出会つたというのに、何故かこいし自身の心は対して動かなかつた。

彼女はまさに無意識で理解しているのかも知れない。目の前の男にとつては認識しようがしまいが、路傍の小石はあくまで小石以上でも以下でもないという事を。ただ躓かないように気をつけられるか否か程度の差。

川上は二人の前に熱い紅茶を置いた。自分の分も手元に寄せる。

「ありがとう」

「頂きます」

さとりとこいしは口々にそう言つてカップを取り上げた、こいしはカップを両手で包み込むようにして息を吹きかけ冷まし、さとりは熱い紅茶をゆつくりと口にした。川上はカップの縁に指で触れて熱さを見ると紅茶には口をつけず新しいゴールデンバツトの封を切つた、トントンとソフトパツクを指で叩き一本取り出した。

「美味しいですね」

一口飲んで甘みと僅かな渋み、爽やかな香りを楽しみさとりはそう感想を漏らした。

目の前の男からは想像出来ない意外な腕前であつたが、第三の眼で観察して納得する。なるほど、彼女の影響か。

「本当だ、美味しい味がする！」

続けて少し冷ましてから口にしたこいしが少し妙な言い回しで感想を言った。

「なら良かった」

川上はちつとも良いとは思つてなげな口調で言つて着火した煙草から一服した。

さとりは第三の眼を川上から外して、本に目を落とした。こいしも特に喋らず笑顔で茶を楽しみ、川上も無言で喫煙していた。

暫し三者三様に茶を楽しんでいた時、ふと趣にさとりが本のページを捲りながら口を開いた。

「この世でもつとも恐ろしい事は何だと思えますか？」

その問いは川上に向けられていた。

川上は考えるように視線を上に向けそこで初めて冷めてきた紅茶を口に運んだ。

「死ぬ事でしょうか？あるいは死ぬ程の責め苦を受けても死ねない事でしょうか？」

川上の返答を聞かずにさとりは続けた。問いかける形であるがどうも彼女の中にすでに答えはあるようだ。

「君は何だと思う」

川上は煙草をもみ消しながらその答えを尋ねた。さとりの答えはやはり決まっていた。

「自分が世界にとって、他人にとって、絶対的に無意味である事です」

それは紛れもなく恐ろしい事であった。

人間ならどんな者でも自身に何らかの価値があると考えなければ生きてはいけない。その為に人々は必死で周囲に他人に自身の価値を認めて貰おうとする。

妖怪にしてもそれは同じなのだ、人を襲い人を喰う、なんの為か。そうして人に恐れられる事が彼らの存在価値だからだ。

さとりも同様である。彼女は人の心に土足で入り込み暴き立てる。それはただ単純に命を取る妖怪以上に厄介で万人に等しく恐ろしい行為、当然嫌悪されて然るべきである。

彼女も嫌われ者としての自分の在り方に思う所がないわけがない。辛くないわけがない。事実妹のこいしは嫌われ者としてのさとり妖怪の自身を厭み心を閉ざした。

だが、さとりにはそれが出来ない。それだけは出来ない、何故か？

簡単である。嫌われ者として生きる以上に、自身の嫌われ者としての価値を無くす方が余程恐ろしいからだ。

だからさとりは嫌われ者としてあり続ける。自身の価値を無くしたくないがため。

しかし……目の前のこの男は、ある意味で自身の存在価値を投げうち全てを無くした
こいしに似ている。似ているが似ているだけで絶対的な違いがある。

「貴方はそれを受け入れて、それでも生き続けているのですね」

川上はその言葉に答えずに、冷笑を一つ浮かべて紅茶を一口飲んだだけだった。さとの口元にも彼に似た笑みが浮かぶ。

こいしは話に興味がないのか、川上が傍に置いた煙草を一本勝手にとり、紙を破いて葉をばらしていた。

価値を見いだせもせず

それでも何故

生き続けているのですか

さとりは両の目を瞑りカップの紅茶を飲み干した。

第122話

地底での夜は明けて、朝。

火焰猫燐には予感があった。

ほぼ一番に早く起きた燐はあの男が使っていた部屋をノックして返事がない事を確認して中に入る。

誰も居なかった。

お燐は館中を探して回る。いや探していたのでなく確認していたのだろう。彼女はすでに分かっている。

あの猫はここには居つかなかった。

やはり居ないのだと確認し終え、お燐が最後に立ち寄ったエントランスホール、そこにそれはあった。

おそらく年の頃は二十代だろう、綺麗な顔立ちをした女性は襟元が血に染まっていた。色を失っているが眠っているような安らかな顔だった。

おそらく地底に少数住む訳ありの人間か、お燐が確認すると首筋を断たれたのが死因のようだ。その刀痕をお燐が見間違える訳はない。

紛れもないあの男からの感謝の念を形にしたもの。お燐は言い知れぬ激情に駆られて死体を後ろから抱き起こして強く掻き抱いた。

衝動が喉の奥から溢れそうになりお燐は歯を食い縛る。やがて喉元を過ぎるとお燐は透明感のある無表情になった、無表情だが人間味のある綺麗な顔だった。

「……また、いつか」

そう小さく呟いたお燐の言葉聞いていたのは、彼女の腕の中の女性とエントランスホールの上で磔刑となった少女の屍だけだった。

それは一カ月前の出来事。

太陽の畑。

その名の通り一面に向日葵サンフラワーが咲き誇る畑だった。

夏らしい燦々とした日差しの中を一人の女性が歩いていた。

肩より下程度の長さの癖のある緑髪。顔立ちは綺麗に整ったやや童顔の美人である。常に微笑みを湛えていたが真紅の瞳はやや鋭くきつきさを感じさせた。

白いカッターシャツ、首本には黄色のリボンを付け下は縁にフリルをあしらったチエツク柄の赤いスカート。さらにスカートと同じ柄のベストを羽織っているという

出で立ちであった。真夏の日差しを避けるように白い日傘を彼女は差していた。

彼女は風見幽香と呼ばれる花を愛する妖怪であった。ただしその力量、妖力ともに有象無象の妖力のそれではない、大妖怪である。

あまりにも強大すぎる己が故にその他大勢に何も感じる所がない。何処の組織にも属さぬ実力主義者であり個人主義者の妖怪らしい妖怪だ。

ふと幽香は歩みを止める。

一際背の高い向日葵の下。その生命力を見せつけるように太陽の下で咲く大輪の花を見上げる少女がいた。

その向日葵の半分程度の背丈しかない赤と白のコントラストが眩しい巫女服の少女は博麗霊夢だった。

「お久しぶりね、霊夢」

幽香は意外な所で会えた珍客に笑みを深めて霊夢に挨拶した。彼女はその他大勢には興味はなかったが逆に力あるものには関心を示す。

博麗霊夢は幽香が執着を見せる珍しい人間だ。

「ええ、久しぶり……相変わらずあんたはこの花が好きなのね」

霊夢は幽香に対して一瞥だけして、一輪の向日葵を見上げたままそう返した。

「ええ、大好きよ。霊夢は好きじゃないの」

「どうかしらね、この花は私には少し眩し過ぎるわ」

ふ、と霊夢は小さく笑ってそう言った。彼女らしいニヒリズムだと幽香は思ったが。「そんな事ないわ、向日葵と貴女は絵になっっているわ」

幽香はそう言った。彼女は先程から見惚れていたのだ、一輪の向日葵を見上げる霊夢が絵画のように美しかった。

「その花の花言葉は知っている?」

「私は貴方だけを見つめる」

「あら、知っていたのね」

幽香の問いかけに霊夢はすぐに答えた。少々意外な思いで幽香は霊夢を見つめる。

「ガラじゃないわね」

その言葉は幽香に向けたものか、自身に向けたものか。霊夢は冷笑を浮かべて向日葵から視線を切った。何処か冷めた霊夢が幽香は好きだった。

「冷たいお茶でもどう?」

「頂くわ」

そう言葉を交わして二人は共に歩き出した。

ふと、そんな一カ月前の邂逅を思い出しながら風見幽香は日傘を差し歩いていた。も

う初秋になる、しかし朝の日差しはまだまだ厳しさがあつた。

太陽の畑。

かつては生命力に溢れた大輪の花を咲かせていた向日葵は枯れ、葉も茎も茶色く乾き、かつての大輪の花も花びらはとうに散り頭を垂れて成熟した種を零していた。しばらくしたら完全に朽ちるだろう。

美しく咲いていた花が枯れゆく時、人は何を覚えるだろうか、美しいものが失われる寂しさか、無情さか、花が枯れるとき人はそれを見なければならぬ。

幽香もまた同様だ、彼女は一年中花を求めて移動する。しかし彼女は自身が愛でてきた花が枯れゆく姿を見届けてからいつも次の花を求めぬ。

そろそろ、だろうかと思ふ。次は秋桜が良いだろうか。そんな事を思つていた時一カ月前、彼女が見上げていた向日葵、今は枯れて種を零すのみの枯れ花を見上げる一人の人間を見つけた。

「……霊夢？」

まだ登り切らぬ日差しを背負いシルエツトしか見えぬその人物に幽香は何故かそう呼びかけていた。一カ月前の彼女が被つた。

いや

霊夢であるはずもなかった。向日葵の下にいたのは赤茶けた染みを至る所に付けた

凄惨な礼服に身を包つみ、背に野太刀を背負つた若い男だつたからだ。

如何に逆光とは言え、背格好も性別も違う相手を何故一瞬でも霊夢と勘違いしてしまつたのか。幽香は思わずクスリと笑つた。

「おはよう、知り合いに似ていたから間違えたの。失礼したわね」

「おはよう、構わない」

幽香の挨拶と謝罪に川上は短く応じながら煙草を啜え、マッチを擦つて着火した。

二人はそれ以上は言葉を交わそうとはせずに、幽香は日傘を折り畳むとそのまま、朝日の方向に歩きだす。川上もまた日を背負つたまま歩み始めた。

幽香は眼を動かさずに視点を動かし川上を観察した、相手に探りを入れてる事を気付かれないための技。幽香は血生臭い川上の姿に舌で一つ唇を舐めた。

二人の距離は近づいていく、幽香は口元の笑みを深めた。

間合いから僅かに外れた所まで両者の距離が詰まつた瞬間、幽香は左手に提げていた日傘を踏み込みながら川上に向け横殴りに振るつた。相手は長大な野太刀一口、しかも鞆の内背にある。間合い、タイミングともに幽香だつた。

しかし、次の瞬間首から鮮血を溢しながら横に倒れいくのは幽香で……

そんなイメージの前に幽香は結局何もせぬまま両者はすれ違つた。

軽い探り針程度に殺気を当てたが結果はイメージの通り川上に隙は無く、幽香は仕掛

けられなかった。

「やるじゃない」

すれ違い様愉快そうに幽香は相手にそう眩き、川上は何も答えなかった。

二人はすれ違つて行つた。

第123話

紅魔館

咲夜は朝食の給仕を終えて、清掃でもしようと思つて廊下を歩いてた。仕事にもかかわらず案外のおんびりした様子だが、彼女は必要ならいくらでも時間を作る事が出来る。

歩きつつ咲夜は物思いに耽つていた。

昨日から川上の姿は知れず、一晚中帰つて来なかつた。なんだかんだ行方知れずに一日中居なくなる事は初めてに近い。

彼は元気だろうか、帰ってくるだろうか。

レミアアは懐いている相手の元からは離れないと言っていたが、咲夜自身はそれについてあまり信じられないところがあつた。

懐かれている、というのは、まあ、咲夜自身も、そうなのかも程度に自覚していた。しかし、咲夜にはあの男はやはり根無し草に思えるのだ。

何処にも帰る場所などなく、故に何処にいても良い。

何故そう思えるか、簡単だ、咲夜自身がかつてそうなのだったのだから。迫害され続けた咲夜には世界の何処にも居場所などなく、故に何処にでも存在出来た。

それに離れないといつても、死んでしまえば離れないも何も無いのだ。

彼は異常者かも知れない、化け物かも知れない。しかし咲夜は思う、川上も自分となら変わらない人間なのだ、死ぬ人間だ。

あれを自分とは別物と考えれば、それは咲夜自身を迫害してきたおぞましい人々と同じになる。咲夜にはそんな事が認められる訳がない。

そんな事を考える咲夜だが、川上も自分と同じ人間であるのなら、そのおぞましい人々もまた咲夜となら変わらない人間であることに彼女は気付いているだろうか？

ふと物思いに耽つて伏せていた目線を上げるとそこに彼はいた。

どんな修羅場を潜り抜けてきたのだろうか、川上は髪はボサボサになり僅か一日でくたびれた礼服は赤茶けた血痕塗れになっており、刀も喪失したのか野太刀一口だけしか身に帯びてなかった。

「今戻った」

そんな姿で彼は火の点いてない煙草を啜え、いつもと同じ澀んだ眼に涼しげな表情で何でも無いように言った。

咲夜は口を開き、しかし何を言うべきか迷った。館の管理職としては一応使用人でありながら無断で職場を一日放棄した事を追求すべきだったか。

しかしもしかしたらもう帰ってこないと思つていた男を前にかけるべき言葉が見つからずに結局口を閉じた。

彼女はツカツカと川上に歩み寄つた、歩みを止めずそのまま零距离まで入り込み前から背に腕を回し川上を掻き抱いた。

「……お帰りなさい」

そうしてその状態で掛けた言葉は結局これだった。川上は動かない。彼からは血生臭と死臭、ヤニの匂いが混じつていた。咲夜は背に回した腕で強めにぎゅつとして川上の状態を確認する、痛そうな様子はなかった。咲夜からはレモンに僅かに若草のニユアンスが混じつたメリツサの匂いがした。

「怪我はない?」

「無い」

咲夜の確認に川上は短く答えた。幸いに彼は怪我らしい怪我はない。良かった。咲夜は背に回した手で川上の背中を優しく撫でて言った。

「そう、じゃあ着替えて。身支度を整えたら仕事して」

「わかった」

川上の了承の声を聞いて咲夜は川上を解放した。川上はいつもと変わらぬ温度の籠らぬ眼で咲夜の顔を一瞥だけして、そのまま私室へ向け歩み去って行った。

咲夜は思う、あれでも同じ人間なのだ。顔には出なくても戸惑いや疑問もあるはずだ。

咲夜も踵を返しかけ、床に落ちてゐるモノを見つけて思わずクスリと笑った。落ちていたのは先程まで川上が啜えていた煙草だった。

川上は私室に入つて一息ついた。しかし彼は一人では無く一人のメイドを引き連れていた。

川上により名を与えられた紅魔館の使用人の一人、メイドである妖精アニスだった。

今日はアニスがいつものように勝手についてきたのではない。珍しい事に廊下ですれ違つたアニスを川上が引つ張つてきた。

「先生。服汚れてるよー」

「着替える。少しまっついていってくれ」

アニスの指摘に川上は内ポケットや懐に入れていた煙草やナイフなど暗器の類いをテーブルに並べた。

川上はクローゼットを開け野太刀を納めると乾いた血で汚れた服を脱ぐ。下着まで脱ぎ去り全裸になる。彼の身体は必要以上の肉付きでは無く、もちろん不足した肉付きでもないしなやかさを感じさせる無駄のない身体付きだった、左の肩口から胸にかけて

刀疵が一つ走っていた。

川上は新しい下着とカッターシャツ、礼服などを取り出して着替える。最後にノーネクタイで上着に袖を通した。

そして再びクローゼットに向き直る。安定が折れた今別の差料を使わなくてはいけない。幸いにして予備の刀はまだあり全て刀剣としての水準は上々だ。

新々刀、固山宗次作。裁断名『二ツ胴土壇入り』

古刀、青江派次吉作。

新身、多々良小傘作。『無銘』

川上が少し考えて手にしたのは固山宗次だった。尋常のものより重ね厚く、身幅も広く。まるで合戦期に打たれた戦場刀といった体配の刀はゴリっとして手持ちが重く頼もしさを感じさせる。

川上は柄は半太刀拵のを付けたまま白鞘に入れて休めていた宗次の鞘を払い改めると半太刀拵の鞘に納めて腰に差した。

そしてクローゼットに納めていた、もう一振りの刀剣を手にした。

川上は誰かも知らないが、切った相手から頂戴した脇差。

刃長、一尺四寸強。肥後守秦光代の作刀だった。重ね、身幅尋常の落ち着いた肌をした綺麗に焼けた直刃の新刀だった。

川上はアニスに眼を向けた。暇そうにベットに座り足をブラブラしていたアニスはそれに気付き欄とした眼線で応じる。

「これをやる」

川上はアニスにその脇差を押しつけた。

「切れるの？」

刀を抱いて爛々とした眼で川上を見てアニスは言った。

川上は頷き、スペアの手入れ用具も渡して取扱と手入れを教えた。

「それは人殺しの道具だ」

「うん」

それが終わった後にそう告げた川上にアニスは頷いた。軽んじるのでもなく、重くみるでもない顔付きだった。

「だから必要ならそれで斬り殺せ」

川上の言葉と刀を受け取り

「うん。ありがとう、先生」

アニスはそう答えた。

川上は立ち上がりアニスの頭にポンと一つ手を乗せた。

「強くなれ」

最後にそう言って川上は煙草を啜えて自室を出て行った。

第124話

幻想郷

博麗神社からも少し離れた森林でそれは起こっていた。

里に幾人かいる退魔を生業とする稼業の術者。その術者の前衛として働く武術家の二人組。

そして三十代後半くらいだろう和服の婦人とその子供である兄妹の三人。

三人の家族は森に用事がありどうしても立ち入らなければならなかったのだが、女子供だけで妖怪も出没する森に入る危険は理解していた。

故に術者二人組である。彼らは三人の家族に森での護衛を頼まれて、それを了承した。もちろん仕事として報酬を受け取る。

そして、そんな五人の前にもう一人の人物がそこにはいた。いや、人間ではないので人物というのは不適切だったかも知れない。

金色の髪をボブにして赤いリボンをつけ、白黒の洋服に身を包んだ幼い女の子……に見える妖怪はルーミアであった。

彼女は両の腕を広げた状態で両の手首に札を巻かれ動けなくなっていた。捕縛結界

の類いか、彼女は空間に張り付けにされたように動けない。

彼女は空腹に耐えかねたところ五人組を見つけ襲いかかり、返り討ちにあったのだつた。

「大丈夫ですか？」

退魔の術者は左腕を負傷して血を流していた。それを見て雇い主の女が気遣わしげな声を掛けた。

「大事ありません」

術者は抑揚なく答えた。隣では前衛の武術家が油断なく刀をルーミアに向け構えている。

「さて、言い残すことはありませんか」

「聖者は十字架に磔られました。……なんてどう？」

「貴女は聖者ではないでしょう」

術者の処断の声に。それでもルーミアは笑ってふざけたように返す。しかし術者はそれに大真面目に答えただけだった。

「あ、あの」

「何ですか？」

後ろから口を出して来た女に術者は穏やかな声色で応じた。

「流石に、殺してしまうというのは……」

女は相手が妖怪とは言えまだ幼く可愛らしい少女の姿をしたルーミアに憐れみを感じたのだろうか。無理もない、人間は、豚が死んでも何とも思わないが、子犬が死ねば無関係にもかかわらず悲しむものだ。

可愛いというのはそれだけで強力な武器足り得る。

まして女にも娘がいるのなら同情も無理からぬ所だった。

そこで初めて術者は振り返り女を真顔で見据えた。

「殺します」

はつきりと告げた。

「姿形に惑わされてはいけません。相手は脅威、殺さなくては殺される。手心を加えた結果貴女はご自身のお子様が悪される事になるかも知れない、その後悔しても遅いのです」

術者は慇懃な口調で淡々と道理を説いた。女はそれに何の反論も出来なかった。

「その通りだよ」

しかし、同意を口にしたのは何と今から殺されんとしているルーミアだった。

「この人が邪魔しなければ私はその男の子も女の子も貴女も御飯にしてたの、がおがお」

ルーミアはそう言つて威嚇するようにおどけてみせた。

「貴女達が普段肉魚を食べるのと同じ。でも貴女達は誰からも責められず、私達は御飯を食べただけでこうして殺されるの」

ルーミアは碟にされたまま口の端を吊り上げ三日月のような笑みを浮かべて言った。

「本当の化け物は貴方達と私どっちなんだろうね？」

その言葉に女はぶるりと震えた。目の前の妖怪への恐れのためか、それとも自身の中の何かを恐れたのか。

「言いたいことはそれだけですか」

しかし、術者は一切表情も変えず、さつきと済ませてしまおうと判断したらしく傍の相方の武術家に合図をした。

武術家が刀を構え一歩前に出た瞬間。

術者が半径五間の距離に張っていた探知結界に引つかかかた者がいた。術者が不意を打たれる事を避ける為に張っていた結界。

術者がそちらに向き直るより、闖入者が藪を飛び出し五間の距離を潰す方が早かった。瞬きの間に術者は首筋を断たれ血飛沫を上げながら崩れ落ちる。

その瞬間家族三人は何が起きたのか理解が追いつかなかつたが、武術家の反応は早かつた。考えるより前に闖入者に向け刀を取り上げた。

しかし、頭上に振りかぶった両腕は肘の先から半ばが無くなっていた。

武術家は両腕が疾うに断たれているのに気付かず、刃を持たぬ両腕を振り下ろし。相手の袈裟懸けを深々と浴びて鎖骨と肋骨、動脈と胸腔まで斬り下げられた。声も上げず仰向けに倒れ死んだ。

ピツ、と愛刀固山宗次を一つ血振りしたのは、黒い礼服に身を包み黒髪に不吉な目付き。背に野太刀を背負った男。紅魔館使用人の川上。

事ここに至ってやっと家族三人は致命的な事態に陥っている事を理解し始めた。子供たちは狼狽したように下がり、女は逆に子供を守るように前に出たが身体は震えていた。

「すみません、私達は」

無防備に対話を試みた女の判断力の不味さは語るに値しないだろう。彼女の言葉は途中で途切れた、川上は聞く耳を持たず女の首を落とした。目撃者を残すつもりもないのだろう。

ブピューツ！と首の断面から激しく血を噴きださせながら女の身体は膝をつきそのまま仰向けに倒れ、首も無いのに手足をバタバタさせるといふ気味の悪い動きを見せた。まるで首を刎ねられた鶏が胴体のみで走るが如く。

女の息子であるまだ10才程度であろう少年の判断力は特筆すべきものがあつた。

彼は母が殺された事を理解すると呆然とするでもなく、激情のまま川上に突っ込むのでもなく、武術家を取り落とした刀に走り拾おうとした。

彼は走りながら足元の石を拾い川上に向けて投げる、しかし。

拾うのが間に合うはずもなく、石を腕で受けながら間合を詰めた川上に一太刀で斬り伏せられ即死した。

判断力、行動力も確かだった。しかし足りなかったのは力量か。

最後に残ったのは女の娘の幼気な少女一人。慌てて背を向け震える足を叱咤して走り出した。逃げる。その判断自体は悪くなかったが。

川上は足元に落ちてた刀を蹴り上げ中空で左手で取ると振りかぶり投げ打った。手裏剣術の一種、飛刀術。狙い違わず少女の背中を刀が貫き、少女は勢いよくそのまま前に倒れた。

少女の判断は間違っていないが、いかんせん行動が遅すぎた。

「うげえ…けほ、けほっ」

背中に刺さり上腹部から抜けた刀の切っ先が地面に刺さり、少女は地面に張り付けにされていた。消化器を破壊され胃に血が溢れているのか、ドス黒い血が混じった吐瀉物を苦しげに地面に撒き散らしていた。

「けほっ、い、たいよ、お母ちゃん、たすけて、兄ちゃん、いたいよお」

慈悲はすぐに訪れた。

後ろから迫った川上は首の後ろを踏みつけた。少女は頭蓋底と頸椎の付け根が折れて即死した。

川上は懐紙を取り出し刀を拭った。

「……貴方は？」

川上を見て不思議そうな顔を浮かべたルーミア。川上は無造作に歩みよると刀を取り上げた。

斬られると思つて顔を背け目を瞑つたルーミアだったが、川上が二回振り下ろした刀はルーミアの手首の札を両断しただけだった。

服や肌を傷付けずに紙一枚だけを斬る川上の絶技と言えるだろう。

拘束から解かれたルーミアは自身の両腕の調子を確かめてから、自分は助けられたらしいと理解してキョトンとした顔で川上を見た。

「貴方はなんで助けてくれたの？」

「礼がまだだったから」

何故五人を斬り一匹を助けたのか。疑問をぶつけたルーミアに川上は納刀しながら端的に答えた。

「お礼？」

ルーミアはなんの事かわからぬ様子で首を傾げた。彼女は覚えていないのだろう。幻想郷に放り出されたばかりの男を助けた事など。それはどうでもいい川上は煙草を啜え火を点けつつ、傍に倒れていた少年の死体に向き合い弄り始めた。

「助けてくれてありがとう」

とりあえず爛漫な笑顔を浮かべてルーミアは川上に礼を言った。川上は背を向け死体にナイフを走らせつつ、ああ、と小さく応じたのみだった。

「食うか？」

そう言いながら川上が持ち上げたのは肩から切断された少年の腕だった。

「食べていいの？」

「いいんじゃないか」

「じゃあ食べる」

ルーミアのその言葉に川上は少年の小さな腕をルーミアに向けて放った。それをキヤツチしたルーミアは、パクリと腕に喰いつき、肉を引きちぎって咀嚼し始めた。

川上は女の死体を調べて銭を抜く。同じく術者、武術家の懐を調べ使えそうなものは抜いた。

「貴方も食べる？」

口の周りを血で汚しつつ夢中で食べていたルーミアがふと川上に食べかけの腕を差

し出した。助けてくれた恩義を感じているのだろうか、あるいは彼女の性格か。
「少し貰う」

川上はそう言つて、煙草を落とし。ナイフを伸ばして前腕部の皮を削ぐと下の肉を少し切り、切り身を口にして咀嚼した。中々柔らかいが弾力もある肉質。血生臭と仄かに塩気を感じる。味付けなどないがまずくは無かった、川上はゆっくりと咀嚼して飲み込んだ。

口直しに煙草を啜えつつ彼は立ち上がる。再び黙々と食事に戻ったルーミアを一瞥して、火を点けて言った。

「失礼する」

ルーミアは顔を上げて応じた。

「うん、ありがとう。またね」

その言葉を背に彼は煙草を吹かしつつ散策の続きに戻った。

第125話

「ふーん」

齡七十を越える人里最高の退魔師とも謳われる陰陽術師は、目の前の三人組の話聞いてどうでも良さそうな相槌を打った。

博麗の巫女とも交流を持つ陰陽術師に妖怪とのバランスの偏りなど、自身の組織の理念を説いた三人組は反妖怪組織の構成員だった。

彼らの組織は反妖怪を掲げているが、宿敵である妖怪に対する決定的な武器がない事がまず大問題として横たわっていた。

リーダーの立見にも考えがない訳ではないが、まず直接的に妖怪とぶつかった場合の対抗手段は現実的に必要だった。

また、その障害になる対人も。

そこで白刃の矢が立ったのが最高レベルの技量を持ちながら既に隠居の身で現在は余り影響力もない陰陽術師だった。

「妖怪側に明らかに偏っていながら、管理側はバランスを保つてると言う。この現状を打開したい」

「そりゃあ、仕方ねえんじやねえか。あちらさんの方が強いからな。向こうの方の取り分が多いのもおかしくはねえだろ」

先頭の男の言葉に、陰陽術師はキセルを一服して気楽な口調で告げた。真面目に取り合っていないと思つたのか一人が気色ばむ。

「他人事のつもりか!? あんたは自分の家族が殺されても同じ事がいえるか!」

それを聞いても陰陽術師は気楽な態度を崩さずにキセルをプカリとやる。しかし目だけは並々ならぬ鋭さで相手を見据えて言つた。

「他人事? 俺アこれでも退魔やつてたんだぜ、他人事つてのはねえわな。俺の息子も陰陽術師だ、娘にも身の守り方くらい伝えてある」

陰陽術師はキセルに葉を継ぎ足して続けた。

「それで息子や娘が死んだら奴らが弱かつただけの事さ。現に俺ア化け物と色々やり合つてきたがこの歳まで生きてる、それなりに強かつたからつてこつた。ま、せいぜい骨は拾つてやるさ」

余りに抜き身な陰陽術師の言葉に三人は気圧された。

口調こそ気楽なものだがだからこそ顯著だつた。この男は本気だ。

「んで、そんな事聞かせて俺にどうしろつてんだ? まさかこんな老いぼれに戦えといふんか?」

ニヤリと笑い、最後に一服するとキセルを下に向けコンと叩き灰を落とした。

「……対抗手段が欲しい。妖怪とやり合ってきたあんたなら何かあるだろう。知恵でもいい。道具でも。武器でも何でもいい。協力して欲しい」

「ほお」

陰陽術師はキセルを懐に収めながら、意味のない相槌を打った。

「知恵と道具、武器ね……あるぜ」

ニツと不敵な笑みで陰陽術師は告げた、三人は顔色を変えた。

「あるのか!」

「おうさ。しかも俺の集大成っつーかとおきの奴がな」

陰陽術師は軽い口調で言った。確かにあるのだ、彼は博麗と技術交流をして。当代の巫女の下請けもしていた。そしてあの巫女は天才だが、その才故の慢心か隙が多かった。

彼はずっと博麗の秘術を盗み、自分のものとしてその術を編纂してきたのだ。不完全ながらも博麗が決して外に漏らしてはならなかった術の数々。

「俺も商人だから、とっておきだが金さえ出しや売ってやるよ。人間が割食ってるってんなら、あんたらの力でひっくり返してみせるんだな」

陰陽術師はそこまで言って一枚の札を出した。

「とっておきつてのが嘘だと思われちゃ困るからな。その一枚は特別にやるから試してみな。それさえあればガキでも妖怪を殺せるぜ」

「確かか？」

「使ってみりゃあわかるさ。あんたらが欲しくて堪らないもののはずだぜ。しかも妖怪だけじゃない、能力持ちの人間の霊力、神の神力にすら対抗出来るモンもあらあ」

「ま、安くわないぜ。だが値段相応の道具だし、金さえ払えば量を用意してこつちも売るぜ。まあそいつを試したらあんたらんとこの頭に相談してみるんだな」

陰陽術師は不敵に笑ったままそう締めくくった。

二時間後

「それで効果の程は？」

「確かです。いや、想像以上でした」

立見の質問に答えるのは陰陽術師と交渉した三人組だった。

「熊のようにでかい狼の化け物でしたが、俺は素人なのに札を掲げて一言唱えただけで一気に相手は弱つちました」

「どの程度だ？」

少し興奮気味に札の効果語る一人に立見は重ねて問う。

「いえ、あつという間に動かなくなり倒れちまいましたね。瀕死の様子でしたから、石で頭を潰しました。あれはもしかしたらトドメを刺さなくても放つておいても死んだかも知れませんね」

「翁が言う通り効果は確かか」

「爺さん曰く妖怪だけじゃなく、人間にも神にすら有効なもの売ると」

それを聞いて立見は少し考える様子を見せたが顔を上げて言った。

「金に糸目は付けん。相手が用意出来る限り買え」

「しかし立見さん、その爺さんは信用出来るんですかね」

立見の発言に幹部の一人が意見した。

「その爺さんも妖怪側に通じてたらどうします？ いざ肝心な相手に買った物が効かない……という事もあり得るのでは？」

その疑念ももつともではある。立見は顎を撫でながら三人組に言った。

「君たちから見てその翁は信用出来ると思うか？ 正直な意見を聞きたい」

直接陰陽術師と交渉に当たった三人に聞くのが一番だと考えたのか。問われた三人組は考え込む様子を見せたがやがて一人が慎重に言った。

「あくまで俺から見た印象ですが……あの爺さんは人を食ったような態度でしたが嘘や

ごまかしを言つてるように見えませんでした」

「あの爺さん自身は妖怪派でも人間派でもない……強い方が正しいという感じで。それにあくまで商売という風でしたし、商品は確かだと思えます」

「私も同感です」

考えながら立見に一人が意見を伝えるともう一人が同意を示した。残る一人は口を開かないが少なくとも反対意見を出す様子はない。

「私は翁から武器を買うべきだと考える。仲間の中には呪術に精通したものもいる、受け取ったものに仕込みがないかはこちらでも調べられるだろう。皆はどう考える」

立見の表明した意見に。その場の幹部達は結局反対意見は出ずに陰陽術師から武器を買う事が決まった。

「武器があればいよいよ動く時も近い。皆、愛しい人達の仇を取る日もそう遠くはないぞ！」

立見はそう言つて皆の士気を上げ今夜の会合を締めくくった。

そう、いよいよだろう。潮時……なのだろう。立見は帰り道そう考えて一つの決意を固める。

立見の家は人里でも外れで、周囲の民家から少し離れた他の家に比べると大きめの家だった。

立見は無言で家の戸を潜った。この家は立見の一人暮らしという事になっている。

「私だ」

立見が戸を閉め中心に向かいさういうと、家の中で気配が動き、奥から一人の幼い少女が顔を出した。

「お父さん、お帰りなさい」

落ち着いた声色で言った少女は腰まで届く細く艶のある銀髪に可愛らしい顔立ちだが真紅の虹彩の瞳を持っていた。

一眼で人間ではなく魔性の存在であると知れる特徴。

「ただいま」

それに立見は穏やかに帰宅の挨拶を返した。

少女は半妖半人であった。

幻想郷においては片親が妖怪である半妖も少数存在していた。例えば古道具屋を営む森近霖之助など。

人里にもそう言った半妖も少数住んでいる。何故半妖が生まれるか、それは妖怪と人間が種族の壁を越え惹かれあい……と言った結果もあるが、実はさういうまともなケースばかりではない。

「遅かったね、お仕事たいへんなの?」

「……ああ、最近は少しな。真琴は夕食は食べたか？」

父として立見に気にかける真琴と呼ばれた娘に対して、立見も組織での姿より幾分柔らかな印象だった。

「うん」

「そうか、もう遅い。そろそろ寝なさい」

「うん……お父さん」

「何だ？」

「うん、なんでもない。おやすみなさい」

何か含みがある様子の子の真琴であったが、そう就寝の挨拶をして寝室へ行った。

立見は腰の刀を抜いて刀掛けに掛けると、大きく息を吐きながら座った。

飲みかけの一升瓶から酒を注ぐと彼はそれを煽った。

……彼の娘、いや正確には娘ですらない。真琴こそまともな出自ではない半妖だった。

立見にはかつて妻と息子がいた。反妖怪組織を束ねてる立場から例に漏れず妻と息子は殺された。

ある人型妖怪にである。里の外で立見の息子は殺されたがそれは立見の妻があった責め苦に比べれば随分マシだったかも知れない。

一緒にいた妻はすぐには殺され無かった。その妖怪は立見の妻を気に入ったのかも知れない。ねぐらに持ち帰ると殺しも食べもせず手足をへし折り抵抗出来ぬようにして犯し続けた。

里の人間に救出された時はすでに瀕死。そして僅か一ヶ月未満の出来事にも関わらず妖怪の子を身籠り臨月のように腹が膨れていた。

最後は立見が家で看取った。ただでさえ手の施しようない程弱っていた妻に止めを刺すように胎児は自ら無理矢理産道をくぐり抜けて産まれた。

立見はその鬼子の首を即座に締めようとした。しかし今際の際の妻が言った。

その子は悪くない

それを最後に妻は死んだ。立見には勿体無いくらいに強く優しい女だった。以来立見は外には出さず周囲に隠すように妻の忘形見を育てていた。

……反妖怪組織の頭がまさか憎き妖怪の血を引く娘と住んでいるなどと誰が思うまい。こんなことを誰に知られる訳にもいかない。

立見も理解していた。

一時間程立見は酒を飲んでいたが、やがて立ち上がった。刀掛けにかけていた愛刀を手にとった。

彼は寝室へと静かに入った。立見のものの布団と、もう一つ。薄い布団の中で真琴は

寢息を立てていた。

立見は刀の鞘を払った。

眠る真琴の横に立ち、立見は刀を振り上げて

ふと、その時真琴が目を覚まし自身の横に立ち刀を構える父を見た。

立見は動けなかった。

真琴は何も見なかったように再び目を瞑った。

立見の体が激しく震え出した。そして

「うおおおおっ!!」

鬼の形相となり雄叫びと共に刀を振り下ろした。血しぶきが寢室に跳ねる。立見はすぐに刀を再び振り上げてまた渾身の力をで振り下ろした。また振り上げて振り下ろした。果たして刃筋を通してるかも怪しい無茶苦茶な斬撃。

立見は刀を振り上げて振り下ろした。刀を振り上げて振り下ろした刀を振り上げて振り下ろした刀を振り上げて振り下ろした刀を振り下ろした刀を振り下ろした刀を振り下ろした刀を振り下ろした刀を……

立見は何時間それを繰り返したのだろう。夜が明け始めていた。

汗と血塗れの立見の手から刀が落ちた。滅茶苦茶な扱いをされた刀は物打ちからは折れ刃はポロポロで大きく曲がっていた。目釘が折れて柄から外れたので立見は途

中から中子を直接握り切っていた。

立見の目の前にはもはや原型もわからぬぐずぐずになった挽肉が酷い臭気を放っていた。

「う……うあ……」

「うぐおおおおあああああつっ!!」

人里の外れ。獣のような叫びがこだました。

第126話

紅魔館地下図書館

パチュリーは机に向かい、書物のページをべらべらと手早く捲っていた。

研究中にある術式においてピリツとしたものが走ったのは昨夜である。所謂閃きという奴だ。そしてそのアイデアに以前読んだ本に書いてあった記述。そこに使えるものがあつたと記憶していた。

問題はその時は重要視しないで読み流してしまった事だ。膨大な読書力が災いし、あの記述がどの本のどのページに書いてあつたか分からずに当たりをつけて片っ端から探しているという作業をパチュリーはずっと行っていた。

素早く、かつ見落としがないように正確に一冊に目を通してパチュリーは本を閉じた。運動能力はないが読書で鍛えられた眼の使い方の速さがパチュリーにはある、一冊から記述を探すのに一分とかからない。

しかし、机に山積みになった本をみてパチュリーは溜息をついた。この中にあるとも限らない。長丁場になるかも知れないと思いつながらティーカップに手を伸ばした。中の紅茶はとうに冷め切っていた。

「根を詰めても良くないわよ」

ふと、そんなパチュリーに対して声が掛かった、透き通った氷のような声だった。涼しく澄んでいて、綺麗で耳に心地良く。どこか硬く冷たい印象も抱かせる。

幾冊の本を抱いて現れたのは、一人の少女である。上背はパチュリーや魔理沙よりは高く、咲夜よりは低い。

金髪に碧眼で、ウエーブのかかった髪は肩に少しかかるくらいの長さだ。頭には赤いヘアバンドをつけている。幼い印象の強い大きな瞳に、整い過ぎた顔立ち。透き通りそうなくらい白い肌と合わせ何処か人工物めいた冷たさがあった。

服装は深い青の上下、下はロングスカートである。そして肩に白いケープを羽織っているという出で立ちだ。

パチュリーと同じく魔法使いであり、人形使いでもあるアリス・マーガトロイドである。人形使いでありながら本人の容姿が人形より人形じみているという少女だ。

よく言えばとても美しく、悪く言えば人間らしい味わいに欠ける。

彼女は同じ魔法使い仲間として交友もあるパチュリーに本を借りに来ていた。

「ええ、少し眼も疲れたから休憩しようと思った所よ」

「それがいいわね。だけど元氣そうで良かった」

アリスは本を机に下ろし、パチュリーの対面に座った。

アリスは喘息の発作を起こし体調を崩す事が度々ある

パチュリーを少し心配していた。確かに魔法使い。そうどうこうなる体ではない。

しかし喘息は馬鹿に出来ない。気管が狭窄し息を吸おうにも満足に吸えずにさらに咳き込み窒息しかけて苦しみながら必死に呼吸する姿は見ていて痛々しい。

「大丈夫よ、最近発作も起きないしね」

「それは良かったわ、だけどここに籠りきりじゃなくてたまには散歩でもした方がいいんじゃない」

「気が向いたらね」

微笑んでパチュリーはそう煙に巻いた。さりげなく小悪魔が立ち寄り、アリスに紅茶を一杯、また冷めたパチュリーのも淹れなおした。

特に口を挟まず一礼して小悪魔が去る。アリスは淹れたての紅茶の香りを楽しみつつ暖かみのある白磁器のカップから一口飲んだ。

「相変わらず貴方の司書の紅茶は美味しいわね」

「本来司書とは関係ない仕事だけど」

微笑して感想を漏らしたアリスにパチュリーはそう応じた。アリスは音を立てずカップをソーサーに置いた。

「ところで……」

アリスは思いついたように口火を切った。しかし実際にはずっと気になっていたが、追求する気を逸していた。

「あの人はどなた？」

アリスが視線を送った先にはソファで刀を抱いた左腕を下にして横向きに静かな寝息を立てた青年が一人。紅魔館下つ端使用人の川上である。

アリスが図書館に立ち入った時からずっとそこで寝ていた。気にはなつたが言わなくても誰かが説明するかと思いい中々突つ込めなかつた。

「ああ、あれ？」

パチュリーもソファを一瞥して言った。まるでいる事に気付いていなかったか忘れていたかのような態度。

「外来人で魔理沙が拾ってここまで連れてきた後、レミイが気に入ったみたいで飼つてるのよ」

パチュリーの説明は極めて端的で無駄がない。経緯は不明だが、実際に経緯らしい経緯もない。

「そうなの？じゃあレミリアの恋人？」

アリスはそう考えたようだ、あの吸血鬼は見かけ通り幼い所もあれど。落ち着いた淑女のような所もある。恋人くらい作ってもおかしくないというのがアリスの印象か。

「まさか、恋人というよりペットみたいなものでしょうね」

だがアリスの言葉をパチュリーは一笑に付した。川上がレミアアのお気に入りだといふのは確かだが、パチュリーのレミアアの印象はアリスとはまた違うのだろう。

「むしろレミイ曰くあの子は咲夜にべつたりだそうよ」

「ああ、咲夜の……確かにあの娘も男好きしそうな性格だからね」

パチュリーの言葉にアリスはそう頷いた。男側から見ればレミアアより咲夜だろうという気がした。アリスが言ったように性格も少々冷酷なきらいはあるが基本的に世話好きなのだ。

「そういうば魔理沙が以前言ってたわね。武術家の外来人がいて、一本取れるか挑戦中って。彼の事だったのね」

ふと、そこで魔理沙の言葉を思い出した。武芸の達人で性格破綻者の男がいるとか言っていた事を。

「一本も取れないみたいね。アリス、貴方も剣も使うでしょう」
「それはあまり口にして欲しくないわね」

パチュリーの言葉にアリスが軽く窘めるように言った。

剣術はアリスにとつて隠し玉であり切り札みたいなものだ。使う事は余り知られなくはない。

アリスは人形使いである。戦闘においてはアリス自身が戦うのではなく、彼女が同時並列で操る多数の人形が戦う。

故に彼女と戦うものは一対多数を強いられる事になる。無論それは多勢に無勢だ、アリスは数の上で圧倒出来る。

しかしそれはあくまで擬似的な一対多数である。

相手が少しでも戦略や兵法に通じていけばすぐにその道理に気付く。あくまでも敵はアリスなのだ、人形ではなく活路はアリス自身にある事に。いや、仮に擬似的な一対多でなくとも相手の頭を先に潰すのはセオリーである。

故に少し分かっている相手なら人形ではなくアリス自身を狙い飛びかかってくる、しかしそこに罠がある。

孫子に曰く、逃げ道はひとつ残しておく。

弱点がアリスであるなら、相手がアリスに掛かって来るのは道理。であればアリスもそこを逆手に取れば良いのもまた道理。

アリス自身そこに様々な罠を張っている。その一つがアリス自身の剣腕という訳である。人形しか戦闘能力がないと固定概念に捉われアリスの懐に入った途端バサリ、という訳だ。

戦闘とは戦略。つまり頭脳ブレインそれがアリスの考えである。詰将棋のような駆け引きで

勝ちを得る。

故にアリスの剣術はあまり知られる訳にはいかない。武術流派も技術や型を秘匿するが、これも兵法の基本だ。知られてないゆえの強み。

「ただ、あの子には知られてようが、いまいが無意味だと思おうわよ」

「あら、随分高く買ってるのね」

パチュリーの言葉にアリスが少々意外そうに返す。パチュリーが他人を評価するのは滅多にない事だった。

「私じゃないわ。業物が手に入ったって、レミイの折紙付きよ」

「レミアが？それは並の達人ではなさそうね」

パチュリーの言葉にアリスは納得した。パチュリーが他人を評価する以上にレミアアが人間を評価する事の方が希少だ。レミアに認められた人間など数えても片手の指が余る。

「話してみる？川上、来なさい」

「いや、寝てる所をわざわざ起こさなくても……」

パチュリーが川上に軽く呼び掛け、アリスが諫めようとした時には眠っていた川上は呼ばれた事で目覚めた。横になったまま半眼の眠そうなどんよりとした眼でパチュリーとアリスを暫し見つめ、おもむろに立ち上がった。

かつ、と歩きつつ腰のベルトに刀を通して底昏い眼でアリスを見下ろした。ゾワリ、とした感触がアリスの背に走り彼女はその瞬間に並列思考で幾千の攻めをシミュレートし結論に至る。この距離、状況でやり合ったら死ぬ。

「始めまして。川上という、宜しく願います」

「始めまして。アリス・マーガトロイドよ。業物という触れ込みに偽りはないみたいね」
「裁断銘も入った固山宗次だからな」

二人は挨拶を交わしあい、アリスの言葉に川上はトンチンカンな答えを返す。アリスは思わずはい？などと声を上げたが、眠そうな川上は冗談を言ったのか本気で言ったのか判断が難しい。

川上も椅子に座ると寝起きの煙草を無意識に取り出しかけて、パチュリーを氣遣ったのか変わりに干し肉を取り出し齧った。

その後三人とも口数が少ない為、大して会話に花咲く事もなく。静かに紅茶に口をつける二人の隣で川上は頬杖を付いて物憂げにも見える無表情でアリスの上海人形の頭を指で撫でていた。

第127話

紅魔館門前

そこに三人の人物がいた。

一人は歳の頃四十前後と言った具合だろうか。身長は170cm弱でしつかりとした身体つきをして鋭い目付きをした男。

一人は二十代前半、身長175cm程度の体軀。不吉な陰を宿した三白眼が特徴的な紅魔館使用人、川上。

最後はまだ十代後半だろう、身長160cm台後半程度と女性としては比較的長身のやや瘦軀。年齢以上に落ち着いた表情を見せるのは紅魔館メイド長、十六夜咲夜。

この状況はなんなのか、と問われれば一言で言えば他流試合の挑戦者であった。

紅魔館の門番が妖怪ながら武術の達人である事は周知の事実である。たまに腕に覚えのある人間が紅美鈴に挑戦に来る事があった。

この日久方ぶりの挑戦者が現れた。しかし、そのタイミグで本日は美鈴は休みであり、代わりに門前に詰めていたのは川上だった。

挑戦者はがっかりしかけた。しかし、川上に用件を問われ答えると、暇つぶしになり

そうだと考えた川上が美鈴代わりに試合相手になる事を提案。男も腕試しが出来るのなら願ったりとこれを了承。かくして川上と男の他流試合が決まった。

そうして咲夜は立会い人として今ここに居る。咲夜は少し懸念があった。美鈴の場合相手が格下の場合かなり配慮するのだ、相手にも顔を潰さぬように花を持たせたり、大怪我には繋がらぬようにと言った具合に

しかし、川上では……

「準備はいいでしょうか」

「ああ」

「いつでもいいぜ」

川上から預かった二口の刀を抱いた咲夜が問い、二人は短くそれに応えた。

「ルールは武器の使用、目突き、金的など以外はあらゆる攻撃可。どちらかの参ったか、あるいは戦闘不能をもって決着とします」

咲夜の宣告に男は頷き、川上は何も反応しなかった。

「では、始め！」

咲夜がそう告げると男は左を前に半身となり肘をゆったりと曲げて両腕を前に出し、腰を落として構えた。

川上は棒立ちのまま無構えである。

男は古流柔術を修めた武術家である。日本の古流柔術では甲冑を想定しているため、投げ技や関節技、組討ちなどを主体とする場合が多い。逆に甲冑の上からでは効果が薄いため当身はあまり用いられない。

しかし、流派を全体を見れば当身を重視して多用する古流柔術流派も存在する。男の流派がそうだった、一に当身、二に当身、三、四がなくて五に捕手。

川上が全く無防備のまま散歩でもするように距離を詰めるが、その試合中とは思えぬ大胆さに男は一切狼狽しなかった。

間境にて男は右の中段突きを川上の段中に向けて放つ。胸中央の急所。その威力は生身でモロに受ければ胸骨が砕け心臓破裂を起こす。男の当身は投げ技がただの死体処理になる威力だ。

鈍い嫌な音がした。

「うああっ！」

呻いたのは男だ。川上の肘を用いた砕き受け。男の右拳は砕けた骨が甲を突き破って飛び出していた。

咄嗟に後ろに下がった男に付いていくように川上は右で相手の左手首を掌握して、相手の体幹に崩しをかけた。瞬間男は軸を失い完全な無防備になる。

川上の左掌底が男の顎を撃ち抜いた。しかし川上が真に狙ったのは顎ではない。

男は声も無く崩れ落ちた。

「……勝負あり」

その言葉に川上は踵を返して懐から煙草を取り出した。男は立ち上がってこなかった。

咲夜は歩いていき男の状態を確認した。

顎を通して頸椎を砕かれ既に息は無かった。

想像出来た結末。武において試合は死合である。しかし、咲夜は思う。

川上は命を軽んじ過ぎている。

わかるのだ、他ならぬ咲夜には。そして命を軽く見る者にとって一番軽いのは他人のそれではなく……

夕刻

川上は先ほどまではフランドールとテーブルゲームに付き合っていたが、フランドールが寝てしまったので暇になり廊下を歩いていた。

そこらへんの部屋で昼寝でもしようかと思いつつ歩いている時、呼び止められた。

「川上」

川上は足を止めた。呼び止めたのは対面を歩いてきてすれ違いかけたレミリアで

あつた。

「なんだ」

川上はレミリアを見下ろして告げた。対してレミリアは周囲を気にする素振りを見せた。

「ちよつとこつち」

そう言つて川上の手を引つ張り手近な一室に入った。空き部屋である、なるほど誰かに見られる心配は無さそうだ。

レミリアは被つている帽子を脱いで川上に向き直つた。

「わ、私を抱っこしなさい」

そして何故か急にそんな命令をした。あくまで上から目線だったが恥ずかしそうに顔は紅潮し、声も少し震えていた。

「わかつた」

川上はやれと言われたならば是非は特にない。しゃがんで座構で低く肩からレミリアのお腹に当たつていき腕を回してレミリアを肩に担いだ状態で立ち上がった。

「どこへ行けばいい」

「……私が言つたのは抱っこであつて、これは運搬だと思ふのだけだ」

肩に担がれたレミリアが、川上の背中側から突つ込む。これは何かが違うと。

川上は冗談のつもりだったのか、あるいは本気だったのか。肩の上のレミリアを巧みに扱い、今度はちゃんと胸の中で横抱きにした。

レミリアは咲夜の胸の中との差異を感じた。まず咲夜に比べて目線が高い、また男の身体だから硬いと思えばそうでもない。咲夜ほどではないが身体の感触は案外柔らかかった、これは無駄な力が入ってない為であろう。

「悪くない、わねこれ」

レミリアはそう感想を漏らす。少し眠くなりそうな心地よさがあつた。この男は父性とか包容力とかを全く感じさせないだけに意外である。ふとレミリアはこの男が良くあるメイド妖精に絡まれてるのを思い出した。

「頭を、撫でて」

今度は命令というより甘えたニュアンスが強かった。川上はやはり特に何も言わずに片手で横抱きにしたまま、もう片手でレミリアの頭を撫でた。

思いの外繊細な手つきに、レミリアは目を細めて、胸に頭を預けて息をついた。
心地良い。

フランドールが懐いているのは伊達ではなかったのかも知れない。

「咲夜が貴方の事を心配しているわ」

「そうか」

その状態でレミリアは話を切り出した。これが言いたいがために川上を呼び止めたのか。しかし川上の返答は素っ気なかった。

「貴方は命を粗末にし過ぎると言ってた」

「命など、言う程立派なものでもないだろう」

レミリアは胸に頭を預けたまま瞳を閉じた。

「そうかもね。でも」

とくん、とくん、と。

「貴方が一番粗末にしているのは自分自身だって、咲夜が」

命が刻むリズムに耳を傾けながらレミリアは言った。

「俺は自分が一番可愛い」

「そう？じゃあ死にたくない？」

「殺しておくながら、自分は死にたくないは通らないだろう」

川上の心音に耳を傾けながらレミリアは思った。初めてこの男は本当の事を言ったのかも知れない。

「そうは思わないわね」

レミリアはゆったりした口調で言い聞かせる。

「本当に自分が可愛いければ、何万人殺そうが死にたくないし、知ったことじゃない。そ

ういうものじゃないかしら」

「……」

川上は答えなかった。レミリアの言葉に同意したのか、しかねたのか。あるいは自身の欺瞞に気付いたのか、気付かされたのか。

「咲夜には幸せになって欲しいから」

だから、レミリアは言う。

「貴方を大切に思う人もいるから」

「貴方も自分を大切に」

とん、と川上の胸に手を置いて告げた。

「何万人の他人よりもね」

やはり川上は何も言わなかった。言うべき言葉を見つけれなかったのかも知れない。

「降ろしていいわよ」

川上はそれに従いレミリアを降ろした。レミリアは言うべき事は終えたのか帽子を被り直して踵を返した。

「お嬢様」

「なに？」

そのレミリアに対して、やっと川上は口を開いた。レミリアは振り返らずに応じた。「ありがとう」

川上が告げたのは一言だけであった。それはいつもの表面だけなぞった礼式であったのか、それはわからない。

レミリアはクスリと一つ笑って退室した。

川上は誰も居ない部屋で一息ついて、ソファーに身を沈めて煙草に火をつけた。

第128話

彼は避けていたのだろうか。

川上は紅魔館に居ついでから、良く一人で幻想の地を出歩く。

何かを求めているのだろうか、あるいは何も望んではいないのかも知れない。彼は足の向くままに歩く。

紅魔館からそうは遠くない所に人里がある。人間である川上にとって普通に考えれば一番まとまな居場所だ。

しかし、彼は咲夜のお供で一度行ったきりでそれ以前も以後も人里に近づく事は無かった。

川上は避けていたのだろうか。

何故だろう。彼は歓迎されない事を悟ったのか。何故歓迎されないのか、人を斬ったからか？ いや、きつとそんな表面的なものではないのかも知れない。

その夜、川上は人里に立ち入った。何故だろう。意味はないのかも知れない。あるいは何かを求めたのか。

空気が澄み、雲ひとつない空で月の蒼い光が冴える。そんな夜だった。

川上は商店が立ち並ぶ通りを歩く。夜中であり、多くの店は閉まっているが中にはポツポツとまだ店を開いている店もあった。人里を訪れる妖怪向けの店である、この古い町並みに夜半にも開いている店があるというのは幻想郷ならではの光景であろう。

川上はいつかのように、その中心となる通りを一本裏に入る。しばし進むとただの家屋ばかりになり、途端に闇による視界不良が襲ってきた。

川上は立ち止まると両切り煙草を啜え、マツチで火を点けた。

紫煙を吐いて一息吐いた所で。後ろから気配が近づいてきた。

川上はゆっくりと振り返るとそこにはいつかの竹林で対峙した艶のある長い白髪に、紅いもんぺの少女がいた。

この場で川上が藤原妹紅と出会ったのは必然であつたのだろうか。

剣呑な雰囲気を纏つた妹紅が言った。

「きて欲しい所がある。今度は断らないよな」

川上はもう一服しながら頷いた。

妹紅自身あつさりとした感触に少々肩透かしを食らつた。

川上は妹紅に案内——いや連行というべきか——され、ある屋敷の廊下を歩いていた。野太刀は家人に預けたが、小刀代わりの刀を鞘ぐるみで右手に携えている。

「……だ、入ってくれ」

妹紅はそう襖を示して、自ら開けるとその一室に踏み入れた。

「慧音、連れてきたぞ」

「失礼する」

妹紅が部屋の中の上白沢慧音にそう言ったのに遅れて、川上はそう挨拶しながら一礼して入室した。

「こんばんは、君が清水、か。私は上白沢慧音という」

「こんばんは、初めまして。宜しく頼む」

少し硬い声の慧音の挨拶に川上はそう返礼した。慧音は改めて目の前の青年を観察する。

口調こそ丁寧ではないが、礼には則っている。意外と話がわかりそうかとも感じるが、しかし……

その昏く沈んだ三白眼、何も感慨も無さそうな表情。問答無用で不吉な印象を与えるそれは紛れもない凶相だった。命を切断する剣鬼の貌。

「君と少し話がしたかった。硬くならなくていい、座ってくれ」

慧音はまず是对話をする事を望み座布団を薦めた、話が出来たらそれに越したことはない。しかし硬くならなくて良いといいつつ実際慧音の方が硬くなっているように感じる。

川上はそれに応じて慧音の対面に腰を下ろした。右に下げている刀をそのまま刃を自身の方に向け右に置き胡座を掻いた。

慧音はさりげない風で川上の所作を観察した。刀の置き方からして害意、戦意、警戒はないという事を示している。

しかし胡座が常のものでは無かった。左足は正座の時のように下腿を太腿の下に折敷、開いて、右だけが胡座の形になっている。即座に居合腰、坐構に移行出来る武術家の座り方。

全く警戒していないというわけでもないのか、あるいはそれがこの者の常なのか、慧音は思った。妹紅は部屋の隅、行燈の近くに座った。

「単刀直入に聞くが君は里の外で人を殺したろう」

「ああ」

慧音の抜き身な問いかけに、川上はなんでもないかのように頷いた。

「夜盗と思われる二十数人を斬ったのは君だな」

川上は何かを考えるように視線が斜め上を行き、しばらくして頷いた。

「ああ」

「……君、煙草は持っているか？紙巻だが」

その問いかけに川上は懐のゴールドンバットを取り出すと慧音に放って寄こした。

慧音はそのソフトパツクのスペルを確認した。当たりだ。この男こそ詳細不明の人斬りだった。

慧音は、煙草のパツクを川上に返した。川上はそのまま吸つていいかと聞き、慧音は頷いた。

「あれを斬つてはまずかつたらうか？」

川上は煙草を一本啜えマツチで着火して一服して言った。

「いや……その時の状況を聞かせてくれるか」

慧音の言葉に川上はその時の事を端的に説明した、ある夜夜盗に狙われたから切り払った。要約すればそれだけであつた。

「唐沢君を斬つたのも君か？小柄だが精悍で腕が立つ君とそう変わらない青年だ」

「誰だそれは？」

慧音の問いかけに川上は全くピンと来ていないような答えを返した。

「……この里で阿求を助けたのも君だろう。稗田阿求と名乗る少女だ」

「だから誰だ？」

続けての問いにも川上はそう返すしかなかった。ふと、部屋の隅で静観していた妹紅が苛立ったように口を挟んだ。

「白を切つてるのか。阿求があんと会つたと言つてるんだよ」

妹紅は自身が殺された事も重なってか、川上に悪感情が強く目付きが険しい。そう言われても川上は何処か醒めた視線を返す。

「正直に答えた方がいい。ここで煙に巻いても里を出たら炭にされては意味がないだろう？」

「炭にしたければ好きにするといい」

恐喝に近い妹紅の言葉に、川上は興味を無くしたように妹紅から視線を切つて言った。ピクリと妹紅の眉が上がった。

言外にやつてもいいがただやられるつもりはないという態度だった。妹紅は怒りを感じると同時に畏怖に近いものも感じた。

これはヤバい類のモノだ。何がと言われればこの男の態度、結果的に本当に炭になるうがなるまいが特に思うところがないのだ。一番危ない。

「落ち着け妹紅。……暴漢に絡まれた時に君に助けられたと言う少女がある。若草色の着物に、紫がかつた髪に花の髪飾りのまだ小さい少女だ」

川上は少し考えて答えた。

「おそらくその相手とは会った、とは思うが助けてはいない。上手く使われただけだ」
「覚えていたようで安心した。唐沢君は君を見定めると言つて里を出たが……首を失つた状態で見つかった。君が斬つたのか？正直に答えてくれ」

川上は2本目の煙草を取り出して啞えた。また少し考えて口を開いた。

「おそらくく」

「おそらくく?」

その曖昧な答えに慧音はおうむ返しに言った。また煙に巻くつもりかと妹紅が眉を顰めた。しかし、どうもお為ごかしを言っているようにも慧音には見えなかった。

「俺にかかつてきた相手は殆ど斬った。その唐沢なる者が俺を狙ったのならおそらく俺が斬ったのだろう」

「……名前は?聞いていないのか」

「聞いたかもしれないし聞いていないかも知れない」

川上は紫煙を吐いて言った。慧音はいよいよ薄気味悪いものをこの男に感じていた。この男、嘘は言っていない、斬った相手など本当にどうでもいいのだ。

「……慧音」

妹紅が口を挟んだ、ヤバイぞ、どうする。と。

「この世界の法はあまり詳しくない。それらの者を斬ったのが俺だが、俺は死罪か?」
「……そうだと言ったらどうする?」

妹紅の言葉にすつと川上は目線を向けた。深く一服して紫煙を吐いて投げやりにポツリと言った。

「どうしたものか」

「君は外人だろう、普段はどこにいる」

慧音が質問した。背格好や活動期間、外来品の煙草などこの男が外の人間だというのは明らかだった。しかしよく見る外人とは色々明らかに違う点もあるが。

「紅魔館に」

「……斬った相手は盗賊。里の外での人間に対する殺傷も現状、里の人間ではない君を罰する根拠は持たない」

「ふむ」

慧音は硬い声で言った。川上は相槌を打ちながら煙草を携帯灰皿でもみ消した。しかし慧音は続けた。

「個人的な事を言わせて貰えば唐沢君と彼の遺族を考えると仇を取りたいという衝動を抑えている事を承知して欲しい」

硬い声、そう慧音は冷たく鋭い眼で強く川上を見据えて言った。妹紅も少々驚いたように慧音を見た。

「彼が子供の頃から私は知っているし、勉学も教えた。彼は強く、心ある男だった」

川上は慧音に取っても浅からぬ仲の人間の仇なのだ。自身が殺した縁者の怒りにさらされた殺人者はしかし。

「ふうん」

どうでも良さそうに鼻を鳴らしたただけだった。

「お前、人間か？」

妹紅はそう侮蔑を込めて川上に言った。

「ならどうしろと？」

それに対して川上は問いを返した。

「殺しておいてから、申し訳ないと謝れと？」

三本目の煙草に火をつけながら言う川上の口調は何処か吐き棄てるかのようにだった。

「お悔やみの言葉の一つでも言えばいいのか？」

「生憎、殺した相手の事などどうでも良い」

その言葉を最後に部屋には暫し沈黙が流れた。

最初に口を開いたのは妹紅だった。

「慧音」

「殺そう」

それに慧音は俯き首を振った。

「いや」

慧音は顔を上げて川上に言った。

「外の世界に帰れ」

それは命令口調であつた。妹紅がちつ、と小さく口の中で舌打ちした。

「君は人を不幸にする」

硬く冷たい声で慧音は続けた。

「君のような人間がいれば必ず紅魔館にも災いを呼ぶだろう」

慧音は言つた。レミリアは川上を業物であると考えた。慧音の評価は違う、この男は災禍を呼ぶ妖刀だ。

「ここに君の居場所はない。元いた何処に帰れ」

「ならば何処にならある」

慧音の言葉に川上は口の中だけで小さくそう言つた。自問じみたそれに慧音には聞こえなかつたが妹紅は微かに聞いた。

「話はそれだけだろうか」

川上の言葉に二人とも答えなかつた。川上は最後に深く一服すると煙草を消して刀を取り立ち上がった。

「失礼する」

それだけ言つて退席しようとした川上だったが。

「——わきまえろよ」

その背中に唐突に言葉を投げかけたのは妹紅であった。川上の足が止まる。

「無い。お前みたいない日陰者はお天道様に背を向けてやっていくしかない」

それは川上に向けた言葉であるが、同時に人としての道を外れた妹紅の生涯から溢れでた言葉だったのかも知れない。

「お前みたいなのが我が物顔で日向を歩けると思うな——身の程を知れ」

妹紅のその言葉を背を向けたまま最後まで聞き入れると、川上は何も言わず今度こそ退室した。

残された二人の間には後味の悪い空気だけが残った。

第129話

紅魔館、客室。

誰も使っていない空部屋のうちの一つ。そこで一人の男がソファアールで寛いでいた。

ソファアールに刀を立て掛け、片手の指に挟んだ両切り煙草を深く一服し紫煙を吐く、その男は据わった三白眼にダークスーツ。眼付きや濃い煙の為か退廃的で陰惨な雰囲気纏う紅魔館使用人である川上だ。

彼は自分の分の仕事を終わらせて、休息していた。また愛呑煙草のゴールデンバットを一服すると自分で淹れた不味いブラックコーヒーを啜る。

休憩ならラウンジでも出来るがまず誰も来ないだろう空部屋で寛いでいるのはそういう気分なのだろう。彼は眠たくなつたのか数回瞬きをした。

川上は最後の一口を吸うと灰皿で煙草をもみ消し、コーヒーに手を伸ばした。その時ピクリと彼の視線が反応した。

少しして、コーヒーを口にしたタイミングでドアが叩かれた。川上は開いている、とだけ応じた。別にここが彼の私室ではないのだが。

あまり音を立てずに入室してきたのはメイド長の十六夜咲夜だった。仕事中心なのか

手には掃除道具が一式。

「寛いでいる所悪いけれど掃除してもいいかしら？」

「構わない」

咲夜の問いに川上はそう返した。実の所咲夜は短時間でこの部屋に二回入室していた。何時もの流れで時間停止で移動していたが誰もいないと思つた部屋に川上がいたので一旦退室。時間停止を解いて改めて入室した。

しかし、人がいたなら別の部屋を先にして後回しても良さそうだが咲夜はそうはしなかつた。

咲夜はそれ以上何を言うでもなく部屋の掃除に取り掛かる。川上も何も言わずまだ熱いコーヒーを少しずつ口にした。

窓ガラスを濡らした新聞紙——銘柄は文々。新聞とある——で拭いている咲夜を尻目に川上は煙草に火をつけた。掃除をする他人など寛いでいる所には煩わしいかも知れず、川上は部屋を変えても良さそうだがそうはしなかつた。

やがてコーヒーを飲み干し、ソファーに座つたまま川上が寝息を立て始めたころ。手際よく咲夜は掃除を終わらせた。

「良く寝るわね」

咲夜は川上を見て極めて小さく呟いた。彼は暇があると良く寝ている姿を見る、何かあるとすぐ起きてしまうがその変わり良く寝ている印象が強い。昼寝、夜寝を合わせれば一日少なくとも12時間は寝ているのではないか。

咲夜も時間停止移動で自分の分の紅茶を淹れると、川上の隣に一緒に座った。あまり慎重になり過ぎない程度に静かにしたが寝入った川上の呼吸は乱れず起きなかった。

「随分安心してくれたのかしらね」

最初に比べると本当に無防備な所を見せる事が多くなった。川上は武を学ぶ以上安心は出来なくなつていったのだろう。安心だと思えば危険へと近づく事になる。

しかし、彼が安心する事が無かつたのは何も武を学んだ上での危機管理だけでは無かつたのかも知れない。咲夜はふと思う、安心などは程遠かつた自分の子供の頃を。

果たして川上はどんな子供の頃を送つてしまつたのだろうか、親はいたのだろうか？ どう扱われたのだろうか？ 咲夜はそんな事を思う。

少しは安らぐ事を覚えてくれたなら良いのだが。ここまで無防備なら咲夜がその気なら今ならほぼ確実に川上を殺れるだろう。

その上で安心して寝ているのなら良い。だが別に殺られても良いで寝ているなら少し寂しい。

咲夜は川上に手を伸ばし、肩に触れた。川上の呼吸が変わる。

「大丈夫よ」

そう言つて咲夜は川上の身体を自分の方に優しく引き寄せた。

「おっど」

そして、とさりと座っている自分の膝の上に川上の頭を横向きに納めた。膝枕状態。

川上は特に抵抗はしなかった、ただ半眼を開けてボンヤリ状態を見ている。咲夜は川上の頬を慈しむように撫でた。

さあ、どうするか。嫌がつて逃げるか、それとも……

川上はゆっくり目をつむり、静かに再び寢息を立て始めた。

よし。

そう咲夜は内心で小さく喝采を上げた。

思えば咲夜が人間に対して害意を抱くのではなく、守つてあげたくなったのはこの男が初めてだったのかも知れない。

なお、川上が咲夜の想像以上に熟睡してしまつたため、咲夜はこの状態で二時間動けなくなつた。

博麗神社、境内

一人の人物が歌を口ずさみながら歩いていく

「el a t y r i a f a i r y t a l e c o t t o n o s d i a s
d a e h d a e d y m」

明るく長い金髪をリボンで房に分け、帽子を被っている。顔付きは幼さを残した可愛らしさと美しさに何処か不吉な妖艶さを匂わせる。

「d i a m y r r e m e r r y m a d e c o t t o n o s d i a s
n o o m r e v l i s

絹製のロングの手袋に、フリルをあしらった紫のドレス。日傘を差している姿はスキマ妖怪である八雲紫であった。

「s y o b e l t t i l y n a m d e l l i k r e h t o m y m
r e h y b d e r e d r u m s a w l o s l a d n a」

彼女は不思議な歌を歌っていた。意味の通らない単語や音の羅列を鈴を転がすように可愛らしく歌っていた。不思議な印象の歌である。

「e l a t y r i a f a i r y t a l e c o t t o n o s d i a s d
a e h d a e d y m d i a m y r r e m e r r y m a i d c o t
t o n o s d i a s s l a b e y e y m」

そして最後まで何処か幻想的な調の歌を終えると歩みを止め。紫は声を掛けた。

「ご機嫌よう、霊夢」

「はい、こんにちは」

紫の挨拶に対する霊夢の答えはいかにも歓迎していないというかのように素っ気なかった。

「何の用」

「あら、用がなきや来てはいけないかしら」

「あまり来て欲しくはないわね」

一見聞けば険悪なようにも思えるが、実際は軽口の応酬であった。ここまで気安く雑な対応が出来るのはある種の信頼関係の証であろう。

「まあ、用が無いわけじゃありませんけどね。これ新しい資料です」

そう言って八雲紫が渡したのは、最近入ってきた幻想郷の住人の中で危険度がある程度以上の者のパーソナルデータだった。もしもの非常時に霊夢が屠るのに必要なものだ。

「ちよつと、こんな所でそんなもの出さないでよ」

「私と貴女の二人が居て誰かに見られるような下手を打つと思って？」

幻想郷において文字通りトップシークレットの資料を気軽に外で出した紫の迂闊を

霊夢が咎めるが紫は悠然と受け流す。

「いつも通り蔵で目を通したら、保管しておきなさい」

「はいはい」

幻想郷において誰にも知られず目に触れる事のない聖域。観覧も保管もそこでするようにと軽く紫は釘を刺す。

「あと……そうですね、里で最近反妖怪を掲げる組織がきな臭いわ。そろそろ動き出すかもね」

「はいはい、その時は潰しておきます」

紫の報告に霊夢は面倒そうに答えた。人間が反乱などしたら微妙な幻想郷のバランスは崩れるだろう、霊夢としても処理しなければいけないタスクだ。

「後は人間を辞めかか……つてる人が一人」

「あー、それも見過ごせないわね。何になりそう?」

幻想郷において人里の人が妖怪になるのも禁忌。その管理も博麗の仕事だ。

「そうですね、斬神かしら?」

「神?それは大層な大物がいたものね」

「ただ、こちらは別に里の人間ではないし……まあ、今すぐ何とかしなくても時期が来るわ」

「はあ、時期ねえ」

紫の何処か謎めいた、意味ありげな言葉に霊夢は適当に返事をする。この妖怪はいつも含みがあるような言動をするので一々食いついてたらキリが無いのを霊夢は理解していた。

「話がそれだけかしら？なら私はこれを納めてくるけど」

「ええ、お疲れ様。私もそろそろ帰りますわ。藍が御飯を作ってますので」

そう言い交わすと、霊夢はさっさと踵を返した。本来持ち出し厳禁の資料を長々と外で持ちたくないのだろう。

紫も何処か不吉で妖艶な笑みを口元に湛えたまま、歩き出した。日傘を差しまた不思議な歌を口ずさみながら。

第130話

その日、紅魔館ではレミリアが退屈を持て余していた。

そんな時ふと思いついたレミリアの、今日はパーティーをしましょうの一言で今夜の庭での催しである音楽会が決まった。

紅魔館では良く立食パーティーを催す事がある。なんだかんだと賑やかしいのが好きな妖精メイド達へのレミリアの粋な計らい共言えるかも知れない。

最近は夜はだいぶ涼しくなってきたので庭での音楽会という事になった。

突然に決まったパーティーに咲夜達以下メイドは準備に奔走する事になる。料理を用意し、庭にテーブルを用意して、ワインを冷やしと。途中で空部屋で昼寝していた川上も咲夜に起こされ、食材を高速で捌き刻む手伝いをした。

そして、日が落ちてすぐ、まだ僅かに西の空に赤みが残る頃にパーティーは始まった。広い庭には涼しい風がが通り、円形のテーブルにオードブルなど様々な料理と酒が並べられた。

レミリアはメイド達が皆思い思いに楽しんでいるのを見渡して、サーモンのカルパッチョを口に運んだ。側に付いた咲夜が自然な所作でワイングラスに冷やしたワインを

注ぐ。

ややピンクがかかった薄い緑の透き通ったそれは白ワインである。普段血を意識して赤ワインが多いレミリアには珍しい。

レミリアは両手でグラスを包むようにして取り——彼女は手が小さい為かグラスやカップをこのように持つ愛らしい癖がある——一口飲んだ。

「美味しいわね」

「お気に召しましたか」

一言そう言った後、レミリアは西の空を仰いだ。

「綺麗ね……今日は宵の明星が一際明るいわ」

レミリアの言う通り日没間もない西の空では金星が一際大きく輝いていた。

「ええ、本当に綺麗ですね」

「そうね、今夜は楽しい夜になりそうだね」

レミリアは機嫌良くそう言った。

外からはパーティーの喧騒とそれより響いてくる妖精メイド達が演奏するヴィオラやチェロ、バイオリンと言った弦楽器の音が聞こえてきた。

川上は私室でパーティー会場から拝借してきたクラツカーオードブルの大皿とシエ

リー酒を一瓶テーブルに置き、ベッドに腰掛けると一息ついた。

グラスを立て、シエリー酒のボトルを取ったところで彼はコルク抜きがない事に気付く。

取りに行く事も考えたが、思い直し川上はテーブルの上のボトルのネック目掛けて座ったまま左腕を振るった。

左の手刀でポキリとあつさりネックとボトルの付け根部分でネックが折れ飛んだ。ボトル部分は微動だにしなかったが、ネック部分中程まで酒は詰められてた為に溢れた分がテーブルを濡らした。

まるで競技格闘の空手家の試し割りじみた事をした川上であつたが、濡れたテーブルを見て見世物芸を実用にするものではないなと思つた。小さなハンマーでもあれば誰でも出来る事を手刀でやる能率の悪さは考えれば小学生でもわかる。

川上はネック部分を無くしたボトルからシエリーグラスに注ぐ。麦わらのように黄色がかった液体を眺めて、軽く深みのある香りを気持ち楽しんでから、一口飲む。フルーティーな香りが鼻に抜け、軽い渋みと熟成した甘みを感じる。

このような酒はあまり飲み慣れない川上であつたが美味しいな、とそう思つた。クリームチーズとサラムの乗ったクラッカーを一つ口に運ぶ。

美味しいオードブルに上等なシエリー。遠くから微か音楽会の演奏が聞こえてくる一

人の部屋。彼はパーティー会場に居ないにも関わらずパーティーを楽しんでいる。

物事の捉え方、楽しみ方はいくらでもあるということである。

そうやって彼が一人でパーティーを暫し楽しんでいた後に来客があった。

「お兄様、居るの?」

「ああ」

フランドール・スカーレットであった。どうやらパーティー会場に参加していないのは何も川上だけでは無かったらしい。

「お邪魔していい?」

「構わない」

川上の了承を得て、フランドールは川上の部屋に入室してポスリと川上と同じベッドに座った。

「呑むか?」

「……機嫌良さそうだね」

シエリーグラスを傾けて言った川上の勧めには答えずにフランドールはそう言った。フランドールには川上が普段と変わらぬようで、しかしどこか上機嫌に見えた。

それもおかしな事ではないだろう。彼はパーティーの夜を楽しんでいるのだから。

しかしそれを聞くという事はフランドールは川上と違い、楽しんではいないのか。

「外はみんな楽しそうだね」

「ああ」

フランドールの言葉に相槌を打ちつつサクサクと川上はクラッカーオードブルを咀嚼した。

「私は最近偉くなったからパーティーにも参加していいって」

「今日もお姉様に誘われたの」

くっ、とシエリーグラスに口をつけ飲み干すと川上は聞いた

「参加しないのか」

「皆楽しそうだよね」

川上の問いには答えずフランドールは繰り返した。

「私も一緒に皆と楽しんで、だけど気付くの」

「一人なの」

川上はグラスを空けるとネックのないボトルからシエリーを注いだ。

「皆一緒なのに、一人だって気付いて。最初から一人でいるより寂しい」

「だから、ね。寂しくても最初から一人の方が辛くないの」

「今は俺といる方がいいのか？」

川上はオードブルを摘む手を止めて煙草を取り出し啜えながら尋ねた。

「貴方は、二人でいるのに一人だから気が楽。不思議ね」

フランドールはベッドの上で両足を抱えながら、少し禅問答じみた事を言う。

ふと、川上が煙草を吹かしながらフランドールの腕に手を伸ばした。手首を掌握するとフランドールはかくりと横にバランスを崩してコロんと倒れて頭が川上の膝に納まった。

「……何？」

川上は気紛れを起こしたのであるか、すつ、とフランドールの頬を指で撫でた。あんまり彼の方からスキンシップはしてこない事を知っていたのでフランドールは少々目を丸くして言った。

「パーティーが終わったら姉にでもこうして膝をねだると良い」

川上は煙草を揉み消しシエリーグラスを傾けつつ言った。

「案外気分がいいもんだぞ」

川上の膝の上でそれを聞いて少し驚いたフランドールはクスクスとここに来て初めて笑った。

「お兄様、案外甘えん坊なんだ」

それには答えずに彼は上機嫌にクラッカーを口に運んだ。

夜半まで続いた夜のパーティーは終わり、川上や咲夜、メイド達による後片付けも終えた深夜。

一人ラウンジでブランデーをストレートで舐めるようにゆっくり楽しんでいた。

パーティーの夜に一人呑み直しているように、川上は度々深酒をしているように見えるが実は彼は常に呑むペースをかなりセーブしている。それも常在戦場の心得なのだろう。

ふと気配がしたが川上は特に顔を上げなかった。

「ずっと妹様と居たけど、音楽は嫌い？」

パーティー中、咲夜は輪から外れた二人を気遣ってか、煩わしくない程度に川上の部屋に給仕に来ていた。川上の方はそこまで気遣かわずとも良いと分かつてはいたが。

「どうだろうか？」

川上は干し肉を千切ってチビチビ噛みつつ首を傾げた。どうやら考えた事もないという様子。

咲夜はラウンジの奥に歩いて行った。そこには一台のグランドピアノがあった。普段は誰も滅多に弾かないが。

咲夜は一つの鍵を取り出すと鍵盤蓋に掛けられた錠を外して開けると鍵盤を保護するためのカバーであるピロードを取り去った。ポンと鍵盤の一つを押し込み音を確か

めた。

咲夜は何も言わずにピアノの前に座り、しなやかな手を鍵盤の上に乗せた。川上も何も言わずただブランデーをちびりと舐めた。

咲夜の指がゆっくりと鍵盤の上を踊り曲を奏で始めた。繊細で優しく。何処かノスタルジックでもある旋律。

近代における作曲家モリス・ラヴェルが学生時代書いた名作『亡き王女のためのパヴァーヌ』

川上は咲夜の奏でるその旋律に耳を傾けながら、目を閉じた。

第131話

その日、十六夜咲夜は買い出しに出ていた。

いつものように人里で手に入る食料や生活必需品を買い足し。ついでに道具屋などで何か面白いものはないかと見て回り。昼食を食事処で摂る。

これも咲夜にとって仕事の一環ではあるが、何だかんだで羽を伸ばせる時間である。こうして外にたまにでるのも気晴らしになり好きだった。

昔は人間は嫌いだったが、幻想郷の人里では馴染みの店の店主や多くの人と顔見知りになり人懐っこく挨拶を交わし軽く雑談にも興じる。

異端の奇術を使い、血に汚れ、悪魔に跪く咲夜を恐れも避けもせず当たり前のように接してくれる人々は多かった。そういえばあのめんこいお嬢ちゃんも最近みないけど元気かい？などと店の中年に聞かれ咲夜は思わず笑ってしまう。夜の女王レミリアの事を言っているのだ。

地の底を這い、泥を啜る。地獄から咲夜を救い出したのは神ではなく悪魔だった。

そうしてこのような人々と出会えた今の幸福に、悪魔レミリアに咲夜は感謝をしていた。

そうして、必要な買い出しを終えて咲夜は里を出て帰宅の途に着く。紅魔館とは対し

て離れておらず、徒歩なら三十分な道だ。飛べばもつと早く、能力を使えば対外的な移動時間は零となる。

しかし、咲夜は飛ぶ事もせずに道を歩いた。林の中で立ち止まった。

人里にいた頃からずつと、段々と強くなっていく背中にピリピリと感じていた敵意。恐れ、嫌悪が混じった、咲夜にとっては懐かしいものだった。

これを放つておいて持ち帰るわけにもいかなかった。

「私に何か御用でしようか」

咲夜が背後に冷たく硬い声色で丁寧に告げると、男達は姿を現した。

咲夜は目線を走らせ数える。多い、両手の指では足りない。見えるだけで15、いや16か。

敵意は膨れ上がって明確な殺意に近いレベルで咲夜に向けられた。まさか、本気で殺し合うつもりで。そう咲夜は考えた。

平穏な日々で咲夜自信も少し平和ボケがあったのかも知れない。咲夜は自嘲する、あの子を見習うべきだなと。

「こちらが言いたい事は一つだ」

先頭に立った三十代後半と思わしき男が言った。

「紅魔館に清水と名乗る男がいるだろう、その男を引き渡して貰いたい」

咲夜は首を傾げた、何の事だと考えて、ピンと来た。偽名？川上の事か？

「何の事でしよう？」

しかし、咲夜は何もわからぬと応じた。

「白を切る必要はない。黒い洋装。刀と長刀の二口。気味の悪い目付きをした男。あんな達の所にいるはずだ」

「何か勘違いしているのでは？紅魔館に清水という人物は居ませんが」

男の追求に咲夜は、相手の言う清水が間違はなく川上の事だと理解したがしかし、毅然と、冷静に答えた。嘘ではない。その男を咲夜は知ってはいるが、少なくとも清水いう男は紅魔館には居ないのだから。

この連中は単純に川上に対する敵視だけで動いてるわけでは無さそうだ。咲夜はそう思った。何故なら先程から咲夜に向けられる皆の害意、悪意はある種純粋だからだ。咲夜はこれをよく知っていた。川上はどうも面倒な連中の恨みを買ったらしいと理解した。

片方が詰問し、片方は否認するという状況を破ったのは別のまだ若い一人が発した一言だった。

「しらばっくれるな！穢れたコウモリ妖怪のい」

彼の言葉は最後まで発する事は無かった。言い切るより先に咲夜の投げ打った銀の

スローイングダガーが彼の眉間を貫いて即死させたのだ。咲夜が主人を愚弄する者を生かしておく訳も無かった。

どさり、と一人が倒れたのを見てもあまりに一瞬の出来事に皆何が起こったか把握するのに数瞬かかった。悠長な話である。咲夜がその気ならこの時点でもう全滅していただろう。

「貴様……」

「清水という男は知らないし。仮に居たとしても貴方達に引き渡す理由も義理もないわね」

気色ばむ男達の前で悠然と髪をかきあげながら咲夜ははつきりと言った。

「帰りなさい。それとも土を還る？」

「話合うなんざ最初っから馬鹿馬鹿しかったな」

咲夜の言葉に応じて。男達の皆刀や合口、槍を抜き臨戦態勢に入った。

「てめえらみないな人間の癖に妖怪共のいいなりになるような屑共がいるのが悪い。てめえの首を宣戦布告の狼煙代わりにしてやるよ」

その言葉に咲夜は応じる何処では無かった。何故なら本来ならもう終わってるはずなのだ。くだらない口上を述べてる男の後ろに時間停止で移動して能力解除と共に刺殺。すぐにまた時間停止して次の男の後ろに移動し解除し刺殺。これを機械的に15

回繰り返して終わりなのだ。

なのに……

「何を、したの？」

止まらない。能力が使えない。いつも当たり前のように使っている腕、その腕の動かし方が急にわからなくなったように能力が回らない。

「ご自慢の奇術はどうやら確かに使えなくなったようだな」

男の一人が優位を悟り顔をニヤけさせながらそう言った。

「……………どういふ絡繰かしら？」

「どんなすげえ手品だつてタネが割れてりや大した事はねえと思わないか？てめえは奇術師としては三流もいとこつてことよ」

「そしてこつちはタネは明かすつもりはないぜ！」

その言葉と共に一人が咲夜に向かい刀を振り上げて躍りかかった。敵の生命線である能力さえ封じたいま、彼我の戦力比は1：15勝ちは確実である。

そう皆考えていた。

躍りかかった男はダガーの投擲でカウンターで喉を貫かれた。その時にはもう狼のように飛び掛った咲夜のナイフがさらに二人の男の喉を食い破った。

3人が血飛沫を上げて倒れ伏せる中頬を返り血で染めた咲夜は左手に銀のダガー。

右手にステンレススチールのハンティングナイフを構えて悠然と立っていた。口元に氷のような笑みを浮かべて。

「タネを封じれば奇術師は何も出来ないとも思った？」

咲夜が告げた。残りの男達は総毛だった。ヤバいと。

「例えタネが割れていても驚かせるのが一流。一流の切断奇術、御覧頂きますわ」

能力を失つてもなお折れぬ。諸手に狼の牙を煌めかせて咲夜は地を蹴った。

長物を持つ男達の攻撃。咲夜は鋭いフットワークで囲まれぬように動きながら、剣をそのしなやかな体捌きでかわしながら距離を詰めさま相手を切り刻んだ。槍使いが近づいてきた所を左のダガーの投擲で首を貫く。

「うちの猫の動きに比べれば欠伸が出るわね」

言つて、咲夜は一人の鳩尾を一突きにする。一人、また一人とやられていく。異能を奪えば能力者など取るに足らないと考えた男達の短絡的思考であった。

十六夜咲夜の戦力も、彼女を育んだ骨子も確かに生まれ持つての能力だったかも知れない。

しかし十六夜咲夜の人間性は決してそのような所にはない。

だが、戦力はちゃんと揃えておいたのは男達にとって幸いであつただろう。

数に物を言わせた波状攻撃は時間停止を行えぬ咲夜にとって一瞬たりとも油断出来

ぬ綱渡りだったのだ。そしてほんの一瞬の息の切れ目。

一人が低く薙ぎはらった槍の穂先が咲夜の膝下を割った。

幸い深くはなかった、しかし一瞬足は止まってしまった。横合いから斬りかかってきた男に咲夜は咄嗟に左に構えていたナイフを投げ打ち倒したが、後ろから組みついてきた男に地面に引きずり倒された。最後の予備ナイフに手を伸ばそうとしたが捕まれうつつ伏せに潰されたまま腕を捻り上げられて完全に極められた。

「終わりだ」

その時に残っていたのは僅かに三人である。咲夜は聞こえないように舌を打った。あと僅かな所で不覚を取った無様。

「それで、どうするの?」

絶対絶命の状況で咲夜は笑みすら浮かべて自身の背中へのしかかる男に聞いて見せた。

「ハッ! 指先からあんた自身のナイフで切り刻みながら死ぬまで犯すつてのはどうだ?」

「いや、とりあえず生かしておいた方がいい。吸血鬼との交渉材料になるはずだ」

人の男が言った下劣な提案に、咲夜を拘束に成功した男が冷静に反論した。

「こいつがどれほど重要視されてるかによるが、指や耳を切り落として見せれば反応で

解るだろう」

まさに絶対絶命。咲夜は完全に固められておりこれ以上の抵抗は、例え能力が使えても腕を捻り上げられてる以上無理だ。

無論この場に都合良くヒーローが通りすぎる、などと物語のようないろんなことが起こるはずもない。

しかし

都合良く通りすぎた訳でもなければ

ヒーローでもないその男は

現れた

ピクリと反応したのは咲夜を拘束した男だ。煙草の匂いだった。

顔を上げると一人のダークスーツに身を包んだ男が啞え煙草でこちらに歩いて来ていた。

レミリアに咲夜の後を追えと命じられた川上であった。

黒服に背中と腰に刀を差した男をみて、その場の三人の男の顔色が変わった。

「背中の野太刀に黒い洋装！」

「清水か!?!」

咄嗟に咲夜の上にのしかかっていた男は咲夜の腕を極めたまま立ち上がり、咲夜を川上に向け自分の目の前で固め技をかけ動けなくした。腕を極められ重心を浮かされて咲夜は小さく呻いた、男は柔に長けているようだ。

「やっぱりこいつの所だったか」

川上の目線が周囲の死体を一通りなぞった後、咲夜を見たのを確認して男が言った。

「よりによつてこのタイミングで……」

「落ち着け」

一人が川上を前に狼狽えかけた所で、咲夜を拘束した男は冷静に言った。

「むしろ都合がいい。鴨が葱を背負ってきた」

そう言つて男は片手で巧みに咲夜を固めたまま、片手で合口を抜き咲夜の喉元に突きつけた。残りの二人が刀と槍を構えその両脇に立つ。

「ふ、ふふ」

その行為に思わず咲夜は笑いを零してしまった。男は若干怪訝な顔をした。

「馬鹿な人……」

咲夜は小さく呟いた。この男の行動、川上に対して咲夜を盾にするまでは——もつとも今の川上の斬撃に人一人など紙切れ程度の盾にもならないが——まあ、いいだろう。

だが、武器を相手に向けず盾に向けてどうするのだ？まさか、この男は川上に対して

咲夜を人質として利用するつもりなのか？

馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しすぎて咲夜が笑うのも無理はないだろう。あの男を前に武器を相手から外すという愚。

どうやらここで死ぬ事になりそうだと咲夜は理解した。彼が斬る相手の前に立つていればどうなるかなんてわからぬ道理が無い。

まあ、少し

多分ないだろうけど、助けてくれるんじゃないかという期待が自惚れだと分かつてはいるけど。

「この女と一緒に来ても」

らう。とでも続けるつもりだったのか、男は言い切れず吹き飛ばされ、合口が宙を舞った。瞬きの間に距離を潰した川上の前蹴りが盾の咲夜ごと炸裂した。使った技法は透かし、浸透勁。エネルギーは咲夜を貫き、背中で密着していた男の腹に伝わった。その透かしの蹴りを直撃された咲夜は苦悶の声も上げずにその場に倒れ伏した。

即座に抜刀、右の男の眉間を深々と切り下げ脳を破壊した。同時に、左手が左の男の首を掌握。指が男の喉仏の軟骨を潰して引き剥がした、窒息し、左右の男はほぼ同時に倒れた。

川上は落ちてきた合口を左手で掴み取ると。地面で悶絶している咲夜を盾にした男

の顔を掴み、首に合口を当てると刃を鋸引きのように往復させて前三分の一程度切つて立ち上がり、合口を捨てた。

男は首から血を勢いよく零すが、頸動脈に達してない半端な傷故男の体は必死に呼吸しようとし、プピューツ！プピューツ！と詰まった笛のような音を立てた。血に溺れて窒息死するのが先か、出血によるショックが先か、そう長くはないだろうが意識のある男にとっては死ぬまでの時間は悪夢だろう。

一瞬、失神していた咲夜は腹部を押さええながら顔を上げるともう終わっていた。自分も死んだかと思つたが急所を外したらしく蹴りのダメージは深刻なものでは無かつた。

「立てるか」

いつもの無表情で刀を拭いながら川上が聞いてきた。彼は手を貸しもしない。

「立てるわよ」

そう言つて咲夜は若干ふらつきながら立ち上がる。先ほどの三人を見る、一人はもう動いていない。もう一人は喉を掻きむしっていたが、窒息して顔が紫色になって動きが弱々しくなっていた、もう助かるまい。

そして体をいも虫のように丸めたり反らしたりしながら出来損ないの笛のようになつて一人を見て流石に咲夜も若干引いた。

「あの、あれは止めを刺したほうが」

「必要ない」

川上はもう興味がないという風に納刀を済ませ煙草に火をつけていた。咲夜は一つため息をつき、スピアのナイフを抜くと哀れな一人に自分で慈悲の剣を刺した。

「戻るぞ」

「その前に」

踵を返しかけた川上に咲夜が呼び止めた。

「買物袋とつて来てくれる？あそこ」

咲夜の指差した先には少し離れた所に人里での買い出しの品が詰まった袋があった、結構大荷物だ。

無言で川上は歩いていき袋を持った、その背に咲夜が言った。

「川上」

「ありがとう」

これは流石に

助けてくれたって、解釈していいのよね

そう咲夜は思った。

第132話

紅魔館、客室。

川上は一人。部屋の真ん中で佇んでいた。

目を瞑り己を見直す。そして目を開けると同時。腰の刀が閃いた。

装飾品として飾られた壺が机ごと両断された。スプリングに入ったベッドが真ん中で分断されゴツと切り口が床に当たる。机が斜めに二分割され、椅子が四つに開かれる。

棚に置かれた数多の蒸留のビンが纏めて一刀のもとに切り断された。

焼き物など刀では本来斬れぬものすら斬り。金属部品ごと家具を全て両断する。もはや物理的に不可能だとしか思えぬ斬りをなす川上。

しかし

刀を、固山宗次を改める。刃が細かく溢れていた。そして刀身の中程には刃から峰方向に走る一つの亀裂。刃切れが生じていた。

それは折れる前兆の疵だった。あれ程無茶苦茶な斬りをすれば当然の事、いやむしろ折れぬ事が不可解なくらいだ。

もう少しだと思ったのだが。

川上はそう思った。ずっと工夫し続けていた一太刀。あともう一步が進めればと練り続け、ついには鬼を斬った。

しかし、この体たらくはどうだ、一步進んだと思つたら三步下がってしまう。明らかにあの時の剣の冴とは比べものにならない。

遠くなつてしまった。川上はそう思いながら刀を納めて煙草に火をつけた。

あの日、あの時反妖怪組織達と交戦した咲夜が命の危機から逃れられたのは運命の目を読むレミリアのお陰であつたと言えるだろう。幸い膝下の傷も浅手であり手当も済んだ。

彼らはおそらく人里に少数いる妖怪に恨みを持った過激派であろうという事は咲夜も彼らの言動から読み取れた。

咲夜は事情を正直に報告した。川上を目的としていたらしい事。自分の判断で交戦した事。そして彼らが何らかの手段を用いて咲夜の能力を封じた事など。

「ふーん」

レミリアは何処か不機嫌そうに足を組んで椅子に座り、川上と咲夜の事情説明を聞いていた。

「で、貴方はその連中に恨みを買った心当たりはあるの？」

「以前確かに妖怪を目の敵にするような事を言っていた連中には会った」

「で？」

「試し斬りに使った」

レミリアの問いかけに川上はそう答えた。咲夜は呆れたように首を振り。レミリアは一つ頷いた。

「そりゃ恨みも買うでしょうね」

レミリアの言葉にもっともだという風に川上は頷いた。自身の行為によりレミリア達に累が及んでいる自覚はあるのだろうか。

丁度、先日慧音な言われた通りになりつつある事に。

「今回のも咲夜が殺しちゃったし、そいつらも黙ってないでしょうねえ」

軽く上を向いて考える様子を見せつつレミリアがのんびりした口調で言う。その時一番に反応に見せたのは川上だ、それまでレミリアと向き合っていたのだがすぐに横に向き直った。

その様子を見て咲夜が、次いで驚いて数瞬遅れたレミリアがそちらを見た。

「では彼を何とかすれば宜しいのではないでしょか」

そこにいつの間にか立っていた、綺麗な顔立ちに不吉な微笑みを浮かべる八雲紫が横合いから意見してきた。

彼女相手に何処からいつ入ったのかと問う事は愚問である。しかし、川上以外の二人はあからさまに警戒を露わにした。

「八雲紫……何をしに来たの、呼んだ覚えはないのだけれど」

レミリアが驚愕を見せながらも、お呼びではないと言つてのける。無論この登場に不穏なモノを感じているのは明らかだ。

「呼ばれた覚えもありませんわね。まあ、今日はちよつとアドバイスというか提案しに来ただけですわ」

「頼んでいない。だがまあいいわ言いたい事があるなら聞こうじゃないの」

悠然とした態度の紫に、レミリアは一旦落ち着いて寛大な対応を見せた。英断である、この老獪な相手にムキになればアツサリとこの場のペースは持つて行かれるだろう。

咲夜はもしもの時レミリアを守るようさりげなく立ち位置を変え、川上は眠たげな眼で煙草を啜えて火をつけた。

「有り体に言えば、彼が狙われてる限りこの館も彼自身も危険ですわ。ならば一つに彼

に外の世界に戻つてもらおう事」

「彼はもう過激派の方々に追われる必要もなく。後は貴女方はそのような男など知らぬ存じぬで通せますわ」

紫の提案にレミリアは頬杖をつきふつ、と一つ鼻で笑つた。色々反論はあつたが先を促した。

「で、それだけ？」

「もう一つには貴女が彼を殺し。その首を土産に謝罪する事。こちらのほうが確実に向こうの溜飲は下がりますわ」

バキ、と音が立つた。咲夜がそちらを見るとレミリアは牙を剥くようなあからさまな怒りの形相を浮かべていた。彼女は椅子の肘掛を握り潰してしまつていた。

「私の大事な使用人を傷付けた奴らのために、私が自分で選んだ使用人を殺してその首を持つて驕りたかぶつた人間達にこの私が頭を下げると。そう言いたいのか」

「あくまで選択肢の一つですわ。選ぶのは本人。貴女です」
底冷えするようなレミリアの声にも紫は微笑みを崩さずに答えた。

それを見て激昂しかけたレミリアは一旦落ち着きを取り戻す。激情すれば相手の壺だと思ひ出した。

「なるほどね。全く意味のない選択肢の提案、礼を言うわ。ただ、まずもつて貴女がわざ

わざと口出しするほどの事かしら?」

「と、いいいますと?」

レミリアの言葉に紫は手にした雅な扇子で笑みを浮かべた口元を隠す、何処か妖艶な仕草と共に応じた。

「その程度の有象無象。何十人、何百人いるかしらないけど恨みを買おうが買うまいが私にとつては痛くも痒くもない、それだけの事よ」

「傲慢ですね」

レミリアの言葉に紫はそう言った。口元は扇子で隠されていたが目元は笑っていた。

「如何にも。そんなつまらない奴らより、私はこの子たちの方が可愛いよ。それが何が悪い」

「いいえ、何も悪くは無いわ」

レミリアの強い我の籠った言葉に紫はパチンと扇子を閉じて目を細めてニコリと笑つて応じた。

「ただ、先程も言ったように決めるのは常に本人次第です」

「川上さん。単に安全を考えれば貴方には外に戻るといふ選択もある、それだけを伝えておきますわ」

紫が登場してから我関せずと二本目の煙草を吹かしていた川上に向けて紫はそれを

言った。

「承知した」

川上はとりあえずと言った様子で返答だけした。紫の言動に少し眉を顰めたのはレミリアだ。

「理解出来ないわね。自分で連れてきて、帰れと言うの？」

「あら、私がいつ彼を連れてきたなんて言いましたかしら？」

レミリアは川上は紫の思惑で幻想入りしたものとアタリをつけているの言葉だったが、笑みを浮かべたまま紫は含みを持たせたように煙に巻くだけだった。

「では、皆様良く考えてみて下さい。私は失礼しますわ。御機嫌よう」

それだけを言い残し、八雲紫は彼女の代名詞であるスキマを開くと消えて行った。

後に残されたレミリアは不機嫌そうに鼻を鳴らし。咲夜は少しの不安を顔に浮かべて二人を伺い。川上は三本目の煙草に火をつけるだけだった。

第133話

「さて、と」

八雲紫が去り、微妙な空気が流れる中、レミリアは口を開いた。

「妙な横槍が入ったけど川上、貴方は」

レミリアは一つ間を置いて言った。

「あの女の戯言は一切忘れなさい」

川上は応じるように唾えた煙草を一つ上にピコリと上げた。

「あの女は何を企んでいるかわかったものではないわ」

レミリアは吐き捨てた。あの胡散臭いスキマ妖怪はここに介入してきて果たしてどんな意図があつたかわかつたものではない。

「あの女の言つた事に惑わされては駄目。決定的にあの女の考え通りに踊らされる事になりかねないわ」

「貴方は私が認めた男。有象無象の人間となど私の中では比べ物にならない、ただ一人の人間」

すつ、とここで初めて川上がレミリアの眼を見た。レミリアも川上の昏い眼を見据え

ていう。

「貴方は貴方の思うがまま好きに斬りなさい、生きなさい。私の元で」

「おいで」

レミリアは川上に向けて手招きをした。川上は煙草を消してレミリアの近くに歩み寄った。

「しゃがんで」

レミリアの言葉に川上は右の膝をつき座した。それは自身の上役に対して害意のない事を示す礼法。

「貴方が斬りたければ今私を斬ってもいい」

「斬れるものならね」

レミリアは立ち上がりながら川上を肯定し、彼の頭を抱きしめた。

「貴方はここに居てもいいの、それを忘れないで」

レミリアは幼いその姿に似合わぬような母性すら感じさせる優しい笑みで告げた。

レミリアが川上を離すと川上はレミリアの手を静かに取った。

そして川上はその手の甲にたどたどしくキスをした。

相手への敬意を表する礼法であるが、無論西洋式である。川上が学んだ礼法にそんな

ものがあるわけも無ければ使った事もないはずだった。

「ありがとう」

川上は一言そう言つて立ち上がると、一礼をして踵を返した。

「私も」

その川上の背に声をかけたのは咲夜であつた。

「斬つていいわよ、出来るのなら」

その言葉を背で聴いて川上は退室した。

「何、咲夜。妬いたの？」

「いえ、そういう訳ではありませんが」

レミリアのからかうような言葉に咲夜は答える。冷静なようで、僅かに面白くなさそうにも思える態度。

「本当は？」

「少し」

レミリアが追求すると咲夜はあつさり認めた。

「どっちに」

「どちらにもです」

その咲夜の明け透けな言葉にくつくつとレミリアは面白そうに笑つた。

その夜、川上はフランドールとチエスをした。

最初は手加減をしていた川上であったが、フランドールの飲み込みは早く、実力をどんどん上げていく故に川上も手加減していたレベルをどんどん引き上げなければならなかった。

その成長は、川上が手加減の程を見誤り負けるつもりでは無かったにも関わらずうっかり負けてしまう事も稀にある程だった。

その夜、川上はフランドールと本気で指した。

フランドールも実力を付けたが、川上はレミリアとも互角の実力者である。フランドールはかなり食い下がったが本気の川上には勝てなかった。

フランドールは連敗し、何度も挑むが勝てず。遂には痲癩を起こして川上の首に左手を伸ばし、投げ飛ばされた。

川上はそのままフランドールの襟首を左で掴み、壁に叩きつけるように押し付け左肘でフランドールの右肩の起点を抑え、右手で左腕に軽く触れて封じた。

「どうして……何度やっても勝てない」

フランドールはその状態で悔しげに涙を流して言った。

「勝ちたいか？」

川上は言った。

「ならば強くなれば良い」

「どうやって？」

フランドールの疑問に川上は一つ笑って言った。

「決まってる、研鑽すればいい。泣く暇があるなら練習だ」

「チエスで強くなりたければ、ただチエスの事だけをずっと考えて工夫し続ければいい」

「君の姉にだって勝てるようになるだろう」

そこに一切の淀み無く言い切る川上にフランドールは思う。

この人は何処か自分と似てて、でも自分とは決定的に違う。自分と同じく欠けている

はずの川上をフランドールは眩しく思う。

川上はフランドールを壁から解放した。

「私は」

フランドールは絞り出すように言った。

「私はどうすれば貴方みたいに」

川上は懐から煙草を取り出して啜えた。

「永らえてもみるものだぞ」

フランドールはその言葉の意味がわからず顔を上げた。
「良いものだな」

その時の川上はフランドールが初めてみるような笑顔を浮かべていた。
「強くなれ」

その笑顔とその言葉はフランドールの心に強く残る事となる。

咲夜はその夜、いつものように仕事を終えた。

見回りで皆が困っていないか、問題はないか確認する。パチュリー、地下図書館で研究に没頭している様子。むしろ集中しているので、小悪魔が付いているし自分が邪魔をしない方が良くと判断する。

フランドールは疲れたように寝ていた。起こさないようにお休みなさいませと一言かける。

川上はラウンジでウイスキーを嗜んでいた。つまみが必要か聞いたが、干し肉があるから必要ないと言われた。

美鈴は門前で立ったまま寝ていた。深夜であろうがいつでも、大した文句一つ言わずいつも門も守ってくれる彼女に感謝を心の中で抱き、咲夜は去った。

メイド妖精達は相変わらずだ。各々好きなように眠っていたり、まだ仕事していたりはたまたま遊んでいたりだ。ふと黒髪のセミロングの妖精が咲夜の目に止まった、彼女は深夜にも関わずただひたすらに短い木剣で型と思わしきものを反復していた。彼女は確か川上に懐いている変わり者だ、そう言えば少し昔に怯えていた彼女をここに連れてきたのは自分であつた事を思い出す。

くすりと、咲夜は笑つた。昔は凄い臆病な印象だったのに、川上にすら物怖じせずに向かつていく。強くなつたなと思つた。

レミリアは私室でチェスプログラムで一人遊びをしていた。御用の申しつけはないかと尋ねると今日はもう休んだ方がと言われた。

休んだ方がいいという言い方に少し引っかけかりを覚える。そんなに疲れて見えただろうかと気にしながら、咲夜は入浴して1日の汗を流した。

さっぱりとして咲夜は私室に戻り、ワイシャツ一枚の扇情的な姿で自身の少し癖のある銀髪の水気をタオルで切っていた。昔はこの如何にも人間離れた艶のある銀髪も嫌いではなかつた。だが、お嬢様が貴方は髪は綺麗だと言つて髪にキスしてくれた、それから自身の髪を少し好きになれた。

ふとその時咲夜の部屋の扉を誰かがノックした。珍しい事もあるなと思ひ、続けて誰

だろうと考えて、咲夜はピンと来た。

「川上？」

根拠は無かった、ノックのリズムとか音の具合から無意識化に判断したのかも知れない。ただ、意識的には咲夜は直感的に彼のような気がただけだ。

ガチャリと扉を立てて入室してきたのは果たして、川上であった、彼は腰ではなく右手に鞘ぐるみの刀を持って佇んでいた。

川上が咲夜の私室を訪れるのは初めての事だった。

「どうしたの？」

咲夜はそう言いながらドレッサーの前から立ち上がり、川上に歩み寄っていった。その途中で思い出す、そう言えばお嬢様に対抗するように自分を斬れみたいに挑発とも取れる発言をした事を。

まさかと思い、しかし彼が右手に鞘の方を前に抜ける形ではない状態で握られた刀を見る、斬りに来たわけではない……？

少し咲夜が思案した瞬間が命取りだった。

川上は何気なく一步の間合いを詰めると、咲夜の顎に手をかけ、口付けをした。

「?!」

咲夜が驚愕した瞬間、キスをされたまま川上は咲夜の左手首を掌握し、右手で左肩軸

を押して、そのまま流れるように咲夜を押して押し、すつとベッドに押し倒してしまつた。咲夜が全く抵抗出来なかつた辺り川上の体術が光る。

咲夜は混乱の極みに達していた、斬りに来た？ 斬りに来たのではない？ 犯しに来た？ いや違う求められてる？ つまり犯しに来た？

驚愕の中咲夜はかろうじて冷静さを取り戻す。普段はあまり自己主張をしない川上であつたが、しかしどうやらこれは咲夜は雌として求められてる事は理解した。

川上は刀をベッドの脇に置くとちゆ、と咲夜にもう一つキスをすると隆起に乏しい咲夜の胸に顔をうずめて額を擦り付けるようにした。

その猫のような仕草は完全に咲夜に甘えていた。

ああ、もう。

咲夜は思った。

不器用なんだと理解した、上手くは甘えられないのだと。自分もそうだから分かつた。

斬れとまで言ってまでおきながら流石にここまで求められて拒絶など出来ないだろう。

いや、咲夜も欲しかった。この不器用で必死な猫が。愛おしくて愛おしくてたまらな

「川上」

川上の頭を咲夜は優しく上げると今度は自分から彼にキスをした。

「来て」

そう言つて咲夜は川上は受け入れる為に両腕を開いて彼に向けた。

第134話

「もう、決まりだ！」

人里のとある屋敷のある一室。ダンと、一人が卓を叩き言った。

「清水だけじゃない、あの人殺しのメイド風情もだ！」

「くそっ！人間なのに妖怪側に付いて何故同じ人間を殺す！」

「狂ってやがる！」

清水の身柄は紅魔館とあると踏み、同じ人間であり一番話も通じそうなメイド長十六夜咲夜を狙い接触し交渉を仕掛けた半妖怪派組織の同士。念には念を入れ用心の為武装させた戦力を揃え、さらには例の御隠居の術師から入手した対人用の札まで用意。

その結果は全滅である。メイドは問答無用とばかりに攻撃を仕掛けてきた。札は確かに機能した、しかし、単純な体術のみでほぼ壊滅。全滅寸前でメイドを拘束に成功したかと思えば、最悪のタイミングで本命の清水が登場し全滅。

それが身を隠してあの場にいた監視連絡員の報告だった。最悪の結果である。

「あの悪魔の館の連中を皆殺しにするんだ！」

最悪の結果に組織の皆は狼狽し、次に怒りに身を任せた。清水、十六夜咲夜という妖

怪側の人間に期待を裏切られる形となったのだ。もはやこの二人の所属する紅魔館に襲撃をかけるべきだと多くの幹部、組員が主張した。

そしてリーダーの立見は今決断を迫られていた。ここで自分が是として領けば皆勇み立ち上がり紅魔館に向かう事に決まるだろう。

しかし、否として皆を諫めようとしたらどうなる？ おそらく皆の士気は一気に下がるだろう、恐らく立見のリーダーとしての信頼も地に堕ちる事になる。

立見は口を開いた。

「こちらの戦力は？」

「確実に動けるのは50〜60です」

こちらの戦力、あちらの戦力、こちらの武器。立見は考える。

まず、相手になるのは紅魔館の連中である、ほぼ妖怪と妖精。妖精は戦力などと考えるなくてもいいだろう。妖精は数から外して資料にあるのは門番の妖怪が一名。図書館の妖怪が一名に魔女が一名。人間が二名。吸血鬼の姉妹が二名。向こうの戦力は数では七。

妖怪が個人主義だというのはこの場合都合だろう。例えば紅魔館に襲撃をかけたところで他の拠点の勢力が介入してくる事はまずない。我関せずと傍観を決め込むだろう。他の拠点にも戦力を割り足止めをする、などという事は必要なく全ての戦力を一

つに集中出来る。

こちらの物量、そして虎の子の対魔、対人、対霊といった術式を展開出来る札。完全に相手の力を奪ってしまえば

勝機は……ある。

そして一つでも拠点を落とせば、人里の人間達も内心では現状に疑問を抱いてる者は多い。だが変えられるとも思えず現状に甘んじている。

そういった者たちに我々でも出来る、戦えるのだと示せば、恐らく立ち上がる者達は多い。

立見は英断した。

「皆聞け！」

「今こそ立ち上がる時だ！紅魔館を墮とす事が半逆ののろしとなる！」

立見は目を剥いて力強く叫んだ。

「戦うのだ！我々が！そして勝てるのだと示す！そうすれば我々人間達が皆立ち上がり、胡座をかいて油断していた妖怪共の鼻っ面を叩き折る事が出来る！」

「今こそ勝負どころだ！まずは紅魔館、敵はただか七人だ！勝てる！皆に通達しろ、襲撃に出る、戦力と武器を集める！目標は紅魔館だ！」

おおお！とその場にいた皆が武器を掲げて吼えるように立見に応じた。

「次の深夜から……ですわ」

彼はその朝、あの女からそう聞かされた。

彼はその日を何時ものように過ごした。食事を取り、咲夜の指示のもと、館を清掃する。昼にはアニスに稽古を付ける。

昼すぎにはサボって一人で気持ち良さそうに昼寝をした。夕刻にかけて時計台へと登り、一人稽古に励み、沈む夕陽を見ながら煙草を一服した。

夕食後に、仕事の続きを終える。咲夜に報告すると、彼女は背伸びをして川上の頭を撫でた、くすぐったかった。

川上は出来た余暇をレミアとチエスを指して。暫くして彼は風呂へと向かった。

そのまま入浴して1日の汗を流した。着流しを着て部屋に戻る。

彼は一服しながらスコッチの封を切って、ほんのショットグラス三杯程度嗜む。そうして川上はベッドに身を投げ出すと、寝た。

川上は身を覚ました。

眠っていたのはほんの一時の間か、時刻は深夜2時過ぎ。

彼は立ち上がり、クローゼットを開けた。着替えと刀を取り出す。

彼は着流しを脱ぐと腕にサラシを巻き始めた。

ああやって、他人に相手から優しく抱きしめて貰ったのはいつ以来だろう。川上は考える。

彼はちよūdこの幻想郷せかいに來た時に來ていた黒を基調とした私服に着替えた。

かつて、彼を優しく抱いてくれたあの腕は暴力しか振るわなくなった。あの女の顔が思ひ出せない。

野太刀を背負い、腰に刀を通した。下緒をベルトの下から通して挟む。

もしかしたら、彼はああやって、もう一度抱かれたかっただけなのかも知れない。

彼は部屋で最後に煙草に火をつけて、一服した。

良い。良い気分だった。

彼は心の奥底に何か棘のように引っかかっていたものがやっとな消えたような澄んだ気分を味わっていた。

良い。一服を嘔み締め煙草をもみ消した。

こうして川上は最後の心残りこころのこどろを捨てた。

武とは捨てる事と見つけたら。

さあ、斬りにいこう。

川上は部屋の戸を開け歩きだした。

第135話

さくさく、と一人の男が一条の光も射さぬ夜道を歩いていった。

りーん、りーん。りりり。ぎー、ぎー。と虫達が騒がしくない程度の音量で澄んだ演奏を奏でる。

闇にすら浮きそうな地味な黒衣。男の容姿は艶のある黒髪に比較的整ってはいるが、冷たく昏く沈んだ三白眼が近付き難い陰性の雰囲気を出散している。

川上は腰に多々良小傘作、無銘を一口差し。背中に南北朝時代、作者不明の無銘の野太刀を一口背負っていた。その名の無い刀は彼に相応しくもあつたかも知れない。

刀に必要なのは銘ではない。美しさではない。謂れではない。逸話ではない。ただ、必要なのは殺傷の為の機能である。

さくりと、いつか来たような初めての道を彼は歩く。

世界とは残酷なものである。

きつと何処かで誰かが思った。

この世界はおぞましいと。こんな世界壊れてしまえと行動にも移した。

きつと何処かで誰かが思った。

この世界は素晴らしいと。この世界に祝福をと行動にも移した。でも沢山いたであろう誰かの願いや行動が世界を変える事はなく。

個人の願いも行動もさしたる意味はなくなつた。ただ全てを受け入れあるがままの、あまりに残酷な世界。

個人の行為に意味などなく。

故に全てが許される。

川上という男は特に意味もなく生きて、意味もなく武術などを練磨して。無意味に殺し。無意味に一太刀を工夫し続けた。

その行為に理由はない。ただ、純粹にやりたかつたではいけないのだろうか。

そんな馬鹿な理由で工夫した剣は、今宵、完成を見ようとしていた。

人里から紅魔館に進行する一団があつた。

紅魔館を落とすために行動をいよいよ起こした反妖怪派の者らはありつただけの戦力を集めてリーダーの立見も含め総勢62名の大人数となつた。両手の指で数えられる

少数しかいない一つの拠点を制圧には充分な戦力。

移動中も慎重だった。野良妖怪などの攻撃もあり得るし、何より紅魔館側がこちらの行動を掴んで待ち伏せ、襲撃してくるという可能性もある。

彼らは一網打尽にされるリスクより各個撃破されるリスクを避け、皆固まって隊列を組んだ、そして移動しながら隊列の外側にいる人員が前後左右、斜め方向に常に敵襲を警戒しつつ移動していた。

森の中を移動していた時にそれは起こった。

隊列の斜め後ろで哨戒していた二人が声も無く倒れた。

「皆、止まれ！異常発生！警戒しろ！」

気付いた近くの者が声を張り上げた。三人が慎重に倒れた二人の仲間に歩みより、しゃがんで様子を見ていた時。闇夜に紛れ近づいた一つの陰が飛び掛った。

一人は倒れた仲間の様子を伺おうと首を垂れた姿勢で首を落とされ。一人は首を突かれ。一人は袈裟懸けに切り倒され倒れた。

三人が倒れる様と即座にその場を離れる黒い影を目撃した者が声を上げた。

「敵襲！皆抜刀しろ！」

その号令に皆が動揺しつつも臨戦態勢を整える。後方で上がった怒号に最前列近くにいた者達も刀を抜き、提灯を上げて周囲を照らした。

その提灯を提げていた一人がいきなり上から降ってきた陰に切り下ろされた。木の枝を利用したのだろうか？

頭頂部から正中線を抜かれたその一人は頭頂部から股間まで文字通り真つ二つになり逆の八文字に分かれて地面に落ちた。

その様を見て驚愕する暇もなく周囲の人間は斬られて倒れていく。陰は巧みに位取りしながら相手に抵抗する余地すら与えず相手の死角から死角へと斬り抜いて行く。

周囲の人間が人影を視認して、襲い掛かろうとした時にはもう、影は逃げ木々の間に消えていた。今何処にいるか全く気配が掴めない。

闇の中を移動して様々な角度から不意打ちしてすぐ逃げるヒットアンドアウェイを用いたゲリラ戦術。

「刀による不意打ち！」

「ヤツだ！」

皆そのやり口で確信する、これは妖怪などではない。人間の用いる兵法、すなわち狙いの一人、敵は清水その人だと。

前方の木々の枝が折れる音が響き、皆そちらに警戒したところに左サイドから強襲した川上が二秒で三人を斬り倒すと、また木々の中に消えた。到底反応出来ず、追い切れない。

「呪札用意。索敵、対人札使用しろ」

リーダーの立見が側に控えていた側近の呪術士に敵に悟られぬように小さく指示をした。呪術士は頷き、札を翳した。

「四時の方向です」

「行け、相手は何処かに強襲してくる。そこを狙え」

呪術士の言葉に立見は指示を出した、呪術士は頷いて団員の間を縫って移動した。

次の強襲は真後ろから来た。警戒していた男達は一人は反応出来ず真下から股間から鳩尾まで割られて凄まじい断末魔の叫びをあげた。

そのおぞましい悲鳴に当てられて身体が硬直した一人は刀を構えていたにも関わらず首を払い落とされた。実戦において闘争逃走反応を律せない者の当然の末路。

もう一人は果敢に川上に剣を振るった。八相から深く頭を狙う斬撃は、川上が後の先で振るった剣に右小手を捉えられた、川上は斬り下ろしながら即座に転身して相手の刀が降りてきた所から身を交わす。相手は右小手に食い込んだ川上の刀に掛けられた重みで大きく体制を崩し、即座に向き直りながら突き込まれた刀で喉を貫かれて死んだ。新陰流における斬釘截鉄。

三人斬った川上は離脱を選択したが、それより一瞬早く2メートル程手前に札が投げられた。

一瞬川上は全身が痺れて動けなくなった。隠形札により気配を消していた呪術士が放った捕縛札だった。

続けてもう一枚の札を放ち呪術士は印を切った。それで対人用の霊力封じの札は起動した。

がくり、と川上は膝をついた。ごっそりと身体中のエネルギーを持つていかれた。目の前がグニヤリと歪み、意識が混濁する。

「勝負有り、だな」

呪術士が呟いた。これを食らった以上人間はもう満足には動くことは出来ない。川上の不覚であり、事実上の詰みである。

川上の意識はフワフワとして強い眠気に襲われていた。気持ちが良かった。この心地良さに身を任せて何も考えずに目を瞑りたかった。

彼は寝る事が好きなのだから。

周囲の人間はまだ恐れがあるのか川上を囲み、構えたまま様子を見ていた。川上が刀を手放さない以上下手に近づけば斬られると思ったのか。

正しい判断ではあったが今回の場合それが仇となる。

川上に猶予を与えてしまったのだ。懐からペン型注射器を取り出し首に打つ、その僅かな猶予を。

「ぐっ……っつっ！」

川上は小さく、しかし鋭い苦しげな声を出して仰向けに倒れた。周囲の人々が戸惑いを見せる。

「自害……か？」

暗闇でも相手が首に何かしら突き立てたのは見えた。万事休すと悟り自決したのかと、呪術士は考えた。しかし、妙に潔すぎるのではないかと違和感を感じた。

一人が慎重に川上に近づき、死んでいるかどうか確かめる為腹を狙い刀を突き出した。

ガツと音がして刀は腹ではなく地面に突き立っていた。上から刀身を叩かれ軌道を変えられたのだ。

ヒュッと川上の腕が伸び刀を持つ手を掌握すると男は半回転して頭頂部から地面に叩きつけられた。

同時に呪術士が投げ打たれた男が使った刀に胸を貫かれて死に、二人の男の足元の死角にいつの間にか移動していた川上が下から一人の脇の下から右の刀で腕を落とし、一人の鳩尾を下から左拳で突き上げて死亡させた。

川上に用いられた札は確かに効力を発揮した。その効力は不可逆的であり、もはや術士を倒しても札を破つても封じられた霊力は戻らない。

しかし、何故川上がは尚も動けるのか。それは先程打った薬師八意永琳に製作して貰った薬物による。

外の世界では軍用に限定的に用いられる薬物であった。筋肉の潜在能力をほぼ引き出し、関節や筋の柔軟性も高める。本来なら勝てない相手を体力の続く限り何人でも倒せるようになるほど人間を一時的に強化する。

しかし、禁断症状が強すぎる為に通常はまず使われる事はない。個人差はあるが、効果が切れた後は下痢、嘔吐、吐き気、貧血、酸欠や全身のこむら返り、関節の痛み。

有り体に言つて死んだ方がマシというような地獄の苦しみである。

川上は昔から危険度の高い現場ではこれを躊躇わず使つてきた。潜在能力を引き出す事により川上は今も倒れたがる身体を無理矢理動かす事に成功した。

勝つ為なら何でもする。兵法の基礎である。

三人が刀と槍を振り上げ川上に波状攻撃を仕掛けたが、川上は全ての攻撃、相手をすり抜けるように皆一太刀で斬つた。鮮血が辺りを染めた。

返り血を浴び、口元に笑みを湛え、剣を西岸に構える川上の闇夜より尚昏い三白眼に、周囲の人々は背筋を凍らせた。

第136話

人里の外れ。

小屋のような家屋の中で一人、隠居の身の陰陽術師の老人は煙管を一服しながら、手元の書物に目を落としていた。

老人は煙管から最後に一服を吹かすと、コンと叩いて灰を落としながら言った。

「何の用だ？ここはあんたみたいなのが来る所じゃねえぞ」

老人は一人であり他に誰も居ないように見えたが、しかし。

「夜分遅く申し訳ありませんわ。ちよつとこちらも所用がありました」

どこか艶のある少女の声が返ってきた。

「へえ、所用ね。なんだい？」

老人は迷惑そうどころか何処か面白がっているような口調で問い返した。

いつの間にか老人の背後に立っていた女は八雲紫であった。

「返してもらいに来ました」

紫は悠然と微笑みを湛えて言った。老人はペラリと書物の頁を捲りながら答える。

「何を返しいんだ？こつちはあんたから借りた覚えはないがな」

「博麗の術は貴方のようなものが持つては困るのですわ。所詮劣化コピーだとしても」
老人はくつく、と笑いながら書物をぱたりと閉じた。

「劣化コピーと来たか。耳が痛てえな、まだ完全には程遠いからな」

「完全に盗まれては困りますの。だから回収に来ました」

「ほう、回収ね。どうやってだい？体得したもんは誰にも渡せねえぞ」

いよいよ面白くなって来たという風に何処か野性味のある笑みを深めて老人は言った。老いていても濁りのない眼が爛々とした光を放っていた。

「その通りですわ。体得したものは取れません、なら方法は……」

紫が言いかけた言葉の間隙を縫って、小刀が飛び紫の喉元、胸、腹に三本突き刺さった。老人が居た場所に空間の裂け目が走り床が裂けたがそれより一瞬早く老人はその場から飛び退っていた。その獣のような機敏な動きは老人のそれではない。

「籠目、囲め！」

老人が印を組むと小刀に練り込まれた呪印が発動した。捕縛結界、退魔結界。完全に紫を捉えたが。

パシツ、と軽い音と共に紫が扇子を一閃するとあっさりと術が破られた。

「貴方、隠居するにはまだ早かったのではなくて？」

紫は自らの喉に刺さった小刀を抜きながら余裕を見せ付けつつ、老人の技量を賞賛し

てみせた。

「だけど、貴方の劣化コピーのオリジナルは元々何なのか忘れたの？私はそれをよく知っているわ」

紫の挑発に老人は獣の笑みを崩さず答えた。

「ハナっからこの程度で倒せると思うほど日和つちやいねえよ」

そして堪えきれぬようにくくつ、と笑った。

「堪らねえな。スキマ妖怪が出てきてくれるとはな。俺が引きこもったのは雑魚には飽き飽きしたからなんだよ」

心底嬉しそうな老人に紫もまた微笑を絶やさずに応じた。

「遊んであげますわ」

人里から紅魔館の間にある森の中。

「うおおおお！」

一人の男の咆哮が上がった。

その男は二刀術の名手であった。川上が真つ直ぐの青眼に構えた刀を左の小太刀で強く払う。

バシンという音と共に川上の刀は右に大きく弾かれ、柄を握る左手が離れてしまう。完全に川上から見て左が空きになった一瞬を逃さず男は右へと僅かに回り込みながら右の太刀を袈裟懸けに送った。刀を右に弾かれ、しかも右片手となった川上にこれを防ぐすべはないと思われた。

川上がとつた行動はフリーになつた左腕で相手の右の袈裟懸けの太刀を迎えに行く事だつた。避ける事が出来ないと判断し咄嗟に行つた苦し紛れの防御動作か、確かに相手は右片手打ち故に腕を犠牲にすれば体幹に致命傷を受ける事は避けられるだろうが。だが、戦闘中に片腕を落とされたらどちらにせよ死は免れない。

しかし川上は左前腕に相手の斬撃が食い込む瞬間に肘を上げて相手の刀線刃筋を巧みに前腕に添わせて滑らせながらその場に折り敷いて座構えになり刃を掻い潜つた。

次の瞬間には弾かれた川上の刀が戻ってきて、男の腹から背中へと深々と斬り抜けて斃した。

川上の左腕は無事だつた、彼は予め両腕に筋金変わりに棒手裏剣を入れてその上からサラシで巻き固めて簡易的な小手としていたのだ。

川上の後ろを取つた男が槍を川上の背中目掛け渾身の突きを放つ、完全に死角から

襲つたはずの突きを川上は右サイドに抜けて避けた。まさに背中中に目があるかのようなき。

川上は向き直りつつ刀で相手の槍を巻いて相手の体幹に崩しを掛けながら入身して首を貫き殺した。彼は刀を抜かずに刺しっぱなしで愛刀から手を離し倒れ伏せる男の槍を取り、一人、二人と斬りかかつてきた相手の間を抜けるように改めて囲まれぬよう位取りをする。

六尺四寸強の菊池槍が閃く。川上の神速の突きが一人の鳩尾を貫き、もう一人の喉を貫通した。

「畜生おおおっ！」

雄叫びをあげながら斬りかかる男の刀を川上は石突側であっさり打ち払い、ヒュルリと半回転した槍の穂先が男の喉を切り裂き即死させる。

「何故動ける！」

「何故ッ！」

誰かが悲痛な叫びを上げた。川上は流水のような動きで位取りをしながら陰のように敵の死角を奪う、一人を突き殺し、一人を打ち払って倒すと槍を投げ打ち五間先にいた敵を貫く。直ぐに一人の相手の真つ向斬りを避けつつ入身すると唾を顔に思い切り吐きかけて目潰しをする、相手が怯んだ瞬間無刀取りで相手自身を斬り裂きつつ刀を

奪った。

「何でだ!」

「何でたつた一人に!」

また誰かが叫んだ。袈裟懸けに斬りかかつて来た男の刀を川上は自身の刀で打ち払って、脇を抜けつつ相手の腹から背骨まで深々と斬り抜く。川上を見失っていた間抜けを一人首を飛ばし。さらに怖気づいたように一瞬判断を迷ったもう一人の間抜けを突き殺す。

無表情のまま次から次へと斬って斬って斬りまくる、その剣鬼の姿に反妖怪派の群勢は皆戦慄する。その鬼の剣がその場を呑み込んで行く。

川上は地面に転がっていた刀を足で跳ね上げて中空で左手で捕ると両刀を用い正面から真つ向に斬ってきた男の刀を右の刀で打ち止めて左の刀で相手の太腿の内側を斬った。断たれた腿部大動脈が血の噴水を上げる。

川上はその男のサイドに回りながら蹴込みで男を吹き飛ばし斜め後ろから掛かってくる男にぶつけた。すかさず左手片手突きで二人諸共貫いた、決って抜き、僅かに曲がりの生じたその刀を投げ打ちまた一人を殺した。

「勝てない……のか?」

「どんどん数を減らしていく同士達を見て、皆が内心募らせ始めた恐れを口にしてし

まったのは他でもないリーダーの立見であった。

八雲紫と陰陽術士の老人の決着はもの一分とかならなかった。

老人は土間の壁にも背中をもたれ掛けた状態で倒れていた。右足から夥しい出血があり、右腕は折れた骨が上腕部を突き破っており、左腕も肘関節が砕けていた。腹部に内蔵に達する裂傷を負っていた。

既に戦闘不能であり致命傷を負った老人はしかしそれでも口元の笑みは消えてなかった。

「勝負あり、ですわね」

扇子を老人に向けて宣言した紫は涼しいげな態度こそ崩れてなかったが、名前と同じ紫色のドレスは所々破れ、紫自身の出血に濡れていた。老人の生涯最後を賭け、全てをぶつけた猛攻は紫を以ってしても無傷とはいかぬ激烈さであった。

「ああ、俺の負けだ」

敗北を認めた老人はくくつ、と笑った。

「何か面白い事でもありませんか？」

「いや、面白いっていうんじやねえが。やっぱりこうじやねえとな、と思つてな」

紫の疑問に老人はそう返した。

「てめえで引きこもつておいてなんだが。自分がのんびり余生を過ごして畳で死ぬつてのがしつくりこなかつたからな。やっぱり俺にはこういう死に方じやねえと、な」

面白いがつているように笑つて老人はそう言った。彼は戦いの中で死にたかつたのだろうか。

「所見を述べさせて頂きますと、私も貴方はそつちの方が相応しいと思いますわ」

「あんたもそう思うか？へへっ、嬉しいねえ」

紫の言葉に老人は本当に嬉しいげな声色で言った。

「では、返して頂きますね」

紫は雑談もそこそこに開いた扇子をパチン、と閉じスキマで老人の脳幹を断つた。

老人は笑みを浮かべたまま瞳の光を失い、事切れた。何処か満足そうな死に顔だった。

「さようなら」

紫はそう一言だけを残し、スキマを開いて小屋を後にした。

森の中は死体と血の海、死臭に満ちていた。

ほぼ全ての者が斬られ、あるいは地面に頭から落とされ、打ち倒され、死んだ。

その剣鬼に恐れをなしてその場を逃げて生き延びたものも少数いるが、彼らはもう二度と武器をとり決起する勇氣を持たないだろう。

反妖怪派の戦闘員の群勢はたった一人により壊滅した。

その場に残っていたのは、短い時間で息を整え、全身の黒衣を返り血塗れにして、片手にやはり血塗れの無銘の愛刀を引っさげた川上。

そしてその川上を見据える立見の二人のみだった。

「何故だ……」

立見は絞りだすように言った。

「何故、妖怪の味方をする。我々はただ自分達と同じ思いをする者が居なくて済むように、犠牲になる人々を減らそうと考え、立ち上がったんだ……」

戦える者が全滅した今、もはや叶わぬ願いである。立見は吠えた！

「何故邪魔をするっつ!?!」

川上は冷たい眼で立見を一瞥して、一言返した。

「間違っている」

「間違いだど？今を変える為に武器を取り戦う他何がある！」

川上の指摘に立見は反論する。

「抵抗活動の是非じゃない。犠牲者を減らすというその方法論が間違っていると
言っている」

「何？」

川上の続く言葉に立見は戸惑いの声を上げた。

「反体制抵抗活動において味方の犠牲は減らすのではなく、増やすものだ」

「は……」

川上の講釈に立見は理解出来ぬというように間の抜けた声を出した。

「簡単な事だ。殺しまくり、死人を増やせば良い。敵からも味方からも」

「妖怪もろとも人々も巻き込ませ殺せばいい。それで殺した妖怪の首を並べればいい。
そうして妖怪側の怒りと憎悪を買えば、大衆の人々の弾圧や抑圧へ繋がる」

「そうすれば大衆は妖怪側に怒り、さらなる抵抗活動を生み、それが再び妖怪の弾圧を誘
発、それがさらに過激な抵抗を生み出す」

「なんだと……」

抑制の効いた声で整然と語る川上に、立見は戸惑いの表情を浮かべる。立見は扇動が

上手いが所詮は兵法において素人であったのだ。

「その連鎖のみが武力に劣る抵抗側が勝つ唯一の方法だ。その程度もわからないなら黙って里で暮らしていれば良い。半端な抵抗など無駄な死人を出すだけで終わりだ」

川上は刀を上げ、自らが殺した死体の山達を示してそう締めくくった。

立見は言葉が出なかつた。川上の最後の指摘が彼に突き刺さった。

立見は思う。変えるには戦うしかないと思いつつも頭の何処かでは無理なのではないかと考えてはいなかつたか？

それでも憎しみをぶつけ現状を変えるにはとにかく動くしかない、それをなるべく考えないようにして誤魔化してきた。

そんな半端な考えの結果こそが目の前の男が言う通り、今日の前に広がる仲間達の死ではないのか。

俺は一体何を成したのだ？

「言わせて……おけばっ！」

それを認められる訳が無かつた。認めてしまったら自分達の行動が、仲間達の死が、本当に無意味になってしまう。

立見は吠えた。手にした刀を振りかぶり川上にかかつて行つた。

そして当たり前のように川上に斬られ、無意味に死んだ。

川上は無銘を懐紙で拭い、刀身を改めた。少し疲れが見えるがまだ刀は持ちそうだが。駄目だなど、思った。正直この程度では据物の畳表を斬るのに毛が生えた程度だ。だが。

幸いにまだ薬の効果は続いていた。逆に先に食らった対人札の効果は短時間の一時的なものらしく体の活力は戻ってきた。まだ少しやれる、そして

視えるもの、彼の皮膚感覚が告げていた。来る。

川上は刀を納刀して森を歩き出した。

第137話

その日、レミリアの私室に珍客が訪れた。

八雲紫。先日引き続き二度目の訪問である。服装は先日の紫色のドレスではなく、ゆったりとした白い服の上に紫色の前掛けを重ねて着た中華風の衣服だった。ちょうど彼女の式の八雲藍の服装によく似ている。

その場にいるのは川上を除けば先日と同じレミリアと咲夜の三人であった。

「また来たのね。で、今度は何を企んでいるの？」

咲夜を後ろに控えさせ、豪華な椅子に腰掛けて頬杖をついたレミリアは、ソファーに座った紫を見据えて明らかに歓迎してない様子で言った。

「度々申し訳ありませんわね。ただこの館の主である貴女には報告の義務があると思いまして」

紫はそう言つて、一応客扱いとして咲夜に出された紅茶に口を付けた。

そのいつもの紫の口元の不吉な微笑みを見て、咲夜は内心嫌な予感を覚えた。

「……聞こうじゃない」

レミリアも同じものを感じたのか少し間を置いて言った。

前回の話の内容が内容である、今回もロクな話じゃないのは目に見えていたが。

「端的に言いますと、先日的一件もあつて里の反妖怪の組織の方々が明確にこの館を狙い、攻めてくる事になりましたわ」

「あらそう」

紫が告げた事実レミリアは一言で返した。

「どうでも良さそうですね」

「実際どうでもいいのよ、攻めてくるなら勝手にすればいい。私の城に無断で入る不届き者にはこちらも相応の歓迎をするだけなのだから」

涼しい表情で何でもないように言つて、レミリアは紅茶を一口飲んだ。

「貴女ならそう言うと思ひましたわ。ただ、こちらとしてもこんな反乱ごっこされても困りますし放つては置けませんの」

クスリと不吉な笑みを深めて言う紫の様子を観察しながらレミリアも返す。

「まあ、貴女の立場ならそうですね」

「今回は幻想郷のバランスを崩しかねない自体として、博麗の巫女が動きました。」

紫は紅茶のカップをソーサーに置いて、それを告げた。レミリアの目が少し見開かれた。

「霊夢が、か。それは御愁傷様ね」

「そしてもう一つ」

一つ間を置き区切った紫にレミリアは怪訝な表情を浮かべたか、紫はそれを言った。「博麗の巫女が排除する対象はもう一人」

博麗霊夢は森の中に静かに降り立った。

腕や脚、首が身体から生き別れになった死体。腸管や内蔵を溢しさらに消化器の内容物までぶちまけた死体。凄まじい断末魔の表情を浮かべた死体。地面はそんな数十人の死体と人体のパーツに内蔵が散らばり様々な体液が染み込んでいる。

そんな惨劇の跡を霊夢は無表情に一瞥して確認する。

「残ったのは、あの人ね」

ポツリと独り言を言うと、霊夢はピリツとしたものを感じてその方向を見据えて森の中を歩んでいった。

惨劇の場から外れ、霊夢は暫く歩く。そして夜の暗い森の中で開けた所に出た。

周囲の梢の間から注ぐ淡い月明りの下でその男は静かに佇んでいた。

夜の闇の中でも一際昏い三白眼が蒙昧に霊夢を見据えていた。地味な黒衣は濡れた

ように僅かに艶を持ち月明りに映えた。實際服はほぼ余すところなく濡れていた、返り血で。

両切り煙草を啜え、まるで霊夢を待っていたかのように濃密な屍臭を纏い立つその男は、川上その人であった。

川上はプツとシガレットを地面に吹き捨てた。

「今晚は」

川上の開口一番は挨拶だった。霊夢は歩みを進めて川上から少し距離を開けて立ち止まる。

「今晚は」

そして挨拶を返す。霊夢という少女は他人に対する無頓着さからくる傲慢なきらいはあるが仮にも神職、礼儀知らずではない。

「博麗の巫女として端的に告げるわ」

挨拶を交わすと霊夢は話を始めた。川上は黙って聞いている。

「外来人として貴方はやり過ぎた。紅魔館に立場を置きながら里の人間を殺しすぎている」

成る程と川上は思う、確かに今し方5、60人は殺してるのだから否定出来ない。

「外来人が幻想郷の人間を殺す、なんてされたら困るのよ。ここは人と妖怪により微妙

なバランスを保った世界。人が人を殺し始めたならそれが崩れる」

「それで？」

ここにきて初めて川上が口を挟んだ。霊夢は何処か白けているようにすら見える態度で続ける。

「幻想郷を管理する者として、貴方を排除するわ」

ふっ、と川上は小さく鼻で笑った。

「もつともらしく言っているが要は殺すという事だろう」

「要約すればそうなるわね」

皮肉げな川上に霊夢はあっさりそう返した。

「人を殺す事をどう思う？」

唐突に川上が問いかけた。どこか彼らしくない問答だ。

「別にどうも」

霊夢は態度を変えず即答した。

「必要があれば殺すだけよ」

その答えを聞いて川上は思わず小さく笑みを漏らした。秋めいてきた風が二人の間に吹いて森の中を梢を揺らした。

「管理だの、バランスだのと尤もらしく言っているが、君は本当はどうでもいいんじゃない

いか?」

口元の笑みは消えて、無表情に戻った川上が霊夢に問いかけた。

「君自身には特に思う所はない。だから何となくやってるだけ」

「そうだとしたらそれがどうしたの」

川上の指摘に、霊夢は淡々と答えた。

「それにそれは貴方の事じゃないの? 貴方には何も無い。ただ結果的にここにいますだけ」

「そうだとしたらそれがどうした」

霊夢の返す刀にやはり川上もあっさり言った。

ふ、と小さな息はどちらが漏らしたのか。

『別にどうでもいい』

その言葉は霊夢と川上から異口同音に放たれた。

妙な気分だった。生まれて初めて共感を覚える人間に出会ったような、そんな心地。

ここに第三者が居れば、二人が鏡写しの鏡像のように見えたかも知れない。

「ねえ」

きつと一人切りだったから

「何だ」

寂しさなど理解できなかつた。

「私達、出合い方が違えばいい連れになれたと思わない？」

らしくもなく霊夢が口を滑らした。しかしおかしな事だろうか、恐らく生まれて初めて他人とは思えぬ共感出来る相手が目の前にいるのだから。

「その答えは君自身分かっているだろう」

そう、理解者に会えたという

「そうね」

錯覚。

「意味のない仮定だ」

川上は言い切った。

川上はわかるのだ、自分の事だから。霊夢もまたそれを分かっていた。相手が鏡像であるならば

人は理解し合えない。相手はそれだけは信じていると。

お互いらしくもなく口が軽くなり無駄話を応酬したが、それも終わりである。

ここで二人が出会った意味は一つ。殺す事。

二人の間に吹いていた風は何時しかやんでいた。

風断ちぬ、いざ逝きめやも——

第138話

森の中。周囲に木々が無く月明かりの差すその場で男女は相對していた。

博麗靈夢は左手に手首から肘程度の長さの棒にひらひらとした紙、紙垂を付けた大幣を持ち自然と立っていた。その姿には氣負いも無ければ殺意も無かった。

川上は右腰に差した多々良小傘作刀の無銘を静かに抜刀すると正眼に構えた。何十人と切り、脂で化粧など殆ど落ちた刀身はそれでも月明かりに反射して爛と輝く。

靈夢は右腕を一振りするとその手にいつの間にか札が束で握られていた。そのまま右腕を振り上げ自身の頭上に無数の札を放った。

すると札は中空で意思を持つているように動き様々な角度から川上に向け殺到した。靈夢の武器、ホーミングアミュレットであったがごっこ遊び用ではない。一つ一つがカミソリの切れ味を持ち殺傷能力がある。

川上は自身の前で刀を鎬筋を前に向け立てる、さらに身体は完全に半身となる事で僅かな刀の陰に隠れた。

川上に向かったアミュレットは僅かに角度がついていたとは言え皆正確に相手の体幹へと最短で飛ぶ性能が仇となり皆前で立てられた刀にぶつかり止められた。細い刀

の陰に隠れる対飛び道具の技法、矢留。

霊夢は飛翔して川上に対して回り込もうとしていたが、川上がお返しにと放った車手裏剣が向かってきて咄嗟にそれを躲した。霊夢は無意識に相手が剣士である故、飛び道具を使ってくる可能性を消してしまっていた為か僅かに中空で体勢を崩した。

その隙に川上は素早く走って木々の闇夜に紛れた。

川上は木陰に隠れると座構えになり刀を一旦納めて呼吸を意識して印を組み小さく呪を唱えた。

「オンアニチャマリシエイソワカ
俺阿爾怛摩利制曳莎訶」

そうして木から木へと移動し隠れる。霊夢は川上の移動した方へと森の中を移動する。しかし一旦見失った川上の姿は捉えられず、気配もなく全く何処に居るか知れない。

だから霊夢は適当に当たりを付けて一本の木にホームिंगアミュレットを放った。

無数の札が木の表面を挟った瞬間木陰から人が困惑する僅かな揺らぎを霊夢は視た。彼女は一発で川上の場所を当てたのだ。

即座に霊夢は空間的な距離や時間を無視し木の裏へ回り川上の前に現れた。人の身で成すには超常的すぎる瞬間移動を霊夢は呼吸をするようにやってのける。

至近距離で現れた霊夢は直接的な大幣による打撃を川上の左の首筋へと放つ。唐突

に瞬間移動と同時の攻撃などまず反応出来るはずも無かった。

しかし川上もさる事に霊夢を視認するや刀は間に合わぬと判断し左小手で咄嗟にガードすると共に足蹴を放った。

川上の踵が霊夢の左脇腹に食い込むのと大幣が川上の左小手を打つのはほぼ同時だった。

「つつー！」

両者同時に苦鳴を漏らした。川上は咄嗟だった為に衝撃を殺す事が出来ずにモロに左小手で受けてしまった。霊力を乗せた一撃の威力は筋金を入れた小手とは言え衝撃が骨の髄まで響いた。また川上の蹴りは体勢不十分だった為に霊夢に決定的なダメージを与える事は出来なかった。しかし大幅に霊夢の大幣の一撃の威力を軽減する事が出来た、十分な一撃だったなら筋金の上から霊夢の打撃は川上の腕の骨を砕いていただろう。

息の詰まった霊夢は咄嗟に下がって刀の切り間から退避した。腹部の激痛を堪えて呼吸を乱さぬよう整える。

「何故場所が分かった」

川上もまた痺れる左腕の具合を悟られぬよう刀の柄に添えながら聞いた。不可解であった。川上が得意とする隠形術が何故あんなにあっさりと破られたのか。

「ただの勘よ」

霊夢はなんて事もないように言った。ほぼ予知や透視に近い反則的な直感。霊夢の武器の一つだ。くつ、と思わず川上は笑った、一目見た時から分かっていたがこの少女は化物などが可愛く感じられる程の別格中の別格なのだ。

そして霊夢もこの剣の一口を高め続けていただけで人間から外れかかった川上の怪物性を正しく認識する。

遊びなどではない、確実に殺すなら出し惜しみなど論外だ。

博麗霊夢には博麗の秘術における最終奥義があった。

「諸行無常 色即是空」

霊夢の口から言霊が紡がれる。川上の目がすう、と細められた。

博麗霊夢という少女が最初から持っていた技である。便宜上博麗の奥義とされていくがその実違う。

「天に宇宙そらが有り、地に無間そらが有り、人に空そらが有る」

ありとあらゆるものから浮く博麗霊夢だけが持つ能力の本来の姿の具現。川上は霊夢の言霊を止めようとはせず、静かに刀を腰に納刀した。

「万物流転ばんぶつるてん。人は未だ空を知らず」

博麗霊夢にしか使えないため、技術としては再現性が全くない。川上は右手で右肩越

しに野太刀の柄を握る。

「有無相生。うむそうせい 人之生に空を現す」

故に博麗の奥義としては最初にして最終。川上は左手を背中に回して野太刀の鞘を掴み、身体を大きく使つて右手で刀を抜きつつ左手で鞘を下げて払い、全長五尺余の刀を抜刀し、晴眼に構えた。からりと鞘が落ちる。

「虚無顕現」

その奥義の名は

「夢想天生」

「何ですつて?」

「川上さん。彼は有り体に言うつとやり過ぎましたの。こちらとしても見過ごす訳には行かない程に」

レミアアの言葉に紫は淡々と告げた。咲夜が顔色を変える、すぐに安否を確認しようと考えたが。

「彼はもうここにはいませんわ、実は先に言つた反妖怪派の方々の襲撃はどうに行われ

ていますの」

紫の言葉は咲夜の足を止めるために向けられたものだが、レミリアも表情を変えた。

「もう行われている……まさか」

「ええ、何処かでそれを知った彼は単身で迎撃に向かったようですわ」

不吉に笑って悠然と告げた紫にレミリアがギリつと歯齧みした。

「貴様が仕向けたの？、一体何故そんな事を！」

「……手間は省けた方が良いでしょう？」

一体何を言っているかとレミリアは考えてすぐに一つの結論に至る。霊夢が動いたのは反妖怪派、川上、どちらも排除する為。だが先に二つをぶつければどちらが死んでも残っても片方は潰れ、片方は疲弊する。後は残った方を叩けば良い。漁夫の利だ。

余りにも卑劣、何処までも狡猾。しかし全体を守る為には紫は正しく残酷であった。

「だったら何故先日は川上に帰れなどと言った！返す気など初めから無かつたのではないの？」

「あの時点で帰ると言われたら返してしまいましたわ、ただ……」

紫はカップに残った紅茶を飲み干してから、微笑んで言った。

「ああ言えば貴女方も本人も帰す気を無くすと思いませんか」

その言葉にレミリアはティーカップを砕いた。この女の言動に惑わされぬようにし

ていたつもりがその心理を逆手に取られ結果手の中で踊らされていた事を理解した。

川上は捨て石として体良く利用されたのだ。

「なら止めればまだ間に合……」

「間に合いません。もう明け方には終わりましたから」

今の時刻は朝の8時だった。紫は全てが終わった後の事後報告に来ていたのだ。

「き、さま……」

それを聞きレミリアは激情を覚え牙を剥き今にも目の前の紫に掴み掛からんとした時。

そのレミリアの背筋と激情を凍らせるような余りにも凄まじい殺気を後ろから感じた。

その時レミリアは昔を思い出した。この殺気をレミリアは知っていた、かつて出会った人間でありながらレミリアの背筋を凍らせる程の濃密な殺気を放つ狂犬のような幼い少女との出会いがフラッシュバックした。

レミリアが後ろを向くと、そこに控えていた咲夜が一切の表情を消して、周囲の温度が下がった錯覚すら与える程の殺意を纏い立っていた。レミリアはこの無表情こそが十六夜咲夜の本気の激昂だと知っていた。

いつも胡散臭く、余裕のある悠然とした微笑を浮かべている八雲紫から笑みが消え、

顔色も血の気が引いていた。あのスキマ妖怪が明らかに気圧されていた。もし彼女は座っていたのでなければ無意識に後退っていたかも知れない。

「……八雲紫」

レミリアは後ろから発せられる殺気に胃を痛めながら言った。

「帰れ、今すぐに。これ以上いるなら私でも止められるかわからないわ」

「わかり、ました。今日はここまでにします」

咲夜の激昂により理性を取り戻したレミリアの忠告に紫も大人しく従いスキマを開いた。

紫はスキマに消える瞬間僅かに痛みを堪えるように表情を僅かに歪めたが、それには誰も気付かなかった。

第139話

先手を取ったのは川上であつた。

後ろ足で前足を払う歩法にて一瞬で切り間に入ると同時に、野太刀を水平に薙ぎはらつた。

前足を進めてから後ろ足を引き付ける、本来使われる踏み込みとは違い。瞬きの瞬間に距離を潰しながらの斬撃。しかしそれに対して霊夢はすつと飛翔した。

川上の手の届かない位置、前方上空に霊夢は浮かんでいた。

その姿は闇夜に溶けそうに希薄であつた。事実彼女の姿は半透明となり闇が透けていた。

今の一刀も霊夢は躲したのではない、刀身は霊夢の腰辺りを抜けた。本来であれば下半身が生き別れとなつているはずだが、霊夢に傷一つなく、川上にも確かに捉えた筈なのに手がたえがなかつた。

博麗霊夢の能力。ありとあらゆるものから浮き、あらゆる干渉を受けぬという本質。

その具現がこの状態。夢想天生と名付けられた技である。もつとも正確には技法ですら無いわけだが。

この状態では博麗靈夢はあらゆるこの世の干渉を受けない、つまりこの状態の彼女に通用する攻撃は皆無。しかし靈夢側の攻撃は通るといふわかりやすい反則。

博麗靈夢はこれがあるが故に無敵、まさしく無双なのである。博麗靈夢が本気になったら勝てるものはないと言われる所以であろう。

もはや川上の眼を持つてしても、靈夢は見えてはいても視えない。さらに周囲からも靈夢の情報が無くなった。

これを使つてくるという事は本気で決めに來ているという事だ。川上にもそれは伝わった。

有難いと川上は思った。もう先程使つた薬の効果が何時までも持たないのだ。

先程の連中相手に術で絡められたのは不覚であり、これ程リスクな薬物を使わざる負えなくなつたのは川上の不覚であつた。

実は靈夢は川上の手の届かない場所からネチネチと攻撃し続けて持久戦に持ち込めば、やがて川上は薬が切れ禁断症状により呆気なく倒れ、靈夢は勝ちを拾えるのだが彼女はそれを知る由もない。

あるいは靈夢なら知つていてもその選択は取らないかも知れないが。

川上は上空を取つた靈夢に対して、自ら大きく下がつて距離を取つた。近接戦が主体であり、手持ちの飛び道具を使つても彼自身の攻撃範囲はどう広く見積もつても十間は

ない。であるのに何故あえて下がるのか。

まず霊夢がしてくるだろう事を考えての事である。霊夢は右手に札を構えた。おそらくは飛び道具で徹底的にダメージを与えにくるはずだと見越しての事。単純に飛び道具なら距離があつたほうが避けやすい。

霊夢の手から放射状に放たれた札。川上の周囲に無造作に降り注ぐように放つた中に本命の川上自身を狙う札。何も考えずに避ければその札は確実に川上の身を裂く。が、川上は一見しただけで、飛んでくる札の僅かな隙間に身を置いて避けた。

並の避け勘ではなさそうだと、それをみて霊夢は思った。続けて六枚の札を抜く。

今度は川上を狙つたものではない。川上を中心に囲むように六の札は地面に向かう。捕縛札である。等間隔に地面に着弾した札は線で結ぶと丁度六芒星ヘキサグラムになる。そして札が囲んだ範囲を電撃が襲い、対象を直接スタンさせる。

範囲が広く、投擲から着弾、発動までに札の囲いから脱出するのは人間にはまず無理である。

で、あるが地面に着弾し川上を囲った札は発動しなかった。地面に張り付いた札の一つ、それが川上が投げ打つたナイフで貫かれ破られていた。

上手い。そう霊夢は思った。この捕縛陣は札一枚でも欠ければ六芒星による陣は成立せず不発となる。また四間は離れた小さな紙切れを即座に打ち抜く技量も並では無

い。

しかし霊夢が舌を巻いたのはその危機回避能力。いまの捕縛札を破って見せたのは勘だの反射的だのとは思えない。まるで何処に身を置けばいいのか、どう動けばいいのかあらかじめ分かつてるかのような動き。どうやら相手も反則を持っているようだ。霊夢は思った。

霊夢は刹那に瞬間移動で川上の後ろを取っていた。常に距離を取って戦うのが霊夢の戦法と思つたら大間違いだ。

まして夢想天生を用いている以上、霊夢はどの距離だろうと絶対の安全圏なのだ。直接叩き潰した方が早いという理由から霊夢は近接戦も好む。

霊夢の脊骨を狙った前蹴りを川上はノールックで避けながら霊夢の方に向き直る。霊夢は左の大幣を右肩上に振りかぶり、視線を川上の左首筋に点けた。

その構えと視線移動から当然左首筋を打つと相手に思わせておいて、大幣は変則的な軌道を描き右首筋を襲った。

川上は分かっていたかのように体を引き間合いを切つて、カウンターで打ちに来た霊夢の左小手を斬った。やはり手ごたえは無かった。だが

「近い」

ポツリと呟く。その川上の側面に瞬間移動した霊夢の左回し蹴りが脇腹に飛んでく

る。川上はこれを食らいながらダメージを流して飛び技で距離を取った。

こちらからは干渉出来ないが、向こうからは干渉出来る。霊夢は防御面での無敵が最大の脅威である。しかし同時に攻撃の恐ろしさも特筆すべきだろう。

触れる事の出来ぬ霊夢の攻撃は受け流すことも受ける事も出来ず、こちらの防御をすり抜けヒットポイントにのみダメージを伝えてくる。対処は完全に避けるほか無い。

つまり夢想天生は最強の盾と最強の矛。文字通り矛盾を併せ持つという訳だ。

ふと、霊夢も視界が遠くなるような感覚に襲われる。一瞬自分が何をやっているのかわからなくなる。

霊夢は見たことはないだろうが、丁度映画館のスクリーンを通して自身を見ているような感覚。現実感の乖離。

ふと、霊夢は怖くなる。世界からほぼ外れながら自身からは干渉出来るという場所にいる事はギリギリの天秤に乗っているようなものだという自覚はあった。

この能力を使い続ければ一体どうなるのだろうか。

こんな力を使う霊夢はこの世界に確かに存在すると言えるのだろうか。

早く、早く。終わらせたい。霊夢はそう思う。

この男を早く殺し、また明日から縁側で魔理沙の下らない雑談をお茶を飲みながら聞き流す。そんな日々に戻らなくては。

ああ、殺し合いという異常に身を置いて改めて気付いた。案外霊夢はそんな毎日が嫌いでは無かったのかも知れない。

——その雑談の相手を何時か殺す事になるかもしれないのか——誰かが囁いた気がした。

そうだ、今この男に対してのように私は魔理沙を殺す。そんな日がもしかしたら——

頭から股下までが何かを通り抜ける感覚がして霊夢は一瞬の意識の空白から戻ってきた。川上の斬撃を浴びたのだと理解して霊夢は後ろに飛び、そのまま上に飛翔した。

一瞬とはいえ自失していた自身を霊夢は叱責する。そしてすぐ違和感を覚えた。今、斬撃を浴びた感覚が分かった。

斬られてはいない。そも斬夢想天生を使っている霊夢が斬られる訳がない。

だが……紫の言葉を思い出す。斬神。

霊夢の勘が告げる。また集中を切らしたら、死ぬ。

川上もまた剣先の感覚を感じた。もう少し、出来る。工夫はもうほぼ完成した。

幾千、幾万の剣を振るつただろう。幾万と組太刀をした。そして数え切れぬ修羅場を潜った。そうしてただ練り上げ続けた。

洗練は突き詰めると簡潔になる。

彼の修練はただの一刀に収束し完結する。

後は仕上げのみだ。

霊夢は手札を切った。忘れるな、殺らなければ殺られる。

夢想封印

霊夢の十八番とも言える代名詞的な技。無数の大きな光弾が敵に時間差で殺到し、炸裂する。追尾性能はホーミングアミュレットの比では無い、当たるまで追尾すると言っても過言ではない。

これもごっこ用に威力を抑えたものではなく殺害出来るものだ。

川上の手の届かない上空から放たれた夢想封印。これも一つ一つが別々の軌道を描き、しかし正確に川上に向う。今度は矢留では防げない。しかし川上は自身に向かってくる光弾を見ても動かなかった。

しかし、直撃するかと思うほど引きつけておいて川上は受身。飛ぶような前返りで光弾を避ける。川上を狙い追尾して軌道を変えて来た時間差で次々とくる光弾を川上は後ろ返り、横返りにと受身に使われる体変術でギリギリで大きく躲しまくった。

光弾は本来避けられてもUターンするくらいしつこく追尾して来るが上から撃ち下ろしたため地面に着弾してしまった。霊夢は上から面制圧すれば確実だと思ったのが逆手に取られてしまった。

霊夢は悟った、遠距離攻撃は通用しない。これを繰り返してたら仕留めるまでどれくらいかかるか。

だが、当てられた攻撃もある。近接での直接打撃だ。

霊夢は地上に降り立った。

それが確実である。しかし危険だというのも霊夢は理解していた。

分かっている。夢想天生。この技で一方的に殺すなんて話はあまりにも虫が良すぎている。きつとしつぺ返しかもしれない。

距離は八間。だが霊夢には勝てる自信もあった。あの長刀。逆に懐に入ってしまったば振るえないだろう。霊夢には瞬間移動があるのだから。

霊夢は大幣を落とした。本来の利き手の左手に霊力を集中していく。右手に札を構える。本命は左である。霊力をエネルギーとして零距离から直接叩き込み、決める。

霊夢が終わらせに来た事を理解したのか、呼応するように川上が野太刀を上段に取り上げた。静かに息を吐く。

一瞬、霊夢は目の前の男に吸い込まれそうな印象を受けた。孤高の霊夢がまるで川上と一つになったような、そんな錯覚を感じた。

川上は次で刀の工夫を完成させるつもりだった。

二人は戦いながら移動して、森の端まで来ていた。木は疎らだ。

黒に塗りつぶしたような空だったのが東はもうだいぶ明るい青みを帯びていた、夜明けが近い。

最後の、次が二人の最後の交錯だ。そしてもう二度と交わる事はないのだろう。

「光なく　ただ刃金にて　切り開き」

川上が口を開いた。歌を詠んだ。

「天道非ず唯一人往く」

その言葉を最後に川上が駆けた。ただただ前に出て霊夢に太刀を浴びせんという真つ直ぐな氣勢をぶつけた。

距離を素直に詰められたら危険なのは霊夢だ。だが霊夢は冷静に右手のホーミングアミュレットを放った。無数の札が川上に向う。これにどう反応してもいい。川上が最低限の動きで避けても、矢留を使っても、あるいは食らっても。

僅かにでも、一瞬でも川上の意識をホーミングアミュレットの対処に意識が行く、その間に霊夢は野太刀の振るえぬ台風の目へと瞬間移動して王手をかける。

川上は前から自身の上体に向かって襲い来るホーミングアミュレットを、体変術。その場で仰向けに倒れるこむような形の縦流れで躲した、倒れた川上の上をホーミングアミュレットは通過した。

それとほぼ同時に後ろ返りで後ろに転がり座構えになり刀を頭上に取り上げると。

少し前、切り間に霊夢がいた。

前に出んとする氣勢と走り、これは虚実の虚であったのだ。前に出んと見せて、実際には札を避ける際に後ろ返りでバツクした。

そして前に出てくる事を前提にアミュレットを川上が避ける瞬間に懐に瞬間移動してしまつた霊夢。完璧なタイミングだったがこれだけでは駄目だったろう、後ろ返りする川上を黙つて見逃す霊夢ではない。

これを決めるために川上が使つた技法は基礎的な卑劣だった。縦流れの際に足で地面の土を跳ね上げたのだ。これが丁度瞬間移動してきた霊夢の顔を襲つた。

無論、夢想天生を使つた霊夢に土が眼に入る訳がない。だが人体には意識ではコントロール出来ぬ反射というものがある。例えば熱いやかんに指先が触れた際、考えるよりも先に腕を引く行為。

例えば、眼に向かつてものが飛んで来た時、咄嗟に目を瞑つたり顔を背けてしまふなど。

ほんの一、二秒の時間稼ぎ。それで川上は自身の間合いを盗つて見せた。

川上に左手を打ち込む事しか考えてなかつた霊夢は川上が既に刀を取り上げているのを見て、考えるより先に直感的に体を引いた。瞬間刀が一閃。

霊夢はその勘の良さに助けられ体幹を守つたが、川上に打ち込むために前に出してた

左腕が音も無く落ちた。工夫が、為った。

霊夢が咄嗟に後ろに飛ぶが左腕の断面から血がしぶき、片腕の喪失により重心を崩したのか霊夢はかくり、とよろけた。はつきりしなかつた霊夢の輪郭が鮮明になり半透明だった霊夢の姿が戻る。夢想天生を維持出来なくなり生身に戻っていた。

勝機である。確実に殺れる絶好の好機。川上は刀をもじり下から刀を繰り出さんと前に出て

「——織り込み済みよ」

しかし跳ね上げた刀は何も捉えず空を切った。

とん、と川上の背中に手が触れた。瞬間移動で川上の後ろを取った霊夢の左と同じく霊力を込めていた右手。

「見事」

川上が言った瞬間ドン、と霊夢は霊力を叩きつけ川上を打ち抜いた。川上は受身も取らずにズシヤリと地面に崩れ落ちた。

殺った。霊夢は相手の腎臓、主要臓器を潰した必殺の手ごたえを噛み締めるようにその右手を握りこんだ。

そして倒れた川上を見て。止めを刺すべきかと一瞬迷う。だが、左腕の断面からの迸る出血に霊夢の意識は戻った。このままでは出血で自分が死ぬ。

靈夢は上腕に独立して着いていた袖の残った上部を右腕で引つ張り上げる。口で袖口を啣えて噛んだまま強く上に引く事で袖で左腋下の止血点を圧迫する。それにより出血は止まった。

靈夢は袖を噛んだまま、落とした大幣を拾い。棒部分を袖口に通して蛇口を閉めるように時計回りにグルグル回して袖を絞る。

そして充分に絞ったところで自分の首の後ろに棒を引つ掛け圧迫した状態で固定して止血処置を終えた。

靈夢は残った右腕で自身の斬り落とされた左腕を拾う。自身の腕は案外重いものなのだなど靈夢は思う。

うつ伏せに倒れ伏せたまま微動だにしない川上を靈夢は一瞥した。

「さようなら」

靈夢はただ一言だけを残して、飛び去って行った。

東の空が緋色に色付き始め。川上は身じろぎをした。

腕を突き体を起こす。下半身はもう言う事を聞かなかつた。撃ち抜かれた背中から腹部にかけては痛みすら感じない、それがダメージの深刻さを逆に物語っていた。

あまりに深過ぎる損傷は脳が痛みをシャットアウトしてしまう。おそらく中は滅茶苦茶だろう、腎臓がやられたのは致命的だった。

川上は這つて行つた。自分の事だから分かる。死ぬ。残された時間はもう少し。

川上は腕で体を起こし何とか一本の木に寄りかかった。

そこは丁度森の切れ目だった。霧の湖は今朝は霧も出ず澄んだ湖面が見えた、遠くには赤い館。彼が身を置いていた場所。もう戻る事はない。

川上は懐からゴールデンバットを取り出し、両切り煙草を一本啜えた。震える手でマッチを取り出し、擦ろうとするが手が震え上手くいかない。一服も出来ないのかと川上は軽い絶望を覚えた。

その時、川上の前にいつの間にか一人の女が立っていた。

「お疲れ様でした」

何時もの笑みを貼り付け、大陸風の服に身を包んだ女は八雲紫だった。ある意味での黒幕の登場。

「貴方は良くやってくれました。おかげで助かりましたわ。最後に何か望みはありますか、お礼にそのくらいはこちらも聞き入れます」

川上を捨て石に利用した紫はあくまで丁寧な、しかし傲岸不遜に言った。最後、人生の最後に望みを叶えてくれるという。

人は何を願うだろうか。愛する人と最後に会う事か、あるいは誰かに伝える言葉を残すか、死に場所を選ぶか、そもそも助けてくれと願うか。

「火を……」

川上にとつても渡りに船であつた。

「煙草に……火をくれ」

紫の表情が僅かに引き攣つたのは気のせいか。川上も理解してないはずがないのだ、自分は目の前の女の掌の上で踊つていただけなのだ。

「何故です」

「私に恨み言やなんなら一太刀くらい浴びせてもよいのではないですか」

紫は言った。本来言うべきでない事を、彼女は自分の守るものの為に多くの犠牲を強いてきた。だから彼女は傲岸不遜に微笑み続けなければならない。

自分の大事なものの為ならどこまでも傲慢に、冷酷になる。犠牲を強いた命にやりたくなかつたのだと言ひ訳をする事も、こんな事はしたくなかつたと謝る事もあつてはならない。

殺されておいて、仕方無かつた、ごめんなさいの謝罪で浮かばれる魂など存在しないのだから。

だから紫は不遜に笑い続けなければ、この男がそうしてきたように。

なのに、何故。彼女は弱々しく木に持たれかかつた一人の男に心を揺さぶられたのか。

川上はただ黙って首を振った。

「中々……楽しかった」

短い言葉だった。だがそれが全てだった。掌の上で踊らされていたのと、分かっているで踊っていたのは大違いだ。

これが、この男なのだ。そう最後まで彼は彼であった。無意味に殺して無意味に殺されただけの、薄汚い斬殺魔に過ぎぬ瀕死の男。その様子を紫は確かに尊いと感じたのだ。

紫は無言でスキマからガスライターを取り出した。そしてしゃがみこみ彼が啜えた煙草に火を点ける。

その時紫の眼から溢してはいけなない熱い雫が一筋流れて頬を伝っていった。

川上は火の点いた煙草から一服吸って、美味そうに紫煙を吐いた。

紫はしゃがみ込んだまま言った。

「最後に、言い残す事は」

答えはなんとなくわかっていた。

川上は無言で首を横に振った。

「一人に……させてくれ」

紫は立ち上がった。もう何も言わず、スキマを開き消えた。

後には川上一人が残された。彼は啜えたまま煙草を吹かし感慨に耽る。美味しいなど。

こんな美味い煙草は初めてではないだろうか。川上は腰から刀を鞘ぐるみのまま抜いて、自身の前に静かに置いた。

ずっと続けていた、工夫が成った。この一刀こそが川上の求めた必勝の太刀だった。すぐに可笑しくなった。必勝？負けているのに？

そう、そして負けた。初めての負け。これまで負けは無しだった。だがそれが正しいのだ、武術とは負けは死だ、生きてるといふ事は勝ち続けているといふ事。そして初めて負けた時に死ぬ。これが武だ。

薄い緋色の東の空が赤くなり朝日が昇ってきた、霧の湖の湖面に光が反射してキラキラと輝く。夜の住人であった川上は朝日など見るのはいつ以来だろうか。

朝日とはこんなに綺麗なものだとは知らなかった。

ああ、やはり最初に睨んだ通りだ。この世界は面白い。

面白、かった。

段々ボヤけて暗くなる視界。ふと一人の女を思い出した。

ここに来てから随分甲斐甲斐しく自分を助けてくれたあの人の。あの女の名前は何だったか……

川上はふつ、と笑った。

朝日は昇る、美しい幻想の地を太陽が明るく照らしていった。

第140話

蟬がけたたましく鳴いていた。

紅魔館。レミリアは自室のテーブルにつきアイステイーを一口飲んだ。

「いつもは温かいのばかりだけど、たまにはアイスもいいわね」

夏でもホットティーを飲むことが多いレミリアはそう感想を漏らした。

「こんな暑い中で熱い紅茶なんて飲むのなんて、貴女くらいなものよ」

テーブルの向かいに座るのは博麗霊夢であった。彼女はアイステイーよりも、お茶請けに出されたクッキーを旺盛に食べている。

今日ここに霊夢が居るのは特に意味はない。退屈なレミリアが霊夢をお茶に誘っただけだ。

「でも、貴女だって熱い緑茶飲んでるじゃない。咲夜に聞いた事あるけどアイスの緑茶というものもあるそうよ」

「冷たい緑茶なんて邪道よ」

レミリアの指摘に霊夢は気持ち良いくらい自分を棚に上げて言った。右手でアイステイーのグラスを取り飲む。

一年前。靈夢はある仕事中に左腕を上腕から喪失した。治療は八意永琳が当たった。彼女は薬師でありながら外の世界すら凌駕する医療技術を持ち、鋭利に落とされた腕を元どおりに繋ぐなど簡単な作業であった。

しかし、靈夢の腕は確かに繋いでも元どおりにはならなかった。本来鋭利な傷というのは治るのも早いのだが、まるで腕が斬られたという事が不可逆的な事象だという風に、繋いだ腕が定着しなかったのだ。

それでも壊死だけは免れとりあえずくつつけられたのは永琳の技術力あつての事であろう。しかし見かけ上繋がっただけで左腕はもう感覚が無かった。曰くりハビリ次第で動かせるようになるが、もう元どおりには使えないだろうとの事。

ただ斬り落とされただけの腕を完全に治療出来なかったこの経験は八意永琳にとつても小さな屈辱として残っている。

靈夢はと言うと、利き腕が使えなくなるとリハビリをするでもなく、平然と右腕一本で生活し、仕事もした。腕一本駄目になつたくらいで使い物にならなくなるような博麗靈夢では無かった。

特に誰にも腕の事を言わずに、平然と右だけで生活している靈夢に皆腕が駄目になっている事は悟っていたが誰も突つ込まなかった。あえて空気を読まずに魔理沙がその左手意味あるのかと軽口を叩いた所、靈夢は平然と、くつついているだけで動かない飾

りなんてぶら下げててもしょうがないからくつつけなくてもよかったわね。などと返した。

霊夢が何故左腕を壊したか、知っているのはここにいるレミリアを含めて一部である。

レミリアの認めた使用人のあの男を直接手を下したのは霊夢であるが、特にレミリアは霊夢と確執を持ちしなかった。まあ、左腕を落とされた事に關しては当時ざまあみろと少し思つた程度である。

レミリアは揉め事を後にいちいち引きずりはしない。それを器の大きさと取るか、ドライと取るかは人それぞれだろうが。

あるいは長く生きているが故の割り切りだろうか。

「今日は日差しが強いわね」

「そうね、太陽の畑では向日葵が満開になつていたわ。今頃幽香は機嫌良く花見でもしているかもね」

レミリアの言葉に霊夢は返す。霊夢は一年前から少し雰囲気が変わつたかも知れない。以前は孤高であり文字通り地に足がついてないような危うさがあったのだが、少しだけ他人を見るようになった。

ス、とレミリアは立ち上がり窓辺へと歩みよる。直射日光を避け少し前で立ち止ま

る。外は日差しが眩しく、蟬の音が響いていた。

「彼がこの館に来たのも丁度今日みために眩しい日だったわね」

レミリアは久しぶりに一人の男を思い出していた。彼が来た夏の時期と霊夢を見て、一夏館に住み着いていた猫の記憶が呼び起こされた。

その猫が紅魔館から消えた直接の原因の前でレミリアがああ男の事を言ったのは別に当てつけなどではない。

霊夢は何かを言いかけて。やはり口を閉じた。それを察したレミリアが言った。

「気にせず言っただいよ」

「大した事ではないし……私がいう権利もないわ」

クスリとレミリアは笑う。霊夢はたまに年相応のナイーブさを見せる事があるのが可愛らしいとレミリアは思った。

「何よ？」

「いえ、貴女らしくないわね。権利なんて言い出すなんて、じゃあ私が権利をあげるからいいなさい」

笑ったレミリアにムツとした様子で言った霊夢だったが、レミリアは何処か不遜に切り替えた。

「本当に大した事ではないのよ。それにもう遅い話よ。ただ、あの人とはもう少し話し

てみたかったと思っただけ」

「そう」

そも自分で殺しておいて何を言っているのか。となどレミリアは言わなかった。

「なら、これからはそんな後悔しないように気をつけることね」

霊夢の後悔は、人間なら誰でも生きている間に一度くらいはする類のものであろう。

人間とは得てして忘れがちなのだ、いつも隣を寄り添うその人とはいつかは別れがくるものだという当たり前の事を。

もしかしたら今日にでもその人は居なくなるかも知れない。あるいは自分が去るのかも知れない。いずれにせよ人はそんな当たり前の可能性から目を背けがちだ。

そうして何時だつて大事な事には失ってから気付くのだ。

きつと人より長い生きているレミリアはそれを強く理解しているのだろう。

——そう、日常のどうでもいいことが重要になってくるのだから。

「そうね、そうする事にするわ」

ふつと笑い霊夢はアイステイーを飲み干した。そして立ち上がった。結局クツキーは霊夢が殆ど食べてしまった。

「ご馳走様。帰るわ。咲夜にも宜しくね」

「ええ、また何時でも来て。貴女との時間も、楽しいから」

レミリアの言葉に靈夢ははいはい、などと軽く受け流して退室した。

レミリアはまた一歩下がった場所から窓の外を眺めた。

結局、あの後。咲夜が川上の安否を確認に出た、確認出来たのは川上がやった反妖怪派の群勢の死体が織りなす地獄絵図。そこに川上の姿は無く。死体も結局見つからなかった。

レミリアは部屋に置いてあるそれに目を向けた。黒い刀掛けに掛かった一口の打刀。これは咲夜が現場近くで見つけた。持ち主の代わりに記念に部屋に飾ってる。洋室に少々そぐわないがレミリアは細かい事は気にしない。

結局死体はその後も見つからず行方知れず。靈夢の証言もあり、死んだのだろうと思われる。死体は野良妖怪が持ち去り食い漁ったのかも知れない。

恐らくないが、まかり間違つて生きていたとしてももうあの男がここに戻る事はないだろうとレミリアは理解していた。

行き先も告げず消えた猫はもう戻りはしない。

あの時、八雲紫に十六夜咲夜が見せた殺意。流石のレミリアも彼女が早まった真似をしないか少し懸念したが、彼女は一通り搜索すると川上は居なくなつたのだとあっさり割り切り仕事に戻つた。流石に少しの間落ち込んでいたが。

そういえば紅魔館には一人変わったメイドがいる。あの男に懐いていて彼から僅か

な期間武術を学んでいた幼い体躯のセミロングの黒髪のメイド妖精、名をアニス。

彼女はあの男が居なくなつた後も武を志し、人里にある道場を回り一つの道場に入門して紅魔館から通つては稽古を続けている。

道場では幼い妖精が門弟になるなど初めてのことだから道場生の間では可愛らしいマスコットのようないないなつておるのか。

しかし、その道場の師範や一部の高弟がアニスを見る目は違つた。きつと見抜いたのである。ある剣鬼の遺思。彼女はそれを受け継いでいる事を。

いずれ、季節が回る内に彼の事を思い出す事も少なくなるだろう。

そしてやがてはそんな猫がいた事など、誰からも忘れられるのだろう。

いや、レミリアは思う。まあ形が残つているからまだしばらくは忘れないかと。

扉をノックする音が聞こえた。レミリアが応じると一人のメイドが入つていた。

紅魔館のメイド長十六夜咲夜であつた。

「茶器の方お下げします」

微笑を湛えて言つた咲夜にレミリアは呆れたように言つた。

「あのねえ、貴女には育児休暇を出したでしょう」

レミリアの言葉を咲夜は柔らかく笑つて受け流す。やはり女は母になると変わるのか雰囲気が変わつたようにレミリアは思う。前より顔つきが柔らかくなり、以前はクー

ルさが強かったが今は暖かみを感じさせる。

「私なら時間はいくらでもつくれますから」

「無理すると倒れるわよ」

咲夜は茶器を片付けながら悠然と笑って返した。

「そんなに柔じゃありませんわ」

母は強しとはよく言ったものだ。レミリアはお手上げという風に肩を竦めた。

咲夜は茶器を片付けると私室に戻った。彼女の部屋には一口の野太刀が掛けられていた。

ベビーベッドにはまだまだ生まれて間もない娘がぐずっていた。やがて泣き出す。

泣き方からして、空腹のようだ。咲夜は服の前をはだけ、まだ首の座らぬ赤子を抱き上げて授乳する。どうでもいいが、授乳するようになったのに自分の胸は殆ど膨らまなかつたなと咲夜は思った。

そうしながら咲夜は感慨に耽る。人々は生誕を祝う。

咲夜は思っていた。生誕とは無条件に祝われるようなものなのかと。

生まれた赤子はどのように育つかはわからないのだ。せつかく生まれても十も生きず死ぬかも知れない。人を害する事しか出来ないかも知れない。人より心が弱く生涯を苦痛にしか感じないかも知れない。そして、咲夜のようにどう足掻いても人並みには

生きられぬ鬼子かも知れない。

生んだ母も生誕を喜んでいても、育つにつれ失望や苦しみを感じるかも知れない。そして我が子を愛せなくなるかも知れない。そう、咲夜の親がそうだったように。

そして咲夜は思う。彼も恐らく自分と同じだったのだろう。

だから咲夜は心の中ではずっと思っていた。生誕とは呪うべき事なのかも知れないと。

だが、自分が苦しんで出産を終えた時。レミリアが優しくおめでどうと言ってくれた。美鈴も笑っておめでどうございますと言った。パチュリーはいつもの無感情さで、小悪魔は明るく、フランは爛漫に。皆、おめでどうと言ってくれた。

その時、咲夜は確かに嬉しさを、幸福を感じた。そしてそう感じる事に罪悪も覚えた。きつとそれが人の業なのだろう。

でも、でもと、咲夜は思う。生まれた命。それが例えどんなに醜悪であっても、欠陥を持つていても、人でなしであろうと、害悪であろうと、誰か一人くらいはその人間を肯定し続ける人がいてもいいではないか。

母親くらいはその人間を認め続けてもいいではないか。

川上という男の遺子。愛する我が子に頬を寄せ、咲夜は目を閉じた。